大禮記念

昭和漢文叢書

十八史略新釋

下卷一

文學博士 中山久四郎
鹽野新次郎 共著

隋煬帝像

十八史略新釋 下卷一目次

卷四（下）

卷五

卷六（上）

十八史略新釋下卷一目次終

十八史略新釋　卷四（下）

文學博士　中山久四郎
鹽野新次郎　著

南北朝

序説

南北朝時代の大局を表に示すと左の如くである。

（南朝）
宋　八世　五九年
齊　七世　二三年
梁　四世　五五年
陳　五世　三二年

（北朝）
魏　一〇世　一一五年
南北二朝對立以後
東魏　一世　一七年
北齊　六世　二八年
西魏　三世　二二年
北周　五世　二五年

隋（南北合一）

右の表によりて見るが如く、南北朝は大約一百七十年間（我國史允恭天皇より崇峻天皇に至るまで十四天皇御代の間、西紀四二〇 東晉の亡びたる年 ―五八九 陳の亡びて隋の完全に南北を合一した年）相對立し、南朝の都は、三國時代の呉、及び東晉と同じく建康にあり。因つて呉、東晉、及び南朝の宋・齊・梁・陳を總稱して六朝といふ。次に北朝の魏は初め平城（山西省北部）に都し、後ち洛陽に遷り、西魏と北周は西方の長安に、東魏と北齊は、東方の鄴（今の河南省東北部）に都した。南北朝は、上表に見るが如く、二大國、又は三大國づゝの對立であるから、五胡十六國時代の如き紛亂はなかつたけれども、君主廢弑の多かつたことは、前後無比にして、南北朝合計五十君の中、其の位を全くしたものは、二十君のみであつた。世道人心の惡化驚くべきことである。今之を表にて示せば次のやうになる。

	王朝の名	帝王の數	廢せられし者	弑せられし者	全き者
南朝	宋	八	一	四	三
	齊	七		四	三
	梁	四		三	一
	陳	五	二		三
		（小計、二四）	（小計、三）	（小計、一一）	（小計、一〇）
北朝	魏（西魏東魏）	一五		一〇	五
	北齊	六	一	二	三
	北周	五		三	二
		（小計、二六）	（小計、一）	（小計、一五）	（小計、一〇）
	（合計）	五〇	四	二六	二〇

（備考）廢せられし者の比較的少いのは、其の實少いのではなく、廢せられた者は、やがて又重ね弑せられたから、「弑せられし者」の中に加算したのである。

又南北朝時代は、五胡紛爭の戰亂の後をうけ、尙又南北對抗紛亂の時代であつた爲め、支那全國の人口戶數頗る減少した。而して南北互に相排斥すること甚しく、南人は北人を呼んで索虜といひ、北人は南人を呼んで島夷といつた。然れども、大體優柔なる南人は、剛健なる北人に制せられ、北强南弱の大勢はつひに動すことが出來ず、南北の對抗は漸く北人の勝利に歸し、北朝系統の隋が終に南北合一、天下大統一の業を成すことになつた。

南朝、自晉以傳之宋、宋傳之齊、齊傳梁、梁傳陳。北朝、自諸國併於魏、魏後分爲西魏東魏、東魏傳北齊、西魏傳後周、後周併北齊、而傳之隋。隋滅陳、然後南北混爲一。今以南爲提頭、而附北於其間。

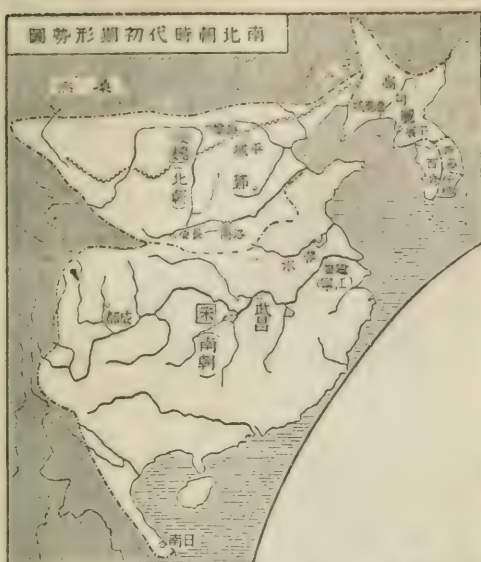
【通釋】南朝は晉より以てこれを宋に傳へ、宋はこれを齊に傳へ、齊はこれを梁に傳へ、梁は陳に傳

寄奴。嘗行遇大蛇、擊傷之。後至其所、見有羣兒擣藥。裕問、何爲。答曰、吾王爲劉寄奴所傷。裕曰、何不殺之。兒曰、寄奴王者不死。裕叱之。即散不見。初參劉牢之軍事。嘗遣覘賊。遇賊數千人。裕奮長刀獨驅之。衆軍因乘勢進擊大破之。裕由是知名。其後爲將相二十餘年。誅桓玄、平孫恩盧循、滅南燕後秦。卒受晉禪。

[illegible] 宋の高祖武皇帝、姓は劉氏。名は裕。彭城の人なり。相傳へて漢の楚の元王交の後と爲す。裕生れて母死す。父、京口に僑居し、將に之を棄てんとす。從母救ひて之に乳す。長ずるに及びて勇健にして大志あり。僅かに字を識る。小字は寄奴。嘗て行きて大蛇に遇ひ、擊つて之を傷く。後其の所に至り、群兒の藥を擣くもの有るを見る。裕問ふ、「何をか爲る」と。答へて曰く、「吾が王、劉寄奴の爲に傷けらる」と。裕曰く、「何ぞ之を殺さざる」と。兒の曰く、「寄奴は王者なり、死せず」と。裕之を叱す。即ち散じて見えざりき。初め劉牢之の軍事に參たり。嘗て賊を覘はしむ。賊數千人に遇ふ。

裕、長刀を奮ひて獨り之を驅る。衆軍因りて勢に乘じて進み撃つて大に之を破る。裕、是に由りて名を知らる。其の後、將相たること二十餘年。桓玄を誅し、孫恩・盧循を平げ、南燕・後秦を滅し、卒に晉の禪りを受けたり。

南北朝時代初期形勢圖

通釋　宋の高祖武皇帝は姓は劉氏で、名を裕といひ、彭城の人である。漢の世に楚の元王であつた交といふ者の後裔であると言ひ傳へられてゐる。裕が生れるとすぐ母が死んだ。裕の父は京口に假住居してゐる頃（ひどく貧乏して養育が困難なため）裕を捨てようとしたが、母方のをばが、（之を憐んで）裕を救つて乳を與へて養育した。生長するに及んで勇武豪健で大きな志を抱いてゐたが、（學問はなくて）やつと少しばかり、文字を識つてゐるだけであつた。幼少の時のあざなを寄奴といつた。ある時路上で大蛇に

遇ひ、撃つて傷を負はせた。其の後蛇を傷けた場所に往つたところ、多くの子供が集つて藥を臼に入れて搗き製して居るのを見たので、裕が「何をして居るのか」と問ふと、子供等が「わが王が劉寄奴の爲に傷つけられたから、その疵につける藥を作るのです」といふ。裕が「なぜ仇を殺さぬのか」と聞くと、子供等は「寄奴は天下に王たるべき資質を備へた人ですから中々殺すことは出來ません」と答へた。そこで裕が之を叱り付けると、忽ち散り失せて見えなくなつた。裕は初め劉牢之の軍事の參謀となつたが、ある時牢之が彼に（孫恩といふ）賊の軍勢を偵察させた。裕はその時、賊數千人に出逢つたが、（ちつとも怖れず）長刀を奮つて唯一人で追つかけた。それで、味方の軍は此の勢ひにつけこんで進み撃つて大に之を破つた。是に出つて裕は始めてその名を世に知られた。其の後、大將たり宰相たること二十餘年、其の間に、桓玄を誅し、孫恩・盧循を誅し、南燕及び後秦を滅し、とう／＼晉の禪りを受けて帝位に登つたのである。

語釋 僑居（僑は寓、寓居、假住ひのこと。） ○虵（蛇の俗字） ○從母（母の姉妹、をば。即ち劉懷敬の母。） ○擣藥（藥を臼に入れて杵で搗くこと。） ○寄奴王者不レ死（寄奴は王者で自ら天命があつて、殺さうとしても殺すことが出來ない。）

○西涼ノ李嵩卒ス。諡シテ曰フ二武昭王ト一。子歆立ツテ數年、至リテレ是ニ爲ニ二北涼ノ沮渠蒙遜ノ一誘ハレ、與レ戰ヒテ

西涼亡

廢帝榮陽王

魏主嗣殂

文皇帝

殺之。西涼亡。○宋主在位三年。改元者一。曰永初。殂。太子立。是爲廢帝榮陽王。

廢帝榮陽王、名義符。年十七卽位。居喪無禮、遊戲無度。○魏主嗣殂。諡明元皇帝、廟號太宗。子燾立。○宋主在位三年。改元者一。曰景平。徐羨之・傅亮・謝晦、廢而弑之。宜都王立。是爲太宗文皇帝。

文皇帝、名義隆。素有令望。少帝廢、迎入卽位。○夏主勃勃殂。子昌立。

【通解】西涼の李暠卒す。諡して武昭王と曰ふ。子歆立つて數年。是に至りて北涼の沮渠蒙遜の爲に誘かれ、與に戰ひて之に殺さる。西涼亡ぶ。○宋主在位三年。改元する者一。永初と曰ふ。殂す。太子立つ。是を廢帝榮陽王と爲す。

廢帝榮陽王、名は義符。年十七にして位に卽く。喪に居て禮なく、遊戲度無し。○魏主嗣殂す。明元皇帝と諡し、廟を太宗と號す。子燾立つ。○宋主在位三年。改元する者一。景平と曰ふ。徐羨之・

傅亮・謝晦、廢して之を弑す。宜都王立つ。之を太宗文皇帝と爲す。文皇帝、名は義隆。素より令望有り。少帝の廢せらるるや、迎へ入れられて位に卽く。○夏主勃勃殂す。子の昌立つ。

【通釋】（上略）廢帝滎陽王は名を義符といひ、十七歳で位に卽いたが、父の忌服中なるに拘らず、禮儀を辨へず、遊び戯れることにも節制がなかつた。○魏主の嗣が死んだ。明元皇帝と諡し、廟號を太宗といつた。子の燾が立つた。○宋主位にあること三年、改元すること一度で、景平といつた。徐羨之と傅亮と謝晦と三人が宋主を廢して之を弑した。宜都王が立つた。是が太宗文皇帝である。文皇帝は（武帝の第三子で）名を義隆といひ、平素から評判がよく、人氣があつた。滎陽王が廢せられると迎へ入れられて位に卽かしめられた。○夏主の勃勃が死んで、子の昌が立つた。

【語釋】西涼亡（西涼の李暠が晉の安帝の隆安三年に僭號してから是に至るまで二世二十二年で亡びたのである。）　○殂（(1)死ぬ。逝去する。(2)王者の死。(3)正統外の天子の死。）

○晉徵士陶潛卒。潛字淵明。潯陽人。侃之曾孫也。少有高趣。嘗爲彭澤令。八十日郡督郵至。吏曰、應束帶見之。潛歎曰、我豈能爲五斗米、折腰向鄕

里小兒、即日解印綬去、賦歸去來辭、著五柳先生傳。徵不就。自以先世爲晉臣、自宋高祖王業漸隆、不復肯仕。至是終世。號靖節先生。〇魏數與夏戰。至是執其主昌以歸。〇夏赫連定、稱帝於平涼。〇西秦主乞伏熾盤卒。子暮末立。

【通釋】晉の徵士陶潛卒す。潛字は淵明。潯陽の人。侃の曾孫なり。少くして高趣あり。嘗て彭澤の令と爲る。八十日にして郡の督郵至る。吏曰く、「應に束帶して之に見ゆべし」と。潛歎じて曰く、「我、豈能く五斗米の爲に腰を折りて鄉里の小兒に向はんや」と。即日印綬を解きて去り、歸去來の辭を賦し、五柳先生の傳を著はす。徵せども就かず。自ら先世が晉の臣たるを以て、宋の高祖の王業漸く隆んなりしより、復た肯て仕へざりしが、是に至りて世を終ふ。靖節先生と號す。〇魏數〻夏と戰ふ。是に至りて其の主昌を執へて以て歸る。〇夏の赫連定、帝を平涼に稱す。〇西秦の主乞伏熾盤卒す。子暮末立つ。

通鑑 晉の徵士の陶潛が死んだ。潛は字を淵明といひ、潯陽郡の人で陶侃の曾孫である。少年の時から高尙な思想を抱いてゐた。いつぞや彭澤縣の縣令となつて、僅か八十日ばかりたつた時、縣を巡視する郡の役人が來た。その時縣の小役人が潛に、「禮服を著けて面會せねばなりません」と告げると、潛は嘆息して、「（何といふ馬鹿げた事だらう）、自分は五斗米の俸給の爲に腰を折り曲げて、どうして田舍の小僧を拜することが出來ようぞ。」といつて、其の日の中にすぐ縣令の印判を返して辭職して立去つてしまつた。そして歸去來の辭を作り、又五柳先生の傳を著はした。暫くして晉の安

陶淵明像

西秦亡
吐谷渾伐夏
謝靈運

帝が又徵されたけれども仕官しなかつた。淵明は自分の先代が晉の臣であつたことを思ひ、（忠臣は二君に仕へずといふ節義を守つて）、宋の高祖の王業が段々盛になつてからも二度と役に就かず、（田園に閑居して天命を樂んでゐたのである）。かくて宋の文帝の時になつてこの世を去つた。世に靖節先生と云ふ。（下略）

〔語釋〕晉徵士（淵明は晉の臣で節を枉げて宋に屈從しなかつたから晉の徵士といつたのである。徵士とは（一）政府又は君主から召し出される學德の高い人。（二）徵を辭して仕へぬ人卽ち處士。淵明は此の（二）に相當する。）○督郵（諸縣の政事の得失を調べて廻る郡の役人卽ち郡の監察官）○束帶（冠を被り大帶を結ぶこと卽ち禮裝。）○五斗米（縣令の月俸は米十五斛で一日は五斗、今の我五升二合許りに當る。こゝでは縣令の月俸の意に用ひたのである。）○鄉里小兒（田舍の子供の意で、督郵を指す。）○歸去來辭 是れは淵明が官を辭して鄉里に歸り去る情懷を詠じた押韻の文である。詞義が如何にも高く爽やかで、名利を忘れて天命を樂む淵明の心境がよく現はれてゐる。歐陽修が「兩晉に文章無し、幸ひに獨り此の篇有るのみ」と云つたのは決して過言ではない。）○五柳先生傳（淵明は潯陽の柴桑の人である。其の家の門前に五本の柳があつたので自ら五柳先生と號し、而して自ら其の傳を書いたのである。洵に閑靜澹泊な筆致で優游自適の生涯が善く寫されてゐる。）

○北燕、馮跋殂。弟弘立。○夏主定擊西秦、以暮木歸、殺之。西秦亡。定又擊北涼。欲奪其地。吐谷渾襲其軍、執定送魏。夏亡。吐谷渾者、慕容氏之別種也。○北涼、沮渠蒙遜卒。子牧犍立。○宋、謝靈運以罪誅。靈運好爲山澤之遊。從者數百人、伐木開徑。百姓驚擾。或表其有異志。爲臨川內史。有司糾

之被レ收。靈運興レ兵逃逸、作レ詩曰、韓亡子房奮、秦帝魯連耻、追討擒レ之、徙廣州。已而棄市。

【讀方】○北燕の馮跋、殂す。弟弘立つ○夏主定、西秦を撃ち、慕木を以て歸り、之を殺す。西秦亡ぶ。定又北涼を撃ちて其の地を奪はんと欲す。吐谷渾、其の軍を襲ひ、定を執へて魏に送る。夏亡ぶ。吐谷渾は慕容氏の別種なり。○北涼の沮渠蒙遜卒す。子牧犍立つ。○宋の謝靈運、罪を以て誅せらる。靈運、好んで、山澤の遊をなす。從者數百人、木を伐りて、徑を開く。百姓驚擾す。或ひと其の異志あるを表す。臨川の内史となる。有司、これを糾す。收へらる。靈運、兵を興して逃逸し、詩を作つて曰く「韓、亡びて子房奮ひ、秦、帝となりて魯連耻づ」と。追討して、之を擒にし、廣州に徙す。すでにして、棄市せらる。

【通釋】北燕の馮跋が死去し、其の弟の弘が立つた。○夏主の定は西秦を撃ち、秦主の慕木を連れて歸り之を殺した。それで西秦は亡んだ。定は又北涼を撃つて其の地を取らうとしたところ、吐谷渾が定の軍を不意討し、定を捕へて魏に送つたので夏は亡んだ。吐谷渾といふのは慕容氏の別種族であ

る。○北涼の沮渠蒙遜が死んで、其の子の牧犍が立つた。○宋の謝靈運は罪を以て誅戮された。靈運は山や澤に遊獵することが好きで、其の時には數百人の從者をひきつれ、山林の木を伐つて道を開く(といふやうな仰山な事をやるのだから堪らない)。人民は驚きさわいだ。それで或る人(會稽の太守の孟顗)が靈運に謀反心のある由を上表した。(靈運が之を聞いて、宮城に行き、貳心ないことを辯解したので、帝は之を宥し)臨川郡の內史とした。(その後も靈運は以前と變りなく遊び廻り放縱であつたので)役人が之を咎めて捕へた。靈運は兵を起して、逃げ去り、詩を作つていふやう、「韓國が亡んだ時、韓の臣の張良は仇を報いようとして奮ひ起ち、暴秦が帝となつた時、魯仲連は之を皇帝として尊ぶことを恥ぢた。(是れまで自分の仕へてゐた晉が亡んだので、自分は張良と同樣に奮起せざるを得ない。德のない宋が天下を取つたので、自分は魯仲連と同樣にそれに臣事することが恥かしい)」と。そこで宋は追討して靈運を生捕り、之を廣州に流した。靈運は其の後間もなく市中で斬罪に處せられた。

語釋　西秦亡(西秦の乞伏國仁が晉の孝武帝の太元十七年に僭號してから、是に至るまで四世、合せて四十七年で亡びたのである。)　○吐谷渾(トヨクコンと讀む。其の名で慕容氏の別種族。今の青海及び四川松潘縣はその故地である。)　○夏亡(夏の赫連勃勃が晉の安帝の義熙四年に僭號してから、是に至るまで三世、合せて三十四年でほろんだのである。)　○臨川(南宋の郡の名、江西省撫州府に屬する。)　○內史(書記官。)　○子房奮(子房は張良の字。博浪沙中に於て、力士をして鐵椎を操つて秦の始皇帝を擊たしめた。此の事は上卷三五八頁に出づ。)　○魯連恥(魯連とは戰國齊の魯仲連のことである。魏や趙の諸國が秦を尊んで帝としようとした時、魯仲連は之を恥として固く之れに反對した。)　○廣州

北燕亡
北涼亡
司徒崔浩毀佛

（南宋の縣の名、廣東省廣州府の地。）　○謝靈運（東晉の謝玄の孫。詩人として知られ、陶淵明と並び稱せらる。）

○魏伐燕。馮弘奔高麗、而被殺。燕亡。○魏伐涼。姑臧潰。牧犍降後被殺。北涼亡。○魏殺其司徒崔浩。浩自明元時、已爲謀臣、輒有功。信道士寇謙之、勸魏主崇奉、立天師道場。而最惡佛法、誅沙門、毀佛像佛書。魏主命浩修國史、書先世事皆詳實、刊石立之衢路。北人忿恚、譖浩暴揚國惡。魏帝大怒、遂案誅之、夷其族。

譯讀　○魏、燕を伐つ。馮弘、高麗に奔つて殺さる。燕、亡ぶ。○魏、涼を伐つ。姑臧潰ゆ。牧犍、降り、後、殺さる。北涼亡ぶ。○魏、その司徒崔浩を殺す。浩、明元の時より、すでに謀臣となりて、輒ち功あり。道士の寇謙之を信じ、魏主に勸めて崇奉せしめ、天師道場を立つ。而して、最も佛法を惡み、沙門を誅し、佛像佛書を毀つ。魏主、浩に命じて、國史を修めしむ。先世の事を處するに、皆實を詳にし、石に刊して、之を衢路に立つ。北人、忿恚し、浩が國惡を暴揚するを譖す。魏帝大に

怒り、遂に案じて之を誅し、其の族を夷す。

通釋　（上略）○魏は其の司徒の職にある崔浩を殺した。浩は早く魏の太宗明元皇帝の時から國政に參與する重臣となつて容易に功績を擧げた。浩は道士の寇謙之といふものを信じ、魏主（大武帝）に神仙を尊奉することを勸め、道教を修める天師道場を立てた。さうして最も佛法を惡んで、僧侶を殺し、佛像や佛書を破壞した。又魏主は王に命じて國の歷史を編輯せしめたところ、浩は魏の先世の事を書くのに皆事實を詳に記して、之を石に刻みつけて路の四辻に立てた。そこで北方の魏人は大に立腹し、浩は國の惡事をさらけ出す者であると讒言したので、魏帝は大に怒つて、遂に罪をとり調べて浩を誅戮し、その一族を皆殺にした。

語釋　燕亡（北燕の馮跋が晉の安帝の義熙六年に僭號してから是に至るまで二世、合せて二十八年である。）○北涼亡（北涼の沮渠蒙遜が晉の安帝の隆安五年に僭號してから、是に至るまで二世、合せて三十四年である。）○寇謙之（嵩山の道士で、後漢の張道陵の術を修めたものである。嘗て老子に遇つて穀を避け身を輕くする術を授かり、又神人李譜文に遇つて圖籙眞經を授かつたなどゝ自ら言つてゐた。）○天師道場（天師は天人の師の意。道教の教師を云ふ。道場は道術を修める場所をいふ。）、沙門（梵語沙門那の略、勤息、止息などゝ譯す。意を息め欲を去つて無爲に歸する意である。僧をいふ。）○北人忿恚（北人とは其の先代が拓跋氏に從つて北代から來たものをいふのである。先世の事實を詳かにして狄人であることなどを揭げあらはしたので怒つたのである。）○暴揚（暴は暴露の暴で音は「バク」である。事實をさらけ出して、揭げ揚はすこと。）

○宋魏連年互相侵伐。王玄謨勸宋大舉。沈慶之諫曰、畊當問奴、織當問婢。今欲伐國。奈何與白面書生謀之。宋竟遣玄謨出師、取碻磝、進圍滑臺。先是魏主聞宋取河南、怒曰、我生髮未燥、已聞河南是我地。今天時尚熱。姑斂戍北歸、俟河氷合、以鐵騎蹂之。至冬魏主自將渡河。衆號百萬。鞞鼓之聲震天地。玄謨懼走。魏人追擊、玄謨敗走。魏帝引兵南下、直至瓜步、聲言欲渡江。建康震懼、民皆荷擔而立。

【口譯】宋・魏連年互に相侵伐す。王玄謨、宋に勸めて大擧せしめんとす。沈慶之諫めて曰く、「畊は當に奴に問ふべく、織は當に婢に問ふべし。今國を伐たんと欲す。奈何ぞ白面の書生と之を謀らん」と。宋、竟に玄謨をして師を出さしめ、碻磝を取り、進みて滑臺を圍む。是より先魏主、宋が河南を取れりと聞き、怒りて曰く、「我生れて髮未だ燥かざるに、已に河南は是れ我が地なりと聞けり。今天の時尚ほ熱す。姑く戍を斂めて北に歸り、河氷の合するを俟ちて、鐵騎を以て之を蹂しめん」と。冬

に至りて魏主自ら將として河を渡る。衆、百萬と號す。鞞鼓の聲、天地に震ふ。玄謨、懼れて走る。魏人追撃し、玄謨敗走す。魏帝、兵を引きて南下し、直に瓜歩に至り、江を渡らむと欲すと聲言す。建康震懼し、民、皆、荷擔して立つ。

通釋　南朝の宋と北朝の魏とは年々互に敵地を侵し攻め合つたが、宋の王玄謨は宋主に勸めて大軍を起し魏を征伐せしめようとした。此の時沈慶之が宋主を諫めて、「（物事には夫々專業專門の者がございます）。田畑を耕すことは下男に問ふべきであり、機織ることは下女に問ふべきであり、（戰爭の事はやはり其の專門の武將に問ふべきであります）。然るに今敵國を討たうとして、どうして之を武將に問はないで、軍事に就いて何等の經驗もない白面の書生（玄謨を指す）と御相談成されるのでありますか。」といつたが、宋主は（之を聽かず）竟に玄謨をして出陣せしめた。玄謨は濟州の碻磝城を取り、進んで河東の滑臺を圍んだ。是より前に魏主は宋が河南を取つたと聞いて腹を立て、「自分は生れて產毛のまだ乾かない時から河南はわが領地であると聞いて居た。（然るにそれを奪ひ取るとは言語道斷許すべからざることぢや）。今は時季がまだ熱い。暫く守りの兵を引き揚げて北に歸り、黃河の水の氷るのを待つて、精鋭の騎士をして蹈みにじらせてやらう。」といつた。愈々冬になつて魏主は自ら大將と

壞汝萬里長城

佛狸威震天下

なり、河を渡つて進んだ。其の軍勢は百萬と稱へ、馬上で打つ攻め太鼓の聲は天地を震はした。玄謨は之を聞いて恐れて逃げ出したのを、魏人が追撃したので、とう〳〵玄は敗走してしまつた。魏主は軍を率ゐて南に下り、直に眞州の瓜歩山に至り、是から直ちに江を渡らうと言ひ觸らさせたので、宋の都の建康の上下の者は皆震ひおそれ、人民は荷物をかついで逃げようとした。

語釋　○白面書生（顔の色の生白い若者の意で、經驗の足りない、實務に迂闊なものを嘲つて云ふ言葉。）○鐵騎（精鋭な剛鐵の如き騎士。）○鞞鼓（騎兵が馬上でならす鼓。騎鼓。）○瓜歩（江蘇六合縣。）

宋主登石頭城、北望歎曰、檀道濟若在、豈使胡馬至此。道濟立功前朝、老於用兵。先是以讒被收。目光如炬、脫幘投地曰、乃壞汝萬里長城。既誅、魏人聞之喜曰、吳子輩不足復憚。至是長驅無能禦者。宋人或欲斬玄謨。沈慶之止之曰、佛狸威震天下。控弦百萬、豈玄謨所能當。殺戰將以自弱、非計也。魏師還、殺掠不可勝計。丁壯者斬截、嬰兒貫槊上盤舞。所過赤地、春燕歸巢於林木。自宋主即位、二十八年間、號爲小康。至是兵革之後、邑里

蕭條元嘉之政衰矣。

【訓讀】宋主、石頭城に登り、北望して歎じて曰く、檀道濟若し在らば、豈胡馬をして此に至らしめんやと。道濟、功を前朝に立て、兵を用ふるに老いたり。是より先讒を以て收へらる。目光、炬の如く、幘を脫して地に投じて曰く、「乃ち汝が萬里の長城を壞る」と。既に誅せらる。魏人之を聞きて喜びて曰はく、「吳子の輩、復憚るに足らず」と。是に至りて長驅す。能く禦ぐ者無し、宋人或は玄謨を斬らんと欲す。沈慶之之を止めて曰く、「佛狸の威天下に震ふ。控弦百萬、豈玄謨が能く當るところならむや。戰將を殺して、以て自ら弱むるは、計にあらざるなり。」と。魏師、還る。殺掠、勝げて計るべからず。丁壯の者は斬截し、嬰兒は槊上に貫いて盤舞す。過ぐるところ赤地となり、春燕、歸りて林木に巣ふ。宋主位に卽きしより二十八年の間、號して小康となす。こゝに至りて、兵革の後、邑里蕭條たり元嘉の政衰ふ。

【通釋】その時宋主は石頭城に登り、北の方を望んで嘆息して、「あゝ檀道濟が今若し生きて居たら胡の馬が此處まで來るやうなことをさせなかつたらうに」と云つて(後悔した。)この道濟といふのは前

朝に於て功を立てた戰上手の人であつたが、是より前に讒言の爲に捕へられて誅せられた。(其の時彼は怒つて宋主を睨んだが)、目の光はさながら松明の火のやうで、頭巾を脱いで地に叩きつけて宋主を罵つた、「汝は汝自ら汝の萬里の長城を破壞するのか」と。(道濟自らを萬里の長城に喩へて言つたのである)。かくて道濟は誅せられてしまつた。此の事を魏人は聞いて大に喜び、「最早吳の地なる宋の者共は恐るゝに足らぬ。」といつたが、是の時になつて、かくは長追をして來たのである。宋では之をよく禦ぎ止める者がなかつた。宋の人々の中には戰禍の因をなした王玄謨を斬らうといふ者があつたが、沈慶之は之を止めて、「魏主佛狸の威光は天下に響き渡つてゐる。弓をひく兵士が百萬も居るからにはどうして玄謨がよく敵對することが出來よう。今戰將を殺して自分から自分の勢力を弱くするのは良い謀ではない」といつた。魏軍はやがて還つたが、人を殺し物を奪ふことは數へ計ることが出來ないほどだつた。宋人の丁壯卽ち二十歲から三十歲と云ふ元氣盛りの者は皆斬り殺し、幼兒は槍の先に貫き、それをぐる／＼廻して弄んだ。魏軍の通つた所は一物もなくなつてしまひ、春になつて燕が歸つて來ても、巢を造るべき家が無いので林の木に巢をかけると云ふ有樣であつた。宋主が位に卽いてから二十八年の間、世の中が少しは穩かであると云はれたが、是に至つて戰爭の後は村里も荒廢して

宋愛弑主
魏帝濬立
太子弑帝
孝武皇帝

物淋しくなり、文皇帝の元嘉の政事も衰頽してしまつた。

【語釋】胡馬（北胡の馬、魏の騎兵を指す） ○幘（髮を包む巾。頭巾。） ○佛貍（魏主の別號。） ○控弦（弓をひく兵。） ○丁壯（丁は二十歳以上の若者、壯は壯年の働き盛りの男。） ○盤舞（盤舞は盤旋すること。ぐる〳〵廻して戲弄したのである。） ○所過赤地（魏軍の過ぐる所、焚掠を恣にするので地にある物が皆盡きたこととし、赤とは空で物無きを云ふ。赤貧・赤裸の赤がこれである。） ○兵革（兵は戈矛の類、革は鎧又は甲である。軍旅の亂の意。） ○元嘉（文皇帝の年號で三十年間も續き、稍く安寧を得た時である。それで小康と稱せられた。）

○魏中常侍宗愛、譖東宮官屬。多坐誅死。太子晃以憂卒。魏主追悼不已。愛懼弑主。後謚曰太武皇帝、廟號世祖。晃之子濬立。討愛誅之。○宋太子劭巫蠱呪詛。事覺。宋主擬廢之。劭弑主而自立。主在位三十年。改元者一。曰元嘉。武陵王駿舉兵誅劭。王立。是爲世祖孝武皇帝。

孝・武・皇・帝・名駿。即位十二年殂。改元者二。曰孝建、曰大明。太子立。是爲廢帝。

【通釋】○魏の中常侍宗愛、東宮の官屬を譖す。多く坐して誅死せらる。太子晃、憂を以て卒す。魏主

追悼して已まず。愛、懼れて主を弑す。後、諡して太武皇帝と曰ひ、廟を世祖と號す。晃の子濬立つ。愛を討ちて之を誅す。○宋の太子劭、巫蠱呪咀す。事覺はれ、宋主、これを廢せむと擬す。劭、主を弑して自立す。主、在位三十年、改元するもの一。元嘉と曰ふ。武陵王、兵を擧げて、劭を誅す。王立つ、これを世祖孝武皇帝となす。

孝武皇帝名は駿、位に即いて十二年にして殂す。改元するもの二。孝建と曰ひ、大明と曰ふ。太子立つ、これを廢帝となす。

通解 魏の中常侍の役の宗愛が太子附の屬官を讒言し、その爲め多くの者が罪せられて殺された。太子の晃はその心配から卒去したので、魏主は太子を偲び哀んでやまなかつた。宗愛は（自分の罪の發覺を）懼れて魏主を弑した。魏主は後、諡して太武皇帝といはれ、廟名は世祖といはれた。太子の晃の子の濬が立つて、愛を討つて之を殺した。○宋の太子の劭は帝を祈り殺さうとしたが、其の事が發覺した。そこで、宋主は太子の劭を廢しようとしたところ、劭は帝を弑して自立して主となつた。宋主は位に在つたこと三十年、改元したことが一度で、元嘉といつた。武陵王が兵を起して劭を殺して立つた。是が世祖孝武皇帝といふのである。

孝武皇帝は名を駿といひ、位に卽いてから十二年で殂した。改元したことは二度で、孝建・大明といつた。太子が立つた。是れが廢帝といふのである。

語釋 巫蠱(巫は女のみこ、男子のみこの覡に對する語である。轉じて廣く、神に仕へ、舞樂をなし、神おろし等を行ふ者をいふ。蠱は腹の蟲、又は蠱の蟲。轉じて廣く、物事を害するものをいふ。それで巫蠱とは巫覡に邪神を祭らせて人に禍害を蒙らせる術を云ふのである。)○呪咀(言を以て神に告げるを呪と云ひ、神に請ひて殃を加へるを詛と云ふ。卽ち「のろひ」をいふのである。初め太子の劭は過失が多く、屢く宋主に詰責されたので、遂に吳興の巫の嚴道育と與に巫蠱を爲し、玉を琢いて宋主の形像を作つて含章殿の前に埋めた。陳慶と云ふものが其の事を知つて具に帝に申し上げたので帝が驚いて劭を捕へて取り調べたところ、劭ののろつた呪咀巫蠱の書が見付つたと云ふことである。)

廢帝

廢帝名子業。卽位居喪傲惰無戚容。孝武疎忌骨肉。多誅殺。至是尤甚。○

魏帝弘立

魏帝濬殂。謚曰文成皇帝。廟號高宗。初太武經營四方。國頗虛耗。文成嗣以鎭靜懷集中外。人心復安。子弘立。○

宋主畏諸父

宋主畏忌諸父湘東王等。幽於殿內。棰曳無復人理。恣爲不道。中外騷然。宋人弒之。在位二年。改元者一。曰景和。湘東王立。是爲太宗明皇帝。

明皇帝

明皇帝名彧。卽位八年殂。改元者一。曰泰始。自帝之初。蕭道成將兵征討

有功。尋鎭淮陰、收養豪俊、賓客始盛。已而爲南兗州刺史。至是褚淵薦爲右衛將軍、與顧命大臣共掌機事。太子立。是爲後廢帝。

【訓】廢帝名は子業。位に卽き喪に居て、傲惰にして戚容無し。孝武骨肉を疎忌して、誅殺すること多かりしが、是に至りて尤も甚し。○魏帝濬殂す。諡して文成皇帝と曰ひ、廟を高宗と號す。初め太武、四方を經營し、國頗る虛耗す。文成嗣ぎて以て鎭靜し、中外を懷集す。人心復安し。子弘立つ。○宋主、諸父湘東王等を畏忌し、殿内に幽して棰曳し、復人理無く、恣に不道を爲す。中外騷然たり。宋人之を弑す。在位二年。改元する者一。景和と曰ふ。湘東王立つ。是を太宗明皇帝と爲す。明皇帝名は彧。位に卽きて八年にして殂す。改元する者一。泰始と曰ふ。帝の初より、蕭道成、兵に將として征討して功あり。尋いで、淮陰に鎭し、豪俊を收養す。賓客はじめて盛なり。已にして、南兗州の刺史となる。こゝに至りて、褚淵、薦めて右衛將軍となす。顧命の大臣と共に機事を掌る。太子立つ、これを後廢帝となす。

【通釋】廢帝の名は子業といふ。卽位して父の忌服に居りながら、おごりたかぶり怠けて、少しも悲

みの様子がなかつた。先主の孝武帝は兄弟を疎んじ、忌み惡んで之を殺すことが多かつたが、廢帝になつては殊に甚しかつた。○魏帝の濬が殂し、謚して文成皇帝と曰ひ、廟を高宗と號した。初め太武帝が四方を征伐して、其の爲に國の財力が竭き果てたのを、文成帝が後を嗣いで、亂を鎭め國を靜にして、朝廷の内外の人々を懷け集めたので、人民も復安堵した。その後には子の弘が立つた。○宋主は、をぢの湘東王等が(外に在つて或は患を爲しはしまいかと)畏れて忌み嫌ひ、(此等の諸父を建康に召し集めて)、殿内に押込め、或は杖でうち或は曳きづり廻して、全く人道を知らず、恣に無道を行つたので、朝野ともに騷がしくなり、遂に宋人の壽寂之が之を弑した。位に在ること二年。改元したことは一度で、景和といつた。湘東王が立つた。是が太宗明皇帝といふのである。

明皇帝の名は彧といひ、位に即いて八年で死なれた。改元したことは一度で泰始といつた。帝の初から蕭道成は大將となつて諸方を征伐して手柄を立てた。ついで淮陰を鎭め守り、四方の豪傑秀俊の士を引入れて養つたので、爾來、部下が多くなつた。其の後程無く南兗州の刺史となつたが、明皇帝の殂するに及んで褚淵が推薦して右衛將軍とした。それで先帝の遺命を受けた大臣と共に政事を司つたのである。太子が立つた。是が後廢帝といふのである。

語釋 戚容（戚は憂へること。容はすがた。悲愁する様子。）○經營（經營とは家を建てる時、土地をはかり土臺を据ゑること。轉じて事業を營むに種々苦心すること、又一定の方針のもとに事業を營むこと。こゝでは軍旅を出して四方を攻略することを謂つたのである。）○虛耗（財力が耗つて空虛となること。）○捶曳（捶は杖で撃ちすゑること、曳はひきずり廻すこと。）○無復人理（親を親とし長を長とする常理に悖ること。）○宋人（手を下して弑したのは壽寂之であるが、宋主の殘暴を惡んで之を弑しようとする者は一國擧つてゞあるから、宋人と云つたのである。）○淮陰（南宋の縣の名、今の江蘇省の淮南府に屬する。）○南兗州（宋になつて、晉の揚州の廣陵を改稱して南兗州と云つた。）○顧命大臣（先帝の遺命を承けて嗣君を輔ける大臣。）○機事（萬機の事。政事の樞要機密を云ふ。）

後廢帝

太上皇帝

宋主驕恣

後廢帝名昱。明帝無子。昱實嬖人李道兒之子也。明帝子之。殺諸王十五六人。惟恐昱之不立。十歲卽位。桂陽王休範擧兵反、攻建康。蕭道成擊斬之。道成爲中領軍。○先是魏獻文帝弘、傳位於太子宏、自稱太上皇帝。以宏幼、仍總萬機。太上聰睿夙成、剛毅有斷。而好黃老浮屠之學。故常有遺世之意。其母馮太后、有所幸李奕。爲太上所誅。馮太后怒、遂弑之而稱制。宋主驕恣、嗜殺、中外憂惶。蕭道成與袁粲褚淵謀廢立。粲不可。淵贊之。遂弑之。在位六年。改元者一。曰元徽。安成王立。是爲順皇帝。

【詞釋】後廢帝名は昱、明帝、子なし。昱、實は嬖人李道兒の子なり。明帝、これを子とす。諸王十五六人を殺し、惟昱の立たざらんことを恐る。十歲にして位に卽く。桂陽王休範、兵を擧げて反し、建康を攻む。蕭道成、擊つ之を斬る。道成、中領軍となる。○これより先、魏の獻文帝弘、位を太子宏に傳へ、自ら太上皇帝と稱す。宏の幼なるを以て、仍ほ萬機を總ぶ。太上、聰睿夙成、剛毅にして斷有り。而して黃老・浮屠の學を好む。故に常に遺世の意有り。其の母馮太后、幸する所の李奕といふもの有り。太上の爲に誅せらる。馮太后怒り、遂に之を弑して制を稱す。宋主驕恣にして殺を嗜み、中外憂惶す。蕭道成、袁粲・褚淵と廢止を謀る。粲可かず、淵之を贊す。遂に之を弑す。在位六年、改元する者一。元徽と曰ふ。安成王立つ。是を順皇帝と爲す。

【通解】後廢帝は名を昱といふ。明帝には子がなく、事實昱はお氣に入りの李道兒の子であつたのを、明帝が自分の子としたのである。それより（邪魔になりさうな弟等）諸王を十五六人も殺した。是は唯太子の昱が天子になれないのであるまいかとひどく心配したからである。昱は十歲で位に卽いた。（明帝の弟）桂陽王の休範が兵を擧げて謀反し、建康を攻めたが、蕭道成が擊つて之を斬り殺した。よつて道成は中領軍となつた。○是より以前、魏の獻文皇帝弘は位を太子の宏に禪り、自分は太上皇

帝と稱へたが、宏がまだ幼少であるので、萬機の政はやはり自分で總べ治めてゐた。太上帝は性質がさとくて智慧が有り、幼少の頃から大人の德を備へて居り、其の上剛勇で決斷力があつた。けれども、黃帝老子の道や佛法を好んだので、常に世を遁れようとする心を持つてゐた。其の母の馮太后が寵愛してゐる者に李奕といふものがあつたが、太上帝の爲に殺されたので、馮太后は立腹して遂に太上帝を弑し、自分で天子の權を行つた。さて宋主昱は我儘でおごりたかぶり人を殺すことを好んだので、宮中の者も朝廷の者も心配し恐れた。そこで蕭道成が袁粲と褚淵とに廢立の相談をしたところ、粲は不可としたが淵が贊成したので遂に弑した。帝の在位は六年で、改元すること一度、元徽といつた。安成王が立つた。是が順皇帝である。

【語釋】嬖人（君主のお氣に入り。寵人。嬖臣。嬖幸。）○桂陽（南宋の郡の名、今の湖南省林州府に屬する。）○聰睿夙成（聰睿は耳敏く賢いこと。夙成は幼少より德の成就して居ること。早成。）○稱レ制（天子の權を行ふ。命を發して政治を行ふこと。）○黃老浮屠（黃老は老子の教を價値つける爲に、元祖は黃帝であるとこぢつけ、合せて黃老の道と稱した。浮屠は梵語 Buddha の音譯で佛のこと。佛陀・浮圖・佛圖等は皆同音である。）

順皇帝名準。桂陽王休範子也。明帝子之。至是卽位。○宋袁粲謀誅蕭道成。褚淵以其謀告道成。粲父子倶被殺於石頭城。百姓哀之曰、可憐石頭

蕭道成爲齊公

勿生天王家

城、寧爲袁粲死、不作褚淵生。沈攸之亦擧兵江陵討道成。軍潰、走而縊死。道成爲相國齊公、加九錫。已而進爵爲王。宋主在位三年。改元者一。曰昇明。禪于齊。泣而彈指曰、願後身世世、勿復生天王家。齊弒之、而滅其族。自宋高祖至是八世。凡五十九年而亡。

通釋　順皇帝名は準。桂陽王休範の子なり。明帝之を子とす。是に至りて位に卽く○宋の袁粲、蕭道成を誅せんと謀る。褚淵、其の謀を以て道成に告ぐ。粲の父子倶に石頭城に殺さる。百姓之を哀みて曰はく、憐む可し石頭城、寧ろ袁粲と爲りて死すとも、褚淵と作りて生きじと。沈攸之も亦兵を江陵に擧げて道成を討つ。軍潰え、走りて縊死す。道成、相國齊公と爲り、九錫を加ふ。已にして爵を進めて王と爲る。宋主在位三年。改元する者一。昇明と曰ふ。齊に禪る。泣きてを彈指して曰はく、「願はくは後身世世復天王の家に生るゝ勿らんことを」と。齊之を弑して其の族を滅す。宋の高祖より是に至るまで八世、凡べて五十九年にして亡ぶ。

【通釋】順皇帝名は準といひ、挂陽王休範の子である。明帝が養つて之を子としたが、この時になつて位に即いた。○（先に蕭道成が帝を弑したので、）宋の袁粲は蕭道成を誅戮しようと企てたが、褚淵がその謀を道成に洩らした爲、粲の父子は石頭城で殺された。人民は之を哀んで「石頭城のことは憐れな事だ。（吾々は）いつそのこと袁粲となつて國の爲に死んでも、褚淵となつて（國賊に諂ひ與して生存はしたくない」といつた。沈攸之も亦兵を江陵に起して道成を征伐したが、軍が負崩れ、逃げて縊死を遂げた。道成は相國齊公となり、九錫を賜はつたが、又位を進めて王となつた。宋主順皇帝の在位は三年で、改元すること一度、昇明といふ。位を齊に禪つた。其の時泣いて爪彈きしていふやう、「どうか吾が來世永久に再び天子の家には生れないやうに」と。齊は帝を弑し、又帝の一族を滅した。宋の高祖より是に至るまで八世、すべて五十九年で亡んだのである。

【語釋】可レ憐石頭城、寧爲二袁粲一死、不下作二褚淵一生上（可憐さうに袁粲親子は石頭城で殺されてしまつた。併し臣としては袁粲の如くに主君の爲に潔く死ぬべきである。褚淵の如くに不忠不義に苟偸しておめ／＼と生きて居るべき筈のものではないとの意である。語路を揃へる爲に「城」「生」と韻を踏んだのである。）○江陵（南宋の縣の名、湖北省荊州府に屬する。）○彈（指を彈き鳴らすことで惆悵怨恨の狀である。）○後身（後生又は來世の意。）

太祖高皇帝

自有赤誌

使黃金同土價

武皇帝

廢帝鬱林王

齊

齊太祖高皇帝、姓蕭氏。名道成。蘭陵人也。相傳爲漢相國何之後。深沈有大量。博學能文。肩有赤誌、如日月狀宋時在軍中久。民間或言其有異相。宋疑之。而不能殺也。竟代宋。性淸儉。每曰、使我治天下十年、當使黃金同土價。在位四年殂。改元者一。曰建元。太子立。是爲世祖武皇帝。

武皇帝名賾。卽位十一年殂。改元者一。曰永明。太子長懋已卒。太孫立。是爲廢帝鬱林王。

廢帝鬱林王名昭業。卽位一年。改元曰隆昌。西昌侯鸞弑之。新安王立。是爲廢帝海陵王。

【訓讀】齊の太祖高皇帝、姓は蕭氏。名は道成。蘭陵の人なり。相傳へて、漢の相國何の後となす。

深沈にして大量あり、博學にして文を能くす。肩に赤誌ありて、日月の狀の如し。宋の時、軍中に在ること久し。民間、或は、その異相あるを言ふ。宋これを疑へども、殺す能はざりしなり。竟に宋に代る。性、淸儉なり。毎に曰はく、「我をして天下を治むること、十年ならしめば、當に黃金をして土の價に同じからしむべし」と。在位四年にして殂す。改元する者一。建元といふ。太子立つ。是を世祖武皇帝と爲す。

武皇帝、名は賾。位に卽きて十一年にして殂す。改元する者一。永明と曰ふ。太子長懋、已に卒す。太孫立つ。是を廢帝鬱林王と爲す。

廢帝鬱林王、名は昭業。位に卽きて一年。改元して隆昌と曰ふ。西昌侯鸞之を弑す。新安王立つ。是を廢帝海陵王と爲す。

【通解】 齊の太祖高皇帝は姓は蕭氏で、名を道成といひ、蘭陵の人である。世に漢の相國蕭何の子孫であると傳へられてゐた。落着があつて度量が大きく、學問が該博で文章を作ることが上手であつた。肩には赤い痣があつて日月の形をしてゐる。宋朝に仕へて久しく軍隊に居たが、民間では彼に尋常人と異なる勝れた人相のあることをいふ者もあつて、宋の朝廷でも之を疑つたが殺すことが出來なかつ

廢帝海陵王
明皇帝

た。それでつまり宋に代つて帝となつたのである。性質は清素儉約で、いつも「我に十年間天下を治めしめたならば黃金の價を土の價と同じにして見せる。」（萬民が帝の淸儉の德に化せられて、金錢の必用無きに至るであらうとの意である。）在位四年で殂した。改元すること一度で建元といふ。太子が立つた、是が世祖武皇帝である。武皇帝は名は賾といひ、位に卽いてから十一年で殂した。改元したこと一度で永明といふ。太子の長懋は先に死亡したので太孫が立つた。是が廢帝鬱林王といふのである（下略）

語釋 蘭陵（縣の名、今は山東省嶧縣の東にある。）〇赤誌（誌は痣に通ずる、赤いあざ。）〇太孫（皇嗣となつた孫を太孫又は皇太孫といふ。）〇鬱林（南齊の郡の名。今は廣西省の桂平縣の東
〇晉安（南齊の郡の名、今は福建省閩侯縣に屬する。）〇海陵（南齊の郡の名、今は江蘇省の泰縣に屬する。）

廢帝海陵王名昭文。爲鸞所立。改元延興。鸞自爲宣城王。帝卽位未四月、廢而弒之。宣城王自立。是爲高宗明皇帝。

明皇帝名鸞。高帝之兄子也。高帝愛之過於己子、而武帝之太子長懋最惡之。及得志、殺高・武子孫無遺類。卽位五年殂。改元者二。曰建武・永泰。太

廢帝東昏侯
魏改姓元氏
太有平之風

子立。是爲廢帝東昏侯。

廢帝東昏侯名寶卷。自在東宮不好學。嬉戲無度。既卽位、不接朝士。惟親信嬖倖、屢誅大臣。○魏主宏殂。在位二十七年。仁孝恭儉、制禮作樂。蔚然有太平之風。禁胡服・胡語。改姓元氏。遷都洛陽。爲魏盛德之主。謚曰孝文皇帝、廟號高祖。太子恪立。

〔通釋〕 廢帝海陵王、名は昭文。鸞の立つる所と爲る。延興と改元す。鸞、自ら宣城王となる。帝、位に卽きて未だ四月ならず。廢して、これを弑す。宣城王自立す。これを高宗明皇帝となす。明皇帝、名は鸞。高帝の兄の子なり。高帝之を愛すること己の子よりも過ぎたり。而して武帝の太子長懋最も之を惡む。志を得るに及びて、高・武の子孫を殺して、遺類無し。位に卽きて五年にして殂す。改元する者二。建武・永泰と曰ふ。太子立つ。是を廢帝東昏侯と爲す。

廢帝東昏侯、名は寶卷。東宮に在りしより學を好まず。嬉戲度無し。既に位に卽きて、朝士に接せず。

惟寵倖を親信し、屢〻大臣を誅す○魏主宏、殂す。在位二十七年。仁孝恭儉、禮を制し樂を作す。蔚然として太平の風有り。胡服・胡語を禁じ、姓を元氏と改め、都を洛陽に遷す。魏の盛德の主たるが爲に、謚して、孝文皇帝といひ、廟を高祖と號す。太子恪、立つ。

新釋 廢帝海陵王は名を昭文といひ、鸞に立てられて位に卽き年號を延興と改めた。鸞は自分で宣城王となつた。帝の卽位後まだ四ヶ月にもならないのに鸞は（太后の令を以て）帝を廢して（海陵王とし、尋いで）之を弑いて自分が帝となつた。是れが高宗明皇帝といふのである。

明皇帝は名を鸞といひ、高帝の兄の子であるが、高帝は自分の子以上に之を愛した。しかるに武帝の太子の長懋は非常に鸞を惡んだ。鸞は帝位に卽いて思ふ儘になるやうになつてから高帝武帝の子孫を皆殺して一人も殘さなかつた。位に卽いて五年で殂した。改元したことは二度で、建武・永泰といふ。太子が立つた。是が廢帝東昏侯である。

廢帝東昏侯は名を寶卷といひ、太子の時から學問を好まず、遊び戯れてしまりがなかつたが、位に卽いてからも朝廷の大臣や士大夫に接見せず、ただお氣に入りの小人に親しみ、その言を信じて屢〻大臣を殺した。○魏主の宏が殂した。在位二十七年間であつた。（實際は足掛二十九年になる。七は九

齊主昏淫
歩歩生蓮花
蕭懿入援
蕭衍圍建康

の誤りであらう。）天性恵み深く親に孝行で、其の上謹み深く倹約で、禮法を定め、音樂をおこす等（善政を施すに務めたので國が能く治まつて）太平の氣象が盛んになつて來た。又えびすの衣服や言語を使用することを禁止し、姓を元氏と改め、都を洛陽に遷した。かく宏は魏主の中では徳のすぐれた君主であつたので、諡して孝文皇帝といひ、廟名を高祖といつた。太子の恪が立つた。

【語釋】宣城（南齊の郡の名、今は安徽南陵縣の東。）○嬖倖（左右に侍するお氣に入りの小人。）○蔚然（草木の繁茂する貌、轉じて物事の盛大になる有様の形容。）○改二姓元氏一（永明二十年に詔を發して姓を改めた。其の詔に、魏の先は黄帝より出て、土徳を以て王たり。夫れ土は黄中の色、萬物の元なり。宜しく姓を元氏と改むべしとあり。後世元魏と云つて三國の魏と區別する。）

○齊主昏淫狂恣。所幸潘妃以金爲蓮花、帖地上、使歩之、曰、此歩歩生蓮花也。左右用事賊虐日甚。太尉陳顯達、先擧兵襲建康敗死。將軍崔慧景、受命出討叛州、還兵逼建康。時南豫州刺史蕭懿、將兵在近。齊主急召入援。慧景敗死。以懿爲尚書。懿弟南雍州刺史衍、使人勸懿行伊霍故事。不爾亟還歷陽。懿不能用。竟賜死。衍起兵襄陽、引而東圍建康。齊人弑主而

迎衍。主在位三年。改元者一。曰永元。時南康王先已自立。是爲和皇帝。

【譯】齊主、昏淫狂恣なり。幸する所の潘妃、金を以て蓮花を爲り、地上に帖して之を歩ましめて曰く、「此れ歩歩蓮花を生ずる也」と。左右事を用ひ、賊虐日に甚し。大尉陳顯達、先づ兵を擧げて建康を襲ひ、敗死す。將軍崔慧景、命を受けて、出でゝ叛州を討ち、兵を還して建康に逼る。時に南豫州の刺史蕭懿、兵に將として近きに在り。齊主急に召し、入りて援けしむ。慧景敗死す。懿を以て尚書と爲す。懿の弟南雍州の刺史衍、人をして懿に伊霍の故事を行へ、爾らずんば亟かに歴陽に還れと勸めしむ。懿、用ふること能はず。竟に死を賜ふ。衍、兵を襄陽に起し、引きて東して、建康を圍む。齊人、主を弑して、衍を迎ふ。主、在位三年。改元するもの一。永元と曰ふ。時に南康王、先にすでに自立す、これを和皇帝となす。

【評釋】齊主は昏愚で淫行に荒み、狂亂で我儘三昧であつた。其寵愛する所の妃に潘妃と云ふものがあつた。齊主は黄金を以て蓮の花を作り、これを地上に貼りつけ、潘妃をして其の上を歩ませて、「(極樂世界はさうであるといふが) 此が歩むにつれて蓮花を生ずるといふものぢや。」といつて戯れた。政

治は左右の小人共が勝手に行つて、下をそこなひしひたげる事は日に〳〵甚しくなつて天下は亂れ出した。大尉の陳顯達が先に兵をあげて建康を不意打したが敗れて死んだ。將軍の崔慧景は命を受けて謀叛した諸州の討代に出掛けたが、途中から自分も叛いて引き還し、建康に攻め寄せた。その時南豫州の刺史の蕭懿が兵を率ゐて近邊に居たので、齊主は急に召し入れて建康の軍を援けしめた。それで慧景は敗死した。(功によつて)蕭懿を尚書に任命した。すると懿の弟の南雍州刺史の蕭衍が使をやつて、兄の懿に「伊尹霍光が君を廢した手段を取りなさい。それが出來ないならば歴陽にお歸りなさい。(宮中に居ては危險であるから。)」と言つて勸めさせたが、懿は弟の言を用ひることが出來なかつたので、とう〳〵自害を命ぜられるやうなことになつてしまつた。衍はそこで軍を襄陽に起し、兵を率ゐて東方に向ひ建康を圍んだ。すると齊の人民は主を弑して衍をむかへ入れた。齊主位に在ること三年、改元したのは一度で永元といつた。時に南康王がこれより前に自立してゐた。是が齊主最後の和皇帝である。

〔語句〕 昏淫(昏愚で淫亂なこと) ○狂恣(心が亂れ狂つて我儘放題なこと。) ○歩々生蓮花(潘妃は絶世の美人である故に之を神女に喩へて言ったのである。佛法には極樂世界では蓮花が歩々に生ずるといふ説が有る。當時は佛教に盛んであつたから、東昏も之を耳にし、かくの如き戯をしたものであらう。) ○南豫州(齊は昔の歴陽を改めて南豫州とした。歴陽、南豫州は同地である。) ○南雍州(梁は昔の襄陽を改めて南雍州と云ふ。襄陽、南雍州は同地

和皇帝
蕭衍加九錫
齊亡

である）〔一〕伊霍故事（伊霍は伊尹と霍光とのこと。伊尹は殷の太甲が淫虐甚だしいので之を桐宮に放ちて改悟せしめた良宰相、霍光は前漢の昌邑王賀が淫亂なので之を廢して宣帝を迎へ立てた名臣。）

和皇帝名寶融。東昏末、寶融起兵於江陵。已而稱帝、改元曰中興。未及東歸、齊太后稱制、以蕭衍爲相國、封梁公、加九錫。尋進爵爲王。齊王至姑孰。詔禪于梁。卽位僅一年被弑。齊自高帝至是七世。凡二十三年而亡。

【直譯】和皇帝、名は寶融。東昏の末、寶融、兵を江陵に起す。已にして帝と稱し、改元して中興と曰ふ。未だ東歸するに及ばず、齊の太后、制を稱して、蕭衍を以て相國と爲し、梁公に封じ、九錫を加ふ。尋ぎて爵を進めて王と爲す。齊主、姑孰に至る。詔して梁に禪る。位に卽きてより僅に一年にして、弑らる。齊、高帝より是に至るまで七世。凡べて二十三年にして亡びぬ。

【意譯】和皇帝は名を寶融といふ。東昏帝の末に江陵に於て兵を擧げ、其の後、帝と稱して中興と改元したが、まだ東の建康に歸ることの出來ないうちに、齊の太后が天子の權を行ひ、蕭衍を相國として梁公に封じ、九種の特別な許物を賜はり、尋いで位を進めて王とした。齊主和皇帝は姑孰といふ所

高祖武皇帝

呑菖化生衍

魏帝詡立胡后淫亂

に來て、詔して位を梁に禪つた。卽位してから僅か一年で弑せられた。齊は高帝から此に至るまで七世で、凡べて二十三年で亡んだのである。

語釋 寶融（明帝の第八子で東昏侯の弟である。）○江陵（南齊の縣の名。今は湖北省の荊南道に屬する。）

梁

梁高祖武皇帝、姓蕭氏、名衍、齊之疎族也。母張氏、見菖蒲生花。旁人皆不見。呑之。已而生衍。英達有文學。東昏初、衍鎭襄陽。知齊將亂、乃密修武備、聚驍勇以萬數。伐材沈檀溪、積茆如岡阜。兄懿死。衍建牙集衆、出檀溪竹木、裝艦葺之以茆。事皆立辦。兵起一年餘、遂入建康、受禪卽帝位。○魏主恪殂。諡曰宣武皇帝、廟號世宗。子詡立。甫六歲。母胡氏稱制。及魏主既長、好遊騁、不親視朝。而胡后方淫亂。魏政始亂。將軍張彝之子仲瑀、上封事、

排抑武人。喧謗盈路。立榜大巷。尅期會集。屠其家。

【訓讀】梁の高祖武皇帝、姓は蕭氏、名は衍、齊の疎族なり。母は張氏。菖蒲、花を生ずるを見る。旁人は皆見ず。これを呑む。すでにして、衍を生む。英達にして文學あり。東昏の初、衍、襄陽を鎭す。齊の將に亂れむとするを知りて、乃ち密に武備を修め、驍勇を聚むること、萬を以て數ふ。材を伐りて、檀溪に沈め、茆を積みて岡阜の如くす。兄懿、死す。衍、牙を建て、衆を集め、檀溪の竹木を出して、艦を裝ひ、これを葺くに茆を以てす。事、皆立どころに辨ず。兵起りて一年餘、遂に建康に入り、禪を受けて帝位に卽く。〇魏主恪、殂す。諡して宣武皇帝と曰ひ、廟を世宗と號す。子詡立つ。甫めて六歲なり。母胡氏、制を稱す。魏主旣に長ずるに及び、遊騁を好み、親ら朝を視ず。而して胡后方に淫亂なり。魏の政始めて亂る。將軍張彝の子仲瑀、封事を上りて、武人を排抑す。喧謗路に盈つ。榜を大巷に立て、期を尅して會集し、其の家を屠らんとす。

【通釋】梁の高祖武皇帝、姓は蕭氏で、名は衍といひ、齊の遠縁の一族である。（梁は齊と同じく漢の蕭何の二十世の孫の蕭から出たもの。それで疎族と云つたのである）。母は張氏で、菖蒲の花が咲い

たのを見たが、傍の人にはそれが見えない。張氏がその花を取つて呑んだところ、其の後間もなく衍を生んだ。(支那には菖蒲の花の咲くのを見るは富貴になる吉瑞であると云ふ俗説がある)。衍は才智が有つて人にすぐれ、其の上に學問があつた。東昏侯の初に襄陽を鎭めて居たが、齊の今にも亂れようとするのを知つて、そこで內々の用意を整へ、勇氣ある者を集めた、其の數は萬を以て數へるほどであつた。また材木を伐つて檀溪と云ふ谷に沈めおき、又萱草を刈つて岡の如く積み量ねて蓄へて置いた。兄の懿が死を命ぜられると、衍はすぐ大將軍の旗を建てゝ兵を集め、檀溪に沈めておいた竹や木を以て軍船を用意し、その屋根をふくにはさきに刈り取つておいた萱を用ひ、すべての事は目の前に調へられた。それで兵を起してから一年餘で建康にはひり、齊の禪を受けて帝位についた。〇魏主の恪が殂した。諡して宣武皇帝といひ、廟名を世宗といつた。子の詡が立つたが、年がやつと六歳であるので、母の胡氏が命令を發して政務をとつた。後魏主が生長するに及び、馬を乘り廻して遊獵することが好で、自分で朝政を見ることをしない。それだけではなく母の胡后が淫亂であつたから魏の政は亂れ始めた。その時、將軍張彝の子の仲瑀が、意見書を上つて武人を排斥し抑壓しようとしたので、武人の怒つて喧しく謗り立てるものが道路に滿ちた。そして木の立札を大通にたてて、時

を定めて集合し、張氏の一門を皆殺にしてやらうなどとその札に書きつけた。

語釋 英達（英邁で達しのこと）○驍勇（強く勇ましいこと。）○牙（天子又は將軍の旗。象牙を以て其竿が飾つてある。こゝでは將軍の旗の意）○遊騁（馬上で遊獵し、山野を馳せ廻ること。）○防（ふせぐこと）○封事（他に洩れることを恐れて堅く封じて上奏する意見書。）

羽林虎賁之暴

彝父子不以爲意。至是羽林・虎賁近千人、相率至尚書省、詬罵、以瓦石擊省門。上下懾懼、不敢禁討。遂至彝第、焚其舍、曳彝父子、毆擊投火中。仲瑀重傷走免。彝死。遠近震駭。胡后收其凶強八人斬之。餘不復治。大赦以安之。

高歡傾貲結客

懷朔鎮函使高歡、至洛陽、見張彝之死、還家傾貲以結客。或問其故。歡曰、宿衞相率焚大臣之第、朝廷懼而不問。爲政如此、事可知矣。

財物可常守邪

財物豈可常守邪。歡自先世坐法徙北邊、遂習鮮卑之俗。沈深有大志。與侯景等相友善。以任俠雄鄕里。

通釋 彝父子以て意と爲さず。是に至りて羽林・虎賁千人に近く、相率ゐて尚書省に至りて詬罵

し、瓦石を以て省門を撃つ。上下惕懼し、敢て禁討せず。遂に彝の第に至り、其の舍を焚き、彝の父子を曳き、毆撃して火中に投ず。仲瑀、重傷して走り免る。彝、死す。遠近震駭す。胡后其の凶强八人を收へて、之を斬り、餘は復治せず。大赦して以て之を安んず。懷朔鎭の函使高歡、洛陽に至り、張彝の死するを見、家に歸り、貲を傾けて、以て客に結ぶ。或ひと其の故を問ふ。歡曰く、「宿衞相率ゐて、大臣の第を焚けども、朝廷懼れて問はず。政を爲すこと此の如くんば事知るべし。財物は豈常に守るべけむや」と。歡は先世より、法に坐して、北邊に徙り、遂に鮮卑の俗に習ふ。沈深にして大志あり。侯景等と相友とし善し。任俠を以て鄕里に雄たり。

【通釋】張彝の父子は左樣なことを心に掛けなかつたが、此の時となつて、天子の親兵が千人近くも尚書省にやつて來て惡口雜言し、瓦や石を以て省の門を撃ち破つたので、上の者も下の者もおぢ恐れ、押しきつて之を禁止討伐する者もなかつた。其の兵衆はとう／＼彝の邸に行つてその家を焚き、彝の父子を曳きずり出して打ち叩き、之を火の中に投げ込んだ。仲瑀は重傷を負ひながら辛くも逃れ出たが、彝はそこで死んでしまつた。之を見聞して遠くの者も近くの者も皆震ひ恐れた。胡后は其の中の首だつた凶惡の者八人を捕へて之を斬り、其の他は格別取調もせず、寛大な處置を取つて赦してや

つて人民を安堵せしめた。この時山西の懷朔鎭の狀函を持つた使者の高歡と云ふものが、洛陽に來て張彝の殺されたのを見て（何か深く感ずる所があつたのであらう）家に歸つてからは財産を殘らず使ひ果すまでに賓客を歡待して交際した。ある人がその理由を尋ねると、高歡が「天子の衞兵が互に引き連れて大臣の邸宅を焚き掃つても、朝廷は懼れて之を捨てゝおく程である。政治がこのやうである以上、世の中の事はこの先どうなるかわかつてゐるではないか。財産なんかどうして永久安全に守つていくことが出來るものか。」といつた。歡は先代の（謐といふものが）罪せられて北に徙つてから世々北邊に居つたので、鮮卑の風俗にはなれてゐた。彼は性質が沈着で深い思慮があり、大きな望を抱いて、侯景等とは仲よく交り、男だてを以て鄕里の人に立てられて居た。

【語釋】羽林虎賁（天子の親兵。羽林は天上にある大將軍の星で、天軍を掌るといふ。轉じて天子の宿衞、近衞兵の意に用ひる。鳥が翼を疾く擊つが如く、林木の多く盛んなるが如しの義にとつたのであると云ふ。虎賁の賁は奔の義で、虎が他の獸に奔りかゝる勇をいふ。もと帝王の護衞を掌る周代の官の名であつたが、後には勇猛な士及び軍隊の意となつた。）○詬罵（惡口雜言する。）○函使（書表はすべて函に封じてある。其の狀函を持つて使する者。）○傾レ貲（貲財を盡く投げ出す。）
○沈深（沈着で深い思慮のあること。）

○魏ノ胡太后臨レ朝ニ以來、嬖倖用レ事ヲ、政事縱弛シ、盜賊蠭起シテ、封疆日ニ蹙マル。魏主詡

寖長、太后自知所爲不謹、務爲壅蔽、母子嫌隙日深。時六州大都督秀容酋長爾朱榮兵强。高歡見榮、卽勸擧兵淸帝側。會魏主殂。胡太后鴆之也。後諡曰孝明皇帝。爾朱榮擧兵、立孝文之姪長樂王子攸、沈胡后于河。封榮太原王。還晉陽。北海王顥奔梁。梁立之、遣將送入洛陽。子攸出奔。爾朱榮渡河來救。顥走死。子攸歸。加榮天柱大將軍。榮蓄不臣之志。魏主陰謀誅榮。榮入。手刺之。

通釋 魏の胡太后の朝に臨みて以來、嬖倖事を用ひ、政事縱弛し、盜賊蠭起して、封疆日に蹙まる。魏主詡、寖く長じ、太后自ら爲す所の不謹なるを知り、務めて壅蔽を爲し、母子の嫌隙日に深し。時に六州の大都督秀容の酋長爾朱榮、兵强し。高歡、榮を見て、卽ち兵を擧げて帝側を淸めんことを勸む。魏主の殂するに會ふ。胡太后之を鴆せしなり。後諡して孝明皇帝と云ふ。爾朱榮、兵を擧げて、孝文の姪長樂王子攸を立て、胡后を河に沈む。榮を太原王に封ず。晉陽に還る。北海王顥、梁に奔る。

梁之を立て、將をして送りて洛陽に入らしむ。子攸出奔す。爾朱榮、河を渡りて來り救ふ。顥、走り死す。子攸歸る。榮に大柱大將軍を加ふ。榮、不臣の志を蓄ふ。魏主、陰に榮を誅せんと謀る。榮入る。手づから、之を刺す。

【通釋】魏の胡太后が朝廷に臨んで政を聽くやうになつてから、氣に入の左右の臣が國事を專にして、政治は弛み不取締となり、盜賊は蜂のやうに群り起り、領地は日々に狹くなつた。魏主の詡が追々生長して物事が分るやうになつたので、太后は自分の行の不謹愼なるに氣が附き、出來るだけ實情の魏主に分らないやうにと蔽ひ隱し(帝の愛信する所の臣は、事に託して之を去らしめた)から、母と子との不仲は日々深くなつた。その時(幷・肆・汾・廣・恒・雲)の六州の大都督で秀容部落の酋長である姓は爾朱名は榮と云ふものが兵が強く盛であつたので、高歡は榮に面會して、兵を擧げて帝の左右の佞人ばらをうち淸めることを勸めた。(榮は承知したがまだ事を始めない內に)魏主の殂に會うた。是は胡后が毒殺したのである。後に諡して孝明皇帝と曰つた。そこで榮は兵を擧げて孝文帝の姪である長樂王の子攸を立て、胡后を河に沈めた。(この功により)榮は太原王に封ぜられて晉陽に歸つた。すると魏の一族の北海王の顥が梁に奔つたが、梁は之を立てゝ、大將の(陳慶之に)顥を護送させて洛陽に入

爾朱氏廢立
高歡誅二爾朱氏一

らしめたので、子攸は出奔した。それで爾朱榮は兵を率ゐて黄河を渡つて來て、子攸を救ひ、顥を破つたので、顥は逃げて死んだ。子攸は再び都に歸ることが出來て榮を天柱大將軍に進めた。ところが榮に反逆の志があつたので、魏主は内々榮を誅殺しようと謀り、榮が宮中に入つて來た時、魏主は自分で榮を刺し殺した。

〔語釋〕縱弛（しまりがなく弛み亂れること。）○封疆（領地。領分。）○務爲二壅蔽一（壅は塞ぐ、蔽はおほふ。押し隱して知らせないこと。）○嫌隙（互に嫌疑を生じて仲のわるいこと。）○秀容（北魏の郡の名、今は山西省忻縣の地。）○太原（北魏の郡の名、今は山西省太原府の地。）○晉陽（北魏の縣の名、今は山西省太原縣治。）○天柱大將軍（天柱は天文に「柱は三公の位」とある。又天の三台六星のことであると云ふ。此の如く大將の主要な位置を示すものなので取つて將軍の名としたのであらう。）

爾朱世隆與爾朱兆、立宗室長廣王曄、入洛陽。子攸遇弑。後諡曰孝莊皇帝。世隆又以曄疎遠、廢之、立孝文之姪廣陵王恭。高歡起兵誅爾朱氏、入洛陽、廢恭而立孝文之孫平陽王脩。脩弑恭。後諡曰節閔皇帝。高歡爲大丞相、建府於晉陽、居之。魏主畏歡、謀伐晉陽。歡擁兵來。魏主奔長安、依關

宇文泰

魏分二東

西大都督宇文泰、以泰爲大丞相。歡追魏主、不及。遂立清河王世子善見於洛陽、遷于鄴。魏自道武至是十二世。一百四十九年、而分爲東魏西魏。

〔通釋〕爾朱世隆、爾朱兆と、宗室の長廣王曄を立てゝ洛陽に入る。子攸弑に遇ふ。後諡して孝莊皇帝と曰ふ。世隆又曄の疎遠なるを以て之を廢し、孝文の姪廣陵王恭を立つ。高歡、兵を起して爾朱氏を誅し、洛陽に入り、恭を廢して孝文の孫、平陽王脩を立つ。脩、恭を弑す。後諡して節閔皇帝と曰ふ。高歡、大丞相となり、府を晉陽に建てゝ之に居る。魏主、歡を畏れ、晉陽を伐たんことを謀る。歡、兵を擁して來る。魏主、長安に奔り、關西の大都督宇文泰に依り、泰を以て大丞相と爲す。歡、魏主を追ひしも及ばず。遂に清河王の世子善見を洛陽に立てゝ、鄴に遷る。魏は道武より是に至るまで十二世。一百四十九年にして、分れて東魏・西魏と爲る。

〔[illegible]〕爾朱世隆は(爾朱榮の弟の)爾朱兆と共に謀反をして、魏の一族である長廣王曄を立てゝ洛陽に攻め入つた。魏主の子攸は之に弑せられた。後諡して孝莊皇帝といふ。世隆は又曄が(魏の太武帝の玄孫で)血すぢが餘り遠いと云ふので之を廢して、孝文帝の姪の廣陵王の恭を立てた。因つて高

熒惑入南斗一

宇文泰弑立

歡は兵を起して爾朱氏を誅殺し、洛陽に入り、恭を廢して孝文帝の孫の平陽王脩を立てた。脩は恭を弑し、後、諡して節閔皇帝といつた。高歡は大丞相となり、役所を晉陽に建てゝ其處に居たが、(益々勢力が強かつたので)魏主は歡を畏れ惡んで晉陽を伐たうと企てた。(早くも之を知つて)歡が兵を引き連れて洛陽に攻め入つたから、魏主は長安に逃げて、關西の大都督である宇文泰に身を寄せ、泰を大丞相とした。(西魏の號は此の時から始まつたのである)。歡は魏主を引き留めようと追つかけたが間に合はなかつたので、遂に清河王の世嗣の善見を洛陽に立てゝ、後に又都を鄴に遷した。(東魏の號は此の時から始まつた)。魏は道武帝から是に至るまで十二世、百四十九年であつたが、茲に分れて東魏西魏となつたのである。

語釋 世嗣(世繼の意) 〇鄴(東魏の都、今の河南省臨漳縣の西。) 〇東魏西魏(長安に遷した脩の方を西魏、鄴に遷した善見の方を東魏。)

〇先是熒惑入南斗。梁主曰、熒惑入南斗、天子下殿走。乃跣下殿禳之。及聞脩出奔歎曰、虜亦應天象邪。脩至長安、踰半年、又與泰有隙。泰鴆之。後諡曰孝武皇帝。孝武既遇弑。泰立南陽王寶炬。歡與泰連年相攻戰、互有

侯景有飛揚之志

勝負。歡卒。遺言囑其子澄曰、侯景有飛揚跋扈之志。非汝所能御。堪敵景者、惟慕容紹宗。景果以河南降西魏、未幾復附于梁。梁封景爲河南王。景使至梁。梁群臣皆不欲納。梁主亦自謂、我國家如金甌、無一傷缺。恐納景因以生事。惟朱异力勸納之。

訓讀　是より先、熒惑、南斗に入る。梁主曰はく、「熒惑、南斗に入れば、天子、殿を下りて走る」と。乃ち跣して殿を下りて之を禳ふ。脩の出奔せしを聞くに及び、慙ぢて曰く、「虜も亦天象に應ずる邪」と。脩、長安に至り、半年を踰えて又泰と隙有り。泰之を鴆す。後諡して孝武皇帝と曰ふ。孝武既に弑に遇ふ。泰、南陽王寶炬を立つ。歡、泰と連年相攻戰し、互に勝負有り。歡卒す。遺言して其の子澄に囑して曰く、「侯景は飛揚跋扈の志有り。汝が能く御する所に非ず。景に敵するに堪ふる者は、惟慕容紹宗のみ」と。景、果して河南を以て西魏に降り、未だ幾ならずして、復た梁に附く。梁、景を封じて河南王となす。景の使、梁に至るや、梁の群臣、皆納るゝを欲せず。梁主も亦自ら謂ふ、「我が國家は、金甌の一傷缺なきが如し。恐らくは、景を納れば、因つて、以て、事を生ぜん」と。

たゞ朱异のみ力め勸めて、之を納れしむ。

【通解】是より先、（魏がまだ東西に分れない時）に熒惑星が南斗星の居る場所に入つた。梁主の武帝は（之を憂へて）「熒惑星が南斗星の座に入るのは天子が殿を下つて逃げる兆である」といつて、跣になつて殿を下り出奔する眞似をして災難よけの祓をした。所が、後になつて魏主脩の出奔した事を聞くに及び、心に慚ぢて、「（わが身の上かと思つたに、さては）夷の王の身にも天の星象が應ずるのか。（さうとは知らずに祓をしたことが恥づかしい。）」といつた。脩は出奔して長安に行き、半年經つて、又大丞相の宇文泰と不和になり、泰が脩を毒殺した。後諡して孝武皇帝といふ。泰は次に南陽王の寶炬を立てた。東魏の高歡と西魏の宇文泰とは年々戰を交へて互に勝つたり負けたりした。歡が死ぬるとき、其の子澄に遺言して、後事を言ひ付け、「侯景といふ男は、飛び揚り跳ねまはらうといふ大きな望を持つてゐる。とてもお前の制御し得る者ではない。よく景に敵對し得る者はただ慕容紹宗一人だけだ。」といつた。其の後景は果して河南の地を持つて西魏に降り、又幾日も經たないうちに梁に從つた。梁は景を河南王に封じた。初め景の使が梁に來たとき、梁の群臣は皆その降參を許すことを欲しなかつた。梁主も亦自ら思ふに、わが國家は黃金の椀の少しもきずのないやうな完全無缺の良い

國柄である。然るに今、景の降參を許したならば、その爲に事を惹き起すであらう」と。たゞ朱异ばかりは力めて降參を許すことをすすめた。

語釋　熒惑（妖星の名。）　〇禳（災を攘けることを禳といふ。即ち災禍を攘ひ除くこと。）　〇飛揚跋扈（鷙鳥の如く飛び揚り大魚の如く跳ね廻らうとする志、即ち天下を跋扈して我が意のまゝにしようとする大望。）
〇如金甌（金甌は黄金の甌（或は云ふ黄金のかめ）、帝の座右に置いて愛玩する完全無缺の名器。內亂外侮も無き完全無缺の國家を之れに譬へたのである。）

侯景反梁

東魏遣慕容紹宗擊景。景敗南走、襲梁壽春、據之請命。梁就以爲南豫州牧。既而東魏求成於梁。意欲得景。景恨梁、通東魏。遂反於壽陽、引兵南渡、圍建康。

梁主崇佛法

梁主自即位以來、江左久無事。惟崇佛法。屢捨身佛寺。上下化之。及景逼臺城、援兵至者爲景所敗。梁主遣人與景盟、以爲大丞相。臺城受圍五月而陷。景入見。引就三公位。梁主神色不變。謂景曰、卿在軍中久。毋乃爲勞。景不敢仰視。

流汗不能對

流汗不能對。

通釋　東魏、慕容紹宗を遣して景を擊たしむ。景敗れて南に走り、梁の壽春を襲ひて、之に據りて命

を請ふ。梁、就きて以て南豫州の牧と爲す。既にして東魏成を梁に求む。意、景を得んと欲するなり。景、梁の東魏に通ぜしを恨み、遂に壽陽に反し、兵を引きて南に渡り、建康を圍む。梁主位に卽きしより以來、江左久しく無事なり。惟だ佛法を崇び、屢〻身を佛寺に捨つ。上下之に化す。景の臺城に逼るに及び、援兵の至る者、景の敗る所と爲る。梁主人を遣して景と盟はしめ、以て大丞相と爲す。臺城圍を受くること五月にして陷る。景入りて見ゆ。引きて三公の位に就かしむ。梁主神色變ぜず。景に謂ひて曰く、「卿、軍中に在ること久し。乃ち勞をなすことなからむや。」と。景、敢て仰ぎ視ず。汗を流して、對ふる能はず。

〔通解〕東魏は慕容紹宗に命じて侯景を撃たしめた。景は敗れて南に逃れ、梁の壽春を不意討して之にたて籠り、封爵の命を請うたから、梁は其の據る所に就いて景を南豫州の牧とした。（壽春は南豫州に在るので、かういふ書きかたをしたのである）。其の後東魏が梁に和睦を求めたが、その心は景を手に入れようとするのであつた。景は梁が東魏と交通したのを恨んで、遂に壽陽（恐らく、壽春の誤りであらう）で謀叛し、兵を率ゐて南の方大江を渡つて建康を圍ん。梁主は卽位以來、江東が長い間無事であつたところから、（戰備など心にかけず）、ひたすら佛法を信仰して、度〻身を佛寺に捨てゝ佛

に仕へて居たので、上も下も皆この風に移りかはつた。それで景が宮城に攻め寄せるに及んで、授けに來た兵は皆景に破られたので、梁主は使をやつて景と盟はせ、景を大丞相とした。宮城は圍を受けること五ケ月で落ちた。景は宮城に入つて謁見した。梁主は景を三公の位に就かしめた。梁主は心も顔色も少しも變らず、景に對つて「其方は久しく軍中にゐたからさぞ疲れたであらう。」といつて慰められたが、景は額もえ上げず、汗を流して返答することが出來なかつた。

【語釋】求レ成（成はタヒラギ、和睦）○屡捨身佛寺（梁主は三度も同泰寺に幸して御衣を脱して僧服を着、自ら佛奴となられて衆生の爲に涅槃經を講ぜられた。因つて群臣は億萬と云ふ金を寺へ差出して帝を贖ひ還した。）○臺城（建康の宮中のことを臺といつた。臺城は即ち宮城である。）○神色（御心顔色の意。）○毋乃爲勞（毋は無に同じく、毋乃は無寧と同じで反語となるのである。苦勞で無かつたらうか、いや定めし苦勞されたことであらうの意となる。）

天威難レ犯

景退謂レ人曰、吾常跨レ鞍對レ陣、矢石交下、了無二怖心一。今見二蕭公一使二人自懾一。豈非二天威難一レ犯。吾不レ可二以復見一レ此人一。梁主爲レ景所レ制、飲膳亦被二裁損一、憂憤成レ疾、口苦索レ蜜不レ得。

再曰二荷荷一

再曰二荷荷一遂殂。在位四十八年。改元者七。曰二天監・普通・大通・中大通・大同・中大同・太淸一。壽八十六。

昭明太子

先レ是、太子統、仁明孝儉、好レ學有リ

文。在東宮三十年而終。梁主舍嫡孫而立別子。至是卽位。是爲太宗簡文皇帝。

【通解】景、退きて人に謂つて曰く、「吾、常に鞍に跨り、陣に對し、矢石交〻下れども、了に怖るゝ心無し。今蕭公を見るに、人をして自ら慴れしむ。豈天威犯し難きに非ざらんや。吾以て復た此の人を見る可からず」と。梁主、景の制する所と爲り、飮膳も亦裁損せらる。憂憤して疾を成す。口苦くして、蜜を索むれども得ず。再び荷荷と曰ひて遂に殂す。在位四十八年。改元する者七。天監・普通・大通・中大通・大同・中大同・太淸と曰ふ。壽八十六。是より先、太子統、仁明孝儉、學を好み文有り。東宮に在ること三十年にして終る。梁主、嫡孫を舍てゝ別子を立つ。是に至りて位に卽く。是を太宗簡文皇帝と爲す。

【通釋】侯景は御前を退き人に向ひ「自分は常に馬に乘つて敵陣に對し、矢丸が飛び交うて來ても少しも怖れはしない。然るに今蕭公に見えたところ自然と慴しいやうに感じさせられる、これは天から授つた威光の犯しがたいものがあるからであらう。自分は再び、この人に面會することは出來ない。」

といつた。其の後、梁主は景に抑制され、飲食までも節減されて憂へ憤り、はては病氣になつた。食物の味が苦く感ぜられたので、蜂蜜を求めたけれども、それも與へられず、二度まで荷々と怒の聲を發して遂に殂した。在位四十八年、改元すること七度、天監・普通・大通・中大通・大同・中大同・太淸といふ。年は八十六歳だつた。是より前の事であるが、太子の統は、仁深く心が明かで、其の上孝行で、儉約の德があつた。又學問を好み、文學の才があつたが、東宮にあること三十年で世を終へた。(此の統と云ふのは、文學者として世に知られた昭明太子のことである)。梁主は其の正嫡孫を捨てゝ妾腹の子を立てゝ置いたが、是に至つて位に卽いた。是が太宗簡文皇帝である。

【語釋】憤(音フン。憤れること。)○裁損(節減。減損する。)○口苦(病氣の爲口中に熱が有つて食物が苦く感ぜられたのである。)○荷々(怒り責める聲。一說には、喉が乾いて音聲を出すことが出來ない、苦しみて發する聲。)○太子統(有名な文學者、嘗て文選を著した。昭明太子と諡せられた。)○舍嫡孫立別子(太子統の子歡は正嫡の孫であるが、それを立てないで、庶子を立てた。庶子は正嫡とは別であるので別子といふ。)

●簡●文●皇●帝、名綱。在東宮十八年而後遇侯景之亂。既立、受制於景而已。湘東王繹鎭江陵、自稱假黃鉞大都督、中外諸軍承制。岳陽王詧、昭明太子統之第三子也。鎭襄陽、與繹相攻。詧遣使降于西魏、以求援。○東魏大將

軍渤海王澄、先是爲其下所殺。弟洋爲丞相、封齊王。逼東魏主禪位、尋弑之。謚曰孝靜皇帝。東魏建國一十七年而亡。○西魏立梁蕭詧爲梁主。○西魏主寶炬殂。謚曰文皇帝。太子欽立。

簡文皇帝、名は綱。東宮に在ること十八年にして、後侯景の亂に遇ふ。既に立てども、制を景に受くるのみ。湘東王繹、江陵に鎭し、自ら假黄鉞大都督、中外諸軍承制と稱す。岳陽王詧は、昭明太子統の第三の子也。襄陽に鎭し、繹と相攻む。詧、使を遣して西魏に降り、以て援を求む。○東魏の大將軍渤海王澄、これより先、その下の殺す所と爲る。弟洋、丞相となり、齊王に封ぜらる。東魏の主に逼つて、位を禪らしめ、尋いで、これを弑す。謚して、孝靜皇帝といふ。東魏、國を建てゝより、一十七年にして亡ぶ。○西魏、梁の蕭詧を立てゝ梁主と爲す。○西魏の主寶炬殂す。謚して文皇帝といふ。太子欽立つ。

簡文皇帝は名を綱といひ、(武帝の第三子で)東宮に在ること十八年の後、侯景の亂に遭ひ、立つて帝となつたけれど、侯景の壓迫を受けるばかりで(實權は全く帝にはなかつた)。この時湘東王

の繹は江陵を鎭めて居たが、自分で假黃鉞大都督、中外諸軍承制と稱へて居り、また岳陽王の詧は昭明太子と謚された統の第三子であるが、此は襄陽を鎭めて居た。詧と繹とは互に攻め合つたが、詧は使を遣して西魏に降參し、其の援兵を求めた。○東魏の大將軍である渤海王の澄は、是より以前にその家來の爲に殺され、弟の洋が齊王に封ぜられたが、なほも東魏の主に逼つて位を禪らしめ、尋いで之を弑した。謚して孝靜皇帝といつた。東魏は國を建てゝから十七年で亡んだのである。○西魏では（降參した）梁の蕭詧を立てゝ梁王とした。（西魏の主寶炬が殂し、謚して文皇帝といふ。太子の欽が立つた。

語釋 假黃鉞大都督（鉞は大斧である、黃金で之を飾るので黃鉞と云ふ。大都督には本來黃鉞が無いのであるが、之を假し與へるのは其の威を重くする所以である。假黃鉞とはかういふ場合に於ける大都督の稱號である。） ○承制（詔令を承奉して天子に代りて之を行ふ者。）

○侯景自立爲漢王、廢梁主弑之。尸位不及三年。改元者一。曰大寶。景立豫章王棟、已而簒位。先是始興太守陳霸先起兵、討景。湘東王遣王僧辯討景。景簒數月、而爲僧辯霸先所敗、亡走吳、欲入海、爲其下所斬。送尸建

元皇帝

突厥始大

康、傳首江陵、截其手足、送於北齊。湘東王立。是爲元皇帝。

元皇帝名繹。一目眇、性殘忍。卽位于江陵。自侯景之亂、州郡大半入西魏、蜀亦爲魏有。梁自巴陵以下至建康、以長江爲限。○突厥攻柔然。北齊擊突厥、遷柔然。是時柔然衰、突厥始强大。

【訓讀】○侯景自立して漢王と爲り、梁主を廢して之を弑す。尸位三年に及ばず。改元する者一。大寶と曰ふ。景、豫章王棟を立つ。已にして位を簒ふ。是より先、始興の太守陳霸先、兵を起して景を討つ。湘東王、王僧辯をして景を討たしむ。景、簒ひて數月にして、僧辯・霸先の爲に敗られ、亡げて吳に走り、海に入らんと欲し、其の下の爲に斬らる。尸を建康に送り、首を江陵に傳へ、其の手足を截りて、北齊に送る。湘東王立つ。是を元皇帝と爲す。

元皇帝　名は繹。一目眇にして、性殘忍なり。江陵に卽位す。侯景の亂より、州郡大半西魏に入り、蜀も亦魏の爲に有せらる。梁は巴梁より以下建康に至るまで長江を以て限と爲す○突厥、柔然を攻む。

北齊、突厥を撃ちて柔然を遷す。是の時柔然衰へ、突厥始めて强大なり。

通解 侯景は自分で立つて漢王となり、梁主綱を廢して之を弑した。綱（即ち簡文帝）は位に在るばかりで、天子の事を行ふ實權を持たずに過したが、それも三年足らずであつた。改元したことは一度で大寶といつた。侯景は豫章王の棟を立てたが、其の後自分が位を簒つた。是より先に始興郡の太守陳霸先が兵を擧げて景を討伐し、又湘東王は王僧辯をして同じく景を討たしめた。それで景は位を簒つてから僅五六ケ月で、僧辯・霸先の爲に敗られ、逃げて呉に入り、其處から海上に遁れようとしたが、其の家來の羊鵾の爲に斬られた。死骸は梁の都の建康に送られ、首は湘東王の居られる江陵に傳へられ、其の手足は裁ち截つて北齊に送られた。湘東王が立つた。是が元皇帝である。元皇帝は名を繹といふ。この人は片目で、性質が殘酷であつた。江陵に於て即位した。梁は侯景の亂以來州郡の半分以上西魏にとられ、蜀も亦魏の領分となつた。それで梁は巴陵郡から建康に至る間の地を領して長江が境になつたのである。（下略）

語釋 尸位（尸はカタシロと訓む。神を祭るとき神の代となつて神座に坐するものを云ふのである。故に位に居るのみで其の事を行はない、卽ち名のみで實權のないものを尸位といふ。） ○始興（南齊の郡の名。今は廣東省嶺南道に屬する、） ○送二於北齊一（東魏は最初侯景の叛いた國で、北齊は東魏の讓りを受けた國であるから、かういふ因緣で侯景の手足を北齊に送つたのである。） ○巴陵（南齊の郡の名、今は湖南省岳陽縣に屬する。） ○突厥（突厥はもとトルコ人種の一部に

西魏宇文泰廢立

文武之道今夜盡矣

後梁臣于西魏

して後に同種族の民族を併合せし故、同種族の總稱となつたのである。後魏の初には高昌、今の新疆省東北部の迪化道の吐魯番地方)の西北、金山、アルタイ山の南の山地に居り、內蒙古を占佔せる柔然に服從して居たが、西魏の末(西紀五五二)に、酋長土門(Tumen)は柔然に叛き、自立して伊利可汗と號した。可汗は、もと蒙古語で Kagan といふ語の音譯で、匈奴の單于の號と同じく大酋長の義である。)　○柔然(東胡の別種、初め拓跋氏に屬し、後に內外蒙古に占據したが、後魏に破られ、突厥に滅された。)

○西魏宇文泰、廢其主欽而立其弟廓。欽遇弑。○西魏遣柱國于謹伐梁。入江陵。梁主焚古今圖書十四萬卷、歎曰、文武之道今夜盡矣。乃出降。或問、何意焚書。曰、讀書萬卷、猶有今日。尋被殺。在位三年。改元者一。曰承聖。

○西魏取襄陽、徙梁王詧于江陵、使稱帝、屯兵守之。是爲後梁。臣于西魏。王僧辯・陳霸先奉晉安王、稱制于建康。貞陽侯淵明、先是爲北齊所獲。至是以兵納之。王僧辯奉歸建康、稱帝。陳霸先殺僧辯、廢淵明立晉安王。是爲敬皇帝。

訓讀　西魏の宇文泰、その主欽を廢して、その弟廓を立つ。欽、弑に遇ふ。○西魏、柱國于謹を

遣り、梁を伐ちて、江陵に入らしむ。梁主、古今の圖書十四萬卷を焚き、歎じて曰く、「文武の道、今夜盡きぬ。」と。乃ち出でて降る。或ひと問ふ、「何の意あつて書を焚く」と。曰く、「書萬卷を讀めども、猶今日あり」と。尋いで殺さる。在位三年、改元するもの一、承聖といふ。○西魏、襄陽を取り、梁王詧を江陵に徙し、帝と稱せしめ、兵を屯して之を守る。是を後梁と爲す。西魏に臣たり。王僧辯・陳霸先、晉安王を奉じて、制を建康に稱せしむ。貞陽侯淵明、是より先北齊の爲に獲らる。是に至りて兵を以て之を納る。王僧辯、奉じて建康に歸り、帝と稱せしむ。陳霸先、僧辯を殺し、淵明を廢して、晉安王を立つ。是を敬皇帝と爲す。

通釋 西魏の宇文泰がその主の欽を廢して其の弟の廓を立てた。欽は泰の爲に弑せられた。○西魏は柱國の官である于謹を遣し、梁を伐つて江陵に入らしめた。梁主は古今の書籍十四萬卷を焚き捨て、(寶劍を折り)、「あゝ文武の道は今夜で盡き果てた。」と歎息し、出て降參した。ある人が「どういふわけで書を焚かれたのですか。」と聞くと、「自分は書物を萬卷も讀んだが、それでも今日の(如く禍に遇つて力窮まり降參せねばならぬやうな)結果になつたのだから、(書物は畢竟何の役にもたゝぬものだ)」といつた。其の後間もなく殺された。在位三年で改元したことは一度、承聖といつた。○西魏

敬皇帝

宇文覺

西魏禪周

は梁の襄陽をとり、梁王の詧を江陵に徙して帝と稱へしめ、兵を駐屯せしめて江陵を守つた。是が後梁と云ふのであるが、實は西魏に臣事してゐるのである、王僧辯と陳霸先とは晉安王を奉じて、建康に於いて天子としての命令を發布して(政事を行はしめた)。梁の一族である貞陽侯淵明が是より前に北齊の爲に生捕られてゐたが、この時になり、北齊は護衛の兵をつけて梁に送り入れたので、王僧辯は淵明を守り立てて建康に歸つて帝と稱せしめた。然るに陳霸先は僧辯を殺し、淵明を廢して晉安王を立てた。是が敬皇帝である。

語釋 柱國(官名。輔弼の臣で、國の柱石棟梁たるものであるから柱國と云ふ。)

敬皇帝名方智。元帝子也。年十三即位。陳霸先爲丞相。○西魏太師大冢宰安定公宇文泰卒。世子覺嗣。年十五。宇文護輔之。未幾以覺爲周公。○西魏主廓禪于周。廓遇弑。後諡曰恭皇帝。西魏建國四世。二十四年而亡。覺稱周天王。性剛果。惡護之專。護弑之。後諡曰孝閔皇帝。立泰之長子毓。

○梁丞相陳霸先爲相國、封陳公、加九錫、尋進爵爲王。梁主改元者二。曰紹泰、曰太平。尸位未三年而禪于陳、尋遇弒。梁自高祖武帝至是四世。凡五十六年而亡。

【讀方】敬皇帝　名は方智、元帝の子なり。年十三にして位に卽く。陳霸先丞相と爲る。○西魏の太師大冢宰安定公宇文泰卒す。世子覺嗣ぐ。年十五なり。宇文護之を輔く。未だ幾くならずして覺を以て周公と爲す○西魏の主廓、周に禪る。廓、弒に遇ふ。後諡して恭皇帝と曰ふ。西魏、國を建ててより四世、二十四年にして亡びぬ。覺、周天王と稱す。性剛果にして護の專なるを惡む。護之を弒す。後諡して孝閔皇帝と曰ふ。泰の長子毓を立つ。○梁の丞相陳霸先、相國と爲り、陳公に封ぜられ、九錫を加へ、尋いで爵を進めて王と爲る。梁主、改元する者二。紹泰と曰ひ、太平と曰ふ。尸位未だ三年ならずして陳に禪り、尋いで弒に遇ふ。梁、高祖武帝より是に至るまで四世。凡べて五十六年にして亡びぬ。

【通釋】敬皇帝は名を方智といひ、元帝の子である。十三歲で位に卽き、陳霸先が丞相となつた。

○西魏の太師で大冢宰の官である安定公の宇文泰が死んだ。それで世嗣の覺が後をついだが、年は十五歳で、宇文護が之を輔佐した。間もなく護を周公に封じた。○西魏の主の廓が周に位を禪り、廓は弑せられた。後に諡して恭皇帝といふ。西魏は國を建ててから四世二十四年で亡んだ。覺は周天王と稱へた。(世に後周と號するのが是れである)。覺は性質は剛勇果斷で、護の專横を惡んだが、護は之を弑した。後諡して孝閔皇帝といふ。泰の長子の毓を立てた。○梁の丞相陳霸先が相國となり、陳公に封ぜられ、九錫を賜はり、尋いで位を進めて王となつた。梁主は改元すること二度で、紹泰といひ、太平といつた。空しく實權なき位にあること三年で陳に禪り、尋いで弑せられた。梁は高祖武帝より是まで四世、すべて五十六年で亡んだのである。

〔語釋〕世子(諸侯のあとつぎ、もとは太子のよつぎの義であつた、後に天子には太子、諸侯には世子といふ) ○宇文護(宇文覺の從兄)

陳

陳高祖武皇帝、姓陳。名霸先。吳興人也。梁武帝大同中、爲廣州參軍。廣有亂。討平之。以功爲將軍。尋爲交州司馬、西江都護、高要太守。督七郡諸軍、

屢平寇亂。侯景陷臺城。霸先時守始興。結郡中豪傑、起兵討景、先取江州。爲州刺史、引兵會諸軍、卒以平景、遂爲將相於梁、以至受禪。卽位三年殂。改元者一。曰永定。子二人。昌・頊。皆以江陵陷時、沒入長安。臨川王立。是爲世祖文皇帝。

【訓讀】陳の高祖武皇帝、姓は陳、名は霸先。吳興の人なり。梁の武帝の大同中、廣州の參軍となる。廣に亂あり。討つて之を平ぐ。功を以て將軍となり、尋いで交州の司馬、西江の都護、高要の太守となり、七郡の諸軍を督し、屢ば寇亂を平ぐ。侯景、臺城を陷る。霸先、時に始興に守たり。郡中の豪傑と結び、兵を起して景を討ち、先づ江州を取り、州の刺史となり、兵を引きて諸軍を會し、卒に以て景を平げ、遂に梁に將相と爲り、以て禪を受くるに至る。位に卽きて三年にして殂す。改元する者一。永定と曰ふ。子二人あり。昌・頊といふ。皆江陵の陷りし時を以て長安に沒入す。臨川王立つ。是を世祖文皇帝と爲す。

【通釋】陳の高祖武皇帝は姓を陳、名を霸先といつて吳興の人である。梁の武帝の大同中に廣州の參

文皇帝

周王稱帝

周帝邕立

軍と爲つた。その時廣州に亂があつたので之を平げ、其功によつて將軍となり、ついで交州の司馬、西江の都護、高要の太守となり、七郡の諸軍をすべ治め、度々寇や亂を平げた。侯景が宮城を陷れた時、彼は始興郡を守つて居たが、郡内の豪傑と交り結び、兵を起して景を討ち、先づ江州をとつて其處の刺史となり、兵を率ゐて諸軍を呼び集め、すつかり景を平げたが、とう／＼梁の大臣大將となつて、禪を受けるやうになつた。位に卽いてから三年で殂去した。改元したことは一度で永定といつた。子が二人あつて昌・頊といつたが、（西魏の兵が梁の元帝を討つて）江陵を陷れた時、二人とも籍沒されて（西魏の都の）長安に於て降參した。それで姪の臨川王が立つた。是が世祖文皇帝である。

語釋　吳興（郡の名、今は浙江省湖州府に屬する。）、○廣州（郡の名、今は廣東省番禺縣に屬してゐる。）　○高要（郡の名、今は廣東省肇慶府に屬する。）　○始興（郡の名、今は廣東省曲江縣に屬する。）
○沒入長安（沒とは籍沒することで、罪有る者の財物田宅を取つて官に收めるのである。こゝでは籍沒され降參して西魏の都の長安に入つたと云ふ意。或は云ふ、沒入は官の奴隸と爲すことであると。中卷二〇頁參照。）

文皇帝名蒨。武帝之兄子也。在武帝平梁亂時、已有功。至是卽位。○周王毓稱帝。○北齊主洋、盡滅元氏之族。洋殂。謚曰文宣皇帝。○周宇文護憚周帝明敏有識量、進毒弑之。謚曰明皇帝。毓弟邕立。○北齊文宣帝之母

弟、常山王演、廢其主殷而自立。尋弒殷。演立一年而殂。諡曰孝昭皇帝。母弟長廣王湛、又廢演子百年而自立、後殺百年。○後梁主詧殂。太子巋立。

【通釋】文皇帝、名は洋。武帝の兄の子なり。武帝が梁の亂を平げし時に在りて、已に功有り。是に至りて位に卽く。○周王毓、帝と稱す。○北齊の主洋、盡く元氏の族を滅す。洋、殂す。諡して文宣皇帝と曰ふ。○周の宇文護、周帝の明敏にして識量有るを憚り、毒を進めて之を弒す。諡して明皇帝と曰ふ。毓の弟邕立つ。○北齊の文宣帝の母弟常山王演、其の主殷を廢して自立す。尋いで殷を弒す。演立ちて一年にして殂す。諡して孝昭皇帝と曰ふ。母弟長廣王湛、又演の子百年を廢して自立す。後百年を殺す○後梁の主詧、殂す。太子巋立つ。

【通釋】(上略)○周の宇文護は周帝(毓)の聰明敏慧で見識度量の有るのを恐れ、毒を呑ませて弒した。諡して明皇帝といふ。その後には毓の弟の邕が立つた。(下略)

【語釋】元氏(魏の姓)

陳主知民疾苦

廢帝臨海王

宣皇帝

周誅宇文護

北齊亡

○北齊主湛、傳位於太子緯、自稱太上皇帝。○陳主起自艱難、知民疾苦、性明察儉勤。在位八年殂。改元者二。曰天嘉、曰天康。太子立。是爲廢帝臨海王。

廢帝臨海王、名伯宗。在位三年。改元者一。曰光大。爲安成王頊所廢。○北齊上皇湛殂。謚曰武成皇帝。○陳安成王自立。是爲高宗宣皇帝。

宣皇帝、名頊。初陷入長安。文帝時、周人送頊還陳。至是即位。○周主邕誅宇文護、始親政。○北齊後主緯、多嬖寵、政亂。周伐齊入鄴、執緯歸殺之、夷其族。北齊建國五世。三十年而亡。

〔通釋〕北齊の主湛、位を太子緯に傳へ、自ら太上皇帝と稱す○陳主、艱難より起りて、民の疾苦を知る。性明察にして儉勤なり。在位八年にして殂す。改元する者二。天嘉と曰ひ、天康と曰ふ。太

子立つ。是を廢帝臨海王と爲す。

廢帝臨海王、名は伯宗。在位三年。改元する者一。尨(光)大といふ。安成王頊の廢する所と爲る。○北齊の上皇湛、殂す。謚して武成皇帝と曰ふ。○陳の安成王、自立す。是を高宗宣皇帝と爲す。

宣皇帝、名は頊。初め長安に陷入せらる。文帝の時、周人頊を送りて陳に還す。是に至りて位に即く。○周主邕、宇文護を誅して、始めて政を親らす○北齊の後主緯、嬖寵多く、政亂る。周、齊を伐ちて鄴に入り、緯を執へ、歸りて之を殺し、其の族を夷ぐ。北齊、國を建ててより五世、三十年にして亡びぬ。

【通釋】(上略) 陳主は艱難の間から身を起したので、民の事情に通じ其の苦痛を知つてゐた。性質は明かによく物事を察し、且儉約勤勉であつた。在位八年で殂去した。改元したことは一度で、天嘉といひ、天康といふ。太子が立つた。是が廢帝臨海王である。

廢帝臨海王は名を伯宗といひ、在位は三年間、改元したことは一度で、尨大といつた。安成王頊(さきに長安に陷入された頊が陳に返つて安成王といふ)の爲に廢せられた。○北齊の上皇湛が殂去し、謚して武成皇帝といつた。○陳の安成王が自分で獨立した。是が高宗宣皇帝である。

周主邕

周主贇

男堅爲隋王

周主禪位于隋

宣皇帝は名を項といひ、以前西魏の爲に長安に沒入されてゐたが、文帝の時周人が項を陳に送り還して來た。それが今度位に卽いた。○周主の邕は其の太師の宇文護を誅戮して始めて自ら政を行つた。○北齊の後主緯は氣に入りの小人が多く、それが爲に政が亂れた。そこで周は齊を伐つて鄴に入り、緯を執へ、歸つて之を殺し、其の一族を皆殺にした。北齊は國を建ててから五世三十年で亡んだ。

語釋 囏難（囏は艱と同字。陳主文皇帝は嘗て武帝の營中に在つて、侯景の亂を鎭定するのに非常な艱苦務を經驗した。）○知民疾苦（民の苦痛を知つてゐる。下情に通じてゐること。）○臨海（郡の名、今は浙江省の會稽道に屬する。）○陷入（沒入と同じ。陳の武帝の條に出づ。）○五世三十年（六世二十八年が正しい。）

○周主邕、深沈有遠識。政事嚴明。稱爲賢主。滅齊一年而殂。壽三十六。諡曰武皇帝。太子贇立。立皇后楊氏。后父隋公楊堅用事。爲上柱國大司馬。贇自爲太子時、好昵近小人。立未一年、傳位於子闡。自稱天元皇帝。驕侈彌甚。未一年而殂。諡曰宣皇帝。楊堅自爲大丞相、進相國隋王、加九錫。未幾、周主闡禪位于隋。尋被弒。隋主盡滅宇文氏之族。周自稱帝、至是五世。

二十五年而亡。○陳主在位十四年。改元者一、曰大建。殂。太子立。是爲後主長城公煬公。

〔讀方〕○周主邕、深沈にして遠識有り。政事嚴明なり。稱して賢主と爲す。齊を滅してより一年にして殂す。壽三十六。謚して武皇帝と曰ふ。太子贇立ち、皇后楊氏を立つ。后の父隋公楊堅、事を用ひ、上柱國大司馬と爲る。贇、太子たりし時より、好んで小人を昵近す。立ちて未だ一年ならずして、位を子闡に傳へ、自ら天元皇帝と稱す。驕侈彌〻甚し。未だ一年ならずして殂す。謚して宣皇帝と曰ふ。楊堅自ら大丞相と爲り、相國隋王に進み、九錫を加ふ。未だ幾ならずして、周主闡、位を隋に禪り、尋いで弑せらる。隋主盡く宇文氏の族を滅す。周、帝と稱してより、是に至るまで五世、二十五年にして亡びぬ。○陳主、在位十四年。改元するもの一、大建と曰ふ。殂す。太子立つ、これを後主長城公煬公となす。

〔通釋〕周主の邕は沈着で遠大な識見があり、政治は明白に嚴重であつて賢主といはれた。齊を亡した後一年で殂去した。謚して武皇帝といつた。太子の贇が立つて、皇后には楊氏を立てた。そこで

皇后の父の隋公楊堅が政を專にし、上柱國、大司馬の官となつた。贇は太子であつた時から好んで小人を親しみ近づけ、立つてから一年も經たぬに、位を子の闡に傳へ、自分は天元皇帝と稱へて、高ぶり驕ることがいよ〳〵甚しかつたが、一年たゝぬうちに殂去した。諡して宣皇帝といふ。楊堅は自分で大丞相となり、相國隋王に進み、九錫を加へられた。後いくばくもなく周主闡は位を隋に禪り、ついで弑せられた。隋主は（かねて周にはびこつてゐた）宇文氏の一族を殘らず滅した。周は帝と稱へてから是まで五世二十五年で亡んだ。（下略）

【語釋】深沈（心の奧深く落ち着いてゐること。）〇昵近（親しんで狎れ近づけること。）〇後主長城煬公（隋が陳の後主を追討して、長城縣公となし、諡して煬と云つたのである。）

後主長城煬公、名叔寶。自爲太子、與詹事江總爲長夜之飲。即位未幾、起臨春・結綺・望仙閣。各高數十丈、連延數十間、皆以沈檀爲之、金玉珠翠爲之飾、珠簾寶帳、服玩瑰麗、近古未有。其下積石爲山、引水爲池、雜植花卉。陳主居臨春閣、貴妃張麗華居結綺、龔・孔二貴嬪居望仙、複道往來。江總

玉樹後庭花

爲宰輔、不親政事。日與孔範等文士、侍宴後庭。謂之狎客。使諸貴嬪與客唱和。其曲有玉樹後庭花等。君臣酣歌、自夕達旦。

【通釋】後主長城煬公、名は叔寶。太子たりしより、詹事江摠と、長夜の飲を爲す。位に卽きて未だ幾くならずして、臨春・結綺・望仙閣を起す。各〻高さ數十丈、連延數十間、皆沈檀を以て之を爲り、金玉珠翠を之が飾と爲し、珠簾寶帳、服玩瑰麗、近古未だ有らず。其の下、石を積みて山と爲し、水を引きて池と爲し、花卉を雜へ植う。陳主は臨春閣に居り、貴妃張麗華は結綺に居り、龔・孔の二貴嬪は望仙に居りて、複道より往來す。江摠、宰輔と爲りて、政事を親らせず。日に孔範等の文士と後庭に侍宴す。これを狎客といふ。諸の貴嬪をして、客と唱和せしむ。その曲に玉樹後庭花等あり。君臣酣歌して、夕より旦に達す。

【餘說】後主長城煬公は名を叔寶といひ、太子であつたときから、詹事の役である江摠と晝夜飲み續けをなし、位に卽いて間もなく、臨春・結綺・望仙の三閣を造つた。高は何も數十丈あつて其の連なり延び亘ること數十間に及んだ。皆沈水香及び栴檀香といふ名木を以て作り、金や玉や、眞珠や翡翠

の翠で飾をつけた。又珠で飾つた簾や寶玉で飾つたとばりを掛け、衣服や器具は何れも珍しく、美しいもので、其の建築の立派さは近世にない所であつた。又閣の下には石を積んで山となし、水を引いて池とし、其の間に花咲くさま／＼の草木を交へ植ゑた。陳主は臨春閣に居て貴妃の張麗華は結綺閣に居り、龔氏孔氏の二貴嬪は望仙閣に居り、閣と閣との間には複道が設けられてゐて、それに由つて往來した。この時江摠は宰相となつてゐたが、政事を自分で見ず、毎日孔範等の文士と共に後宮の酒宴の席に侍つてゐた。此の酒宴に侍る者を狎客といつた。そして諸の貴嬪をして狎客と共に詩歌を作らせ、一緒に歌はせた。其の曲名には玉樹後庭花などがあつて、君臣が酒に醉ひ、歌ひ舞つて、夕暮から朝まで續くのが常であつた。

【語釋】 ○詹事（官名。皇太子附の役の名。） ○長夜之飲（夜が明けても窓戸を開かないで猶燭をつけて宴會を續けること。） ○沈檀（沈水香、梅檀香といふ香木。） ○珠翠（珠は水中より出る玉、翠は翡翠の羽毛。） ○珠簾寶帳（珠の飾をつけた簾。寶玉を飾とした帳。） ○服玩瑰麗（服玩は衣服器具。瑰麗は珍奇美麗なること。） ○複道（二重の道、二重廊下のこと。） ○狎客（天子に狎れ親しむ客と云ふ意。） ○唱和（唱は先づ詩歌を吟ずること、和はそれに唱和して歌ふこと。） ○酣歌（酣飲放歌の意、酒に醉ひ歌をうたふこと。） ○玉樹後庭花（樂曲の名。その詞に「妖姫臉似花含露、玉樹流光照後庭」の句あるによつて、玉樹後庭花といふ。後に分れて二曲となる。玉樹は人の風采の立派なのに喩へる。後庭は天子の奥御殿、轉じて后妃の稱。兩曲とも大體、諸の妃嬪の容色をほめたゝへたものである。） ○貴妃・貴嬪（皆女官の官名である。）

孔範與貴嬪兄弟

後梁亡

隋伐陳

郭璞言

宦官近習、內外連結、宗戚縱橫、貨賂公行。孔範與貴嬪結爲兄弟。範自謂、文武才能、擧朝莫及。將帥微有過失、卽奪兵權。由是文武解體、以至覆滅。○後梁主巋殂。太子琮立。隋主廢而滅之。自詧稱帝於江陵、臣於西魏・周・隋。所統數郡而已。凡三十三年而亡。○隋以晉王廣爲元帥、帥師伐陳。揚素・韓擒虎・賀若弼分道而出。高熲爲元帥長史。問薛道衡、江東可克乎。對曰、克之。郭璞言、江東分王三百年、與中國合。此數將周。

通釋　宦官近習、內外連結し、宗戚縱橫し、貨賂公行す。孔範、貴嬪と結んで兄弟となる。範自ら謂へらく、文武の才能、擧朝及ぶなしと。將帥微しく過失あれば、卽ち兵權を奪ふ。これに由りて、文武解體し、以て覆滅するに至れり。○後梁の主巋、殂す。太子琮立つ。隋主廢して之を滅す。詧が帝を江陵に稱せしより、西魏・周・隋に臣たり。統ぶる所數郡のみ。凡べて三十三年にて亡びぬ。○隋、晉王廣を以て元帥と爲し、師を帥ゐて陳を伐たしむ。楊素・韓擒虎・賀若弼、道を分ちて出づ。高熲、

元帥の長史たり。薛道衡に問ふ、「江東克つ可きか」と。對へて曰はく、「之に克たん。郭璞の言に、江東分れて王たること三百年にして中國と合せんと。此の數將に周からんとす」と。

【通譯】宦官や近臣は内外に連絡をとつて（思ふままに振舞ひ）、帝の一族や外戚の人々は思ふ存分の我儘をなし、賄賂は公然と行はれた。また孔範は貴嬪と兄妹の約を結んでいよいよ權力を振つた。そして自ら文武の才能は朝廷中で自分に及ぶものはないと思つてゐた。將帥に少し過失があると、すぐ兵權をとりあげたから、文官武官共に君主に離れ叛き、遂に亡びるやうになつたのである。（後梁の主の巋が死して、太子の琮が立つたが、隋主は之を廢して滅ぼした。後梁は詧が江陵に帝を稱へてから、其の子孫は西魏・周・隋に臣となり、その統治する所はたゞ五六郡だけであつた。凡て三十三年で亡んだ。）隋は晉王廣を以て總大將とし、軍を引連れ、陳を伐たせた。楊素・韓擒虎・賀若弼は道を分けて進出した。高熲は元帥の長史（補佐役）であつたが、薛道衡に對ひ、「わが軍は江東の陳に勝つことが出來るだらうか」と問ふと、之に對へて、「勝つだらう。昔晉の郭璞といふ人の豫言に、「今、晉は江東に分れて國を立てたが三百年後には又中國と合併するだらう。」といつたが、今其の三百年にならうとしてゐる、（隋が之を合せて天下を一統する時が來てゐるのだ。）」といつた。

長江天塹豈能飛渡

陳帝投井

陳亡

語釋 縱横([illegible]) ○文武解體(解體は瓦解する意、四肢五體のばら〳〵になつた如く文官も武官も皆君主に離れ乖くこと。) ○郭璞(字は景純といひ、晉の聞喜の人で、博學高才、詞賦に工であつた。その頃郭公といふ者があつて卜筮に精しかつた。璞は之に從つて學び、青嚢中の書を得、是によつて五行卜筮の術を洞知し、古書が甚だ多かつたと云ふ。山海經、楚辭などに註した人で、元帝は此の人を重んじて著作郎とした。) ○此數將レ周(東晉の元帝が南渡して建康に都を定めてからこゝに至るまで、二百七十二年になる。それで郭璞の言つた三百年と云ふ數にもうちきに滿たうとしてゐるといつたのである。)

陳主聞レ有二隋兵一、謂二近臣一曰、王氣在レ此。彼何爲者。孔範曰、長江天塹、豈能飛渡。臣每患二官卑一。虜若渡レ江、定作二太尉公一矣。陳主以爲レ然。奏レ伎縱レ酒、賦レ詩不レ輟。賀若弼自二廣陵一濟レ江、韓擒虎自二横江一宵濟二采石一。守者皆醉。擒虎遂自二新林一進、直入二朱雀門一。陳主自投二景陽井中一。軍人窺レ井將レ下レ石。乃叫。以レ繩引レ之、與二張麗華・孔貴嬪一同レ束而上。俘以歸。後主在位七年。改元者二。曰二至德一、曰二禎明一。陳自二高祖武帝一至レ是五世。凡二十二年而亡。

通釋 陳主、隋の兵有りと聞き、近臣に謂ひて曰く、「王氣此に在り。彼何爲る者ぞ。」と孔範曰く、

「長江は天塹なり。豈能く飛び渡らんや。臣毎に官の卑きを患ふ。虜若し江を渡らば、定めて太尉公と作らん」と。陳主、以爲へらく然りと。伎を奏し酒を縱にし、詩を賦して輟めず。賀若弼、廣漢より江を渡り、韓擒虎、横江より宵采石に渡る。守者皆醉ふ。擒虎遂に新林より進みて、直に朱雀門に入る。陳主自ら景陽の井中に投ず。軍人井を窺ひ、將に石を下さんとす。乃ち叫ぶ。繩を以て之を引き、張麗華・孔貴嬪と同じく束ねて上げ、俘へて以て歸る。後主在位七年。改元する者二。至德と曰ひ、禎明と曰ふ。陳は、高祖武帝より、こゝに至るまで、五世、凡べて二十二年にして亡びぬ。

【通釋】陳主は隋兵の攻め寄せたことを聞き、近臣に對つて、「王者の運氣は此處にある。隋がどうして陳に刄向ふことが出來るものか、恐れるに足りない」といふと、孔範も（相槌をうつて）、「この揚子江は天然の塹壕であります。どうして飛び渡ることが出來ませう。私は常に官の卑いのを苦にしてゐます。もし隋が江を渡つて來たならば、（之を平げ、功を立てて）ぜひとも太尉公にして頂きませう」といふと、陳主は如何にもさうであると言つて平氣で居た。それで相變らず、女樂を奏し、酒を思ふ存分飲み、詩を作つてゐてやめない。（その間に）賀弼は廣漢から江を渡り、韓擒虎は横江から采石の渡へと渡つたが、陳の守兵は皆酒に醉つて（防ぐことが出來ない）。擒虎は遂に新林の浦から進んです

ぐに朱雀門に攻め入つた。陳主は自分で景陽殿の空井戸に入つて隱れてゐると、隋の兵士が之をのぞきこれを投げ落さうとした。そこで陳主が中から助を呼んだので、繩を以て之を引き、張麗華・孔貴嬪と一緒に束ねて引き上げ、生捕にして歸つた。後主の在位は七年で、改元すること二度、至德といひ、禎明といつた。陳は高祖武帝よりこれまで五世二十二年で亡んだのである。

【語釋】王氣在此(此の地は下世の地で、昔の或王は此の地に王氣があるといふので、金を埋めて之を鎭めた。それ故、陳主は王氣在此と云つたのである。)　○太尉公(晉宋以來、太尉公、司徒公、司空公を三公と云つた。太尉公は武職の長である。)　○美伎(伎は妓と同じで女樂の意。女樂を奏すること。)　○朱雀門(晉の孝武帝の建てた門である。上に兩つ銅雀を置いたのでかやうになづけた。)

隋

高祖文皇帝

角出鱗起

隋高祖文皇帝、姓楊氏。名堅。弘農人也。相傳爲東漢太尉震之後。父忠仕魏及周、以功封隋公。堅襲爵。堅生而有異。宅旁有尼寺。一尼抱歸自鞠之。一日尼出、付其母自抱。角出鱗起。母大驚墜之地。尼心動。亟還見之曰、驚我兒、致令晩得天下。及長相表奇異。周人嘗告武帝、晉六茹堅有反相。堅

聞レ之、深自晦匿。女爲二周宣帝后一。周靜帝立。堅以二太后父一秉レ政、遂移二周祚一。卽レ位九年、平レ陳天下爲レ一。

〔[illegible]〕隋の高祖文皇帝、姓は楊氏。名は堅。弘農の人なり。相傳ふ、東漢の太尉震の後たりと。父の忠、魏及び周に仕へて、功を以て隋公に封ぜらる。堅、爵を襲ぐ。堅、生れて異あり。宅の旁に尼寺あり。一尼抱き歸りて自ら之を鞠ふ。一日尼出づ。其の母に付して自ら抱かしむ。角出で鱗起る。母大いに驚きて之を地に墜す。尼心動く。亟に還りて之を見て曰はく、「我が兒を駭かして、晩く天下を得しむるを致せり」と。長ずるに及びて相表奇異なり。周人嘗て武帝に告ぐ、「普六茹堅、反相有り」と。堅之を聞きて深く自ら晦匿す。女、周の宣帝の后と爲る。周の靜帝立つ。堅太后の父といふを以て政を秉り、遂に周の祚を移せり。位に卽きて九年、陳を平げて天下一と爲る。

〔[illegible]〕隋の高祖文皇帝は姓を楊氏、名を堅といひ、弘農の人である。世間では東漢の太尉の楊震の後裔であるといひ傳へた。父の忠は魏と周とに仕へて功があつたので隋公に封ぜられた。堅はその爵を襲いで（隋公となつた）堅の生れた時に不思議なことがあつた。（それは紫の氣が庭に立ち籠め、堅

の掌の中には王と云ふ文字が現はれてゐたことである）。又邸の傍に尼寺があつたが、其の寺の一人の尼が堅を抱いて歸つて之を養ひ育てた。ある日尼が外出したとき、其の實母に託して之を抱かせた。ところが、其の子の頭には角が生え皮膚には鱗が生じたので、實母は吃驚してつい地に之を墜した。此の時尼は外出先で急に胸騒がしたので、早速引き返して見ると、この有様なので「わが兒を驚かしたので晩く天下を取らせるやうにしてしまつた。（こんなことがなければこの兒はもつと早く天下が取れるのに）」といつた。生長するに及んで人相も人と餘程かはつてゐた。周の人（王軌）がある時武帝に「あの普六茹堅は謀叛人の相があります。（御用心なさい）」とつげた。堅は之を聞いて深く自分の才を晦まし、能を匿して嫌疑を避けた。其の娘は周の宣帝の后となつた。ついで靜帝が即位すると、堅は太后の父といふので政をとり、遂に周の帝位を自分の上に移して（天子となつたが）、位に即いて九年目に陳を平げたので、ここに天下は統一せられた。

【語釋】弘農（郡の名、今の河南省陝州、盧氏縣の南。）　○震之後（楊震の四世の孫を孚と曰ふ。孚渠を生み、渠鉉を生み、鉉元壽を生み、元壽惠嘏を生み、惠嘏烈顧を生み、烈顧禎を生み、禎忠を生む。忠は堅の父である。）　○鞠（養育すること。）　○相表（人相。）　○普六茹堅（普六茹は姓、此の三字姓は堅の祖父が魏の恭帝より賜はつたものである。）

廢太子勇

王通獻策

開皇二十年、廢太子勇爲庶人。初帝使勇參決政事。時有損益。勇性寬厚。率意無矯飾。帝性節儉。勇服用侈。恩寵始衰。勇多內寵。妃無寵死。而多庶子。獨孤皇后深惡之。晉王廣彌自矯飾、爲奪嫡計。后贊帝廢勇、而立廣爲太子。○龍門王通、詣闕獻太平十二策。帝不能用。罷歸、教授於河汾之間。弟子自遠至者甚衆。○仁壽四年、帝不豫。召太子入居殿中。太子預擬帝不諱後事、爲書問僕射楊素。素得報。宮人誤送帝所。帝覽之大恚。

【讀方】開皇二十年、太子勇を廢して庶人と爲す。初め帝、勇をして政事を參決せしむ。時に損益あり。勇の性は寬厚なり。率意にして矯飾なし。帝の性は節儉なり。勇、服用侈る。恩寵始めて衰ふ。勇、內寵多く、妃、寵なくして死す。而して庶子多し。獨孤皇后深く之を惡む。晉王廣彌〻自ら矯飾して嫡を奪ふの計を爲す。后、帝を贊けて勇を廢せしめ、廣を立てて太子と爲す。○龍門の王通、闕に詣りて太平の十二策を獻ず。帝用ふること能はず。罷めて歸り、河汾の間に教授す。弟子遠きより至

る者甚だ衆し。○仁壽四年、帝不豫なり。太子を召し入りて殿中に居らしむ。太子預め帝の不諱の後の事を擬し、書を僞りて僕射の楊素に問ひて報を得たり。宮人誤りて帝の所に送る。帝之を見て大に恚る。

【通釋】開皇二十年、太子の勇を廢して一平民とした。それは初め帝は勇を政事に參與せしめて事を裁決せしめたが、勇は時としては政令の削るべきは削り益すべきは益して善く政事を助けたこともあつた。勇の性は寬大濶厚であり、又生眞面目で體裁を虛飾する樣なことはなかつた。しかし帝の性は儉約であるのに勇は衣服調度皆侈つてゐたので寵遇が衰へ始めた。その上勇は妾が多く、妃の元氏は寵愛を失つて恨死を遂げ、妾腹の子供が澤山あつた。（之を見て）獨孤皇后は深く勇を惡んだ。この時晉王の廣は帝の寵を得る爲にいよ〳〵上べを僞り飾つて太子の位を横取りしようと企てた。皇后は帝を贊けて勇を廢せしめ廣を立てて太子とした。○龍門の王通といふ學者が參內して天下を太平にする策論十二ケ條を獻じたが、帝は之を採用することが出來なかつたので、通は仕官を思ひ止つて歸り、黃河汾河の間に於て教授を始めたところ、遠方からもその名を慕つて來る弟子が甚だ多かつた。○仁壽四年に帝は疾に罹つたので、太子の廣を呼んで宮中に入れて帝に侍せしめた。太子は帝の死を豫想して、

死後の支度につき書面を認めて僕射の楊素に尋ねたところ、素はその返書を送つたが、取次の宮人が間違へて帝の所に持つて行つた。それで帝は之を見て大に怒られた。

【語釋】 爲二庶人一（皇族等に非行のあつた時、身分を落して只の一平民とすること。）○率意（率直、眞率。無頓着。むぞうさ。）○獨孤（二字の姓。勇の母。）○龍門（今は河北省山北道に屬する。）○不諱後事（諱は死のこと。即ち死の後の事。）○擬（準の意、準備すること。）○不豫（豫はタノシムと訓す、不豫は不快の意、轉じて天子の病氣をいふ。）○王通（儒者。私に文中子と諡す。「文中子中說」十卷を著す略稱「文中子」）

陳夫人

帝所レ寵陳夫人出更衣、爲二太子所一レ逼、拒レ之得レ免。帝怪二其神色有一レ異、問レ故。夫人泫然曰、太子無禮。帝恚抵レ床曰、畜生何足レ付二大事一。獨孤誤レ我。將レ召二故太子勇一。

太子弑レ帝

廣聞レ之、令二右庶子張衡入侍一レ疾、因弑レ帝、遣レ人縊二殺勇一。

帝勸二政事一

帝性嚴重、勤二於政事一。令行禁止。雖レ嗇二於財一、賞レ功不レ吝。愛二養百姓一、勸二課農桑一、輕レ徭薄レ賦、自奉儉薄、天下化レ之。受禪之初、民戸不レ滿二四百萬一、末年踰二八百萬一。

猜忌苛察

然自以二詐力一得二天下一、猜忌苛察、信二受讒言一、功臣故舊、無二終始保全者一。在位二十四年。改元者二。曰二開皇、仁壽一。太子立。是爲二煬皇帝一。

【訓讀】帝の寵する所の陳夫人出でて更衣し、太子の逼る所と爲り、之を拒みて免るるを得たり。帝其の神色の異なる有るを怪みて、故を問ふ。夫人泫然として曰はく、「太子無禮なり」と。帝恚りて床を抵ちて曰はく、「畜生何ぞ大事を付するに足らん。獨孤我を誤る」と。將に故の太子勇を召さんとす。廣之を聞きて右庶子の張衡をして入りて疾に侍せしめ、因りて帝を弑せしめ、人を遣りて勇を縊り殺さしむ。帝、性嚴重にして、政事に勤む。令すれば行はれ、禁ずれば止む。財に嗇なりといへども、功を賞するに吝ならず。百姓を愛養し、農桑を勸課し、徭を輕くし賦を薄くし、自ら奉ずること儉薄なり。天下之に化す。受禪の初め民戸四百萬に滿たざりしが、末年には八百萬を踰えたり。然れども自ら詐力を以て天下を得たれば、猜忌苛察にして讒言を信受し、功臣故舊、終始保全する者無し。在位二十四年。改元する者二、開皇・仁壽といふ。太子立つ。是を煬皇帝と爲す。

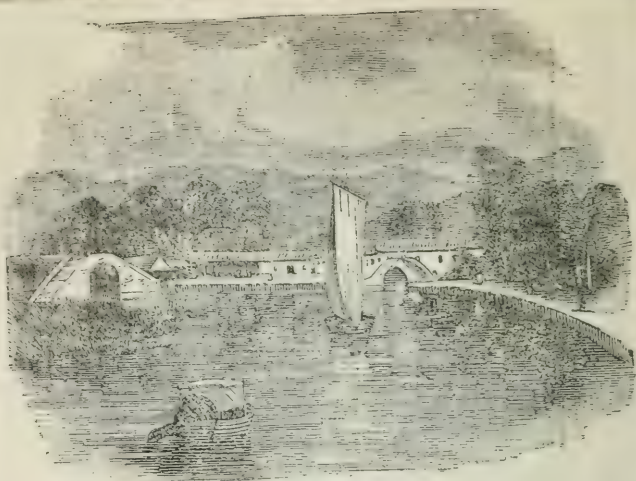
【通釋】帝の寵愛する陳夫人が御前から立ち出でて衣服を着換へてゐる所を太子に挑まれたが夫人は拒んでやつと辱しめを遁れることが出來た。(再び御前へ出ると)帝はその顏色の常ならぬを見て、その故を問はれた。夫人は涙を流し「太子が無禮でございます」と事の由を申上げたので、帝は一層恚つて床を叩き、「畜生奴が、どうしてあんな者に國の大事を委ねることが出來るものか。獨孤はかゝる

者を推擧して我を失策させた」といつて、將に故の太子勇をお召しにならうとした。廣が之を聞いて東宮役人の張衡といふ者をやつて帝の疾を看護させ機を見て帝を弑せしめた。又人を遣して勇を絞め殺させた。帝は(一體)性質が嚴格で政事に勉强したから、命令すれば皆行はれ禁止すれば皆止んだ。金錢には儉嗇であつたが功勞ある者を賞するには惜しまなかつた。よく人民を愛養し、農業養蠶を奬め、勞役は輕くし、賦税は少くし、しかも自身の用度は儉約をした。天下は之を見習つて皆質素になつた。帝が初め周から禪りを受けた時は人民の戸數が四百萬に足りなかつたが、晩年には八百萬戸を踰えた。(しかし正義に據らないで)計略を以て天下を取つたこと故、萬事疑深く、苛しく缺點を探し出し、讒言を直ぐ信用したので、功臣も昔馴染の者も、始めから終りまで身を全うしたものがなかつた。帝は位に在ること二十四年、年號を改めたことは二度で開皇・仁壽といつた。太子が立つて位に卽いた。是が煬皇帝である。

語釋 出更衣(更は改めるの意で著物を著替ること。長く坐して居たものは皆起つて衣服を著更へる、寒暖の變有る爲である。或は云ふ、古人は廁に登る時には必ず衣を更へたのであると。) ○泫然(涙の垂れる貌。) ○畜生(人の畜養を待つて生きてゐると云ふ意味で人を罵る言葉。無識無智、馬牛犬豕のやうだといふのである) ○獨孤誤レ我(獨孤皇后が太子勇を廢して廣を立てることを勸めたのをいふ。) ○右庶子(東宮附の官名、左右中の三者が有る。) ○自奉儉薄(奉とは養ふこと即ち飲食衣服居室の類を云ふ。自身を養ふことについては儉約質素であつたとの意。) ○何足レ付二大事一(付は付託で、まかせること。) ○信受(まにうける。本當と思ふ。)

天下地震
營顯仁宮
開通濟渠
造龍舟

煬皇帝名廣。開皇末、立爲太子。是日天下地震。卽位、首營洛陽顯仁宮、發江嶺奇材異石。又求海內嘉木異草、珍禽奇獸、以實苑囿。又開通濟渠、自長安西苑引穀洛水、達于河、引河入汴、引汴入泗、以達于淮。又發民開邗溝、入江、旁築御道、樹以柳。自長安至江都、置離宮四十餘所。遣人往江南、造龍舟及雜船數萬艘、以備遊幸之用。西苑周二百里。其內爲海。周十餘里。

【通釋】煬皇帝、名は廣。開皇の末、立ちて太子と爲る。是の日天下地震す。位に卽くや、首として洛陽の顯仁宮を營み、江嶺の奇材異石を發す。又海內の嘉木異草、珍禽奇獸を求めて以て苑囿に實つ。又通濟渠を開き、長安の西苑より穀洛の水を引きて、河に達し、河を引きて汴に入れ、汴を引きて泗に入れ、以て淮に達せしむ。又民を發して邗溝を開きて江に入れ、旁に御道を築き、樹うるに柳を以てす。長安より江都に至るまで、離宮を置くこと四十餘所。人を遣り江南に往きて龍舟及び雜船數萬

運河圖

艘を造らしめ、以て遊幸の用に備ふ。西苑は周り二百里。其の内に海を爲る。周り十餘里。

〔通解〕煬皇帝の名は廣といふ。開皇の末に立つて太子となつたが、此の日天下に大地震があつた。（人々は世の中の又騷がしくなる前兆であらうと云つて驚き懼れた）。位に卽くと第一に洛陽の顯仁宮を造營し、楊子江より五嶺に至る間の珍奇なる材木や奇異なる石を徵發したり、又天下の良い樹木や珍しき草や不思議な鳥獸を求めたりして、之を御苑に實たし（我が耳目を樂ませた）。又通濟渠といふ運河を開いて、長安の西苑から穀水と洛水とを引いて、黃河に達し、黃河を引いて汴水に入れ、汴水を引いて泗水に入れ、淮水に達せしめた。（かうして長安から洛陽まで運河で往來の出來

爲蓬萊山

作淸夜遊曲

るやうにした)。(又長安と江都の間を通ずる爲に)、又多數の人民を徴發し、邗溝を掘り割つて運河を作り之を揚子江に連結した。(その運河の)傍には御成街道をつくり、柳の木を植ゑ、長安より江都に至る間に四十餘ケ所の離宮を置いた。なほ人を遣つて江南に往つて帝の御座船や種々の船數萬艘を作らせて、御出遊の用に備へしめた。長安の西苑は周りが二百里もあつて、其の中に海(湖水)をこしらへた。その海の周りは十餘里もあつた。

【語釋】江嶺(江と嶺との間の意。江は揚子江・嶺は五嶺、五嶺とは衡山、南に連つてゐる大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽の五つを云ふ。)○苑囿(樹木花卉の植ゑてあるのを苑といひ、鳥獸を飼養してあるのを囿といふ。)○龍舟(天子の御座船、高さ四十五尺、長さ二百丈もの大きな舟で、中に正殿・内殿・東西堂が設けてあつたと云ふことである。)○煬皇帝(略して煬帝といひ、我國ではヤウダイと讀んでゐる。)○江都(今の江蘇省江都縣。)

爲蓬萊・方丈・瀛州諸山、高百餘尺。臺觀宮殿、羅絡山上。海北有渠。縈紆注海、緣渠作十六院。門皆臨渠、窮極華麗。宮樹凋落、剪綵爲花葉、綴之。沼內亦剪綵爲荷芰菱芡。色渝則易新者。好以月夜、從宮女數千騎、遊西苑、作淸夜遊曲、馬上奏之。(一) 後又開永濟渠、引沁水、南達于河、北通涿郡。又營

汾陽宮、又穿江南河、自京口至餘杭八百里。

【訓讀】蓬萊・方丈・瀛州の諸山を爲る。高さ百餘尺。臺觀宮殿、山上に羅絡せり。海の北に渠あり。縈紆して海に注ぐ、渠に緣りて十六院を作る。門皆渠に臨み、華麗を窮極せり。宮樹凋落すれば剪綵を以て花葉を爲り之を綴す。沼内にも亦剪綵して荷芰菱芡を爲り、色渝れば則ち新しき者に易ふ。好みて月夜を以て宮女數千騎を從へて西苑に遊び、清夜遊の曲を作りて、馬上に之を奏せしめたり。◯後又永濟渠を開き、沁水を引き、南の方河に達し、北の方涿郡に通ず。又汾陽宮を營む。又江南河を穿ち、京口より餘杭に至ること八百里なり。

【口譯】その海の中に（神仙の住むといふ）蓬萊・方丈・瀛州の諸山を作つた。その高さは百尺餘あつて、物見の高臺や宮殿が山上に並び列なつた。またその海の北側に堀割があつて、うねり廻つて海に注ぎ、堀割に沿うて十六の御殿を作つて、その門は皆渠に臨んで作り華麗を極めた。宮苑の樹木が冬枯れて凋み落ちると、色絹を剪つて細工して花葉を造り、それを枝に綴つた。また沼の内にも色絹を剪つて荷や菱や雞頭の花を作り、變色するとすぐ新しいものに取換へた。またよく月夜に宮女數千人

置洛口倉
陳百戲於端門

を馬に乘せて西苑に遊び、清夜遊といふ音曲を作つて、之を馬上で演奏させて樂しんだ。○後又永濟渠といふ運河を開鑿し沁水を引いて南は黄河に達し、北は涿郡に連絡させた。又汾州に汾陽宮を造營した。尙又江南河と云ふ運河を開いて、京口(今の江蘇省の鎭江)から杭州(浙江省)の餘杭に至るまでを連ねたが、是が長さ八百里あつた。

語釋 蓬萊方丈瀛州(仙人の住むといふ海中の三神山。今池中に島山を築いて之に象つたのである。) ○臺觀(臺は高臺、觀は樓觀、何れも觀望の高殿。) ○羅絡(羅列連絡の意、ならびつらなる。) ○縈紆(うねりまはつた有樣。) ○剪綵(剪は鋏で剪斷すること。綵は五色の彩ある絹。五色の絹を剪んで花や葉を造ること。) ○荷芰芡(荷は蓮、芰は四角又は三角の菱、菱は二角の菱、芡はミヅブキ、何れも水草。) ○淸夜遊曲(煬帝の作つた淸夜を西苑に遊んだ時に作つたもの。) ○沁水(源を山西省の羊頭山から發する川。) ○涿郡(郡の名、今の河北省涿縣。)

○置洛口倉於鞏東南原上、城周二十餘里。穿三千窖。置興洛倉於洛陽北、城周十里。穿三百窖。窖皆容八千石。帝或如洛陽、或如江都、或北巡至楡林・金河、或如五原、巡長城、或巡河右。營造巡遊無虛歲。徵天下鷹師至者萬餘人。徵天下散樂、諸蕃來朝、陳百戲於端門。執絲竹者萬八千人。終

月而罷。費巨萬。歳以爲常。

【訓讀】洛口倉を鞏の東南の原上に置く、城の周り二十餘里。三千窖を穿つ。興洛倉を洛陽の北に置く。城の周り十里。三百窖を穿つ。窖皆八千石を容る。帝或は洛陽に如き、或は江都に如き、或は北巡して楡林・金河に至り、或は五原に如き、長城を巡り、或は河右を巡る。營造巡遊、虚歳無し。天下の鷹師を徴す。至る者萬餘人。天下の散樂を徴す。諸蕃來朝すれば、百戯を端門に陳す。絲竹を執る者萬八千人。月を終へて罷む。費巨萬。歳々以て常と爲す。

【通釋】洛口倉といふ穀倉を鞏縣（今は河南省河洛道に屬す）の東南の野原に造つた。その倉城の周圍は二十里あつて、三千の窖が作つてあつた。又興洛倉といふのを洛陽の北に建てた。この倉城の周圍は十里あつて三百の窖が作つてあつた。これ等の窖はいづれも皆八千石を容れることが出來た。帝は（威を示すために巡遊も盛に行はつたもので）或は洛陽に如き、或は江都（江蘇省江都縣）に如き、或は北部を巡つて楡林(陝西省内)や金河(陝西省内)に至り、或は五原（今山西歸綏道に屬す）に如き、長城を巡遊し、或は黄河の北方を視察した。（このやうに）土木の造營と地方巡遊とを行はな

い年はなかつた、又（遊獵や遊藝が好で）或時天下の鷹使を徵發したところ、召に應じて來たものが一萬餘人もあつた。又天下の散樂を召したが、（是れも應じて來たものが非常に多かつた）。諸々の夷狄が來朝すれば芝居や種々の遊藝を宮城の正門前に演じて夷狄の使の者に見物させたが、絲竹を持つ樂人が一萬八千もあつて、一月も續けて後に罷めた。その費用は幾萬ともしれぬ多額で、每年常例としてかういふことを行つた。

語釋 城（倉或の類。米倉の周圍に土手を築いて城郭の如くした。）○諸蕃（東夷西戎南蠻北狄、之を蕃といふ。）○散樂（俗樂。北齊高緯の世、魚龍・山車等の戲があつて之を散樂といつた。後周の宇文贇は之を召集したが、隋の文帝はその正聲でないのを惡んで之を去らした。然るに煬帝は又之を徵したので天下の散樂が洛陽に集つた。其の幷戲は奇怪異端で百餘種もあつたといふ。）○絲竹（絲は弦で琴瑟の類、竹は管で笛簫の類。）○百戲（即ち散樂。芝居の類。その種類多きが故にいふ。）

帝擊高麗

○徵高麗王入朝。不至。大業七年、帝自將擊高麗、徵天下兵會涿郡。勅河南・淮南・江南、造戎車五萬乘、供載衣甲等、發河南・河北民夫供軍須。江淮以南民夫、船運黎陽及洛口諸倉米、舳艫千里、往還常數十萬人。晝夜不

天下騷動

絶。死者相枕。天下騷動、百姓窮困、始相聚爲盜。○漳南、竇建德、兵起。

【直譯】高麗王を徵して入朝せしむ。至らず。大業七年、帝自ら將として高麗を撃ち、天下の兵を徵して涿郡に會せしむ。河南・淮南・江南に勅して、戎車五萬乘を造らしめて、衣甲等を供載し、河南・河北の民夫を發して軍須に供す。江淮以南の民夫には船をもて黎陽及び洛口諸倉の米を運ばしむ。舳艫千里、往還するもの常に數十萬人。晝夜絶えず。死する者相枕す。天下騷動し、百姓窮困し、始めて相聚りて盜を爲せり。○漳南の竇建德の兵起る。

【意譯】（煬帝は秦の始皇、漢の武帝の外征の功を凌がうといふ野心から）高麗王を召して入朝せしめようとしたが應じないので、大業七年、帝自ら大將となつて高麗を征伐することとなり、天下の兵を徵集して涿郡に會合せしめた。また河南・淮南・江南地方に命じて兵車五萬輛を造らしめて、衣服甲冑等を運搬する用に供し、河南・河北の人足を徵發して軍中の入用に當がつた。それから江淮以南の人夫は（船に慣れてゐる故）船で黎陽（河南省內）及び洛口の米倉の米を（帝の駐在する涿郡方面に）運搬させた。その舟は舳と艫とが相連なること千里にも及び、往來する者がいつでも數十萬人もあつて、晝も

再征高麗

楊玄感反

帝巡遊

夜も絶えなかつた。（それ故勞苦に疲れたり病氣に罹つたりして）死ぬものが枕を並べてゐる有樣。それで天下は騷がしくなり、人民は甚しく貧乏し、相聚つて盜賊をやりはじめた。○（その先がけとして）漳南（山東省内）の竇建德の兵が起つた。

語釋　淮南（郡の名、今の安徽省鳳陽府。）○江南（揚子江の南の地方。）○供藏（積み藏せる用に供すること。）○供軍須（軍中須モチふる所を供給すると云ふ意味で軍中の入用に使役すること。）○舳艫千里（舳は船の後、艫は船の前。ともとへさきが相銜んで千里も續くこと。我國では反對に舳をヘサキ、艫をトモと訓じてゐる。）

○帝所徵四方兵、皆集涿郡一百一十三萬。餽運者倍之。首尾亘千餘里。帝至遼東攻城、不克、諸軍大敗而還。明年再徵兵、自將擊之○楚公楊玄感、見朝政日紊、潛謀作亂。至是督運黎陽、遂反。帝引軍還、遣將擊之。玄感自洛陽引兵趨潼關。兵敗走死。帝又如涿郡、伐高麗。高麗遣使請降。帝還長安。已而如洛陽、如汾陽、如江都、巡遊仍無虛歲。

通釋　帝徵す所の四方の兵、皆涿郡に集るなり。一百一十三萬なり。餽運する者之に倍す。首尾千餘里

に亙る。帝遼東に至り、城を攻めて克たず、諸軍大に敗れて還る。明年再び兵を徴し、自ら將として之を撃つ。○楚公楊玄感、朝政の日に紊るるを見て潜に亂を作さんことを謀る。是に至りて黎陽に督運して遂に反す。帝、軍を引きて還り、將を遣はして之を撃たしむ。玄感、洛陽より兵を引きて潼關に趨り、兵敗れて走り死す。帝又涿郡に如き、高麗を伐つ。高麗使を遣して降を請ふ。帝、長安に還る。已にして洛陽に如き、汾陽に如き、江都に如き、巡遊仍ほ虚歳無し。

【通釋】帝の召集した天下の兵は皆涿郡に集つたが、其の數は實に百十三萬で、兵糧運搬者は其のまた二倍もあり、先頭から後尾まで千餘里も續いた。帝は(之を率ゐて)遼東に至り(盛京省遼陽附近の)城を攻めたが拔くこと出來ず、諸軍大敗して引き上げた。翌年再び兵を徴發して、自ら大將となつて之を撃つた。○楚公の楊玄感といふ者が隋の政の日に亂れて行くのを見て、內々謀叛を起さうと企てゐたが、今度黎陽へ兵糧を運搬する監督となつたので(之を利用して)遂に反いた。よつて帝は遼東より兵を引いて還り、將を遣つて之を撃たせた。玄感は(之れに敵することが出來ないで)洛陽より兵を率ゐて潼關に趨つたが、軍が敗れて逃げ走つて死んだ。そこで帝は又涿郡に行つて高麗軍を討つたところ、高麗王の元は使を遣して降參を願つたので、(之を許して)、長安に凱旋した。それから間

もなく、或は洛陽に行き、或は汾陽に行き、或は江都に行くなど、帝の遊行はやはり一年として休むことがなかつた。

語釋　餽運（餽は食糧を運ぶこと）　督運（兵糧の運搬を監督すること）

李密兵起　桃李子　建牙統所部

○蒲山公李密兵起。密少有才略。志氣雄遠、輕財好士。嘗乘黃牛、以漢書掛牛角讀之。楚公楊素遇而奇之。由是與素子玄感游。初從玄感起兵、玄感敗、密變姓名亡匿。時人皆云、楊氏將滅、李氏將興。又有民謠。歌曰、桃李子、皇后走楊州、宛轉花園裏。勿浪語、誰道許。謂桃李子者、逃亡李氏子也。莫浪語、誰道許者、密也。密遂與群盜翟讓等起攻滎陽下之、建牙統所部西行、說下諸城、大獲。

通釋　蒲山公李密の兵起る。密、少より才略あり。志氣雄遠にして、財を輕んじ士を好む。嘗て黃

牛に乘じ、漢書を以て牛の角に掛けて之を讀む。楚公楊素遇ひて之を奇とす。是に由りて素の子玄感と游ぶ。初め玄感に從ひて兵を起しゝが、玄感敗れしかば、密、姓名を變じて亡げ匿る。時の人、皆云ふ、「楊子將に滅せんとす。李氏將に興らんとす」と。又民謠あり。歌ひて曰く、「桃李子あり。皇后楊州に走り、花園の裏に宛轉せん。浪に語る勿れ、誰か許と道ふ」と。桃李子ありと謂ふは、逃亡の李氏が子なり、浪に語るなかれ、誰か許と道ふとは、密にするなり。密遂に群盜翟讓等と起つて、滎陽を攻めて之を下し、牙を建て所部を統べて西行し、説きて諸城を下し大に獲たり。

【通解】蒲山公の李密の兵が起つた。密は年の少い時から才智謀略があり、氣象は雄壯遠大で、金錢を輕んじ賢士人と交るを好んだ。ある時黃牛に乘り、漢書を角の先に括り付けて讀んでゐた。楚公の楊素が之に出遇つて珍しい人と思つて（話しかけたのが緣になつて）、密は楊素の子の玄感と交際した。李密は初め楊玄感に從つて兵を起したが、玄感が敗死した故、姓名を變じて逃げ匿れた。時の人は皆「楊氏は將に滅びようとしてゐる、李氏は將に興らうとしてゐる」と噂を立てた。又流行歌があつて、「桃李子あり。皇后楊州に走り、花園の裏に宛轉せん」云々」と歌つた。その桃李子ありとは、（桃と逃と音相通じて逃亡した李氏の子が居るといふ隱し語（皇后は天子の事。天子が楊州に走つて花園の中

で宛轉するであらうといふのは、天子が南方に在つて流連して還るの日無く、李密が潛かに亂を企てゝゐるのも知らず、日夜花園の中で遊び樂んでゐるであらうといふことの隱語）。浪に口外してはならぬ、誰がさうだと言ふのであるかとは、秘密にせよといふ隱語である。さて密は遂に流賊の一類の翟讓等と軍を起し、滎陽（河南省內）を攻めて之を下し、大將の旗を建て、各部隊を統べ率ゐて西に進み、諸城を說き下して、大に分捕した。

語釋　蒲山（縣の名であらう。何處に在るか分つてゐない。嘉興府平湖縣の東南三十里の處に蒲山が有つて海邊に瀕してゐると云ふことだけは知れてゐるが、この蒲山は果して之を謂ふのかどうか分明でない。）○皇后（皇も后も君で天子のことである。）○揚州（隋の離宮の有る所を指す。）○宛轉花園裏（宛轉とは遊宴流連の義。花園裏とは花木泉石の有る立派な園の中の意。隋帝の天下の事を忘れ、亂の起ることにも氣附かず、日夜花園の中で遊樂に耽つてゐることを謂つたのである。或は云ふ、宛轉は流轉と同義で、天子が揚州に在つて還るの日無く、やがて溝壑に轉蒸するであらうの意であると。何れにしても李密の事を讖に因つて隋の滅亡することを婉曲に暗示した隱語である。花園裏の「裏」と桃李子の「子」と與に韻脚を成してゐる。）○道許（道許は「言ふ」で、「道許」は「言ふ」の意である。一說に「許」は助辭。「語」と共に韻脚である。）○建牙（大將軍の旗を建てること。牙は象牙、旗竿の象牙で飾られた旗を牙旗と云ふ。）

○鄱陽賊帥林士弘、稱楚帝、據江南。○杜伏威據歷陽。○竇建德稱長樂王。○馬邑校尉劉武周、朔方郞將梁師都、各據郡起兵。○李密據興洛倉、略取河南諸郡、稱魏公。○突厥立劉武周、爲定陽可汗、取樓煩・定襄・雁門、

梁師都稱帝
薛擧稱西秦覇王
蕭銑稱梁王
李淵起兵

諸郡。○梁師都取雕陰・弘化・延安等郡、自稱梁帝。○金城校尉薛擧、起兵隴西、自稱西秦覇王。○武威司馬李軌、起兵河西、自稱涼王。○薛擧自稱秦帝、徙據天水。○蕭銑起兵巴陵、自稱梁王。○唐公李淵起兵太原、克諸郡、入長安。時隋大業十二年。帝在江都。淵遙尊爲太上皇、而立代王。是爲恭皇帝。

通解 鄱陽の賊帥林士弘、楚帝と稱して江南に據る。○杜伏威、歴陽に據る。○竇建德、長樂王と稱す。○馬邑の校尉劉武周、朔方の郎將梁師都、各郡に據りて兵を起す。○李密、興洛倉に據りて河南の諸郡を略取し、魏公と稱す。○突厥、劉武周を立てて定陽可汗と爲し、樓煩・定襄・雁門の諸郡を取る。○梁師都、雕陰・弘化・延安等の郡を取り、自ら梁帝と稱す。○金城の校尉薛擧、兵を隴西に起し、自ら西秦の覇王と稱す。○武威の司馬李軌、兵を河西に起し、自ら涼王と稱す。○薛擧自ら秦帝と稱し、徙りて天水に據る。○蕭銑、兵を巴陵に起し、自ら梁王と稱す。○唐公李淵、兵を太

原に起し、諸郡に克ちて長安に入る。時に隋の大業十二年なり、帝は江都に在り。淵遙に尊びて太上皇と爲し、代王を立つ。是を恭皇帝と爲す。

〔通釋〕鄱陽（江西省内）の賊の棟梁の林士弘が楚帝と稱して江南にたて籠つた。○杜伏威は歴陽（安徽省内）に據つた。○（先に兵を起した）竇建德は長樂王と稱した。○馬邑（山西省内）の校尉の劉武周や朔方（陝西省内）の鷹將の梁師都といふ者が各郡によつて謀叛した。○李密は興洛倉を手に收め、之に據つて河南の諸郡を切り取り、魏公と稱した。○突厥は劉武周を立てて定陽の酋長とし樓煩（山西省）定襄（山西省）雁門（山西省）の諸縣を取つた。○また梁師都は雕陰（陝西省）弘化（甘肅省）延安（陝西省）等の郡を取り、自ら梁帝と稱した。○金城（今の甘肅蘭谷府皐蘭縣）の校尉である薛擧が兵を隴西に擧げ、自分で西秦の霸王と稱した。○武威（甘肅省内）の司馬である李軌は兵を河西に起して凉王と稱した。○薛擧は自分で秦帝と稱し、天水（甘肅省内）に徙つて其處にたてこもつた。○ついで蕭銑といふ者が軍を巴陵（湖南省内）に起して自分で梁王と號した。○（かうした時）唐公の李淵は兵を太原（山西省内）に起し、諸郡に克つて長安に入つた。時は大業十二年のことである。煬帝はこの時江都に居つたが、淵は遠くより之を尊びて太上皇とし、その孫の代王を立てた。是が（隋

恭皇帝

李淵封唐王

蕭銑稱帝

隋禪于唐

最後の天子）恭皇帝である。

【語釋】遜尊（當時李淵は長安に居り煬帝は江都に居た。それで遙かに尊ぶと云つたのである。）

恭皇帝、名侑、煬帝之孫也。年十三、爲李淵所立。改大業十三年、爲義寧。淵爲大丞相、封唐王。煬帝在江都、淫虐日甚、酒巵不離口。見中原已亂、無心北歸。從駕多關中人、思歸。遂謀叛、以許公宇文化及爲主、夜引兵入宮、縊殺煬帝。宗室無少長皆死。惟存秦王浩。立之、而自爲大丞相、擁衆而西。○梁、蕭銑稱帝於江陵。○隋帝侑、卽位半年、禪于唐。隋自高祖至是三世。凡三十七年而亡。

【通釋】恭皇帝名は侑。煬帝の孫なり。年十三にして李淵の立つる所と爲る。大業十三年を改めて義寧と爲す。淵、大丞相となり、唐王に封ぜらる。煬帝、江都に在りて、淫虐日に甚しく、酒巵口

を離さず。中原の已に亂れたるを見て北歸するに心なし。駕に從ふものは關中の人多く、歸を思ひて遂に謀叛し、許公の宇文化及を以て主と爲し、夜兵を引きて宮に入り、煬帝を縊殺す。宗室少長となく皆死せり。惟秦王浩を存して之を立て、自ら大丞相となり、衆を擁して西す。○梁の蕭銑、帝を江陵に稱す。○隋帝侑、位に卽きて半年にして唐に禪る。隋、高祖より是に至るまで三世。凡て三十七年にして亡ぶ。

【通釋】恭皇帝は名を侑といひ、煬帝の孫である。十三歲で李淵の爲に立てられ、大業十三年を改めて義寧元年とした。李淵は大丞相となり、唐王に封ぜられた。煬帝は江都の離宮に居て、酒色に溺れ下々を苦めることが日々に甚しく、酒盃は寸時も口を離さず、飲み續けた。その上中原が既に亂れたのを見て、北の方長安に歸る心がない。然るに帝の駕に從つて江都に來て居るものには關中の人が多く、此等の人々は望鄕の念抑へがたく遂に謀叛して、許公の宇文化及を以て首領とし、夜、兵を率ゐて宮殿に攻め入り、煬帝を縊り殺した。その際皇族は年寄も若きも皆殺された。惟秦王の浩ばかりを殘して之を帝とし、化及は自分で大丞相となり、兵を引きつれて西の方長安に向つた。○梁の蕭銑が江陵で帝と號した。○隋帝侑は位に卽いてから半年で位を唐の李淵に禪つた。隋は高祖からこ

れまで三世、すべて三十七年で亡んだのである。

【語釋】淫虐（淫亂暴虐の意。）〇宇文化及（宇文は姓、化及は名。）〇秦王浩（煬帝の弟、重從の子）

【餘談】隋の一時は短くして其の盛なりしこと秦に似て居り、秦の次の漢の盛であつたやうに隋の次の唐が亦盛であつた。

隋と秦と、唐と漢、又それに似て居る我國史上の史實を比較すれば、時の推移は、次のやうである。

春秋、戰國——秦——漢
五胡十六國、南北朝——隋——唐

秦の始皇——漢の高祖　漢四〇〇年代
隋の煬帝——唐の太宗　唐三〇〇年代
豐太閤——德川家康　德川氏二七〇年

此の比較類推の意味は、大體明瞭であらうと思ふ。なほ隋の時、我國の小野妹子が支那に使し、日支國交の初まつたことは國史上明なる事である。

唐は國を有つこと約三百年(推古天皇より醍醐天皇に至るまでの御代の間＝西紀六一八―九〇七年)、漢代とゝもに漢民族の建設したる世界的大帝國にして、支那歴代中最も盛なるものゝ一なれば、漢といふ名とゝもに、支那古今の總稱となり、唐土唐人の名稱は、漢土漢人の名とゝもに行はれてゐる。

唐といふ名稱が如何に廣く我國に行はれてゐるかは、今一たび國語の辭典を檢閲すれば、唐の名を有する名辭の多きを見ても知ることが出來よう。

唐網、唐音、唐樂、唐辛、唐桐、唐棧、唐人豆(南京豆又は落花生のこと)、唐船、唐芋、唐筆、唐物、唐墨、唐本、唐饅頭、唐箕、唐草、唐子、唐破風、唐松、唐物、唐桃、唐様、唐畫(其他之を省す)

十八史略新釋　卷四(下)終

十八史略新釋 巻五

唐

高祖神堯皇帝

相表奇異

世民大志

唐高祖神堯皇帝、姓李氏。名淵。隴西成紀人也。西涼武昭王暠之後。祖虎仕西魏有功。封隴西公。父昞於周世封唐公。淵襲爵隋。煬帝以淵爲弘化留守。御衆寛簡。人多附之。煬帝以淵相表奇異、名應圖讖忌之。淵懼、縱酒納賂以自晦。天下盜起。以淵爲山西・河東撫慰大使。承制黜陟、討捕群盜。多捷。突厥寇邊。詔淵擊之。淵次子世民、聰明勇決、識量過人。見隋室方亂、陰有安天下之志。與晉陽宮監裴寂・晉陽令劉文靜相結。

[illegible] 唐の高祖神堯皇帝、姓は李氏。名は淵。隴西成紀の人なり。西涼の武昭王暠の後なり。祖の

虎、西魏に仕へて功有り。隴西公に封ぜらる。父の昞、周の世に於て唐公に封ぜらる。淵、爵を襲ふ。隋の煬帝、淵を以て弘化の留守と爲す。衆を御すること寛簡なり。人多く之に附く。煬帝、淵の相表奇異にして、名、圖讖に應ずるを以て之を忌む。淵懼れ、酒を縱にし賂を納れて以て自ら晦ます。天下盜起る。淵を以て山西・河東の撫慰大使と爲す。制を承けて黜陟し、群盜を討捕して多く捷つ。突厥、邊に寇す。淵に詔して之を撃たしむ。淵の次子世民、聰明勇決にして識量人に過ぐ。隋室の方に亂るゝを見て、陰に天下を安んずるの志あり。晉陽の宮監裴寂・晉陽の令劉文靜と相結ぶ。

【通釋】唐の高祖神堯皇帝は姓を李氏、名を淵といひ、隴西の成紀（今の甘肅省内）の生である。（その血統は）西涼の始祖、武昭王李暠の後裔である。淵の祖父の李虎は西魏に仕へ、功があつたので隴西公に封ぜられた。また淵の父の昞は北周の時代に唐公に封ぜられた。で淵は父の官位を襲いで唐公となつた。隋の煬帝は淵を弘化（今の甘肅省内）の留守としたが、淵は多くの人を率ゐるに寛大で勿體ぶらなかつたから、人が多く附き從つた。煬帝は淵の人相が普通の人に異つて居り、且、李淵といふ名が其の頃世間に言ひ觸らされた豫言にも當つてゐるので之を忌み惡んだ。それで淵の方でも用

心して、矢鱈に酒を飲み、（宮中の者に）賄賂を使つて（御前體を執り成して貰ひなどして）とかく自分の才能を隱してゐた。（この時、林士弘・杜伏威・竇建德等の）賊が天下を奪はうとして諸處に亂を起した。そこで隋の政府は（之を靜める爲に）淵を山西・河東の撫慰大使としたが、淵は勅命を承けて官吏の罷免や敍任を行ひ、群盜を討つたり捕へたりして、勝利を得ることが多かつた。又突厥が北方の國境に寇したので、淵に命じて之を征伐させた。淵の次男の世民は、心敏く明かで、勇氣決斷に富み、見識度量も人にすぐれてゐたが、この時、隋の天下が亂脈の頂上であるので、ひそかに天下を一統しようとの大志を懷き、晉陽（山西省內）の離宮監督の裴寂や晉陽の縣令の劉文靜と互に交りを結んで氣脈を通じてゐた。

【語釋】西涼（南北朝の頃、今の新疆省方面に興り、二十二年ほど經て亡んだ國。）（周　南北朝時代の北周。）（相表奇異（淵の人相の凡人と異なること、卽ち日の如き額の骨、龍の如き顏、體に三つの乳あることなどを云ふ。））○圖讖（未來記の豫言。當元當と云ふ人が北周の天和年間に詩讖を作つたが、其の詩の中に「深水沒二黃楊一」といふ句があつた。深水は卽ち淵で、楊は隋の姓である、李淵が隋を滅すといふ意味になる。又當時「李氏將レ興」と云ふ語もあつたが、是れも圖讖に合ふのである。）○黜陟（黜はシリゾケル、陟はノボスと訓じ、無能を斥け、功あるものを登用すること。）○宮監（離宮の監督。）

文靜謂二世民一曰、今主上南巡、群盜萬數。當二此之際一、有二眞主驅駕而用一レ之、取二

世民說淵興兵

天時人事

天下如反掌耳。太原百姓收拾可得十萬人。尊公所將兵復數萬。以此乘虛入關、號令天下、不過半年、帝業成矣。世民笑曰、君言正合我意。乃陰部署。而淵不知也。會淵兵拒突厥不利、恐獲罪。世民乘間說淵、順民心興義兵、轉禍爲福。淵大驚曰、汝安得爲此言。吾今執汝告縣官。世民徐曰、世民視天時人事如此。故敢發言。必執告、不敢辭死。

【通釋】文靜、世民に謂ひて曰く、「今主上南巡し、羣盜萬もて數ふ。此の際に當り、眞主有りて驅馭して之を用ひば、天下を取らんこと掌を反すが如きのみ。太原の百姓收拾せば十萬人を得可し。尊公の將たる所の兵復數萬あり。此を以て虛に乘じて關に入り、天下に號令せば、半年を過ぎずして帝業成らん」と。世民笑ひて曰く、「君が言正に我が意に合へり」と。乃ち陰に部署す。而して淵は知らざるなり。會々淵の兵、突厥を拒ぎて利あらず、罪を獲んことを恐る。世民、間に乘じて淵に說く、「民心に順ひ義兵を興さば禍を轉じて福となさむ」と。淵、大に驚いて曰く、「汝、安んぞ此の言を爲す

を得ん。吾、今、汝を執へて縣官に告げん」と。世民、徐に曰はく、「世民、天の時人の事を視るに此の如し。故に敢て言を發す。必ず執へて告ぐとも敢て死を辭せず」と。

通釋 (ある日)文靜が世民に對つて「今天子は南の方を巡幸して江都に駐つて居られ、京師の空虚なのに乘じて競ひ起つた群盜は萬を以て數へる程澤山あります。それでこの際、眞に天下の主たるべき大人物があつて、此の賊黨を驅りおさへて利用したならば、天下を取ることは掌を反すが如く極めて容易なことであります。今太原郡(淵の封ぜられた唐國)の民の中から兵士にならうとするものを取り纏めたならば十萬人は得られませう。現に御尊父の率ゐて居られる兵もまた數萬あります。是等の兵を以て(帝の南巡してゐる)空虚につけこんで關中に入つて、天下に號令したならば、半年を出でずして帝業は成就しませう」といふ。世民は笑つて、「いかにも君の言ふことは自分の心に一致してゐると」いつて、そこで內密に夫々手分して軍隊の割當をした。しかし父の淵はこんなことを一向知らなかつた。丁度そのころ淵の兵が突厥を禦いで戰に負けたので、その爲罪に行はれはせぬかと淵が心配してゐる場合であつたので、世民はこの機に乘じて淵に說き、「民心の向ふ所に順ひ、暴虐なる君を伐つ義兵を擧げられたならば、禍をふりかへて福にすることが出來ませう。(今が尤も好い機

愼勿レ出レ口
萬全策
化レ家爲レ國

倉でございます。)」とすゝめると、淵は大に驚いて、「お前はどうして、能くもそんな恐しい事を言ひ出すのだ。おれは早速お前を捕へて朝廷に告訴しよう。」といつた。(堅い決心を持つてゐる) 世民は(少しも動ぜず) 徐に「私が天運の向ふ所を察し、人間のする事の樣子を見まするのに、以上申し上げた通りでございますから、(思ひ切つて) お勸したまでゝす。もし是非私を執へて告發しようとされるならば、(御意のまゝになさいませ)。私は死罪に行はれても苦しくありません。」といつた。

語釋 驅駕(驅逐駕御。ひきまはす。) ○乘虛(隋の煬帝南巡し、下乘萬騎皆從ひ去つたその虛に乘ずること。) ○部署(部位職事を分つこと。それぞれてくばりする。) ○尊公(尊大人、御尊父。世民の父の淵をさす。) ○縣官(縣官或は天子の意。郡縣(天下)を官とする義で天子の意となる。●一說に人子を直指するを憚つて、郡縣の吏ね以て之を呼ぶと。)

淵曰、吾豈忍レ告。汝愼勿レ出レ口。明日復說曰、人皆傳李氏當レ應ニ圖讖一。故李金才無レ故族滅。大人能盡レ賊則功高不レ賞、身益危矣。惟昨日之言、可ニ以救一レ禍。此萬全策。願勿レ疑。淵歎曰、吾一夕思ニ汝言一、亦大有レ理。今日破レ家亡レ身亦由レ汝。化レ家爲レ國亦由レ汝矣。先レ是裴寂私以ニ晉陽宮人一侍レ淵。淵從レ寂飲。酒酣寂

曰、二郎陰養士馬欲舉大事。正爲寂以宮人侍公、恐事覺併誅耳。

【訓讀】淵曰く、「吾、豈告ぐるに忍びむや。汝、愼みて口より出すなかれ」と。明日、復說きて曰く、「人皆傳ふ、李氏當に圖讖に應ずべしと。故に、李金才は故なくして族滅せられぬ。大人能く賊を盡さば、則ち功高くして賞せられず。身益〻危からん。惟昨日の言、以て禍を救ふべし。これ萬全の策なり。願はくは疑ふ勿れ」と。淵、歎じて曰く、「吾一夕、汝の言を思ふに、亦大いに理あり。今日、家を破り身を亡すも、亦汝に由らん。家を化して國となすも、亦汝に由らん」と。是より先、裴寂、私に晉陽の宮人を以て淵に侍せしむ。淵、寂に從つて飮む。酒酣にして寂曰く、「二郎陰に士馬を養ひ、大事を擧げんと欲するは、正に寂が宮人を以て公に侍せしめ、事覺はれなば併せ誅せられんことを恐るゝが爲のみ」と。

【口譯】淵は之を聞いて「おれは實際にわが子をどうして告發することが出來よう。しかしお前も氣をつけて滅多なことは口外せぬがよいぞ。」といつた。翌日世民はまた淵に說いて、「世間の噂では皆『李氏は未來記の文句に適合してゐる。（必ず起るであらう）』といつて居ります。その噂の爲、李金才は

罪も無いのに一族三十餘人も殺されてゐます。それで父上が能く賊を撃ちつくされたならば、功は高くても賞せられず、却つて御身が忌まれて危くなるばかりでせう。それ故昨日申し上げた方法のみが禍を除き得るのであつて、これのみが身をも家をも安全にする上策だと存じます。どうぞお疑成さらぬやうに」と言つて（此の策を決行することを）勸めた。淵は之を聞き、嘆息して、「おれは一晩中お前のいつたことを考へて見たが、大に道理がある。今日我が家を破り我が身を亡ぼすも、我一家を變じて一國となし（一家の主たる我が一國の天子となる）のも、成敗ともにお前の所爲であるぞ」といつた。さて是れより以前に裴寂は晉陽の離宮に奉仕してゐる宮女を連れ出して内々で淵の左右に侍らして置いた。其の後ある日、淵は裴寂の方へ酒宴に招かれた。宴の眞つ最中、寂は淵に向つて「御二男の世民殿は内々兵士軍馬を養ひ謀叛を起さうとして居られる。それは何の爲かと云ふと、私が離宮の宮女を出してあなたに侍らしめたから、この事が露見すると、あなたも私も一緒に誅せられることになる。確かに此の事を心配されての爲と思ふ。」と言つた。（是れは裴寂等が旨く拵へて李淵をおどかして其の決心を促したのである。）

【語釋】李金才（郕公穆の子、大業十一年、未來記に適合する者と見誤られ煬帝の爲に族滅せられた。）○從レ寂（寂が家に赴いての意。）○二郎（次男のこと、世民を指す。）○正爲（正ニ寂ガ宮人ヲ以テ公ニ侍

（セシムルガ爲メニ云々と讀む說もあるが、こゝは文脈上、正爲の二字を下句全體にかけて讀むべきである。）

煬帝執レ詔

李淵起レ兵

指二野鳥一爲レ鸞一

會煬帝以淵不能禦寇、遣使者執詣江都。世民與寂等、復說曰、事已迫矣。宜早定計。且晉陽士馬精強、宮監蓄積巨萬。代王幼沖、關中豪傑並起。公若鼓行而西、撫而有之、如探囊中之物耳。淵乃召募起兵。遠近赴集。仍遣使借兵於突厥。世民引兵擊西河拔之、斬郡丞高德儒數之曰、汝指野鳥爲鸞、以欺人主、吾興義兵、正爲誅佞人耳。進兵取霍邑、克臨汾絳郡、下韓城、降馮翊。

【通釋】 會々煬帝、淵が寇を禦ぐこと能はざるを以て、使者を遣はし、執へて江都に詣らしむ。世民寂等と復說きて曰はく、「事已に迫る。宜しく早く計を定むべし。且晉陽の士馬は精強、宮監の蓄積は巨萬、代王幼沖にして、關中の豪傑並び起れり。公若し鼓行して西し、撫して之を有せば、囊中の物

を採るが如きのみ」と。淵乃ち召募して兵を起す。遠近赴き集まる。仍りて使を遣はして兵を突厥に借る。世民、兵を引きて西河を撃ちて之を拔き、郡丞高德儒を斬り、之を數めて曰く「汝野鳥を指して鸞と爲し以て人主を欺く。吾義兵を興すは、正に佞人を誅せんが爲のみ」と。兵を進めて霍邑を取り、臨汾・絳郡に克ち、韓城を下し馮翊を降す。

【通解】折柄、煬帝は淵が突厥を禦ぎ得ない罪を責めとがめて、使を遣し、淵を執へて江都に送らせようとした。そこで世民が寂等と再び淵に勸めて「もう事が切迫して參りました。(一刻も躊躇すべき場合ではない)。速かに兵を擧げる計略を極めて下さい。晉陽の兵士軍馬はすぐれて強く、離宮の倉に蓄へてある金錢は何百萬もあります。その上、隋の代王はまだ幼くて勢力が無く、關中の豪傑は竝び起つて我が儘勝手な振舞をしてゐます)。此の際父君が軍鼓を鳴らして兵を西に進め、此等の豪傑を驅使して之を味方にとり入れられるならば、それは嚢の中の物を探すが如く(何の苦勞も要らぬ極めてたやすいことであります)。何うして煬帝の使者に執へられて生恥をかくやうな馬鹿げた事が出來ませうぞ」といつた。そこで淵は遂に決心して兵を召し募つて軍を起した。すると遠くからも近くからも多くの兵が集つて來た。因つて更に突厥にも使を出して援兵を求めた。(突厥は背後の強敵であ

るから之れと親交を結んでおく爲である)。かくて世民は兵を率ゐて西河郡(山西省舊汾州の地)を撃つて之を拔き、郡の次官たる高德儒を執へ、その罪を責めて「汝は以前、野の鳥を指して鸞であるといつて君主を欺いた。(不都合千萬な者である)。我の此の度義兵を擧げたのは間違ひもなく汝の如きお上手者を誅せんが爲である。」といつて(その罪を明かにして之を斬つた)。それから兵を進めて霍邑(山西省內)を取り、臨汾・絳郡(山西省內)を攻め落し、尚進んで韓城(陝西省)を降し、馮翊(陝西省)を降した。

【語釋】代王(代王侑のこと。煬帝の孫で隋最後の帝である。)○鼓行(太鼓を撃つて軍威を盛にして進むこと。)○撫而有レ之(撫で懷けて之を收有すること。)○數レ之(數はセムと訓み、責めること、更に其の罪を數へたて、責める意。)○汝指二野鳥一爲レ鸞(鸞は神鳥、鳳凰の屬、形が雞に似て居て羽毛は赤色に五彩を交へ、聲は五音にかなふと言はれてゐる。一說には赤色の多いのを鳳といひ、青色の多いのを鸞といふと。隋の大業十二年二羽の孔雀が西苑から飛んで來て朝堂の前に降りた時、高德儒等は之を鸞であると僞り、聖世の瑞祥であると奏上し百官は之を慶賀した。煬帝は詔して德儒を擢んでゝ朝散大夫に拜した。)

關中悉降

淵留レ兵圍二河東一、自引レ兵西、遣二世子建成一守二潼關一。世民徇二渭北一。關中群盜悉降二於淵一。令二諸軍一圍二長安一克レ之、立二恭帝一。淵爲二大丞相唐王一、加二九錫一。尋受レ禪、立二子建成一爲二皇太子一、世民爲二秦王一、元吉爲二齊王一。○隋東都留守越王侗、煬帝

唐王稱帝

李密降　宇文化及　秦亡

之孫也。亦爲衆所立、稱帝於洛陽。○秦主薛擧卒。子仁杲立。○魏公李密、與隋兵戰、大敗降於唐。○宇文化及弑其所立主浩、自稱許帝。○涼王李軌稱帝。○唐秦王世民破秦。秦王薛仁杲降。送長安斬於市。○李密之將徐世勣據密舊境降唐、賜姓李。

【譯】淵、兵を留めて、河東を圍み、自ら兵を引きて西し、世子建成を遣はして潼關を守らしむ。世民、渭北を徇ふ。關中の群盜、悉く淵に降る。諸軍を合せて、長安を圍みて、之に克ち、恭帝を立て、淵、大丞相唐王となり、九錫を加ふ。尋いで禪を受け、子建成を立てて皇太子となし、世民を秦王となし、元吉を齊王となす。○隋の東都の留守越王侗は、煬帝の孫なり。亦衆の立つる所となり、帝を洛陽に稱す。○秦主薛擧卒す。子仁杲立つ。○魏公李密、隋の兵と戰ひ、大敗して唐に降る。○宇文化及、其の立つる所の主浩を弑して自ら許帝と稱す。○涼王李軌、帝と稱す。○唐の秦王世民、秦を破る。秦王薛仁杲、降る。長安に送りて、市に斬る。○李密の將徐世勣、密の舊境に據りて唐に降り、姓を李と賜ふ。

【通釋】淵はまた兵を留めて河東郡(今の山西省內)を圍ませ、自分は兵を率ゐて西に向ひ、長子の建成には潼關を守らしめ、世民には渭水の北を說き降さしめた。關中に據つて跋扈してゐた群盜はこの時皆淵に降參したので、淵は諸軍を合せて隋の首府長安を圍んで之に克つた。そこで淵は代王を帝位に卽け、自分は大丞相唐王と爲り、九錫を賜はり、續いて恭帝の禪を受けて帝位に卽き、建成を皇太子とし、世民を秦王に封じ、元吉を齊王とした。○(この時)隋の東都(卽ち洛陽)の留守で、煬帝の孫に當る侗は大勢の臣下に推されて洛陽に於て帝と稱した。(以下文意明瞭ゆゑ中略す)(先に降つた)李密の部將の徐世勣は李密が、(まだ唐に降らなかつた時に領有してゐた山東の)舊地に據つて唐に降つた。よつて之に李の姓を賜はつた。

【語釋】潼關(東方から關中に入る要害の關所、陝西關中道。) ○徇(その地を巡りて臣服せしめること。) ○渭北(渭水の北の地方。) ○元吉(李淵の第三子。)

○竇建德取河北諸州、自稱夏王。○李密叛唐。唐人獲而斬之。○夏主竇建德破宇文化及、誅之。○隋主侗立一年。王世充廢之、而自立爲鄭帝、尋弑侗。○唐遣將襲涼主李軌、執歸殺之。河西平。○沈法興稱梁王於毗陵。

世民破定陽

○李子通稱吳帝於江都。○杜伏威降唐。○唐秦王世民擊定陽將宋金剛破之。定陽可汗劉武周、及金剛、皆走死。○唐秦王世民督諸軍伐鄭。○吳主李子通襲梁。梁主沈法興走死。

通釋　竇建德、河北の諸州を取りて、自ら夏王と稱す。○李密、唐に叛く。唐人、獲へて之を斬る。○夏主竇建德、宇文化及を破りて、これを誅す。○隋主侗、立ちて一年。王世充、これを廢し、自立して鄭帝となり、尋いで侗を弑す。○唐、將を遣して、涼主李軌を襲ひ、執へ歸りて、これを殺す。河西平らぐ。○沈法興、梁王を毗陵に稱す。○李子通、吳帝を江都に稱す。○杜伏威、唐に降る。○唐の秦王世民、定陽の將宋金剛を擊ちて之を破る。定陽の可汗劉武周及び金剛、皆走り死す。○唐の秦王世民、諸軍を督して鄭を伐つ。○吳主李子通、梁を襲ふ。梁主沈法興、走り死す。

語釋　こゝは全文意味明瞭であるから通釋を省略する。

鄭夏亡

○夏主竇建德救鄭。唐秦王世民大破擒之。鄭主王世充降。世民至長安、

被黃金甲、二十五騎從其後。鐵騎萬匹、甲士三萬、獻俘太廟、斬建德於市、救世充、尋使人潛殺之。○竇建德故將劉黑闥、始起兵於漳南。○唐遣將李靖伐梁。梁主蕭銑降。送長安斬之。○杜伏威擊吳主李子通、執送長安。伏誅。○劉黑闥自稱漢東王。○楚主林士弘卒。其衆遂散。○漢東將執黑闥降唐。斬之。○唐淮南道行臺僕射輔公祏、反於丹陽。唐將擊斬之。

○夏主竇建德、鄭を救ふ。唐の秦王世民大に破りて之を擒にす。鄭主王世充降る。世民、長安に至るや、黃金の甲を被り、二十五騎を其の後に從ふ。鐵騎萬匹、甲士三萬、俘を太廟に獻じ、建德を市に斬り、世充を赦し、尋いで人をして潛に之を殺さしむ。○竇建德の故の將劉黑闥、始めて兵を漳南に起す。○唐、將李靖を遣して、梁を伐たしむ。梁主蕭銑、降る。長安に送りて之を斬る。○杜伏威、吳主李子通を擊ち、執へて長安に送る。誅に伏す。○劉黑闥自ら漢東王と稱す。○楚主林士弘卒す。其の衆遂に散ず。○漢東の將、黑闥を執へて、唐に降る。之を斬る。○唐の淮南道の行臺僕

突厥受盟
置州縣鄉學

射の輔公祏、丹陽に反す。唐の將撃ちて之を斬る。

通解 (世民が鄭を伐つた時)、夏主の竇建德は鄭を救つたので、世民は之と戰ひ、大に破つて建德を擒にした。鄭主の王世充は降參した。世民は長安の都に還つたが、身には黃金造の甲を被り、二十五人の將軍を從へ、鐵の鎧に身を固めた騎馬武者一萬、普通の甲冑の士三萬を率ゐる、(その行列堂々たるもので)俘を祖先の廟に獻じ、建德を市に曝し、世充はその罪を許したが、私に人をやつて之を殺さしめた。○竇建德の舊部下の將の劉黑闥が兵を漳南(山東省內)に起した。(以下、文意明瞭であるから省略する。なほ語釋を見られたい。)

語釋 甲(よろひ。)(一)鐵騎、(鐵のよろひで身を固めた騎馬武者。又鐵の如く强堅な騎兵の意にもいふ。)○行臺(尚書臺を外に立てたもの丶稱。行は行宮の行と同義、都にある臺省に對していふ。行臺は魏晉の頃からあつて後魏に及び、之を尚書大行臺といひ、別に官屬を置いた。隋では之を行省又は行臺省といつて、令、僕射各々一人を置いた。唐の初には又、行臺を置いたが、貞觀以後に至つて之を廢した。)

(一)慶州都督楊文幹反。遣秦王世民討平之。○突厥入寇。遣秦王世民禦之。遇於豳州。世民帥騎馳詣虜陣、告之曰、我秦王也。虜不敢戰、受盟而退。

(一)唐興七年、僭僞皆亡、天下既定。是歲初置州縣鄉學。帝親詣國子學、釋

奠于先聖先師。始定官制。頒新律令。定均田租庸調法。丁中之民、給田一頃。篤疾減十之六。寡妻妾減七。皆以十之二爲世業。八爲口分。毎丁歳入租粟二石。調隨土地所宜。綾絹絁布。

前略 慶州の都督楊文幹、反す。秦王世民を遣して、之を討平せしむ。○突厥、入寇す。秦王世民を遣して、之を禦がしむ。豳州に遇ふ。世民、騎を帥ゐて、馳せて虜陣に詣り、これに告げて曰はく、「我は秦王なり」と。虜、敢て戰はず。盟を受けて退く。○唐、興りてより七年、僭僞皆亡び、天下すでに定まる。この歳はじめて、帝、親ら國子學に詣りて、先聖先師を釋奠す。はじめて官制を定め、新律令を頒つ。均田租庸調の法を定め、丁中の民に田一頃を給し、篤疾は十の六を減じ、寡妻妾は七を減ず。皆十の二を以て世業と爲し、八を口分と爲し、丁毎に歳に租粟二石を入れしめ、調は土地の宜しき所に隨ひて、綾絹絁布とす。

通釋 慶州の都督の楊文幹が謀叛したので、秦王の世民を遣して之を討ち平げしめた。○突厥が入寇したので秦王世民をして之を禦がせた處、豳州で兩軍が出遇つた。すると世民は騎兵を從へ、馳せて

突厥の陣に至り、「我は秦王である。」と名乗つたので、突厥は(其の威勢に怖れをなして)押し切つて戰ふこと出來ず、和睦を誓つて退いた。(唐が隋に代つて帝と稱してから七年になるが、是れまで位を僭み僞つて帝・王と稱してゐた者は皆亡んで、天下は最早平定した。そこでこの歳武德七年に、(教學方面では)初めて州や縣や鄕に學校を設けて(天下の子弟を教育し)、帝は親しく(王侯の子弟を就學せしめる)國子學に臨んで、孔子顏子の神位の前に釋奠の禮を行つた。また(政治方面では)新に官吏の職制を定め、新法律を頒布した。(それから財政方面では、人民に田地を平均に分つ)均田の法や(田地の生産に課する稅の)租、(人口に課する稅の)庸、(戶數に課する稅の)調の法を定め、十六歳以上の民には田地一頃卽ち百畝を給與し、重病者には十分の六を減じて(四十畝を與へ)、夫を失つた妻や妾には十分の七を減じて(三十畝を給した)。そして皆十分の二卽ち二十畝を子孫に傳へる世業田とし、十分の八卽ち八十畝を各人の所得分とした。(右は田百畝を得る丁中について言つたので、篤疾、寡妻妾は世業田はやはり二十畝であるが、口分田は各〻其の給せられた分限から二十畝を引き去つた殘りを得るのである)。そして丁年の者には皆租として籾米二石を納入せしめ、調としてはその地方産出の狀況に從つて綾(二丈)絹(二丈)絁(二丈)布(五分の一を增した二丈四尺)などを納めさせることと

免役

民貲業分九等

造戶籍

した。

語釋 僭僞（僭し僞つて妄りに帝王と稱した者。）○國子學（大學。王侯の子弟を教育する學校。）○釋奠（釋も奠も置く義。幣帛牲牢を神位の前に置いて祭ること。古は一般の祭に釋奠の名稱を用ゐたが、宋から以後は孔子の祭にのみ用ゐることになつた。因みに我國で釋奠の禮を行つたのは、今より一千二百餘年前、文武天皇の大寶元年を以て、歷史に見えた最初とする。）○先聖先師（先聖は孔子、先師は顏回。）○律令（國家のおきての大綱を律といひ、條分したのを令といふ。）○均田（人民に田地を平均に分配する法。）○租庸調（租は田地の稅で穀を以てするもの。庸は傭に同じく、人口の稅で勞役に服するもの、調は手工品の稅で綾絹絁布を以てするもの。）○丁中之民（十六歲以上の者。丁は當に丁壯の時に當る者、二十歲をいふ。中は丁者と小者との中間に在る者、卽ち十六歲をいふ。）○一頃（唐制では五尺が一步。二百四十步が一畝。百畝が一頃で、一頃は我國の三町八反餘に當る。）○世業（世業とは之を子孫に傳へて世々其の業を守るを謂ふ。其の家に代々傳へて行く田地。代には太宗の諱を避けて永業と曰つた。）○口分（各戶の人別について給する田地。）○粟（穀、卽ちモミ。）

歲役二旬、不役則收其傭、日三尺。有事而加役者、旬有五日免其調、三旬租調倶免。水旱蟲霜、十損四以上免租、損六以上免調、損七以上課役倶免。民貲業分九等。百戶爲里、五里爲鄕、四家爲鄰、四鄰爲保、在城邑者爲坊、田野者爲村。食祿之家、無得與民爭利。工商雜類、無預士伍。男女始生爲黃、四歲爲小、十六爲中、二十爲丁、六十爲老。歲造計帳、三歲造戶籍。

【訓讀】歳役は二旬、役せざれば則ち其の傭を收むること日に三尺なり。事有りて役を加ふる者は、旬有五日なれば、其の調を免じ、三旬なれば租調俱に免ず。水旱蟲霜には、十に四以上を損ずれば租を免じ、六以上を損ずれば調を免じ、七以上を損ずれば課役俱に免ず。民の貲業を九等に分つ。百戶を里と爲し、五里を鄕と爲し、四家を鄰と爲し、四鄰を保と爲し、城邑に在る者を坊と爲し、田野は村と爲す。祿を食むの家は、民と利を爭ふを得ること無く、工商雜類は士伍に預かること無し。男女始めて生るるを黃と爲し、四歲を小と爲し、十六を中と爲し、二十を丁と爲し、六十を老と爲す。歲ごとに計帳を造り、三歲に戶籍を造る。

【口譯】また庸として歲每に二十日づゝ政府の公用に服役せしめ、もしその勞役に服さぬ時は傭賃として一日分を綾絹絁ならば三尺(布ならば更に五分の一を增す)の割合で代償を拂はせた。又事があつて臨時に勞役を餘計させた場合には、十五日であると其の調を免じ、三十日であると租も調も免じた。また大水や旱や蟲害霜害の爲、十分の四以上收穫の減じた時は租を免じ、十分の六以上を減じた時は調を免じ、七以上の時は租調の課も庸の役も共に免ずることとした。また民の(財產調をして)その資產を(上の上、上の中、上の下、中の上、中の中、中の下、下の上、下の中、下の下の)九等とし、(施政

の圓滑を計る爲には）民家百戸の單位を里とし、五里を郷とし、又四軒の家を隣とし、四隣を保とした。それらの部落が繁華な城下にあるのを坊（街）とし、田野の淋しいところにあるのを村とした。（社會の階級制度としては）官途について祿を食んで居るものは一般人民と利を爭ふ業務に從事出來ぬことゝし、工商その他雜業を營む者は士人の仲間に入ることを許さなかつた。なほ男も女も始めて生れたのを（髮が黄色なる故）黄と云ひ、四歳からを小人と云ひ、十六歳からを中と云ひ、二十歳になると丁と云ひ、六十歳になると（甲子一周して血氣が衰へる故）老と云つた。そして毎年計算帳を作製して（賦税課役の計算をなし）、三年毎に戸籍帳を造つて（戸數人口を調査することとした。）

語釋 貲業（貲はたから。財貨、貲業は財産、身代。）○雜類（雜業の）○黄（嬰兒の髮の黄色なる故に名づける。又雀の雛の嘴の黄色なのに比べて嬰兒と名づけたともいふ。）

餘說 唐の官制は、大體隋の制度に襲つて多少の損益をなしたもので、主として太宗時代に整備された。我國では大化の改新、大寶律令に於て範を唐制に取り、それが永い間、我が官制の基調をなしたのであるから、唐の官制は我國にも多大の影響を及ぼしたわけである。參考の爲に、唐代官制の大體を左に表示する。

三師
- 太師
- 太傅
- 太保

三公
- 太尉
- 司空
- 司徒

（以上、三師三公は最上の官ではあるが、政務には與らない。適當の人が無ければ之を闕いたのである。）

六省

三省
- 中書省（長官を令といふ。天子の命令を傳へ、詔勅を宣布す。）
- 尚書省（令。政務を統べ、更に審査した詔勅を施行する。）
  - 左僕射
    - 吏部（長官を尚書といふ。人才の進退、官吏の黜陟を行ふ。）
    - 戶部（尚書。百姓賦稅等の事。）
    - 禮部（尚書。禮儀の事を掌る。）
  - 右僕射
    - 兵部（尚書。軍旅、武官の進退。）
    - 刑部（尚書。刑罰の事を掌る。）
    - 工部（尚書。宮室、器用、水利を掌る。）
  - 六部
- 門下省（侍中。中書省の宣奉した詔勅の審査を掌る。）

（以上三省の長官を宰相といふ。後に他官を以て宰相たるものには、同中書門下三品、或は同中書門下平章事の稱を加へた。）

- 秘書省（長を監といふ、經籍圖書の事を掌る。）
- 殿中省（監。衣服車乘の事を掌る。）
- 內侍省（內侍。宮內に供奉し、制令の傳宣を掌る。）

一臺
- 御史臺（長を大夫といふ。彈劾、糾察の事を掌る。）

九寺

- 太常寺（禮樂宗廟の事）　光祿寺（酒禮膳羞の事）
- 衞尉寺（宮門屯衞兵の事）　宗正寺（天子親屬の事）
- 太僕寺（廐牧輿馬の事）　大理寺（刑獄の事）
- 鴻臚寺（賓客禮儀の事）　司農寺（園囿米穀の事）
- 大府寺（財貨藏市の事）　（九寺の長官を卿といふ）

五監

- 國子監（祭酒。學校教育）　軍器監（監。弓箭甲冑の事）
- 少府監（監。百工巧伎の事）　都水監（使者。山澤津梁の事）
- 將作監（大匠。土木工匠の事）

今試みに我國の大寶の官制を示すと、次の如くである。

二官

- 神祇官
- 左大臣
  - 左大中少辨
    - 八省（一）
      - 中務省
      - 式部省
      - 治部省
      - 民部省

(一太政官、太政大臣——大納言、——少納言——大少外記——左右大少史
　　　　　　右大臣　　　　　　右大中少辨
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　兵部省
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　刑部省
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大藏省　八省(二)
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宮內省

右の如く我と彼とを比較すれば、我が官制が唐制に據つたことは明かであるが、併し徒だ之を其儘に模倣したのではなく、我國古來の風俗習慣を斟酌して制定されたものであることを知らねばならぬ。即ち尙書省に擬して太政官を置き、以て八省を統べしめ、中書省に相當しては中務省を置いたが、降して八省の一に列し、又門下省は、別に之を置かず、その長官侍中の任を、太政官の次官たる大納言となした。而して唐制では六部よりも卑い太常寺で宗廟禮儀の事を掌らしめたが、我國では之を神祇官として太政官の上に置かれたのは、敬神の風篤き我が特色を如實に現はしたものである。

○初唐之起晉陽皆世民之謀。帝欲以世民爲儲嗣。世民固辭而止。太子

建成喜酒色遊畋、齊王元吉多過失、而世民功名日盛。建成乃與元吉協謀傾世民、曲意諂事諸妃嬪。世民獨不事之。由是左右皆譽建成・元吉、而短世民。○武德九年六月、太白經天、見秦分。建成・元吉欲殺世民。秦府僚屬勸王行周公之事。力請乃決。

[illegible] はじめ、唐の晉陽に起りしは、皆、世民の謀なり。帝、世民を以て、儲嗣となさむと欲す。世民、固辭して止む。太子建成は酒色遊畋を喜み、齊王元吉は過失多し。而して、世民は功名日に盛なり。建成、乃ち元吉と謀を協せて、世民を傾けんとし、意を曲げて、諸妃嬪に諂事す。世民、ひとり、これを事とせず。これに由つて、左右、皆建成・元吉を譽めて、世民を短る。○武德九年六月、太白、天に經り、秦の分に見る。建成・元吉、世民を殺さんと欲す。秦府の僚屬、王に勸めて周公の事を行はしめんとし、力め請ひて乃ち決す。

[illegible] 高祖が、昔晉陽より兵を擧げて起つたのは（前に記載してある如く）皆二男世民の謀策によるのであるから、帝は世民を太子に立てようとしたが、世民が固く辭退したので沙汰止となり、（長子

の建成が立つたのである)。然るに建成は酒宴を好み、女色に溺れ、遊行田獵に耽るといふ(やうな人物)、又三子の齊王である元吉は過失ばかり多い(やくざ者)であるのに、ひとり世民の功名は日々に盛になつた。それで建成と元吉とが(之を嫉んで)、世民を傾け倒さうと相談し、帝の宮女に心にもないお世辭をふりまいて御機嫌をとつた。しかし世民だけは少しも左樣な卑しい振舞をしなかつたので、帝のお側の者は皆建成元吉を譽めて世民を謗つた。○武德九年六月に太白星が日中太陽の下を經過して秦の分野にあらはれた。(それでこれは秦王が天下をとる前兆であるとか、秦王に禍があるのだとか樣々の浮説が起つた)。この時建成元吉は世民を殺さうと企てた。秦王の役所の官吏(房玄齡・杜如晦など)は世民に、周公旦の事(周公が兄の管叔、弟の蔡叔を誅戮して周室を安んじ其の身を全うした故事)を説いて(建成元吉の二人を殺すことを)勸めたが、(世民は中々承知しなかつた)。しかし極力願つてやうやく決定した。

語釋　儲闈(儲宮、儲君、儲闈等と同じく、太子のこと。)　○遊畋(遊行田獵の意。畋は狩りすること。)　○曲意(心にもないことをする。)　○太白(俗に明けの明星宵の明星で、金星である。)　○秦府(秦王の府中、府中は役所。)　○經天(太白は晝に東に出て東に沒し、夕に西に出て西に沒するのが普通であるが、時としては日中南方に現はれることがある。昔は之を太白經天と云つて大變とした。)　○秦分(秦國の分野。秦の土地の上。)

世民殺兄弟

世民爲太子

傳位太子

於是密奏、兄弟專欲殺臣、似爲世充建德報讐。明日帥兵伏玄武門。建成元吉入、覺有變欲還。世民追射建成殺之。尉遲敬德射殺元吉。遂立世民爲太子、軍國事悉委太子處決、然後聞奏。初東宮官屬魏徵、屢勸建成除世民。及是世民召徵、責以離間兄弟。徵擧止自若對不屈。世民禮之。王珪亦嘗爲建成謀。皆以爲諫議大夫。帝自稱爲太上皇帝、詔傳位於太子。是爲太宗文武皇帝。

【訓讀】是に於て密に奏すらく、「兄弟專ら臣を殺さんと欲し、世充・建德の爲に讐を報ずるに似たり」と。明日兵を帥ゐて玄武門に伏す。建成・元吉入り、變有るを覺りて還らんと欲す。世民追ひて建成を射て之を殺す。尉遲敬德、射て元吉を殺す。遂に世民を立てゝ太子と爲し、軍國の事悉く太子に委ねて處決せしめ、然る後聞奏せしむ。初め東宮の官屬魏徵、屢〻建成に勸めて世民を除かんとす。是に及びて世民、徵を召し、責むるに兄弟を離間するを以てす。徵、擧止自若として對へて屈せず。

世民之を禮す。王珪も亦嘗て建成の爲に謀る。皆以て諫議大夫と爲す。帝自ら稱して太上皇帝と爲り、詔して位を太子に傳ふ。是を太宗文武皇帝と爲す。

【通釋】そこで世民は密に上奏して「兄の建成と弟の元吉とが一途に私を殺さうと覘つてゐます。これは私が先年征伐して亡しました王世充や竇建德の爲に讐を報いるかのやうに思はれます」と訴へた。(帝は大いに驚き、明朝は早速建成元吉の兩人を呼び出して吟味しようと決定された。)そこで世民は翌日兵を引き連れて玄武門に隱れ(二人を要撃する手筈をした)。建成・元吉は(それとは知らずに)門に入つて來たが、變事があることと覺つて、引き返さうとしたが、その時すでに遲く、世民は追ひかけて建成を射殺した。續いて尉遲敬德といふものが元吉を射て殺した。それで帝は世民を立てて太子とし、軍事國政の事一切太子に委せて處分させ、帝へはその後で事の由を奏せしめた。さて以前に東宮附の役人であつた魏徵はたび／＼建成にすすめて世民を除かうとしたが、この時になつて世民は徵を召し、彼が兄弟間を隔離して仲違をするやう勸めた罪を責めた。しかし徵は少しも騷がず起居振舞がいかにも平氣で(一々答辯して)屈服しなかつたので、世民は感心して、禮を以て之を待遇した。王珪も以前に建成の爲に(世民を除くこと)を策したものであるが、世民は皆(許して)諫議大夫

太宗文武皇帝

龍鳳之姿天日之表

天策上將

文學館學士

の官（天子の過を諫め國事の得失を論議する官）に任じた。帝は自分で太上皇帝と稱し、詔して位を太子に傳へた。かうして立つたのが太宗文武皇帝である。

【語釋】軍國事（軍事國事）○處決（分別決斷。）○離間兄弟（兄弟の間を割いて仲違をさせる。）○擧止自若（起居動作の常に變りなく從容としてゐること。）

太宗文武皇帝、名世民。幼日有書生見之曰、龍鳳之姿、天日之表、其年幾冠、必能濟世安民。書生去。高祖使人追之。不見。乃採其語爲名。年十八擧義兵。李密降唐、初見高祖、色尚傲。及見秦王、不敢仰視。退而歎曰、眞英主也。高祖、以秦王功高、特置天策上將。位在王公上。以秦王爲之。開府置屬、開館以延文學之士。杜如晦・房玄齡・虞世南・褚亮・姚志廉・李玄道・蔡允恭・薛元敬・顏相時・蘇勗・于志寧・蘇世長・薛收・李守素・陸德明・孔穎達・蓋文達・許敬宗爲文學館學士。分爲三番、更日直宿。

【書下し】太宗文武皇帝、名は世民。幼なりし日、書生あり、これを見て曰く、「龍鳳の姿、天日の表あり、その年、冠するに幾くして必ず能く世を濟ひ、民を安んぜん」と。書生去る。高祖、人をしてこれを追はしむ。見えず。すなはち其の語を採りて、名となす。年十八にして、義兵を擧ぐ。李密、朝に詣り、はじめて高祖に見えて、色、なほ傲れり。秦王に見ゆるに及びて、敢て仰ぎ視ず。退きて、歎じて曰く「眞の英主なり」と。高祖、秦王の功高きを以て、特に天策上將を置く。位、王公の上に在り。秦王を以て之となす。府を開きて屬を置き、館を開きて以て文學の士を延く。杜如晦・房玄齡・虞世南・褚亮・姚思廉・李玄道・蔡允恭・薛元敬・顔相時・蘇勗・于志寧・蘇世長・薛收・李守素・陸德明・孔穎達・蓋文達・許敬宗を文學館の學士となし、分ちて三番となし、日を更へて直宿せしむ。

【口譯】太宗皇帝は名を世民といふ。まだ幼少の頃、一人の書生が之を見て、「龍鳳の如き氣高い姿、太陽の如き貴い相をして居る。(是は天子となるべき人相である)。元服加冠の年頃に近くなつたら、乾度世を濟ひ民を安んずるやうになるだらう。」といつて立ち去つた。高祖が(之を聞き)人に此の書生を追つかけさせたが、何處へ行つたかとう〱見えなかつた。そこで「濟世安民」の語の中から「世民」の二字をとつて其の子に名づけた。(この豫言が中つて、やがて)世民は年が十八になると、(父を勸め

登瀛學士

如晦王佐之才

て）義兵を擧げた。（其の後）李密が唐に降參した時、最初高祖に見えたが、その時はまだ李密の都に傲慢の氣分が見えたが、秦王世民に見えたときには、（その威嚴にうたれて）仰いで顏を見ることが出來なかつた。そして退いてから、「秦王こそは如何にも勝れた眞成の君主である。」といつて讃嘆した。高祖は秦王の功勞が高いので、特に天策上將といふ官を設けて、其の位を王公の上に置き、秦王を此の官に任じ、天策府を開いて屬官を置いた。又學問所を開いて文學の士を招き集めた。杜如晦・房玄齡・虞世南・褚亮・姚思廉・李玄道・蔡允恭・薛元敬・顏相時・蘇勖・于志寧・蘇世長・薛收・李守素・陸德明・孔穎達・蓋文達・許敬宗を此の文學館の學士とし、六人づつ三組に分け、順に日を更へて宿直せしめた。

【語釋】龍鳳之姿天日之表（龍や鳳凰の如き貴い目出度い姿。太陽の如き嚴かな貴い相で、天子の人相をいふ。）　○冠（元服。加冠。男子の二十才で冠を著ける儀式。元服とは元は頭首、冠を頭首に著ける故にいふ。）

王暇日輙至館中、討論文籍、或至夜分。使閻立本圖像、褚亮爲贊。號十八學士。士大夫得預其選者、時人謂之登瀛洲。時府僚多補外、如晦亦出。玄齡曰、餘人不足惜。如晦王佐才。大王欲經營四方、非如晦不可。王即奏留

千里隔レ面

放二宮女一

之、使參二謀帷幄一。剖決如レ流。玄齡毎入奏レ事、高祖曰、玄齡爲二吾兒一謀レ事、雖レ隔二千里一、如二對面語一。秦王功蓋二天下一、身幾危。賴二玄齡如晦一決レ策。至レ是卽位。首放二宮女三千餘人一。

【[illegible]】王、暇日には輒ち館中に至りて、文籍を討論し、或は夜分に至る。閻立本をして像を圖せしめ、褚亮をして贊を作らしむ。十八學士と號す。士大夫の其の選に預かることを得る者をば、時の人之を登瀛洲と謂ふ。時に府僚多くは外に補せられ、如晦も亦出づ。玄齡曰く、「餘人は惜むに足らず、如晦は王佐の才なり。大王、四方を經營せんと欲せば、如晦に非ざれば不可なり」と。王卽ち奏して之を留め、帷幄に參謀せしむ。剖決流るるが如し。玄齡入りて事を奏する毎に、高祖曰く、「玄齡吾が兒の爲に事を謀る。千里を隔つと雖も、面に對ひて語るが如し」と。秦王、功天下を蓋ひ、身殆ど危し。玄齡・如晦に賴りて策を決す。是に至りて卽位す。首として宮女三千餘人を放つ。

【[illegible]】秦王は暇ある日には毎度學館に來て互に文學を議論し、時には夜半になることもあつた。またある時閻立本にいひ付けて、この十八人の肖像畫をかかせ、褚亮には其の圖に贊を書かせ、之を十

八學士といつた。時の人々は士大夫にしてこの學士の選に入る者を登瀛洲といつて羨み譽めた。（此の頃は建成元吉の二人が世民を除かうと頻りに畫策してゐる時で）秦王の（天策府の）屬官は地方官に任ぜられて外に出される者が多かつた。杜如晦の如きも亦其一人であつたので、房玄齡が王に「他の人々の地方に出るのは惜しいとは存じません。（ただ惜しいのは如晦で）彼は眞に王者を輔佐する才を持つて居ります。大王が天下を取つて統治しようと望まれるならば（輔佐役には）如晦でなくてはなりません。」といつたので、秦王は帝に奏して如晦を都に留め、幕下に侍して參謀たらしめた。如晦の諸事を裁決することは、宛ら水の流れるやうで（曾つて遲滯することが無かつた。）又玄齡が朝廷に出て事を奏する毎に、高祖は玄齡に向つて「卿はわが兒の爲に色々と事を謀つて呉れるが、我は我が兒と遠く隔てて居ても、やはり吾が兒に對面して語るやうで、事が如何にも分明である。」といつて譽められた。秦王の四方平定の功は天下を蔽ひ包むばかりで（誰一人之に及ぶものもなかつたが、その爲兄と弟とに嫉まれて）一時その身も殆ど危かつた。然し玄齡如晦によつて（建成元吉を倒す）策略を決行して（禍を免れることが出來たのである）。このたび位に卽いたが、その手始に（宮中の改革を行ひ）宮女三千餘人を罷めて外へ出し（宮中の費用を省いた）。

突厥下馬羅拜

弘文館

商權政事

【語釋】夜分（夜半） ○登瀛洲（東海中に三神山がある、瀛洲はその一である。瀛洲に登ると云ふのは人の至り難き仙境に到ると云ふ意で、非常な光榮を云つたのである。） ○補外（地方官に任ぜられる。） ○帷幄（帷幄も幕の類で陣營に用ゐるもの、轉じて本陣、參謀部、大將の陣所の意に用ゐる。） ○剖決（裁判決斷。事件をさばき決めること。）

○突厥頡利突利二可汗、合十餘萬騎入寇、進至渭水便橋之北。上自與房玄齡等六騎、徑詣渭水上、與頡利隔水語、責以負約。突厥大驚、皆下馬羅拜。俄而諸軍繼至、旗甲蔽野。頡利懼請盟而退。○置弘文館、聚四部二十餘萬、選天下文學之士。虞世南等以本官兼學士。聽朝之隙、引入內殿、講論前言往行、商權政事、或夜分乃罷。取三品以上子孫充弘文館學士。

【通釋】突厥の頡利・突利の二可汗、十餘萬騎を合せて入寇し、進みて渭水便橋の北に至る。上、自ら房玄齡等六騎と、徑に渭水の上に詣り、頡利と水を隔てて語り、責むるに約に負くを以てす。突厥大に驚き、皆馬より下りて羅拜す。俄にして諸軍繼ぎて至り、旗甲野を蔽ふ。頡利懼れて盟を請ひて

退きぬ。○弘文館を置き、四部二十餘萬を聚め、天下文學の士を選ぶ。虞世南等本官を以て學士を兼ぬ。朝を聽くの隙、内殿に引き入れて前言往行を講論し、政事を商榷し、或は夜分にして乃ち罷む。三品以上の子孫を取りて弘文館の學士に充つ。

通釋 (初め唐の擧兵の時援兵を請うたので突厥は唐を侮つてゐた)。此の度突厥の頡利可汗と突利可汗とは十萬餘騎の兵を合せて入寇し、渭水の便橋の北まで押し寄せ(長安に迫つた)。帝は(恐れないことを示す爲)房玄齡等六騎とすぐに渭水の上に行き川を隔てて談判し、前約に反いて(事を起したことを)責めた。突厥は大に驚き、(その威光にうたれて)皆馬から下り、並んで拜禮した。さうしてゐる所へ急に唐兵が續々と集り來て軍旗や甲冑が野に滿ち〱たので、頡利可汗は懼をなし、和睦を請うて退却した。○また弘文館を置き、經・史・子・集四部の書物二十餘萬卷を聚め、天下の文學の心得ある人を選んで(出仕させた)。虞世南等は本官のままで弘文館學士を兼ねた。帝は朝政を聽く暇〱には、學士等を内殿に引き入れて、古人の言行を論議したり、古今の政治の得失をはかりくらべて、時には夜半になつてやつと罷めるといふ程熱心であつた。また三品以上の子孫を採用して弘文館の學士とした。

請レ去ニ佞臣一

至誠治ニ天下一

割レ肉充レ腹

語釋 便橋（便門と相對する橋の名。便門は平門の意。長安城の西面西頭の門。因つて其前の橋を便橋と云つた。）○羅拜（羅列して拜すること。）○四部（經・史・子・集の四部。之を四部書又は四庫書といふ。）○商搉（商は量ろ、搉は較べる。比較商量して研究する。）○徑（タダチニと讀む。直捷の意。すぐに。まつすぐに。）○弘文館（學問所の名。）

○有下上書請レ去ニ佞臣一者上。曰、願陽怒以試レ之、執レ理不レ屈者直臣也。畏レ威順レ旨者佞臣也。上曰、吾自爲レ詐、何以責ニ臣下之直一乎。朕方以ニ至誠一治ニ天下一。或請下重レ法禁上レ盜。上曰、當下去レ奢省レ費、輕レ徭薄レ賦。選ニ用廉吏一、使中民衣食有上レ餘、自不レ爲レ盜。安用ニ重法一邪。自レ是數年之後、路不レ拾レ遺。商旅野宿焉。上嘗曰、君依ニ於國一、國依ニ於民一。刻レ民以奉レ君、猶ニ割レ肉以充一レ腹。腹飽而身斃。君富而國亡矣。

通釋 上書して佞臣を去らんと請ふ者有り。曰く、「願はくは陽り怒りて以て之を試みんに、理を執りて屈せざる者は直臣なり。威を畏れて旨に順ふ者は佞臣なり」と。上曰く、「吾自ら詐を爲さば、何を以てか臣下の直を責めんや。朕方に至誠を以て天下を治めん。」と。或ひと法を重くして盜を禁ぜんと請ふ。上曰く、「當に奢を去りて費を省き、徭を輕くし賦を薄くすべし。廉吏を選用して、

民の衣食をして餘有らしめば、自ら盜を爲さじ。安んぞ重法を用ひんや」と。是より數年の後、路遺ちたるを拾はず、商旅野宿せり。上、嘗て曰く、「君は國に依り、國は民に依る。民を刻して以て君に奉ずるは、猶肉を割きて以て腹に充るがごとし。腹は飽くとも身は斃れん、君は富むとも國は亡びん」と。

【通釋】上書して（君側から）お上手者を除去りたいと請ふ者があつていふには、「（それを見破る方法として、陛下が群臣と論議をせられる際）どうぞわざと御立腹なされてお試し下さい。その時道理を固く執つて屈服しない者は剛直な臣であります。その時御威光に畏れて（御無理な）仰にも（御尤と）從ふものはお上手者でございます」と。帝之を聞いて、「朕自らそうした詐術を用ひたなら、どうして臣下に直しかれと責める事が出來よう。朕は眞心を以て天下を治める迄ぢや」といつて（之を斥けた）。またある人が法律を嚴重にして盜賊を禁制せんことを請うた。帝は之に對し、「それは奢を止めて費用を減じ、夫役を輕くし、稅金を少くし、清廉な役人を選んで用ひ、かくして人民の衣食に不自由なからしめたならば自然と盜をするものはあるまい。何とて法律を嚴重にする必要があらうぞ」といつた。（かういふ風であつたから人民も帝の德に化して）數年の後には、路に落ちてゐる物があつても之を拾ひ取るものもなく、行商人も旅人も（安心）して野宿した。帝は嘗てかういつた。「天子

受レ賕抵レ法

好忘者

はその國を賴にして立つものであり、國は人民を賴にして立つものである。故に人民を苦しめて天子一人の使用に供し（聚斂するのは）、丁度自分の肉を割いて自分の腹を滿たさうとするやうなものだ。腹は十分になつても肝心の肉體は死んでしまふであらう。之と同じく天子は富んでもその國は滅びてしまふであらう」と。

【語釋】陽怒（うはべだけで怒る、わざと怒つた風をする）〇徭（政府の工事に使はれる。徭役。）〇賦（租稅其の他の物品をわりつけて徵集する。）〇刻民（刻は切りきざみ、さいなむ、人民を殘酷に扱ふこと。）

又嘗謂二侍臣一曰、聞西域賈胡得二美珠一、剖レ身而藏レ之。有レ諸。曰、有レ之。曰、吏受レ賕抵レ法、與二帝王徇二奢欲一而亡レ國者、何以異レ此胡之可レ笑邪。魏徵曰、昔魯哀公謂二孔子一曰、人有二好忘者一。徙レ宅而忘二其妻一。孔子曰、又有二甚者一。桀紂乃忘二其身一。亦猶レ是也。

【通釋】又嘗て侍臣に謂ひて曰く、「聞く、西域の賈胡、美珠を得れば、身を剖いて之を藏むと。これ有りや」と。曰く、「之あり」と。曰く、「吏の賕を受けて、法に抵ると、帝王の奢欲に徇ひて國を亡す

者と、何を以てか、この胡の笑ふべきに異ならんや」と。魏徵曰く、「むかし、魯の哀公、孔子に謂つて曰く、『人好く忘るるものあり、宅を徙して其の妻を忘れたり』と。孔子曰く、『又甚しきものあり、桀紂は、乃ち其の身を忘れたり』と。亦猶ほ是のごときなり。」と。

【通解】また帝がある時お側の家來にむかひ、「西方の夷の商人は美しい珠を手に入れると（人に盜まれるのを恐れて）自分の身を割いてその中に藏して置くといふが、果して左樣なことがあらうか。」と問はれた。侍臣は「實際有ると云ふことでございます」と答へると、帝は「役人が賄賂を受けて法に當てられるのと、帝王が奢侈欲望に身を委せて國を亡ぼすのとは、どうして此の商人の笑ふべき行と異ならうか、（全く、同樣の愚である）」と言つて誡められた。すると魏徵が傍にゐていふやう「昔、魯の哀公が孔子に『わが領内によく物忘するものがあつて、轉宅の際、妻を連れて行くのを忘れた』といはれると、孔子は『又それよりはもつとひどいのが有ります。かの夏の桀王や殷の紂王は自分の身をさへ忘れてしまひました』と言はれたといふことでありますが、只今陛下の御言葉は此の話に似通つてゐます。（己れの慾の爲に却つて己れを忘れてしまふ者であります）」と。

【語釋】賈胡（胡の商人。）○受賕（賄賂を取る、賕を受ける。財を以て法を枉げる。）○徇（シタガフと訓じて殉と同じで、其者とトモジニする意、身を以て物に委す、そのまゝになること。）○有諸（諸は

張蘊古
大寶箴

視ニ於無形一
聽ニ於無聲一

之字の二字の音。有諸は卽ち有レ之乎。）

○張蘊古獻大寶箴。有曰、以一人治天下、不以天下奉一人。又曰、壯九重於內、所居不過容膝。彼昏不知、瑤其臺而瓊其室。羅八珍於前、所食不過適口。惟狂罔念、丘其糟而池其酒。又曰、勿沒沒而闇。勿察察而明。雖冕旒蔽目、而視於無形。雖黈纊塞耳、而聽於無聲。上嘉其言。

【譯】張蘊古、大寶の箴を獻ず。曰へるあり、「一人を以て天下を治む、天下を以て一人に奉ぜず」と。又曰く、「九重を內に壯にすとも、居る所は膝を容るるに過ぎず。彼の昏くして知らざるものは、其の臺を瑤にして其の室を瓊にす。八珍を前に羅ぬとも、食する所は口に適ふに過ぎず。惟だ狂にして念ふこと罔きものは、其の糟を丘にして其の酒を池にす」と。又曰く、「沒沒として闇きこと勿れ。察察として明なること勿れ。冕旒目を蔽ふと雖も、而も無形に視よ。黈纊耳を塞ぐと雖も、而も無聲に聽け」と。上、其の言を嘉す。

【通釋】張蘊古といふものが大寶の箴といふ天子の箴になる文を奉つた。その中に「天子は一人を以て天下を治めるが、天下の物を取立てて天子一人の欲望を充たすべきではない」と書いてあつた。また「九重にも宮門を廻らして城内を壯麗にしても、實際その身をおくに必要なのは膝を容れる場所だけにすぎない。然るにかの愚で道理を辨へぬ（桀王紂王の如き）者は、その臺を瑤で造り、其の室を瑤で飾つた。八種の珍味を食膳に並べたとて、實際に食べる所は口に適ふものだけにしか過ぎない。然るに唯心の狂ふままに任せて愼慮しない（桀王紂王の如き）者は、酒の糟を以て丘を築き、酒で池を作つて欲望を恣にした」とも書いてあつた。また（天子たる者は）外物に耽溺して道理に昏くてはいけない。物事を堀り發いてそれで聰明だと思つてはならぬ。冕の前の飾が目を蔽うてゐても、心眼を以て形のない（曲直を）見分けよ。冕の左右の飾は耳を蔽うてゐても、心の耳にて形のない（正邪を）聞きわけよ」ともあつた。帝は之を嘉納した。

【語釋】大寶箴（天子の箴といふ意。大寶は聖人の位。箴は戒め。）○八珍（八種の珍味。（一）淳熬。淳は沃ぐ、熬は煎る義。醢を煎り陸稻飯の上に加へ之に膏を沃いだもの。（二）淳母。母は摸の義、象ること。淳熬にかたどり醢を黍飯の上に加へたもの。（三）炮豚。豚肉を燒いたもの。（四）炮牂、牂の燒肉。（五）擣珍。牛羊麋鹿等の肉を擣いて柔かにしたもの。（六）漬。美酒に漬したもの。（七）熬。牛羊等の煎り肉。（八）肝膋。膋は腸脂。狗の肝をとつて腸間の脂を付けて炙つたもの。以上の八種をいふ。）○沒々（沈滅の意。闇昧なさま）○察々（苛察の意で、立入つて微細な所まで見る。物事をほじくり發くを云ふ。）○冕旒（冕は天子の冠、長さ尺六寸、廣八寸、前圓後方のもの。上に板を載す。旒は冕の前後に垂れてある五色の組と玉との飾。中卷二一五頁插圖參照。）

梁師都

五花判事

中書門下

〕黈纊（黈は黃色、纊は綿。冕の左右に垂らしてある圓形の黃色の綿。）

○分天下爲十道。因山川形便曰關內・河南・河東・河北・山南・隴右・淮南・江南・劍南・嶺南。○遣將討梁師都。其下殺之以降。以其地爲夏州。○太常祖孝孫、奏唐雅樂。○貞觀二年又出宮女三千餘人。○故事軍國大事、中書舍人、各執所見、雜署其名、謂之五花判事。中書侍郎・中書令省審之、給事中・黃門侍郎駁正之。上謂王珪曰、國家本置中書門下、以相檢察。卿曹勿雷同也。

【通釋】○天下を分ちて十道と爲し、山川の形便に因りて、關內・河南・河東・河北・山南・隴右・淮南・江南・劍南・嶺南と曰ふ。○將を遣はして梁師都を討ず。其の下之を殺して以て降る。其の地を以て夏州と爲す。○太常の祖孝孫、唐の雅樂を奏す。○貞觀二年、又宮女三千餘人を出す。○故事に、軍國の大事は、中書舍人、各〻所見を執りて、其名を雜署す。之を五花判事と謂ふ。中書侍郎・中書令之を省審し、

給事中・黄門侍郎之を駁正す。上王珪に謂ひて曰く、「國家本中書と門下とを置きて、以て相檢察せしむ。卿が曹雷同すること勿れ」と。

【通釋】(隋末に起つた諸豪傑は唐が起ると之に降つたので高帝は諸縣を割いて之に與へた。これで州縣の數は隋の時の二倍もあつて、民は少く吏が多かつた。太宗は行政上の必要から或は併合したり或は省いたりして之を整理した)。即ち天下を十道に分け、山川の形勢や便宜によつて關内・河南……と稱したのである。○將軍(柴紹)を遣して(隋末群雄の一人の)梁師都を討たせた。その時師都の部下が之を殺して降參して來たので(事平き)、その地を夏州と名づけた。○太常の官である祖孝孫が(先に高祖の命をうけて古代の音樂や諸夷のもの等から雅樂を選んでゐたが、この時になつて新樣を設定して)、唐の雅樂と名づけ、之を奏上した。○貞觀二年にまた宮女三千人餘に暇を出した。○唐の從來の慣例に依れば(詔勅、冊命等)軍事、國政の大事は、中書省の舍人が各〻の意見を書いて其の起案に一緒に記名して差出すこととし、之を五花判事といつた。そしてその次案は中書侍郎と中書令とが之をよく再調して、次に給事中と黄門侍郎とが、わるい所を直すことになつてゐた。帝がある時王珪に向ひ、「本來國家が中書省と門下省との(政務の機關を)置いたのは、互ひに(政務を)吟味せしめ

玄齡善謀 如晦善斷

て（善政を施す爲である）。故に卿等は無暗に人のいふことに附き從つてはならぬ」と誡められた。

【語釋】雜署（一緒に記名すること。）○五花判事（五花とは綾紙五雲綾などの類を云ふ。判は此の綾紙に書いたので五花判事と云つた。中書舍人の）○駮正（辯駁修正）○置中書門下以相檢察（中書省は天子の命令を傳へ詔勅を宣奏する官であり、門下省は、その中書省の宣奏した詔勅を審査して、その可否を覆奏する官である、然る上で可と定つた詔勅を天子は尚書省に下して之を實施せしめるのであるから、中書門下の二省を置いたのは、互ひに政務の得失を吟味し、その可否を調べたゞさしめる爲である）○雷同（雷鳴の時その音に應じて他の物が鳴り響くやうに濫りに人の言に附和すること。）

唐太宗と魏徵

時珪爲侍中、房玄齡・杜如晦爲僕射、魏徵守秘書監、參預朝政。玄齡謀事、必曰、非如晦不能決。及如晦至、卒用玄齡策。蓋玄齡善謀、如晦善斷。二人同心徇國。故唐世稱賢相推房杜焉。徵嘗告上曰、願使臣爲良臣。勿使臣爲忠臣。上曰、

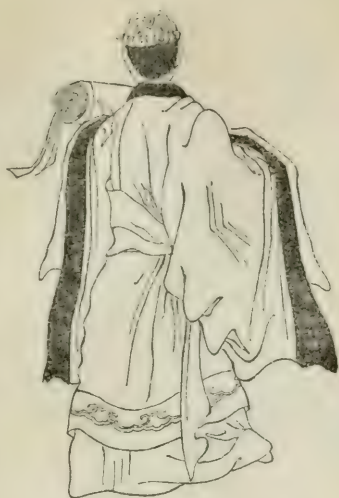
忠良異乎。徵曰、稷契皐陶、君臣協心、倶享尊榮。所謂良臣。龍逢比干、面折廷爭、身誅國亡。所謂忠臣。上悅。

房玄齡像

【訓讀】時に珪は侍中と爲り、房玄齡・杜如晦は僕射と爲り、魏徵は祕書監に守として、朝政に參預す。玄齡事を謀るに必ず曰く、「如晦に非ずんば決すること能はず」と。如晦至るに及びて、卒に玄齡の策を用ふ。蓋し玄齡は善く謀り、如晦は善く斷ず。二人心を同じくして國に徇ふ。故に唐の世に賢相を稱すれば、房・杜を推す。徵、嘗て上に告げて曰く、「願はくは臣をして良臣と爲らしめよ、臣をして忠臣と爲らしむること勿れ」と。上曰く、「忠良異なるか」と。徵曰く、「稷・契・皐陶は君臣心を協せて、倶に尊榮を享けたり。所謂良臣なり。龍逢・比干は面折廷爭し、身誅せられ、國亡びぬ。

謂ゆる忠臣なり」と。上、悅ぶ。

杜如晦像

通解 この時王珪は侍中となり、房玄齡・杜如晦は僕射となり、魏徵は圖書頭となつて居て、朝政に參與してゐた。玄齡は政治上の事を計畫する時には必ず「如晦でなくては決定することは出來ぬ。」といつた。そして如晦が來ると結局玄齡の策を用ひた。それといふのは、つまり玄齡は（頭の人で）よく計畫し、如晦は（意志の人で）よく決斷するからで、この二人が心を同じくして國の爲に身を委せた。故に唐の世に於て賢明なる宰相はといへば、この房玄齡、杜如晦の二人を擧げるのである。魏徵がある時、帝に「どうか陛下には、臣を良臣たらしめるやうに（政治をお取り下さい）。臣を忠臣にして下さらぬやうお願申上げます」といふと、帝は不思議に思はれ、「忠と良とは違ふのか」と尋ねられた。すると魏徵は「（舜に仕へた）稷や契や皐陶は君臣心を協せて（天下を治め）俱に身分尊

李靖破突厥

く榮えたと申します。これが私の申上ます良臣でござります。（夏の桀王に仕へた）關龍逢や（殷の紂王に仕へた）比干は君の面前で君の非行を折りくぢき、朝廷で公然君を諫め、それが爲身は誅せられ、國は亡びました。これが私の申し上げます忠臣でござります」といふと、帝は之を聞いて大に喜んだ。

【語釋】僕射（尙書省の長官。もと次官であつたが、太宗がかつて尙書令であつたので臣下は之を避けてこの職に居らなかつた。それで僕射が尙書省の長官になつた。）〇守秘書監（位階の比較的卑いものに高い官職を授けた場合には之を守と稱した。その反對にして位高くして官卑き場合は行と云つた。）〇面折廷爭（君の面前で折り挫き朝廷で爭ひ論ずる。剛直の臣の直諫するさまを云ふ。）

〇初、突厥既强。敕勒諸部分散。有薛延陀・回紇等十五部。皆居磧北。頡利政亂、薛延陀・回紇等叛之。加以民大飢、羊馬多死。奉使者還、及邊帥、皆言突厥可取之狀。詔以李靖爲定襄道行軍總管、統諸軍討之。靖襲破突厥於陰山。頡利可汗遁走。唐將擒之以獻。時突利可汗先已入朝。上處突厥降衆、東自幽州、西至靈州、分突利地爲四州、分頡利地爲六州、左置定襄都督、右置雲中都督、以統其衆。以突利爲順州都督、頡利爲右衛大將軍。

【[illegible]】はじめ、突厥、すでに强し。敕勒の諸部、分散す。薛延陀・回紇等の十五部あり。皆、磧北に居る。頡利、政亂れ、薛延陀・回紇等、これに叛く。加ふるに、民、大に飢ゑ、羊馬多く死するを以てす。使を奉ずる者還り、及び邊帥、皆、突厥の取るべきの狀を言ふ。詔して、李靖を以て、定襄道の行軍總管となし、諸軍を統べて、之を討たしむ。靖、突厥を陰山に襲ひ破る。頡利可汗、遁れ走る。唐將、これを擒にして以て獻ず。時に、突利可汗、先に已に入朝す。上、突厥の降衆を處くに、東の方幽州より、西は靈州に至り、突利の地を分ちて四州と爲し、頡利の地を分ちて六州と爲し、左には定襄都督を置き、右には雲中都督を置きて、以て其の衆を統べしめ、突利を以て順州の都督と爲し、頡利を右衛大將軍と爲せり。

【通釋】初め突厥の强くなつた時は、もう敕勒の諸部は分散して、薛延陀とか回紇とか十五部落が分立し、皆蒙古沙漠の北に居た。然るに東突厥の頡利可汗の政が亂れたので、薛延陀、回紇等は叛いた。其の上突厥には飢饉があつて、人民は大に餓ゑ、(彼等の糧である)羊や馬が澤山死んだ。この時唐から突厥へ使に行つたものが還つて來て、突厥は攻め取ることが出來るといひ、また國境を守つてゐる將軍(張公瑾)等も同じく取るべきことを献言した。そこで帝は詔して李靖を定襄道(今の山

林邑入貢

天可汗

西省朔平の北、長城外の地方）の行軍總管とし、諸軍を率ゐて突厥を征伐させた。李靖は突厥軍を内蒙古の陰山で打破つた。頡利可汗は遁れ走つたが、唐將（張寶相）が之を生捕にして帝に獻じた。突利可汗は是より先に歸順して入朝してゐた。帝は突厥の降參した多數の者を居らしめる爲め、東の方は（湖北省舊順天府附近の）幽州から西は（甘肅省舊寧夏府の）靈州に至るまで、突利の地を分けて四州とし、頡利の地を分けて六州とし、左即ち西には定襄都督を、右即ち東には雲中都督を置いて其の衆を統御せしめ、突利可汗を順州（河北省の北部）の都督とし、頡利可汗を右衛大將軍とした。（追記。敕勒は匈奴の末で一に鐵勒ともいひ、蒙古地方に居つた種族である。）

【語釋】磧北（磧は沙漠、蒙古沙漠の北。） ○十五部（薛延陀・回紇・都播・骨利幹・多濫葛・同羅・僕固・拔野古・思結・渾・斛薛・奚結・阿跌・契苾・白霫。） ○四州（順州・祐州・化州・長州。） ○六州（未詳。）

○林邑遣レ使入貢。○伊吾來降。置二伊西州一。○高昌王麴文泰入朝。○先レ是、四夷君長詣レ闕、請下帝爲中天可汗上。上曰、我爲二大唐天子一、又下行二可汗事一乎。群臣及四夷、皆稱二萬歲一。自レ是後璽書賜二西北君長一、皆稱二天可汗一。○貞觀四年、

杜如晦卒
饑者易爲食

蔡公如晦卒。上語及必流涕。○是歲大有年。上之初卽位也、常與群臣語及敎化。曰大亂之後其難治乎。魏徵對曰、饑者易爲食、渴者易爲飮。封德彝曰、三代以還、人漸澆訛。故秦任法律、漢雜霸道。蓋欲化不能。豈能之而不欲邪。

【譯文】林邑使を遣して入貢す。○伊吾來降す。伊西州を置く。○高昌王麴文泰入朝す。○是より先四夷の君長、闕に詣りて、帝を天可汗と爲さんと請ふ。上曰く、「我は大唐の天子たり。又下可汗の事を行はんか」と。群臣及び四夷皆萬歲と稱す。是より後璽書西北の君長に賜ふもの、皆天可汗と稱す。○貞觀四年、蔡公如晦卒す。上、語及べば必ず流涕す。○是の歲大に年有り。上の初め位に卽くや、常て群臣と語りて敎化に及ぶ。曰く、「大亂の後、其れ治め難きか」と。魏徵對へて曰く、「饑ゑたる者は食を爲し易く、渴せる者は飮を爲し易し」と。封德彝曰く、「三代以還、人漸く澆訛なり。故に秦は法律に任じ、漢は霸道を雜ふ。蓋し化せんと欲して能はざりしなり。豈之を能くして欲せざらんや」と。

〔通釋〕（今の安南地方の）林邑が使者を立てて入朝した。○伊吾（今の新疆省の哈密）が來て降服したので、ここに伊西州を置いた。○高昌王の麴文泰も入朝した。○是より以前、四方の夷の酋長等が宮門に來て、帝を天可汗に戴きたいと願ひ出た。すると帝は「我は大唐の天子であるのに、その上にまた下の夷狄の君長の事も行はなければならないのか」といつて承諾した。群臣及び四夷は皆歡喜にうたれて萬歲を稱へた。これより後西北夷の君長に賜ふ璽書には皆天可汗と書くことになつた。○貞觀四年に蔡公の如晦が卒去した。帝はその後話が如晦の事に及べば必ず落淚した。○この歲豐作であつた。初め帝が位に卽かれた時、いつも群臣と種々の話をされて話題が人民敎化の事になると、帝は「大亂の後は治め難いものかどうか」と問うた。魏徵が之に對へて「飢ゑてゐた者はどんな食べ物でも喜んで食べ、また喉の渴いてゐる者は何を飮ませても喜んでのむ如く、（大亂に遭うた民は平和を渴望してゐますから治め易いと存じます）」といふと、封德彝が「（いや左樣ではございますまい）夏殷周三代以來人情が段々と輕薄になりましたので、秦は法律を以て（之を抑制し）、漢は德を以て治める王道に武力を用ふる覇者の道を參酌して制御しました。思ふにこれは德を以て敎化しようと望んでゐたのでありませうが、實際は出來なかつたのであります。出來ることであるのに望まなかつたといふの

顧所行何如耳

死刑纔十九人

魏徵勸行仁義

ではございますまい。(矢張大亂の後は敎化し難いと存じます)」と反駁した。

語釋 四夷(四方のえびす。東夷西戎南蠻北狄。) ○天可汗(可汗は西北夷狄の君主の尊稱で古の單于と云つたやうなものである。天の字に更に一段の尊敬を現はしたもので、大君主と云ふやうな意味である。) ○秊(年の本字、稔と同じ。大豐年のこと。) ○澆訛(澆は人情の輕薄なこと、訛は僞はり欺く意。) ○璽書(天子の御章を押した書付。お墨付。)

徵曰、五帝三王、不易民而化、湯武皆乘大亂之後、身致大平。行帝道而帝、行王道而王。顧所行何如耳。上卒從徵言。元年關中饑、斗米直絹一匹。二年天下蝗。三年大水。上勤而撫之、未嘗嗟怨。至是天下大稔、米斗三四錢。終歲斷死刑、纔十九人。東至于海、南及五嶺、皆外戶不閉、行旅不齎糧、取給於道路焉。上曰、魏徵勸我行仁義。今既效矣。惜不令封德彝見之、蓋德彝元年六月死矣。

通釋 徵曰く、「五帝・三王は民を易へずして化し、湯武は皆大亂の後に乘じて、身太平を致せり。帝

道を行はゞ帝たり、王道を行はゞ王たり。行ふ所何如を顧みんのみ」と。上、卒に徵の言に從ふ。元年關中饑ゑ、斗米、絹一匹に直す。二年、天下蝗あり。三年、大水あり。上、勤めて之を撫せしかば、未だ嘗て嗟怨せざりき。是に至りて天下大に稔り、米斗三四錢のみ。歲を終ふるまで、死刑を斷ずること纔に十九人。東のかた海に至り、南のかた五嶺に及ぶまで、皆外戶閉ぢず、行旅糧を齎らさずして、給を道路に取れり。上曰く、「魏徵我に勸めて仁義を行はしむ。今既に效あり。惜むらくは封德彝をして之を見しめざることを」と。蓋し德彝は元年六月に死せるなり。

〔通釋〕魏徵は更に之を論駁して「古の五帝三王は善政を布き、その民を取り易へずしてよく教化しました。(これいつの時代の人民でも仁義の道を以てすれば必ず善く治まる證據であります)。また殷の湯王、周の武王は皆大亂の後を承け、德を以て治めて太平を致しました。故に帝たる道を以て治めれば帝たることが出來、王たる道を以て治めれば王たることが出來るのでございます。たゞ帝となり王となるには如何樣にすべきかを顧み考へますれば(太平は致されるものであります)」といつたが、帝は遂に魏徵の言に從はれた。この貞觀元年には關中が饑饉で一斗(今の四合一勺八撮餘)の米が絹一匹(今の四丈)の價に相當するほどに米價が暴騰した。其の二年には天下各地に蝗の害があつて不

林邑新羅入貢
党項内附

作であり、其の三年には大水害があつた。この間帝は（人民の難澁を察し）民を勵ましいたはつたので、人民は少しも困苦を嘆き上を怨むことがなかつた。かくて其の四年となつて天下は大豐作で、米一斗が三四錢となり、（生活難から起る盜賊惡人がなくて）この歳一年間に死刑に處したものは僅に十九人だけであつた。それで東方は海岸より南方は五嶺に至る領域の間、人民は皆（盜賊の侵入する憂なきゆゑ）戸締もせず、旅人は糧を携帶し歩く必要がなく、行く先々で飲食の供給を受けた。そこで帝が、「さきに魏徵は我に勸めて仁義の道を行はせたが、今その效果があらはれて來た。（徵の說に反對であつた）封德彝にこの實況を見せてやることの出來ないのが遺憾ぢや」といはれた。封德彝は元年六月に死んでしまつて居たから、かくいつたのである。

語釋　五帝三王（五帝は少昊金天氏、顓頊高陽氏、帝嚳高辛氏、帝堯陶唐氏、帝舜有虞氏、三王は夏の禹王、殷の湯王、周の文王武王。）○蝗（イナムシ・稻蟲の多く發生すること。）○嗟怨（困苦をなげき上を怨む。）
○外戸不レ閉、（盜賊なき故戸締せぬこと。）○取ニ給於道路ニ（供給を行く先々にてとる。）○五嶺（隋煬帝の章に見ゆ。）○不レ易レ民而化（もとの惡い民を取りかへずに、その者をよく導き治めてゆくことをいふ。）○勦而撫レ之（勦は恩勦の勦で、すゝめ勵ますこと、即ちなさけを以て民をすゝめはげまし、よくいたはつてやること、慰勞する意である。）

○五年、林邑新羅入貢。○党項内附。開ニ其ノ地ヲ爲ニ十六州ト。○七年春宴ニ玄武

七徳九功舞

縱遣死囚

門、奏七德九功舞。徵欲上偃武修文、每侍宴、見七德舞輒俛首不視。七德舞者、秦王破陣曲也。見九功舞則諦觀之。王珪罷、徵爲侍中。○上親錄囚徒、見應死者閔之、縱使歸家、期以來秋就死。仍敕天下死囚、皆縱遣、至期來詣京師。至是皆如期自詣朝堂。上皆赦之。凡三百九十人。

【訓讀】五年、林邑・新羅入貢す。○党項、內附す。其地を開きて、十六州と爲す。○七年春、玄武門に宴して、七德九功の舞を奏す。徵、上の武を偃せ、文を修めんことを欲し、宴に侍する每に、七德の舞を見ては、輒ち首を俛して視ず。七德の舞は、秦王破陣の曲なり。九功の舞を見ては、則ち之を諦觀せり。○王珪罷められ、徵、侍中と爲る。○上、親ら囚徒を錄す。應に死すべき者を見て之を閔み、縱して家に歸らしめ、期するに來秋を以てして死に就かしむ。仍りて、天下の死囚に敕して、皆、縱し遣り、期に至りて、京師に來り詣らしむ。こゝに至りて、皆期の如く、自ら朝堂に詣る。上、皆これを赦す。凡べて三百九十人なりき。

【通釋】貞觀五年に林邑及び新羅が貢物を持つて來た。○(西方の蠻族の)党項が服從したのでその地

た開拓して十六州とした。○貞觀七年の春、玄武門に宴を張つて、七德の舞と九功の舞とを演じさせた。魏徵は帝が武を止め、文教を起されることを願つてゐるので、酒宴に侍する毎に、七德の舞が出ると、すぐ顏を垂れて視ないやうにした。七德の舞は太宗が秦王であつた時、賊首劉武周を破つた事を作曲したもので、殺伐なものであつたからである。之に反し九功の舞が出ると、よく氣をつけて觀た。（これは文の舞で平和的であつたからである）。此年王珪は侍中を罷められ、徵がその後任となつた。○（去年）帝は自ら囚人の取調をした。その時死罪に行はれるべき者を見て可愛想に思ひ、釋して家に歸らしめ、來年の秋處刑に服するやうにと約束させた。その上詔を下し天下の死刑囚を皆釋し放して、來秋京師に來ることを誓はせたが、この貞觀七年の秋になつて、囚徒は皆約の如く自分から長安へ來て宮城內の政事堂へ屆け出た。帝は（その正直を嘉して）皆之を赦したが、その數はすべてで三百九十人もあつた。

【語釋】七德（唐の太宗が秦王であつた頃、賊首劉武周を破つた時、軍中相與に秦王破陣樂の曲を作り、即位に及んで宴會には必ず之を奏し後更めて七德の舞と名づけた。偶樂舞の圖を作つて樂工に敎へた。樂工は百二十八人で、いづれも銀の鎧を着、戟を執つて舞ふ。七德とは暴を禁ずる、兵を戢める、大を保つ、功を定める、民を安んずる、衆を和する、貨を豐かにするの、七つを云ふのである。）○九功舞（もとは功成慶善樂と云つて、兒童六十四人で舞つた文舞を表した舞である。後に九功の舞といふ。九功とは六府三事の功の義である。六府は火水金木土穀、三事は正德、利用、厚生。）○諦觀（氣をつけて明かに見る。諦はあきらかの意。）○錄二囚徒一（錄は省錄の意、よく情伏を察して寃罪のあるかないかを取調べる。）○林邑（一に占婆ともいひ、その王

胡越一家

吐蕃入貢

吐谷渾遣子入侍

都を古城といふ。今の安南のことである。）○党項（西羌の別種で、今の四川省の西北境界に住した種族である。）○內附（外國が我國に服從して來ること。內屬ともいふ。）○偃レ武（偃は音エンで、フスと訓し、伏の意。武器を伏せて用ゐぬこと。卽ち戰爭をやめて平和になること。）○朝堂（政事堂のこと。政務を執る役所をいふ。政府。）

○上奉太上皇置酒未央宮。上皇命頡利可汗起舞。馮智戴詠詩。笑曰、胡越一家、古未有也。○八年。吐蕃遣使入貢。○九年、太上皇崩。上皇卽位九年而禪位。至是又九年。○吐谷渾先是入寇涼州。以李靖師諸軍討破之。○十年。吐谷渾遣子入侍。○治書侍御史權萬紀言、宣・饒銀大發。采之歲可得數百萬。上曰、卿未嘗進一賢才、而專言銀利。昔堯舜抵璧於山、投珠於谷。漢之桓靈乃聚錢爲私藏。卿欲以桓靈俟我耶。黜之。

上、太上皇を奉じて、未央宮に置酒す。上皇、頡利可汗に命じて起ちて舞はしむ。馮智戴、詩を詠ず。笑ひて曰く、「胡越一家なるは古より未だ有らざるなり」と。○八年、吐蕃使を遣はして入貢す。○九年、太上皇崩ず。上皇卽位九年にして位を禪る。是に至りて又九年なり。○吐

谷渾、是より先涼州に入寇す。李靖を以て諸軍を帥ゐて討ぜしむ。之を破る。〇十年、吐谷渾、子を遣はして入り侍せしむ。〇治書侍御史の權萬紀言ふ、「宣・饒には銀大いに發す。これを采らば、歳ごとに、數百萬を得べし」と。上曰く、「卿、未だ嘗て一賢才を進めずして、專ら銀の利を言ふ。むかし、堯舜は、璧を山に抵ち、珠を谷に投げたり。漢の桓靈は乃ち錢を聚めて私藏となしぬ。卿、桓靈を以て我を俟たんと欲するか」と。これを黜く。

【通釋】　この年帝は父の太上皇を主賓として(前漢高帝の建てた西安にある)未央宮で酒宴をした。その折上皇は突厥の頡利可汗に命じて舞を舞はせた。(南蠻の酋長の子の)馮智戴は詩を詠じた。上皇は之を見て笑ひつゝ「(突厥の)胡と(南蠻の)越とが一家の如く睦み合ふことは古よりまだないことである」といはれた。〇八年には吐蕃が使を遣して貢物を奉つた。〇九年には上皇が崩御になつた。上皇は位に卽いてから九年で位を太子に禪つたが、禪つた後崩ずるまでまた九年間であつた。(西藏種の)吐谷渾が其より前に西方の涼州(甘肅の西部)に寇したので、李靖に命じ、諸軍を統率して征伐させて之を破つた。〇十年に吐谷渾は子を遣して宮中に侍座せしめて(人質とした)。〇(ある時)治書侍御史の權萬紀が帝に奏して「安徽の宣州や江西の饒州では銀が大層發掘されます。之を政

府に收められたならば毎年數百萬の利が得られませう」といふと、帝は之を聞いて「卿は今迄一度も一人の賢才だも推薦したことがなくて今只管銀の利益をいふ(のは一體どういふ心得であるか)。昔堯や舜の聖帝は(賢人を寶として之を得ることばかり心掛け)、璧は山に擲ち棄て珠は谷に投げ込んだ。漢の桓帝や靈帝は此と反對に錢を聚めて自分の私有とした。卿は朕を桓帝や靈帝のやうな物質慾に囚はれた君主としようとするのか」といつて之を黜けた。

語釋 太上皇(單に上皇ともいふ。高祖李淵を指す。) ○胡越(胡は北胡、突厥の頡利可汗。越は南蠻、越の馮智戴。双方南北隔絕の異國である。) ○抵(擲つ、投げ棄てること) ○吐蕃(西羌の一種。今の西藏) ○吐谷渾(今の青海地方。)

○定府兵。凡十道、置府六百三十四。而關內二百六十一。皆隸諸衞及東宮六率。上府兵、凡千二百人、中府千人、下府八百人。三百人爲團、團有校尉。五十人爲隊、隊有正。十人爲火、火有長。每人兵甲糧裝各有數。輸之庫、征行給之。二十爲兵、六十而免。能騎射者爲越騎、其餘爲步兵。吏命統軍

別將、爲折衝果毅都尉。每歲季、各折衝都尉、帥以敎戰。當給馬者官與直、當宿衞者番上。兵部以遠近給番。遠疏近數。皆一月而更。

【讀下】府兵を定む。凡べて十道、府を置くこと六百三十四。而して關內二百六十一。皆諸衞及び東宮の六率に隸す。上府の兵は凡べて千二百人、中府は千人、下府は八百人なり。三百人を團と爲し、團に校尉有り。五十人を隊と爲し、隊に正有り。十人を火と爲し、火に長有り。人每に兵甲糧裝各〻數有り。之を庫に藏し、征行には之を給す。二十にして兵と爲り、六十にして免ず。能く騎射する者を越騎と爲し、其の餘は步兵と爲す。統軍別將を更命して、折衝果毅都尉と爲す。歲の季每に、各折衝都尉、帥ゐて以て戰を敎ふ。當に馬を給すべき者には官より直を與へ、當に宿衞すべき者は番上せしむ。兵部、遠近を以て番を給す。遠は疎に、近は數〻す。皆一月にして更る。

【通釋】府兵の制を定めた。全國十道に府をおくこと六百三十四、その內關內道（卽ち畿內）には二百六十一を置き、之を諸の親衞軍（左右羽林、左右龍武、左右神武）、及び東宮の六率（左右衞率、左右宗衞率、左右監門率の六衞府）に隸屬せしめた。府に上中下があり、上府は兵數千二百人、中府

不レ克レ終者十條　徵ニ名儒一

千人、下府八百人である。三百人を團とし、團の長を校尉とす。五十人を隊とし、隊の長を正といふ。十人を火といひ、火の頭を長といつて各その部下を取締らせた。是等の人每に給與する武器、甲冑、兵糧には定量があつて、常には之を府の庫に運び込み、征伐の際に之を給した。男子は二十歳で兵となり六十歳で免役となる。そして騎射のよく出來る者を越騎とし、其の他の者を歩兵に編入する。また從來の統軍都尉の名を折衝都尉に、別將都尉の名を果毅都尉と改め、毎歳十二月に折衝都尉は府兵を率ゐて之れに戰爭の仕方を敎へた。其の外馬を與ふべきものには政府より代金を給し、宿衛すべき者には順番に上京せしめた。（その爲には）兵部といふ役所が順番の割當をして、遠方の者は上京の度數を少くし、近き者は度數を多くした。そして一月に交替させた。

【語釋】越騎（勁勇で衆に超越して居るといふ意味で名づけたもの）　○折衝都尉（折衝は敵兵の衝いて來るを折り挫く義。果毅は左傳に「敵を殺すを果と爲し、果を致すを毅と爲す。」とあるに基づく。此等の意を以て都尉に名づけたのである。）
○遠踈近數（兵部省で京都と各府との距離の遠近に由つて更番上京の度數を割り當てた。そして遠い府の更番は度數を少なくし、近い府のは度數を多くした。踈は少の意、數は音サクでしばしばの意。）　○府兵（鎭臺兵、師團兵などいふ意。）

○十三年、夏旱ス。詔シテ五品以上ニ言ハシム事ヲ。魏徵言フ、陛下比スルニ貞觀ノ初ニ、漸ク不ル克ク終ヲ者十條アリト。上深ク獎歎ス。○十四年、上詣リ國子監ニ、親ラ釋奠ス。是ノ時大ニ徵シテ天下ノ名儒ヲ爲シ學官ト、

學者雲集

孔穎達

數幸國子監、使之講論。學生能明一經已上者、皆得補官。增築學舍千二百間、增學生滿三千二百六十員。自屯營飛騎、亦給博士授經。有能通經者、聽得貢擧。於是四方學者雲集京師。乃至高麗・百濟・新羅・高昌・吐蕃諸酋長、亦遣子弟請入國學。升講筵者、至八千餘人。上以師說多門、章句繁雜、命孔穎達與諸儒定五經疏。謂之正義。

[illegible] 十三年、夏旱す。五品以上に詔して事を言はしむ。魏徵言ふ、「陛下、貞觀の初めに比するに、漸く慾を克くせざる者十條あり」と。上、深く奬歎す。○十四年、上、國子監に詣り、親ら釋奠す。是の時大に天下の名儒を徵して學官と爲し、數〻國子監に幸して之を講論せしむ。學生能く一經已上に明かなる者は、皆官に補せらるゝを得。學舍を增築すること千二百間、學生を增して三千二百六十員に滿つ。屯營飛騎よりして、亦博士を給して經を授け、能く經に通ずる者有れば、貢擧を得ることを聽す。是に於て四方の學者京師に雲集す。乃ち高麗・百濟・新羅・高昌・吐蕃の諸酋長に至るま

で、亦子弟を遣はし、請ひて國學に入らしめ、講筵に升る者、八千餘人に至る。上、師說多門にして、章句繁雜なるを以て、孔穎達に命じて、諸儒と五經の疏を定めしむ。これを正義といふ。

[illegible] 貞觀十三年の夏、旱が續いた。（それで是は如何なる理由で天が災するか）、五位以上の者に命じて意見を述べさせた。其の時魏徴は「陛下は貞觀の初めに比べますと、（御治世の上に段々弛みが出來て）、終を全うされないやうに見える事柄が十ケ條ございます」と云つて、（その條々を腹藏無く奏上した）。帝はその直言を奬めほめた。○十四年（二月丁丑の日）に帝は國子監に臨幸して親しく孔子顏回を祭る釋奠の禮を行はれた。この時大いに天下の有名な儒學者を召して學官とし、其の後度々國子監（國子學の改稱）に幸してそれ等の學官に書物の講義や討論をさせた。學生でよく一つ以上の經書に明かなものは皆官吏に補任されることが出來たのである。學舍を千二百棟も增築し、學生も三千二百六十名に增員した。近衛の武官である屯營及び飛騎の營所を始めとして他の營所へも博士を遣つて經書を教授させ、よく經書に通ずる者があれば、選拔推擧して官吏にすることが出來ることゝした。それで四方の學者が京師に雲のやうに澤山集つた。そこで（唐の人は言ふに及ばず）高麗、百濟、新羅、高昌、吐蕃の外、蕃酋長までが、同じく子弟を遣して願ひ出て國子監に入學させた。それ故講

侯君集滅高昌　魏徵卒　以古爲鏡

義の席に出る者が八千餘人の多きに達した。然し、經學には先輩學者の解說に古來幾多の流派が有つて章句の解釋が煩しく込み入つてゐるので、帝は孔穎達に命じて（顏師古、司馬才章等の）諸儒者と共に五經の細注をつくらせ、之を五經正義と名づけて教授の準據とした。（今世に行はる）

語釋　十漸（十漸の大略を言へば（一）使を遣して徵し求む。（二）奢侈にして人力を用ふるを思ふ。（三）欲を恣にして人を勞す。（四）小人を昵け君子を疎んず。（五）寶物を貴んで無益を作す。（六）輕く賢に與せずして易く人を棄つ。（七）田獵して馳騁す。（八）外官事を奏するに顏色接せず。（九）傲を長じ氣を盛にして事無きに兵を興す。（十）關中の民徭役に勞す。人民かくの如きもので何れも貞觀當初のやうでない事を謂つたのである。）○屯營、飛將（何れも左右に分れてゐる天子親軍の武官。）○貢擧（貢は貢進の意、德行學問の秀でたる者を各地方から天府の官にすゝめること、擧は吏部、官吏に登用するやう推擧すること。）○五經（易經・書經・詩經・禮記・春秋。）○疏（注釋の注釋。細注。從來の注釋が意義の分明でないものに更に注を入れ、本文と共にその意を明かにしたもの。）○師說多門（先秦や師匠の講說に流派が多い例へば書經に孔安國、鄭玄などの注があり、春秋に服虔杜預などの注があつて其の訓釋が一定してゐないやうなものである。）○正義（正しい意義の意である。）○高昌（今新疆省土魯番。）

○高昌王麴文泰、先是多遏絕西域朝貢、及拘留中國人。以侯君集爲交河大總管、將兵擊之。至是滅高昌、以其地爲西州。○十五年、吐蕃求婚。以文成公主嫁之。○十七年、鄭公魏徵卒。上曰、以銅爲鏡、可正衣冠。以古爲鏡、可見興替。以人爲鏡、可知得失。徵沒朕亡一鏡矣。徵葬、上自製碑書石。

○圖₂畫功臣長孫無忌・趙郡王孝恭・杜如晦・魏徵・房玄齡・高士廉・尉遲敬德・李靖・蕭瑀・段志玄・劉弘基・屈突通・殷開山・柴紹・長孫順德・張亮・侯君集・張公謹・程知節・虞世南・劉政會・唐儉・李勣・秦叔寶等於凌煙閣₁。

【通釋】高昌王麴文泰、これより先、多く西域の朝貢を遏絶し、及び中國の人を拘留す。侯君集を以て交河の大總管となし、兵に將として、之を擊たしむ。こゝに至りて、高昌を滅ぼし、その地を以て西州となす。○十五年、吐蕃、婚を求む。文成公主を以て之に嫁す。○十七年、鄭公魏徵、卒す。上曰く、「銅を以て鏡となさば衣冠を正すべし。古を以て鏡となさば、興替を見るべし。人を以て鏡となさば、得失を知るべし。徵、沒して、朕、一鏡を亡へり」と。徵、葬るとき、上、自ら碑を製して石に書せり。○功臣長孫無忌・趙郡王・孝恭・杜如晦・魏徵・房玄齡・高士廉・尉遲敬德・李靖・蕭瑀・段志玄・劉弘基・屈突通・殷開山・柴紹・長孫順德・張亮・侯君集・張公謹・程知節・虞世南・劉政會・唐儉・李勣・秦叔寶等を凌煙閣に圖畫せしむ。

【通釋】是より前に（一時歸服した）高昌王の麴文泰が、西域から貢物を持つて來る使者を喰止め、又唐の人の西域に往來するのを捕へて留めおいたり（兎角不都合な振舞が多かつたので）、侯君集を交河の大總督とし、兵を率ゐて之を征伐させたが、この時になつて高昌を滅した。そこでその地を西州と名づけて（安西都護府を置いた）。〇十五年に吐蕃が婚姻を求めたので、（宗室の女）文成公主を降嫁した。〇十七年鄭公の魏徵が卒去した。帝は之を聞いて「銅を鏡とすれば之に照して衣服や冠の整はぬ點を正しくすることが出來るし、古人を鏡とすれば世の中の興つたり衰へたりした原因結果を知ることが出來るし、人を鏡とすればわが行爲の是非得失を知ることが出來る。魏徵が亡くなつたで朕は（照らして自分の得失を知るべき）一つの鏡を失つた」といつて嘆き、且つ徵の葬式に當つて自ら碑文を作つて石に書きつけた。（天子が臣下の爲に自ら碑文を撰して書くと云ふことは實に異數の優遇である）。〇國家に大功勳の有つた臣下の長孫無忌以下二十四人の肖像を凌煙閣に畫かしめた。

【語釋】遏絕（遮り喰ひ止めること。）〇興替（興は興隆、替は廢滅。盛衰。）〇凌煙閣（北の閣は宮城西内の三淸殿の側に在つた。）〇交河（郡名。今新疆省吐魯番縣の地）

〇太子承乾不才。魏王泰多能有寵。潛有奪嫡之志。侯君集負功怨望。以

停婚踣碑

親征高麗

承乾暗劣、欲乘釁、因勸之反。事覺。廢爲庶人。君集坐誅。泰亦以險詐不立。立晉王治爲太子。魏徵嘗薦君集。上始疑徵阿黨。又有言。徵自錄前後諫辭、示起居郎褚遂良。上愈不悅。徵臨終、上面指公主、欲妻其子叔玉。至是停其婚、踣所立碑。○十八年、上親征高麗。先是高麗泉蓋蘇文弑其君。新羅又遣使言、百濟與高麗連兵、謀絕新羅入貢之路。乞兵救援。上遂討之、先如洛陽。

【口譯】太子承乾不才なり。魏王泰、多能にして寵有り。潛に嫡を奪ふの志有り。侯君集、功を負みて怨望す。承乾の暗劣なるを以て、釁に乘ぜんと欲し、因りて之に反を勸む。事覺はる。廢して庶人と爲す。君集坐して誅せらる。泰も亦險詐を以て立たず。晉王治を立てゝ太子と爲す。魏徵嘗て君集を薦む。上始めて徵が阿黨せしかと疑ふ。又、言ふものあり。「徵、自ら前後の諫辭を錄して、起居郎褚遂良に示す」と。上、愈よ悅ばず。徵、終に臨むとき、上、公主を面指して、その子叔玉に妻はさ

んと欲せしが、こゝに至りて、其の婚を停め、立つるところの碑を踏せり。○十八年上親ら高麗を征す。是より先高麗の泉蓋蘇文其の君を弑す。新羅又使を遣はして言ふ、「百濟と高麗と兵を連ねて新羅入貢の路を絶たんことを謀る」と。兵の救援を乞ふ。上遂に之を討たんとし、先づ洛陽に如く。

【通釋】太子の承乾は才能がなく、(第三子の)魏王泰は才能があつて帝の寵愛を受けて居り、内々太子の位を横取しようとする志を抱いてゐた。又侯君集は自分の手柄を鼻にかけて上の處置を怨んで居たが、承乾が心暗く才の劣つてゐるのを利用し、魏王との不和につけ込んで承乾に謀叛を勸めた。然し事が發覺して承乾は廢せられて一平民に落され、君集はぐるになつた罪で誅せられた。亦魏王泰も陰險な企があらはれて太子には立てられず、帝は(第九子の)晉王治を立てて太子とした。君集は以前に魏徴が推薦したのであるから、帝はここに始めて(既に亡くなつた)魏徴が(生前)に君集に阿り黨して居たのではなかつたかと疑ひ出した。そこへ又「魏徴は長い年月の間、帝に上つた自分の諫の辭を書き記して、起居郎の褚遂良に內々見せたことがあつた。」と奏する者があつたので、帝はますます不愉快に思つた。それで徴の臨終の時、帝は衡山公主を(つれて見舞はれ、公主を)指して徴の子の叔玉に妻せようと言はれたが、此の度(色々の事情から徴の忠誠を疑ふに至つて)その婚姻を取止め、

安市城

班レ師

また麗に立てた御撰宸筆の徴の碑を仆させた。○十八年帝はみづから高麗を征伐した。これより前、高麗では泉蓋蘇文といふ權臣が其の君の榮留王を弑して（寶藏王を立て、百濟と心を合せて新羅を苦しめたので）新羅は使を唐に遣して、「百濟と高麗とが兵を合せてわが國から唐に貢物を奉る道を遮斷致さうとしてゐます」といつて援兵を乞うて來た。それで帝は高麗を討たうと決心し、先づ洛陽へ往つて、（こゝで征伐の手筈を定めた）。

語釋 負功怨望（君集は高昌征伐に功を立てたが、其の折分捕品を私したことが後になつて發覺して獄に下された事がある。人の助けによつて辛うじて罪を免れたが、心中深く上を怨んで居た。）○險詐（陰險で詐のあること。）○阿黨（おもねりくみして黨を作ること。）○起居郎（起居郎は國史院の官で、天子の動作法度を錄して史を作ることを掌る。）

○十九年、上發洛陽至定州、進諸軍。上渡遼水、拔遼東城、降白巖城、攻安市城、大破其救兵於城下。安市城險兵精、堅守不下。議者欲拔烏骨城、渡鴨綠水、直取平壤、覆其本根、則餘可不戰而降。或又謂、親征異於諸將、不可乘危。上以遼左早寒、草枯水凍、士馬難久留、且糧將盡、敕班師。是行拔

魏徵在不有此行

十城、徙戸口七萬、三大戰、斬首四萬餘級。然戰士死者、幾三千人。戰馬死什七八。不能成功。深悔之、歎曰、魏徵若在、不使我有此行也。命馳驛祠徵以少牢、復立所製碑。

訓讀 十九年、上、洛陽を發して定州に至り、諸軍を進む。上、遼水を渡り、遼東城を拔き、白巖城を降し、安市城を攻め、大に其の救兵を城下に破る。安市城、險にして兵精しく、堅く守りて下らず。議する者、烏骨城を拔き、鴨綠水を渡りて、直に平壤を取らんと欲す。其の本根を覆さば、則ち餘は戰はずして降す可しと。或は又謂ふ。「親征は諸將に異なり。危に乘ず可からず」と。上、遼左は早く寒く、草枯れ水凍りて、士馬久しく留め難く、且糧將に盡きんとするを以て、勅して師を班す。是の行、十城を拔き、戸口七萬を徙し、三たび大に戰ひ、首を斬ること四萬餘級なり。然れども戰士の死する者、幾んど三千人、戰馬の死する、什に七八にして、功を成すこと能はず。深く之を悔い、歎じて曰く、「魏徵若し在らば、我をして此の行有らしめじ」と。命じて驛を馳せ、徵を祠るに少牢を以てせしめ、復た製する所の碑を立てしむ。

[illegible] 十九年帝は洛陽を出發して定陽(河北省内)に至り、諸軍を進ませた。帝は遼河を渡り、遼東城(今の遼陽)を攻め落し、その附近なる白巖城を攻め降し、(遼東城の南なる)安市城を攻め、大にその救援軍を破つた。しかし安市城は要害の地で兵は強く、堅く守つて容易に降らない。そこで色々と評議を凝らした。ある者は烏骨城(今の鳳凰城附近)を拔き鴨綠江を渡つて(高麗の首府)平壤を取らうと主張し、その根本の平壤さへ取れば他は戰はずして降すことが出來ようと論じた。又或る者は天子の親しく征伐されるのは諸將の出征とは異なり、危險を冒してはならぬといつた。帝は遼東は早く寒くなり、草は枯れ水は凍つて士卒や軍馬を長く留めて置くことの出來ないのを思ひ、其の上兵糧が缺乏しようとするので勅命を下して軍を還した。この征伐には十の城を取り、(征服した地方遼・蓋・巖三州の)戶口七萬を中國に徙し、三度大合戰をして四萬人の首を斬つた。しかし味方の戰死者が三千人もあり、軍馬は十のうち七、八は死ぬといふ有樣で、目的は達することが出來なかつた。それで帝は深くこの出兵を後悔し、「魏徵がもし生きてゐたら、朕をして出征せしめなかつただらうに」といつて嘆いた。そして驛を馳せて徵の靈を祠らせ、羊豕のいけにへを供へ、先に倒した親製の碑を復び立てた。

回紇乞レ置ニ官司一
雪レ恥酬ニ百王一

【語釋】逆水（即ち、逆河。）○戍（長縁兵をさす。）○遼左（遼東のこと。）○班レ師（軍を返すこと。）○戸口七萬（人口七萬といふ意味であらう。）○馳レ驛（驛を立てゝ往する宿々の牛馬を急がせること。）○少牢（祭のいけにへ、牛羊豕の三者を供へるのを大牢と云ひ、羊豕だけのを少牢といふ。）

○二十年、上如ニ靈州一、遣下李世勣擊中薛延陀上。破降レ之、招ニ諭敕勒諸部一。回紇等十一姓各遣レ使歸レ命、乞レ置ニ官司一。詔曰、朕聊命ニ偏師一、遂擒ニ頡利一、始弘ニ廟略一。已滅ニ延陀一、鐵勒百餘萬戶、請レ爲ニ州郡一。混元以降、殊未ニ前聞一。宜レ備レ禮告レ廟。仍頒ニ示天下一。上爲レ詩曰、雪レ恥酬ニ百王一、除レ兇報ニ千古一。刻ニ石於靈州一。

【通釋】二十年、上、靈州に如き、李世勣をして、薛延陀を擊たしむ。破りて之を降し、敕勒の諸部を招諭す。回紇等十一姓、各、使を遣して、命に歸し、官司を置かんことを乞ふ。詔して曰く、「朕、聊か偏師に命じて頡利を遂擒せしめ、初めて、廟略を弘めたり。すでに、延陀を滅し、鐵勒百餘萬戶、請ひて州郡となる。混元以降、殊に未前聞せず。宜しく、禮を備へて廟に告ぐべし」と。仍りて天下に頒示す。上、詩を爲り曰く、「恥を雪ぎて百王に酬い兇を除きて千古に報ず」と。石に靈州

に刻せしむ。

【通釈】二十年に帝は靈州（甘粛省内）に行き、李世勣に命じて薛延陀を攻めさせたが、勣は之を破つて降し、敕勒の諸部をも招き諭した。そこで回紇等の十一部落は使を行在所に出して帝の命に服し、そこに唐の地方官を置かれることを乞うた。帝は詔して「朕はさきに聊か一部の軍勢に命じて突厥の頡利可汗を逐うて生捕らせ、こゝに初めて朝廷の策略を實施した。今や已に薛延陀を滅し、敕勒の百萬戸は皆願ひ出てわが州郡となつた。このやうなことは天地開闢以來絶えてまだ聞かぬことである。宜しく禮式を備へて祖先の廟に奉告すべきである」といつて、廣く天下に布告した。その上帝は詩をつくつて、「（古來幾度か夷狄に攻められて）中國の蒙つた恥を洗ひ清め之を臣として前代の多くの君王に酬い、（中國の禍を爲した兇悪な）夷狄を除いて、それを遠き昔の人々に知らせることが出來た」といふ意味を詠んで、その詩を石に刻んで靈州の地に建てさせた。

【語釋】十一姓（回紇・拔野古・同羅・僕骨・多濫葛・思結・阿跌・契苾・跌結・渾・斛薛。）○偏師（一部分の軍隊、僅かの人數。）○廟略（廟は廟堂、略は策略。古は將を遣る時必ず廟堂の上で先づ制勝の策を定めた。之を廟略又は廟算といふ。）○鐵勒（鐵勒は敕勒の訛音。）○混元（太古の時元氣の混沌として未だ分らないのを混元と謂ふ。世界のたちはじまり。天地開闢の太初。）○殊（絶えての義である。）○雪レ恥（周の太王が岐山で獯鬻に攻められ、西漢の高祖が平城で匈奴に圍まれた恥辱のなきをいふ。）

房玄齡卒

無レ迹可レ尋

李世勣才知有レ餘

○二十二年、司空梁公房玄齡卒。上悲不レ自勝。玄齡佐レ上定二天下一。及レ終二相位一三十二年。號爲二賢相一。然無二迹可一レ尋。上定二禍亂一。而房・杜不レ言レ功。王・魏善諫諍。而房・杜讓二其賢一。英・衛善將レ兵。而房・杜行二其道一。理致二太平一。善歸二人主一。爲二唐宗臣一。○二十三年、上有レ疾。謂二太子一曰、李世勣才知有レ餘。然汝與レ之無レ恩。我今黜レ之。我死用爲二僕射一親二任之一。若徘徊顧望、則當レ殺レ之耳。乃左二遷疊州都督一。受レ詔不レ至レ家而去。

【訓讀】二十二年、司空梁公房玄齡卒す。上悲しみて自ら勝へず。玄齡上を佐けて天下を定む。相の位に終ふるに及ぶまで三十二年。號して賢相と爲す。然れども迹の尋ぬべきもの無し。上禍亂を定む。而して房杜功を言はず。王魏善く諫諍す。而して房杜共の賢に讓る。英衛善く兵に將たり。而して房杜共の道を行ふ。理太平を致し、善く人主に歸す。唐の宗臣たり。○二十三年、上疾有り。太子に謂ひて曰く、「李世勣は才智餘あり。然れども汝之と恩無し。我今之を黜けん。我死なば用ひて僕

射と爲して之を親任せよ。若し徘徊顧望せば、當に之を殺すべきのみ」と。乃ち疊州の都督に左遷す。詔を受けて家に至らずして去る。

〔通釋〕二十二年に（唐の元勳）司空梁公の房玄齡が卒去した。帝は之を悲しんで抑へることが出來なかつた。玄齡は（隋末に唐が兵を擧げた初めより）帝を佐けて天下を平定し、宰相の位において世を終へるまで三十二年（勤續した）。世間では賢相といつて居たが、しかし彼自身の事業としては功勞の迹方として稱ぬべき程の花々しいものがない。（その譯は）帝の禍亂を平定したについて（房玄齡・杜如晦の功は大であるのに）房・杜は自分の功を口にしない。王珪・魏徵は率直によく帝の過を諫めたので、房・杜の二人はその賢にゆづつて自分等は口出しなかつた。又英公の李世勣、衞公の李靖は善く兵を用ひる名將であつたので、房・杜二人は（己を沒して英・衞二人の）軍事的方針を行つた。かくて國家の統治はよく太平を致したが、（之を己の功とせず）帝の功德に歸著せしめた。此の如く（自分等は其の功に居らなかつたので世間的には事業は知られなかつたが實際には）唐の模範とすべき賢臣であつた。〇二十三年帝は病に罹られたが、（其の死を覺悟されて）太子に向つて言はれるには、「李世勣は才知が十二分にある。併しながらお前は彼に何の恩も施してない（だからお前に叛かぬとも限

ぬ。それで）朕は今彼を黜けて（遠方へ遣らう）。朕が死んだならばお前は彼を呼び返して僕射の役に任じ彼を信任するのだ。（さうしたならば彼はお前の恩義に感じて忠勤をはげむだらう）。若し我が命に對し、（不平を抱いて）二の足を蹈んでグズ〱するやうであつたら（お前の爲に）彼を殺してしまふばかりぢや」と。そこで彼を疊州（甘肅省內）の都督に貶したが、李世勣は命を受けると自分の家にも立寄らずにすぐ任地に赴いた。（是れに由つても彼の才智餘り有ることが分る。）

語釋 無迹（人の眼につくほどの功勞の痕迹がない。）○理（政治のこと。三代の高宗の名は治、故に唐では治の字を避けて理の字を用ひた。）○宗臣（師宗たる臣。唐家の諸臣が此の二人を宗匠として敬重し、敢て拮抗しなかつたことを言ふのである。）○徘徊顧望（徘徊は彷徨して進まないこと、顧望はあちらこちらふり返り見ること。左思右考ぐづ〱してゐて直ちに任所に赴かないことを謂ふ。）○司空梁公（司空は三公の一。梁公は梁國公爵。）

太宗崩

人主惟一心

上崩。在位二十四年。改元者一。曰貞觀。上雖以武功定禍亂、終以文德綏海內。常自以驕侈爲懼。嘗曰、人主惟一心、攻之者衆。或以勇力、或以辯口、或以諂諛、或以姦詐、或以嗜欲、輻湊各求自售。人主少懈而受其一、則危亡隨之。此其所以難也。嘗問侍臣。創業守成孰難。玄齡曰、草昧之初、群雄

竝起、角力而後臣之。創業難矣。

【訓讀】 上、崩ず。在位二十四年。改元する者一。貞觀と曰ふ。上、武功を以て禍亂を定むと雖も、終に文德を以て海内を綏んじたり。常に自ら驕侈を以て懼と爲す。嘗て曰く、「人主は惟一心にして、之を攻むる者は衆し。或は勇力を以てし、或は辯口を以てし、或は諂諛を以てし、或は姦詐を以てし、或は嗜欲を以てし輻輳して、各〻自ら售らんことを求む。人主少しく懈りて其の一を受くれば、則ち危亡之に隨はん。此れ其の難き所以なり」と。嘗て侍臣に問ふ、「創業と守成と孰れか難き」と。玄齡曰く、「草昧の初め羣雄竝び起り、力を角して後之を臣とす。創業難し」と。

【通解】 （その年五月）帝は崩じた。位に在ること二十四年、年號を改めたことは一度で、貞觀といつた。帝は武力を以て天下の禍亂を平定したが、その後は文教德化を以て天下を安らかに治めた。常にみづから驕り高ぶることと奢侈とを懼れた。ある時「人の君たる者は唯〻一心を以て（國を治めようとするのであるが）、之を攻め苦しめる者は澤山ある。或は勇力を以て（劫すものもあり）、或は辯舌で（甘く言寄つて來るものもあり）、或は媚びへつらつて（迷はさうとするものあり）、或は姦詐を以て

欺かうとするものもあり）、或は我が嗜み好む所に附け込んで（誘惑しようとする者もあり）、それ等のものが四方八方から澤山集つて來て、それ〴〵自分の身を賣りつけ仕官しようと求めるのである。それで人君たる者が少しでも油斷をして、其等の内の一つでもうかと受け入れたなら、危險滅亡が直ちに之に伴うて來る。是が人君たる者の困難なるところである」といつた。（かういふ次第で帝は常に驕侈を懼れ怠りを戒めたのである）。又ある時、左右の侍臣に「國家統治の帝業を新に創めるのと、已に成就した帝業を守つて行くのと、どちらが困難であるか」と問はれた。房玄齡は之に對へて、「まだ秩序の定まらない時代の初めに當つては、多くの豪傑が並び起つて（何れも帝王にならうとして、そこに激しい競爭が起つて來ますから）、此等の者と力をくらべて、之れに打勝つて後に之を臣とせねばなりません。それ故創業の方が困難であると存じます」といつた。

語釋　輻湊（輻は車の矢、車輪内の轂に集るた。湊はあつまる。即ち輻の車轂に湊まる如く、四方八方から一處に寄り聚まること。）　○自售（賣りつけること。自分の身を賣りつけて役人にならうとする。）　○草昧之初（草は雑亂、昧は不明の意。世の未だ開明にならぬ無秩序の時代。）　○角レ力（勇力を較べ競ふ）

魏徵曰、自レ古帝王、莫レ不下得二之於艱難一失中之於安逸上。守成難矣。上曰、玄齡與

吾共取天下、出百死得一生。故知創業之難。徵與吾共安天下、常恐驕奢生於富貴、禍亂生於所忽。故知守成之難。然創業之難往矣。守成之難、方與諸公慎之。自知神采爲臣下所畏、常溫顏接群臣、導人使諫、賞諫者以來之。惟末年東征之役、褚遂良嘗諫不聽。太子立。是爲高宗皇帝。

魏徵曰く、「古より帝王、之を艱難に得て、之を安逸に失はざるは莫し。守成、難し」と。上曰く、「玄齡は、吾と共に天下を取り、百死を出でて、一生を得たり。故に創業の難きを知れり。徵は、吾と共に天下を安んじ、常に、驕奢は富貴に生じ、禍亂は忽にする所に生ずるを恐る。故に守成の難きを知れり。然れども創業の難きは往きぬ。守成の難きは方に諸公と之を愼まん」と。自ら神采の臣下の畏るゝ所と爲るを知り、常に溫顏もて群臣に接し、人を導きて諫めしめ、諫むる者を賞して之を來したり。惟末年、東征の役、褚遂良嘗て諫めしかど聽かざりき。太子立つ。是を高宗皇帝と爲す。

【通釋】魏徵は(房玄齡の意見に反對して)「昔から何れの帝王も天下を艱難辛苦の間に取つて、安樂無事の時に失はない者はありません。(是から見ましても)守成の方が困難であると存じます」と對へた。(此の兩說を聞いた後)帝は「玄齡は朕と共に天下を取り、幾度も死ぬ樣な危險に出遭つて、やつと生き延びたものである故、創業の困難さを知つてゐるのだ。また魏徵は(天下を取つた後)朕と共に天下を治め、常に驕奢は富貴より生じ、禍亂は物事を等閑にするより起ることにひどく氣を揉んでゐる。故に守成の困難を知つてゐる。(それで二人の言は何れも尤もではあるが、しかし現在)創業の困難は已に過ぎ去つて、守成の困難に(逢着してゐるのであるから、是からは)朕は諸公と與に恐懼戒愼してこの守成の業を成し遂げたい」といつた。帝は威嚴ある自分の風采が臣下に恐れられるのを知り、常に顏を和げて群臣に對し、自分を諫めるやうに人を誘導し、諫める者は厚く褒めて、さういふ人の自分に近づいて來るやうにと仕向けた。たゞ(一つ諫を用ひなかつたのは)、晚年高麗征伐の役に褚遂良が切諫したが、それを聽き入れなかつた事があるだけだ。太子が立つた。これが高宗皇帝である。

【語釋】神采(神々しき風采。威嚴ある容貌。)　○東征之役(高麗征伐を言ふ。)

【解説】太宗在位二十三年、其年號によつて呼ぶ所の貞觀の治は、支那史上に名高いものであると同時に、其遺著の後世君臣を益するものが三部ある。

（一）、貞觀政要。これは太宗が國家政治の要について群臣と問答した事共を史臣呉兢が四十門に分つて類編したるものである。古來爲政者の參考書として推重せられ、本邦に於ても平安時代より既に朝廷及び博士家に珍重せられ、鎌倉時代には、右大臣實朝之を讀み、北條時頼之を寫して將軍頼嗣に奉り、又德川家康は論語、六韜、三略とともに最も本書を愛讀し、慶長五年特に之を出版した。

明治天皇に於かせられては、元田永孚先生より本書の進講を聞召され、明治神宮の寶物殿の御書物の部の中にも、本書の御陳列がある。今上陛下に於かせられても、宮內省御用掛、三島毅、小牧昌業兩博士より本書の進講を聞召された程であるから、以て本書の內容實質を察知すべく、帝王學・爲政者の參考書として貴ぶべきものである。古版の外、左記の近版がある。

○今日進學（御進講）入 貞觀政要

○假名貞觀政要　德富蘇峰考證解說文附　民友社發行

（二）、帝範。此の書は貞觀二十二年、太宗親ら撰して、太子に賜ひ、以て帝王の儀範を示されたも

ので、帝王學の良教科書といつてよろしい。明治大帝に於かせられても、此書を御愛讀あらせられ、大正天皇亦此書に御心を注がせたまひ、大正四年此書再版の御沙汰あり、翌五年成り、諸皇族殿下を始め奉り、高位大官の人々に御下賜あらせられたと承はる。尚左の近刊もある。

○帝範臣軌國字解　市川鶴鳴(天明時代の學者)著、德富蘇峰解說　民友社發行

○帝範臣軌　德富蘇峰解題　民友社發行

(三)、群書治要。此書は魏徵の奉勅撰で、古來の經史諸子の讀書より政治の要に關するものを拔いて編した者で、我國に於ても仁明天皇及び歷代の天皇之を尊崇遊ばされ、德川時代にも元和二年と天明五年に開版された。

尚、七德舞に就て一言する。此舞は太宗が武の七德に因つて作られた唐の舞樂として有名のものであり、一名秦王破陣樂、又名武德太平樂といふ。(武の七德とは春秋左氏傳の宣公十二年に見え、武は禁レ暴、戢レ兵、保レ大、定レ功、安レ民、和レ衆、豐レ財の七德を備へて居るとの義である)。而して太宗より約百六十年後の白樂天(名は居易)の作の新樂府といふ詩集の第一に七德舞と題して、太宗の一代を賛美したものがある。

七德舞美㆔撥㆑亂陳㆓王業㆒也

七德舞。七德歌。傳㆑白㆓武德㆒至㆓元和㆒。元和小臣白居易。觀㆑舞聽㆑歌知㆓樂意㆒。樂終稽首陳㆓其事㆒。太宗十八舉㆓義兵㆒。白旄黃鉞定㆓兩京㆒。擒㆑充(一)戮㆑竇(二)四海淸。二十有四功業成。二十有九卽㆓帝位㆒。三十有五致㆓太平㆒。功成理定何神速。速在㆔推㆑心置㆓人腹㆒。亡卒遺骸散㆑帛收。飢人賣子分㆑金贖。魏徵夢見子夜泣。張謹(三)哀聞辰日哭。怨女三千放㆓出宮㆒。死囚四百來㆓歸獄㆒。翦㆑鬚燒㆑藥賜㆓功臣㆒。李勣嗚咽思㆑殺㆑身。含㆑血吮㆑瘡撫㆓戰士㆒。思摩(四)奮呼乞㆑效㆑死。則知不㆔獨善戰善乘㆑時。以㆑心感㆑人人心歸。爾來一百九十載。天下至㆑今歌㆓舞之㆒。歌㆓七德㆒。舞㆓七德㆒。聖人有㆑作垂㆓無極㆒。豈徒耀㆓神武㆒。豈徒誇㆓聖文㆒。太宗意在㆑陳㆓王業㆒。王業艱難示㆓子孫㆒。

(一)充―王世充　(二)竇―竇建德　(一)(二)共に隋末の豪傑。

(三)張謹は張公謹のこと。其死せし日が辰日に當つた。當時の信仰によれば、辰日には哭することを不吉として之を忌んだが、太宗は、「君臣の義は父子に同じ。情、哀に發す、何ぞ辰日を避けん」といひ、大に哀哭した。

(四)思摩―突厥の可汗、李思摩のこと。本姓は阿史那、李は太宗の賜姓である。

高宗皇帝　帝範十二篇　褚遂良　李勣　立武后　李猫

高宗皇帝、名治。母長孫皇后。承乾廢、長孫無忌力勸太宗立治。在東宮七年。太宗嘗作帝範十二篇以賜。曰、脩身治國盡在其中。一旦不諱、更無言矣。至是卽位。長孫無忌・褚遂良、受先帝遺詔輔政。以李勣爲左僕射、尋爲司空。○永徽五年、以太宗才人武氏爲昭儀。○六年、上欲廢皇后王氏立武昭儀爲后。許敬宗・李義府贊之、褚遂良不可。以問李勣。勣曰、此陛下家事。何必更問外人。事遂決。褚遂良貶、義府參知政事。義府貌若溫恭與人嬉怡、而狡險忌克。人謂笑中有刀。柔而害物。謂之李猫。

【通釋】高宗皇帝、名は治。母は長孫皇后なり。承乾の廢せらるゝや、長孫無忌、力めて太宗に勸めて治を立つ。東宮に在ること七年なり。太宗嘗て帝範十二篇を作つて以て賜ふ。曰く「身を修め國を治むること盡く其の中に在り。一旦不諱なるも、更に言ふこと無からん」と。是に至りて位に卽く。長孫無忌・褚遂良、先帝の遺詔を受けて政を輔く。李勣を以て左僕射を爲し、尋いで司空と爲す。

〇永徽五年、太宗の才人武氏を以て昭儀と爲す。〇六年、上、皇后王氏を廢し、武昭儀を立てゝ后と爲さんと欲す。許敬宗・李義府之を贊せしも、褚遂良可かず。以て李勣に問ふ。勣曰く、「此れ陛下の家事のみ、何ぞ必ずしも更に外人に問はん。」と、事遂に決す。褚遂良貶せられ、義府、參知政事たり。義府、貌、溫恭なるがごとくにして、人と嬉怡し、而して狡險忌克なり。人問ふ、「笑中に刀有り。柔にして物を害す。」と、之を李猫と謂ふ。

〔通解〕高宗皇帝、その名は治で、その母は長孫皇后である。（太子の）承乾が（太宗の貞觀十七年に謀叛の罪で）廢せられた時に、（伯父に當る）長孫無忌が、熱心に太宗に勸めて治を立てゝ太子とした。治が太子となつて東宮に居ること七年で（父の太宗が崩じた。）太宗は生前、（治太子の爲に）（帝王たるものの心得とも謂ふべき）帝範十二篇の書を作つて、太子に授けて「およそ、一身を修め、國家を治むるの道は、殘らずこの十二篇の中にあるぞよ。で、朕が一旦この世を去ることになつても、何も他に遺言は無いぞ。（これが遺言の代りである。よく讀んで心得ておくがよいぞ）」と曰はれた。で、この度即位したのである。長孫無忌と褚遂良とが先帝太宗の遺詔を受けて、（協力して）政治を輔佐した。（高宗初年の政が貞觀の遺風があつて、よく治蹟を擧げたのは、この二忠良の輔佐によつたので

ある。)(そこで先帝の遺された指金どほり、)李勣を(疊州から召還して)左僕射とし、間もなく司空として(大いに信任した)。(この李勣があまり良くない男であることや、褚遂良が同州に左遷せられたことなどから、高宗の治世が段々くづれて來るのである)。○永徽五年に高宗は父太宗の才人であつた武氏を、自分の昭儀とした。(閨門の亂れも、かうなると禽獸に近いといはねばならぬ)。同じく六年に、高宗は、皇后の王氏を(子の無いのを名として)廢し、(その代りに寵愛の)昭儀武氏を立てて皇后としようとした。(これは、全く武昭儀の色香に迷つたからである。)すると、許敬宗と李義府との(二小人)がこの議に賛成した。ところが褚遂良がどうしても賛成しなかつた。(といふのは、先帝が臨終の際、高宗と王氏とを枕もとに並べ、長孫無忌・褚遂良の二人を呼んで、この吾子夫婦の將來を呉れ〴〵も宜しく賴む、との遺託があつたからで、遂良は死を期して極諫したのである)。(果せるかな、帝は大いに怒つて遂良を宮外に引出してしまつた。この時、武昭儀は、「遂良の畜生を殺してしまへ、」と大聲でわめいたが、傍から長孫無忌が「先帝からの重臣に刑を加へてはならない」と止めたので、助かつたといふ)。(この外にも諫め爭ふ者があつて、高宗は廢后を決することが出來なかつたが、どうしても武昭儀を立てゝ皇后としたいので、今度は信任してゐる)李勣に、その可否を問うた。李

勣は、(高宗の機嫌を損じまいとして、事も無げに、「これは、陛下の御一家内の一小事です、何もわざ〳〵他人に御相談なさる程の事ではございません。」と答へたので、遂に廢后の事が決してしまつた。(かうなると、氣の毒なのは再び右僕射となつた) 褚遂良で、(潭州の都督に) 貶されてしまひ、李義府が參知政事となつて朝政に參與するやうになつた。この李義府といふ男は、見かけが溫恭らしく、人と交際するにも愛嬌たつぷりであるが、腹の中は狡く邪で、人を忌みそねみ、自分より優れてゐる者を倒さうといふ根性を持つてゐた。それで世間では評判して「李義府の笑顏の中には恐ろしい刀が隱されてをる、柔かに見えるが、よく物を傷害する。」といつて、(丁度猫のやうに陰險な男だといふので)、陰で李猫といふ綽名を呼んでゐた。

【語釋】 高宗(太宗の第九子。) ○長孫皇后(河南洛陽の人。無忌の妹。隋にもる賢明の后である。「女則」十篇の著がある。長親十年、年三十六で崩じた。諡して文德順聖皇后といふ。) ○帝範十二篇(君體、建親、求賢、審官、納諫、去讒、戒盈、崇儉、賞罰、務農、閱武、崇文の十二篇を四卷としたもの。貞觀二十二年正月の作。) ○不諱(死をいふ。不レ可レ諱の略である。死は人の諱み避くることの出來ないものであるからである。) ○更無レ言(何も別に遺言はないのだの意。言は遺言の意。) ○長孫無忌・褚遂良・李勣(既出。李勣は李世勣のことである。) ○才人・昭儀(ともに唐代の女官。天子の側室は四等で二十人ある。第一が三妃で皇后に次ぐ。位は正一品の格式。第二は六儀で正二品の格式。昭儀は即ちその一人である。第三は美人で正三品の格式で四人。第四が才人で正四品の格式、七人ある。武氏は、この才人から六儀の一人となつたのである。) ○許敬宗(新城の人。性輕傲、自ら高うして人を凌ぐ。) ○李義府(初め中書舍人であつたが、長孫無忌のために左遷せられようとした。何うかして脱れようとして、高宗の心持を察し諂ひ、武昭儀を皇后にせられたがよいとの建言をし、高宗の歡心を買つて左遷をまぬかれ、更に中書侍郎に昇進した。かういふ風に小人であるので、本文に

「叙庭云々」とあるのはよく當つてゐる。）○外人（一家以外の人の意。）○參知政事（宰相に陪席して朝政に參預する。）○貌（音バウ。「かたち」と訓ずる。容貌姿態を含めていふ。俗にいふ「見かけ」）○溫恭（おだやかにして、つゝしみのあること。温は溫の俗字。）○與レ人嬉怡（嬉怡は、常ににこ〳〵として愛嬌のあること。與レ人は、人と相接するにの意で、交際のこと。）○狡險忌克（狡は狡猾。險は陰險。忌は忌避。克は克伐怨欲の克で、克ち凌がうとする心。惡るがしこくて腹が黒くて、人の長を忌み嫌ひ、己に勝れる者を倒し凌がうとする性格。）○笑中有レ刀（見かけはにこ〳〵として優しいが、心中恐るべき奸策を抱いてゐて油斷のならないことを喩へたものである。）○李猫（李義府の綽名であるが、よくその人物性格を諷罵し得たものである。恐ろしい爪牙を藏して、周到に猫なで聲を發するところ、正しく「笑中有レ刀、柔而害レ物」に當つてゐる。）

武后殺無忌

○武后以長孫無忌不助己、深怨之。顯慶四年、削無忌官、黔州安置。遂良先一年卒。至是無忌與初議者、柳奭・韓瑗、皆被殺。

太上玄元皇帝

○乾封元年、上封泰山、至亳州、尊老君爲太上玄元皇帝。○以李勣爲遼東大總管、伐高麗。○總章元年、李勣拔平壤、降其王。高麗悉平、置安東都護府。

天皇天后

○上元元年。帝稱天皇、后稱天后。

【通釋】○武后、長孫無忌が己を助けざるを以て、深く之を怨む。顯慶四年、無忌の官を削つて、黔州に安置す。遂良、先つこと一年にして卒す。是に至つて無忌と初めの議に與る者、柳奭・韓瑗、皆

殺さる。○乾封元年、上、泰山に封じ、亳州に至り、老君を尊んで、太上玄元皇帝と爲す。○李勣を以て遼東大總管と爲し、高麗を伐つ。○總章元年、李勣、平壤を拔き、其の王を降す。高麗悉く平ぎ、安東都護府を置く。○上元元年、帝、天皇と稱し、后、天后と稱す。

通解 (皇后王氏を廢して、自分が皇后に立つについて)武氏は、長孫無忌が自分の計畫を援助して呉れなかつたことを非常に怨んでゐた。(それで小人の許敬宗に言付けて、無忌を罪におとすやうに計らせた。その結果、顯慶四年に(無忌に謀叛の企があるといふ許敬宗の讒言によつて、高宗は)無忌の官(大尉)を削つて、遠隔の黔州に流してしまつた。(一方)褚遂良は、(前に潭州に貶されたが、その後、桂州、愛州と段々邊鄙の地にうつされて、)無忌の黔州左遷に先だつこと一年に死んだ。ここでいよ〳〵、無忌とともに初め廢后の議に反對した者、柳奭も韓瑗も皆(無忌と謀叛の同類であるといふ名のもとに)殺されてしまつた。○乾封元年の(正月)に(自分の威德を誇る帝王がよくやる祭である所の)泰山の封祭をして(年號を乾封と改めた)。その足で、(昔、老子が栖んでゐたといふ)亳州に行つて、老子のお祭りをして、尊號を上つて太上玄元皇帝とした。○(乾封元年十二月)に李勣を以て遼東大總管となして高麗を征伐させた。○(一年半後の)總章元年には、勣は平壤を陷

れ、その王（高藏といふ）を降參させて、高麗はすつかり平定した。（百濟も新羅も既に歸服してゐるのだから、これで朝鮮は全部、唐の支配に屬したわけである）。それで安東都護府を（平壤に）置いて、（朝鮮を治めさせた）。○上元元年に、高宗は天皇と稱し、武后は天后と稱した。

【語釋】深怨レ之（王皇后を廢して自分が后に立つについては、先帝の遺詔を受けた長孫無忌を、先づ味方にせねばならないので、武氏は帝と揃つて無忌の家に臨幸して、黄金や錦など〇車十輛に滿載して贈つたり、無忌の三子に朝散大夫を授けたりしたが、結局、無忌の心を奪ふ事が出來ず、いつも反對されてゐたので、深く遺恨に思つたのである。）○削ニ無忌官一（無忌の官は、その時太尉であつたが、その趙國公の封爵まで削つたのである。）○黔州（今の四川省彭水縣の地。）○安置（極遠の地方に流し、その地に置いて生還させぬこと。放逐といふに同じい。）○柳奭（廢せられた王皇后の母方の叔父で、中書にまでなつてゐたが、象州（今の廣西省郁州）の刺史に貶せられた。それが許敬宗の讒のために謀叛の一味とせられて、顯慶四年の七月に、長安で斬られた。）○韓瑗（褚遂良が廢后反對の硬論を吐いてそのため殺されやうとした時、無忌と共に涕泣して爭ひ諫めた男である。無忌に謀叛を勸めたと誣ひられて斬られる所であつたが、その少し前に病歿した。）○亳州（今の安徽省。古の楚の苦縣。老子の廟がある。）○老君（老子の敬稱。）○太上玄元皇帝（老子が唐の遠祖となつたについては、高祖皇帝の時に、吉善行といふ者が、羊角山で白衣の老翁に出遇つたところ、その老翁が、自分は唐の天子の先祖である。その旨、天子に告げよと言つたといふので、高祖に言上すると、唐の姓は李であるから、その老翁は李聃即ち老子であらうといふことになつて、羊角山に老子の廟を建てたのが初である。それが此度、太上玄元皇帝の尊號を受けたのである。）○降ニ其王一（王と高麗王は高藏で、力盡きて降服したのである。高氏は漢時代から凡そ九百年もつゞいてゐたのであるが、こゝに至つて亡びた。）

【餘說】唐は太宗から高宗へかけて、連りに外征の功を立て、高宗の世には東は朝鮮から西は中央亞細亞に及び、北は西比利亞の南邊から、南は印度支那半島に及ぶ、その廣大なる地域に政令を布くに

至つた。蓋し漢民族の發展としては、この時、實に最大の版圖に達したのである。而してその朝鮮との關係を見るに、高宗は蘇定方を遣はして百濟を伐つて之を亡ぼしたが、その王子の豐璋は質となつて我が國に在つたので、百濟の遺臣等は王子を我國より迎へ、且つ援を我に乞うて興復を謀つた。こゝに於て我が齊明天皇は皇太子中大兄と謀つて、阿部比羅夫を遣はして之を救はしめ、躬ら筑紫に幸して、百濟救援の軍を統督あそばされた。比羅夫は白村江(忠淸道錦江)に於て唐將劉仁軌と大いに戰つたが、利あらずして師を還し、一方、百濟の遺臣等は內訌を生じて、豐璋は高麗に遁るゝに至つた。これぞ朝鮮半島に於ける日支衝突の始である。かくて後、本文にある通り、高宗は李勣をして高麗を討たしめ、首府平壤を陷れて之を亡ぼしたので、半島にはたゞ新羅一國が存するのみとなつた。

○初、帝、以賤妾子忠爲太子。武后廢之、立后之子弘。弘、仁孝中外屬心。忤后意。鴆之、立其次。曰賢。又以事廢之、而立其次哲。○上、在位改元者十三。曰、永徽・顯慶・龍朔・麟德・乾封・總章・咸亨・上元・儀鳳・永隆・開耀・永淳・弘道、凡

李善感
鳳鳴朝陽

三十四年。而政在中宮者三十年矣。自褚遂良等死後、群臣無敢諫者。李善感、嘗因事一諫。人以爲鳳鳴朝陽。上崩。太子哲卽位。是爲中宗皇帝。

【譯文】初め、帝、賤妾の子、忠を以て太子と爲す。武后、之を廢して、后の子、弘を立つ。弘、仁孝にして中外心を屬す。后の意に忤ふ。これを鴆してその次を立つ、賢といふ。又、事を以て之を廢して、その次哲を立つ。上、在位改元する者十三。曰く、永徽・顯慶・龍朔・麟德・乾封・總章・咸亨・上元・儀鳳・永隆・開耀・永淳・弘道、凡て、三十四年。而して政、中宮に在る者三十年なり。褚遂良等死せしより後、群臣敢て諫むる者なし。李善感、かつて事に因つて一たび諫む。人以て鳳、朝陽に鳴くと爲す。上、崩ず。太子哲、位に卽く、これを中宗皇帝と爲す。

【通解】初め(高宗卽位の四年七月)(王皇后に子が無いので、柳奭の計ひで)身分の卑い者であつた(劉氏の腹から生れた)忠といふ皇子を皇太子とした。(所が、武氏が后となるに及んで、許敬宗に建議させて)、忠を廢して、自分の子の弘を立てた。弘の人となりは、仁心あり孝心あつて、(天晴れ明君となられる方であると思つて)、朝廷の中も外も皆賴もしく思つてゐた。ところが、武后の氣に忤ふ

所があつたので、毒殺して、その次の子の賢といふのを太子とした。ところが又、或る事の爲に廢して、その次の子の哲といふのを立てた。高宗在位の間に、年號を改める事が十三回、すべて三十四年で、その中、政治が武后の手にあること三十年間であつた。褚遂良（長孫無忌・韓瑗・柳奭たちが）（諫言した爲に）命を落してから以後、群臣中（二十年間も）一人も諫める者が無かつた。（然るに）李善感が、或時或事について一度諫言した事があつた。（これが後にも先にも唯一度の諫言であつたので、非常に珍らしい稀なこととして）人々が「鳳凰が山の東で鳴いた」と喩へ言つた。高宗が崩くなつた。太子の哲が帝位に即いた。これが中宗皇帝である。

語釋　賤妾云々（後宮中、身分の高い者の生んだ子を太子にすると、後々王皇后の爲にならぬ憂があるといふので、柳奭の計ひで、微賤な劉氏の生んだ子、陳王の忠を立てたのである。）○仁孝（なさけぶかくやさしくて孝心あつきこと。）○中外（朝廷のうちと朝廷のそと。朝野一般の意。）○屬ㇾ心（のぞみをかける。賴みにする。）○仵ニ后意一（武后の心持に一致しないで自然に反する形になること。俗にいふ氣が合はないこと、その事實としては、蕭妃の生んだ二人の王女が婚期を過して猶は宮中に在るのに、弘が同情して、上元二年に、帝にその縁付け方を願ひ出したのが、最も武后の氣に障つたのである。仵は音ゴ、さかふ。さからふ。）○以ㇾ事（或る事件の爲にの意。その事件といふのは、武后が信じてゐた方士の某が暗殺せられたのや、賢の所爲と疑つたがためである。）○中宮（皇后の宮殿で、武后を指したものである。）○改元者十三（儀鳳のつぎに調露といふのが落ちてゐるので、實は改元十四になるのである。）○李善感（永淳元年七月、高宗が、嵩山の南に奉天宮を築造しようとした時に、數年來の凶作で餓死の民が多い、のみならず、外夷の入寇で出兵が引續いてゐる。國用多端の折に土木を起して勞役に苦しましめるのは宜しくない、と諫言したのが、「因ㇾ事一諫」である。それも聽き入れられなかつた。）○鳳鳴朝陽（「鳳」は、ほうわう。世に道あり聖人出づる時現はれるといふ瑞鳥。朝陽は、山の東向きで朝日を受けるところ。鳳凰が山の東で鳴くとは、天下泰平の瑞應である。詩の大雅に、「鳳凰鳴矣。于ニ彼高岡一。梧桐生矣。于ニ彼朝陽一。」とある。轉じて、世にも珍らしき盛事を褒めていふ。）李善

實の諫言は二十年來唯一度の美事であつたので、世人がかく褒め稱したのである。）　○上崩（弘道元年十二月。年五十六であつた。）

中宗皇帝

武后稱レ帝

中宗皇帝、初名顯。改名哲。既即位、立韋妃爲后、改元曰嗣聖。明年、武后廢帝爲廬陵王、而立其弟旦。旦、擁虚器者七年。改元曰垂拱、曰永昌。太后廢旦爲皇嗣、而稱帝。是爲則天武氏。

【訓讀】中宗皇帝、初めの名は顯、哲と改名す。既に位に卽き、韋妃を立てゝ后となし、改元して嗣聖といふ。明年、武后、帝を廢して廬陵王となし、其の弟旦を立つ。旦、虚器を擁する者七年。改元して垂拱といひ、永昌といふ。太后、旦を廢して、皇嗣となし、帝と稱す。是れを則天武氏と爲す。

【通釋】中宗皇帝は初めの名を顯といつた。後に改名して哲といつた。既に皇帝の位に卽いて、韋妃を立てゝ皇后とし、年號を改めて嗣聖といつた。明くる年、（實は、嗣聖元年の二月。）武后は、中宗を廢して廬陵王とし、その弟の旦を立てゝ帝とした。（この時、文明と改元したので、嗣聖元年と同年の出來事であるが、明年と書かれたのである。）旦は、帝（睿宗皇帝である）に立てられたものの、名

則天武氏

斌媚娘

李君羨

目ばかりで、政權が武氏の手にあること七ヶ年。その間に垂拱・永昌と改元があつた。（八年目に）太后の武氏は、旦を廢して後繼として、自分が皇帝の位に卽いた。これが則天武氏である。

語釋 中宗皇帝（高宗の第七子。韋妃の父の韋元貞を侍中に任じようとした時に、中書令裴炎の反對に逢つて、「我れ天下を以て韋元貞に與ふるも不可でない」といつた一言が、武氏の機嫌を損じて、廢せられて廬陵王となつたのである。均州に居ること一年、房州にをること十三年で、また太子となり、それから八年目に正位に復したが、皇后韋氏のために毒を以て弑せられた。） ○嗣聖元年（わづか正月一ヶ月だけの年號で、二月には文明と改元され、次いで光宅と改元されたので、嗣聖・文明・光宅はみな同じ一年間のことで、垂拱元年がその明年にあたつてゐる。） ○旦（高宗の第八子。後の睿宗皇帝である。名目だけの帝で、七年間別殿に屛居して政事に預ることが無かつた。廢せられて武氏の時に皇嗣たること九年、相王に改封せられること十年で復び卽位し、在位三年で皇太子に位を讓り太上皇帝と稱した。） ○擁二虛器一（名義ばかりのものを虛器といふので、君主の位にあつてもその實權のないこと。）

○則天武氏、故荊州都督武士彠之女也。太原人。年十四、太宗聞二其美一。召シテ入二後宮一。以二貞觀十一年一爲二才人一。時天下歌曲名二斌媚娘一。已成レ讖。貞觀末、太白屢晝見。太史占云、女主昌。又傳二秘記一、唐三世後、女主武王代有二天下一。太宗惡レ之。嘗與二群臣一宴、令三各言二小名一。武衛將軍李君羨、官稱封邑皆有二武字一、而小名五娘。太宗愕曰、何物女子、乃爾健邪。或奏、君羨謀二不軌一。遂誅レ之。

原文 ○則天武氏は、故の荊州の都督、武士彠の女也。太原の人。年十四、太宗其の美を聞き、召して後宮に入る。貞觀十一年を以て才人と爲る。時に天下の歌曲を、武媚娘と名づく。已に讖を成す。貞觀の末、太白屢〻晝見はる、太史占して曰く、「女主昌ならん」と。又秘記を傳ふ、「唐三世の後、女主武王代りて天下を有たん」と。太宗之を惡む。嘗て群臣と宴し、各〻をして小名を言はしむ。武衞將軍李君羨、官稱封邑、皆武字有り、而して小名は五娘と。太宗、愕いて曰く、「何物の女子ぞ。乃ち爾かく健なるや」と。或るひと奏す。「君羨、不軌を謀る。」と。遂に之を誅す

則天武氏

通釋 則天武氏は、以前の荊州の都督であつた武士彠の女である。(山西)太原の人で、年十四の時、太宗皇帝がその美人であることを聞かれ、召出されて大奥に入つて(直ぐ、即ち)貞觀十一年(の冬)才人となつた。(太宗にお目見えして、號を娬媚と賜はつたが、)その頃、世間に盛に唄はれた流行唄に娬媚娘といふのがあつたが、(考へて見ると、それが)現に、(武氏の大發展の)豫言となつてゐたのである。(のみな

らず）貞觀の末には、太白星がしば〳〵晝の空に見れた。（それは、凶兆であるので、）天文暦數を掌る役人が占つて、「女性の君主が榮える兆であらう。」と、判斷した。又、民間に、不可思議な書物が傳つて、それに「唐三代の後には、女主の武王が（唐の皇帝に）代つて、天下を支配するであらう」こと、（記されてあつた）。太宗は、これをいま〳〵しい事に思つた。ある時、群臣と酒宴をして、（席上で何氣なく）各〻幼年時代の名を言はせて見た。（不可思議な書物に、女主の武王とあつたのを氣にしての事であつたが、まさか、女が天下を取るとは思へないので、これは女めいた名を持つた男であらうと考へて、かうして幼名を言はせて探つたのである）。（すると運惡くも）、武衞將軍の李君羨が、官の名稱が武衞將軍で、封邑の地名が（武連縣で）、皆、武といふ文字が着いてをり、その上、幼名が五娘といふ女めいた名であつたので、太宗は、ぎくりとしたが（覺られまいとして）、「何といふ女だ。まあこんなに强いのは」と（笑ひまぎらせた）。その後、或る者が、「李君羨が謀叛を企んでゐます」と、奏聞したので、遂に李君羨を誅してしまつた。

語釋 故（武氏が後宮に入つたのは、武士彠の死後であつたので、「故」といつたのである。） ○荆州（今の湖北省江陵縣地方。） ○都督（軍の總大將。） ○武士彠（武は姓、士彠は名。幷州文水の人、字富み、頗る交結を好んだ。高宗の時、重功を以て光祿大夫に拜し、太原君公に封ぜられた。） ○太原（山西省にあり、前出。） ○歌曲（はやりうた。俗歌。） ○媚娘（この曲、隋の末頃から唄はれてゐたものであるが、太宗の時、最も

流行したものと思はれる。妹は、擬とも嫦とも書く。）　○讖（音シン。未來の吉凶禍福の前兆。又その豫言。未來記。圖讖、符讖、讖記、讖書、讖緯、等の熟語がある。）　○太白（宵の明星、即ち金星である。これが晝の空にあらはれるのは、古來戰亂革命の凶兆とせられてゐる。）　○太史（天時星曆祭祀等のことを掌る官。）　○秘記（不可思議な記錄。奇怪な書き物。「秘」は祕の俗字。）　○三世後（三世ま、高祖、太宗、高宗の三代を指してゐる。）　○小名（幼名。幼字。幼少時の名前。）　○武衛將軍（武衛は、十四衛の一。宿衛を衞る。）　○官稱封邑（官の名稱と、封邑の地名。）　○皆有武字（左武衛將軍で、武連縣公で、その上、武安の人であつたのである。）　○不軌（常軌の意。軌は法度で、法度に循はないのを不軌といふ。）

李淳風

密問太史李淳風。對曰、臣仰觀天象、俯察曆數、其人已在陛下宮中。不過三十年、當王天下。殺唐子孫殆盡。其兆已成矣。太宗崩。才人年二十四矣。爲尼。高宗幸寺、見之而泣。時王皇后與蕭淑妃爭寵。密令長髮、勸高宗納之。既入而后與淑妃皆失寵。武氏年三十二。遂自昭儀爲后。王蕭皆爲所殺。贈父士彠周國公、尋加贈太原王。高宗苦風眩、不能視百司奏事、或使皇后決之。后性明敏、涉獵文史。處事皆稱旨。由是委以政事。權與人主侔。人謂之二聖。

高宗納武氏爲后

二聖

【訓讀】密に、太史李淳風に問ふ。對へて曰く、「臣、仰いで天象を觀、俯して曆數を察するに、其の人、已に陛下の宮中に在り。三十年を過ぎずして、當に天下に王たるべし。唐の子孫を殺して、殆んど盡くさん。其の兆、已に成れり」と。太宗崩ず。才人、年二十四。尼と爲る。高宗、寺に幸し、之を見て泣く。時に王皇后、蕭淑妃と寵を爭ふ。密に髮を長ぜしめ、高宗に勸めて之を納る。已に入つて、后と淑妃と皆寵を失ふ。武氏年三十二、遂に昭儀より后と爲る。王・蕭皆爲に殺さる。父士彠に周國公を贈り、尋いで太原王を加贈す。高宗、風眩を苦しみ、百司の奏事を視ること能はず、或は皇后をして之を決せしむ。后、性明敏にして文史を涉獵す。事を處して、皆旨に稱ふ。是に由りて委ぬるに政事を以てす。權、人主と侔し。人、之を二聖と謂ふ。

【通譯】（太宗は、李君羨を誅して、それで禍の根が絶えたかどうか、まだ不安であつたので）、そつと、太史の李淳風に問うた。對へて、「私が、天文の現れを見、時運の運り合せを考へまするに、其の人（唐の天下を奪ふもの）は現に、陛下の宮中に入込んでをります。今から三十年内に天下に王となつて、唐皇室の子孫を殆ど殺しつくすでありませう。その兆が、（天文曆數の上に）もう出來上つてをります」と言つた。

(そのうち) 太宗が崩御された。(その時、)才人の武氏は、年が二十四であつた。(それで、多くの後宮の女子たちと一しよに、髪をおろして) 尼となつた。(すると、太宗の忌日に)、高宗が、(供養のため) その寺にお出ましになつて、出家姿の武氏を見て泣かれた。(といふのは、父太宗が在世中、高宗は武氏の美しさを見て、ひそかに思を寄せ、その後、心に忘れるひまが無かつた程であるので、變り果てたその姿を見て憐を催して泣いたのである。尼も亦、高宗を見て泣いたといふことである)。その頃、高宗の王皇后が、淑妃の蕭氏と、高宗の寵愛を爭つてゐたので、(王皇后は、どうかして蕭氏に對する高宗の愛を奪つて、蕭氏を困らせてやらうと考へてゐた矢先のこととて、この事を聞くと、武氏を利用して蕭氏に對するのが妙計であると思つて)、こつそり武氏に髪をのばさせ、高宗に勸めて後宮に納れさせた。(ところが、一度、武氏がお側に出ると、その寵を一身に擔つて) 王皇后も蕭淑妃も、どちらも寵愛を失つてしまつた。(その後、武氏は、自分の生んだ皇女を絞殺して、王皇后の所爲だと誣ひたりして、王皇后をしりぞけて)、年三十二の時に、遂に昭儀から (一足とびに) 皇后となつた。そして、王皇后も蕭淑妃も、武氏のために (無慘に) 殺されてしまつた。(武氏が皇后となつた明くる年の顯慶元年に、武氏の亡父の) 士彠に周國公の爵號を下されて、(後十四年に) 更に太原王を贈られた。

（元來）高宗は、癲癇の疾があつて、そのため、諸役人から奏上する政務を一々取りさばく事が出來ないので、（顯慶五年の冬から、）皇后武氏をして代つて處決させた。皇后武氏は、生れつき頭が良くて、その上、學問もあつて博く文章や歴史を讀んでゐたので、政務の取りさばきが一々高宗の氣に入つた。それで、すつかり萬般の政事を委されることになつて、その權勢は皇帝と同樣であつた。世間ではこれを二人天子と言つた。

語釋　李淳風（岐州雍の人。幼にして爽秀、群書に通じ、特に天文暦數に明かであつた。貞觀の初めに、渾天儀を制し、法象書七篇を著して太宗に上り太史令となつた。典章文物志、乙巳占等の著がある。）　○天象（天體の現象。天文。）　○暦數（こよみのこと。こゝでは、まはり合せの義で、帝王相繼ぐ運命。）　○爲尼（太宗が崩じた時、濟度尼寺を靈寶寺として、太宗の後宮に奉仕した嬪御は、全部尼として居らせたのである。）　○蕭淑妃（淑妃は官名。三妃の一。三妃といふのは、第一が貴妃、第二が淑妃、第三が德妃の三つである。この他に第四として賢妃の置かれる場合は、合せて四妃といふ。蕭は姓。）　○王蕭皆爲所殺（王は王皇后。蕭は蕭淑妃。初め二人を別院に押込め、その兩手兩足を切斷して、その體を數日酒の中に漬けておいたのを、又散々に斬つたので、無慘なこと言語に絕してゐる。武后その後、長安から洛陽に移居したのは、その祟りを恐れたからだといふことである。）　○風眩（俗にいふ癲癇で、その發作は、昏倒して轉げ廻り、目は釣り上つて口から沫を吐くのである。）　○文史（文章歴史。）　○二聖（二人の天子。聖は天子の敬稱で、聖上、聖天子など用ふる場合の聖である。）　○百司（諸役人。百は多數をあらはし、司は有司、即ち役人。）　○涉獵（水を涉り、獸を獵るやうに、群書をざつと博く覽ること。博覽ではあるが專精ではないこと。）　○侔（音ボウ。「ひとし」「そろふ」の訓がある。等、齊、均などゝ同義。）

在高宗之世、后自殺子弘。廢子賢。高宗既崩、子哲卽位。廢爲廬陵王、而立

李敬業

一抔之土未乾六尺之孤安在

太后稱皇帝

子旦。后臨朝稱制、立武氏七廟。英公李敬業起兵討之。檄曰。一抔之土未乾。六尺之孤安在。又曰。試觀今日之域中。竟是誰家之天下。太后遣將擊殺之。越王貞、又擧兵匡復、不克而死。太后遂大殺唐宗室、自名曌、稱皇帝、國號周、以旦爲皇嗣、改姓武。時曌年六十七矣。

【通釋】高宗の世に在つて、后自ら子、弘を殺し、子、賢を廢す。高宗既に崩じ、子哲位に卽く。廢して廬陵王と爲し、而して子、旦を立つ。后、朝に臨んで制を稱し、武氏の七廟を立つ。英公李敬業、兵を起して之を討つ。檄に曰く、「一抔の土未だ乾かず、六尺の孤安にか在る」と。又曰く、「試みに今日の域中を觀よ、竟に是れ誰が家の天下ぞ」と。太后、將を遣はし擊ちて之を殺す。越王貞、又兵を擧げて匡復せんとし、克たずして死す。太后遂に大いに唐の宗室を殺し、自ら曌と名づけ、皇帝と稱し、國を周と號し、旦を以て皇嗣と爲し、姓を武と改めしむ。時に曌年六十七なり。

【餘說】（武后は）高宗の在世中、自ら子の弘を毒殺し、次の子、太子の賢を太子の位から下げた。

（後、中宗の嗣聖元年に又これを殺した。）高宗が死んで、子の哲が皇帝の位に即いた。（が、僅か二月で）これを廢して廬陵王として、次の旦を立てた。（以上は、既に前に見えたとほりである）。さて、武后は旦を立てゝ皇帝としながら、常に自分が朝廷に出て實際に天子の事を行つてゐた。又自分の實家の武氏の七廟を立てた。（かくて、武后の專横が段々募つて來たので）、英公の李敬業が兵を（揚州に）起して武后を討つた。その時の徴兵の通告文に、「先帝を葬つてからまだ間もないのに、嗣君は何れに在すぞや」。「試に、現在の國内をながめて見よ。つまり是れ誰れの天下であるのか。（まるで武氏の天下ではないか、殘念至極である）」などの文句があつた。武后はそこで將を派遣して、敬業を撃つて之を殺した。（實に、部下の者が敬業の首を取つて降參して出たのである）、越王の貞も亦兵を起して、唐室を元どほりに取りかへさうとしたが、敗北して自殺した。（越王貞は、高宗の弟であつたので、武氏が、唐室一門に對する憎しみは愈々加はり）、遂に、大いに唐室一門の者を殺して、（殆ど殺し盡した）。（茲に到つて、前章の李淳風の對が、全くそのまゝにあらはれたのである）。そこで、武后は、自ら曌と名づけ、皇帝と稱し、國號を周と改め、皇帝の旦を世嗣とし、姓を武と改めさせた。時に曌は年が六十七歳であつた。

【語釋】 弘・賢・哲・旦（何れも武后の實子である。或は殺し、或は廢し、吾子に對してすら慘酷の手はゆるめなかつたのである。） ○稱レ制（天子に代つて政を行ふこと。制には、おきて、さばく、をさむ、つかさどる、みことのり等の意がある。） ○武氏七廟（七廟は、太祖と三昭三穆との廟。三昭三穆は、當代の天子の父から上六代の間。禮記王制に「天子七廟」とあつて、天子でなくては立てられぬ所のものである。武氏は、七廟を立てようとしたところ、裴炎が「それは天子の制であるからいけない」と諫言したので、最初は遠慮して、五代前からの五廟を立てたのであつたが、天授元年になつてから七廟にしたのである。） ○英公李敬業（英公は、英の國の公爵。李勣の孫に當る。勣の死後、爵を襲いで英公となる。或る事件にまき添へ食つて、この時は、柳州の司馬に左遷せられ、心中不平を抱いてゐた。で、同じ不平黨の魏思溫・駱賓王などゝ計つて、兵を揚州に擧げたのである。旬日の間に歸附する者が十萬餘に達したが、討手の李孝逸の三十萬の大軍に大敗して、部下の爲に首を取られてしまつた。） ○檄（音ゲキ。めしぶみ、ふれぶみ等の意で、戰爭の通告文とでもいふべきであらう。唐書には「武后の惡を陳べ、此の德を論き、百姓を鼓舞するの書」とある。熟して、羽檄・文檄・檄召・檄文などの熟字がある。この時の檄は駱賓王の作で、絶妙激越の名文で、これを見て、さすがの武后も、その才を歎賞したといふことである。）

○一抔之土未レ乾（一抔の土は、一スクヒの土。前漢文帝の時に、張釋之の語で「愚民、長陵一抔の土を取らば云々」とあるより、天子の墳墓を指す。中卷一六頁。一句の意は、高宗を葬つて未だ間もないのにといふこと。） ○六尺之孤安在（六尺の孤は、論語泰伯篇に、「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし」とあるを引いたので、二歳半を一尺とするから、十五歳位の孤子である。こゝでは、高宗崩御後の諸皇子を指し、武后の爲に殆ど殺されてしまつたのを痛歎したのである。）

○逆レ撃（撃は、李孝逸で、三十萬の兵を率ゐて討手に向つたのである。敬業の敗れたのは、揚州府高郵の西北に當る所であつた。） ○越王貞又擧レ兵（越王の貞は、高宗の弟である。武后が、唐の一門を除かうとする手が、段々と延びるので一門の諸王と一致して恢復しようとしてゐたところ、たまり兼ねて、越王貞の子で、瑯琊王の沖が、事を同する前に、眞先に五千の手兵を率ゐて起つたので、父の貞も、附和して兵を起したのである。） ○匡復（匡はタダス、復はカヘス。不正を匡して舊にかへす。武后を倒して唐室を恢復するの意。） ○不レ克（瑯琊王は、一戰して敗北し、貞は、軍兵潰散して自殺した。） ○大殺二唐宗室一（越王の擧兵に關係あるものを探り尋ねて、韓王の元嘉、魯王の靈夔を初めとし、霍王、江都王、黄公、東莞公、安南王など三十餘人を殺した。又、幼年の者は遠く嶺南に流してしまつたので、唐の一門は殆ど盡きたのである。） ○曌（音セウ。照字の改作である。嗣聖六年の冬に、宗秦客といふ者が、文字十二を改作して獻上したのを、武后は天下に命じて之を用ひさせ、自分もその中の一字を取つて名づけたのである。字形、空の上に二日並び出てゐる形で、照らし輝くことの意なのを、ひそかに日月の盛輝に比して用ひたものであらう。一說に、この時の十二文字は武后自ら製作したものともいふ。） ○號レ周（侍御史の傅遊藝といふ者の勸めを用ひて改號したのである。この時、改元して天授元年といつた。）

六郎似蓮花

告密之門

徐有功

初寵僧懐義。後寵張易之・張昌宗。兄弟居中用事。易之五郎、昌宗六郎。佞者曰。人言六郎似蓮花。吾謂蓮花似六郎耳。曌知人心不服、且内行不正、畏人議己、盛開告密之門。用酷吏侯思止・索元禮・周興・來俊臣・吉頊等、鍛鍊羅織、率以反逆誣人誅殺。不可勝紀。用此拑制天下。然有權數善用人、賢才亦樂爲之用。徐有功仁恕執法。曌毎屈意從之。

〔通解〕初め僧、懐義を寵す。後、張易之・張昌宗を寵す。兄弟、中に居つて事を用ふ。易之は五郎、昌宗は六郎。佞者曰く、「人は言ふ、六郎、蓮花に似たりと。吾は謂へらく、蓮花、六郎に似たるのみ」と。曌、人心の服せざるを知り、且つ、内行の正しからずして、人の己を議せんことを畏れ、盛に告密の門を開く。酷吏、侯思止・索元禮・周興・來俊臣・吉頊等を用ひ鍛鍊羅織して、率ね反逆を以つて人を誣ふ。誅殺すること勝げて紀す可からず。此れを用て天下を拑制す。然れども權數有りて善く人を用ひ、賢才も亦之が用を爲すことを樂む。徐有功、仁恕にして法を執る。曌、毎に意を屈して之に從ふ。

て之に從ふ。

【通釋】（武后は、內行の修まらなかつた人で、）初め、僧の懷義といふ者を寵愛して、（宮中に引入れておいたが）、後には、張易之・張昌宗の兄弟を寵愛した。この兄弟二人は、宮中に居つて、萬事思ひのまゝに振舞つてゐた。兄の易之は、（其の族の五番目の男であつたので）、五郎と呼ばれ、弟の昌宗は、（同じく六番目の男であつたので、）六郎と呼ばれた。（郎は、男の尊稱で、世人が五郎・六郎と呼んで、その本名を呼ばなかつたのは、諂ひ尊んでの事である。）すると、諂ひ者の（楊再思といふ者が）「世人は六郎（の美しさ）を蓮の花に似てをるといつてゐるが、自分は、却つて蓮の花の方が六郎に似てをるのだと思ふ」（とまでお世辭を言つた）。曌、即ち武后は、天下の人心が自分に心服してゐないのを知り、且つ、自分が不身持なことを（世間で）かれこれ言はれるのを氣にして、（陰口をきく者を絕滅しようと思つて）、盛に、人の秘密を告發するの道を開いた。それから、冷酷無情な役人の、候思止や、索元禮や、周興や、來俊臣や、吉頊などを任用して、（獄事を取扱はせた）。これ等の酷い役人は、人の罪を無理やりに作り上げ、罪の無い者まで捕へて、何かの罪に陷れてしまつたが、大槪、反逆者といふ罪名を無理押しに被せたもので、その爲に誅殺した數は一々書ききれなかつた。武后は、か

獄を治めて、前後、人を活かしたこと數十百家といふ。當時、よく獄を治めた者に今一人「杜景儉」といふ者があつたが、時人、「來・侯(來俊臣・侯思止)に遇へば必ず死し、徐・杜(徐有功・杜景儉)に遇へば必ず活く」と歎つた程であつた。)　○仁恕(なさけ深く思ひやりのあること。)

魏元忠　婁師德　狄仁傑　姚元崇

唾不拭自乾

婁公盛德

將相多得人。魏元忠・婁師德・狄仁傑・姚元崇、皆名相。宋璟亦顯於朝。師德寛厚淸愼、犯而不校。弟除代州刺史。師德謂、兄弟榮寵過盛、人所疾也。何以自免。弟曰、自今人雖唾某面、拭之而已。師德愀然曰、此所以爲吾憂也。人唾汝面、怒汝也。而拭之則逆其意、而重其怒矣。唾不拭自乾。當笑而受之耳。師德毎薦仁傑。而仁傑毎毀師德。后語仁傑曰、朕用卿、師德所薦也。仁傑退而歎曰、婁公盛德。我爲所容久矣。

[illegible] 將相、多く人を得たり。魏元忠・婁師德・狄仁傑・姚元崇、皆名相なり。宋璟も亦朝に顯はる。師德は寛厚淸愼にして犯せども校せず。弟、代州の刺史に除せらる。師德謂ふ、「兄弟、榮寵過盛なるは、人の疾むところなり。何を以てか自ら免れむ」と。弟曰く、「今より、人、某の面に唾す

と雖も、それを拭はんのみ」と。師德、愀然として曰く、「これ吾が憂を爲す所以なり。人、汝が面に唾するは、汝を怒るなり。而るに之を拭はゞ、その意に逆つて其の怒を重ねん。唾は拭はざるも、自ら乾かん、當に笑つて之を受くべきのみ」と。師德、毎に仁傑を薦む。而るに仁傑は毎に師德を毀る。曌、仁傑に語げて曰く、「朕、卿を用ふるは、師德の薦むる所なり」と。仁傑、退いて歎じて曰く、「婁公は盛德なり。我れ爲に容れらるゝこと久し」と。

通釋 (こんな有様で、武后は、)將軍も大臣も、多く勝れた人物を用ひ得た。(その中でも)、魏元忠や、婁師德や、狄仁傑や、姚元崇などは、皆、勝れた良い大臣であつた。宋璟も亦、武后の朝廷で、(忠直を以て)顯れた人物であつた。(これらの大臣中)、婁師德は、寬大溫厚、潔白で愼み深く、人が無禮亂暴な事を仕かけて來ても、おとなしくしてゐて取合ふやうな事がなかつた。その弟が代州の長官に任ぜられた時、師德がいふやう、「かやうに兄弟揃つて、餘りに出世し寵愛を蒙るのは、人の嫉を受けるわけであるが、どうしてその憎しみ嫉を免れようとする」と。弟が答へて、「今日以後、人が私の顏に唾を吐きかけるやうな事があつても、(腹立つことなく、靜かに)その唾を拭ひまする。(萬事、これ位に愼んでゐたいと思ひまする)」と言ふと、師德は心配さうにして、「そんな心掛だから

拜せられた、房玄齢・杜如晦・宋璟と共に唐代の名臣である。字を元崇といつたが、武后の時に元之と改め、玄宗の時、開元の號を避ける爲に元字を省いて姚崇と改めたのである。）　○宋璟（字は廣平。南和の人。耿介にして大節あり、直言して身を顧る所がなかつた。曾て朝廷で張易之を面叱して満座の者を震慄させた事がある程である。）　○寛厚淸愼（寛は寛大。厚は温厚。淸は淸廉。愼は謹愼。何れも長者の德である。）　○犯而不挍（無禮無體を仕掛けて來ても、相手にもならず、怒りもしないこと。挍は挍戰などの挍で、力くらべして爭ふの意である。論語泰伯篇に出てゐる語である。）　○代州（今の山西省代州。）　○愀然（セウゼン。憂ふる貌。シウゼンと讀むも可。）　○毎毀二師德一（こんな事があつた。武后が仁傑に「師德は賢なるか」と聞ふと、「存じませぬ」と答へて、暗にその賢を否定した。又「師德は人を知るか」と聞ふと、「自分は事を共にしてゐるが、まだ師德が人を知るといふことを聞かない」と、これも亦否定した。武后が「朕が卿を用ふるのは師德の推薦によるのだ」と、その上奏文を示したので、流石の仁傑も一言もなかつた。）　○所容久矣（容は容赦の意で、勘辨すること。所容久矣は、永い間よくも氣にさへないで許してゐてくれたなあ。といふ程の意。）

武承嗣・三思、營求爲太子。仁傑從容言於后曰、太宗櫛風沐雨、親冒鋒鏑、以定天下、傳之子孫。太帝以二子托陛下。今乃欲移之他族、無乃非天意乎。姑姪與母子孰親。陛下立子、則千秋萬歲後、配食太廟。立姪、則未聞姪爲天子而祔姑於廟者也。后稍悟。已而又力勸之。遂自房州召廬陵王還都、立爲皇太子、以子旦爲相王。仁傑最見信重、好面折廷爭。后常屈從。稱爲國老、而不名。仁傑卒。后泣歎。

武承嗣・三思、太子たらんことを營求す。仁傑、從容として曌に言つて曰く、「太宗、風に櫛り、雨に沐し、親ら鋒鏑を冒して、以て天下を定め、之を子孫に傳ふ。太帝、二子を以て陛下に託せり。今乃ち之を他族に移さんと欲す。乃ち天意に非ざること無からんや。姑姪と母子と孰れか親しき。陛下、子を立てば、則ち千秋萬歲の後、太廟に配食せん。姪を立てば、則ち未だ姪天子と爲りて姑を廟に祔する者を聞かざる也」と。曌、稍悟る。已にして又力めて之を勸む。遂に房州より廬陵王を召して、都に還らしめ、立てゝ皇太子と爲し、子、旦を以て相王と爲す。仁傑最も信重せられ、好んで面折廷爭す。曌常に屈從す。稱して國老と爲して名いはず。仁傑卒す。曌、泣歎す。

(武后の甥の)武承嗣・武三思の二人が、太子に立たうと、色々に取繕つて願ひ求めた。(武后の心も、それに傾きかけた。)この時、狄仁傑が、徐にゆつたりとした態度で、武后に向つて、「昔、太宗皇帝は、風雨にさらされ、矢玉を冒し、非常な艱苦を嘗めて天下を平定し、子孫に傳へ殘された。又、高宗皇帝は、二人の皇子を陛下に御託しなさつたのである。然るに今、皇位を他の血族に移し與へられようとしてゐます。これは、天の御心ではあるまいと存ぜられます。且つ姑と甥との間柄と、母と子との間柄とは、どちらが親しみ深いと思はれますか。(よくよくお考へ下さいませ)。陛下が御子

をお立てなさいましたならば、陛下崩御の後、太廟に合祭せられて、永く御子孫からの御供物をお享けになる事が出來ますが、甥御をお立てなさつたならば、甥が天子となつて、その姑を太廟に合祭した者のあるを聞いた事がありません。（この邊、篤と御思慮遊ばすが宜しいかと存じます）」と、（御意見を申しあげた）で、武后も段々と悟られた樣子であつた。仁傑は、その後又熱心にこの事をお勸め申した。（其の結果）遂に、房州から廬陵王を召還して、立てゝ皇太子とし、子の旦を相王とした。（こんな調子で）、狄仁傑は（諸大臣中）最も信じ重んぜられ、事に當つて君主の非をその面前で折き、朝廷に於て是非を爭ひ諫めて憚る所がなかつたが、武后はいつも我意を屈してその言ふ所に從つた。そして、國老々々と呼び尊んでその名を呼ばなかつた。（聖嗣十七年に）仁傑が死んだ時には、流石の武后も泣いて悲しんだ。

【語釋】武承嗣・三思（三思は、武后の長兄元慶の子で梁王に封ぜられた人。承嗣は、次兄元爽の子で魏王に封ぜられた人。承嗣は、太子に立てなかつた爲、不平と落膽とで病死した。）　○營求（營は、いとなむ、いろ〳〵と取繕つて手段を講ずること。求は、もとめる。願ふこと。）　○櫛レ風沐レ雨（櫛は、動詞に訓んで、くしけづる。沐は、湯で髮を洗ふこと。風雨にさらされて戰場を往來し、困苦して休息の間もなきこと。シツプウモクウと音讀してもよい。）　○冒二鋒鏑一（鋒はホコ。劍戟の尖。鏑は、かぶら矢。矢玉を冒し劍戟をくゞつて戰ふ危險の地に出入すること。冒は正字、冐は俗字。）　○太帝（高宗皇帝のこと。高宗が天皇太帝と諡したからである）　○姑姪（姑はシウトメ。こゝでは、叔母の意。姪は、國訓メイなれども、甥にも通じ用ひる。武后と武承嗣・武三思との關係は、叔母甥である。）　○千秋萬歲後（主君の生前に、その死といふを憚つていふの語。崩御の後の意。）　○配食（合せ祭つて供物をすゝめること。配享、從祀、配

元行沖
吾藥籠中之物
天下桃李在公門

[?]なこと） 〇太廟（初祖のおたまや。太祖の廟。） 〇祔（音フ。後死の者を先祖に合せまつること。三年の喪が終つて、その位牌を先祖の廟に合祀すること。） 〇稍悟（「稍」は、ヤヽと訓んで、漸く、段々の意。）

の房州（今湖北省に屬す。） 〇面折廷爭（面折は、まのあたり人の過を責めること。廷爭は、朝廷の上で天子をまのあたり直諫すること。） 〇國老（國家の元老といふ意で、柱石の臣を重んじ尊ふの稱。）

元行沖、博學多通。仁傑重之。行沖多規諫。曰、明公之門、珍味多矣。請備藥物之末。仁傑笑曰、吾藥籠中物。何可一日無也。姚元崇等數十人、皆仁傑所薦。或曰、天下桃李、悉在公門矣。仁傑曰、薦賢爲國。非爲私也。

【通釋】元行沖、博學多通なり。仁傑之を重んず。行沖、規諫多し。曰く、「明公の門、珍味多し。請ふ藥物の末に備はらん。」と。仁傑、笑つて曰く、「吾が藥籠中の物、何ぞ一日も無かる可けんや。」と。姚元崇等數十人、皆仁傑の薦むる所なり。或ひと曰く、「天下の桃李悉く公の門に在り。」と。仁傑曰く、「賢を薦むるは國の爲にして私の爲に非ざるなり。」と。

【大意】（さて、この狄仁傑の門に集る者には人材が多かつた。その中で）、元行沖は、博學で萬事によく心得のあつた人で、仁傑は大層この人を重んじてゐた。行沖は、仁傑の（思ひ違ひなどに對して）度々正し諫める所があつた。（ある時）、仁傑に向つて、「（およそ一家を治めてゐる者には、飲食物から

藥物までの備へあるべきものであります。そこで)、あなたの門下には、御馳走に相當する人材が澤山居りますから、私は、(お口に苦い)藥物の端くれとして備はりたうございます。」と、(暗に、正し諫める役を勤めますとの意を)述べると、仁傑は(その意を悟つて)笑ひながら、「君は、私の藥箱の中の常備藥だよ、一日だつて無くてはならないさ。」と答へた。(以て、行沖を重んじてゐた事がわかる。この行沖の他に、)姚元崇等數十人の(人材は)皆、仁傑が推擧したのである。或る人が、「天下の賢者は悉く公の門下にある。(定めし報いられる所も多いであらう。)」と言ふと、仁傑は、「賢者を推擧するのは、國家の爲にする事で、私の爲にするのではない。」と、(その心得違ひを尤めた。)

【語釋】 元行沖(行沖は字で、名は澹。河南の人で、博學で殊に訓詁に達してゐた。進士に登第して通事舍人となつた。仁傑に重んぜられた事は本文の通りである。後、[illegible]學士となり、玄宗皇帝が自註の孝經に序を書くやうに命ぜられた程の學者であつたが、卒して[illegible]と[illegible]した。) ○多通(多聞、ものしり。博識で[illegible]事に通じてゐること) ○規諫(規は、たゞす。諫は、いさめ。過を正し諫めること。) ○明公(貴人の尊稱。宰相を敬して呼ぶの稱。こゝは[illegible]) ○珍味(こゝには、すぐれた日常の食料の意で、仁傑門下の[illegible]賢者に譬へたのである。) ○藥物(くすり。日常の食料ではないが、又一家として用意あるべきもの。一般賢者を日常の食物とすれば、規諫する者は、口に苦き藥物に相當するわけである。) ○藥籠中物(藥籠は、くすりばこ。藥箱の中の藥で、どうしても用意しておかねばならぬもの。必要の人物といふ意。) ○姚元崇等(元崇の他に、桓彦範、敬暉などがその主なる人物である。) ○天下桃李(桃李はモモとスモモで佳木である。推擧した賢士に喩へる。「天下桃李」は、當世の賢士の意。桃李に對して不肖者を蒺藜(はまびし。あかざ)に喩へる。劉向の說苑に、趙簡子が陽虎に言つた言葉として、「賢者は能く恩を返すが不肖者は返さない。譬へば桃李を植ゑておけば、夏はよく日蔭を作つてくれるし、秋はその實が食べられるが、蒺藜を植ゑておけば、夏は日蔭にもならないし、秋は却つてその刺を得るやうなものだ」とある。これが、その出處である。)

張柬之等討二內亂一

武氏殂

曌嘗問仁傑、欲得一佳士用之。仁傑曰、有張柬之者。雖老宰相才也。後竟用柬之爲相。曌寢疾甚。柬之與崔玄暉・敬暉・桓彥範・袁恕己、率羽林將軍李多祚等、擧兵討內亂、迎太子於東宮、斬關入、斬易之・昌宗於廡下、遷曌於上陽宮、上尊號曰則天大聖皇帝。是冬殂。年八十二。易唐爲周者十有六年。改元者十。曰天授・如意・長壽・延載、曰萬歲通天、曰神功・聖曆・久視・大足・長安。

〔通釋〕曌、嘗て仁傑に問ひ、一佳士を得て之を用ひんと欲す。仁傑曰く「張柬之といふ者有り。老いたりと雖も宰相の才也」と。後、竟に柬之を用ひて相と爲す。曌、疾に寢ぬると甚し。柬之、崔玄暉・敬暉・桓彥範・袁恕己と、羽林將軍李多祚等を率ゐ、兵を擧げて內亂を討じ、太子を東宮に迎へ、關を斬りて入り、易之・昌宗を廡下に斬り、曌を上陽宮に遷し、尊號を上りて則天大聖皇帝と曰ふ。是冬、殂す。年八十二。唐を易へて周と爲す者十有六年。改元する者十。天授・如意・長壽・

延載と曰ひ、萬歳通天と曰ひ、神功・聖暦・久視・大足・長安と曰ふ。

【通釋】武后が或る時、仁傑に向つて、「一人の佳い人物を得て用ひようと思ふ(佳い人物は無いか。)」といふと、仁傑が「(佳い人物がございます。)それは張柬之といふ者で、年は老つてゐますが宰相の才能がございます」と薦めた。(武后は早速、洛州の司馬として用ひ、續いて朝廷に引入れて秋官侍郎といふ役にしたが、)後、宰相とした。時に、武后は病氣に罹つて病勢が大層重かつた。宰相の張柬之は、(この機に乘じて武后の勢力を奪ひ、唐室を恢復しようと思つて)、崔玄暐・桓彦範・袁恕己としめし合せ、(兵力が必要であるので、)羽林將軍の李多祚を味方に引入れ、(その兵五百を率ゐ、豫め太子にも承知を願つて)、內亂を鎭定すると稱して、太子を東宮からお迎へして、(洛陽玄武門の)門を破つて宮中に突入し、張易之・張昌宗の二奸物を廊下で斬つて、(武氏の寢所の長生殿に進入し、迫つて位を太子に傳へさせ)、武氏を上陽宮に移して、則天大聖皇帝といふ尊號を奉つた。(この年の冬)武氏は年八十二才で落命した。(ふりかへつて見ると、天授元年九月に、)唐の國號を周と改めてから、周を稱すること十六年間であつた。その間、年號を改めることが十度、天授以下がそれである。

【語釋】一佳士(一人のよい人物。申分のない人物。) ○張柬之(襄陽の人。字は孟將。博く經史に渉り、剛直で傅會する所がなかつた。進士に擧げられ賢良を以て召された時が、七十餘歳であつた。狄仁傑の推擧に逢つた時は八十に近かつた。)

中宗復レ位

韋后聽レ政

武三思入ニ宮禁一

二張を誅して唐の社稷を恢復した功で漢陽郡王に封ぜられた。卒して文貞と諡せられた。）○寢レ病甚（病氣が重くて、ぴったりと寢込んでゐた。）○崔玄暐（通鑑には崔玄暐と出てゐる。博陵安平の人。少より博學篤行を以て稱せられた。明經に擧げられ天官侍郎となつた。二張を誅した功によつて中書令に拜せられたが、後、事を以て貶せられて遂に卒した。文獻と諡せられた。）○敬暉（字は仲曄。聖曆の初め衛州の刺史となつた。二張誅伐の功で平陽郡王に封ぜられた。卒して肅愍と諡せられた。）○桓彦範（丹陽の人。字は士則。武后の末、中丞となつた。唐室恢復の時、「太子久しく東宮に在す。天意人心久しく李氏を思ふ。すみやかに位を復へらるべきである。」と武后に迫り督した。功によつて譙郡公に封ぜられた。後、中宗が後宮に惑溺するのを諫め、瀧州の司馬に貶されたが、武三思のために逐ひられて殺された。睿宗の時に官爵を追復され、忠烈と諡せられた。）○羽林將軍（羽林は、十四衛の一で、天子の宿衛である。羽翼の疾く擊ち、林木の多きに喩へたものである。羽林將軍は、つまり近衛の大將である。）○李多祚（驍勇にして善く射る。感慨にして義あり。高宗の時、右驍揚大將軍となつた。北門を衛ること三十年。唐室恢復の時、玄武門の門を破つて突入した。功によつて遼陽郡王となつた。）○斬レ關（關は、かんぬき。門を封ずる横木。その横木を打破ること。）○廡下（廡は、ひさし。ほそどのの廊などで、廡下といへば、のきした、又は廊下のことであるが、こゝは恐らく後者の方であらう。）○上陽宮（洛陽皇城の西北に接する所にあつた宮殿。）

長安之五年。帝復レ位、號レ唐。帝卽位二月而被レ廢、居ニ均州一者一年、居ニ房州一者十三年、還爲ニ太子一者又八年。而後反レ正、韋氏復爲ニ皇后一。上在ニ房陵一、毎レ欲ニ自殺一、后毎止レ之。上與私誓。異時幸復見ニ天日一、惟所レ欲不レ禁。至レ是毎レ臨レ朝、后必施ニ帷幔一坐ニ殿上一、預ニ聞朝政一。如ニ武氏在ニ高宗之世一。上女安樂公主、適ニ武三思之子一。三思以レ是得レ入ニ宮禁一、通ニ於韋后一。后與ニ三思一雙陸。而上爲ニ點籌一。上遂與ニ

三思圖ニ議ス政事ヲ。張柬之等皆受ク制ヲ。五人皆賜フ王爵ヲ而罷ム政ヲ。已ニシテ而遠ク貶シテ殺ス之ヲ。

【語譯】長安の五年、帝、位に復し、唐と號す。帝、卽位二月にして廢せられ、均州に居る者一年、房州に居る者十三年、還つて太子となる者又八年、しかる後に、正に反り、韋氏復た皇后となる。上、房陵に在つて、自殺せんと欲する每に、后每に之を止む。上、與に私に誓ふ。「異時幸に復た天日を見ば、惟だ欲するまゝにして禁ぜず」と。こゝに至つて、朝に臨む每に、后、必ず帷幔を施して殿上に坐し、朝政を預り聞く。武氏の高宗の世に在るが如し。上の女安樂公主、武三思の子に適く。三思これを以て、宮禁に入るを得て、韋后に通ず。后、三思と雙陸す。而して、上、爲に點籌す。上、遂に三思と政事を圖議す。張柬之等、皆、制を受く。五人皆、王爵を賜うて、政を罷む。すでにして、遠く貶して之を殺す。

【通釋】（さて、武后の）長安の五年目に、帝（中宗）は復び位に卽いて（武后の立てた國號の周を廢して）唐と號した。（これまでの、中宗の動靜を述べると、父の高宗が崩じて）帝位に卽いたのであるが、僅か二月で（母、武后の爲に）廢せられ、（廬陵王となり）均州に居ることが一年、房州に居る

ことが十三年で(狄仁傑のお蔭で、都の洛陽に)還つて太子となり、それから八年目に帝位に復したのである。(同時に、皇后の名義を失つてゐた)韋氏も皇后の位に復した。中宗が房州に居つた時、(武后の手にかゝつて何れは殺されるやうな事になるだらうと悲觀して、)度々、自殺しようとしたが、その度毎に、この韋氏が、(早まつてはならない。禍福は常なきものであるといつて、)自殺を思ひ止めさせてゐた。で、中宗は、(その情に感じて)韋氏との間で、「他日、幸にこの幽閉の苦しみを免れて、天日を仰ぐことが出來る身になつたら、お前の振舞ひ度いことは何でも爲せて、決して禁めはせぬぞ」と誓はれた。(この誓が、韋氏の我儘の種となつて)、この度復位してから、中宗が朝廷に臨まれる度に、韋氏はその殿上に帷を垂れた席を設け、その中にゐて政事を聽いた。それは武后が高宗の代に於けると同樣であつた。中宗の女の安樂公主といふ者が、(武后の一族の)武三思といふ者の息子に緣付いた。すると、三思は、安樂公主の舅であるといふので宮中に出入することが出來て、皇后韋氏と不義をした。(中宗は少しも氣付かないで、)三思と韋后とが雙陸をすると、その側で二人の爲に勝負の數取り役をした(程であつた)。(こんな有樣で)中宗は遂に三思と政事上の相談をするやうになり、張柬之等は皆その指圖だけを受けるやうになつた。(韋后と三思とは相謀つて、「張柬之等は功を恃んで權を專ら

にし、國家に不利を働くものであります」と讒したので、中宗は之を信じて）張東之等五人の者にそれ〴〵王號を賜ひ、（表面、功臣を尊ぶといふ形にして）政に與ることを罷めさせた。間もなく、五人の者をそれ〴〵地方の司馬に貶し、（復位の翌年の七月には、人を遣つて皆）之を殺させた。（これ等は皆三思の計ひで、これから三思の勢力が天子を凌ぐやうになるのである）。

語釋　長安之五年（武后僞周の最後の年號である。長安之五年と、特に之字を入れたのは、正朔と區別する筆者の意である。）○均州（今の湖北省鄖陽道均縣。）○房州・房陵（房陵は郡名で即ち房州のこと、今の湖北省鄖陽道房縣。）○反レ正（帝位に復すること。我より之を失ひ、人に因つて之を復すること。）○與私誓（夫婦の間だけでの誓であるので「與に私かに」といつたのである。與は夫婦間での意。私は公でない意。）○見ニ天日ー（天日は太陽。幽閉をまぬかれて、自由なる[illegible]ない身の上となつたならば、世に出たならば。）○帷幔（とばり。まく。たれぎぬ。帷も幔もともに「まく」の類。帷幔を施したのは、直接男子と對坐すべからざるが故である。）○三思元子（武承嗣といふ者。三思は則天武后の甥。）○適（ユクと訓じて嫁すること。）○通（姦通の意。不義をすること。）○雙陸（黒六つ白六つの碁石を賽（骰子）を振つて得た數によつて動かし勝負する遊び。黒白双方六つづゝであるので雙六（雙・六道子）といふともいひ。棊道がどちらも六筋あるから言ふともいふ。今日謂すごろくは道中雙六である。）○點籌（雙陸の賽の數を記し、勝負の數を計算すること。「點」は、點檢の點で、しらべる意。「籌」は、かずとり。）○圖議（相議する。圖も議も、はかると訓ずる。）○受レ制（政治の議にあづかることなく、たゞ、その指圖のみを受けて事務をとること。）○張東之等（張東之、敬暉、桓彦範、袁恕己、崔玄暐の五人で、次に「五人皆」とあるのと同一人である。）○賜ニ王號ー（敬暉は平陽王、桓彦範は扶陽王など。）○遠貶（敬暉は崖州の司馬。桓彦範は瀼州の司馬、袁恕己は竇州の司馬。崔玄暐は白州の司馬。張東之は新州の司馬。）

安樂公主等依レ勢用レ事、請謁受レ賕、降ニ墨敕ー除レ官、斜ニ封付ニ中書ー。時謂ニ之斜封

韋氏之亂

餅餤中進毒

隆基斬韋后安樂公主

官。凡數千人。人有上言皇后淫亂、上面詰之。其人抗言不撓。中書令宗楚客、矯制撲殺之。上意快快。后及其黨始懼。馬秦客・楊均、皆幸於后、恐事泄。安樂公主亦欲后臨朝、以己爲皇太女。乃相與謀、於餅餤中進毒。上復位改元者二。曰神龍・景龍。景龍四年而遇弑。立溫王重茂。后攝政。相王子隆基、起兵討亂、斬后及安樂公主、幷其黨皆誅之、廢重茂、奉相王立之。是爲睿宗皇帝。

〔譯〕安樂公主等、勢に依りて事を用ふ。請謁して賕を受け、墨勅を降して官に除し、斜に封じて中書に付す。時に之を斜封官と謂ふ。凡べて數千人。人、皇后淫亂なりと上言するもの有り。上、之を面詰す。其の人抗言して撓まず。中書令宗楚客、制と矯りて之を撲殺す。上の意、快快たり。后及び其の黨始めて懼る。馬秦客・楊均皆后に幸せられ、事の泄れんことを恐る。安樂公主も亦后の朝に臨み、己を以て皇太女と爲さんことを欲す。乃ち相與に謀り、餅餤の中に於て毒を進む。上、位に復し

て、改元する者二。神龍・景龍と曰ふ。景龍四年にして弑に遇ふ。溫王重茂を立てゝ、后、政を攝す。相王の子、隆基、兵を起して亂を討じ、后及び安樂公主を斬り、其の黨を并せて皆之を誅し、重茂を廢し、相王を奉じて之を立つ。是を叡宗皇帝と爲す。

通解 安樂公主や、（婕妤の上官などいふ女たちが）權勢を恃んで政事向の事に手出しをした。遂には（官位を欲がる小人共が）內證の賴みの爲にお目通を乞ふと、それを許して、賄賂を受け、（某々の官に任命すると、）墨書の勅命を書いて、それをちよい〳〵斜に封じて中書省に下げ渡し、（その者に交附させた）。かうして官に就いた者を、當時、斜封官と呼んだ。この斜封官が凡そ數千人にも達した。（その筈で、どんな身分の者でも、三十萬錢を持つて行つたら、それで譯なく官職を授けられたのだから）。時に、（燕欽融といふ者が、）韋后が不身持であると中宗に言上した。中宗が面のあたり欽融を呼出して（證據があるか、無禮である）と詰問すると、欽融は、一々言ひ張つて屈服しなかつた。中書令の宗楚客が（これは韋后の黨であるので、これは大變だと思つて）帝の仰せだと僞つて欽燕を撲り殺してしまつた。（然し、中宗も欽燕の言ふ所を聞いて疑を起し）心の中が不愉快で自然面白くもなさゝうな樣子があらはれた。（さあ、事があらはれたのかと）、韋后及びその一味の者共が心配し出し

た。中でも馬秦客・楊均などは何れも韋后に寵愛せられてゐたので、事の發覺を恐れた。一方には安樂公主が（増長のあまり、）朝廷を韋后のものとして、自分が皇太女として立たうと欲してゐたので、これらの奸物が相談し合つて、肉饅頭の中に毒を仕込んで中宗に差上げた。中宗は復位後、年號を改めることが二度で神龍・景龍といつたが、その景龍の四年（六月）に、かうして弑せられた。（そこで韋后等は、遺詔であるといつて、中宗の第四子）温王の重茂を立て、韋后自ら攝政として立つた。（そして一味の者と謀り、天下を韋氏のものとしようとした。そこで）相王（高宗の第八子で、中宗の弟、重茂の叔父）の子の隆基が兵を起して、（玄武門から不意に討入り）、この亂賊を定め、韋后及び安樂公主を斬殺し、その一味の者を悉く誅伐した。そこで重茂を廢し、相王を奉じて帝とした。これが睿宗皇帝である。

【語釋】請謁受レ賕（請謁は、ひそかに謁見して內證の頼み事をすること。賕は、賄賂。說文に「財を以て法を枉げ相謝するなり」とある。）○降ニ墨敕一（朱印を捺さぬ敕書を出すこと。安樂公主が自ら制敕をつくつて、その文面を掩ひかくし、中宗をしてそれに自書させたのである。中宗は笑つてその言ふまゝになつてゐたといふことである。）○除レ官（新たに官に拜すること。除は「のぞく」「さる」の意で、本來は舊官を除き去つて新官に就くの意。）○斜封（斜めに封をすること。敢て正しく封をせず、ざつと手軽に取扱つたのである。）○付（フスとよむ。渡すこと。）○面詰（面のあたり詰問すること。）○抗言（言ひ張ること。「抗」は、抵抗の抗で、はりあふこと。抗論、抗辯などゝ同意。）○中書。中書令（中書は、宮廷の文書、詔勅を司る役所。中書省のこと。「令」はその長官。）○宗楚客（文章を以て幸を得。中宗の神龍の初、中書令から相に拜せられ、兄秦客、弟晋卿と共に韋后の黨となり權勢を振つた。）○撲殺（うち殺す。な

役す。）〇怏怏（心情滿足せず樂しまざる貌。鞅鞅とも書く。）〇皇太女（皇女にして皇嗣として立つもの。）〇餅餤（肉饅頭。薄い麥粉餅で肉を包んだもの。餅は、麥粉をこねて作つたモチのこと。餤は、それにて肉を包んだ食物。）〇重茂（中宗の第四子。この時十六歳。）〇隆基（玄宗皇帝の名。その擧兵の顚末は玄宗皇帝の條に出てくる。）

【餘論】唐が興つてから高宗に至るまで四十餘年間、内は政紀を整へ、外は四隣を服し、天下至治の極に達したが、宮闈に於ける女色の弊風は、既にその間に潜在してゐた。始め高祖は隋の宮人と私通し、太宗はその弟の元吉を殺して其の妃を入れ、盧江王瑗を誅して、其の姫を左右に侍せしめた。唐室の先祖からが此のふしだらである、宮闈の不義は常習のやうになつて、恬として異しむ所なかつたのも、亦偶然ではないのである。宜なるかな太宗の崩後、高宗は不義の色に迷うて、則天武后の禍を醸し、中宗の時には皇后韋氏が情人と謀つて帝を弑するの擧に出でた。たゞにそれに止らず、ついで太平公主の專横あり、玄宗は楊貴妃に溺れて遂に安史の亂を招いた。觀じ來れば皆これ色慾の禍である。殊に則天武氏の如きは、支那史上、唯一の女帝の名を留めるに至つた。

●睿宗皇帝、名旦。初高宗崩、中宗廢、武氏立旦爲帝者七年矣。而廢爲周皇嗣者九年。改封相王者十年。至是復爲帝。立隆基爲太子。宋璟・姚元之爲

五經掃レ地

政。二人協レ心革二弊政一、進二忠良一退二不肖一、賞罰盡レ公。請託不レ行。紀綱脩擧。當時翕然。貶二祝欽明等一。欽明嘗爲二八風舞一。人曰、五經掃レ地矣。

【譯】睿宗皇帝、名は旦。初め高宗崩じ、中宗廢せらるゝや、武氏、旦を立つ。帝たる者七年。而して廢せられて周の皇嗣たる者九年。相王に改封せらるゝ者十年。是に至つて復た帝と爲る。隆基を立てゝ太子と爲す。宋璟、姚元之、政を爲す。二人心を協せて弊政を革め、忠良を進め、不肖を退け、賞罰、公を盡す。請託行はれず、紀綱修擧す。當時翕然たり。祝欽明等を貶す。欽明嘗て八風の舞を爲る。人曰く、五經地を掃ふと。

【通釋】睿宗皇帝、名は旦といふ。初め高宗が崩じて（中宗が立つたが、すぐ）廢せられた時、則天武后は、この旦を立てゝ帝とした。帝たること（勿論、虚器を擁してゐたゞけであるが）七ケ年。（武后の爲に）廢せられて、武后の改號した周の世嗣となつてをることが九ケ年。（中宗が復位した爲に）改め封ぜられて相王たることが十年。是に至つて復、帝となつたのである。そこで隆基を立てゝ皇太子とした。宋璟と姚元之との二人が政事を執つた。二人は心を協せて悪政を革め、忠良の臣を進め用ひ、

不肖の者を退け、賞罰がことごとく公明であつた。(そのため)、(韋后の時のやうな)、權勢ある者に私かに請ひ求めるやうな事が行はれなくなり、國家のきまりが立派に修つた。で、當時、朝野の人物が一樣に打揃つてきちんとした。(不肖を退けた一例としては)、祝欽明たちを退け貶した。この欽明といふ男は(國子祭酒で儒學訓導の職であるにも係らず)中宗の景龍四年に、(殿上酒宴の席で)、八風の舞といふものを踊り出した。(それが醜陋を極めたものであつたので)、之を見た(盧藏用といふ)人が、「欽明の折角の儒學も、かうなつては全然値打がない」と歎き評した。

語釋 姚元之(姚元崇のこと。既出。武后の時、僞周に反した突厥の叱列元崇といふ者と同名なので、武后の命で、元崇を元之と改名したのである。) ○弊政(惡弊のある政事。わるいまつりごと。) ○忠良(忠は、忠實で、まごゝろあるもの。「良」は、善良。忠實善良の臣。) ○不肖(人に如かざる者、つまらない者。人は天の生ずる所であるのに、その天に似ざるふつつか者との義。肖は似なり。一說に父に似ざる不才の者をいふとある。轉じて自己の謙稱として用ひられる。) ○紀綱修擧(國家のきまり、おきてが立派に修まること。紀は、小づなで、國家の小なるおきて。綱は、大づなて、國家の大なるきまりに喩へる。紀綱は、綱紀とも用ひる。) ○請託(權勢ある者にすがつて、欲する所をねがひ求めること。) ○翕然(あつまり合ふこと。翕音キフ。アツマルと訓ず。鳥の羽翼がその背に收まり集るやうに、美はしくして盛なること。) ○祝欽明(京兆の人。字は文思。國子監の長官、國子祭酒で、天下儒學の中心たるべき職にゐたのである。) ○八風舞(八風は、八方の風で、東北立春を條風。正東春分を明庶風。東南立夏を淸明風、正南夏至を景風。西南立秋を凉風。正西秋分を閶闔風。西北立冬を不周風。正北冬至を廣莫風といふ。淮南子にも、東北炎風。東條風。東南景風。南巨風。西南涼風。西飂風。西北厲風。北寒風。とある。八風舞は、名を八風に借りて、頭を搖つたり、眼玉をくるくるさせたり、醜陋汙穢の態を演じたのである。舞はもと、八音を節し八風を行ふものとせられたものである。) ○五經掃レ地(五經は、詩・書・易・禮記・春秋の五經典。儒學重要の經典であるので、こゝでは儒學の面目といふ位の意味で用ひたのである。掃地は、餘す所なく掃くることで、全くゼロであるの意。祭酒の價値は全然無いとの歎息)

太平公主
憚二太子英武一

○帝妹太平公主、於レ誅二二張一誅二韋氏一時、皆有レ力。既屢立二大功一、勢尊重。上嘗與議レ政。權傾二人主一、其門如レ市。憚二太子英武一、欲レ易レ之。賴二韋安石・宋璟・張說・姚元之等、感二悟上意一、政事皆取二太子處分一。上、自復爲レ帝、改元者二。曰二景雲・太極一、至レ是三年、自稱二太上皇一、傳二位於太子一。是爲二玄宗明皇帝一。

【通釋】帝の妹太平公主、二張を誅し、韋氏を誅する時に於て、皆力有り。既に屢々大功を立て、勢あつて尊重せらる。上、嘗て與に政を議す。權、人主を傾け、其の門市の如し。太子の英武なるを憚りて、之を易へんと欲す。韋安石・宋璟・張說・姚元之等、上の意を感悟せしめしに賴つて、政事皆太子の處分に取る。上、復び帝と爲りしより、改元する者二、景雲・太極と曰ふ。是に至りて三年、自ら太上皇と稱し、位を太子に傳ふ。是を玄宗明皇帝と爲す。

【備考】睿宗の妹の太平公主は、(張柬之等が)張易之・張昌宗の兄弟を誅した時も、(隆基が)韋氏を誅した時も、何れも關係して有力な同志であつた。既にかやうに度々大功を立てたので、權勢が

あつて尊び重んぜられた。(實封一萬戸の地行所を賜はつてゐた程である)。睿宗も、嘗てこれと政事上の相談をするといふ様な勢で、その權力の素晴らしいことは天子以上で、公主の門前は、(その御機嫌を伺ふもの丶為に)まるで市場のやうな賑かさであつた。(こんな様子で、兄の睿宗皇帝には憚る所は無かつたが)、太子隆基の英明武烈なのを憚つて、之を太子の位から下して柔弱な者に易へようとした。(睿宗も一時その氣になつたが)、韋安石・宋璟・張説・姚元之等の臣下が、睿宗の心を(色々と諌めて)感悟させたので、(その事なく)、政事はすべて太子の取捌く所となつた。睿宗は再度天子となつてから、年號を改めることが二度で、景雲・太極と曰つたが、その太極の三年に、自ら太上皇と稱して(隱居し)、位を太子に傳へた。これが玄宗明皇帝である。

【語釋】太平公主(睿宗の子。母は則天武后。額が四角で、頤が廣くて、權略に富んでゐた。武后は、自分に最もよく似てゐるといふので、寵愛が他子以上であつたといふ。二張を誅するに與つて力があり、食邑を増された。韋氏を誅する時にも參與して、溫王に迫り帝座から下らしめた程の女傑である。後、一族の者と、太子を廢しようとして失敗し、南山に逃ぶこと三日で出て來たが、その第に於て死を賜はつた。) ○二張(武后に寵愛せられた、張易之・張昌宗の兄弟。) ○有レ力(その働きが事件の解決に有力であつたこと。韋氏專伐の時などは宮中に突入して、溫王重茂が玉座に在るのを見て「人心既に相王に歸した。この座は小兒の居るべき座ではない。」といつて その手を持つて引下したといふ程である。) ○韋安石(萬年の人。武后の時、中書令であつた。度々二張を折辱して眞宰相といふ世評を受けた。性重厚で苟も言笑しなかつたといふ。文貞と諡せられた。) ○張説(洛陽の人。字は道濟。永昌中、賢良方正に策して第一となり、校書郎より累進して中書令となつた。朝廷の大述作は多くその手に出たといふ。) ○取二處分一(處分は、取扱ひ裁くこと。取二處分一は、取り裁かせた意。その手を經て處分を決せしめたこと)

玄宗明皇帝、名隆基。初爲臨淄王。韋氏之亂、陰聚才勇之士、密謀匡復。太宗初選驍勇爲百騎。武后增爲千騎、隷左右羽林。中宗謂之萬騎、置使領之。隆基皆厚結其豪傑、卒誅韋氏奉叡宗。封爲平王。叡宗將建儲嫡。長子成器、以平王有功力讓之。遂爲太子尋受禪。

【訓】玄宗明皇帝、名は隆基。初め、臨淄王となる。韋氏の亂に、陰に才勇の士を聚めて、密に匡復を謀る。太宗、初め驍勇を選んで、百騎となす。武后增して千騎となし、左右の羽林に隷す。中宗、これを萬騎といひ、使を置いて、之を領せしむ。隆基、皆厚くその豪傑に結び、卒に韋氏を誅し、睿宗を奉ず。封ぜられて、平王となる。睿宗、將に儲嫡を立てむとす。長子成器、平王の功有るを以て、力めて之に讓る。遂に太子となり、尋いで、禪を受く。

【通釋】玄宗明皇帝、名は隆基といふ。初め臨淄王と爲つてゐたが、(罷めて長安に歸つてくると、)韋后の亂行專横が日に餘るので、陰ながら、才あり勇ある人物を手許に聚めて、秘密に、禍亂を正し、唐室を恢復せんものと謀つた。(それには兵力が必要であるので)、昔、太宗が強く勇ましい者を選んで、百騎としておいたのを、武后が、增して千騎として、左右の羽林に屬せしめておいたのを、更に、中宗が萬騎として、その頭に使を置いて支配させてゐたのに目をつけ、その中の豪傑と厚く交を結んで、(いざといふ時の味方としておいた。その力を借りて)遂に韋氏を誅し、父、睿宗を立てゝ天子とした。同時に、封ぜられて平王となつた。そこで睿宗が、世嗣の皇太子として嫡男の成器を立てようとした。すると成器は、(「太平の時には嫡男が立つのが當りまへですが、國難時には功有る者を立てられるのが至當です。私は敢て平王の上には居りませぬ」)と、功勞のある隆基に讓つた。隆基遂に太子と爲つて、尋いで(太極元年八月、)禪を受けて天子となつた。

【語釋】陰・密(いづれも、ひそかと訓ずる。陰は、かげに廻つてするひそか。密は、こつそりとするひそか。)　○才勇之士(才あり勇ある人物。この時、聚つた人物には、鍾紹京・王崇曄・劉幽求・麻嗣宗などがあつた。劉幽求などは、隆基のために、その太子となる時、睿宗に向つて隆基の功德を讃つて大いに勸めたものである。)　○匡復(匡は、たゞすと訓じて、禍亂を正すこと。復は、舊業を復すること。)　○驍勇(たけく勇ましいこと。驍は、音ケウ。通音ゲウ。もと良馬のこと。轉じて勇

高力士　內侍之盛　梨園弟子

衛同様なるものゝ稱。太宗は、選んだ百騎に驍勇と名づけたのである。）○隷二左右羽林一（左右の近衛に附屬させた。羽林は既出。隷は、附くこと。したがふこと。隷屬の意。）○使（羽林萬騎の長を斯く名づけたのである。）○領（支配）○其豪傑（豪傑は、武勇の衆にすぐれたる人物、又は才德の衆にすぐれたる人物の稱。ここは前者である。臨淄が交結した豪傑には、葛福順・李仙鳧等の人物があつた。）○儲嫡（儲は、「まうけのきみ」で、世嗣即ち皇太子のこと。嫡は、長子）

○開元元年、高力士爲右監門將軍、知內侍省事。初太宗定制、內侍省不置三品官、黃衣廩食、守門傳令而已。至是除三品將軍者寖多、宦官增至三千人。內侍之盛始此。姚崇爲紫微令。○二年、以太常不應典俗樂、置左右教坊。謂之皇帝梨園弟子。○焚珠玉錦繡於殿前。○作興慶宮、置樓。西曰花萼相輝、南曰勤政務本。宋王成器等、宅環其側。

〔通釋〕○開元元年、高力士、右監門將軍と爲り、內侍省の事を知る。初め太宗制を定むるや、內侍省に三品の官を置かず。黃衣廩食、門を守り、命を傳へしのみ。是に至りて三品將軍に除せらるゝ者寖く多く、宦官增して三千人に至る。內侍の盛んなること此に始まる。○姚崇、紫微令と爲る。○

二年、太常の應に俗樂を倂せ典るべからざるを以て、左右の敎坊を置く。之を皇帝梨園の弟子と謂ふ。〇珠玉錦綉を殿前に焚く。〇興慶宮を作り、樓を置く。西を花蕚相輝と曰ひ、南を勤政務本と曰ふ。宋王成器等の宅、其の側を環る。

通解 開元元年、高力士といふ者が右監門將軍となり、その上、內侍省の省務をも司配するやうになつた。(それは、玄宗の卽位以前から奉公してゐて忠實であつた事や、太平公主の黨を除く時に功勞があつたからで、もとは、身分の卑かつた者である)。(この內侍省についての事であるが)、最初、太宗が制を定めた時、この內侍省には、三品の官位ある役人を置かなかつた。(何れもそれ以下の卑い位の者ばかりで)、その服は、賤しい黃色の服、その給與は米であてがはれてゐた程の果敢ない者で、仕事は、門番と用達しをするだけであつた。ところが此の度、(高力士が內侍省の役人で右監門將軍を兼ねたので、それが例となつて、內侍省の役人に)、三品將軍(右監門將軍は、位、從三品である)に任ぜられるものが、いつとはなしに段々增えて、內侍省の宦官の數も增して三千人となつた。宦官が隆盛を極めるやうになつたのは、これがその初めである。(この元年の十二月に)姚崇(姚元之後、崇と改む。)が、紫微省の長官となつた。開元二年、玄宗は、太常寺(禮樂郊廟の事を掌る役所)で、

(雅樂の上に)俗樂まで掌つてゐるのは然るべき事でないといふので、左教坊・右教坊を新設して、(そこで俗樂を練習させた)。これを、皇帝梨園の弟子といつた。(實は、玄宗が、樂人・官女數百人を選んで禁苑中の梨園で、別に自ら教授したのを皇帝梨園の弟子と言つたのである)。玄宗は又、(風俗が華美に流れて、上下共に奢侈に赴くのを防ぐ爲に)、珠玉や錦綉などの(贅澤品を)殿前に積重ねて燒拂つた。(將來、これを著用する事を禁じたのは勿論であるが、珠玉を採集したり錦綉を製造する事まで禁じたのであつた)。(それから七月には)興慶宮を作つて、樓を二つ設けた。西の樓を花蕚相輝と名づけ、南のを勤政務本と名づけた。(そして兄の)宋王成器たちの邸が、この興慶宮を取卷いて列んでゐた。

語釋 高力士(本姓は馮氏、宦官高延福の養子となつて高氏を名告つた。内侍省の内給事といふ賤官であつたが、それ以前、玄宗が藩邸に在つた時から忠實に奉公し、太平公主を誅した時にも功勞があつて、右監門將軍となり、從三品で内侍省の事を司ることになつたのである。) ○右監門將軍(監門に左右あつて、宮門の開閉出入を取締る役。大將は一人。將軍二人。中郎將四人あつた。) ○内侍省(内侍は宦官。宦官の居る役所が内侍省。) ○知(支配する。掌る。統御する。) ○制(制度。きまり。おきて。) ○三品官(官位三品の者。官位は九品まである。宦官の役所には、三品以上の者を置かない制度で、その長官もせい〴〵從四品上であつた。) ○黄衣廩食(黄衣は宦官の服色。之を賤しとしたものである。廩食は扶持米を給與されること。何れも微賤の者としての取扱ひである。) ○三品將軍(官位三品の左右監門將軍。) ○寖(やうやくと訓ずる。いつの間にか段々にの意。) ○紫微令(紫微省の長官。紫微省は中書省のことで、開元元年の十二月に玄宗は、中書を紫微。門下を黄門。侍中を監と改めたのである。紫微とも書き、宮廷の文書詔勅を司る。) ○太常(太常寺のことで、朝廷雅俗の諸樂を掌つてゐた役所。雅樂は祭祀大朝會等に用ひられ、俗樂は宴享に用ひられてゐた。雅樂の方を

盧懷愼　姚崇　伴食宰相

大曲の雅樂といひ、俗樂の方を教坊の俗部樂といつて、大常に隷屬してゐたのである。）　○教坊（俗樂の稽古場。蓬萊宮の側に新設され、教坊使を置いて取締らせたのである。）　○梨園弟子（玄宗音律に精しく、法曲を愛し、子弟三百を選んで梨園で法曲を自ら教授した。聲に誤ある者があると、玄宗必ず覺り知つて之を叱正した。この教授を受けた者が梨園の弟子である。これに本づいて、今日俳優のことを梨園の弟子といふ。）　○珠玉錦繡（珠は海底の玉。玉は山地より産する玉。錦は、にしき。繡は、縫で、ぬひとり、即ち刺繡の施されたもの。）　○興慶宮（その址が今日も長安城の東南にあるといふことである。元來、兄の成器が所有地で興慶坊といつた土地であつたのを、離宮を建てたらどうかといつて願ひ出たので、兄弟思ひの玄宗がすぐ之を喜んだのである。）　○花蕚相輝（詩經に、「棠棣の華、鄂として韡韡たらざらんや、兄弟燕飲す。」とあるに寄せての命名で、兄弟睦しく樂しまうとの心持をあらはしたのである。）　○勤政務本（論語に「君子は本を務む、本立つて道生す、孝悌は其れ仁を爲すの本か。」とあるに寄せての命名で、矢張兄弟相親しみ樂しまうとの心持を示したのである。）

○三年、盧懷愼爲黄門監。懷愼淸謹儉素、妻子不免饑寒、所居不蔽風雨。姚崇、嘗謁告十餘日。政事委積、懷愼不能決。崇出、須臾裁決盡。顧謂齊澣曰、我爲相何如。澣曰、可謂救時之相。懷愼知才不及、毎事推崇。時謂之伴食宰相。

[illegible]　○三年、盧懷愼、黄門監と爲る。懷愼、淸謹儉素にして、妻子饑寒を免れず。居る所、風雨を蔽はず。姚崇、嘗て謁告すること十餘日。政事委積するも、懷愼決すること能はず。崇、出づ。須臾に裁決し盡す。顧みて、齊澣に謂つて曰く、「我が相たる如何。」と、澣曰く、「時を救ふの相といふ

べし。」と、懷愼、才の及ばざるを知つて、事ごとに崇を推す。時に、之を伴食宰相と謂ふ。

通釋　開元三年、盧懷愼が黃門省の長官となつた。この盧懷愼といふ人は、性質が淸らかで謹み深く、その上儉約質素で、(黃門監でありながらも、官から賜はるものを親戚知己などに散じ與へるので、いつも)妻子は饑寒を免れず、その住居は雨や風を防ぐことも十分でない程の貧乏であつた。(時に、姚崇は紫微令で、懷愼と相並んで宰相であつた)。ある時、姚崇が(その子が死んだので)、忌引願をして役所を休むことが十日あまりであつたことがあつた。その時、色々の政務が滯り積つたが、懷愼はそれを裁決する事が出來なかつた。そこへ姚崇が出勤して、一寸の時間で裁決してしまつた。(得意になつて、屬僚の)齊澣に「俺の宰相としての腕前は何うだ、(何と素晴らしいものだらう)」と謂ふと、齊澣答へて、「あなたはその場々々に應じて救ふことの出來る宰相です」といつた。(こんな嘲侮で)、懷愼は、その事務の才がとても姚崇に及ばない事を知つて、事を處置する毎にいつも姚崇を先立て重んじてゐた。で其の頃、懷愼のことをお相伴宰相と世間で言つてゐた。

語釋　盧懷愼(滑州の人。宰相として人臣の榮を極めながら、常も私利を營まず、姚崇を推して嫉む所が無かつた。死に臨んで宋璟等の名士を推薦するなど、長者の德を備へた人物であつた。)　○黃門監(黃門省の長官で宰相となる者。黃門は、もとの門下省。監は、もとの侍中。玄宗の改めたところである。)　○淸謹(淸廉謹愼。)　○不レ蔽二風雨一(住居の粗末なこと。壁は風を防ぐに足らず、屋根は雨を支へるに足らないこと。)　○謁告(休暇を請うて

歸省すること。謁は、請ふ。告は、休暇。）○委積（つもりつもつて留ること。委は少しくつもり、積は多くつもる意といふ。）○齊澣（當時、紫微舍人で、崇の下役であつた。この時、姚崇との問答は、姚「俺は宰相として古の誰と比したものか。管仲晏子とは何うか」崇「管と晏とは自分の立てた法を終始したが、閣下は後から〳〵法が變ります。失體ながら管・晏には及びますまい。」姚「然らばつまり何だ」澣「その場〳〵に應じて時を救ふ宰相です。」姚「時を救ふ宰相は、さう得易いものではないぞ」と、ある。）○救レ時之相（その場合〳〵に應じて適當に處置してゆく宰相。惡くいへば、その時〳〵の間に合はせの宰相。で、褒めたとも冷かしたともつかぬ語である。）○伴食（正客のお伴をして御馳走に預ること。お相伴。轉じて、無能の大官を嘲る語。）

○四年、姚崇罷。宋璟爲黃門監。璟爲相務擇人。百官各得其職。好犯顏正諫。上甚敬憚之。璟與姚崇相繼爲政。崇善應變、璟善守文、志操不同。然協心輔佐、使賦役寬平、刑罰清省、百姓富庶。唐世賢相、前稱房杜、後稱姚宋。佗莫得比。二人每進見、上輒爲之起、去則臨軒送之。○八年、宋璟罷。

口譯 ○四年、姚崇罷む。宋璟、黃門監と爲る。璟、相と爲り、務めて人を擇ぶ。百官各々其の職を得たり。好んで、顏を犯して正諫す。上、甚だ之を敬憚す。璟、姚崇と相繼いで政を爲す。崇は善く變に應じ、璟は善く文を守り、志操同じからず。然れども、心を協せて輔佐し、賦役をして寬平ならしめ、刑罰清省に、百姓富庶なり。唐の世の賢相、前には房杜を稱し、後には姚宋を稱す。佗は

比するを得るなし。二人進見する毎に、上輒ち之が爲に起ち、去れば、軒に臨んで之を送る。○八年、宋璟、罷む。

通釋　開元四年、姚崇は職を退いた。宋璟が黄門監となつた。(從つて)宰相となり、務めて人物を選擇して、(それ〴〵適所に用ひたから)百官はそれ〴〵其の職務に適つた。宋璟は、天子の顏色の如何に關らず好んで正しく諫めたので、玄宗は大層敬ひ重んずると共に氣兼をした。この宋璟は、姚崇に繼いで政をしたが、(各々特長があつて)、姚崇は善く臨機應變の處置をとり、宋璟は善く定法を守つて几帳面な政事をした。(こんな風で)、二人の氣持は違つてはゐたが、心を協せて天子の政を輔け、賦稅や庸役を寛かに公平ならしめた。(それで當時)刑罰は手輕で少くなり、一般人民は富んでその人口も增した。唐代の賢宰相といへば、前には房玄齡・杜如晦。後には姚崇・宋璟の二人を稱揚したもので、その他はこれに比べる程の者は無かつた。姚崇・宋璟の二人が御前へ出る度に、玄宗は起ち上つて迎へ、退く時には軒端まで見送りに出られた。(それ程、重んぜられてゐた)。開元八年(正月)宋璟が(讒に逢つて)宰相の職を退いた。

語釋　得二其職一(そのそれ〴〵に適合した職に就いた。適材が適所に置かれたこと。)　○犯レ顏正諫(犯顏は、天子の顏色氣分が何らあらうと、憚らず恐れず、びし〳〵と迫ること。正諫は、正言を以て諫言すること。)　○

敬憚（敬重しながらも、心中恐れり遠慮する所あること。） ○守レ文（文は法文。改定のおきてに從つて法文どほりに處置すること。） ○志操（心に操り持つところ。） ○賦役（賦は賦税で、税を掛けること。役は賦役で、政府の爲に勞役に從ふこと。） ○富庶（生計が豊かになり、人口も增加すること。庶はユタカと訓じて、物の數多いこと。） ○起（椅子から起ち上つて出迎へること。） ○宋璟罷（時に大旱があつたのを、宰相の政の失錯であると、帝に申上げる者があつた事や、江淮地方の悪錢取締方が宜しくなかつたといふかどで免ぜられたのである。）

○九年、宇文融言、天下戸口逃移、巧僞甚衆。請加檢括。同平章事源乾曜贊成之。以融爲勸農使、奏置勸農判官十人、分行天下、競爲刻急。州縣承風勞擾、百姓苦之。○同三品張說建議、召募壯士、旬日得精兵十三萬。分隷諸衛、更番上下。兵農之分、始此。○十三年、更命長從宿衛、爲彍騎。

〔通釋〕 ○九年、宇文融言ふ、「天下、戸口逃れ移り、巧僞甚だ衆し。請ふ、檢括を加へん」と。同平章事源乾曜、之を贊成す。融を以て勸農使と爲し、奏して勸農判官十人を置く。天下を分行し、競つて刻急を爲す。州縣、風を承けて勞擾し、百姓これを苦む。○同三品張說、建議し、壯士を召募して、旬日、精兵十三萬を得たり。諸衛に分隷して、更番上下す。兵農の分るゝ、此より始まる。○十

三年。長從宿衞を更め命じて、彍騎と爲す。

【通釋】開元九年（二月）宇文融が上言した。「今、天下各州縣の家々人々が、（その原籍地から）逃れ移つて、うまくごまかして（賦役を逃れてゐる者が）大層多うございます。どうか檢査して取立てたうございます」と。同平章事の源乾曜（この時、既に宰相であつた）が、これに贊成した。そこで宇文融を、（評定の結果）、勸農使（新官職）として、奏上して其の下に勸農判官十人を置いて、手分をして全國を巡行させ、隨分嚴しく吟味をした。各州縣でも、その仕方に習つて、劇しく騷ぎ立てたので、そのため人民は難儀をした。（開元十年の秋）、同三品の張說が（兵制改革の）建議をして、壯士を召し募り、十日程の間に精兵十三萬を得た。それを諸衞に分屬させて、更る〴〵上つては宿衞し下つては歸休させた。これが始りで、兵は兵、農は農とそれ〴〵別れることになつた。開元十三年に、從來、長從宿衞といつてゐる兵を、彍騎と呼ぶことに名を更へた。

【語釋】宇文融（當時、監察御史であつた。本文の建策は、軍需を佐けんためであつた。その結果は、諸道に於て戸數八十萬戸を得、遊田の發見も相當にあつた。）○戸口逃移（戸は、家。口は、人。逃移は、原籍から逃れかくれること。つまり、戸役や夫役を免れるために、家宅を移し、口數を隱したのである。）○巧僞（うまく胡麻化す。）○檢括（檢査して取り立てること。括は搜し求める意である。しらべて取り上げる。）○同平章事（太宗の時、僕射の李靖が、病氣で辭職願を出した時、太宗が惜んで、病が少し良い方であつたら、二日に一度か三日に一度でよいから、中書門下に來て、事を平章せよと詔があつた。これから始つた役名である。）○源乾曜（湘州臨津の人。進士に第して、諫神龍中、殿中侍御史となり、

議大夫となり、開元八年正月、同平章事となり、五月に侍中になつたので、この時は旣に宰相の職に在つたのである。嘗て東宰した時、京北の尹となつて京師を留守し、寛簡を以てよく治めたといふことである。）○勸農使（名は勸農でも、その實は、耕地の實數踏査をするのが役目であつた。次の勸農判官はその下廻りである）○勸農判官十人（十人とあるのは、廿九人の間違らしい。新書にも通典にも廿九人と出てゐる。通典にはその姓名まで擧げてある位だから。）○刻急（刻は、刻薄で、きびしくせし／＼と迫ること。急は、急速で、餘裕を與へず、くん／＼と取調べること。）○承レ風勞擾（承風は、勸農判官等の刻急な仕方に倣ふことで、胡麻化しを少しでも多く發見して手柄にしようとしたのである。勞は、劇しの意。擾は、亂れさわぐ。）○同三品（中書省門下省の三品の官、卽ち侍中・中書令と同格の三品といふ意。太宗の時、李勣が、太子詹事として、三品の官と同格の扱ひを受けた事から始つた。張說はこの時、兵部尚書で同三品であつた。）○張說建議（從來、國民皆兵で二十歲から六十歲までの男子は、皆宿衞に任つて、諸衞府に屬し更番に宿衞したのであるが、韓休の時も諸種の徭役に驅出されるので、逃亡者が多くなり、府兵が貧弱になつて來たので、この建議が用ひられたのである。）○旬日（旬は十。十日のこと。）○分行（手分けをしてまはること）○分隸（わりつけること。分屬。）○諸衞（宿衞の兵は當時十二衞に分れてゐた。）○更番上下（更番は順番に交代すること。上は宿衞に上ること。下は下つて家に歸ること。非番。）○長從宿衞（開元十二年の冬、編成された府兵で、十二萬人から成つてゐた。當に宿衞させてゐたので名づけられたのである。長從は、常任の意。）○彍騎（彍は音クワク、弩を一ぱいに引張ること。強勇なる兵の意を含めた名稱である。彍騎は又射騎ともいつた。十人一組を火となし、五火を團と稱し、團に酋長があつた。別に驍勇者と稱んで番頭とした。すべて十二萬人、十二衞に分屬した。常に弩射を練習してゐた。）

○二十一年、韓休同平章事。休爲レ人峭直。上或宴遊小過、輒謂二左右一曰、韓林知否。言終諫疏已至。左右曰、休爲レ相、陛下殊瘦二於舊一。上歎曰、吾雖レ瘠、天下肥矣。休罷。張九齡繼レ之。○二十二年、九齡爲二中書令一、李林甫同三品。林甫柔佞多二狡數一。深結二宦官及妃嬪家一、伺二上動靜一、無レ不レ知レ之。由レ是每二奏對一常

稱ノ旨ニ。

【[illegible]】二十一年、韓休、同平章事たり。休、人と爲り峭直なり。上、或は宴遊小しく過ぐれば、輒ち左右に謂つて曰く、「韓休、知るや否や。」と。言終つて諫疏已に至る。左右曰く、「休、相となりしより、陛下殊に舊より瘦せたり。」と。上、歎じて曰く、「吾瘠せたりと雖も天下肥えたり。」と。休罷む。張九齡、之に繼ぐ○二十二年、九齡、中書令と爲り、李林甫、同三品たり。林甫、柔佞にして狡數多し。深く宦官及び妃嬪の家に結び、上の動靜を伺ひて、之を知らざる無し。是に由りて奏對する每に常に旨に稱ふ。

【通釋】開元二十一年に、韓休が同平章事（として、相と）なつた。この韓休といふ人は、性質が極めて嚴しく勵しく（眞直一方の人であつた）。玄宗が、時に宴遊などで少しく度を過すことがあると、お側の者に、「韓休に氣付かれはしないか」と、囁くと、その言が未だ終らないうちに、韓休からの諫めの狀が御前に來るといふ程の有樣であつた。（ある時、玄宗が鏡を見て不愉快さうに默つてをられると）、お側の者が、機嫌とりに、「韓休が相となつてから、陛下は殊に以前よりもお瘠せになりま

した」と申上げて、（暗に韓休を排斥した。ところが流石に玄宗はえらい所があつて）「朕は瘦せたけれども、天下は韓休のために富み太つたぞ」と稱せられた。その韓休が職を辭した。張九齡が繼いで相となつた。

開元二十二年（五月）、張九齡が中書令となり、李林甫が同三品となつた。この李林甫といふ男は、見かけは柔和であるが口が上手で手練手管のしたゝか者であつた。深く宦官や奥向きの女官に取入つて、玄宗の内々の樣子からその心持まで探つて、十分に之を知つてゐた。だから玄宗の御下問にお答へする毎に、いつもその御意にかなつた。

【語釋】 峭直（氣象が峻嚴できびしいこと。峭は、山の峻嶮なる貌で心のきびしくはげしい有樣に用ひる。） ○安遊小過（酒盛して遊び樂むことが少しく度をすごすこと。或は小過は、セウクワと熟讀して、宴遊したり、小さい過失が有ると解するもよい。） ○諫疏（諫言の書狀。疏は一つ〳〵に書き分けて陳べてあるもの。） ○韓休（相となつて甚だ時望にかなつた。性峭直で榮利をもとめる所がなかつた。又、正を守つて少しも阿る所がなかつた。宋璟が「意はざりき韓休よく此の如くならんとは、廉潔、仁者の勇なり」と賞稱した程で、唐代名相の一人である。） ○吾雖瘦云々（この歎稱の外に、玄宗はこんなことを言つてゐる。「吾れ退きて安からず、韓休力爭すれば、吾れ退きて安し。韓休を用ふるは、社稷の爲にして身の爲にするに非ず」と。） ○休罷（初め相となつたのは、蕭嵩の推薦によつたのであるが、韓休の性質が峭直で、毫も蕭嵩に阿るところがないのみならず、却つて、くん〳〵遣込めたりなどしたので、遂に折合が合はなくなり、辭職するに至つたのである。） ○張九齡（唐代名相の一人。字は子壽。七歲でよく文を屬した。中書舍人であつた時、詞人の宗として文場元帥と呼ばれた。玄宗の千秋節に、千秋金鑑錄五卷を撰して諷諭したことがある。李林甫が捕へようとして却つて排され、相を罷めて家居して死んだ。天下の者は、曲江公と稱してその名を言はなかつた程であつた。その事蹟は屢々に本文に出てくる。） ○李林甫（唐の宗室である。性、柔佞狡黠で權謀術數に長けてゐた。その行事の一斑は本文に見える所。在朝十九年に及び專政自恣、遂に安史の亂を釀成するに至つた。） ○柔佞（柔和さうに見えて口がうまいこと。）

安祿山
史思明
林甫專政

○狡數（わる賢くて術數のあること。狡猾な手段を講じてずるく立ち廻ること。）

○二十四年。幽州節度使張守珪、執敗軍將安祿山、送京師。張九齡、批曰、守珪軍令若行、祿山不宜免死。上惜其才勇、赦之。九齡力爭曰、祿山有反相、不誅必爲後患。上曰、卿勿以王夷甫識石勒、枉害忠良。竟不誅。祿山本營州雜胡也。初名阿犖山。母再適安氏、故冒其姓。部落破散逃來。狡黠爲守珪所愛。又有史窣干者。與祿山同里閈。亦驍勇。守珪遣入奏事。上賜名思明。○千秋節、群臣皆獻寶鏡。九齡述前世興廢、爲千秋金鑑錄五卷上之。○九齡罷。李林甫兼中書令。上在位久漸肆奢欲。林甫遂得專政。

【通釋】二十四年、幽州の節度使、張守珪、敗軍の將、安祿山を執へて京師に送る。張九齡、批して曰く、「守珪の軍令、若し行はれれば、祿山宜しく死を免るべからず」と。上、其の才勇を惜んで之を

赦さんとす。九齡力め爭ひて曰く、「祿山反相有り、誅せずんば必ず後患を爲さん」と。上曰く、「卿、王夷甫が石勒を識りしを以て、枉げて忠良を害すること勿れ」と。竟に誅せず。祿山は本と營州の雜胡なり。初めの名は阿犖山。母、安氏に再適す。故に其の姓を冒す。部落破散して逃れ來る。狡黠にして、守珪の爲に愛せらる。又史窣干といふ者有り。祿山と里閈を同じくす。亦驍勇なり。守珪入つて事を奏せしむ。上、名を思明と賜ふ。○千秋の節に、羣臣皆寶鏡を獻ず。九齡、前世の興廢を述べて、千秋金鑑錄五卷を爲つて、之を上る。九齡、罷む。李林甫、中書令を兼ぬ。上、在位久しく、漸く奢欲を肆にす。林甫、遂に政を專らにするを得たり。

【通解】開元二十四年、幽州の節度使の張守珪が、（部下の將で、東蒙古・北滿洲地方の叛者を討伐して）敗けたところの安祿山を執へて都の長安に護送した。（本來は斬るべきであるが、部下の愛將であるので決斷し兼ねて、朝廷の裁きに任せる爲であつた）。宰相の張九齡が批判して「若し張守珪の軍令が十分に行はれたならば、祿山は斬られてゐたのである。（實際、守珪は最初、軍律に照して祿山を斬らうとしたのであつた）。（詮議の餘地は無い。斬るべきである）」と、申し上げた。ところが、玄宗は、祿山の才あり勇あるを惜んで、赦さうとせられたので、九齡は、熱心に反對して、「祿山には

謀叛の人相があります。今、斬らなかつたならば、後日必ず謀叛をするに定つて居ります」といふと、玄宗は、「お前、昔、王夷甫が石勒の謀叛を見拔いたのを氣取つて、無理に忠良の人物を殺すやうな事をするな」と言つて、竟に祿山を赦してしまつた。この安祿山といふ男は、元來、營州の塞内に雜居して居た胡の種族であつた。初めの名は阿犖山といつてゐたが、その母親が、(後家になつてから)安氏に再縁したので、安といふ姓を名告るやうになつたのである。そのうち、營州の胡人部落が破れて散り〳〵になつたので、(幽州に)逃げて來たが、惡智慧のある男で、如才なく立廻つて、節度使の張守珪に愛せられて、(遂にその養子とまでなつた)。又、史窣干といふ者があつて、祿山と同郷の者であつた。この男も亦、祿山と同樣、武勇絶倫の者で、(矢張、守珪に愛せられて、

唐代地圖

將軍にまで出世したのである）。（ある年）、守珪のお使となつて長安に來て事を奏上した。（その時の樣子が玄宗の氣に入つて）、名を思明と賜はつた。（この二人が、後の安史の亂の張本人となるのである）。（この年）玄宗の誕生日（八月五日）の祝に、群臣がそれ〴〵寶としてゐる鏡を献上して祝意を表した。獨り九齡だけは、（鏡を以て照らすと姿形が見えるだけだが、古人を以て自分を照らすと吉凶が見える。といふので）、前世の盛衰興亡のあとを書き記して、千秋金鑑錄五卷を作つて、（これを鏡とせよ。との意で）献上した。九齡が相を罷めた。李林甫が中書令を兼ねて（相となつた）。玄宗は帝位に在ることも、最早二十四年の長い間で、追々（緊張を失つて）奢欲の心が增長して來た。（からなると小人の舞臺で）、李林甫は遂に、政權を勝手にするやうになつた。

語釋　幽州（今の河北省順天府大興縣の西南地方。）　〇節度使（國境の防備と夷狄綏撫とを掌つたもので其の兵を方鎭といつた。太宗の時、設けられた官。宗室の勳舊を以て之に任じて、世襲の官として免黜せられるといふことが無かつた。）
〇張守珪（陝州の人。慷慨にして節義を尚んだ。瓜州の刺史であつた時、不意に虜の襲撃をうけたことがあつて、衆恐怖して色を失つたが、守珪は城上で置酒し樂を奏してゐたので、虜はその計謀あるを疑つて退却した。すると急に之を追撃して大勝した。その後、京に入つて右羽林大將軍となつた。）　〇批（批判すること。他文の末尾に、それに對する意見を書き添へること。）　〇反相（叛逆の相貌。）　〇王夷甫識二石勒一（石勒年十四、上東門にもたれて嘯いてゐたのを、王夷甫が見て、この胡の小僧は、その聲その眼色が尋常でない、恐らく後來天下の患を爲すものであらう。といつた事を指したもので、晉の載記の條に出てゐた話である。王夷甫は王衍のこと。）　〇營州（今の河北省永平府地方。）　〇雜胡（塞内に雜居してゐる突厥の種族。）　〇母（阿史德と
〇阿犖山（母の阿史德が、軋犖山（アツラクザン）に祈つて得た子。故に犖山と命じた。阿は、母の姓。軋犖山は、戰闘の神として突厥の崇拜するところであつた。祿山の生れた時には、光芒があたりを照して野獸が盡く鳴いたといふ話である。）

いふ。突厥の巫であつた。）○再適（再嫁といふに同じい。二度の嫁。適は、ユクと訓じて、婦人の嫁して夫の家に行くこと。）○安氏（名は延偃といふもの。）○部落破散（安氏の属した部落で、他の部落に襲はれて破れ、部落民が散り〲になつたのである。）○狡黠（音カウカツ。わるがしこいこと。悪智慧のまはること。）○里閈（音リカン。郷里のこと。閈は、村里の門。）○史思明（寧夷州の突厥種。瘦せて肩が張つて猫背で鼻がゆがんでゐて毛が薄く隨分見苦しい男であつたといふ。その事蹟は本文に出てくる。）○千秋節（玄宗の誕生日の名。後世の天長節、萬壽節といふにあたる。開元十七年から始つた。玄宗の誕辰は八月五日。）○獻二寶鏡一（鏡を献上することは、當時の習俗であつた。帝徳の明かなこと、帝位の堅實なこと、この鏡のやうであるとの意を寓したものだといふ。別に、古鏡を賞翫したことは、當時の風習でもあつた。）○九齡罷（玄宗が李林甫を相としようとしたところ、九齡が、それは異日社稷の憂であるといつて反對したので、林甫に怨まれ、讒せられて罷免されたのである。幾くもなくして死んだが、玄宗はその風度を愛重して、その後、宰相が士を薦める度に、九齡のやうな人物がどうか、と聞いたと云ふ。）

○二十六年、立忠王為太子。○二十九年、以安祿山為營州都督。祿山傾巧善事人。上左右至平盧、皆厚賂。歸譽之。上益以賢。○天寶元年、以祿山為平盧節度使。○二年、祿山入朝。○三年、改年曰載。○以祿山兼范陽節度使。○四載、以楊太眞為貴妃。故蜀州司戶玄琰女也。為上子壽王妃十年矣。上見其美、令自以其意乞為女官、且為壽王別娶、而後納之。遂專寵。

〔譯〕二十六年、忠王を立てて太子となす。○二十九年、安祿山を以て營州の都督と爲す。祿山、

傾巧にして、善く人に事ふ。上の左右、平盧に至れば皆厚く賄ふ。歸つて、之を譽む。上、益す以て賢とす。○天寶元年、祿山を以て平盧の節度使と爲す。○二年、祿山入朝す。○三年、年を改めて載と曰ふ。○祿山を以て范陽の節度使を兼ねしむ。○四載、楊大眞を以て貴妃と爲す。故の蜀州の司戸玄琰の女なり。上の子壽王の妃たること十年。上、其の美を見て、自ら其の意を以て乞ひて女官と爲らしめ、且つ壽王の爲に別に娶り、而る後之を納る。遂に寵を專らにす。

【通譯】開元二十六年、(第三子の)忠王を立て世嗣とした。(これが後の肅宗皇帝である)。開元二十九年(八月)、安祿山を營州の都督に任命した。祿山は、よこしまでお上手で、うまく人と交際した。(例へば)天子のお側の者が、平盧に出張でもしてくると、それ〲手厚く賄賂を使つて(機嫌をとるといふ有樣であつた。で)それらの人が都に歸ると、(薬が利いてゐるので)、祿山を帝の前で褒めそやしたものである。(そんなわけで)、玄宗はいよ〱祿山を賢才なりとした。(それで、かやうに平盧の兵馬使から、營洲の都督に出世した次第である)。○天寶元年、(開元は二十九年で終つたのである)、祿山を、平盧の節度使とした。(今の滿洲地方を鎭撫するのが任務で、その治所は矢張營州であつた)。○天寶二年(正月)安祿山が入朝した。(滯在中、勝手次第に謁見を許したなど、帝の厚遇は非

常なもので、祿山も忠義ぶつて、色々うまい事をいつて、帝を喜ばせたものである）。○天寶三年（堯舜時代の例にならつて、年といふのを載と改めた。○（二月には）祿山に、范陽の節度使を兼ねさせた。（これで、祿山の支配範圍は、今の河北から山東の西部、河南の北部にわたつた廣いものになつたのである）。○天寶四載、楊太眞を（皇后に次ぐところの女官）貴妃とした。この楊太眞といふのは、もと、蜀州の戸籍などを掌つてゐた玄琰といふ者の女で、初め玄宗の子の壽王の妃で十年も事へたものである。（丁度、玄宗は最愛の武惠妃に死なれた時であつて、ある人から楊太眞の美貌なる由を聞かれ、御覽なさると成程美人で頗るお氣に入つた。（そこで後宮に入れようとしたが、何分吾子の妃であるので、先づ）楊太眞自身の心から出たやうにして女道士として宮中に入れ、壽王の爲には別に（韋昭訓といふ者の女を）娶つてあてがひ、そのあとで納れて貴妃とした次第である。（これが有名なる楊貴妃で）、遂に寵愛を專らにするやうになつたのである。

【語釋】 立二忠王一（忠王、名は亨。初め皇子の瑛といふのが太子として立つてゐたが、廢せられて死を賜はつた。そこで李林甫が、壽王を太子に立てられるやうに勸めたが、玄宗は、忠王が年長でもあり、學問が好きで、謹愼でもあるといふので、高力士と計つて太子に立てられたのである。即ち後の肅宗皇帝である。）○傾巧（傾は、よこしま。巧は、お上手もの。傾側機巧。）○善事レ人（人をそらさないやうに、うまく取りなすこと。）○平盧（その城は漁陽にあつたのである。漁陽は、河北省順天府薊州の地。）○載（年といふに同じい。堯舜時代に載といつてゐたのでそれにならつたのである。因に、夏には歲、殷には祀。周には年といつてゐた。）○范陽（今の河北省涿州地方。）○楊太眞（所謂、楊貴妃で、履歷は本

祿山爲貴妃兒

視金帛如糞土

文にあるとほりである。國府擬洛豐艶、よく音律を曉つて、性慧敏、玄宗の意を迎へてそらす所がなかつた。寵愛忽ち後宮を傾けるに至つた。當時宮中では號して娘子といつてゐた。大眞は、女道士としての道號で、帝から賜はつた名である。）　○貴妃（女官の名。皇后に次ぐ。）　○壽王（楊貴妃以前に、玄宗の寵をあつめてゐた武惠妃の生んだ皇子である。）

○蜀州（今の四川省崇慶州。）　○司戸（州内の戸籍、賦役、道路などの事を掌る役。）　○女官（所謂女官ではない。女道士のこと。女にして方術を修めるもの。）

○六載以祿山兼御史大夫。祿山請爲楊貴妃兒。九載、賜祿山爵東平郡王、兼河北道採訪處置使。祿山入朝。楊銛兄弟姉妹、皆往戲水迎之。銛貴妃之從祖兄也。得出入禁中。先是判度支屢奏。帑藏充牣。上帥群臣觀之。由是視金帛如糞土、賞賜無限。賜銛名國忠。

【[illegible]】　六載、祿山を以て御史大夫を兼ねしむ。祿山、請ひて楊貴妃の兒と爲る。九載、祿山に爵、東平郡王を賜ひ、河北道の採訪處置使を兼ねしむ。祿山入朝す。楊銛の兄弟姉妹、皆戲水に往きて之を迎ふ。銛は貴妃の從祖兄なり。禁中に出入することを得たり。是より先、判度支屢〻奏す。帑藏充牣すと。上、群臣を帥ゐて之を觀る。是に由つて金帛を視ること糞土の如く、賞賜限無し。銛に名を

國忠と賜ふ。

【通釋】天寶六年、安祿山は(いよ〳〵信任せられて、顯職の)御史大夫を兼ねさせられた。(のみならず、楊貴妃の從兄の楊銛たちと、兄弟分になるやうにと命ぜられた。そんな事から遂に)、楊貴妃の子供分にして欲しいと願ひ出て許された。天寶九年(五月)、帝は祿山に、東平郡王といふ爵號を賜はつた。(唐代、武人に王爵を賜はつたのはこれが始で、以て祿山寵愛の程を知ることが出來る)。(八月には、又)、祿山に、河北道の採訪處置使といふ役を兼ねさせた。祿山が入朝した。すると帝の命で、楊銛はじめ祿山と兄弟姉妹になつた所の者がそろつて、戯水まで出迎へるといふやうな騒であつた。楊釗といふのは、楊貴妃の從祖兄で、(無學な輕輩で鄕人からも馬鹿にせられてゐた程の男であつたが、貴妃のお蔭で)禁中に出入することが出來るやうになつたのである。これより以前、釗は判度支事になつてゐたが、屢、官の金帛の倉庫が一杯になつたといふことを奏聞したので、玄宗は、群臣を引きつれて、倉庫を視て廻られた。それからといふものは、金帛などは糞土同様のものに思つて、臣下に賞賜されることが無制限であつた。釗が(改名を願ひ出たので)名を國忠と賜はつた。

【語釋】御史大夫(御史は、百官の罪を糾正することを掌る官。大夫は、その長官。)　○爲二楊貴妃兒一(兒は、養子ではない。たゞ、その子供だといふ名目を受けただけで、小兒の遊びで、親子ごつこをする時の、親だ子だと

言つてゐるの類である。）　○河北道（黄河の北一帶の地。十五道の一。）　○採訪處置使（官吏の非法を檢察する役。十五の各道に置かれたもので、その地方の賢刺史が多くは任命されたものである。）　○楊釗兄弟姉妹（楊釗・楊銛・楊錡・韓國夫人・虢國夫人・秦國夫人、何れも帝命によって　祿山と兄弟分となつてゐたのである。兄弟姉妹は、祿山との義の關係上のそれである。因に、銛錡の二人は、貴妃の從兄。三夫人は、貴妃の姉にあたる。）　○戲水（臨潼縣の東にあつて、流れて渭水に入る。）　○從祖兄（またいとこ。曾祖を同じくする兄。）　○判度支（判度支事のこと。國の會計を掌る官。）　○帑藏（金銀布帛を納める倉庫。帑は、金銀布帛をさす。）　○充牣（一杯に滿ちわたること。牣は音ジン、滿の意。）　○糞土（ごみまじりの土。腐つてぼろ〳〵になつた土。粗末な、つまらぬものゝ譬。）　○賜名國忠（圖讖に、金刀の文字があるといふので、釗字を捨てゝ他に改めたいと願ひ出たので、國忠と賜はつたのである。）

○十載爲安祿山起第、窮極華麗。上日遣諸楊與之游。祿山體肥大。上嘗指其腹曰、此胡腹中何所有。對曰、有赤心耳。祿山入禁中、先拜貴妃。上問其故、曰、胡人先母而後父。祿山生日、賜予甚厚。後三日召入。貴妃以錦繡爲大襁褓、使宮人以綵輿舁之。上聞歡笑問故。左右以貴妃洗祿兒對。上賜妃浴兒金銀錢、盡歡而罷。

【通釋】十載、安祿山の爲に第を起し、華麗を窮極す。上、日に諸楊をして之と游ばしむ。祿山、

體、肥大なり。上、嘗て其の腹を指して曰く、「此の胡の腹中、何の有る所ぞ」と。對へて曰く、「赤心有る耳」と。祿山、禁中に入れば先づ貴妃を拜す。上、其の故を問ふ。曰く、「胡人、母を先にして父を後にす」と。祿山が生日に、賜予甚だ厚し。後三日、召し入る。貴妃、錦繡を以て大襁褓を爲り、宮人をして綵輿を以て之を舁かしむ。上、歡笑するを聞いて、故を問ふ。左右、貴妃、祿兒を洗ふを以て對ふ。上、妃に浴兒金銀錢を賜ひ、歡を盡して罷む。

【通釋】天寶十年、安祿山の爲に、（都の親仁坊といふ處に）屋敷を建築して華美を盡し壯麗を極めた。玄宗は、（祿山が上京中は、必ず）毎日、楊貴妃の一族の者を遣つて、祿山の相手として宴游させた。祿山は、體格が肥え太つて、（とりわけ大きな腹をしてゐた）。玄宗が、或る時、その腹を指して、「この胡人の腹の中には、何がは入つて居るのか」と戲れに尋ねられると、「はい〳〵。たゞ眞心ばかりでございます」と、（うまいことを言つて、益々その寵愛を蒙つた）。祿山が、宮中に參內すると、定つて第一に楊貴妃を拜し、（次に帝を拜した）。玄宗が、（不審に思つて）そのわけを問はれると、「胡人の風俗では、萬事、母を第一と致しまして、父を第二と致します」と、（これも、うまいことお氣に入るやうな返答をした）。祿山の誕生日に、（御祝儀として）下され物が大層手厚かつた。そ

れから三日目に、宮中に召出された時に、楊貴妃が美しい錦綉で、大きな襁褓を作つて、（それで祿山をくる〱と包み）、きれいな色どりの輿にのせて、宮女たちに舁かせて（殿中に入れさせた）。（これは前に、祿山が、貴妃の子となることを願つて許された事があるので、今、戯れに自分の赤坊として扱つたのである）。玄宗が、宮女たちの笑ひさゞめくのを聞いて、何事があるのか、と問はれると、左右の者が、「只今、貴妃が祿坊に産湯をつかはせて居られるのでございます」と對へると、（それではといふので）、貴妃に、産湯御祝儀を下されて、十分に愉快をつくしてその事がすんだ。

語釋 起ㇾ第（やしきを建築する。「第」音テイ。邸宅のこと。邸には甲乙次第があるのでいふのである。） ○諸楊（楊氏一門のもの。楊銛・楊錡・楊國忠・韓國夫人・虢國夫人・秦國夫人等。） ○此胡（胡はえびす、胡人のこと。祿山は胡人であるので、打ちとけて敢て胡と呼んだのである。） ○生日（誕生日。誕辰。） ○賜予（下され物。御下賜品。予は與と音通で、同義に用ひる。） ○襁褓（乳兒を包む衣類。襁は、おびひも。褓は、むつき、おしめ。） ○綵輿（美しい色どりの切で飾つた乘物。綵は色どりの美しいきぬ。輿は前後より舁ぐ乘り物。） ○洗祿兒（洗は産湯をつかはせること。兒は坊ちやん。） ○浴兒金銀錢（産湯の御祝儀下賜金。）

自是出入宮掖、通宵不ㇾ出、頗有醜聲聞于外。上亦不ㇾ疑。又以祿山兼河東節度使。李林甫與祿山語、每揣知其情、先言ㇾ之。祿山驚服、每ㇾ見盛冬必汗。謂林甫為十郎。既歸范陽。其下自長安歸、必問十郎何言。得美言則喜。或

但云、語安大夫、須好點檢。郎曰、噫嘻我死矣。

【譯】是より宮掖に出入し、通宵出でず、頗る醜聲の外に聞ゆる有り。上、亦疑はず。又祿山を以て河東の節度使を兼ねしむ。李林甫、祿山と語るに、毎に其の情を揣り知つて先づ之を言ふ。祿山驚き服し、見る毎に盛冬にも必ず汗す。林甫を謂つて十郎と爲す。既にして范陽に歸る。其の下長安より歸れば、必ず「十郎何をか言ふ」と問ふ。美言を得れば則ち喜ぶ。或は但だ云ふ、「安大夫に語れ、須らく好く點檢すべし」と。即ち曰く、「噫嘻我死なん」と。

【講】この事があつてから、祿山は奥向に出入して、時には一晩中退出しない事もあつて、大層みだらな評判が世間に傳へられた。(けれども)玄宗は少しも疑はないで、又、祿山に、河東の節度使を兼務させた。宰相の李林甫は(祿山の一枚上手で)、祿山と語る度に、その心持を推し量つて、祿山が言葉に出さないうちに、林甫の方から言ひ出したものである。(流石の)祿山も、それには驚いて、林甫に對すると冬の盛りでも汗をかいた。(で、祿山はいつも)十郎〳〵といつて、林甫の名を言はないで(敬意を表してゐた)。祿山が任地の范陽に在る時、部下の(都の屋敷の留守番に置いてある者

評二李林甫一

口蜜腹劍

養二成天下之亂一

か」范陽に來ると、「林甫が俺の事を何とか言つてゐなかつたか」と、必ず氣がゝりで聞いたものである。で、その時、「褒めて居ました」と聞くと大喜びで、或は、「よく〳〵注意するがよいと申せ、との事でした」と聞くと、「あゝ、命が無い。俺は殺されるだらう」と言つた。（それ程、林甫の機嫌ばかりを氣にしてゐた）。

語釋 宮掖（奥御殿。奥向。帝に奉仕する女官のゐるところ。後宮。掖は、宮旁の舍。） ○河東節度使（太原を治所として、突厥に備へる。） ○揣二知其情一（其情とは、その心持。揣は音シ、推し量ること。） ○十郎（十は、林甫の輩行。郎は、男子の美稱。輩行を稱して名を呼ばないのは、その人を敬愛してのことである。前の張易之、張宗昌兄弟を、五郎六郎と呼んだ例と同じい。） ○美言（ほめことば。） ○安大夫（大夫は、節度使に對して呼ぶ稱。） ○點檢（點をうつて一々注意してあらため調べること。） ○噫嘻我死矣（噫嘻は、歎聲、ため息の聲。我死矣は、罪名を蒙つて死刑を宣せられるであらう、の意。）

○十一載、李林甫卒。林甫媚二事上左右一、迎二合上意一以固レ寵、杜二絶言路一、掩二蔽聰明一。嘗語二諸御史一曰、不レ見二立仗馬一乎、一鳴輒斥去。妬レ賢嫉レ能、排二抑勝レ己一。性陰險。人以爲二口有レ蜜、腹有一レ劍。毎夜獨坐二偃月堂一、有レ所二深思一、明日必有二誅殺一。屢起二大獄一。自二太子一以下皆畏レ之。在二相位一十九年、養二成天下之亂一、而上不レ悟。

然祿山畏林甫術數、故終其世未敢反。是歲國忠爲相、言祿山必反、且曰、試召必不來。○十三載、祿山聞召卽至。上、由是不信國忠之言、加祿山左僕射而歸。

【讀方】十一載、李林甫、卒す。林甫、上の左右に媚び事へ、上の意に迎合して、以て寵を固うし、言路を杜絶し、聰明を掩蔽す。嘗て、諸御史に語げて曰く、「仗に立つの馬を見ずや。一たび鳴けば輒ち斥け去らん」と。賢を妬み能を嫉み、己に勝るものを排抑す。性陰險なり。人以て口に蜜有り腹に劍有りと爲す。每夜、偃月堂に獨坐し、深思する所有れば、明日必ず誅殺有り。屢〻大獄を起す。太子より以下皆之を畏る。相位に在ること十九年、天下の亂を養成す。而して上悟らず。然れども祿山、林甫の術數を畏る。故に其の世を終ふるまで未だ敢て反せず。是歲、國忠、相と爲り、「祿山必ず反せん」と言ひ、且曰く、「試みに召せ、必ず來らざらん」と。○十三載、祿山、召を聞いて卽ち至る。上、是に由つて、國忠の言を信ぜず、祿山に、左僕射を加へて歸らしむ。

【通釋】天寶十一年（十一月）、宰相の李林甫が死んだ。林甫は、玄宗の左右の者に媚び諂つて、自分

を褒めさせるやうにし）、玄宗には、その御機嫌に叶ふやう〳〵にと仕向けて、その寵任の衰へないやうにし、諫言の路を塞いで、帝の聰明を働かさないやうにしてゐた。嘗て、多くの（朝政の間違ひを申上げる役の）御史に向つて、「君等。宮門の護衛に立つ馬を見るがよい。（默つておとなしくしてゐればよいのに、生意氣に）一度でも鳴聲を立てると、行列から退けられてしまふぞ」と、嚇して、（暗にその言路を塞いだ程である）。（のみならず）、賢者、能者を妬んで、才能の己より勝れてゐる者を排斥して手の出ぬやうにした。性質が陰險で、世人は、「林甫は、口ではうまいことを言ふが、腹は黑うて恐ろしいぞ」といつてゐた。每晩、その住居の偃月堂に獨り坐つて、何か深く考へ込んでゐる事があるなと思ふと、その明くる日には必ず人を誅殺した。度々、大獄を起して（人を誅罰したので）、太子をはじめ皆が恐れふるつてゐた。宰相の位に在ることが十九年間で、その間に、天下大亂の基になるやうな事をしてゐたが、（言路が塞がれてゐるので）玄宗はそれを知らなかつた。けれども、安祿山は（前條にもあつたやうに）林甫のたくらみを畏れてゐたので、林甫が死ぬまでは、思ひきつて謀叛をしなかつた。この年、（林甫が死んで）楊國忠が宰相となつて、「祿山が必ず謀叛します」と玄宗に申上げ、「ためしに、都へ呼出してごらんなさい、きつと上京しますまい。（それが、叛意のある何よ

以二蕃將一代二漢將一

馬不レ獻不可

安祿山反

りの證據です)」と言つた。で、十三年(正月)に、祿山を召すと、すぐ飛んで來た。(こんな鹽梅で)玄宗は、楊國忠の言を信じないで、(態々出て來た祿山を氣の毒に思ひ)、左僕射の官を加へて任地范陽に歸らせた。

語釋 迎合(人の氣に入るやうにつとめる。おもねりへつらふ。) ○言路(進言するみち。諫言するみち。) ○杜絶(ふさぎたつ。杜は塞ぐ。) ○諸御史(御史は、不法を糺彈し、風憲の任を掌るもの。大夫及び中丞の下に四人の侍御史があり、又別に殿中侍御史六人があつた。) ○立仗馬(仗は、儀仗で、宮殿の護衛、又は儀式に參列する兵馬。唐朝では、宮殿護衛のために、毎日宮門の側に羽林の衛兵が詰めてゐて、そこに禁裡の厩から八頭の馬を出して立てておいたのである。「立仗馬」はそれである。) ○排抑(押しのけ抑へる。) ○陰險(かげに廻るやうにして惡だくみをすること。) ○口有レ蜜腹有レ劍(外面親切なるが如く見えて内心陰險なる喩。) ○偃月堂(林甫の堂名。偃月の形に構成せられてゐたのでかく號してゐたのである。偃月は、半月のうつぶしになつた形で、額の骨のさま、貴女の骨相にも稱せられる。) ○深思(こゝでは、已に不利なる者を構陷するための策略を考へ込んでゐること。) ○天下之亂(安祿山の反を指す。) ○聞レ召卽至(祿山の奸黠さを見ることが出來る。この時、上謁してそら涙を流し、詭忠をよそほつて、宰相國忠の嫉を受けてゐますから何れ誅戮をかふむるであらうなどと、玄宗をごまかしてゐる。この事あつてから、祿山の反を言上する者があると、捉へて范陽の祿山のところへ送致せられた位であつた。)

○十四載、祿山請下以二蕃將一代中漢將上。上猶不レ疑。表請レ獻二馬三千匹一。每レ匹二人執レ控、二十二將部送。河南。上始疑レ之。遣レ使止二其獻一。祿山踞レ床不レ拜。曰、馬不レ獻亦可。十月當レ詣二京師一。使還。亦無レ表。是冬祿山遂反。發二所部兵及奚・契丹、

顔眞卿

顔杲卿

凡十五萬。發范陽、引而南。步騎精鋭、煙塵千里。時承平久、百姓不識兵革。州縣皆望風瓦解。進陷東京。○平原太守顔眞卿、起兵討賊。上始聞河北從賊、歎曰、二十四郡、曾無一人義士邪。及眞卿奏至、大喜曰、朕不識眞卿何狀、乃能如此。○常山太守顔杲卿、起兵討賊。河北諸郡皆應之。

【通釋】十四載、祿山、蕃將を以て漢將に代へんと請ふ。上、猶ほ疑はず。表し請ひて馬三千匹を獻ず。匹毎に二人控を執り、二十二將をして河南に部送せしむ。上、始めて之を疑ふ。使を遣はして其の獻を止む。祿山、床に踞して拜せず。曰く、「馬、獻ぜざるも亦可なり。十月、當に京師に詣るべし」と。使還る。亦表無し。是の冬、祿山遂に反す。所部の兵及び奚・契丹を發すること、凡べて十五萬。范陽を發し、引きて南す。步騎精鋭、煙塵千里。時に承平久しく、百姓兵革を識らず。州縣皆風を望んで瓦解す。進んで東京を陷る。○平原の太守顔眞卿、兵を起して賊を討ず。上、始め、河北、賊に從ふと聞き、歎じて曰く、「二十四郡、曾て一人の義士無きか」と。眞卿の奏至るに及び、大に喜

んで曰く、「朕、眞卿の何の狀なるを識らず、乃ち能く此の如し」と。○常山の太守、顏杲卿、兵を起して賊を討ず。河北の諸郡皆、之に應ず。

〔通釋〕天寶十四年(二月に)、安祿山は(その配下三十二人の)漢種の將校を、胡種の將校と代らせたいと願ひ出た。(楊國忠等が、これは謀叛の準備で、最早反意は明かである。と申上げたが)、それでも、玄宗は疑はないで(之を許した)。(七月には)、上表して、馬三千匹を獻上したいと願つた。馬一頭ごとに二人の口執をつけ、二十二人の胡將が手分して、それを監督し、河南まで送り屆けさせる手順にした。(あまりに仰山で、忽ち三千の騎兵、三千の歩兵に變化して、帝都を脅すに足るので)玄宗は、始めてその反意あるを疑つた。そこで、使者をやつて、その獻上を差止めた。祿山は、(使者に對して)、床几に尻を据ゑたまゝで拜禮もせず、(傲慢無禮の態度で)、「馬は獻上しないでも宜しい。兎に角、十月には都に參ります」と答へた。使者は還つたが、祿山からの奉答の表文は無かつた。冬十一月、祿山は遂に(楊國忠を誅するといふ名義で)叛旗を翻した。配下の范陽・平盧・河東の兵、及び奚と契丹との兵を合せて、總數十五萬の大軍が范陽を發し、前後相連つて河南に向つて進んだ。歩兵騎兵ともに訓練を經た鋭い兵で、その蹴立てる砂煙は千里に亙つてつゞいたといふ程の凄じい勢

であつた。時に、太平が數十年もつゞいたあとで、人々は戰爭といふものを知らない。河北の州縣は、皆その威風を見たゞけで、屋根瓦の碎け散るやうにばら〳〵になつてしまつた。（討伐に六萬の軍が向つたが、忽ちに蹈みにじられ）、賊軍は進んで洛陽を陷れた。○河北道平原の太守の顏眞卿が義兵を起して賊を討つた。玄宗は始めに、河北道が悉く賊に從つたといふ事を聞いて、「河北二十四郡中に、まあ、たゞ一人の忠義の士も無いのかなあ」と言つて歎かれたが、顏眞卿からの奏上（叛賊の樣子、義擧の模樣）が到着すると、大層喜ばれて、「朕は、眞卿といふのは何んな人物だか、心の端にもかけて居なかつた程であるのに、よくもこんなに忠義をしてくれたものだ」と褒められた。

顏眞卿筆蹟

○常山の太守の顏杲卿も義兵を起して（眞卿と連絡して）賊を討つた。賊將の李欽湊を誘殺したり、高邈・何千年の二將を生捕つたり、奮戰努力、忠義を遠近に勵したので）、河北二十四郡中、十七郡ま

でも皆官軍に復歸し味方した。

語釋 蕃將・漢將（胡人で將となつた者と、支那本土の漢人種で將となつたもの。） ○鞚（音コウ。面繋（馬の首からくつわにかけて結ぶ飾り紐）又は馬勒（くつわ）のこと。こゝは後者。） ○表請（表文を奉つて請ひ願ふこと。この時の表文は、御恩に對する御禮の言上であつた。） ○部送（手分けして送る。） ○遣レ使（この時の使者は、宦官の馮神威といふ者で、玄宗の手詔を奉じて行つたのである。） ○所部（配下。） ○精銳（十分に精練された鋒先の鋭い兵隊。） ○煙塵千里（進軍の大軍が揚げる砂煙が、果てもなくうちつゞくこと。） ○兵革（兵は兵器。革は甲冑の類。何れも戰爭に用ふるもので、轉じて直ちに戰爭を指していふ語。） ○望レ風（風は威風、勢力のこと。その盛な威風を望見すること。） ○瓦解（屋根瓦がばら〳〵に散り碎けるやうに、一たまりもなく破れくづれること。） ○東京（洛陽のこと。長安に對して、その西に在るを以ていふ。） ○平原（郡名。今の山東省濟南府平原縣。） ○太守（郡の長官。以前刺史といつてゐたのを、玄宗の時、太守と改めたのである。） ○顏眞卿（字は淸臣。博學で詩才があり又書を能くした。この度の義擧の外に、德宗の時にも李希烈の反した時に、之を叱し捕へた事がある。玄宗・肅宗・代宗・德宗の四朝に事へて常に忠勤を抽んでた。年八十、李希烈のために殺された。魯國公に封ぜられ、文忠と諡せられた。） ○河北（黃河北方の地方。當時の河北は、今の河北省と、山東省の西部、河南の北部をも含んでゐた。） ○二十四郡（當時、河北道全部が二十四郡にわかれてゐた。） ○曾（カツテ、又は、スナハチと訓んで、こゝは思ひも寄らぬ意を寓する。） ○眞卿奏（眞卿部下の李平といふ者、眞卿の命を受けて間道から上京し、叛賊の情況、義擧の決心手配などを委細に奏上したのである。） ○何狀（狀は狀態、狀況、狀貌などの狀で、やうすかたちのこと。何狀といふと、どんな人物かといふ程の意。） ○常山（郡名。今の河北省元氏縣地方。） ○顏杲卿（字は昕之。眞卿の從兄にあたる。常山の太守となつたのは、祿山の推擧によつたのである。最初は人質を祿山に送つてゐた程であつたが、密に討賊の計を運らしてゐたところへ、眞卿から密使が來て、一所に祿山の軍の後を斷たうとしたのであつた。以下、本文に出てくる。）

餘論 安祿山を信じ切つてゐた玄宗に取つては、その反逆は蓋し靑天の霹靂であつたらう。「二十四郡曾無二一人義士一耶」の一語を聞いても、そのあわて方が知られるやうだ。さうした中にあつて、眞先に義を唱へて兵を擧げたのが顏眞卿である。「眞卿とはどんな男か、顏も知らぬが、よくも義兵を起

して呉れた」と玄宗が狂喜したといふに徴しても、必ずしも平生の寵遇を受けたといふわけではなく、たゞ臣節の一途に直往した眞卿の純忠が窺はれる。果せるかな、張巡・許遠・郭子儀・李光弼等の忠臣が、眞卿の首唱に響應して、踵を接して相ついで起り、遂に燎原の火の如き祿山の亂を平定して唐室を將に倒れんとするに支へたのである。眞卿先唱の功や亦偉大なりと謂はねばならぬ。宋の學者林之奇が、

蓋天下之人、豈無忠義之心。苟其艱難之際、有一爲唱、則聞風之人、孰不從之。祿山煽亂、河北二十四郡莫不失守。及眞卿首唱忠義、而諸郡由是多應。然則唐室中興、雖郭子儀・李光弼之功、而其實則眞卿爲之唱也。

と云つたのは、蓋し篤論である。

眞卿の從兄たる顏杲卿の死に至つては、悲壯の極である。文天祥は正氣歌に之を詠じて、「爲顏常山舌」と云つた。「臊羯狗」の罵聲は、舌を拔かれても、尚ほ聞えたであらう心地がする。

十五載、安祿山僭號稱大燕皇帝。○賊將史思明、陷常山、執顏杲卿、送洛

臊羯狗

張巡

陽。祿山數其反已。杲卿曰、我爲國、討賊、恨不斬汝、何謂反也。臊羯狗何不速殺我。祿山大怒、縛而咼之。比死、罵不絶口。○眞源令張巡、帥吏民哭於玄元皇帝廟、起兵於雍丘討賊。

【訓讀】十五載、安祿山、僭號して大燕皇帝と稱す。○賊將史思明、常山を陷れ、顏杲卿を執へて、洛陽に送る。祿山、其の己に反するを數む。杲卿曰く、「我、國の爲に賊を討ず、汝を斬らざるを恨む。何ぞ反といふや。臊羯狗何ぞ速に我を殺さゞる」と。祿山、大いに怒り、縛して之を咼す。死に比ぶまで、罵つて口を絶たず。○眞源の令張巡、吏民を帥ゐて、玄元皇帝の廟に哭し、兵を雍丘に起して賊を討ず。

【通釋】天寶十五年（正月に）、安祿山は天子の名號を冒して、大燕皇帝と稱した。賊將の史思明が、（常山の守備が整はないのに乘じて攻めて）陷れ、守將顏杲卿を執へて洛陽に送つた。すると祿山は（自分が推擧して常山の太守にしてやつたので、全く味方するものと思つてゐたのであるから）、何故、自分に反したのだと責め問うた。杲卿は、「我は國家の爲に賊を討つたのである。汝を斬らないのが殘

念だ。何が反であるか、(汝こそ反ではないか)。この夷犬の腥野郎、早く己れを殺せ」と罵つたので、祿山は大いに怒つて(天津橋の橋柱に)縛りつけて、その肉を削り殺いで骨にまで達した。(剛毅の杲卿は)、それでも死ぬまで祿山を罵りつゞけてやまなかつた。眞源の令の張巡が、部下の官吏人民を引連れて、(唐の遠祖であるといはれてゐる)玄元皇帝(老子)の廟に參詣して(國家の非運を)哭し、その足で雍丘を奪換してそこに立籠つて賊を討つた。

語釋 僭號(分を越えてつけた皇帝の名號。「僭」は、僭越、僭上などの僭で、下の者が分を越えて上の者のまねすること。「號」は、皇帝の名號。) ○大燕皇帝(祿山の根據地の范陽・平盧は、戰國時代の燕の土地であつたので、かく名づけたのである。) ○執(とらふと訓ず。罪人を捕へること。) ○數(せむと訓ず。その罪を一々數へあげて責めること。) ○腥羯狗(なまぐさいえびすの犬。雜胡である祿山を罵るの卑辭。腥は、なまぐさいの意。羯は、胡の種。狗は、いぬ。) ○剮(音クワ。生きてゐる人の肉を殺ぎとつて、その骨だけを殘すこと。慘刻極る刑て、俗に柳葉剮といつて、殺ぎ取る肉片が柳の葉のやうに細かいのである。) ○眞源(縣名。今の歸德府鹿邑縣。) ○張巡(南陽の人。開元の末の進士で、清河の令から眞源の令となつた。身長七尺、鬚髯神の如しとある。戰略あつて、この時、六十餘日に三百餘戰し、賊將令狐潮を屢々に苦しめた。後、尹子奇と戰つて、食盡きて敗死したが、その模樣は次の肅宗の條に出て來る。性強記で漢書を暗誦して一字も誤らなかつたといふことである。) ○雍丘(縣名。今の河南省開封府杞縣。)

○朔方節度使郭子儀、河北節度使李光弼、與賊將史思明戰、大破之、首復河北數郡。副元帥哥舒翰、與賊戰大敗。麾下執翰降賊。賊遂入關。上、出

奔、次于馬嵬。將士飢疲、皆憤怒、殺楊國忠等、及逼上縊殺貴妃、然後發。父老遮道請留。上、命太子慰撫之。

【國讀】朔方の節度使郭子儀、河北の節度使李光弼、賊將史思明と戰ひ、大いに之を破り、首として河北の數郡を復す。副元帥哥舒翰、賊と戰つて大敗す。麾下、翰を執へて、賊に降る。賊、遂に關に入る。上、出奔して、馬嵬に次す。將士飢疲して、皆、憤怒し、楊國忠等を殺し、及び上に逼つて、貴妃を縊殺し、然して後發す。父老、道を遮つて、留まらむことを請ふ。上、太子に命じて、之を慰撫せしむ。

【通釋】朔方の節度使の郭子儀が、(命を奉じて)、河北の節度使の李光弼と(兵を合せ、洛陽を奪ひ回さうとし、五月に)賊將の史思明と(嘉山といふ所で)戰つて、斬首四萬、捕虜千餘といふ、大勝利を得、先づ、(景城・河間・信都等の)河北の數郡を回復した。(これで、洛陽と范陽との連絡が斷れたので、賊が長安に進發出來なかつた次第である)。時に、兵馬副元帥の哥舒翰が(二十萬の兵で、潼關を固めてゐたが、命によつて、潼關を出て)、賊と戰つたが大敗した。部下の(蕃將の火拔歸仁

等が翰を執へて賊に降參して出た。賊軍が遂に潼關には入つた。（哥舒翰の殘兵が逃歸つて、かくと言上したので）、玄宗は、（楊國忠の議に從つて、西の方、蜀に向つて取るものも取敢へず）、逃げ出され、馬嵬驛まで來て一夜を明かされた。隨行の大將、陣玄禮はじめ士卒の者は、何れも飢え疲れて、（こんな事になるのも、惡宰相楊國忠の爲であるのだといふので）、楊國忠や、秦國・韓國夫人等を斬殺し、（なほ、楊貴妃があつては不安である。楊氏一族の者は一人も許されない。といつて）、貴妃を縊り殺し、（一同萬歳を稱へて）出發した。（いよ〳〵出發となると）、土地の父老士たちが、道を遮つて、留るやうにと勸めて通さないので、玄宗は、太子に命じて、父老たちを慰めなだめさせた。

〔語釋〕　朔方節度使（任地は靈州で、任務は突厥に備へるにあつた。）　○郭子儀（華州鄭の人。身長七尺二寸。祿山の反に、河北を恢復し、兩京を恢復し、大功あつて四朝に歴事し、尊榮を極め、時望に叶ひ、八十三歳にて死し、八子七婿みな顯官となつた。追々に本文に出てくる筈である。）　○李光弼（柳城の人。兵を用ふるに長じ、少を以て衆を擊つて勝たないことがなかつた。祿山の反に、子儀と名を齊しうした。卒して武穆と諡し、像を凌烟閣に畫かれた。事蹟は本文に出てくる。）　○麾下（麾下、部下。旗下などいふに同じい。火拔歸仁を指す。歸仁は蕃種出の將であつた。降服して出て後、却つて不忠者だといふので祿山のために斬られた。）　○入レ關（關は、潼關。）　○出奔（行幸といはないで、出奔といつたのは、その逃げ方の見苦しさを暗にけなした、史家の筆法である。）　○次ニ馬嵬ニ（馬嵬驛は、今の西安府興平縣の西。未明に長安を出て、正午頃咸陽を通過し、こゝで宿營されたのである。次はやどる。軍隊の宿營するにいふ。）　○殺ニ楊國忠等ニ（陳玄禮が國忠を誅しようと思つてゐたところ、丁度吐蕃の使者が、國忠の馬を遮つて、食無きを訴へてゐるのを見、軍士たちが、國忠が胡虜と謀叛を計つてゐるのだと叫んで斬つてしまつたのである。その首を槍に刺して驛の入口に晒した。）　○大破レ之（初め賊來れば守り、去れば追擊し、晝は兵器を耀かし、夜は賊營を襲擊し、賊をして休息の暇なからしめ、賊勢倦むに及んで嘉山に進擊し、斬首四萬、捕虜千餘といふ大勝を博した。賊將史思明は身を以て博陵に奔つた。子儀・光弼之を圍んで軍勢大いに振ひ、爲に河北十餘郡、皆賊の守將を殺して降つた

父老擁太子馬
太子即位

理であつた。）　○河北數郡（常山・河間・信都・清河・平原・博平等。）　○哥舒翰（戰場に半段の槍を振つて出ると、敵皆なびき退いたといふ。祿山の亂に、兵馬副元帥となつて、二十萬の兵で潼關を守つてゐたが、楊國忠が玄宗に勸めて出でゝ戰はせるやうに命を催したので、敵の計にかゝると知りつゝ、出で戰つて大敗し、捕虜となつて、却つて祿山に仕へ司空となつた。）　○逼上縊殺貴妃（陳玄禮が、「國忠謀反せし以上、貴妃を供奉せしめるのは宜しくない」といふと、玄宗は、その罪なきを述べたが、高力士が「此際、將士の心を安んずるのは陛下御安泰の道であります」と力說したので、高力士に命じて、佛堂内で縊り殺させたのである。）

父老擁太子馬、不復得行。使皇孫俶白上。上曰、天也。使喩太子曰、汝勉之、西北諸胡吾撫之素厚。汝必得其力。且宣旨欲傳位。太子至平涼、朔方留後杜鴻漸、迎入靈武、請遵馬嵬之命。牋五上。乃許。尊上爲上皇天帝。上在位四十五年、改元者三。曰先天・開元・天寶。太子立。是爲肅宗皇帝。

（二十）父老、太子の馬を擁し、復た行くことを得ず。皇孫俶をして上に白さしむ。上曰く、「天なり」と。太子に喩さしめて曰く、「汝、之を勉めよ。西北の諸胡、吾之を撫すること素より厚し。汝必ず其の力を得ん」と。且つ宣旨して位を傳へんと欲す。太子、平涼に至る。朔方の留後杜鴻漸、靈武に迎へ入れ、馬嵬の命に遵はんと請ふ。牋五たび上る。乃ち許す。上を尊んで上皇天帝と爲す。上、

在位四十五年。改元する者三。先天・開元・天寶と曰ふ。太子立つ。是を肅宗皇帝と爲す。

【通釋】然るに父老たちは太子を取りまいて行かせない。(「せめて太子なりともお殘り下さい。奉じて賊を破りませう」と、口々に叫んだ)。(お側にゐた、太子の子建寧王や、宦官の李輔國等も、「民意に從つて、社稷を恢復し、至尊を舊都に還し奉るのは大孝と申すものです」と諫めたので)、太子は、子の俶を走らせて、この旨、玄宗に申上げると、「何も天命である」と申された。そして、太子に喩して、「しつかりやれ。西北諸胡の民族は、多年愛撫しておいたから、きつとお前の力になつて吳れるであらう」と、(二千の兵と、軍馬若干とを分け從はせられた)。それから、宣旨もあつて、皇位を傳へようとせられた。(が、太子は辭退せられた)。太子は(晝夜を急いで)平涼縣に出られた。すると、朔方郡の留守居役の杜鴻漸が出迎へに來て、靈武に(宮室を急造して)奉じ入れた。そして、馬嵬での命に從つて即位せられるやうにとお願ひした。(容易に承知せられなかつたが)、五度まで折返し願書を上つて後許諾された。そこで、玄宗皇帝を、尊んで上皇天帝と申上げることにした。(その頃、玄宗は、もはや成都に入つてをられたのである)。玄宗皇帝、位に在ること四十五年で、年號を改めることが三回。先天(一年間)開元(二十九年間)天寶(十五年間)といふ。太子が立たれた。これ

肅宗皇帝　李泌　車戰

が肅宗皇帝である。

【語釋】皇孫俶（太子（肅宗）の子。玄宗の孫。後の代宗皇帝となる人。）○宣旨（天子の命令。）○平涼（縣名。今の甘肅省平涼府平涼縣。）○留後（節度使不在中、代理して後務を主るもの。留守といふに同じい。郭子儀が河北に出陣中であるので、杜鴻漸が留後となつてゐたのである。）○杜鴻漸（この時、太子に說いて、「朔方は天下勁兵の處であります。殿下、今、兵を靈武に集め、檄を四方に移して忠義の士を收攬せられたならば、逆賊を屠ること極めて容易でありませう」と申上げた。）○靈武（縣名。今の甘肅省寧夏府靈州の西南。）○牋（太子又は諸王に上る表をいふ。）○乃許（帝位に卽くことを承知せられたのである。時に精兵は皆討賊に出陣中で、留守の者は老弱者のみで、帝位に卽かれたものゝ、百官文武の官、三十人に滿たず、草萊をひらいて、纔かに朝廷を立てるといふ貧弱な有樣であつた。）

肅宗皇帝、初名璵、改名亨。自忠王爲太子。二十年、而遇祿山之亂。至是卽位。京兆李泌、自幼以才敏聞。上在東宮、嘗與泌爲布衣交。遣使召之。謁見於靈武。事無大小與之謀。上皇至成都、遣册寶如靈武。○遣使徵兵於回紇。○招討節度使房琯、與賊戰于陳濤邪。琯用車戰大敗。

【通釋】肅宗皇帝、初めの名は璵、亨と改名す。忠王より太子と爲る。二十年にして祿山の亂に遇ふ。是に至つて位に卽く。京兆の李泌、幼より才敏を以て聞ゆ。上、東宮に在りしとき、嘗て泌と布

衣の交を爲す。使を遣はして之を召す。靈武に謁見す。事大小と無く之と謀る。上皇、成都に至り、冊寶を遣はして靈武に如かしむ。〇使を遣して、兵を回紇に徵す。〇招討節度使房琯、賊と陳濤邪に戰ふ。琯、車戰を用ひて、大敗す。

【通解】肅宗皇帝は、初めの名を璵といつた。後に、亨と改名した。忠王から太子となつた。太子となつて二十年目に、祿山の叛亂に出遇つた。是に至つて（靈武で）位に卽いた。（是より以前）、京兆に、李泌といふ男があつて、幼少の頃から、えらい働があるといふので評判であつた。肅宗が、太子であつた頃から、この李泌と、身分の高下を忘れた平民的な交際をしてゐた。（肅宗は、それを思ひ出して、此の際、必ず力になる男だと思つて、潁陽といふところに世を避けて居たのを）使者をやつて召出された。すると、李泌は直ぐに來て、靈武でお目通りした。（大いに舊交を溫めて、その後は）大事も小事も、すべて李泌を相談相手とせられた。（一方では）、上皇卽ち玄宗は、その頃、成都に到着せられて、そこから、使者を以て、讓位の冊書と、傳國の印とを靈武に送り屆けさせられた。〇（この時、靈武の兵力は六萬程であつたが、更に軍勢を張るために）、兵を回紇へ徵された。（程なく來援した）。〇（かうして靈武の軍勢が振つた時、肅宗の信任してをられた）招討節度使の房琯が、（賊兵いづ

くんぞ我に當らんなどと大言して、兩京回復に向つたが、賊將の安守忠と、陳濤邪といふところで出會し、戰法に車戰を用ひて（死傷四萬餘といふ）大敗をして逃げた。（房琯は、その罪、死に當るところであつたが、李泌のお詫びで、やうやく赦されたのであつた）。（以上、肅宗の至德元年で、玄宗の天寶十五年と同年中の出來事であつた）。

語釋　○京兆（今の陝西省西安府長安縣。）　○李泌（京兆の人、字は長源。七歳で文を能くしたとある。靈武で肅宗に謁見してから、事ある時は尋ねて述べ、退る時は榻を對したといふ程で、常に帝側に在つて國事に盡した。度々宰相になるやうにと下命があつたが、資戻の方が宰相よりも高いといつて受けなかつた。代宗・德宗の代にまで仕へた名臣である。）　○布衣交（上下貴賤の禮義を忘れて、平民的に對等の交際をすること。布衣は、賤者の服。）　○冊寶（冊は、玉冊で即ち讓國の印璽。武后の時、璽を寶と改め稱したのである。）　○回紇（西域の蕃族の名。魏の時には高車部、隋の時には韋紇又は回紇と呼んでゐた。初め突厥に屬してゐたが、その亡後、古匈奴の地を支配してゐた。貞觀三年初めて唐に入貢したものである。回鶻とも書く。）　○招討節度使（招討は、降る者は招き、叛する者は討つとの意。節度使は官名。）　○房琯（洛陽の人、字は次律。宰相房融の子。長じて博學、風度沈整、常に知名の士を集めて談論し、俗物視してゐたといふことである。）　○陳濤邪（咸陽の東方にある。地形斜出してゐる故、この名がある。「邪」は、一に斜に作る。）　○車戰（千年前の古法を用ゐたのである。牛車二千乘を引出し、歩騎これを夾んで進んだのであるが、賊は風上に在つて鼓噪して、牛を震駭せしめ、その上、火を放つたので、大混亂に陥り、四萬の死傷者を出して潰走した。）

安慶緒殺祿山

○至德二載、安慶緒殺祿山。祿山自起兵以來、目昏、至是不復見物。又病疽躁暴。欲以嬖妾子代慶緒爲嗣。慶緒使人弑之、而自立。祿山僭號僅一

年餘。○上至鳳翔。回紇遣子葉護、將精兵四千人至。天下兵馬都元帥廣平王俶、副元帥郭子儀、將朔方等軍、及回紇西域之衆、發鳳翔至長安擊賊。賊大潰。大軍入西京。俶留鎭撫三日、引軍東出至洛陽、與回紇夾擊。賊大敗。遂復東京。安慶緒走保鄴。

【通釋】至德二載、安慶緒、祿山を殺す。祿山、兵を起してより以來、目昏し、こゝに至つて、復た物を見ず。又疽を病んで、躁暴なり。嬖妾の子を以て、慶緒に代へて嗣となさんと欲す。慶緒、人をして、之を弑せしめて自立す。祿山が僭號、僅かに一年餘。○上、鳳翔に至る。回紇、子、葉護を遣はし、精兵四千人を將ゐて至らしむ。天下兵馬都元帥廣平王俶、副元帥郭子儀、朔方等の軍及び回紇。西域の衆を將ゐて、鳳翔を發し、長安に至つて、賊を擊つ。賊、大いに潰ゆ。大軍西京に入る。俶、留りて鎭撫すること三日、軍を引いて東に出で、洛陽に至り回紇と夾み擊つ。賊、大敗す。遂に東京を復す。安慶緒走つて鄴を保つ。

通釋 （肅宗の）至德二年に、（安祿山の嫡男の）安慶緒が父の祿山を殺した。祿山は（范陽で）反旗をひるがへしてから此方、目が悪くなつて、この頃に至つては、もう物が見えなくなつた。その上、悪い腫物が出來て、（そのために）癇癪持の亂暴者となつてゐた。（で、少し氣に入らぬと、人を打つたり殺したりした）。お氣に入りの（段氏といふ）女の腹に出來た子の（慶恩といふのを）世嗣にして、安慶緒を廢しようとした。慶緒は（それを懼れて）人をやつて祿山を殺させた。そして自立して（大燕皇帝の名號を襲つた）祿山が皇帝で名號を僭んでゐたのは僅かに一年と一ケ月であつた。（以上は正月の事であつたが、二月には）肅宗は、（靈武から）鳳翔に出て、（長安奪還に取りかかつた）。（兎角するうちに九月になつたが）、回紇が、その子の葉護をして精鋭の兵四千を率ゐて會合させたので、（いよ〳〵進發となつて）天下兵馬都元帥の廣平王俶と、副元帥の郭子儀とが、朔方等の軍、及び回紇・西域の軍勢（十五萬人）を引率して、鳳翔を出發し、長安に行つて賊を撃つた。（先陣、李嗣業の勇戰、回紇軍の奮鬪によつて、十萬の賊軍は六萬を討たれて）さん〴〵に敗北した。そこで大軍が堂々と長安に入城した。總大將の俶は、三日間、長安に留つて、人民を鎭撫した。それから、再び軍を進めて洛陽に向つた。（途中、新店といふ所で賊軍と遭遇したが）回紇の兵が素早く敵の後に出て夾み撃

つたので、賊軍は大敗して、遂に東京卽ち洛陽を奪ひかへした。安慶緒は、洛陽から逃げ出して鄴に蹈止つた。

語釋 安慶緒（營州の人。安祿山の嫡男。至德二年、父を殺して僭位すること一年。臣下の史思明に殺された。） ○殺二安祿山一（殺といつて弑といはないのは、祿山が蠻夷逆賊であるからで、朱子の綱目の筆法に倣つたのである。） ○目昏（昏は、くらし、目がくらいといふは、視力の消耗したこと。） ○疽（音ソ。惡性の腫物。） ○躁暴（さわぎあばれる。猖獗を起して、狂氣じみた亂暴な行動をすること。） ○嬖妾（愛妾。「嬖」は音ヘイ。きにいり。嬖臣、嬖幸など、賤しくて寵を得るものゝ稱。祿山の嬖妾は、段氏で、その子は慶恩といつた。） ○使二人弑一レ之（慶緒が臣下の嚴莊といふ者に議ると、嚴莊が承知して、李猪兒といふ者に、夜、祿山の帳中に入つて其の腹を刺させた。腹が露出して出血數斗、遂に死んだといふことである。弑といつたのは、父子の間柄だけでいつたのである。） ○鳳翔（今の陝西省鳳翔縣。） ○天下兵馬都元帥（總司令。） ○廣平王俶（廣平は、今の廣平府當時河東郡に屬してゐた。「俶」は、肅宗の長子。兩京平定後、楚王に封ぜられ、成王に改められ、太子となつてから豫と改名した。後の代宗皇帝。） ○鄴（今の河南省彰德府臨漳縣地方。）

○賊將尹子奇陷二睢陽一。張巡・許遠死レ之。巡先守二雍丘一。移二軍寧陵一、屢破レ賊。既而入二睢陽一、與レ遠共守、屢却レ賊。食盡。或欲レ棄レ城。巡・遠謀曰、睢陽江淮之保障。若棄レ之、賊必長驅。是無二江淮一也。不レ如堅守以待レ救。食二茶紙一盡。遂食レ馬。馬盡。羅レ雀掘レ鼠。雀鼠又盡。巡殺二愛妾一以食レ士。四萬人僅餘二四百一、終無二叛者一。賊登

南霽雲
雷萬春

城。將士困病不能戰。巡西向再拜曰、臣力竭矣。生既無以報陛下、死當爲厲鬼以殺賊。城遂陷。巡・遠被執。南霽雲・雷萬春等、三十六人皆被殺。

【讀方】賊將、尹子奇、睢陽を陷る。張巡・許遠之に死す。巡、先に雍丘を守る。軍を寧陵に移し、屢々賊を破る。既にして睢陽に入り、遠と共に守り、屢々賊を却く。食盡く。或は城を棄てんと欲す。巡・遠謀つて曰く、「睢陽は江淮の保障なり。若し之を棄てば、賊必ず長驅せん。是れ江淮無き也。如かず、堅く守つて以て救を待たんには」と。茶紙を食ふ。盡く。遂に馬を食ふ。馬盡く。雀を羅し、鼠を掘る。雀鼠又盡く。巡、愛妾を殺して以て士に食はしむ。四萬人僅に四百を餘すも終に叛く者無し。賊、城に登る。將士困疲して戰ふこと能はず。巡、西に向ひ再拜して曰く、「臣が力竭く。生きては既に以て陛下に報ゆること無し。死して當に厲鬼と爲つて、以て賊を殺すべし」と。城遂に陷る。巡・遠執へらる。南霽雲・雷萬春等、三十六人皆殺さる。

【通釋】(この年、冬十月に)賊將の尹子奇が睢陽を陥れた。(守將の)張巡と許遠の二人が死んだ。(これは、廣平王俶の軍が長安を取つて、まだ洛陽を奪回せぬ間の事であつた)。張巡は、去年七月以

來、雍丘を守つてゐたが、(賊兵が寧陵を取つて、巡の後を斷たうとするとの計あるを聞いて)、軍を寧陵に移して、幾度も賊を破つて(萬餘の敵首を取つた程の大勝をした)。既にして、(賊將尹子奇の大軍が睢陽に向ふと聞いて)、睢陽城に入つて、許遠と力を協せて守つた。屢 尹子奇の軍を撃退したが兵糧が無くなつた。或は城を捨てゝ(再擧を計つた方がよからうといふ)意見も出たが、張巡と許遠とは相謀つて曰ふに、「睢陽城は江淮地方の障へどころである。若しこの城を棄てたならば、賊は必ずどこまでも深く攻込むであらう。して見ると江淮地方を殘らず賊に與へるやうなものである。いつそ堅く籠城して援兵の來るのを待つにこした事はない」と、(籠城に決したが、食ふものが無いので)茶や紙のやうなものを食つた。それも無くなつた。遂に軍馬を殺して食つた。それも無くなつた。網を張つて雀をとつて食ひ、地を掘つて鼠をとつて食つた。それも亦無くなつた。そこで張巡は、愛妾を殺して士卒に食はせた。四萬までもあつた味方の兵が、僅かに四百人とまでなつたが、終に二心を抱くものがなかつた。賊兵がこれに乘じて城中に攻登つて來たが、味方は疲れ果てゝ、起つて戰ふことが出來ない。張巡は今はこれまでと、天子の在す西の方に向つて再拜して、「臣の力は最早竭きました。生前遂に陛下に報ずることが出來ませんでした。(殘念でたまりません)。死んで死靈となつて

賊を呪ひ殺します」と叫んだ。睢陽は遂に陥落した。張巡と許遠と二人とも賊に執へられ、南霽雲・雷萬春等(忠臣勇士 三十六人、皆殺されてしまつた。

語釋　睢陽(今の河南省歸徳府睢州。)　○寧陵(今の河南省歸徳府寧陵縣の南。)　○棄レ城(守備を解いて逃亡すること。こゝでは一方の血路をひらいて脱出すること。)　○江淮保障(江淮は長江淮水間の地方。保障は保護の障壁、まもり、さゝへ、かこひ等の意。)　○長驅(なが追ひ。どこまでも深く敵地に侵入すること。)　○無二江淮一也(江淮地方が全く賊の有に歸してしまふ。無は、占領せられて味方のものでなくなるの意。)　○羅レ雀(羅は、鳥網、かすみの類。網を張つて雀を捕ること。)　○殺二愛妾一(張巡は、更にその奴僕を殺して士卒に食はしめたといふ。)　○困病(疲れ果てゝ、ひよろ〳〵してゐること。)　○生既云々(無以報陛下は、賊を討滅することが出來なかつたのを歎いたのである。)　○厲鬼(死靈、死神、幽靈、怨靈などの意。死んで歸する所なく中有に迷へるもの。)　○巡遠被レ執(兩人とも執へられたが、遂に屈せずして殺された。)　○南霽雲(霽雲は頓丘の人。張巡の部將。圍城中、脱出して賀蘭進明に出援を乞うた。進明が食を具へてもてなすと、泣いて、「睢陽の人、食はざること月餘。我獨り食ふに忍びず、貴下強兵を擁して救はざるは、忠臣義士の爲す所ならんや」と、その救援の意なきを見て憤慨し、一指を斬つて、殘して[illegible]とし、[illegible]一矢を[illegible]つて、「吾れ歸つて賊を破らば、必ず賀蘭を滅さん」といつたといふ。睢陽に歸つて戰死した。宣宗の朝、その像を凌煙閣に圖した。)　○雷萬春(張巡の部將。豪勇無双。嘗て雍丘で、賊將、令狐潮と戰ひの最中、城中を巡つてゐると、賊が矢を集中した。萬春は面に六矢を受けたが動かなかつたといふ。)

餘說　睢陽城の嬰守は古來籠城苦の代表的なるものであらう、悲慘、殆ど讀むに堪へない。張巡自ら詠じて曰く、

岧嶢試一臨。虜騎附城陰。不辨風塵色。安知天地心。
門開邊月近。戰苦陣雲深。旦夕更樓上。遙聞橫笛音。

と、以てその苦境を想ふべしである。資治通鑑に曰く、

城遂陷、巡・遠俱被レ執。尹子奇問レ巡曰、君每レ戰皆裂齒碎、何也。巡曰、吾志呑二逆賊一、但力不レ能耳。子奇以レ刀抉二其口一視レ之、所レ餘纔三四。

と、悲壯、言語に絕するではないか。文天祥が正氣歌に「爲二張睢陽齒一」と詠じたのは、即ちこれである。韓退之の「張中丞傳後序」は八家文にあつて、有名なるもの。張巡・許遠について興味ある話を傳へてゐる。機會あらば一讀せられたい。

○上皇發二蜀郡一還二西京一。○乾元元年、命二郭子儀等九節度一討二安慶緒一。○二年、史思明引レ兵救二慶緒一。九節度之兵潰二于鄴一。思明殺二慶緒一、還二范陽一僭レ號。○李光弼代二郭子儀一爲二朔方節度使・兵馬元帥一。光弼號令嚴整、始至、號令一施、士卒壁壘旗幟精明皆變。與二史思明一戰屢敗レ之。

通釋 上皇蜀郡を發して西京に還る。○乾元元年、郭子儀等九節度に命じて、安慶緒を討たしむ。

○二年、史思明兵を引いて慶緒を救ふ。九節度の兵、鄴に潰ゆ。思明、慶緒を殺し、范陽に還つて僭號す。○李光弼、郭子儀に代つて、朔方の節度使・兵馬元帥となる。光弼、號令嚴整、はじめて至るや、號令一たび施せば、士卒壁壘、旗幟精明、皆變ず。史思明と戰つて、屢ば之を敗る。

通釋 (至德二年十二月)上皇は蜀を發して長安に還られた。乾元元年(今年から又、載を年と改められたのである)。郭子儀等の九節度に命じて、安慶緒を(鄴に)討たせた。乾元二年、史思明が、(范陽から)兵を引いて、安慶緒を救つた。九節度の兵は(思明と日を定めて決戰することにしたが、當日、まだ陣を布かないうちに、大風起つて砂を捲き木を拔き、天地眞暗となるに及んで、驚いて)まる潰れになり、鄴から(本鎭に歸つた)。(そのあとで)思明は、慶緒を殺して(鄴城は子の朝義に守らせ)自分は范陽に還つて、大燕皇帝と僭號した。(そこで)李光弼が、郭子儀に代つて、朔方の節度使・兵馬元帥となつた。(それは、鄴の戰で、元帥が無くて、九節度の行動に連絡が無いために敗けたことゝ、宦官の魚朝恩といふ男が、子儀の短所を肅宗にかれこれと申上げた結果である)。(で、帝は、子儀を都へ召還した)。李光弼は元來號令が嚴しく正しい人で、(命を承けて)初めて軍陣に至つて、一たび號令すると、士卒も、砦の守り工合も、旗幟の立て連つた樣子までも、あざやかに元氣が漲り

渡つて、軍陣の面目が全く一新した。そこで、思明と戰つて、屢々これを敗つた。（思明は遂に范陽に逃げ去つた）。

語釋 發蜀郡（蜀郡成都。官軍が長安を收復すると、即日、使を出して還御を促したからである。） ○還西京（西京は長安。この時、帝は咸陽まで出迎へられた。久しぶりの對面で、嬉しさの餘り、父子ともに涙を流されたといふ。） ○九節度（朔方、郭子儀。淮西、魯炅。興平、李奐。滑濮、許叔冀。鎭西北庭、李嗣業。鄭蔡、李廣琛。河南、崔光遠。河東、李光弼。澤路、王思禮。） ○旗幟精明（旗色がはつきりして、威風の整ふこと。あざやかに元氣づくこと。）

○上元元年、太僕卿李輔國、遷上皇於西內。上皇愛興慶宮、自蜀歸即居之、多御樓。父老過者、往往瞻拜、呼萬歲。上皇常於樓下賜以酒食。又嘗召將軍郭英乂等、上樓賜宴。輔國言、上皇居興慶、日與外人交通。陳玄禮・高力士謀不利於上。數啓上遷之。不許。乘上不豫、率衆劫遷。上皇日以不懌。因不茹葷、辟穀、浸以成疾。○二年、史朝義殺史思明。思明愛少子而惡朝義、因其敗軍、欲斬之。朝義使人射殺思明而自立。○李光弼爲大尉、統八道行營、鎭臨淮。

【讀方】上元元年、太僕卿李輔國、上皇を西内に遷す。上皇、興慶宮を愛し、蜀より歸つて卽ち之に居り、多く樓に御す。父老の過ぐる者、往往瞻拜して萬歲と呼ぶ。上皇常に樓下に於て賜ふに酒食を以てす。又嘗て將軍郭英乂等を召し、樓に上らしめて宴を賜ふ。輔國言ふ「上皇、興慶に居り、日に外人と交通す。陳玄禮・高力士、上に不利を謀る」と。數〻上に啓して之を遷さんとす。許さず。上の不豫に乘じ、衆を率ゐて劫かし遷す。上皇日に以て懌はず。因りて葷を茹はず、穀を辟け、寖く以て疾を成す。○二年、史朝義、史思明を殺す。思明、少子を愛して朝義を惡み、其の敗軍に因つて之を斬らんと欲す。朝義人をして思明を射殺さしめて自立す。○李光弼、太尉となり、八道の行營を統べ、臨淮に鎭す。

【通釋】上元元年(七月に)、太僕卿の李輔國が、上皇を(興慶宮卽ち南内から)西内卽ち大極宮に遷しまゐらせた。(といふのは)、上皇は興慶宮がお氣に召してゐるので、蜀から歸られてから、こゝにお住居になつて、多く樓上にお出ましになつてゐた。(すると、樓下の往來を)通る父老たちが、時〻お見かけ申して仰ぎ拜し、萬歲を唱へた。上皇は(喜んで、これらの父老に)樓下で酒食を賜はつたり、又、將軍の郭英乂等を召されて、樓上で宴を賜はつたりするので、李輔國が(氣にして、帝に)

「上皇は、興慶宮で外部の人たちと交通してをられます。(これは、復位の御心持と察せられます。のみならず)、陳玄禮や高力士が（お側に居つて）帝に不利を謀つてをります。(他へ上皇をお遷し申したがよろしい)」と、度々申上げたが、(孝心深い帝は)之を許されなかつた。(そこで、李輔國は)、帝が御病氣でおやすみになつてゐるのを好い時なりとして、五百騎の兵を以て、白刃をかざして迫つて西内にお遷し申し、(外部との交通を斷つた)のであつた。上皇はその後、御心樂しむところなく(不愉快に日を暮してをられたが)、そのため、肉食もなされず、穀食もなされず、いつとはなしに次第に御病身となられた。

上元二年（三月）史朝義が父の史思明を殺した。(といふのは)史思明が次男の史朝清を愛して、兎角長男の史朝義を惡み、(何とかして、次男を世嗣にしようと思つてゐる矢先)、朝義が官軍との戰に敗退したので、(思明は怒つて、それを名として)朝義を斬らうとした。すると、朝義は(懼れて、反對に、兵を父の陣中に乘込ませ)、父を射殺させたのである。そして自立して(大燕皇帝となつた)。(この時、官軍の方では)、李光弼が大尉となつて、八道節度の陣營を統べ治めて、臨淮に本營を置いてゐた。

玄宗崩　肅宗崩　李輔國弑張皇后

語釋　太僕卿（太僕寺の長官。太僕寺は、唐代、廐牧輦輿の政を掌つてゐた官衙。卿は長官で一人。その下に少卿が二人あつた。）○西內（唐は、大明宮を東內。大極宮を西內。興慶宮を南內と稱してゐた。各その位置によつての名で、內は、天子の宮禁をいふ。）○興慶宮（開元二年に、玄宗自ら經營した宮殿で、人民の住所往來と最も接近してゐた。既出。）○御ㇾ樓（樓上にお出ましになつてゐた。）○瞻拜（仰ぎ見て拜禮する。「瞻」音セン。仰ぎ視ること。）○外人（外部の人たち。日常、上皇に侍御してゐる以外の人たち。）○謀二不利一（不利は、帝位を降されるやうになることを意味したもの。）○啓（まうす。文書で事を陳述すること。）○不豫（帝王の御病氣。書の「王有ㇾ病弗ㇾ豫」より出た語。豫はよろこぶ。）○不ㇾ懌（快々として樂しまないこと。すぐれず不愉快に日を暮すこと。氣分が）○不ㇾ茹ㇾ葷（肉食をしない。茹は、くらふ。葷はもと辛臭即ち葱や蒜の類の野菜のことであるが、通俗に肉食の意に用ひてゐる。）○避ㇾ穀（穀類を食はないこと。道家で仙を學ぶもの ゝ することであるが、こゝでは、わざとさうして、營養を斷つて身の衰へを招いたのである。）○寖（やうやく。いつとはなしに。）○少子（末の子。弟。史朝淸といつた。兄朝義が、父思明を殺した時、范陽に留守をしてゐたが、兄の兵の爲に殺された。）○八道行營（八道は、前章の九節度のことで、自分の治めてゐる朔方以外の八道を指したのである。「行營」は、八道節度の戰地における陣營。）

○寶應元年、郭子儀知二諸道節度行營一、兼二興平・定國等軍副元帥一、復入二朔方一。○上皇崩二於西內一。傳ㇾ位後七年也。壽七十八。○上寢ㇾ疾。聞二上皇登遐一、轉劇遂崩。在ㇾ位七年。改ㇾ元者四。曰二至德・乾元・上元・寶應一。初張皇后與二李輔國一相表裏、專ㇾ權用ㇾ事。晚更有ㇾ隙。上疾篤。后召二太子一謂曰、輔國久典二禁兵一、陰謀ㇾ作ㇾ亂。不ㇾ可ㇾ不ㇾ誅。太子恐ㇾ震二驚上體一不ㇾ可。輔國聞二其謀一。上崩。殺ㇾ后而後引二太

子立レ之。是爲二代宗皇帝一。

【副註】寶應元年、郭子儀、諸道節度行營に知となり、興平・定國等の軍の副元帥を兼ぬ。復た朔方に入る。○上皇、西内に崩ず。傳位の後七年なり。壽七十八。○上、疾に寢ぬ。上皇の登遐を聞き、轉た劇しうして、遂に崩ず。在位七年。改元する者四。至德・乾元・上元・寶應と曰ふ。初め張皇后、李輔國と相表裡し、權を專らにし事を用ふ。晩に更に隙有り。上、疾篤し。后、太子を召して謂つて曰く、「輔國久しく禁兵を典り、陰かに亂を作さんと謀る。誅せざる可からず」と。太子、上の體を震驚せんことを恐れて可かず。輔國、其の謀を聞く。上、崩ず。后を殺して後に太子を引いて之を立つ。是を代宗皇帝と爲す。

【通釋】寶應元年、郭子儀が諸道の節度の行營に長となつて、興平・定國等の軍の副元帥を兼ね、朔方郡の行營に入つた。○(この年)、上皇が西内で死なれた。帝位を讓られてから七年目である。御年は七十八年であつた。○(この年の春から)、肅宗皇帝も御病氣で寢てをられたが、父上皇の死なれたことを聞かれて(悲しみのあまり)病勢が次第に重くなつて、遂に崩御になつた。(御年五十二歲)。在

位七年、年號を改めること四回、至德・乾元・上元・寶應と曰つた。初め（乾元の頃から）、皇后張氏は、李輔國と氣脈を通じて政權を專らにし萬事思ふまゝに振舞つたが、後に仲違ひを生じてにらみ合となつた。（その頃）肅宗は御病氣が危篤であつた。張皇后は、太子をお召しになつて、（李輔國を亡きものにしようと思ひ）、「李輔國は長らく禁兵を支配してゐて、（その兵力を以て）陰かに叛亂を謀つてゐるから、誅伐しなければならない」と勸められた。太子は、御病中の父肅宗の體を氣づかつて、（そんな事をして）驚かせ奉つてはならないと思つて承知がなかつた。（張皇后は更に太子の弟の越王係に誅伐を命じたが）、その謀を輔國が聞出して、（逆に兵を出して、父の御見舞に出かけようとしてをられた太子を飛龍廐に護送し、張皇后を別殿に遷さうとした）。その翌日、肅宗が崩御になつた。そこで輔國は、張皇后を殺して、そのあとで太子を（飛龍廐から）つれて來て皇帝とした。これが代宗皇帝である。

【語釋】　○知（つかさどる。をさめる等の意で、長となり主となること。）　○興平（今の陝西省興平縣。當時畿内にあたつてゐた。）　○定國（鳳翔郡。當時の畿内。）　○寢レ疾（病氣で臥床中にあること。）　○登遐（天子の崩御。登假・登霞皆同じい。）　○漸劇（次第にひどくなる。）　○太子（肅宗の長子。名は豫。後に代宗皇帝となる人。）　○張皇后（肅宗の皇后。玄宗の母親、竇太后の妹の孫に當る。肅宗が太子の時に、良娣となつて側に侍した。西幸の際、從つて帝と艱難をともにし、靈武の行在で、産後僅か三日といふに、戰士の衣を縫つたといふ程で、乾元元年に皇后に立つたのである。）　○相表裏（裡は裏と同じい。裏になり表になり、互に氣脈を通じて事を計ること。）

代宗皇帝 誅輔國 苟冀無事

〇更（互に何かにつけて、といふ程の意。） 〇殺レ后（弑といはないのは、廢して庶人としてから殺したからである。）

代宗皇帝、初名俶。封廣平王、爲元帥、定兩京、封楚王、改成王。已而爲太子、改名豫。至是卽位、誅李輔國。以雍王适爲天下兵馬元帥、率諸將及回紇援兵、討史朝義、大敗之。賊將李懷仙、斬朝義以降。以賊將張志忠鎭成德軍、賜姓名李寶臣。薛嵩、鎭相・衞・邢・洺・貝・磁等州、田承嗣、鎭魏・博・德・滄・瀛等州、李懷仙、鎭盧龍。朝廷厭苦兵革、苟冀無事。因而授之。諸鎭自爲黨援、河朔敢抗朝命始此。

代宗皇帝、初めの名は俶、廣平王に封ぜらる。元帥となつて、兩京を定め、楚王に封ぜられ、成王に改められ、已にして、太子と爲り、豫と改名す。是に至つて、位に卽き、李輔國を誅す。雍王适を以て、天下兵馬元帥と爲し、諸將及び回紇の援兵を率ゐて、史朝義を討たしめ、大いに之を敗る。賊將李懷仙、朝義を斬つて以て降る。賊將張志忠を以て成德軍を鎭せしめ、姓名を李寶臣と賜ふ。薛

嵩、相・衛・邢・洺・貝・磁等の州を鎭し、田承嗣、魏・博・德・滄・瀛等の州を鎭し、李懷仙、盧龍を鎭す。朝廷、兵革を厭苦し、無事を苟冀す。因つて之に授けしなり。諸鎭自ら黨援を爲し、河朔、散て朝命に抗するは此れより始まる。

【通釋】代宗皇帝、初めの名は俶と申した。廣平王に封ぜられ、(肅宗の至德二年に)、天下兵馬都元帥となつて、東西兩京を平定した。(その後)楚王に封ぜられ、更に成王に改め封ぜられ、間もなく太子と爲つて、名を豫と改めた。肅宗の崩御に至つて皇帝の位に卽いた。(李輔國の專橫を惡んでをられたが、張后を殺した功があるので、表向の誅伐はしないで、夜盜をその第に忍び込ませ、輔國の首と片臂とを竊みとらせた。といふやうな次第で)李輔國を誅した。(十月には)雍王の适を、天下兵馬元帥として、諸將の兵及び回紇からの援兵を引率して、史朝義を討たせ大いに之を敗つた。賊將の李懷仙が、(范陽に逃げて來た朝義を納れないで、その自ら縊れて死んだ)死首を斬つて降參して出た。(賊が全く鎭定したので、その後始末として)、舊賊將の張志忠を以て成德軍を鎭せしめ、姓名を李寶臣と賜はり、同じく舊賊將の薛嵩を以て、相州・衞州・邢州・洺州・貝州・磁州等を鎭めさせ、同じく舊賊將の田承嗣を以て、魏州・博州・德州・滄州・瀛州等を鎭めさせ、同じく李懷仙を以て盧龍を鎭めさせ

た。（こんなに賊將を用ひたのは）、朝廷が長い間の戰亂に厭きつかれて、無事に收まるやうにと希望するあまり、賊であつた時のまゝそれ〴〵その地の節度使を授けたのである。（これは實に一大失策で）、これ等の諸鎭がお互に組合ひ馴れ合つて、（土地を世襲し、藩鎭と稱して）、河朔の地方全體が朝命に抗するやうになつたのは、これがもとである。

語釋　兩京（西京即ち長安と、東京即ち洛陽。）　○雍王适（代宗皇帝の長子。後の德宗皇帝。當時、封ぜられて雍王となつてゐた。）　○張志忠（張志忠が正しい。）　○成德軍（常山に居た節度使の軍を號して成德軍といつた。常山・恒州・趙州・深州・定州・易州を鎭してゐた。）　○相・衛・邢・洺・貝・磁（六州とも當時河東に屬してゐた。今の河南地方。）　○魏・博・德・滄・瀛（魏・滄・瀛の三州は當時河東に屬してゐた。今の河北地方。德・博の二州は山東に屬してゐた。今の濟南東昌地方。）　○盧陵（今の河北省永平縣地方。當時、幽州を盧陵と號して、幽州・嬀州・營州・檀州等を鎭したのである。）　○厭苦（非常にいやがる。厭は、倦みいとふこと。苦は、くるしむ。）　○苟冀（一時のその場のがれを希ふすること）　○黨援（組仲間となつて援け合ふこと。）　○河朔（河北・朔は、北と同じい。）

○廣德元年、吐蕃入寇。上出奔陝州。吐蕃入長安。關內副元帥郭子儀擊之。吐蕃遁去。○二年、流宦者程元振。元振初附李輔國。輔國死。元振專權、自恣尤甚。忌諸將有大功者、皆欲害之。吐蕃入。元振掩蔽不以時奏。致上狼狽。中外切齒。至是流溱州。○臨淮王李光弼卒。上之幸陝、光弼不至。上

撫之加厚。素與子儀齊名。及在徐州擁兵不朝。麾下諸大將不復尊畏。光弼愧恨成疾而死。

【[illegible]】廣德元年、吐蕃、入寇す。上、陝州に出奔す。吐蕃、長安に入る。關內副元帥郭子儀、これを擊つ。吐蕃、遁れ走る。〇二年、宦者程元振を流す。元振、初め、李輔國に附す。輔國、死す。元振、權を專らにし、自ら恣にすること尤も甚し。諸將の大功あるものを忌み、皆、之を害せんと欲す。吐蕃、入る。元振、掩蔽して、時を以て奏せず。上の狼狽を致す。中外切齒す。是に至つて、溱州に流す。〇臨淮王李光弼卒す。上の陝に幸するや、光弼至らず。上、之を撫すること加〻厚し。素より子儀と名を齊しくす。徐州に在るに及んで、兵を擁して朝せず。麾下の諸大將復た尊畏せず。光弼愧恨し、疾を成して死す。

【[illegible]】廣德元年に吐蕃が（內地深く）攻込んで來た。代宗は（そのために）陝州に都落をせられた。吐蕃は長安を占領して（掠奪をほしいままにした）。關內副元帥に（この時、任命された）郭子儀が、（敗殘の將卒を收拾して、泣いて忠義を勵まし、僅か四千の兵力で、計を以て大軍の如く見せかけ）

吐蕃（二十萬の大軍）を撃退した。吐蕃は（恐れて長安を捨て遠く）遁走した。○廣德二年に、宦官の程元振を（溱州に）流しものにした。この程元振といふ男は、初め李輔國に附隨してゐて（その奸計を助けてゐたが）、輔國が死んでからは、權を專らにして、氣儘勝手な振舞をすることが尤もひどかつた。（のみならず）諸將の大功ある者を忌み嫌つて、皆これを亡きものにしようとした。（かういふ朝廷の有樣である時に、前述の如く）吐蕃が入寇したのである。元振は、それを掩ひかくしてゐて、奏聞すべき時に奏聞しなかつた。（郭子儀が增兵を願つて出たのに、それを取次がない程であつたので、その結果）、代宗陝州落の大狼狽を演ずるやうなことになつたのである。で、朝野ともに齒がみして憤慨した。（中には、上書して、元振斬るべしと申上げた者もあつた位である）。遂にこの年溱州に流したのである。○（この年の秋）臨淮王の李光弼が死んだ。代宗が陝州落をせられた時に、光弼は（當然忠勤をすべきであつたのに）、その陝州へもお伺ひしなかつた。（それは朝廷に程元振などの小人が跋扈してゐたからである）。（そんな次第であるにもかゝはらず）代宗は、光弼を愛撫して（その母を見舞はせたり、その弟を登用したり）、益〻厚く惠を施された。光弼は平生、郭子儀と並び稱せられた程の人物であつたが、その任地の徐州に居つた時にも、大兵を控へてゐながら朝覲をしなかつた。

李正己
僕固懷恩
郭子儀
說回紇

（かやうな有樣であつたので、遂に）部下の諸大將までが以前のやうに光弼を尊び畏れなくなつた。（天下の人望を失つたのは勿論である）。光弼はそれを愧ぢ恨んで、（その結果）病氣となつて死んだのである。

【語釋】關內副元帥（關內は、函谷關以西の地で、卽ち畿內に對する內地である。吐蕃が內地に入寇したので、郭子儀が急に任命されたのである。元帥は、雍王适であつた。）〇程元振（代宗の信寵を受けてゐた宦官。初めは李輔國の懷刀となつて、その奸策を助けてゐたが、後にその權力を奪はうとして、輔國誅伐を代宗に勸め、遂に朝廷に跋扈するに至つた。衛州に追竄後も代宗は彼に心殘りがあつて、近く江陵へ遷された程であつた。）〇附（俗にいふ腰巾着となること。始終離れず、その權勢に參してふところ刀の役をする（こと））〇不以時奏（時は、重要な時、奏聞すべき時、つまり吐蕃が河西隴右の地を取つて、その急報が都に達した時や、郭子儀が增兵を奏請した時などを指してゐる。）〇溱州（今の貴州省思南府の方で、當時西南の蠻境に當つてゐた。）〇加（ます。）〇齊名（同樣に名望が高かつた。世に郭李の稱があつた程である。）〇徐州（今の江蘇省徐州府銅山縣。）〇愧恨（恥ぢうらむ。天下の名望と、部下の尊畏を失つたことに對して愧ぢ恨んだのである。）

〇永泰元年、平盧將李懷玉逐節度使侯希逸而自知留後。詔因而授之、賜名正己。〇叛將僕固懷恩誘回紇・吐蕃入寇。召郭子儀屯涇陽。懷恩道死。二虜爭長不睦。子儀遣人說回紇、欲共擊吐蕃。先是懷恩欺回紇、謂子儀已死。使至。回紇不信曰、郭公在、可得見乎。使還報。子儀與數騎出、使人

傳呼曰、令公來。回紇大驚、藥葛羅執弓矢立陣前。子儀免冑釋甲而進。諸酋長相顧曰、是也。皆下馬羅拜。子儀亦下馬、執手與之語、取酒相與誓約而還。吐蕃聞之夜遁。諸軍與回紇共追、大破之。

【語譯】永泰元年、平盧の將李懷玉、節度使侯希逸を逐ひて、自ら留後に知たり。詔して因つて之に授け、名を正己と賜ふ。○叛將僕固懷恩、回紇・吐蕃を誘つて入寇す。郭子儀を召し、涇陽に屯せしむ。懷恩道に死す。二虜、長を爭つて睦じからず。子儀、人をして回紇に說かしめ、共に吐蕃を擊たんと欲す。是より先、懷恩、回紇を欺きて、子儀已に死すと謂ふ。使至る。回紇信ぜずして曰く、「郭公在らば見るを得可きか」と。使還り報ず。子儀、數騎と出で、人をして傳呼せしめて曰く、「令公來る」と。回紇大いに驚き、藥葛羅、弓矢を執つて陣前に立つ。子儀、冑を免ぎ甲を釋きて進む。諸の酋長相顧みて曰く、「是れなり」と。皆馬より下りて羅拜す。子儀も亦馬より下り、手を執つて之と語り、酒を取り、相與に誓約して還る。吐蕃之を聞き、夜遁る。諸軍回紇と共に追ひて、大いに之を破る。

（かやうな有樣であつたので、遂に）部下の諸大將までが以前のやうに光弼を尊び畏れなくなつた。（天下の人望を失つたのは勿論である）。光弼はそれを愧ぢ恨んで、（その結果）病氣となつて死んだのである。

【語釋】關內副元帥（關內は、函谷關以西の地で、卽ち蠻夷に對する內地である。吐蕃が內地に入寇したので、郭子儀が急に任命されたのである。元帥は、雍王适であつた。）○程元振（代宗の信寵を受けてゐた宦官。初めは李輔國の懷刀となつて、その奸策を助けてゐたが、後にその權力を奪はうとして、輔國誅伐を代宗に勸め、遂に朝廷に跋扈するに至つた。溱州に流謫後も代宗は彼に心殘りがあつて、近く江陵へ遷された程であつた。）○附（俗にいふ腰巾着となること。始終離れず、その權勢に參してふところ刀の役をすること。）○不以時奏（時は、重要な時、奏聞すべき時、つまり吐蕃が河西隴右の地を取つて、その急報が都に達した時や、郭子儀が增兵を奏請した時などを指してゐる。）○溱州（今の貴州省思南府地方で、當時西南の蠻境に當つてゐた。）○加（ます。）○齊名（同樣に名望が高かつた。世に郭李の稱があつた程である。）○除州（今の江蘇省徐州府銅山縣。）○愧恨（恥ぢうらむ。天下の名望と、部下の尊畏を失つたことに對して愧んだのである。）

李正己　僕固懷恩　郭子儀說回紇

○永泰元年、平盧將李懷玉逐節度使侯希逸而自知留後。詔因而授之、賜名正己。○叛將僕固懷恩誘回紇・吐蕃入寇。召郭子儀、屯涇陽。懷恩道死。二虜爭長不睦。子儀遣人說回紇、欲共擊吐蕃。先是懷恩欺回紇、謂子儀已死。使至。回紇不信曰、郭公在可得見乎。使還報。子儀與數騎出、使人

傳呼曰、令公來。回紇大驚、藥葛羅執弓矢立陣前。子儀免冑釋甲而進。諸酋長相顧曰、是也。皆下馬羅拜。子儀亦下馬、執手與之語、取酒相與誓約而還。吐蕃聞之夜遁。諸軍與回紇共追、大破之。

訓譯 永泰元年、平盧の將李懷玉、節度使侯希逸を逐ひて、自ら留後に知たり。詔して因つて之に授け、名を正己と賜ふ。○叛將僕固懷恩、回紇・吐蕃を誘つて入寇す。郭子儀を召し、涇陽に屯せしむ。懷恩道に死す。二虜、長を爭つて睦じからず。子儀、人をして回紇に說かしめ、共に吐蕃を擊たんと欲す。是より先、懷恩、回紇を欺きて、子儀已に死すと謂ふ。使至る。回紇信ぜずして曰く、「郭公在らば見るを得可きか」と。使還り報ず。子儀、數騎と出で、人をして傳呼せしめて曰く、「令公來る」と。回紇大いに驚き、藥葛羅、弓矢を執つて陣前に立つ。子儀、冑を免ぎ甲を釋きて進む。諸酋長相顧みて曰く、「是れなり」と。皆馬より下りて羅拜す。子儀も亦馬より下り、手を執つて之と語り、酒を取り、相與に誓約して還る。吐蕃之を聞き、夜遁る。諸軍回紇と共に追ひて、大いに之を破る。

【通釋】永泰元年に、平盧軍の將、李懷玉が、その節度使の侯希逸を逐出して、自ら留後となり、その鎮の事を掌つた。(朝廷では、無事を希ふ心から)、詔してそのまゝ懷玉に留後の任を授け、(別に節度使としては、鄭王邈を任じたが、それは名目だけで、實權は懷玉に執らせ)名を正己と賜はつた。○(この年の秋)叛將の僕固懷恩が、回紇や吐蕃を味方として(數十萬の大軍で)入寇した。(朝廷では驚愕して)、郭子儀を(河中から)召出し、涇陽に陣營を布かせて防がせた。(回紇・吐蕃がこれを包圍した)。(これより先、總大將の)懷恩が、道中で病死した。すると、回紇と吐蕃とがお互に長とならうと競り合つて、兎角、間柄が睦じくなかつた。(それを機として)子儀が、部將の李光瓚といふ者を遣つて、回紇に話をつけ、共に吐蕃を擊たうとした。(ところが)、最初に懷恩が回紇をだまして、唐では子儀が最早死んでゐると謂つてあつたので、(子儀からの使者だと申込んだところで)、回紇が信じない。李光瓚に向つて、「郭公が生きて居られるものならお目に掛りたいものだ」(といつて相手にならない)。光瓚が還つて、事の次第を報ずると、子儀は「よし、それならといふので)僅か數騎と出掛けて(回紇の陣前に行き)、人々に「令公の入來であるぞ」と呼ばしめた。(それを聞くと)回紇の軍は大いに驚いた。軍將の藥葛羅が弓矢を手ばさんで陣頭にあらはれた。(それを見ると)子儀

は、冑や鐵を脱いで（その相貌のよく見えるやうにして）進み出た。回紇方の諸酋長は（つく〴〵と見て）お互に顔見合せ、「令公に間違ない」と一同、馬から飛下り並んで拜禮した。子儀も亦馬から下り、藥葛羅の手を執つて、「回紇は唐に大功あつて厚く報いられてゐながら、叛臣に味方するとはけしからぬ」と順逆を說いて聞かせ、藥葛羅は、「懷恩が、唐では皇帝も令公も死んで統治するものがない。と臣等を詐つたので出陣したのです。この上は令公のお指圖に從ひます」と語り合つて、酒を取つて共に吐蕃を擊たうと誓をかはして引上げて來た。吐蕃がそれを聞いて、夜中に遁げ出したのを、唐の諸軍は回紇と共に追擊して大いに之を破つた。

【語釋】李懷玉・侯希逸（希逸は平盧の節度使。懷玉は同じく兵馬使であつた。部下の人望が懷玉に集つて、希逸には更に人望がなかつた。希逸がそれを厭忌して懷玉を免じたので、部下が蜂起して懷玉を戴いたために、希逸は自ら逃落ちたのであつた。）

○僕固懷恩（僕固は姓、懷恩は名。鐵勒部の人。蕃州の都督であつた。安祿山の叛に、郭子儀に從つて轉戰して功があつた。子儀曰く、「懷恩、勇有つて恩少し」と。その叛したるは、辛京雲及び宦官等と隙があつたためである。）○涇陽（今の陝西省西安府涇陽縣。當時關內道の一縣。）○二虜（回紇と吐蕃。）○傳呼（つぎ〴〵に呼ぶ。）○令公（郭子儀、嘗に中書令であつた。故に號して令公といつたのである。）○藥葛羅（回紇の總帥。）○羅拜（羅は、羅列の羅で、つらなること。つらなり拜する。一列に並んで拜禮する。子儀の德望と至誠との致すところである。）○取レ酒（祝ひの酒宴をする。）

○三年、幽州將朱希彩、殺二李懷仙一。詔因以二希彩一領レ鎭。○大曆五年、誅二宦者

魚朝恩。朝恩在肅宗時、嘗爲觀軍容使。軍容之名始此。九節度相州之敗、其時也。至廣德初、爲天下觀軍容宣慰處置使、專總禁兵、勢傾朝野。大曆初、判國子監。升座講鼎覆餗、以譏宰相。王瑨怒。元載怡然。朝恩曰、怒者常情、笑者不可測也。朝政有不預者、輒怒曰、天下事有不由我者邪。上聞之不懌。載乘間奏其專恣不軌。遂誅之。○七年、盧龍將殺朱希彩、而以朱泚領鎭。詔因授之。○九年、朱泚以弟滔領鎭、而入朝。

通釋　三年、幽州の將朱希彩、李懷仙を殺す。詔して、因つて、希彩を以て鎭を領せしむ。○大曆五年、宦者魚朝恩を誅す。朝恩、肅宗の時に、嘗て觀軍容使と爲る。軍容の名、此より始まる。九節度相州の敗は、其の時なり。廣德の初に至り、天下觀軍容宣慰處置使と爲り、專ら禁兵を總べ、勢、朝野を傾く。大曆の初、國子監に判たり。座に升り、鼎、餗を覆へすといふを講じて以て宰相を譏る。王瑨怒る。元載怡然たり。朝恩曰く、「怒る者は常の情なり。笑ふ者は測る可からざるなり」と。朝

政預らざる者有れば、輒ち怒りて曰く、「天下の事我に由らざる者有らんや」と。上、之を聞いて懌ばず。載、間に乘じて其の專恣不軌を奏す。遂に之を誅す。○七年、盧龍の將、朱希彩を殺して、而して朱泚を以て鎮を領せしむ。詔して因りて之に授く。○九年、朱泚、弟滔を以て鎮を領せしめて入朝す。

〔通釋〕(大曆)三年、幽州の兵馬使の朱希彩が、(節度使の)李懷仙を殺して(自ら留後と稱した)。(朝廷では已むなく)詔して希彩に節鎮の實權を與へた。○大曆五年に宦官の魚朝恩を誅した。この朝恩といふのは、嘗て(肅宗の乾元二年)觀軍容使となつた男で、(それは當時)、九節度の兵が、相州(鄴城の)戰で、史思明の軍に)敗れた時で、(李光弼・郭子儀の兩元勳に上下がなく、統一がつかないといふわけで、その上に置かれた役で)、觀軍容使などいふ役名はこれが始めであつた。(それから)、廣德の初めになると、(朝恩は更に)天下觀軍容宣慰處置使となつて、專ら禁兵を統率して、その勢力は朝廷の内外を傾けたものである。(それから更に)、大曆の初には、國子監の學務をも支配し、講義の座に升つて、(易經の鼎の卦の)鼎の足が折れて、鼎中のものを覆すといふところを講義して、(その席に居た)宰相たちを譏つた。(すると)宰相の王縉が(顏色を變へて)怒つた。同じく元載は(怒りもせず)にこにことしてゐて、(取合はなかつた)。(それを見て)朝恩が(人に)「怒るのは普通の人

情であるが、笑ふのはその心の底が知れない」と語つた。(果して元載のために、後に誅せられるやうになつたのである)。(朝恩の權勢は、こんな有樣で素晴しいものであつて)、何か朝廷の政で、自分が參與しないことでもあると、忽ち怒つて、(何事にせよ)天下の事で、自分の關係しない事があらうか」と(いつたといふ程の驕慢ぶりであつた)。代宗は、この事を聞いて心中不快に思つてをられた。その隙を見込んで、元載が、朝恩の吾儘勝手なこと、不臣の志のあることなどを奏上した。(そのため)遂に朝恩を誅した。(大曆)七年、盧陵の軍將の(李懷瑗といふ者が)(先に李懷仙を殺して節度使となつた)朱希彩を殺した。○(そして衆議を以て)朱泚に盧陵鎭を領せしめた。(朝廷では例によつて)詔して朱泚に實權を與へた。○(大曆)九年に、朱泚は弟の滔に、盧陵鎭を支配させて、自分は(胡兵襲來に對する防禦として、兵を率ゐて)入朝した。(朝廷では、初めて節度の兵が御用を勤めたので、大層喜ばれた)。

【語釋】幽州(盧龍節度使の轄下) ○將(兵馬使。節度使配下の將である。) ○朱希彩(李懷仙の部將。懷仙を殺して盧陵を領してゐたが、部下を取扱ふのに殘忍で人の怨を買つてゐた。そのため部將の李懷仙に殺されてしまつたことは本文のとほりである。) ○觀軍容使(軍容を視察してその賞罰に任ずる役。) ○九節度相州之敗(既出。肅宗の乾元二年の役。) ○天下觀軍容宣慰處置使(前々項の、觀軍容使といふ名目を一層大きくしたものである。軍容を視察し、慰撫し、主將の任をその他事件の處置に與つたのである。) ○國子監(唐代、貴族及び優秀なる子弟に學を授けたところ。長官を祭酒といつた。監は支配役。管理者。) ○

胡椒八百斛

楊綰

李希烈

鼎實ヲ餗（易の鼎の卦に、鼎折足覆公餗とある。鼎が足が折れて鼎中のものが、即ち公の召上りものを覆した。といふことで、鼎は三本足、三公に譬る。三公がその任務を果すことが出來ないで、公の事務を覆すに譬へたのである。これを講じたのは、勿論席上の宰相等にあてつけたものである、朝恩の態度は實に傍若無人である。「餗」音ソク。鼎實、即ち鼎中のありもの。）　○王縉（縉は縉が正しいやうである。太原の人。少時より學を好み文章頗る清麗であつた。王維の弟にあたる。安祿山の亂に李光弼に從つて功があつた。黄門侍郎・同平章事・參知政事等を歴てゐる。）　○怡然（にこにこしてゐる有樣。）　○不軌（軌は、車の轍の跡。不軌は、臣子としてその正道をふみ外すこと。不臣不逞の志。）　○遂誅レ之（帝は元載と謀つて、寒食の日の近臣賜宴にことよせ、朝恩を召出し、禁中に於て縊り殺したのである。寒食は冬至から百五十日目の日。）

○十二年、有下告二元載圖一不軌上者。按問賜レ死。籍二其家一、胡椒至二八百斛一。他物稱レ是。○以二楊綰・常袞一同平章事。綰素清儉。制下。郭子儀方宴。減二坐中聲樂五分之四一。京兆尹黎幹、騶從甚盛。卽日省レ之、止存二十騎一。綰相三月而卒。上痛悼之曰、天乎。不レ欲二朕致一太平一。何奪二朕楊綰之速一也。○十四年、田承嗣卒。姪悅代レ之。○淮西將李希烈、逐二節度使一。詔因以鎭授二希烈一。○上在位十八年、改元者三。曰二廣德・永泰・大曆一。崩。太子立。是爲二德宗皇帝一。

【原文】十二年、元載、不軌を圖ると告ぐる者有り。按問して死を賜ふ。其の家を籍して、胡椒八百斛に至る。他物是に稱ふ。○楊綰・常袞を以て同平章事とす。綰素より淸儉なり。制下る。郭子儀方に宴す。坐中の聲樂五分の四を減ず。京兆の尹、黎幹、騶從甚だ盛なり。即日之を省して止だ十騎を存す。綰相たること三月にして卒す。上之を痛悼して曰く「天なる乎。朕が太平を致すを欲せず。何ぞ朕が楊綰を奪ふの速なるや」と。○十四年、田承嗣卒す。姪悅、之に代る。○淮西の將李希烈、節度使を逐ふ。詔して節を以て希烈に授く。○上在位十八年、改元する者三、廣德・永泰・大曆と曰ふ。崩ず。太子立つ。是を德宗皇帝と爲す。

【通釋】（大曆）十二年のことである。（元載は魚朝恩誅伐後、威權大いに加はつて、聊か增長し、賄賂を貪るやうの振舞などもあつて、帝も困つてをられたが）、折から、元載が謀叛を企ててゐると密告する者があつたので、取調べると（その罪に伏したので）自害を命ぜられた。その家を官に沒收して、（その所有を調べると）、胡椒が八百斛もあつた。その他の財產はそれに相當する程澤山あつた。（賄賂を貪つて不義の富を致してをつたのである）。○（元載の後釜として）楊綰と常袞との二人が同平章事となつて宰相の事をみた。楊綰は淸廉儉約の人であつた。いよいよ任命の制書が下ると、（その利目は覿・

面で、郭子儀は丁度その日(自宅で)宴會を開いてゐたが、(楊綰、宰相となると聞いて)席上餘興の音樂の五分の四を減じてしまつた。京兆の尹の黎幹は、出あるく時の伴揃ひが大層立派で多勢であつたが、即日、たゞ十騎に改めてしまつた。(折角惜しい人物であつたのに)、楊綰は相となつて僅か三ケ月で病死してしまつた。代宗は非常に痛み惜しまれて、「これは天の心であるのか、朕が太平を致すことを欲しないで、(楊綰をころしてしまつた)。何ぞ朕から楊綰を奪ふことの速いことよ」と歎息せられた。○(同じく大暦)十四年に(持てあましものの)田承嗣が死んだ。姪の悦といふのが代つてその後となつた。○(同年に)淮西の軍將の李希烈が、節度使の(李忠臣を)逐出して(自ら留後となつた)。(朝廷では例の如く)詔して藩鎭の實權を以て希烈に授けた。○代宗は在位十八年、その間、年號を改めること三回。廣德・永泰・大暦と曰ふ。(大暦十四年の五月に)崩御になつた。太子が即位せられた。これが德宗皇帝である。

語釋 按問(按は、しらべる。調査審問すること。この時の吟味役は、吏部尚書の劉晏であつた。王縉も亦元載と一味であるといふので、これは刺史に貶せられた。) ○籍(官に沒收すること。その一切所有の財産を調べ上げて闕所にすること。)

○胡椒(西戎南海地方に産する蔓生植物の實、辛味があつて藥味調味の料とする。) ○八百斛(十斗を斛といふ。唐代の斛目は我が斛目よりもずつと少いが、それにしても胡椒八百斛とは大したもので、これだけでも、如何に賄賂を貪つてゐたかゞわかる。)

○稱レ是(これ(胡椒八百斛)に相當する程澤山あつた。) ○楊綰(華陰の人。字は公權。少くて孤貧。母に事へて至孝であつた。元載政局の時、戸部侍郎であつたが、元載に媚びないために、政事向から排斥されて國子祭酒となつてゐた。その同平章事となつた時には、

る。崔祐甫、同平章事たり。祐甫、時望を收めんと欲す。未だ二百日ならざるに、官に除するもの八百人なり。上曰く、「人、卿が用ふる所多く親故に渉ると謗るは何ぞや」と。對へて曰く、「臣、陛下の爲めに人を擇ぶ。敢て愼まずんばあらず。親に非ず故に非ずんば、何を以て其の才行を諳んじて之を用ひんや」と。○淄青の李正己、上の威名を畏れて、表して錢三十萬緡を獻ず。崔祐甫請ひて、使をして淄青の將士を慰勞せしめ、因つて以て之を賜ふ。正己、慚服す。天下以爲らく太平庶幾くは望むべしと。○上、方に精を勵し治を求む。不次に人を用ふ。祐甫、楊炎を薦む。司馬より除せられて同平章事と爲る。既にして祐甫病みて事を視ず。

【解説】德宗皇帝は名は适といひ、(代王の長子で、雍王となつて天下の兵を統帥してゐたが)、雍王から入つて太子となつた。それがこのたび父の後を嗣いで帝位に即いたのである。　宰相常袞が天子を欺いて(中書舍人の職にあり、崔祐甫を貶した罪によつて潮州刺史に)左遷せられた。崔祐甫は用ひられて同平章事といふ職になつた。祐甫は天下の人望を得ようと思つて、(同平章事の職に就いて)、まだ二百日も經たないのに推薦して官途に就かせた者が八百人もあつた。そこで天子が「お前が此度推薦した人物は、大抵お前の親戚故舊の者だと世人が謗つてゐるが、それはどうしたことか」と曰はれ

た。すると祐甫は「陛下の御爲に人物を推薦しまするには充分愼重の態度を取らなければなりません。ついては親戚や舊友でない限り、どうして其の才能や品行を知つて安心して用ひることが出來ませうや」と申上げた。○淄靑の李正己が天子の威光や名聲の盛なるを畏れて、上書して錢三十萬緡を獻上した。崔祐甫が天子に請ひ、「使を遣はして淄靑の將士を慰勞し、正己の獻上した錢をその將士等に賜はつたらよいでせう」と建言した。そこで使を遣はし將士を慰勞し、之に三十萬緡の錢を分け與へられた。正己は大いに面目を失つて心から服從した。そこで天下の人々は「かういふ調子では天下の太平は間違ひない」と喜んだ。○その頃、天子（德宗）は天下の太平を來す爲めに非常な御精勵であつた。そこで官位の階級に重きを置かず、人物本位に人才を拔擢せられた。崔祐甫が楊炎を推薦すると、道州の司馬といふ卑い役から拔擢せられて、一躍同平章事になつた。間もなく祐甫が病氣に罹り、國政を執らなくなつたので、楊炎獨りが國政に當つた。

【語釋】同平章事（ドウヘイシヤウジと訓む。唐代の官名で、宰相の職を行ふ要職である。同中書門下平章事の略で、中書門下兩省の長官と同じく政事を平章する官の意で、もと他官を以て宰相たる者の稱であるが、實は宰相の實權を與へられた。平はこの場合にはベンと讀んで辨と同じく卽ち政治の事を明かに治むるといふ意で）ある。下つて宋の時代にも同平章事を以て宰相の官とした。○時望（當時の人望。）○除レ官（新に官を拜すること。除とは故き官を除き去つて新官に就く意。）○常袞（人名、嘗て福建觀察使となつてゐた。始め福建地方の人、學を知らず。袞爲めに鄕校を設けて之を敎導した。更に歐陽詹といふ學者を招いて諸生を敎へさせた。それで其地の文敎が盛になつた。代宗の朝には中書舍人となり、後宰相になつた）○崔祐甫（人名、字は貽孫、

博陵の人である。家世々經術を以て聞えてゐた。進士に擧げられ、累遷して同平章事となつた。德宗の建中二年卒した。文貞と諡された。）○淄青（淄州青州のこと。並に山東省に屬す。）○李正己（平盧の節度使で、淄青齊海登萊沂密德棣の十州を占有してその勢力强大を極めた。）○表（上表、目錄を献上したこと）○緡（錢を貫く繩である。錢千枚を一緡に貫いて一貫とする。）

○建中元年、始作兩稅法。唐初賦歛之法、有田則有租。有身則有庸。有戸則有調。玄宗之末、版籍寖壞、至德兵起。所在賦歛迫趣取辨、無復常準。下戸不勝因弊、率皆逃徙。至是楊炎建議、先計州縣每歲所用、及上供之數、而賦於人、量出以制入。戸無主客、以見居爲簿、人無丁中、以貧富爲差。爲行商者、在所州縣稅三十之一、居人之稅、秋夏兩徵之。其租庸調雜徭悉省。

【訓讀】建中元年、始めて兩稅の法を作る。唐の初め賦歛の法、田有れば則ち租有り。身有れば則ち庸有り。戸有れば則ち調有り。玄宗の末、版籍寖く壞れ、至德、兵起る。所在、賦歛迫趣して取辨し、復た常準なし。下戸困弊に勝へず。率ね皆逃れ徙る。是に至つて楊炎建議して、先づ州縣の每歲用

ふる所、及び上供の數を計りて、人に賦す。出づるを量りて以つて入るを制す。戸は主客と無く見居を以つて簿となし、人は丁中と無く、貧富を以つて差と爲す。行商を爲す者は、在所州縣三十の一を稅す。居人の稅は、秋夏に之を兩徵す。其の租庸調雜徭は悉く省く。

【通釋】德宗の建中元年に始めて夏と秋と兩度に稅を取る方法を設けられた。唐初の稅法は、田よりは稅を收め、人より庸を取り、家より調を徵收した。所が玄宗の末年に戸口調査が亂れて稅法が正しく行はれなくなり、肅宗の至德年中には安祿山が起り、到る所遽に取り立てゝ國用を辨じた爲めに稅法は愈ゝ亂れて一定の標準がなかつた。で、貧民は租稅に苦められて、大抵は故鄕を逃げて他に移住するやうになつた。それで楊炎が意見書を奉つて次のやうに改めた。それは先づ州縣每年の費用と天子に奉る供御の高とを計つて、それを人每に割り附けた。卽ち歲出を計算して、それだけの額を租稅による歲入としたのである。家は家主と借家人との區別をせず、現在其の家に住んで居る者を以て一戸として帳簿に記入して家屋稅を課した。又人は丁年中年の別を立てず、貧富の程度によつて差をつけて稅を課した。行商を爲す者は、其の地方の州縣で賣上高の三十分の一を稅として徵收した。定住の人民には秋夏兩度稅を徵收し、從來の租庸調其他の雜稅はすべて取らぬ事とした。

【語釋】兩稅（夏秋兩度に徴收するから兩稅といふ。）○賦斂（稅を割りつけて徴收すること。）○租庸調（租は田に課する稅。庸は役の代りに收める個人稅である。當時壯丁一年に二十日間役に服する規定であるが、服役しなければ其の代として絹や布を收めた。調は戸別稅である。其の土地に産する絹綿布などを收める。）○版籍（戸籍。戸口を調査せしもの。）○賦斂迫趣（稅金を取り立てるにせき立て促すこと。迫趣は迫つて催促すること。）○常準（きまつた標準。）○見居（現居に同じ、現在其の家に住んでゐるもの。）○戸無主客（主は其家の持ち主。客は借屋人。）○丁中（時によつて多少の相違あつたが、大凡十六歳より中年とし、廿歳より丁年とし、六十歳より老年とした。丁中は即ち丁年と中年とである。）

○崔祐甫卒。○殺忠州刺史劉晏。晏善治財計。自肅宗・代宗以來、領戸部・度支・鑄錢・鹽鐵・轉運等事。以同平章事充使。通漕運、斡鹽利、制百貨之低昂。軍國之用賴以充足。然久典利權、衆頗疾之。又與楊炎不相悅。竟貶忠州。人希炎旨、告晏怨望。上遣人縊之。○二年、成德李寶臣卒。子惟嶽自領軍務。後、王武俊斬而代之。○楊炎・盧杞同平章事。炎未幾罷。杞藍面鬼色、有口辯。上悅之。

【通釋】崔祐甫卒す。○忠州の刺史劉晏を殺す。晏善く財計を治す。肅宗・代宗より以來、戸部・度

支・鑄錢・鹽鐵・轉運等の事を領す。同平章事を以て使に充つ。漕運を通じ、鹽利を斡し、百貨の低昂を制す。軍國の用賴りて以て充足す。然れども久しく利權を典り、衆頗る之を疾む。又楊炎と相悅ばず。竟に忠州に貶せらる。人、炎が旨を希ひ、晏怨望すと告ぐ。上、人を遣はして之を縊せしむ。〇二年、成德の李寶臣卒す。子惟嶽、自ら軍務を領す。後、王武俊斬つて之に代る。〇楊炎・盧杞、同平章事たり。炎未だ幾ならずして罷む。杞は藍面にして鬼色、口辯有り。上之を悅ぶ。

通釋 崔祐甫が卒した。(徳宗の建中元年六月であつた。)〇忠州の刺史劉晏を殺した。晏は(經濟的才幹あつて)よく財政を治め、肅宗・代宗の代から此の方、戶部・度支・鑄錢・鹽鐵・轉運等の役目を掌つた。卽ち同平章事といふ要職に在つて、而も戶部使・度支使・鑄錢使・鹽鐵使・轉運使などの職を兼ねたのである。そこで或は轉運使として穀物の運送をよくし、或は鹽鐵使として鹽を專賣して國家の利益を計り、すべての物貨の價格の高低を調節したので、軍國の費用が十分に足りて國家の富を招いた。けれども久しく國家經濟上の要職に在つて利權を掌つて居たので、やうやく人々の嫉妬を買ひ、それに又宰相の楊炎と不和であつたので、竟に忠州の刺史に逐ひ遣られた。或人(荊南節度使の庾準を指す)が楊炎の意を迎へて諂つていふには、「劉晏は天子を怨んでゐる」と。そこで徳宗

は怒つて使を遣して晏を絞殺させられた。（中略）○楊炎と盧杞の二人ともに同平章事となつた。やがて炎が罷めて、杞が獨り其の職に留つた。杞は顏色青く、容貌鬼面の如く、異樣の風貌で、辯舌巧みにして、うまく天子に諛つた。だから天子は之を愛せられた。

語釋 治二財計一（財政會計を取扱ふことが上手だといふ意。） ○戸部（州縣の戸口の事務を掌る役。） ○度支（天下の税賦を掌る役。） ○鑄錢（貨幣鑄造を掌る役。） ○鹽鐵（鹽と鐵とを國家の專賣としてその利を收める爲に之を監督する役。） ○轉運（穀物を運漕する役。） ○充レ使（戸部、度支などの長官を戸部使、度支使といふ。その官に任ぜられること。） ○幹二鹽利一（幹は音アツ、運す。工夫を凝らすこと。鹽を諸方へ運送して政府の利益になるやうに工夫すること。） ○典（ツカサドルと訓す。掌ること。） ○希レ旨（人の氣に入るやうに仕向けて其の心を迎へること。歡心を買ふこと。） ○怨望（音エンバウ、二字共に怨みに思ふこと。） ○成德李寶臣（成德は地名、前に出づ。李寶臣は成德の節度使である。） ○楊炎（字は公南、性豪爽、父の喪に墓側に廬し、號泣止まなかつた。詔して其の閭に旌表された。德宗の時相となり、兩税法を作り、天下其の利を受けた。） ○盧杞（德宗の朝、同平章事となり、寵を恃んで專横を極めた。朱泚が亂を起したとき、帝は奉天に走られ、杞が之に從つた。李懷光、朔の兵を渡つて奉天に至り、杞の姦惡を奏せんとした。杞は之を遮つて見えしめなかつた。そこで表を上つて杞の惡を暴いた。衆議また之を助けたので、帝は止むを得ずして遠流した。貞元元年再び朝に入らうとしたが卒した。） ○藍面鬼色（俗にいふ鬼が地獄から火を取りに來たといふやうな顏付。顏色の青くして醜い異樣な容貌をいふ。）

○尙父太尉中書令、汾陽ノ忠武王郭子儀卒ス。子儀以テレ身ヲ爲ルコト二天下ノ安危ヲ一者三十年、功蓋ヒテ二天下ヲ一而モ主不レ疑ハ。位極メテ二人臣ヲ一而モ衆不レ疾マ。嘗テ遣シテレ使ヲ至ラシム二魏博ニ一。田承嗣西ニ望ミ拜シテレ之ヲ曰ク、茲ノ膝不ルコトレ屈セ二於人ニ一久シ矣。今爲ニレ公ノ拜ス。校スルコト二中書令ヲ一凡ソ二十四考ナリ。家人三

諸帥皆反

稅間架
除陌錢

千人。八子七壻皆顯。諸孫數十人、每問安不能盡辨。頷之而已。年八十三而終。○平盧李正己卒。子納自領鎭。朱滔・田悅・王武俊・李納先後皆反。○三年、四人皆自稱王。○李希烈反。○兩河用兵。府庫不支數月。先括富商錢、增諸道稅。四年行稅間架・除陌錢等法。

【口譯】尙父大尉中書令、汾陽の忠武王郭子儀卒す。子儀身を以て天下の安危を爲す者三十年。功、天下を蓋ふも、而も主疑はず。位、人臣を極むるも、而も衆疾まず。嘗て使をして魏博に至らしむ。田承嗣、西望して之を拜して曰く、「此の膝、人に屈せざること久し。今、公の爲に拜す」と。中書令を校すること凡そ二十四考なり。家人三千人。八子七壻、皆顯る。諸孫數十人、安を問ふ每に盡く辨ずる能はず。之を頷するのみ。年八十三にして終ふ。○平盧の李正己卒す。子の納、自ら鎭を領す。朱滔・田悅・王武俊・李納、先後して皆反す。○三年、四人皆自ら王と稱す。○李希烈反す。○兩河に兵を用ふ。府庫支へざること數月。先づ富商の錢を括し、諸道の稅を增す。○四年、稅間架・除陌

鍵等の法を行ふ。

通解 尚父（尊號）大尉、中書令（共に官名）汾陽（地名）の忠武（謚號）王（爵名）たる郭子儀が卒去した。（建中二年六月辛丑の日であつた）。子儀は其の雙肩に國家の安危を荷負ふこと三十年の久しきに及んだ。其の功業は天下を蓋ふ程の偉大であるけれども、（公平無私の人であるから）、天子は少しも疑はれない。位は人臣としての頂點にまで達したけれども、（謙讓の德があつたから）、衆人は少しも嫉妬しなかつた。子儀が或時使を魏博の節度使田承嗣の許に遣はした。すると田承嗣が西望して拜して曰ふには、「吾が此膝は久しく人に向つて屈げたことは無かつた。今此膝を屈して公を拜す」といつた。中書令となつて毎歳の終りに成績の考査を受けること二十四回に及んだが、いつも上等の成績であつた。家人は三千人あり、子供は八人の男子と七人の壻があつたが、皆それ〴〵名を世に顯はした。孫は數十人もあつて、御機嫌伺ひに來る場合に一々誰彼と區別がつかない。唯點頭ばかりである。年八十三で死んだ。平盧の節度使の李正己が卒して、子供の納が後を嗣いで父の鎭處を所有すると、部下の朱滔や田悅や王武俊や李納等が先後して納に叛いた。○建中三年に此の四人は皆それ〴〵獨立して王と稱した。（朱滔は冀王、田悅は魏王と稱し、王武俊は趙王と稱し、李納は齊王と稱し、居

所官制、すべて天朝に擬した)。○淮西の節度使の李希烈が叛した。○當時河南河北兩道に兵を用ふる爲に、國家の財政が窮乏し、數ケ月にわたつて費用の出場がなくなつた。(そこで太常博士の韋都賓や陳京等が建議して)、金持の錢を檢査し、(萬緡を標準として、其れより以上を所持するものは、その上前だけを政府に借り入れる制を設け、更に淮南節度使の陳少游の奏上に基き)、天下諸道の税を、(千錢毎に百錢を)增すことにした。建中四年には税間架と云つて、(家の棟數によつて税を課する一種の家屋税を徴收し)、又除陌錢と云つて(物品を賣買する際、例へば千錢の物を賣買すれば、政府が双方より五十錢つゝ即ち百錢の口錢を取る方法を設けた)。

語釋 尙父(尙は尊ぶ意。之を尊んで父とするのである。憲宗即位の初、詔して郭子儀を尊んで尙父とせられた。周の武王が大公望を尊んで尙父と呼んだと同じ意味。) ○大尉(三公の一、大尉司徒司空を三公とする。三公は天子を助け邦國を平にする事を掌る。大尉は今の上席である。委しくは前に出づ。) ○中書令(前に出づ。) ○二十四考(唐の制に一歲の終りに仕事の成績を考査し、考上は賞し考下は貶することになつてゐた。郭子儀は肅宗帝の乾元元年から中書令となつて二十四回の考査中いつも上成績であつた。即ち二十四年間中書令となつて好成績を擧げた事になる。) ○兩河(河南河北の兩道をいふ。) ○府庫不レ支(府庫が持ち切れぬ。窮乏し、軍費の出ない。) ○括(驗の意で、しらべ取ること。) ○税間架(架は屋である。家の棟である。二棟を間といふ。間毎に税を課する。それを上中下に區別し、上屋税は二千錢、中屋税は千錢、下屋税は五百錢の税を課する。所謂家屋税である。) ○除陌錢(陌は百に同じ。物を賣買する毎に兩方より口錢を徴收する。其の標準は千錢賣買には兩方より口錢五十錢つゝ即ち百錢となる。一種の營業税。) ○西望(郭子儀は京師に居るから魏博の西に當る。故に西のかた郭子儀の居る方を望見したのである。)

李希烈入寇

朱泚

段秀實以笏擊泚

上奔奉天

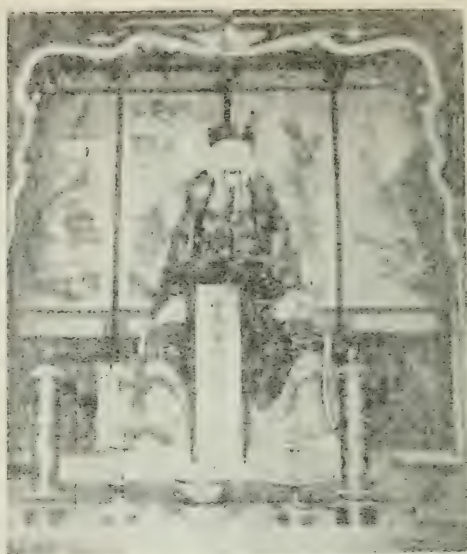
李懷光

○李希烈寇襄城。詔發涇原等道兵救之。涇原節度使姚令言、將兵過京師。犒師惟糲食菜餤。衆怒作亂入城。上出奔。亂兵奉太尉朱泚爲主。司農卿段秀實謀誅泚。不克。泚召衆議稱帝。秀實唾其面大罵、以笏擊泚額。血濺地。泚殺之。遂僭號大秦皇帝。先是有術士桑道茂言、數年後有離宮之厄。奉天有天子氣。宜高大其城以備非常。上從之。至是遂奔奉天。泚犯奉天。李晟率兵赴援。渾瑊擊泚破之。奉天圍解。李懷光赴難。亦破泚兵至奉天。欲入白盧杞之姦。杞隔之。不得入見而行。上表暴杞惡。衆論亦喧騰、咎杞。上不得已遠貶之。

李希烈、襄城に寇す。詔して涇・原等の道兵を發して之を救ふ。涇原の節度使姚令言、兵を將ゐて京師を過ぐ。師を犒ふに惟だ糲食菜餤のみ。衆怒りて亂を作し城に入る。上、出奔す。亂

兵、大尉朱泚を奉じて主と爲す。司農卿段秀實、泚を誅せんと謀る。克はず。泚、衆を召して帝と稱せんと議す。秀實、其面に唾して大いに罵り、笏を以て泚の額を撃つ。血、地に濺ぐ。泚之を殺す。遂に大秦皇帝と僭號す。是より先、術士桑道茂といふもの有り。言ふ「數年の後、宮を離るゝの厄有らん。奉天に天子の氣有り。宜しく其の城を高大にして以て非常に備ふべし」と。上之に從ふ。是に至つて遂に奉天に奔る。泚、奉天を犯す。李晟、兵を率ゐて赴き援ふ。渾瑊、泚を撃つて之を破る。奉天の圍み解く。李懷光、難に赴く。亦泚の兵を破り、奉天に至る。入つて盧杞が姦を白さんと欲す。杞之を隔つ。入り見ゆるを得ずして行る。表を上りて杞の惡を暴す。衆論も亦喧騰して杞を咎む。上、已を得ずして之を遠貶す。

【通解】 李希烈が襄城縣に來寇して來たので、詔して涇州原州等關内道の兵を出して之を救はしめた。涇原の節度使姚令言が、召に應じて兵を率ゐて京師（長安の都）を通過した。其の時朝廷から兵士達を慰勞するのに、玄米の飯と野菜を裹んだ餅だけしか出さなかつたので、此の冷遇に憤慨した兵士達が、長安城内に亂入した。そこで天子は都を出奔し、亂兵は大尉の職に居る朱泚を頭首に戴いた。司農卿の段秀實が泚を誅しようと謀つたが、とても自力の及ぶ所ではなかつた。朱泚は群衆を

招いて自ら帝と稱しようと相談を持ちかけた。秀實は憤慨して其の顔に唾を吐きかけて大いに罵り、

段秀實木像

更に笏を以て朱泚の額を撃つたので、血が淋漓として地に濺いだ。泚は怒つて秀實を殺し、遂に僭越にも大秦皇帝と號したのである。是より前に桑道茂といふ占師があつて、次のやうに言つたことがあつた。「數年の後には天子が皇宮を離れて出奔せられなければならぬ災難がある。しかし奉天に天子の雲氣が立つてゐる。だから奉天城の城壁を高くして、他日非常の際の準備とされたらよからう」と。そこで天子は占者の言に從つて奉天城を修築して置かれたが、果して此の國難あり、奉天に出奔されることゝなつた。朱泚は帝の跡を追つて奉天城を圍んだ。此の時、李晟といふ(忠勇無双の將軍があつて)、兵を率ゐて來

り援ひ、渾瑊も泚を撃つて之を破つた。そこで奉天城の圍が解けた。李懷光も天子の危難に馳せ參じたがこれも亦朱泚の兵を破り、奉天に着いた。そして宰相盧杞の惡事を天子に申上げようとしたが、杞が遮つて入れないので、天子に謁見することが出來なくて立ち去り、上表して盧杞の惡事をさらけ出した。又世間の口も喧しく杞の姦惡を咎めたので、帝も止むを得ず（杞を新州の司馬として）遠く退けられた。

語釋 犒レ師（飲食物を送つて將士の勞をぬぎらふこと。） ○糲（白げぬ米、卽ち玄米。糲食は玄米を炊いだ飯であろ。） ○菜餤（音サイタン。餅の中に野菜を包んだもの。） ○秀實唾二其面一（朱泚が李忠臣・源休・姚令言・秀實等を召して、帝を害せんことを相談した時、秀實は非常にその不臣を憤慨して、源休の持つて居た笏を奪つて進み、泚の面に唾して大に罵つていふには、「狂賊、吾れ汝を寸斬せざりしを殘念に思ふ」と。笏を以て此の額を撃ち、鮮血が地に灑いだ。李忠臣が泚を助けたので、泚はほふ〳〵の體で逃れた。秀實は衛兵の衆に向つて、「我は絕對に汝等叛人には與することは出來ない。汝等何で我を殺さないか」と罵つた。泚は遂に進んで秀を殺した。文天祥の正氣歌に「或爲レ擊レ賊笏一。逆豎頭破裂。」とあるのは、この事實を指したのである。） ○暴（音バク、暴露する。さらけ出すこと。） ○喧騰（音ケントウ。さわぎたてること。騰は議論のわき立つをいふ。） ○僭號（僭は僭上、僭越、僭竊など熟する文字で、身分不相應のことを望む意。僭號は臣下として、あるまじき君上の位を名乗ること。） ○襄城（今の河南省襄城縣。） ○涇・原道兵（涇、原ともに甘肅省の地。皆關內道に屬す。）

罪己之詔

○興元元年、大赦。陸贄勸レ上、罪レ己以謝二天下一。奉天所レ下書詔、驕將悍卒聞レ之、無レ不二感激揮一レ涕。王武俊・田悅・李納上レ表謝レ罪。

希烈僭號

○李希烈僭二號大楚皇帝一。

○置瓊林大盈庫於行宮。陸贄諫去其榜。○李懷光反。上奔梁州。○魏博田緒、殺田悅。自領軍府。○李晟克復長安。朱泚走。其將斬之以降。晟露布至行在曰、臣已肅淸宮禁、祗謁寢園、鐘簴不移、廟貌如故。上覽之泣曰、天生李晟以爲社稷、非爲朕也。

【訓讀】興元元年、大赦す。陸贄、上に勸めて、已を罪して以て天下に謝せしむ。奉天より下す所の書詔、驕將悍卒も之を聞いて感激して涕を揮はざるなし。王武俊・田悅・李納、表を上りて罪を謝す。○李希烈、大楚皇帝と僭號す。○瓊林の大盈庫を行宮に置く。陸贄諫めて其の榜を去らしむ。○李懷光反す。上、梁州に奔る。○魏博の田緒、田悅を殺して自ら軍府を領す。○李晟、長安を克復す。朱泚走る。其の將之を斬りて以て降る。晟、露布して行在に至つて曰く、「臣已に宮禁を肅淸す。寢園に祗謁し、鐘簴移らず、廟貌故の如し」と。上之を覽て泣いて曰く、「天、李晟を生じて以て社稷の爲にす、朕が爲に非ず」と。

【通釋】德宗の興元元年に、天下に大赦を行はれた。(翰林學士の)陸贄が帝に勸めて申すには、「陛下御自身の罪を責めて天下に謝せられたならば御難は解けませう」と。そこで奉天の(行在所から身の不德を責め、上は罪を祖宗に謝し、下は愆を百姓に謝し、誠衷を盡した)詔書を下された。これを見る者はいかなる驕慢の將も、悍惡の卒も、感激して涙を墮さぬものはなかつた。さきに叛いて王と稱した王武俊、田悦、李納の徒も、此の大赦の詔書を見て恐懼し、皆王號を去り、上表して罪を謝した。○李希烈は大楚皇帝と僭號した。○(帝は奉天の)行宮に、(諸道からの貢物を貯へて)、瓊林大盈庫といふ(立札を立てた)。すると陸贄が、(「未だ戰功の將士を賞せずして寶物を私なさつては、士卒は怨んで、鬪志がなくなります」)と諫めて、その立札を取り去らしめた。○李懷光は(さきに朱泚の軍を破つて奉天に至つたが、天子に見ゆるを得なかつたのを怨んで)、叛いたので、天子は梁州(陝西)に出奔した。○魏博の田緒(田悦の姪)が田悦を殺して其の軍をひきすべた。○李晟が朱泚の軍を破つて長安を奪還した。朱泚は敗走し、途中その部將の(梁庭芬が泚を射て阬の中に墜した。すると韓旻等)が泚を斬つて降參した。李晟は書記に命じて戰勝復命書を作らせ、行在所に至つて帝に奉つた。其文意はかうである。「臣は已に京師の賊を掃討して宮中を淸めました。敬んで御歷代の御陵に參拜しま

したが、祭祀の道具も賊の爲に他に移されることなく、御廟の樣子も變りありません。（願くは聖慮を安んぜさせ給へ）」と。帝は之を讀んで歔感極つて泣いて申さるゝには、「天は李晟を此世に降して唐の國家を安定させられた。これは決して朕一人の爲にされたのではない、（國家の爲にである）」と。

語釋 大赦（勅命によつて罪人を放免し又は減刑すること。）○陸贄（字は敬輿、年十八にして進士の試驗に及第し、憲宗の朝、翰林學士となる。天子に奉天に從ひ、詔書を草した。中書侍郎、同平章事に累進したが、後裴延齡の讒にあつて忠州別駕に貶せられた。朝に立つては諫諍適切、至誠より迸り出た。卒して宣公と諡された。）○驕將悍卒（傲慢な大將や荒つぽい兵卒。）○瓊林大盈庫（玄宗皇帝の世、瓊林と大盈の二大倉庫を長安に置いて、寶物を藏せられたが、今德宗は奉天の行在の廡下に、諸道よりの獻上物を藏せられて、瓊林大盈庫と榜したのである。）○榜（木札のこと。その木札を立てゝ衆に示すこと。立て札。）○露布（戰捷を報ずる書。其の書は封じないで、露出して宣布する意で露布といふのである。）○肅清（正しく清めること。）○祇二謁寢園一（祇は敬む意。寢は陵で、「ミサヽギ」のこと、園は陵墓のある境域。即ち敬んで御陵に參拜する意。）○鐘簴不レ移（簴は鐘を懸ける臺で、鹿頭龍身の彫刻を施す。こゝは陵廟に奏する樂器を賊の爲に取毀されずにゐるといふこと。）○廟貌如レ故（廟といふ字は、もと貌の意で、祖先の容貌を尊ぶ意。故に二字で靈屋（オタマヤ）の義である。こゝは位牌を安置されたオタマヤも無事であるとの意。）

○車駕還二長安一。○顏眞卿爲二李希烈所一レ殺。先レ是眞卿爲二盧杞所一レ陷、遣三奉二使希烈所一。人言、失二一元老一。爲二國家羞一。至二賊中一。留レ之、將二二歲一、不レ屈。竟爲二賊所一レ縊。○貞元元年、盧杞量移、將二再入一而卒。○幽州朱滔卒。○馬燧及諸軍平二河中一。李懷光縊死。○二年、淮西將陳仙奇、殺二李希烈一以降。吳少誠殺二仙奇一。朝

延因以少誠領鎮。

【訓讀】車駕、長安に還る。○顏眞卿、李希烈の殺す所となる。是より先眞卿、盧杞の陷るゝ所となり、希烈の所に奉使せしめらる。人言ふ、「一言老を失ふ。國家の爲めに羞づ」と。賊中に至る。之を留むること、將に二歲ならんとするも、屈せず。竟に賊の縊する所となる。貞元元年、盧杞、量移せられて、將に再び入らんとして卒す。○幽州の朱滔卒す。○馬燧及び諸軍、河中を平ぐ。李懷光、縊死す。○二年、淮西の將陳仙奇、李希烈を殺して以て降る。吳少誠、仙奇を殺す。朝廷因りて少誠を以て鎭を領せしむ。

【通釋】（興元元年七月壬午の日）帝は長安の都に還御された。（李晟が奉迎し、步騎十餘萬、旌旗數十里に續くといふ盛觀であつた）。顏眞卿は李希烈に殺された。これより前に（希烈が反した時、盧杞が眞卿を惡んで、之を殺さうと思ひ、それには眞卿を希烈の所へ使にやれば、きつと殺されるに違ひないと考へ、わざと僞り奏して、「眞卿を遣はして希烈に說かしめられたならば軍隊を動かさないで降伏さすことが出來ませう」と勸めたのである）。それで眞卿が希烈の所に使せしめられることになつ

た。天下の人々は皆惜んで言つた。「(そんな危險な役を眞卿に命じて)、この忠直正義の一元老を失ふのは國家の恥辱である」と。かくて眞卿は賊中に入つたが、(烈しき劫迫を受けても少しも屈せず、正義を以て之に抗した)。かくて賊中に留め置かるゝこと二年近くに及んだが、更に屈從しなかつたので、終に縊首されたのである。○貞元元年に、(嘗て新州の司馬に貶せられた)盧杞が、赦されて(吉州の長史に任ぜられて)近くへ移され、更に再び朝廷に入らうとしたが、病んで死んだ。(以下文意明かであるから略する。)

【語釋】車駕(天子の乘り物。轉じて天子のことをいふ。) ○量移(罪人の心を推し量つて、前に遣られた處から、また近い處へ場所換へになることをいふ。集覽に「遠く斥けられし者、赦に遇へば、量移して居を近地に徙すといふ」とある。)

○三年、張延賞同平章事。先是吐蕃尚結贊、據鹽夏州。李晟嘗破其一堡。渾瑊・馬燧各擧兵臨之。懼而請和。卑辭厚禮、求於馬燧。燧信而請於朝。晟曰、戎狄無信。不如擊之。延賞與晟有隙。數言和便。遣渾瑊與吐蕃盟於平涼。吐蕃劫盟。瑊走免。吐蕃畏晟・燧・瑊。曰、去此三人、則唐可圖也。於是離間

晟。因燧以求盟。欲執瑊以賣燧、使倂得罪、因縱兵直犯長安。會失瑊而止。

〔句解〕三年、張延賞、同平章事たり。是より先、吐蕃の尙結贊、鹽夏州に據る。李晟嘗て其の一堡を破る。渾瑊・馬燧各〻兵を擧げて之に臨む。懼れて和を請ふ。辭を卑うし禮を厚うして馬燧に求む。燧、信じて朝に請ふ。晟曰く、「戎狄は信無し。之を擊つに如かず」と。延賞、晟と隙有り。數〻和を便なりと言ふ。渾瑊をして吐蕃と平涼に盟はしむ。吐蕃盟を劫かす。瑊走りて免かる。吐蕃、晟・燧・瑊を畏る。曰く、「此の三人を去らば、則ち唐圖る可きなり」と。是に於て晟を離間す。燧に因りて以て盟を求む。瑊を執へて以て燧を賣り、倂せて罪を得しめ、因つて兵を縱つて直ちに長安を犯さんと欲す。會〻瑊を失ひて止む。

〔通釋〕貞元三年（左僕射の）張延賞を同平章事とした。是より以前に吐蕃の將の尙結贊が、鹽州夏州（倶に今の甘肅省の地）に據つた。李晟が或時其の一堡壘を攻め破つた。又渾瑊や馬燧等の諸將も、各〻兵を擧げて寄せて來たので、尙結贊は懼れて恭しい口上を遣ひ禮物を多く持つて來て、馬燧に縋つて媾和の取持を求めた。それで馬燧は之を信じて和睦を許されんことを朝廷に請うた。

李晟は「夷は信義を知らないから宛てにはならない。之を撃ち破るが良い」と不賛成を唱へた。然るに張延賞は李晟とは仲の悪い所から殊更に反對し、吐蕃と媾和するの利益を唱へた。そこで渾瑊を遣はして吐蕃と平原に盟を結ばせた。(然し固より計劃の媾和だから、吐蕃は精騎數萬を伏せて、瑊が幕中に入つて禮服を着用せんとする時、相圖の鼓三聲と共に伏兵一時に起つて)唐軍を劫した。瑊は命から〴〵やつと免るゝことが出來た。はじめ吐蕃は李晟・馬燧・渾瑊の三將を畏れてゐた。そして此三人を除き去らば唐は容易に撃ち破ることが出來ると曰つてゐた。それで先づ李晟を君側から引き離す計を立て、次に馬燧に因つて媾和の取持を求め、更に渾瑊を執へて、今度の失策は馬燧にありとして、併せて罪を得させ、更に兵を放つて一擧に長安を侵略しようとの計劃であつた。が、瑊を逃がしたので、其の計畫は流れて了つた。

語釋 卑レ辭厚レ禮(悲しい言葉をつかひ、禮物を澤山持つて來ること。) ○賣レ燧(燧に罪を賣りつける。燧をだますこと。)

○李泌同平章事。上與レ泌從容論二即位以來宰相一。入言二盧杞姦邪一。朕殊不レ覺。泌曰、此乃所二以爲二姦邪一也。倘覺レ之豈有二建中之亂一乎。泌有二謀略一。而好レ談二

神仙詭誕。故爲世所輕。爲相未三歲而卒。○八年、陸贄同平章事。○九年、大尉中書令西平忠武王李晟卒。○十年、陸贄罷。

【訓讀】李泌、同平章事たり。上、泌と從容として即位以來の宰相を論ず。「人、盧杞を姦邪なりといふ。朕殊に覺らず」と。泌曰く、「此れ乃ち姦邪たる所以なり。倘し之を覺らば豈に建中の亂有らんや」と。泌、謀略有り。而も好んで神仙を談じて詭誕なり。故に世の輕ずる所と爲る。相となりて未だ三歲ならずして卒す。○八年、陸贄、同平章事たり。○九年、大尉中書令西平の忠武王李晟卒す。○十年、陸贄罷めらる。

【通釋】李泌が同平章事となつた。帝は或時李泌と打ちくつろいで、即位以來の宰相の人物を評論せられた。其の時帝は「世人は盧杞を佞姦邪智の人物といふが、朕は一向彼を左樣な人物とは思はない」と申された。すると李泌は「陛下の特に御心附ならぬ所が彼の姦佞邪智の所であります。若し陛下がそれをお覺あらばどうして建中の亂などが起りませうか」と申上げた。李泌は智謀策略のある人物であつたが、好んでとりとめのない神仙の說を談じたので、世人からは輕ぜられた。宰相となつて

韓愈作二爭臣論一

取二白麻一壞レ之

から三年もたゝないで卒した。○貞元八年に陸贄が同平章事となつた。○九年に大尉兼中書令で西平忠武王たる李晟が卒した。○十年、陸贄が（裴延齢といふものゝ姦邪を論じた爲に延齢に讒せられて）、同平章事を罷めさせられた。

語釋 建中之亂（建中四年、朱泚が叛いて天子が奉天に出奔された時をいふ。） ○詭誕（二字ともイツハリ、アザムク意で、世上あり得べからざる途方もない事を言ふこと。）

○十一年、貶贄忠州別駕。贄自奉天以來、宣力最多。隨事論諫、剴切百奏。帝追仇盡言。又被讒。故貶。初夏縣陽城以處士徵、爲諫議大夫。皆想望風采。在職七年而不諫。韓愈作爭臣論譏之。至是判度支裴延齡譖贄。城率諸諫官、守闕論延齡姦佞、贄無罪。時朝夕且相延齡。城曰、脫以延齡爲相、當取白麻壞之。慟哭於庭。遂沮。城左遷國子司業、後又貶道州刺史。治民如治家。自書其考曰、撫字心勞、催科政拙。考下下。○十四年、淮西吳少誠

叛。○二十一年、上崩。在位二十七年。改元者三。曰建中・興元・貞元。初政清明者二歲。而盧杞用矣、叛亂相繼、末年姑息而已。太子立。是爲順宗皇帝。

【通釋】十一年、贄を忠州の別駕に貶す。贄、奉天より以來、力を宣ぶること最も多し。事に隨ひて論諫し、百奏を剴切にす。帝、言を盡すことを追仇す。又、譖せらる。故に貶せらる。初め夏縣の陽城、處士を以て徵されて、諫議大夫と爲る。皆風采を想望す。職に在ること七年にして諫めず。韓愈、爭臣論を作りて之を譏る。是に至つて判度支裴延齡、贄を譖す。城、諸諫官を率ゐて、闕を守りて、延齡の姦佞、贄の無罪を論ず。時に朝夕に且に延齡を相とせんとす。城曰く、「脫し延齡を以て相と爲さば、當に白麻を取つて之を壞るべし」と。庭に慟哭す。遂に沮む。城、國子司業に左遷せられ、後又道州の刺史に貶せらる。民を治るは家を治るが如し。自ら其考を書して曰く、「撫字は心勞し、催科は政拙し。考は下の下」と。○二十一年、上崩ず。在位二十七年なり。改元するもの三。建中、興元、貞元と曰ふ。初め政清明なる者二歲なり。而して盧杞用ひられ、叛亂相繼ぎ、末年は姑息のみ。太子立つ。是を順宗皇帝となす。

十一年に陸贄を忠州の別駕といふ役に貶された。陸贄は帝に從つて奉天に行つて以來、帝の爲に力を盡した事は並大抵ではなかつた。事件のある毎に必ず諫言し、上奏はすべて遠慮なく適切と

韓愈像

思ふ所を述べた。然るに帝は精一杯盡した諫言を後より考へて却つて仇の如く思はれて居たところに、又一方では裴延齡が贄を讒言した。その爲に今忠州に貶せられたのである。初め夏縣の人陽城が浪人から召し抱へられて諫議大夫といふ天子を諫める官についた。天下の人は皆陽城の人物を望んで、(必ず諫官の職責を全うするだらうと期待したが)、在職七年になつても未だ朝に立つて諫めたことがなかつた。そこでかの有名な韓愈が爭臣論といふ文を作つて陽城を譏つた。恰も此の時判度支といふ職の裴延齡が陸贄を讒言した。すると七年間沈默してゐた陽城が諫官達を率ゐて朝廷に立て籠つて、裴延齡の佞姦を論じ、陸贄の無罪を辯じた。時に朝廷では近々延齡を宰相にしようとする噂があつた。陽城は「若し延齡を宰相とする事あらば、任命の詔書を引き破らうといつて、朝廷に立つ

て號き叫んだので、其のまゝに立消えになつてしまつた。かくて陽城は延齡を排斥した爲に國子司業といふ役におとされた。其の後又道州（湖南）の刺史に貶された。陽城が民を治めるには、一家を治める樣に民を愛撫した。併し自分では州の行政の成績を報告するに「州民を愛撫するには一方ならず心を勞してゐるが、租稅の督促は至つて下手である。で、自分の政績考査は九階級中の下の下に位するものだ」と書いた。○貞元十四年に、淮西の節度使吳少誠が叛した。○二十一年に德宗皇帝は崩ぜられた。在位二十七年であつた。此の間年號の改まること三度、建中、興元、貞元といふ。初め卽位後二年間は政が立派に行はれたが、盧杞が用ひられて宰相となつてから、節度使等の叛亂が次々起つて、晩年にはほんの其場のがれの政治であつた。

語釋　自奉天以來（德宗が奉天に遷れられた時以來）　○隨事論諫（事ある每に寔々と諫める。）　○剴切（適切に同じ。きつぱり適當なこと。）　○百奏（百事の奏聞。）
○追仇（後からカタキに思ふこと。）　○處士（有識者で官に仕へず野にある者。）　○韓愈（字は退之、鄧州南陽の人、七歲、書を讀んで、日に數千言を記憶したといふ。長ずるに及んで博く六經百家の學に通ず。德宗の時に監察御史となつたが、朝廷に意見書を奉つて陽山の令に貶せられた。憲宗の朝には佛骨を論じて忌諱に觸れ、潮州の刺史に貶せられたことは、後段に見える。後に朝に還り、吏部侍郎となり、卒して禮部尚書を贈られ、謚して文公といひ、世に稱して昌黎先生といふ。愈は宏才卓識を以て力を古文に用ひ、東漢魏晉以來流行した四六駢儷文の弊習を一洗して、古文を唱道した。唐の文章をして周漢に追躡せしめたのは、實に愈の功である。又孟子の風を慕ひ、異端（儒教に反する思想）を排斥して儒學を擁護するに努めた。後世その功を賛して孟子に配するのはこの故である。唐宋八大家の隨一として、柳宗元と共に唐代の二大文豪である。その文は八家文及び文章軌範等に載せられ、全集としては昌黎文集がある。）　○爭臣論（爭は諍で諫諍の義。爭臣は諫官のことをいふ。その文は八家文及び正文章軌範にある。）　○脫（モシと訓む。）　○白麻

順宗皇帝
柳宗元
名士死交

[illegible]書のことをいふ。[illegible]は[illegible]を漉いて造つた白紙の意で詔書の用紙である。唐代には詔書は中書省にて書記した。初め中書省では黄白二麻紙を用ひて詔敕を書いたが、其後翰林院では專ら白麻紙を用ひ、中書省では黄麻紙を用ひたといふ。) ○考(考功と云つて官吏の執務振り功勞の有無、大小等を調査判定すること。考功の法は上中下各三等の九階級に區別する。こゝは州から考功ノ調査書を朝廷に差出す時に、陽城自らその等級を署して下下級の下の下としたといふのである。) ○撫字(撫は愛撫、字は、いつくしむ。二字で可愛がること。) ○催科(科は等級である。等級によつてそれぞれ定められた租税を催促すること。) ○諫議大夫(天子の身に過失あるとき之を諫め、其他國家の利害得失につき詞議する役を諫官といひ、其の長を諫議大夫といふ。) ○國子司業(一國の貴族の子弟を國子といふ。その國子及び其他の俊才を教育する學校を國子監といふ、我が學習院の如く、又大學の如きもの。國子司業はその教授をいふ、又國子博士とも云つた) ○姑息(シバラクヤスムの義で、一時の安きを計ること。ほんの其の場逃れの處置をすること。) ○別駕(州の刺史の助役である。刺史が州を巡視する時に隨ひ行く官で、別に一乘の車に乘る。故に別駕といふ。)

順宗皇帝、名誦、方爲太子時、有善書者王伾、善棋者王叔文。俱出入娛侍。因言、某可相。某可將。幸異日用之。密結學士韋執誼、及朝士有名而求速進者。陸淳・呂溫・李景儉・韓曄・韓泰・陳諫・柳宗元・劉禹錫等、定爲死交。日與游處、蹤跡詭秘、莫有知其端倪者。德宗崩。太子卽位。先是有風疾失音。五閱月矣。伾・叔文等用事。○追陸贄・陽城赴京。未至卒。○上在位、改元曰永貞。僅八月、自稱太上皇、傳位於太子。是爲憲宗章武皇帝。

順宗皇帝、名は誦、太子たりし時に方り、書を善くする者王伾、棋を善くする者王叔文有り。俱に出入して侍す。因つて言ふ「某は相とすべし。某は將とすべし」と。異日之を用ひんことを諾ふ。密かに翰林學士韋執誼及び朝士の有名にして速進を求むる者に結ぶ。陸淳・呂溫・李景儉・韓曄・韓泰・陳諫・柳宗元・劉禹錫等、定めて死交を爲し、日に與に游處し、蹤跡詭秘にして、其の端倪を知る者有る莫し。德宗崩ず。太子位に卽く。是より先、風疾ありて音を失ふ。五たび月を閲す。伾、叔文等事を用ふ。○陸贄・陽城を追うて京に赴かしむ。未だ至らずして卒す。○上、位に在り、改元して永貞と曰ふ。僅かに八月、自ら太上皇と稱し、位を太子に傳ふ。是を憲宗章武皇帝と爲す。

柳宗元像

順宗皇帝は名は誦といつて、皇太子で有つた時に、書を善く書く王伾と、棊を善く打つ王叔文と二人あつて、いづれも東宮御所に出入して娛樂を事として太子の左右について居た。そして

「何某を宰相とすればよい。何某を將とすればよい」といつて、後日之を用ひられんことを希望した。内々翰林學士の韋執誼や、又朝廷の士で相當世間に名の知られ、而も早く出世を望む覇氣ある人物と交を結んだ。一方陸淳外七人は固く約束を定めて、死生を共にする交を結んだ。そして日々いつしよに遊び暮し、其の跡形を成るべく詐り秘したので、何處で何を爲すかを窺ひ知る者がなかつた。德宗皇帝崩ぜられたので、皇太子が即位された。順宗帝は即位前から風をひいて、その爲に聲の出ない事が五ケ月も續いたので、王伾や王叔文等が專ら政事を行つた。○陸贄や陽城の功を追慕して京に召し出されたが、未だ都に行き着かないで死んだ。○順宗は在位中年號を改めて永貞と稱したが、僅かに八ケ月にして讓位して、太上皇と稱せられた。かくて位を太子に傳へた。これが憲宗章武皇帝である。

語釋 棋（碁のこと。）○娛侍（遊び相手たり勤める。）○幸（コヒネガフと訓む。）○死交（死生を共にする交。刎頸の交といふに同じ。）○端倪（端は山頂、倪は水邊。轉じて物事の本末始終の意。莫レ知二端倪一とは本末始終のわからぬことで、即ち伺ひ知ることの出來ぬこと。）○蹤跡（人の行ひのあとかた。行爲の實跡。）○詭秘（詭はイツハル。秘はカクス。實狀を詐はつて秘密にすること。何事を行つたか分らぬやうにすること。）○追（追召。罪の無いことが明かになつて、都に召し還へさるること。）○柳宗元（字は子厚、河東の人、進士に及第し、博學宏詞の科に中り、德宗の時に監察御史となつたが、順宗の時に王叔文の黨に坐して永州の司馬に貶せられた。有名なる永州八記はその時の文である。終に柳州の刺史に徙され、そこで死んだ。年四十七。宗元、不遇にして政治上に功を成すを得ず、却つて山水の間に放良して、文名一世に高く、世に韓柳と並び稱せらる。柳河東また柳柳州といひ　その著は柳河東集四十七卷ある。又八家文及び文章軌範にも載つてゐる。韓愈の柳子厚

憲宗皇帝

討反者斬之

（[illegible]路」は、宗元の面目を尋へて最も鮮やかなるもの、文章軌範にあるから一讀されたい。）

憲宗皇帝、名純、年二十八爲太子監國。尋卽位。貶王伾・王叔文。伾病死。叔文賜死。其黨皆遠貶。○元和元年、西川節度使劉闢反。同平章事杜黃裳、薦高崇文討之。○夏州留後楊惠琳、拒朝命。詔討之。爲兵馬使所斬。○高崇文克成都、擒劉闢、送京師斬之。○二年鎭海節度使李錡反。詔討之。兵馬使執錡、送京師斬之。

【訓讀】憲宗皇帝、名は純、年二十八にして太子と爲りて監國たり。尋いで位に卽く。王伾・王叔文を貶す。伾は病んで死す。叔文には死を賜ふ。其の黨皆遠く貶せらる。○元和元年、西川の節度使劉闢反す。同平章事杜黃裳、高崇文を薦めて之を討たしむ。○夏州の留後楊惠琳、朝命を拒む。詔して之を討つ。兵馬使の斬る所と爲る。○高崇文、成都に克つて、劉闢を擒にし、京師に送りて之を斬る。○二年鎭海の節度使李錡反す。詔して之を討つ。兵馬使、錡を執へ、京師に送りて之を斬る。

【通釋】憲宗皇帝は名は純。二十八歳で皇太子となつて國政を監督し、それから引き續いて帝位に卽いた。まづ王伾（を開州の司馬に貶し）、王叔文を（渝州の司戶に）貶した。伾は病を起して死に、叔文は死を賜つて自殺した。其の一派の人々は皆遠國に貶せられた。（韋執誼は崖州の司馬に、韓曄は饒州の刺史に、韓泰は撫州の刺史に、陳諫は臺州の司馬に、柳宗元は柳州の刺史に、劉禹錫は連州の刺史に貶せられた）。（以下、文意明かであるから通釋を略す。なほ語釋を參照されたい）。

【語釋】監國（國政を監督する。それは天子又は諸侯の太子の任なるによつて太子の義にも用ひる。）○西川（今の四川省で蜀の地方。下文「成都」とあるのは卽ち蜀の首都である。）○夏州留後（夏州は州名。今陝西橫山縣西。留後は留守と同じく節度使の不在を守る意で、唐代藩鎭の官名である。）○爲兵馬使所斬（兵馬使は、夏州の兵馬使、名は張承金といふ者。下文、鎭海の兵馬使は張子良・李奉仙等を指す。）○鎭海（浙江省會稽道。）

○二年、沙陀朱邪盡忠、與其子執宜來降。沙陀勁勇冠諸胡。吐蕃每戰以爲前鋒。後疑其貳於回鶻、欲遷之河外。懼而歸唐。置之靈州、用以征討皆捷。○自杜黃裳以後、相繼爲相者、武元衡・李吉甫・裴垍・李藩・李絳、皆賢相。垍嘗爲李吉甫疏人才三十餘、數月用盡。翕然稱爲得人。垍器局峻整。人

人不敢干以私。

【原文】三年沙陀の朱邪盡忠・其子執宜と來り降る。沙陀、勁勇、諸胡に冠たり。吐蕃戰ふ每に以て前鋒と爲す。後其の回鶻に貳あるを疑ひ、之を河外に遷さんと欲す。懼れて唐に歸す。之を靈州に置き、用ひて以て征討す。皆捷つ。杜黃裳より以後、相繼で相と爲る者、武元衡・李吉甫・裴垍・李藩・李絳、皆賢相なり。垍嘗て李吉甫の爲めに人才を疏すること三十餘、數月に用ひ盡す。翕然として稱して人を得たりと爲す。垍、器局峻整なり。人々敢て干すに私を以てせず。

【通釋】元和三年に沙陀（西突厥の一部が獨立したもの）の酋長朱邪盡忠は、其子の執宜と共に唐に降伏して來た。元來沙陀は其の勁きこと各種の夷中第一であつた。それで吐蕃が他國と戰ふ時には常に沙陀を前鋒としてゐた。其後吐蕃は沙陀が回鶻に內通してゐはしないかと疑つて、之を河外の地に遷さうとした。それを懼れて今唐に歸伏したのである。唐は朱邪父子を靈州に置き、（子の執宜を兵馬使とした）。後兵事ある每に之を用ひて征討したが皆勝利を得た。（）杜黃裳から後、相繼いで宰相と爲つた者は武元衡・李吉甫・裴垍・李藩・李絳などであつた。皆賢相である。垍が或る時李吉甫の爲に

才能ある人物を箇條書にして三十餘人も書き出して置いたが、吉甫は數月中に其の人物を用ひ盡した。それらの人々は皆人傑であつたので、世人は口を揃へて善き人物を得たと言ひはやした。裴垍は氣象峻嚴で行正整であつた。それで人々は決して私事を垍に求めようとはしなかつた。

【語釋】沙陀（西突厥の別種。天山南路の蒲類海の東に部落し、突厥が西走するや回紇に屬し、後に吐蕃に從ひ、兵馬強壯を以て知られた。後唐の李克用はこゝから起つたのである。）○諸胡（多くのえびす。吐蕃・回紇・奚・契丹・沙陀の類。）○疏二人才一（人物を箇條書に書き列ねること。帳面に人物の名を書きしるしたのである。）○翕然（翕は合ふ意。衆口を同くして相合すること。一致合同すること。）○器局峻整（器局は才器。峻整は行の正しいこと。嚴肅にして一歩も忽せにせぬこと。氣象嚴くして凛乎たるをいふ。）○不三敢干以二私（干はヲカスと訓ずるが、求むる意である。わたくしごとを以て頼みにこないこと。）

藩營爲二給事中一。制敕有下不レ可者上、即批レ之。吏請三更連二素紙一。藩曰、如レ此則狀也。何名二批敕一。垍薦レ之爲レ相。知無レ不レ言。絳鯁直。吉甫善逢迎。絳每與爭二論於上前一。上多直レ絳。時在朝如二崔郡白居易等一、皆讜讜直。元和之世、朝廷清明以レ此。○七年、魏博兵馬使田興、請レ吏奉貢。詔以爲二節度使一。遣二裴度一宣慰。賜二錢百五十萬緡一、犒二其軍一。六州百姓、皆給復一年。軍受レ賜歡聲如レ雷。成德・兗・鄆、

諸鎭使者見之相顧失色。歎曰、倔强者果何益乎。賜興名弘正。

【訓讀】藩嘗つて給事中と爲る。制敕不可なる者有れば即ち之を批す。吏更に素紙を連ねんと請ふ。藩曰く、「此の如くんば則ち狀なり。何ぞ批敕と名けん」と。垍之を薦めて相と爲す。知つて言はざるなし。絳、鯁直なり。吉甫善く逢迎す。絳與に上の前に爭論する每に上多く絳を直とす。時に在朝崔郡・白居易等の如き、皆謇謇として直し。元和の世、朝廷淸明なること此を以てす。○七年、魏博の兵馬使田興、吏を請ひて奉貢す。詔して以て節度使と爲す。裴度を遣りて宣慰せしめ、錢百五十萬緡を賜ひて其の軍を犒ふ。六州の百姓皆給復すること一年なり。軍賜を受けて歡聲雷の如し。成德・兗・鄆の諸鎭の使者之を見て相顧みて色を失ふ。歎じて曰く、「倔强なる者果して何の益あらんや」と。興に名を弘正と賜ふ。

【通釋】李藩は以前、給事中と爲つた時、詔敕によからぬ所が有ると直ぐに批評して之をその詔書のあとに書き付けた。係の役人が批評の詞は他の白紙に書いて詔書に貼り付けて欲しいと請うた。すると藩がいふには、さやうにすれば、それは此方の見込書といふものになる。どうして批敕（勅旨の

可否を判定する詞）と名づけられようぞ。批敕といふ以上必ずかうしなければならぬ」と。裴垍がこの李藩を推薦して宰相とした。藩は宰相となつて心付いた事は一々申し述べた。李絳は剛直正義の士であつた。李吉甫は其の反對で、よく天子の意を迎へて機嫌を取る人であつた。それで絳と吉甫とが天子の面前で是非を爭論する毎に、天子は李絳を正直だとせられた。その當時、朝廷にある臣で、崔群・白居易などは、皆剛直正義の人であつた。元和時代に朝廷に於て明るい政治の行はれたのは實に之が爲である。○元和七年に魏博軍の兵馬使の田興が、役人の出張を請ひ且つ貢物を獻上した。それで帝は詔を下して節度使に任命された。尚裴度といふ役人を遣はして魏博に行かしめ、朝命を傳へて慰勞させ、更に錢百五十萬緡を賜うて、其の所屬の軍隊を慰勞させられた。そして（魏・博・貝・衛・澶・相の）六州の人民には一ケ年間の税賦を免除された。軍隊では天子の賜を受けて歡ぶ聲は恰も百雷の轟くやうであつた。成德軍及兗・鄆二州から魏博に來て居た使者が此の有樣を見て互に顏を見合はせて驚いて言ふには、「徒らに強情を張つて朝廷に反抗しても何の益あらう」（我々の國も早く服從したがよい）と言つて歎息した。朝廷では田興には名を弘正と賜つた。

〔語釋〕給事中（門下省に屬し、天子の左右に供奉し、この省の事を掌る官。侍從。宮内官。）○批（批は、よしあしを判ずること。批敕のよしあしの批評の言葉を、すぐに其あとに書きつけること。）○狀（見込書、報告書といふものゝ類

吳元濟侵ニ掠東畿一

伐ニ武元衡一 傷ニ裴度一

いはゆる書狀と云つて手紙の意ではない。上へ差出す書面の一種である。）　○批勅（勅に批する意で、天子の勅の可否を判定して奏上する詞をいふ。）　○素紙（白紙のこと。こゝは勅へ直ぐに書き入れるは、餘り少體だから、別に白紙を勅書の後へ付けてそれに書かれたらよからうといふ意である。）　○鯁直（鯁は魚の骨が喉にさゝること。骨鯁といふ。正直の臣が君主の缺點を直諫するのは、君主に取つては魚骨の喉に立つたやうに感ぜられる所から、正直にして直諫するを鯁直といふ。コハバル意味の強とは違ふ。）　○逢迎（先方の意に迎へて氣に障らぬやうにすること。）　○白居易（字は樂天、有名なる詩人である。七歳の頃から聲律を諳識し、敏悟、人に過したといふ。諸官を經て刑部尚書に至る。香山居士、又は醉吟先生と號し、白氏文集七十五卷の著がある。）　○讜議（直言すること。剛直正義を以て進むこと。）　○給復一年（給は給與。復は免除。一年の税金を免除すること。）　○犒（ネギラフと訓む。物質を與へて將士の勞を慰むること。）　○倔強（剛情なること。）　○宣慰（天子の思召を宣べて慰問すること。）

○初、彰義節度使吳少誠死。弟少陽自領ニ軍府一。少陽陰養ニ亡命一。少陽死。子元濟自領ニ軍府一、縱レ兵侵ニ掠及東畿一。詔發ニ十六道兵一討レ之。平盧節度使李師道請レ赦ニ元濟一。不レ許。裴度宣ニ慰淮西一、行營還言、淮西可ニ決取一。上悉以ニ兵事一委ニ同平章事武元衡一。師道素養ニ刺客姦人一。客請、密往刺ニ元衡一、則佗相必爭勸ニ天子罷一レ兵矣。元衡入朝。賊暗射ニ殺之一。又擊レ度傷レ首。上怒。討レ賊愈急。

初め彰義の節度使吳少誠死す。弟少陽自ら軍府を領す。少陽陰かに亡命を養ふ。少陽死す。

于元濟自ら軍府を領す。兵を縱つて侵掠して東畿に及ぶ。詔して十六道の兵を發して之を討ず。平盧の節度使李師道、元濟を赦さんと請ふ。許さず。裴度淮西の行營を宣慰し、還りて言ふ、「淮西決して取るべし」と。上悉く兵事を以て同平章事武元衡に委す。師道素より刺客姦人を養ふ。客請ふ、「密かに往きて元衡を刺さば則ち佗の相は必ず爭うて天子に勸めて兵を罷めん」と。元衡入朝す。賊暗に之を射殺す。又度を撃つて首に傷く。上怒る。賊を討ずる愈々急なり。

通釋 これよりさき彰義の節度使の吳少誠が戰死して弟の少陽が自ら節度使の役所を管領した。少陽は內々天下の浪人者を養つてゐた。さて又少陽が死んで、子の元濟が自ら節度使の幕府を管領した。元濟は兵を四方に繰り出して土地を侵略し、物資を掠奪し、進んで東都畿內地方にまで及んだ。そこで帝は大に怒つて十六道の兵を發して討伐された。平盧の節度使の李師道が元濟をお赦しありたいと帝に願ひ出たが、許されなかつた。御史中丞の裴度が淮西の陣營に出張して、朝命を宣べ傳へ、軍隊を慰勞し、還つて復命して言ふには「淮西地方は必ず取ることが出來ます」と言上した。帝は軍事上の事をすべて同平章事の武元衡に委せられた。李師道は平素から刺客や姦人を食客として養つて置いたが、今度その中の一人が請うていふには、「密かに往つて武元衡を刺したならば其の他の宰相は

李愬擒二賊將一
雪夜七十里
元濟伏レ誅

争うて天子に勸めて兵を罷めるであらう」と。師道は同意して刺客を遣はした。これとは知らず、元衡は入朝した。刺客は隙を覘うて之を射殺した。又裴度をも撃つて其の首に傷つけた。天子は大に怒つて賊を討伐せよと焦き立てられた。

【語釋】亡命（亡はニゲルと訓じ、逃亡の義。命は名。己れの名籍を脱して逃亡する意。出奔。かけおち。前に出づ。）〇佗相（佗は他に同じ。他の大臣達。）

以度同平章事。上曰、吾倚度一人足破賊。命度兼彰義節度使、充淮西宣慰招討使、督諸軍進討。唐鄧節度使李愬、先擒賊將丁士良・吳秀琳・李祐、釋而用之。用祐計、雪夜七十里、引兵入蔡州城。擊鵝鴨池、混軍聲。雞鳴入據元濟之外宅。元濟登牙城拒戰。已而就擒。檻送京師斬之。自叛及誅、凡用兵二歲。時元和十二年也。

【通釋】度を以て同平章事とす。上曰く、「吾れ度一人に倚りて賊を破るに足れり」と。度に命じて彰義節度使を兼ねしめ、淮西の宣慰招討使に充て、諸軍を督して進討せしむ。唐鄧の節度使李愬、先づ賊

將丁士良・吳秀琳・李祐を擒にす。釋して之を用ふ。祐が計を用ひて、雪夜七十里、兵を引いて蔡州城に入る。鵝鴨池を擊つて軍聲を混ず。鷄鳴に入りて元濟の外宅に據る。元濟、牙城に登つて拒戰す。已にして擒に就く。檻して京師に送りて之を斬る。叛してより誅に及ぶまで、凡そ兵を用ふること三歲。時に元和十二年なり。

【通釋】斯くて帝は裴度を同平章事に任じて言はれるには「吾れ裴度一人に倚賴して十分賊を破つて見せる」と。かくて裴度に命じて彰義の節度使を兼務させ、淮西の宣慰招討使に充て、諸軍を統率させた。唐・鄧二州の節度使の李愬が眞先に賊將丁士良・吳秀琳・李祐を擒にしたが、わざと釋して却つて之を利用した。祐の計を用ひて、或る大雪の夜に七十里を强行軍して蔡州城に入つた。鵝鳥や鴨の下つて居る池水を擊つて、之を騷がせて人馬の音を紛らし、敵をして油斷させて置いて、鷄の鳴く早朝、元濟の城外の宅に攻め入つた。元濟は本丸に登つて拒ぎ戰つたが、間もなく擒になつた。そこで罪人を入れる車に載せて京師に護送し、之を斬つた。元濟の叛してから誅せられるまで、軍をしたことが三年間であつた。時に元和十二年である。

【語釋】蔡州城（今の河南省汝南縣。）○外宅（城外にある家屋。）○牙城（本丸のこと。城の中心たる最も重要な部分。牙は爪牙の意で、將軍は獸に於ける爪牙の如く國を防護するといふ義から、國の爪牙といふ。故に一城

の主將が居るところを牙城といふ。主將の旗を牙旗又は大牙といふの類である。）　○檻車（檻はヲリと訓じ、罪人を捕へおく所。檻車は罪人を入れる板圍を車付けた車。とうまるかご。）

【參考】玄宗は邊境の治安維持の爲めに、十節度使を置いたが、安史の亂あるに及んで、江南・江淮の地方にも之を置いて防禦に供へ、又、亂後には賊軍の降將をも節度使として、地方の動搖を抑へさせた。殊に代宗の世には、李寶臣・李懷仙・田承嗣の三降將を河北三鎭の節度使に任じたが、總てこれらの節度使は、數州の土地・人民・兵馬・財政の權を掌握して、一大勢力となり、遂に唐室衰亡の大原因をなすに至つた。いはゆる藩鎭（節度使）の跋扈これである。

就中、河北の三鎭（魏博・成德・盧龍）は、河南の淄青・淮西の二鎭と共に、互ひに黨援をなし、強大なる勢力を擁して、その土地人民を子孫に傳へて世襲となし、殆ど政府の命に從はず、むしろ朝廷の一大脅威となり、朝廷がこのために如何に惱まされたかは、本書玄宗以後の記事の示す通りである。

然るに今、憲宗、聰明果決の資を以て、西川・沈海・夏州・成德の諸藩鎭の叛せるを討ち、大いにその威力を伸べたので、各藩は漸く朝威を恐るゝに至つたが、獨り淮西の節度使吳元濟のみ之に從は

ず、遂に東都に侵入したので、憲宗は裴度に命じて之を討たしめ、淮西始めて平ぐるに至つたことは、本文の明記する所である。韓愈の「平淮西碑」や柳宗元の「献平淮夷雅表」(共に唐宋八家文に出づ)を讀めば、歴代の朝廷が六十餘年の久しき、いかに藩鎭の跋扈に苦しめられたか、從つて淮西平いで藩鎭が一時屏息したことを、如何に國民が喜んで天子の威德を頌賀したかゞ明かに知られる。

併しながら、それも長くは續かなかつた。穆宗の時に姑息な政治をしたものだから、河北の三鎭は再び朝命に反くに至つた。斯くて藩鎭の專横は、最後まで唐室を蝕ばんで、遂に之を倒すの有力なる一病因となつたのである。その中、最も專横の甚だしかつたのは、左の七鎭であつた。

跋扈の藩鎭

鎭名	軍名	治所	管領	節度使
魏博	天雄軍	魏州(河北)	七州	七姓十七人
成德	成德軍	恒州(鎭州)(河北)	六州	二姓十一人
盧龍	雄武軍	幽州(河北)	九州	十二姓廿一人
淄青	平盧軍	青州(山東)	十二州	四姓七人

宣武	宣武軍	汴州(河南)	四州	八姓九人
淮西	彰義軍	蔡州(河南)	三州	三姓六人
澤潞	昭義軍	潞州(山西)	五州	七姓十一人

(備考) 魏博・成德・盧龍の三鎮を河北(河朔)の三鎮と稱した。以上七鎮の中、宣武を除く外は、皆安祿山の故將を以て節度使としたものである。

かうした戰亂の打ちつゞいた結果は、當然、財政の窮乏を來さねばならなかつた。德宗の世に、楊炎の說に從つて兩稅法を制定し、盧杞の建議によつて間架稅や除陌錢法を實施して、國庫の增收を謀つたのも此の故であつた。けれども、これは大した成功を收むるに至らず、却つて藩鎮に利用されて、苛斂誅求の因をなした。かくて財政の窮乏も亦、到底、唐室衰亡の一大原因たるを免れなかつた。

淮西平

元和政非

淮西既平。上浸驕侈。先是二歲、已用李逢吉同平章事。至十三年、又用度支使皇甫鎛・鹽鐵使程异進羨餘。有寵竝同平章事。朝野駭愕。元和之政非矣。○十四年、迎鳳翔法門寺塔佛指骨至京師、留禁中三日、歷送諸寺。

王公士民、瞻奉捨施、惟恐不及。侍郎韓愈上表極諫。乞以投之水火。上大怒、貶潮州刺史。○平盧將執斬李師道。○裴度罷。○十五年上暴崩。上服金丹多躁。左右獲罪有死者。人人自危。宦者陳弘志弑逆。其黨諱之、但言藥發。在位十六年。改元者一、曰元和。太子立。是爲穆宗皇帝。

[illegible] 淮西既に平ぐ。上浸く驕侈なり。是より先き二歳、已に李逢吉を用ひて同平章事とす。十三年に至り、又度支使皇甫鎛を用ふ。鹽鐵使程异、羨餘を進む。寵有り。並に同平章事たり。朝野駭愕す。元和の政非なり。○十四年、鳳翔の法門寺の塔の佛指骨を迎へて京師に至らしめ、禁中に留むること三日、諸寺に歷送す。王公士民、瞻奉捨施し、惟及ばざらんを恐る。侍郎韓愈、上表して極諫す。以て之を水火に投ぜんと乞ふ。上大いに怒りて潮州の刺史に貶す。○平盧の將、李師道を執へ斬る。○裴度罷む。○十五年、上、暴かに崩ず。上、金丹を服して多躁なり。左右罪を獲て死する者有り。人人自ら危む。宦者陳弘志、弑逆す。其の黨之を諱みて但だ藥發すと言ふ。在位十六年。改元する者

一、元和と曰ふ。太子立つ。是を穆宗皇帝と爲す。

【通釋】淮西即ち彰義軍節度使の管内が平定された。そこで帝は最早や安心してだん〳〵と已惚れて奢侈をするやうになられた。是より二年前に李逢吉といふ者を用ひて同平章事となし、又十三年には度支使（會計を司る役）の皇甫鎛を用ひられた。鹽鐵使（鹽や鐵の販賣を掌る役）の程异といふ男が税金を餘計に取り立てゝ、それを度々天子に獻上した。それで特別の寵愛を受けてゐた。所が此の二人がともに同平章事となつたので、官民一同は大いに驚いた。元和の政事もこれからだん〳〵と惡くなつて來た。○元和十四年に、鳳翔府の法門寺といふ寺の塔中に安置してある釋迦の指の骨を迎へて長安の都に入れ、それを三日間宮中に留めて禮拜し、それから諸方の寺々に次々送つて開帳した。王公以下士民の老若男女は皆拜み奉つて財寶を寄進し、隨喜の涙をこぼして、我先きにと爭うて參詣した。此の有樣に刑部侍郎の韓愈が上書して手嚴しく諫め、佛骨を水火の中に投じて愚民の惑を解かれんことを乞うた。天子は大いに怒つて韓愈を潮州（南方廣東の地）の刺史に貶せられた。○平盧の將劉悟が節度使李師道を執へて之を斬つた。○裴度が宰相を罷められた。○十五年正月に天子が暴かに崩ぜられた。これは帝が金丹といふ藥を服用されてから氣狂ひじみて氣が荒くなり、左右の宦

宦官が往々罪もないのに御咎めを蒙つて殺される者があつて、人々は安き心もなかつたが、遂に宦者の陳弘志が帝を弑したのを、其の仲間の者共が之を忌み憚つて、唯藥の爲めに發つた病氣だと紛らしたのである。在位十六年、改元すること一度、元和といつた。皇太子が立たれて、是を穆宗皇帝といふ。

【語釋】上淩驕侈（淩は陵に同じ。ヤ、トモヤウ ヤクとも訓じ、だん〳〵の意。）○進二羨餘一（羨もアマリと訓じ、よけいの物をいふ。こゝは定つた年貢の外に餘計に取り立て、それを天子に差上げること。自分の働きを見せる爲めである。）○恐レ不レ及（これたといふことである。）○鳳翔（鳳翔は地名。今陝西鳳翔道に屬す。）○佛指骨（釋迦の指の骨。通鑑によると、是より先に功德使が「鳳翔の法門寺の塔に佛指骨がある、昔から傳へて三十年に一度開帳すれば豐年で四民安樂するといふ。來年は丁度開帳の時期に當るから、佛骨を迎へて供養したい」と申上げたといふことである。）○瞻奉（センホウ。瞻は仰ぎ見ること。奉はあがめ敬ふこと。と信仰して禮拜すること。をがみ敬ふこと。）○捨施（財物を喜捨して僧に施すこと。ほどこすこと。）○韓愈上表（この表は謂はゆる佛骨表と稱し、佛骨を宮中に迎へ入れたことの非なるを痛論したものである。八家文に出づ。）○潮州（今の廣東省潮安縣の地。）○服二金丹一多躁（これでも未だ足らぬかと心配すること。）○藥發（藥の中毒。藥にあたること。）（仙人の業を欣み、それが利き過ぎて癇癪を起すといふのである。金丹は金石を煉つた藥のこと。通衣こそれを飲むと長生不老であるといふ。多躁は氣がひじみて荒々しく落ちつきのないこと。）

【餘談】韓退之が佛骨表を上つて憲宗の怒に觸れ、潮州に左遷さるゝや、途、藍關（陝西藍田縣）に至りて雪に沮まれ、進退谷まる。時に姪孫（兄弟の孫）の湘、後れて至る。退之、感慨に堪へずして賦したといふ詩は、既に人口に膾炙してゐる。曰く、

一封朝奏九重天。夕貶潮州路八千。欲下爲二聖明一除中弊事上。
肯將二衰朽一惜二殘年一。雲橫二秦嶺一家何在。雪擁二藍關一馬不レ前。

穆宗皇帝
敬宗皇帝
李德裕獻二六箴一
宦官皆怨

知汝遠來應有意。好收吾骨瘴江邊。

穆宗皇帝、名恆、即位、改元曰長慶。四年崩、太子立。是爲敬宗皇帝。

敬宗皇帝、名湛、即位荒淫。嬖幸用事。○李德裕獻丹扆六箴。一曰宵衣。二曰正服。三曰罷獻。四曰納誨。五曰辨邪。六曰防微。○上遊戲無度。性復褊急。宦官動遭捶撻皆怨。夜獵還宮。酒酣爲宦者劉克明所弑。在位三年。改元者一。曰寶曆。江王立。是爲文宗皇帝。

〔通釋〕穆宗皇帝、名は恆、位に即き、改元して長慶と曰ふ。四年に崩ず。太子立つ。是を敬宗皇帝と爲す。敬宗皇帝、名は湛、位に即きて荒淫なり。嬖幸事を用ふ。○李德裕丹扆の六箴を獻ず。一に曰く宵衣。二に曰く正服。三に曰く罷獻。四に曰く納誨。五に曰く辨邪。六に曰く防微と。○上遊戲度無し。性復褊急なり。宦官動もすれば捶撻に遭ふ。皆怨む。夜獵して宮に還る。酒酣なるとき宦者劉克明の弑する所と爲る。在位三年。改元する者一。寶曆といふ。江王立つ。是を文宗皇帝と爲す。

【通釋】（敬宗皇帝の條は文意明瞭であるから略する。）
穆宗皇帝は名は湛といふ。位に即いても女色に溺れて政治を顧みず、爲にお氣に入りの家來達が國政を擅にした。○此の有様に慨嘆した浙西の觀察使の李德裕が丹扆の六箴を獻上した。（丹扆とは天子が諸侯に拜謁を賜る際、後に建てる衝立で、赤い絹を張り斧の形を刺繡したもの。六箴とは六個條の戒辭、即ち座右の銘である）。其の一は宵衣、（即ち朝早く起きて着物を着換へ政務を執るべしといふ意）。其の二は正服、（天子は服裝を正しくすべしとの戒）。其の三は罷獻、（天子は獻上物を廢すべしと、物を弄ぶの弊を諫めしもの）。其の四は納誨、（天子は臣下の忠言を受け入れよ）。其の五は辨邪、（天子は宜しく君子と小人とを辨別して、君子に親んで小人を遠けよとの意）。其の六は防微、（微行を愼しむべし、輕々しく外出すべからず）。といふのであつた。○帝は遊びに際限なく、性質も偏狹で短氣であつた。大奥に仕へる宦官どもは、動もするとぴし／＼鞭うたれて皆怨んでゐたが、或る夜獵をして宮中に還り、酒宴の最中、帝が室に入つて更衣をしようとして居られると、偶々殿上の燭が消えた。其の紛れに宦者の劉克明がはいつて來て帝を弑した。（下略）

【語釋】荒淫（色慾に耽つて節制のないこと。）○嬖幸（二字共に氣にいりの義、身分賤しくして主君に寵愛せられる臣。）○褊急（心が狹く、短氣で、嚴しいこと。）○捶撻（二字共にむちうつ義。）

文宗皇帝
劉蕡
無顏厚

文宗皇帝名涵。穆宗子也。爲宦者王守澄所立。後改名昂。太和二年、親策制擧人。宦者益横。建置天子、在其掌握。權出人主之右。無人敢言。賢良方正劉蕡對策極言之。考官皆歎服。而不敢取。中第者裴休・李郃・杜牧・崔愼由等二十二人、皆除官。物論囂然稱屈。郃曰、劉蕡下第、我輩登科。能無顏厚。上疏乞回所授官於蕡。不報。

[illegible]　文宗皇帝名は涵。穆宗の子なり。宦者王守澄の立つる所と爲る。後改めて昂と名づく。太和二年、親から策して人を制擧す。宦者益〻横なり。天子を建置する、其の掌握に在り。權、人主の右に出づ。人敢へて言ふもの無し。賢良方正劉蕡對策して之を極言す。考官皆歎服す。而も敢へて取らず。第に中る者は裴休・李郃・杜牧・崔愼由等二十二人、皆官に除す。物論囂然として屈と稱す。郃曰く、「劉蕡下第し、我輩登科す。能く顏厚なる無からんや」と。上疏して授くる所の官を蕡に回さんと乞ふ。報ぜず。

【通釋】文宗皇帝は名を涵といひ、穆宗の子である。宦者の王守澄に立てられて天子となつたが、後名を昂と改めた。太和二年に、帝自ら官吏登用試驗の受驗者を試驗した。當時宦官は憲宗帝の元和の末頃から益々横暴を極めて、天子を立てるも廢するも彼等の手の裡にあり、其の權力は遙かに天子を淩いでゐた。けれども誰あつて批難するものがない。然るに此の度賢良方正の試驗に應じた劉蕡が天子の問ひに對へて、宦者の横暴の禍を存分に言つた。試驗官は之を讀んで皆敬服したが、宦者の權威を畏れてそれを採用しなかつた。及第したものは裴休、李郃、杜牧、崔愼由等二十二人で皆夫々官を授けられた。世間は試驗の不公平を叫び、劉蕡は無理に落されたのだと批難の聲が高かつた。李郃は氣の毒に思ひ、「あの劉蕡が落第し、自分の如き者が及第した。どうしてあつかましく官について居れよう」と言つて、上書して自分に授けられた官を劉蕡に回はされんことを乞うたが、何の御沙汰もなかつた。

【語釋】制擧（天子自ら詔して受驗者を試驗すること。唐代の試驗制度は三種類あつた。中央の太學・國學出身の者を學生といひ、州縣の郷學の出身者を郷貢といひ、天子自ら詔する者を制擧といつた。制擧に應ずる者は特に非凡の學才ある者を選拔したのである。）○賢良方正（試驗の科目）○考官（成績考査する官。試驗官のこと。）○中レ第（試驗に及第すること。）○下第（落第すること。）○登科（或る試驗科目に及第する意。科目には秀才・明經・進士・明法・明字・明算・賢良方正・博學宏詞等がある。）○顏厚（面の皮の厚いこと、恥を知らぬこと。厚顏ともいふ。）

李訓
鄭注
王守澄

誅宦官

太和五年、上與同平章事宋申錫、謀誅宦官。不克。申錫貶死。○九年上與李訓・鄭注等、謀誅宦官。不克。注本宦者王守澄所引。訓本名仲言、又爲注所引、得見守澄。守澄薦於上。倜儻尙氣。有文辭口辯。多權數。上悅之。訓注揣知上意、數以微言動上。上意其可謀大事、以誠告之。訓注遂以誅宦官爲己任。訓既與注勢位俱盛、頗忌注。託以中外協勢、出注鎭鳳翔。進擢宦者仇士良、以分王守澄之權。訓同平章事、請除守澄。遣中使鴆殺之。

〔通釋〕太和五年、上、同平章事宋申錫と、宦官を誅せんと謀る。克はず。申錫貶せられて死す。○九年、上、李訓・鄭注等と宦官を誅せんと謀る。克はず。注は本、宦者王守澄の引く所なり。訓、本の名は仲言、又注の引く所となり、守澄を見るを得たり。守澄、上に薦む。倜儻にして氣を尙ぶ。文辭口辯有り。權數多し。上、之を悅ぶ。訓・注、上の意を揣り知つて、數、微言を以て上を動す。上、其の大事を謀るべきを意ふ。誠を以て之に告ぐ。訓・注遂に宦官を誅するを以て己が任と爲す。

訓既に注と勢位倶に盛なり。頗る注を忌む。託するに中外、勢を協はするを以てし、注を出して鳳翔を鎭せしむ。宦者仇士良を進め擢んでゝ、以て王守澄の權を分つ。訓、同平章事となり、守澄を除かんと請ふ。中使をして之を鴆殺せしむ。

【通釋】太和五年に帝が同平章事の宗申錫と、宦官を誅しようと謀られたが、謀が洩れて成功せず、申錫は却つて開州の司馬に貶せられて、其の地で死んだ。○九年に帝は再び李訓・鄭注等と宦官を誅しようと謀られたが、これも失敗に終つた。鄭注は本宦者の王守澄に引き立てられた者である。又李訓は前の名を仲言といつて、鄭注に引き立てられて宦者王守澄に見えることが出來た。そこで王守澄が李訓を天子に推薦したのである。李訓は大志を抱いて氣位が高かつた。そして又文章を善くし辯舌に長じ、權謀術數に秀でゝゐた。帝は非常に之を悦ばれた。そこで李訓と鄭注とが帝の宦官の橫暴に苦んで居らるゝことを推量して、折々宦官を誅すべしといふ意をほのめかして帝の心を動かした。帝はかねてから共に謀つて宦官を誅しようと思つてゐたので、心中を李訓と鄭注に告げた。そこで二人は爾來宦官を誅することを以て己等の責任とした。所が李訓は本、鄭注に引き立てられたにも拘らず、既に勢力地位が鄭注と同等にまで進んで來たのでだん／＼と恩人たる鄭注を忌み嫌ふ樣

甘露之變
石榴有甘露

になつた。かくて李訓は内外から力を合はせて宦官を誅しようと口實を設けて、鄭注を追ひ出して鳳翔府の節度使にした。更に又宦官の仇士良を抜き出して、王守澄の權力を分ち、自ら同平章事となつて王守澄を除かんことを帝に乞うた。そこで王守澄の第に勅使を遣はして之を毒殺させた。

語釋 倜儻(音テキタウ。志大きくてコセ／＼しないこと。)　○中使(中は禁中、宮中から御使、勅使。)　○權數(權謀術數の略。策略を用ひて人をあざむくこと。ペテンにかける。)　○微言(それとなしに言ふこと。)　○鴆殺(鴆といふ鳥の羽を酒に漬し、之れを飲めばたちどころに死ぬといふ恐しき毒薬である。)

注始與訓謀、至鎭、遣壯士數百人、護守澄葬。仍請、令內臣盡送、然後殺之無遺類。訓心以爲、如此則功專歸注。乃謀先發。令人奏金吾廳事後石榴有甘露。宰相帥百官拜賀。後勸上往觀。上令宰相先往視。訓陽言非眞。上顧仇士良、帥諸宦官往視。士良等既至。見風吹幕起、執兵者無數、驚走告變。訓呼金吾衛士等上殿。僅擊死傷宦者十餘人。知事不濟而走。士良等命神策兵、殺金吾吏卒、執宰相王涯・賈餗・舒元輿等、誣以謀反、腰斬之。訓

之謀惟元輿知之。他相實不知也。自是天下事皆決於北司、宰相行文書而已。李訓爲人所殺、傳首。鄭注亦爲鳳翔監軍宦者所殺。

【通解】注始め訓と謀りて鎭に至る。壯士數百を遣はして入つて守澄の葬を護らしむ。仍つて請ふ、「内臣をして盡く送らしめ、然る後之を殺さば遺類無けん」と。訓、心に以爲らく、「此の如くならば則ち功は專ら注に歸せん」と。乃ち先づ發せんと謀る。人をして金吾廳事の後の石榴に甘露有りと奏せしむ。宰相百官を帥ゐて拜賀す。後、上に勸めて往いて觀しむ。上、宰相をして先づ往いて視しむ。訓陽りて眞に非ずと言ふ。上、仇士良を顧みて、諸宦官を率ゐて往いて視しむ。士良等既に至る。風、幕を吹き起し、兵を執る者無數なるを見る。驚き走りて變を告ぐ。訓、金吾衞士等を呼んで殿に上らしむ。僅かに擊ちて宦者十數人を死傷す。事の濟らざるを知つて走る。士良等、神策兵に命じて、金吾吏卒を殺し、宰相王涯・賈餗・舒元輿等を執へて、誣ふるに謀反を以てし、之を腰斬す。訓の謀、惟元輿のみ之を知る。他の相は實に知らざる也。是より天下の事皆北司に決し、宰相は文書を行ふのみ。李訓は人の殺す所となり、首を傳ふ。鄭注も亦鳳翔の監軍の宦者の殺す所と爲る。

【通釋】鄭注は始め李訓とよく相談してから鳳翔府の役所に行つた。その相談とは、（守澄を殺すことに成功したら、）鄭注は數百人の兵士を宮中に入れて、守澄の葬式を護衛させ、一方李訓は帝に請うて、宦官を悉く出して葬式を送らせ、その際に之を殺せば全部殺し盡されようといふのであつた。ところが李訓が心私に思ふには、このやうにすれば其の功は專ら鄭注に歸するであらうと。そこで己先づ單獨で事を謀らうとした。そして人をやつて、「金吾廳の後園にある石榴に甘露があります」と奏上させた。そこで宰相は百官を帥ゐて參內し、聖德の致すところ御目出度うございますと御祝ひを申し上げた。その後で李訓が、帝に、往つて御覽になるやうにと勸めたが、天子は先づ宰相をして往いて視しめられた。李訓も宰相の一人として往つたが、偽つて「ほんとうの甘露ではありません」と奏上した。（宦官をおびき出し、伏兵を置いて一舉に誅しようとの計略の爲に態と偽つて眞物に非ずと奏上したのであつた）そこで帝は仇士良を顧みて諸宦官を率ゐて往つて見て來いと仰せられた。士良等がそこまで行くと、偶然風が吹いて幕を吹き上げ、後に武裝した無數の兵士が居るのが見えた。そこで仇士良始め宦官一同は大いに驚いて逃げ走つて變を告げた。李訓は金吾廳の衛士等を呼んで殿上に昇らせ、宦官を擊たせた。然し僅かに宦者十餘人を殺したに過ぎなかつた。李訓は計略が失

敗に終つたのを見て出奔した。仇士良等は左右の神策兵に命じて、金吾衛の吏卒を殺し、宰相の王涯、賈餗、舒元輿等を執へ、強ひて謀反の名を負はせて腰斬の重刑に處した。訓の計略は唯だ元輿のみが知り、他の宰相は眞に知らず、全く不慮の難に遭つたわけである。是より後は天下の大事は皆宦官の詰所なる北司に於て決し、政治の實權は宦官に握られ、宰相は唯だ文書を取扱ふ事務員の如き者になつて了つた。出奔した李訓は人に殺され、其の首が逐り傳へられた。鄭注も亦鳳翔府の軍事を監督する宦者（張仲淸）に殺された。

語釋 内臣（宦官をいふ。） ○無遺類（一人も殘さず滅し盡すこと。） ○金吾廳（金吾の詰めて居る役所。金吾の名は漢代から起る。唐代にあつては武官十六衛の一で左右金吾衛といつた。宮中及び京城を晝夜巡警し、不逞の徒を取締る役。） ○甘露（甘い味の露。天下太平のしるしに降るものといはれてゐる。故に百官が拜賀したのである。これによつて此の事變を「甘露之變」といふ。） ○陽言（陽は佯で、いつはつて言ふ。） ○神策兵（唐代六軍の一、左右羽林軍衛で、禁兵を統督する職。羽林の名も亦漢代から起る。唐の德宗の代から左右の羽林を神策兵といつた。） ○北司（宦官の役所、又宦官をいふ。唐書に「宦人兵を握り、制を海内に横にす。號して北司といふ」とある。又宦官の役所を北寺ともいつた。之に對して宰相の政務を執る役所を南司と稱した。）

○開成三年、司徒中書令晉公裴度卒。度自憲宗時罷相。後無意世事。治園地、有綠野堂・子午橋等別墅之勝。與詩人觴詠自娛。穆宗・敬宗時、皆嘗

裴度威望達二四夷一

一入輔政。至上之世、亦嘗平章軍國重事。與時浮沈而已。然四朝將相威望遠達四夷。四夷見唐使、輒問度安否。以身繫國家輕重、如郭子儀者二十餘年。

【譯】開成三年、司徒中書令晉公裴度卒す。度、憲宗の時より相を罷む。後世事に意なし。園地を治め、綠野堂・子午橋等の別墅の勝あり。詩人と觴詠して自ら娛しむ。穆宗・敬宗の時、皆嘗て一たび入りて政を輔く。上の世に至つて亦嘗て平章軍國重事たり。時と浮沈するのみ。然れども四朝の將相威望遠く四夷に達す。四夷、唐の使を見れば、輒ち度の安否を問ふ。身を以て國家の輕重に繫ぐ。郭子儀の如きもの、二十餘年なり。

【通釋】開成三年に、司徒、中書令の晉公裴度が卒した。度は憲宗の時に宰相を罷め、其の後は世上の事を全く斷念し、餘年を安樂に送らうとして、庭園を修理し、綠野堂とか子午橋とかいふ景勝の別莊を拵へ、詩人を集めて盃をあげ歌を咏じてたのしみとした。穆宗帝、敬宗帝の時、いづれも、一たび朝廷に入つて宰相となり政事を輔けた。今上帝即ち文宗の時にも亦嘗て平章軍重國事といふ職を務

めたが、唯時勢のなりゆきにまかすのみでこれといふ仕事もしなかつた。けれども憲宗・穆宗・敬宗・文宗の四代に仕へ或は相となり或は將となり、其威光名望は四方の夷までに響き渡つた。夷では唐から使者が往くと、いつも裴度の起居安否を問うた。裴度の一擧一動は國家の浮沈に重大な關係を及ぼしたのであつた。（前代肅宗代宗の世に國家の柱石として四夷を威服させた）郭子儀といふ名宰相があつたが、今裴度は郭子儀の第二世として、二十餘年の久しい間光つてゐたのである。

語釋 別墅（別莊のこと。墅は田畝の中にある收穫物を入れ置く小屋、轉じて別莊のことに用ひる。）○觴詠（觴は杯である。詠は詩歌を吟詠する。酒宴を開いて詩歌を吟詠すること。）○與レ時浮沈（時世に從つてそれに逆はず、或は榮え或は衰へること。）○司徒中書令晉公（司徒と中書令とは官名。晉公は晉國の公爵。）

○五年、上崩。上卽位之初、勵レ精求レ治、去レ奢從レ儉、中外翕然、謂二太平可一レ冀。然制二於宦寺一、竟不レ能レ有レ爲。嘗問二宰相一、何時太平。牛僧孺答以二太平無一レ象。末年嘗問二近臣一、朕何二如周赧・漢獻一。對者憮然。上曰、赧獻受二制強臣一。今朕受二制家奴一。始不レ如也。在位十五年、改元者二。曰二太和・開成一。弟潁王立。是爲二武宗皇

帝。

【訓釋】五年上崩ず。上、即位の初め、精を勵まし治を求め、奢を去り、儉に從ひ、中外翕然として太平冀ふべしと謂ふ。然れども宦寺に制せられて、竟に爲す有る能はず。嘗て宰相に問ふ、「何の時か太平ならん」と。牛僧孺答ふるに太平象なきを以てす。嘗て近臣に問ふ、「朕は周赧漢獻と何如ぞや」と。對ふる者憮然たり。上曰く、「赧獻は制を强臣に受く。今朕は制を家奴に受く。殆ど如かざるなり」と。在位十五年、改元する者二。太和・開成と曰ふ。弟潁王立つ。是を武宗皇帝と爲す。

【通釋】開成五年に文宗は崩ぜられた。帝は即位の初には、政務に勉勵して天下太平ならんことを求め、奢侈を去つて儉約を事としたから、朝野の人士が誰彼を問はず、此の調子では天下の太平も望まれるであらうと思つた。しかるに宦官に左右せられて結局何も出來なかつた。或時宰相に「世の中はいつ太平になるだらう」と問はれた。すると牛僧孺が「太平には別にこれときまつた形はありません。（しかし今、四夷穩に、百姓安く、上に淫虐なく、下に怨者がない。まづ〳〵安康の世といつて宜しうございませう。これ以上、別に太平をお求めになりますなら、それは到底臣等の及ぶ所ではあ

りませぬ）」と申し上げた。（これは倖臣が自己の責任を免れようとして、當時の世を誣ひて太平といひ、又太平無象と云つたのである）。又或時近臣に「朕は周の赧王、漢の獻帝に比べてどうだ。」と問はれた。すると（學士周墀が、帝が餘りな事を言はれるので）、驚きあきれて茫然としたが、「周赧、漢獻は亡國の主でございます。どうして聖德に比較になりませう」とお答へ申した。帝は「いや周赧、漢獻は强臣に抑制されたが、（それはまだしもだ）。今朕は誠につまらぬ召使（宦官）の爲に抑制されてゐる。だから朕は、彼の赧・獻二帝にすら及ばぬと思ふ」と言はれた。（是から後は鬱々として政事を聽かれなかつたといふ）。在位十五年、改元すること二回。太和、開成といふ。弟の潁王が立つた。これが武宗皇帝である。

【語釋】 中外翕然云々（朝廷の内外ともに、人心が自然と一つに集つて、これなら太平の世が現出するであらうと期待したといふ意。翕然は集り合ふさま。一致するさま、前に出づ。）〇宦寺（宦官の役所、北司である。北司は前回に出づ。一說に寺は侍で、君側に奉侍する意。宦官は宮内の小臣で君側に近侍するからいふと、）〇周赧漢獻（周の赧王は春秋の强大なる諸侯、殊に秦の昭王に攻められて國を滅された。東漢の獻帝も魏の曹丕に迫られて位を讓り、漢室を滅されてしまつた。共に亡國の君である。詳しくは其條に出てゐる。）〇受レ制（制壓を受ける。おさへつけられる。抑制される。）〇憮然（驚きあきれて茫然たるさま。失意の貌。又怪しみ愕く貌。）〇家奴（家に召使ふもの。こゝは宦官をいふ。）

【餘說】 廣瀨淡窓の詩「筑前城下作」にいふ、「伏敵門頭浪拍レ天。當時築石自依然。元兵沒レ海蹤猶在。神后征レ韓事久傳。城郭影浮春浦月。絃歌聲隱暮洲煙。昇平有レ象君看取。處々垂楊繫二賈舡一。」と。

その「昇平有レ象」とは、即ち牛僧孺の「太平無レ象」の語を翻案して、その裏を言つたものである。

武宗皇帝

李德裕

李宗閔

牛李分黨

武宗皇帝名瀍、穆宗子也。文宗嘗立二敬宗子成美一爲二太子一。臨レ崩欲下以二成美一監上レ國。宦者以爲、立不レ由レ己。廢レ之而立レ瀍爲二太弟一。遂殺二成美一而卽レ位。後改レ名炎。以二李德裕一同平章事。德裕在二穆宗初一爲二學士一。以下李宗閔嘗對二制策一譏中切其父吉甫上恨レ之、構二貶宗閔一。自レ是各分二朋黨一、更相排軋者、垂二四十年一。在二文宗時一、德裕爲二侍郎一。裴度薦二其可一レ爲レ相。宗閔有二宦官之助一遂相。惡下德裕逼上レ己而出レ之。且引二牛僧孺一並相。相與排二擯德裕之黨一。

通釋　武宗皇帝、名は瀍、穆宗の子なり。文宗嘗て敬宗の子成美を立てゝ太子と爲す。崩ずるに臨んで成美を以て國を監せしめんと欲す。宦者以爲らく、立つこと己に由らずと。之を廢して瀍を立てゝ太弟と爲す。遂に成美を殺して位に卽く。後に名を炎と改む。李德裕を以て同平章事とす。德裕、穆宗の初に在つて學士と爲る。李宗閔といふ者、嘗て制策に對して其の父吉甫を譏切せるを以て之を

恨み、宗閔を貶す。是より各朋黨を分つて更々相排軋する者、四十年に垂んとす。文宗の時に在り、徳裕、侍郎と爲る。裴度其の相と爲すべきを薦む。宗閔、宦官の助有りて遂に相たり。徳裕が已に逼るを惡んで之を出だす。且つ牛僧孺を引いて並に相とす。相與に徳裕の黨を排擯す。

【評釋】武宗皇帝名は瀍といつて、穆宗の子である。文宗帝はさきに敬宗の子成美を立てゝ皇太子とされ、崩御に臨んで、成美を以て國政を監督せしめようとされたが、宦者の（仇士良等は）己等の力に由つて立てたのでないと、自由がきかないので、遂に成美を廢して、瀍を立てゝ皇太弟にした。後瀍は遂に成美を殺して位に卽き、名を炎と改められた。李徳裕が同平章事になつた。徳裕は穆宗の初年に翰林學士となつたが、當時中書舍人の李宗閔が、（憲宗帝の元和中に賢良方正の科の試驗を受け、帝御自出の）策問（試驗問題）に答へて、時の政事の弊害を指摘し、徳裕の父李吉甫が當時宰相の位に在つたのを、其の失政をコツピドク攻撃したので、それを根に持つて、李宗閔を讒言し、之を劍州刺史に追ひやつた。これから徳裕と宗閔とは各々徒黨を組んで、殆んど四十年の久しい間、互に排斥し軋轢し合ふやうになつた。文宗帝の時に、徳裕は兵部侍郎となつた。裴度が徳裕の人物は宰相の器であると言つて天子に推薦したが、宗閔は宦官の援助によつて徳裕を凌いで宰相となつた。けれど

牛李之怨愈深

も徳裕の地位が已に接近してゐるのを悪んで、(節度使として滑州に)出してしまつた。且つ牛僧孺を引き立てゝ相並んで宰相となつた。そして共々に徳裕の黨を排斥した。

【語釋】 立不レ由レ已(自分達の手で立てた方ではないといふ意) ○對ニ制策一(試験の問題に答へること。文宗の條に詳し。) ○議切(音キセツ、そしる。悪口言ふ。) ○構貶(構は無根の事を構へ作つて其の人を退けること。[illegible]を以て人を陥し入れること。) ○排軋(排は押し退ける。軋は両者互に[illegible]れ合ふこと、卽ち仲が悪くて互に排斥し合ふこと。) ○垂ニ四十年一(殆んど四十年といふ意。) ○逼レ已(その地位が自分に接近し、やゝもすれば追ひ越しさうになること。) ○排擯(排も擯も排斥する。擯は退ける。反對者を押しのけること。)

尋以二徳裕一鎭二西川一。徳裕作二籌邊樓一、圖二蜀地形一、南入二南詔一、西達二吐蕃一。日召下老二於軍旅一習二邊事一者上、訪以二險易遠近一。皆若二身歷一。練二士卒一、葺二堡障一、以備レ邊。吐蕃維州將悉怛謀以二維州一來降。維州本漢地、入二吐蕃一。吐蕃得レ之、號爲二無憂城一。徳裕極以得二此州一爲レ便。牛僧孺以爲レ不レ可レ納。以レ城併二叛將一歸。吐蕃誅二之境上一。極慘酷。牛李之怨、自レ是愈深。

【通釋】 尋いで徳裕を以て西川を鎭ぜしむ。徳裕、籌邊樓を作り、蜀の地形を圖し、南のかた南詔に

入り、西のかた吐蕃に達す。日に軍旅に老け邊事に習ふ者を召して、訪ふに險易遠近を以てす。皆身ら歴るが如し。士卒を練り、堡障を葺し、以て邊に備ふ。吐蕃の將悉怛謀、維州を以て來降す。維州は本漢の地にして、兵を入るゝの路なり。吐蕃之を得て、號して無憂城と爲す。德裕極めて此の州を得るを以て便と爲す。牛僧孺以て納るべからずと爲し、城と叛將とを以て歸へす。吐蕃之を境上に誅す。極めて慘酷なり。牛李の怨、是より愈ゝ深し。

通解 續いて德裕を西川の節度使にした。德裕は任地に行き、籌邊樓といふ高樓を作り、蜀の地勢を樓上に畫き、南は南詔（南夷地方）から、西は吐蕃に達するまで、一目に分るやうにした。そして日に軍事に老熟せる者、及び國境蠻地の事に詳しい者を寄せ集めて、道路の良し惡し、里程の遠近などを問うて之を諳記し、自身が實際踏査したかの樣に精知してゐた。そして更に士卒を訓練し、要塞城壘を修繕し、以て國境の警備を嚴重にした。すると吐蕃の將、悉怛謀といふ者が維州の土地を捧げて降參して來た。この維州といふ地は、本漢の土地であつて、吐蕃に出兵する要路にあたる土地であつた。吐蕃がこの地を手に入れてから、大いに喜んで無憂城と名づけてゐたが、德裕は今此の州を再び取り戻したので、都合がよいと喜んだ。ところが、牛僧孺がそれは取つてはいけないと反對意見を

上河北賊易去朝廷朋黨難
在人主辨正邪

與へて、維州城と將悉怛謀とを吐蕃に歸へしてやつた。吐蕃は國境に於いて悉怛謀を誅し、目もあてられぬ慘しい目にあはした。牛僧孺と李德裕との反目は是から一層深くなつた。

語釋 西川（今の四川省の成都の地。）○籌邊樓（籌はハカルと訓ず。邊境の事を、はかりをさめる樓の意。四川成都にたつた。）○南詔（支那西南夷の一で、雲南に占據した。詔とは蠻王の稱で、もと六部に分れてゐたから六詔といつたが、その一部たる蒙舍が六詔を統一して南詔と號した。南詔とは蒙舍が六詔中の最南にあるからである。）○老軍旅習邊事（軍は一萬二千五百人、旅は五百人をいふが、合して軍隊といふ意。邊事は國境の事、即ち本土と夷との國境の事に明るいものである。）○葺候障（候も障も敵をさゝへ防ぐトリデ。城塞。葺は修補、即ちトリデや城を修繕すること。）○維州本漢地入兵之路（維州は四川成都に屬し、兵を大渡より吐蕃に入れる要路にあたる。）○無憂城（吐蕃が維州を取れば、漢から兵を入れられる路を塞いでしまふことになるから、憂無しといふ意味で、無憂城と名づけた。）○以爲不可納（牛僧孺曰く、「四方萬里の吐蕃より一維州を失つても弱くならない。我にあつては維州を得た爲に吐蕃の恨を買ひ、彼に入寇された時、遠方二百の維州があつても何の役にもたたぬ。故に之は受け入れてはならぬ」と。）○以城併叛將歸（理由は前項の通りであるが、其の實は牛僧孺が德裕の功を邪魔しようと思ひ、維州と悉怛謀とを吐蕃に返したのである。併はアハスと訓じ、城に叛將を併せて返したのであるが、こゝは並と同じくトと訓じ、「城と叛將とを以て歸へす」と讀む。）○吐蕃誅之境上極慘酷（吐蕃では、悉怛謀等は元に降つたものだ、何の爲にそんな者を送つて來たかと言つて、之を國境のあたりで殺し、その殺し方は揃つて、極て之を受けたといふやうな殘酷な事をした。）

僧孺罷。德裕入相。宗閔亦罷。宗閔再相。德裕又罷。二黨互相擠援。文宗每歎曰、去河北賊易。去朝廷朋黨難。德裕連被貶黜。及上立、召德裕相之。德裕言於上曰、正人指邪人爲邪、邪人亦指正人爲邪。在人主辨之。上嘉

納。徳裕追論維州事。悉怛謀加褒贈。

僧孺尋いで罷む。徳裕入つて相たり。宗閔も亦罷む。宗閔再び相たり。徳裕又罷む。二黨互ひに相援擠す。文宗毎に歎じて曰く、「河北の賊を去るは易く、朝廷の朋黨を去るは難し」と。徳裕連りに貶黜せらる。上の立つに及んで、徳裕を召して之を相とす。徳裕、上に言ひて曰く、「正人、邪人を指して邪と爲す。邪人も亦た正人を指して邪と爲す。人主の之を辨ずるに在り」と。上、嘉納す。徳裕、維州の事を追論す。悉怛謀に褒贈を加ふ。

牛僧孺は間もなく宰相を罷め、代つて徳裕が朝廷に入つて大臣となつた。宗閔も亦一時大臣を罷めたが、又返り咲きして大臣となつた。すると今度は徳裕が又罷めた。宗閔、徳裕の二黨が互に自派を救援し、他派を排擠して相爭つてやまぬので、帝は毎に「河北の賊を去るは易いが朝廷の朋黨を去るのは六ケ敷い」と曰つて嘆かれた。李徳裕は連りに左遷されて僻地に退けられたが、武宗帝が立たれると、徳裕を召し出して宰相とされた。或時徳裕が天子に申して言ふには「正義の君子は邪惡の小人を指して邪としますが、小人も亦た君子を指して邪人として排斥します。故に人君たる方は正

邪を辨別するのが大切でございます」といつた。帝は德裕の言を嘉納せられた。德裕は維州事件の處置の誤れるを追論し、悉怛謀の慘死の悼むべきを痛論したので、帝は之を憐んで悉怛謀に官を贈つて之を追褒された。

【語釋】貶黜（官職を下して退けられること。）○擠援（擠は陷れること。援は救ふこと。自派を救ひ、反對派を陷れるをいふ。）○褒贈（死者に對して、其の功を賞して官位を與へること。）○追論（事の終つた後から之を議論すること。）

【餘說】唐の內憂の一は藩鎭の跋扈であり、二は財政の窮乏であるとは、既に憲宗の條下に述べた。而して今また唐は第三の內憂に逢著せねばならなかつた。何ぞや、朋黨の軋轢である。李牛の黨爭である。本文にも見える通り、宗閔・僧孺が罷めれば、德裕入りて相となり、德裕罷めれば、宗閔・僧孺が相となる。いはゆる盥まはしの醜態を演ずること、實に四十年の久しきに及び、遂に文宗帝をして、「去河北賊易、去朝廷朋黨難」と浩歎せしむるに至つた。かくの如くにして國運の發展するわけはない。李牛二黨の爲めに、唐室の實力がどんなに弱められたかは、むしろ想像に餘りある。
併し「時」の力には抗し難く、德裕・宗閔・僧孺が相次いで歿するに及んで、さしも熾烈を極めた朋黨の禍も、やつと終熄を告ぐるに至つた。かと思ふと、今度は「宦官の專橫」といふより以上の大難が、

澤潞與三鎮不同

討澤潞

だんだん深く根を張つて、とう／＼唐室を倒してしまつた。それは後章に見える。

○昭義節度使劉從諫卒。姪稹自領軍府。德裕謂、澤潞事體、與河朔三鎮不同。河朔習亂已久。累朝置之度外。澤潞近在心腹。若又因而授之、威令不復行於諸鎮矣。上問、何以制之。曰、稹所恃者三鎮。但得鎮魏不與之同、稹無能爲也。遣重臣諭鎮魏討之。詔曰、澤潞一鎮、與卿事體不同。勿爲子孫之謀、使存輔車之勢。鎮魏悚息聽命。二鎮兵、與朝廷所遣行營將王宰石雄、各進討。

〔譯〕昭義の節度使劉從諫、卒す。姪稹自ら軍府を領す。德裕謂ふ、「澤潞の事體は、河朔三鎮と同じからず、河朔は亂に習ふこと已に久し。累朝之を度外に置く。澤潞は近く心腹に在り。若し又因つて之を授けば、威令復た諸鎮に行はれざらん」と。上問ふ、「何を以て之を制せん」と。曰く、「稹の恃む所の者は三鎮なり。但だ鎮魏之と同じからざるを得ば、稹は能く爲す無きなり。重臣を遣り、鎮

魏に諭して之を討ぜん」と。詔して曰く、「澤潞の一鎭、卿が事體と同じからず。子孫の謀を爲して、輔車の勢を存せしむる勿れ」と。鎭魏、悚息して命を聽く。二鎭の兵と、朝廷の遣はす所の行營の將王宰・石雄と、各進討す。

通釋 昭義の節度使劉從諫が死に、其の甥の劉稹が其の軍府を管領した。（昭義の節度使は澤と潞との二使を管領してゐたが）、德裕が言ふには、「澤潞二州の事情は、河北の三鎭（成德の節度使王元逵、魏博の節度使何弘敬、盧龍の節度使張仲武）と同一でありません。河北地方は久しく兵亂に慣れてゐるから（民情自ら度し難い）。それで御歷代の朝廷では之をのけものにして重きを置かれませんでしたが、澤潞の二州は都から近く、恰も胸や腹のやうに大切な地であります。今萬一、其の兵權を劉稹にお授けになつたならば（各節度使がそれに習つて子々孫々相襲いで益々横暴を極めるやうになりませう）。かくては朝廷の御威光が各節度使に行れなくなります」と申し上げた。すると帝は「それでは如何にして之を抑へつけるか」と曰はれると、李德裕の言ふには、「劉稹の恃とするは三鎭であります。若し鎭・魏二州（鎭州は成德の節度使、魏は魏博の節度使の所在）、が彼に味方しなければ、稹は何事もなし得ません。それで重臣を遣して、鎭魏の二節度使に諭して、劉稹に加擔しないやうに

し、然る後兵を出して稹を討伐すれば宜しうございます」と。そこで帝は（徳裕の言に従つて）、鎮魏の二節度使に詔して、「澤潞節度使は卿等の國とは事情を異にしてゐる。だから卿等子孫の爲めを計らうと思つて、澤潞と助け合ふやうな事をしてはならぬ。」と申渡された。鎮魏は恐れ入つて命令を受けた。かくて鎮魏二鎮の兵と朝廷から遣はされた行營の大將王宰、石雄と共同して、各進んで澤潞の劉稹を討伐した。

語釋 昭義節度使（澤・潞二州の節度使を號して、昭義節度使と稱したのである。） ○澤潞（二州の名。澤は今山西晉城縣の地。潞は今山西潞城縣の地。） ○事體（ことがら。事情。） ○累朝置二之度外一（代々これをのけものにしておく。累はカサヌと訓じ、累世、累代など熟す。度外は計算の外、考への外の義で、數に入れぬこと、又一說に法度の外の義で、一律を以て論ぜぬこと、のけもの。例外などの意。東漢光武帝の章に出づ。中卷二五二頁參照。） ○河朔三鎭（朔は北、河朔は河北に同じ。黃河の北のことで、今の河北省。三鎭とは、魏博（魏州にあり）、成徳（鎭州、即ち恒州にある）、盧龍（幽州にあり）の三鎭等をいふ。） ○因而授レ之（因は因襲・因循などの因と同じく、元のまゝ、それなりにの意。こゝは其が勝手に節度使になつてゐるのを、それなりに打ち捨てゝおけばの意。） ○威令（威嚴、命令。） ○得三鎭魏不二與レ之同一（こゝでは鎭魏の二節度使が稹と一緒に腹を合はすやうな事がなければといふ意。鎭州は今の河北正定縣で、魏博の節度使。魏州は今の河北大名縣で成徳の節度使。） ○勿下爲二子孫之謀一使上レ存二輔車之勢一（子孫之謀とは、子孫の爲に長久の計を爲すこと。こゝでは朝命を受けないで自分勝手に土地を子孫にまで傳へようと思ふこと。輔車之勢とは、互に助け合ふ關係になること。輔は頰の骨、車はハグキ。或は輔は上あご、車は下あごともいふ。輔と車との兩者が互に持ち合ふやうに、兩々助け合ふ義。一說に輔は車の添へ木。これが無ければ車の運轉が出來ぬから、互に助け合ふ義であるともいふ。左傳の僖公五年に、「輔車相依、脣亡齒寒」とある。略して輔車脣齒といひ、利害の離るべからざる關係をいふ。本文の意を通解すれば、子孫の爲を計つて勝手に土地を子孫に傳へようと思ひ、澤潞の稹と助け合ふやうなことは相成らぬといふのである。） ○悚息（悚はオソルと訓ず。息は屏息でイキをころすこと。恐れ入つて息をころす意。悚屏息。）

楊弁作亂

誅楊弁

○河東都將楊弁作亂、逐節度使。遣中使馬元贄曉諭且覘之。元贄受賂、還於衆中大言。相公須早與之節。自牙門至柳子列十五里、曳地光明甲、若之何取之。德裕詰之。辭屈。奏微賊決不可恕。如國力不支、寧捨劉稹。河東兵出戍者、聞朝廷令客軍取太原、恐妻孥被屠。乃歸擒弁送京師。斬之。未幾劉稹勢窮蹙。潞人殺稹以降。澤潞平。加德裕大尉衛國公。貶牛僧孺爲循州長史、流李宗閔於封州。

【通釋】河東の都將楊弁、亂を作し、節度使を逐ふ。中使馬元贄をして、曉諭し且つ之を覘はしむ。元贄、賂を受けて還り、衆中に於て大言す、「相公須らく早く之に節を與ふべし。牙門より柳子列に至るまで十五里。地に光明甲を曳く、之を若何ぞ之を取らん」と。德裕之を詰る。辭、屈す。奏すらく、「微賊決して恕すべからず。如し國力支へずんば、寧ろ劉稹を捨てん」と。河東の兵出でゝ戍る者、朝廷、客軍をして太原を取らしむと聞いて、妻孥の屠られんことを恐る。乃ち歸つて弁を擒にし

て京師に致る。之を斬る。未だ幾ならずして劉稹の勢、窮蹙す。潞人、稹を殺して以て降る。澤潞平ぐ。徳裕に太尉衞國公を加ふ。牛僧孺を貶して循州の長史と爲し、李宗閔を封州に流す。

通釋　河東の大將の楊弁が亂を起して節度使の李石を逐ひ出した。そこで勅使馬元贄を河東の鎭所太原に遣はして之を諭させ、且つ其形勢を窺はせた。所が元贄が楊弁から賄賂を貰つて還り、大勢の人中で大言して言ふには、「大臣閣下は（徳裕を指す）早く楊弁に節を與へて河東の節度使に任命されるがよい。（彼の兵力は强大で）本營の門から柳子列まで十五里の間は鐵の鎧を着た壯士で充滿してゐる。之を取るなどは思ひもよらぬことだ」と言つた。徳裕が「その大兵と軍資金とは何處から出るか」と詰問すると、元贄は其の答辯に詰つた。そこで徳裕は天子に奏して「楊弁如き奴は取るに足らぬ微賤の者ではありますが、決してお恕しになつてはなりません。若し（劉稹と楊弁と二人とも征伐するのに）國力が持ち切れぬやうでしたら、いつそのこと劉稹を捨て置いても楊弁を誅戮せねばなりません」と申し上げた。ところが河東の兵で餘所に守備に出てゐる者が、朝廷が別軍を出して太原を取らうとする計略のあることを聞いて、妻子等が誅殺されてはと大いに恐れ、直ぐに太原に引きかへし、楊弁を擒にして京師に致つた。そこで之を斬つた。間も無く劉稹の勢力も行詰つて窮地に陷り、潞の郭誼

天子不可令閑

毀佛寺

といふ者が稹を殺して其の首を函に入れて來り降つた。かくて澤潞は平定した。德裕の功を賞して大尉衞國公を贈り、牛僧孺をおとして循州の長吏とし、李宗閔を封州に流した。

【語釋】中使（天子より内々發せられる勅使。）○曉諭（二字共にさとす。）○牙門（本城の門。牙旗と言へば大將の旗。牙城と言へば二の丸三の丸に對して本丸のこと。）○相公（こゝでは李德裕をさす。）○髀屈（股間が出來ない。くつとつまること。）○曳二地光明甲一（光明甲は鐵の鎧をいふ。即ち鐵の鎧を着けた武士が地をふさいでゐること。）○與二之節一（節については漢の蘇武の條を見よ。節度使のしるしを與へて任命すること。）○恕（ゆるすと訓む。）○妻孥（妻子。）○客軍（よそから來て駐屯してゐる軍隊のこと。こゝは王逢が太原の兵を以て楡社に屯してゐたところ、楊弁が太原に亂を起したので、詔してその兵を留めおき、別に易定・宣武・兗海の兵四千を以て弁を討つた。故に客軍といつたのである。）○窮蹙（きはまりちゞむ、行き詰ること。）

○削二宦者仇士良官爵一、籍二沒其家一。先レ是士良致仕。其黨送レ歸。士良教レ之曰、天子不レ可レ令レ閑。常宜下以二奢靡一娯上レ之。使レ無レ暇レ及二他事一。愼勿レ使三之讀レ書親二近儒生一。見二前代興亡一、心知二憂懼一、則吾輩疎斥矣。○毀二天下佛寺一、僧尼勒歸レ俗。○會昌六年、上崩。在位七年、改元者一、曰二會昌一。光王立。是爲二宣宗皇帝一。

【通釋】宦者仇士良の官爵を削り、其の家を籍沒す。是より先き士良、致仕す。其の黨歸るを送る。士良之に教へて曰く、「天子は閑ならしむべからず。常に宜しく奢靡を以て之を娯ましむべし。他事に及

ぶ暇無からしめよ。愼んで之をして書を讀み儒生に親近せしむる勿れ。前代の興亡を見て、心に憂懼を知らば、則ち吾輩疎斥せられん」と。○天下の佛寺を毀ち、僧尼は勒して俗に歸せしむ。○會昌六年、上崩ず。在位七年、改元する者一。會昌と曰ふ。光王立つ。是を宣宗皇帝と爲す。

〔通釋〕宦官仇士良の官爵を削り、其の家の財産を悉く帳簿に記して官に沒收した。是より前に士良は帝に疎ぜられるのを知つて辭職した。宦官の仲間が士良の歸るのを見送つた。此の時士良が一同に教へて曰ふに、「吾が黨が志を得ようとするには、天子に閑を與へてはいけない。常に之を奢侈に導き遊惰に耽らせて、外の事を爲す餘裕の無い樣に爲向けなければならない。めつたなことに天子に書物を讀ませたり、儒者を近づけさせたりせぬやうにしなければならぬ。若し天子が書を讀み、儒者を近づけて前代の興亡の原因を知つて、心に憂へ懼れることを知つたならば、吾等宦官は必ず疎んぜられて排斥せられるだらう」といつた。(後宦官が仇士良の舊惡を發いた。そこで家宅搜索の結果、武器數千を見付け出された。詔して其の官爵を削り、家産を沒收したのである)。○天下の佛寺(四千六百餘寺)を毀ち、僧尼(二十六萬五百人)を差押へて、還俗させた。○會昌六年に、帝は崩御された。在位僅か七年で、改元すること一度、會昌といつた。光王が立つた。これが宣宗皇帝で

ある。

語釋 籍沒(家屋を悉く帳簿に記して官に沒收すること。) ○致仕(仕を致す。致すとは返すこと。故に職を辭して隱居すること。) ○奢靡(だらしない。贅澤。) ○見₌前代興亡₋云々(天子が書を讀んで、前代に於て、宦官を信用した天子は亡び、宦官を信用しない天子は榮えた歷史を見て、こゝに心配するやうになれば、吾々宦官は、きつと疎まれ抑けられてしまふだらう。) ○勒レ歸レ俗(勒はオサヘル。差押へること。歸レ俗は元の俗人になること。還俗(ゲンゾク)するをいふ。)

宣宗皇帝

宣宗皇帝、名怡、憲宗子也。幼號₌不慧₋。太和後益自韜匿。文宗好誘₌其言₋以爲レ笑。武宗豪邁、尤不レ禮レ之。名爲₌光叔₋。武宗疾篤。子幼。宦官定₌策禁中₋。詔立、怡爲₌皇太叔₋。更名₌忱₋。權勾₌當軍國事₋。裁決咸當レ理。人始知₌其隱德₋焉。尋即位。○李德裕罷。僧孺・宗閔等北遷。德裕三貶、至₌崖州司戶₋以死。○令狐綯同平章事。先レ是綯爲₌學士₋。上嘗以₌太宗所レ選金鏡錄₋、授レ綯使レ讀レ之。又書₌貞觀政要於屛風₋、每正レ色拱レ手而讀。嘗與₌學士畢誠₋論₌邊事₋。誠具陳₌方略₋。上悅曰、不レ意頗牧在₌吾禁中₋。即用爲₌邊帥₋、果稱₌其任₋。

隱德

令狐綯

頗牧在₌禁中₋

【字解】宣宗皇帝、名は怡。憲宗の子なり。幼きとき不慧と號す。太和の後、益〻自ら韜匿す。文宗好んで其の言を誘ひて以つて笑と爲す。武宗、豪邁にして、尤も之を禮せず。名づけて光叔と爲す。武宗、疾篤し。子幼なり。宦官、策を禁中に定む。詔して怡を立て、皇太叔と爲す。更に忱と名づく。權りに軍國の事を勾當す。裁決咸く理に當る。人始めて其の隱德を知る。尋いで位に卽く。○李德裕罷む。僧孺・宗閔等、北に遷る。德裕三たび貶せられ、崖州の司戸に至つて以て死す。○令狐綯、同平章事たり。是より先き綯、學士と爲る。上嘗て太宗の選する所の金鏡錄を以て、綯に授けて之を讀ましむ。又貞觀政要を屏風に書して、每に色を正し手を拱して讀む。嘗つて學士畢誠と邊事を論ず。誠具に方略を陳ぶ。上悅んで曰く、「意はざりき、頗牧、吾が禁中に在らんとは」と。卽ち用ひて邊帥と爲す。果して其の任に稱ふ。

【通釋】宣宗皇帝は名を怡と云ひ、憲宗帝の子である。幼少の時は不慧といつた。（不慧とは智慧なしとの意、阿呆といはれてゐたのである）。太和（文宗の年號）の後は益々其の才能を匿して顯はさなかつた。文宗は不慧が無口なので、種々の掛り合をつけて發言させてはそれを笑の種としてゐた。武宗は豪邁の氣象であつたから、不慧を頭から馬鹿にして、名を呼ぶにも光叔と呼び棄てにしてゐた位で

ある。武宗が病氣危篤となつたが、其の子はまだ幼少であつたので、宦官は宮中に於て世繼の君を相談し、（怡が少々足らぬやうであるところから、我儘が出來るといふので）、詔を下して怡を立てゝ皇太叔とし名を忱と改めた。所が權りに軍令や國政を管理させて見ると、其の處理する事が皆道理に叶つてゐた。人は始めて皇太叔が馬鹿を裝つてはゐても實は中々賢い人である事を知つた。尋いで帝位につかれた。○李德裕が宰相を罷められて荊南の節度使になつた。牛僧孺や李宗閔等も北方に遷された。（牛僧孺は循州から衞州の長史に遷され、李宗閔は封州から郴州の司馬に遷されたのである）。德裕は初め荊南の節度使におとされ、更に潮州の司馬に遷され、三たび貶せられて崖州の司戸の役にまで落ちてそこで死んだ。○令狐綯が同平章事となつた。是より前に綯が翰林學士となつた。帝が或る時太宗の著はされた金鏡錄といふ本を綯に授けて讀ませ、御自身之を聽かれた。又貞觀政要の全文を屛風に書いて、毎に顏色を正しくし、兩手を拱いて（謹嚴の態度を持して）讀まれた。又或る時翰林學士の畢誠と邊境の事を論ぜられた。誠が事細かに策略を申上げると、帝は悅んで、「廉頗や李牧の如き名將が我が宮中に居らうとは思ひも寄らなかつた」と言つて、卽ぐに誠を用ひて邊境の大將とされたが、果して其任に稱つて立派な働きをした。

語釋　韜匿（つゝみかくす。才能をかくして愚な顔をしてゐる。）　○誘二共言一（ひつかゝりをつけて口を開かす。）　○定レ策（世繼の君を定める。）　○皇太叔（叔父を立てゝ皇嗣としてから皇太叔と呼んだのである。）　○權（かりに。假の意。）　○勾當（勾管辨當の意で、擔當すること。因みに我國では、女官の職名に勾當内侍といふのがあり、略して勾當といふ。又眞言宗の寺務を執る役僧にもいひ、攝家の勘定方にもいひ、盲人の官名にもいふ。）　○軍國事（軍令、國政のこと。）　○隱德（表面は愚を裝つてゐても實は賢いこと。）　○廉頗（趙の名將、藺相如と共に趙の國威を張つた人。）　○李牧（趙の將、趙の爲めに匈奴を伐つて大功を立て、後秦を伐つて大に之を破り、功を以つて武安君に封ぜられた。秦は之を憂へて、流言をなし、牧が謀叛すると言ひふらした、趙王は之を疑つて遂に殺した。）　○貞觀政要（十卷。唐の吳兢の撰。唐の貞觀年中、太宗と群臣とが政事を議論した。その記事で、政治の得失を詳かにした書。後世の人君之を讀んで政事の鑑戒となしたるもの少くない。我國でも源實朝、北條時賴、德川家康など皆之を愛誦したといふ。）

上聽察强記。嘗密令二學士韋澳一纂二次州縣境土風物、及諸利害一爲二一書一。號曰二處分語一。刺史有二入謝而出者一。曰、上處二分本州事一驚レ人。建州刺史入辭。上問、建州去二京師一幾何。曰、八千里。上曰、卿到レ彼爲レ政。朕皆知レ之。勿レ謂レ遠。此階前則萬里也。令狐綯奏擬二李遠抗州刺史一。上曰、吾聞遠詩云、長日惟消一局棊。安能理レ人。綯曰、詩人托二此高興一。未二必實然一。嘗詔刺史毋レ得二外徙一。必令三至レ京面察。綯嘗徙二故人一爲二隣州一、使道之レ官。上問レ之曰、詔命既行。直廢格不

レ用。宰相可レ謂レ有レ權。時方寒。絢汗透二重裘一。

【口譯】上、聰察強記なり。嘗て密かに學士韋澳をして、州縣の境土風物、及び諸の利害を纂次せしめ、一書を作る。號して處分語と曰ふ。刺史入り謝して出づる者有り。曰く、「上、本州の事を處分して人を驚かす」と。建州の刺史入つて辭す。上問ふ。「建州は京師を去る幾何ぞ」と。曰く、「八千里」と。上曰く、「卿、彼に到つて政を爲す。朕皆之を知れり。遠しと謂ふ勿れ。此の階前は則ち萬里なり」と。令狐綯、奏して、李遠を杭州の刺史に擬す。上曰く、「吾聞く、遠が詩に云ふ、長日惟消す一局の碁と。安んぞ能く人を理めんや」と。綯曰く、「詩人、此の高興に托す。未だ必ずしも實に然らず」と。嘗て詔す。「刺史は外より徙るを得ること毋れ。必ず京に至りて面察せしめよ」と。綯嘗て故人を徙して鄰州と爲し、便道より官に之かしむ。上之に問ひて曰く、「詔命既に行はる。直ちに廢格して用ひず。宰相は權有りと謂ふべし」と。時方に寒し。綯、汗重裘に透る。

【通釋】宣宗皇帝は聰明で記憶力が強かつた。或る時内々で翰林學士の韋澳に命じて、州縣の境界や土地、風俗、物産及び種々の土地の利害を編纂させて、一冊の書物を爲らせられ、之を處分語と名づけ

られた。其の後（鄧の刺史薛弘宗が）參朝して御恩を謝し、退出して韋澳に語つて曰ふには、「陛下が我が鄧州の事を明細に處置されたのに驚かされた」といつた。又建州の刺史(于延陵)が、任地へ立つ時、御暇乞ひに上つた。帝は建州は都（長安）を去ること何程であるか」と問はれた。(于延陵が)「八千里でございます」と申し上げると、帝は「御身はこれから任地に行つて政事をするのだが、其施政の良否は予は居ながらにして知つて居るぞ。決して遠いからとて（容易に分るまいなどと）油斷するな。萬里の遠方の出來事も、近く此の階の前に起つた事の如く予にはよく見えるぞ」と戒めた。(これは皆處分語によつて地方の政治の得失を記憶してゐたからだ)。令狐綯が上奏して李遠を杭州の刺史としようとした。すると帝は「予は、李遠の詩に『長き日を碁を打つて暮す』といふ句のあることを聞いてゐる。そんな暢氣な事で、どうして人を治められよう」と曰はれた。綯は「それは詩人が、高尚なる趣味に思を寄せたばかりで、必ずしも職務にはそんな事はございません」と辯解した。又或時 詔 を下して、「刺史の交迭は、州から州へと直ぐに徙してはいかぬ。必ず一度京都に來らしめ、面接してその者の得失を察してから後に任命せよ」と曰はれた。ところが令狐綯が、或る時、己の知人の刺史をその隣の州の刺史に轉ぜさせ、近道を取つて、そのまゝ直ぐ赴任させ、(京都に到らしめなかつた)。と

閑語一刻

宰相汗沾衣

ころが天子は之を知つて、令狐綯を責めて、「刺史は外より直ぐに他州に轉じさせてはいかぬといふ詔命が既に出てゐるのに、お前は早や之を反故にして實行しない。宰相といふ者は實に權力あるものだな」と皮肉を言はれた。令狐綯は恐縮して、時は嚴寒の最中であつたが、汗だく／＼となつて幾枚も重ねてゐる裘の上まで透つた。

語釋　聽察（物の解りが早くて、隅から隅まで見透す力のあること。）○强記（記憶力の强いこと。）○纂次（順序を立てゝ書物を編輯すること。）○階前萬里（萬里の遠方の出來事も宮殿の階前に起つた事の如く、容易に知れるといふ意。）○擬刺史（刺史の候補にする。）○一局碁（一面の碁盤。）○理（ヲサムと訓む。治に同じ。）○外徙（一度都へ寄らず任地から任地へ直接に赴任すること。）○便道（近道。）○廢格（格はトドムと訓ず。廢し止める意。）○重裘（皮衣を重ね着すること。）

上臨朝、對群臣、未嘗有惰容。每宰相奏事、旁無一人。威嚴不可仰視。奏事畢、忽怡然閑語一刻許。徐復整容曰、卿輩喜爲之。常恐卿輩負朕不得再相見。綯嘗謂人曰、吾十年秉政。最承恩遇。每延英奏事、未嘗不汗沾衣也。嘗召學士韋澳、屏左右問之曰、近日内侍權勢如何。對曰、陛下威斷、非前

朝比。上閉目搖首曰、全未、全未。尚畏之在。又嘗與綯謀盡誅宦官、恐濫及無辜。綯密奏曰、但有罪勿捨。有缺勿補。自然消耗至盡。宦者竊見其奏、由是益與朝士相惡。南北司如水火。〇大中十三年、上崩。在位十四年。改元者一。長子立。是爲懿宗皇帝。

講義 上、朝に臨みて群臣に對するに、未だ嘗て惰容有らず。宰相事を奏する毎に、旁に一人無し。威嚴、仰視すべからず。事を奏して畢れば、忽ち怡然として閑語すること一刻許。徐ろに復た容を整へて曰く、「卿が輩善く之を爲せ。常に恐らくは、卿が輩、朕に負いて再ひ相見るを得ざらんことを」と。綯嘗て人に謂ひて曰く、「吾十年政を秉る。最も恩遇を承く。延英、事を奏する毎に、未だ嘗て汗、衣を沾さずんばあらざるなり」と。嘗て學士韋澳を召して、左右を屏けて之に問うて曰く、「近日、內侍の權勢如何」と。對へて曰く、「陛下の威斷、前朝の比に非ず」と。上、目を閉ぢ首を搖かして曰く、「全く未し、全く未し。尚之を畏るゝ在り」と。又嘗て綯と謀りて、盡く宦官を誅せんとし、濫

りに無辜に及ばんことを恐る。綯密かに奏して曰く、「但罪有らば捨つる勿れ。缺くる有りとも補ふ勿れ。自然に消耗して盡くるに至らん」と。宦者竊かに其の奏を見、是に由つて益〻朝士と相惡む。南北司、水火の如し。○大中十三年、上崩ず。在位十四年。改元する者一。長子立つ。是を懿宗皇帝と爲す。

【通釋】帝は朝廷に出て群臣に對せられるのに、(始終謹嚴の態度を持して)少しも倦怠の御樣子を見せられない。宰相が事を奏上する際、いつも傍には一人の侍者も居ないが、帝の威嚴は、とても仰ぎ見ることの出來ない重々しさがあつた。しかし事を奏上し終ると、急ちにこやかな温顏にかへつて、暫く世間話をなさる。それから又そろ〱顏色を正して、「御身達はひたすら職務に勉勵せよ。予は常に御身達が予の期待に背くやうな(つまらぬ事をして)、そのために再び予に面會が出來ないやうになりはせぬかと氣遣つてゐる」といはれた。宰相の令狐綯が或る時、人に語つて、「自分は宰相として十年も政事を執つて居て、最も御寵遇を受けて居るが、延英殿で事を奏する毎に、いつも天子の御威嚴に打たれて汗で着物が濡れないことはない」と言つた。或る時翰林學士韋澳を召し、左右の侍臣を屏け之に問うて言はるゝやう、「近頃、内侍(宦官)どもの權勢はどうだ」と。韋澳が對へて、「陛下の

御威光は御代々の朝廷などゝは比較になりません。（內侍も餘程おそれて謹んで居ります）」と申上げた。すると天子は目を閉ぢ、首を振つて「いやいやどうして中々さうはいかぬのぢや。まだ〳〵用心しなければならぬ」と申された。又或る時令狐綯と謀つて盡く宦官を誅しようとせられたが、濫りに罪なき者にまで禍の及ぶ事を氣遣はれた。そこで令狐綯が密かに上奏して「唯宦官にして罪を犯した者は必ず罰し、決して捨て置かぬやうに致し、又缺員を生じた場合には、そのまゝにして補充せぬやうになさいましたら、自然に數が減つて、終には盡きるでございませう」と申上げた。宦官が內々この上奏文を見たので、これから益々朝廷の士大夫と仲惡になり、（宰相の役所）南司と、（宦官の役所）北司とは水と火と相容れない樣であつた。〇大中十三年に宣宗帝は崩ぜられた。改元すること一たび。長子が位についた。これが懿宗皇帝である。

語釋 惰容（だらしない風）〇怡然（音イゼン。につこりとして打ちとけた顏付。）〇閑語（世間話。）〇一刻許（刻は水時計の目盛りの一刻み。しばらくといふ意。）〇延英（御殿の名。）〇內侍（宮中に仕へる近侍の意で、宦官のこと。我國では之を女官の名に用ひた。）〇無辜（辜は罪。無罪といふに同じ。罪無き者。）〇南北司（唐の文宗の條に出づ。）

懿宗皇帝、初名溫、封ニ鄆王一。以レ無レ寵不レ得レ爲ニ太子一。宣宗崩。宦者立レ之。更名レ漼。

龐勛起

朱邪赤心

○浙東賊裘甫起。聲振中原。觀察使王式討斬之。○九年、徐州賊龐勛起。先是南詔稱大理皇帝、擧兵入寇。陷播・邕・交趾。敕徐・泗兵戍桂州。過期不代。遂作亂。勛爲糧料判官。戍卒推以爲主。擁兵北還。所過剽掠。至徐州、因殺節度使、陷諸郡。招討使康承訓擊之。以沙陀朱邪赤心爲前鋒。勛敗死。賜赤心姓名李國昌、爲大同軍節度使、尋又爲振武節度使。○咸通十四年上崩。在位十五年。改元者一。子晉王立。是爲僖宗皇帝。

【通釋】懿宗皇帝、初の名は溫、鄆王に封ぜらる。寵無きを以て太子と爲るを得ず。宣宗崩ず。宦官之を立つ。更めて漼と名づく。○浙東の賊裘甫起る。聲、中原に振ふ。觀察使王式、討つて之を斬る。○九年徐州の賊龐勛起る。是より先き南詔、大理皇帝と稱し、兵を擧げて入寇す。播・邕・交趾を陷る。徐・泗の兵に敕して桂州を戍らしむ。期を過ぎて代らず。遂に亂を作す。勛、糧料判官たり。戍卒、推して以て主と爲す。兵を擁して北に還る。過ぐる所剽掠す。徐州に至り、因つて節度使

を殺し、諸郡を陷る。招討使康承訓、之を擊つ。沙陀の朱邪赤心を以て前鋒と爲す。勛、敗死す。赤心に姓名を李國昌と賜ひ、大同軍の節度使と爲し、尋いで又振武軍の節度使と爲す。○咸通十四年、上崩ず。在位十五年。改元する者一。子普王立つ。是を僖宗皇帝と爲す。

〔通解〕懿宗皇帝は初の名は溫といひ、鄆王に封ぜられた。父宣王に愛せられなかつたから、久しく皇太子となる事が出來なかつた。宣宗が崩御になつたので、宦官（王宗實）が鄆王を立てた。そこで名を漼と改めた。○浙東の賊裘甫が、勢盛んになり、名聲中原地方に振つたが、觀察使の王式が討つて之を斬り、平定した。○咸通九年に徐州の賊、龐勛が起つた。是より以前に南詔（國名、南夷にある）の酋長が自ら大理皇帝と名乘り、兵を擧げて播州・邕州及び交趾を陷し入れた。（斯く南方が擾亂を生じたので）、徐州泗州の兵に敕命を下して桂州を戍らせ、（三年目に交代する事にしたが）、期限を過ぎても交代せず、（六ケ年も經つても、徐・泗の節度使霍彥曾は代りの兵を送らず、もう一年居れなどと云つたので）、遂に亂を起したのである。勛は其時に粮料判官といふ役をしてゐたが、戍卒が之を推戴して頭目と仰いだ。そこで勛は兵を率ゐて北方（徐州）に還り、過ぐる道々居民の財產を掠奪した。徐州に着くと節度使（霍彥曾）を殺し、諸郡を陷入れた。そこで招討使の康承訓が、沙陀の朱邪

赤心を前鋒と爲して、之を征伐した。勛は戰ひ敗れて死んだ。其功によつて赤心に姓名を李國昌と賜ひ、大同軍の節度使に任じた。尋いで又振武軍の節度使にされた。○咸通十四年に帝は崩ぜられた。在位十五年であつた。年號を改めること一度、咸通といつた。子の晋王が立つた。是を僖宗皇帝といふ。

語釋 浙東(浙江の東部。唐代には浙江東道を置いた。) ○徐州(河南道。今江蘇銅山縣の地。) ○播(州名。江南道に屬す。今の貴州遵義縣の西。) ○邕(州名。嶺南道。今の江西宣化縣の地。) ○泗(州名。河南道。安徽泗州に屬す。) ○桂州(嶺南道。今廣西臨桂縣の地。) ○粮料判官(兵粮の事を司る官。) ○剽掠(剽はヌスム。掠はカスメル。人の財寶を奪ひ取ること。掠奪に同じ。) ○朱邪赤心(沙陀の王、盡心の孫で、執宜の子である。沙陀は前出。) ○大同軍(今山西省に屬す。) ○振武(軍名。今山西省に屬す。)

僖宗皇帝

僖宗皇帝、名儇、懿宗少子也。年十三爲宦者所立。自懿宗以來、奢侈日甚。用兵不息。賦斂愈急。水旱不以實聞。百姓流殍、無所控訴。所在相聚爲盜。

黃巢起

濮州人王仙芝起。曹州冤句人黃巢應之。巢善騎射、喜任俠。嘗擧進士不第。與仙芝共販私鹽。至是聚衆攻剽州縣。窮民歸之、數月數萬。仙芝攻陷

汝・鄭・唐・鄧、寇鄂州。陷安州、寇荊南。與招討・曾元裕、戰於申州而大敗。又大敗於黃梅。斬之。黃巢陷鄆・沂・濮、掠宋・汴。南渡陷洪・虔・吉・饒・信、寇宣州。入浙東。爲鎭海節度使高駢所破。遂趨廣南。陷廣州、出潭州。北渡向襄陽。敗於荊門。復引而南、陷宣州。自采石渡江。已而渡淮陷申州、入潁・宋・徐・兗之境、陷東都。引而西、入潼關入長安。上出奔蜀。巢僭號大齊皇帝。諸道發兵赴援。

【通釋】僖宗皇帝、名は儇、懿宗の少子なり。年十五にして宦者の立つる所となる。懿宗より以來、奢侈日に甚だし。兵を用ひて息まず。賦斂愈〻急なり。水旱、實を以て聞せず。百姓流殍し、控訴する所無し。所在相聚りて盜を爲す。濮州の人王仙芝起る。曹州寃句の人黃巢之に應ず。巢、騎射を善くす。任俠を喜ぶ。嘗て進士に擧げられて第せず。仙芝と共に私鹽を販ぐ。是に至つて衆を聚めて州縣を攻剽す。窮民之に歸する、數月にして數萬なり。仙芝、汝・鄭・唐・鄧を攻陷し、鄂州に寇す。安州

を陥れ、荊南に寇す。招討曾元裕と申州に戰ひて大敗す。又黃梅に大敗す。之を斬る。黃巢、鄆・沂・濮を陥れ、宋・汴を掠む。南に渡りて洪・虔・吉・饒・信を陥れ、宣州に寇す。浙東に入る。鎭海の節度使高駢の破る所と爲る。遂に廣南に趨る。廣州を陥れ、潭州に出づ。北に渡りて襄陽に向ふ。荊門に敗る。復た引いて南し、宣州を陥る。采石より江を渡る。已にして淮を渡り、甲州を陥れ、潁、宋・徐・兗の境に入り、東都を陥る。引いて西し、潼關に入り、長安に入る。上、蜀に出奔す。巢、大齊皇帝と僭號す。諸道、兵を發して赴き援ふ。

【通釋】僖宗皇帝は名は儇と言ひ、懿宗皇帝の末子である。年十三歳で宦官（劉文浹）に立てられて帝位につかれた。懿宗以來、朝廷の奢侈は日に甚だしくなり、しかも戰亂息む時なく、（隨つて財政不足を告げ）租稅を徴收することが愈々激しくなつた。水害、旱魃があつても天子の耳には入れない。人民は（困窮の結果）、或は他州に流浪し、或は餓死しても、其の窮狀を訴へるすべもない。遂に國内到る所に（不良の徒が聚つて）盜賊を働くやうになつた。その中でも濮州生れの王仙芝が起り、曹州寃句縣の黃巢も之に應じて起つた。黃巢は馬に乘り弓を射ることが巧みで、男氣があつて人の爲に盡した。以前に進士に選拔されて（試驗を受けたことがあつたが）、及第しなかつた。王仙芝と共に鹽を

密賣してゐたが、この度不良の徒を集めて州縣を攻め劫かし、貧に困つた人民の之に歸服する者、數月の間に數萬に達した。（以下文意明かであるから、通釋を略する。なほ語釋を參照されたい）。

語釋 賦斂（フレン。賦は税を割りあてること。賦課。斂はヲサムと訓じて、税の取立てること。收斂。二字で年貢の取立て。）○流殍（リウヘウ。流は諸方へ流れ渡つてさすらふこと。流浪。殍は餓死。）○控訴（控は告げること。訴はウツタヘルこと。お上へ申立てる意。今、法律上でいふ控訴は、第一審の判決に不服な時、再び調べ直してもらふ爲に上級の裁判所に訴へ出る申立をいふので、やゝ意味が違ふ。）○濮州・曹州（ともに今山東省に屬す。寃句は縣名。）○不第（第は試驗のこと、科第・科擧。不第とは及第しないこと。）○販二私鹽一（販は持ち歩いて賣る意。當時、鹽は官營であつた。私鹽とは密造した鹽である。）○汝・鄭・唐・鄧（ともに州名。皆今の河南省に屬す。）○鄂州・安州・荊南（竝に今湖北省に屬す。）○申州（河南省に屬す。）○黄梅（縣名。湖北黄州府。今湖北江漢道。）○鄆・沂（ともに州名。山東省に屬す。）○宋・汴（ともに州名。今河南省に屬す。）○洪・虔・吉・饒・信（竝に州名。今江西省に屬す。）○宣州（今安徽省に屬す。）○鎭海（軍名。今浙江會稽道。）○廣南・廣州（ともに今廣東省に屬す。）○潁（州名。今安徽省に屬す。）○趍（趨の俗字。ハシルと訓ず。）○潭州（今湖南省に屬す。）○荊門（縣名。今の湖北省にあり。）○采石（安徽省當塗縣の西北にあつて、牛渚山の下、揚子江へ突入した處、之を采石磯といふ。）○東都（今河南洛陽縣治。）

先是、沙陀李國昌之子克用、爲兵馬使、戍蔚州。大同軍諸將謀曰、今天下大亂、朝廷號令不復行於四方。此乃英雄功名富貴之秋。李振武名聞天下。其子勇冠諸軍。若輔以擧事、代北不足平也。遣人潛詣蔚州、說克用。克

鴉軍至矣
黄巣亡

用趨雲州取之。河東・招義討之而大敗。克用寇忻代逼晉陽。已而大爲盧龍兵所破。蔚朔兵亦討敗其父國昌。父子亡走達旦。朝廷赦其罪召其兵討賊。克用將沙陀來。賊憚之曰、鴉軍至矣。連破賊復長安。巣焚宮室而遁至蔡州。節度秦崇權降之。巣趨汴州。克用等追擊大破之。未幾賊黨斬巣以降。

【通釋】是より先き沙陀の李國昌の子克用、兵馬使と爲り、蔚州を戍る。大同軍の諸將謀りて曰く、「今天下大いに亂れ、朝廷の號令復た四方に行はれず。此れ乃ち英雄功名富貴の秋なり。李振武の名天下に聞ゆ。其の子、勇、諸軍に冠たり。若し輔けて以て事を擧げば、代北は平ぐるに足らざるなり」と。人を遣はして潛かに蔚州に詣り、克用に說かしむ。克用、雲州に趨きて之を取る。河東・招義、之を討つて大いに敗る。克用、忻代に寇し、晉陽に逼る。已にして大いに盧龍の兵の破る所と爲る。蔚朔の兵も亦討つて其の父國昌を敗る。父子達旦に亡げ走る。朝廷其の罪を赦し、其の兵を召して賊

を討たしむ。克用、沙陀を將ゐて來る。賊之を憚りて曰く、「鴉軍至る」と。速りに賊を破り、長安を復す。巢、宮室を焚き、遁れて蔡州に至る。節度秦宗權、之に降る。巢、汴州に趨る。克用等追擊して大いに之を破る。未だ幾ならずして、賊黨、巢を斬りて以て降る。

【通解】是より前に沙陀の李國昌の子の李克用が沙陀の兵馬副使となつて、蔚州の守備をしてゐた。大同軍の諸將が相謀つて「今天下大いに亂れ、朝廷の號令は再び四方に行はれなくなつた。此の時こそ英雄が功名を立て富貴を求める絕好の時機である。振武軍の節度使李國昌の勇名は天下に鳴り響いてゐる。そして其の子の克用も亦勇氣諸軍に秀でてゐる。若し克用を輔けて事を擧げたならば、代州以北の地は力を用ひずして容易に平定される」といつて、人を蔚州に遣はし、潛かに李克用に兵を擧げるやうに說かせた。克用は意を決して雲州に往つて其の地を取つた。河東の節度使（崔李康）と招義の・節度使（李鈞）が李克用を討つたが却て大に敗られた。李克用は忻・代二州に侵入し、晉陽に逼り、一時大いに盛んであつたが、盧龍の兵に破られ、蔚朔の兵も亦克用の父國昌の軍を打ち破つた。父子は已むなく達旦に逃亡した。しかし朝廷は其の罪を赦し、克用の兵を召して黄巢の賊を討たしめられた。そこで克用は沙陀の兵を率ゐて賊を討ちに來た。賊は之を畏れていふには、「鴉軍が來た。（これはかな

朱全忠襲二李克用一

はぬ)」と。(黄巣の軍では李克用軍の黒装束せるを見て鴉軍と名づけ、李克用を李鴉兒と稱してゐたからである)。李克用は連りに賊を破り、遂に長安を取り回へした。黄巣は長安の宮室を焚き拂つて蔡州に遁げた。此の時蔡州の節度使秦崇權が克用を迎へ討つて勝たず、却て之に降服した。間もなく克用の軍が來ると、巣は汴州に走つた。克用等は飽くまで追撃して、大いに之を破つた。間もなく賊の一類(巣の甥の林言)が黄巣を斬つて降伏した。(黄巣の起つてより十一年、こゝに始めて平定したのである。

語釋　李克用(事歴は本文に見える通り。黄巣の賊を破つて長安を奪回したのは、その二十八歳の時である。片目が眇(スガメ)であつたので、人みな獨眼龍と云つて之を怖れたといふ。)　○蔚州(今河北省に屬す。)　○大同軍諸將(大同軍の三字を上句に連ねて「雲二蔚州大同軍一」と讀む說もあるが、宜しくない。)　○李振武(李國昌は振武軍の節度使であつたから、之を李振武と云つたのである。)　○代北(代州以北の地。代州は即ち振武軍のあつた處。今山西省に屬す。)　○晉陽(縣名。今山西太原縣治。)　○不レ足レ平(容易に平げることが出來る。平げるにワケはない。)　○雲州(今山西大同縣。)　○招義(招は昭に作るべきである。)　○忻(州名。今山西省に屬す。)　○盧龍(軍名。今河北省に屬し、舊永平府の地。唐代、その地に盧龍節度使を置いた。)　○蔚朔(軍名。蔚州にあつた節度使。今河北省に屬す。)　○達旦(唐書には達旦と書き、五代史には韃靼に作る。後世は多く五代史に據る。もと靺鞨の一部で、今の蒙古地方に居つた種族。)

○克用之至二汴州一也、朱全忠襲レ之。全忠者巣將朱溫也。先爲二巣所一レ遣、攻二陷

以水沃面

上還長安

同華。尋以華州降。賜名全忠、爲宣武節度使。館克用甚恭。克用乘酒頗侵之。全忠不平。發兵圍驛攻之。克用醉。左右以水沃其面告之。克用乃張目援弓起而走。會大雷雨晦冥。扶醉乘雷光縋城出。汴人扼橋。從者力戰得度而免。克用還晉陽、治甲兵、表乞討全忠。詔和解之。不聽。〇上發成都還長安。〇秦宗權僭號。

〔訓述〕克用の汴州に至るや、朱全忠之を襲ふ。全忠は巣の將朱溫なり。先きに巣の遣す所と爲り、同華を攻陷す。尋いで華州を以て降る。名を全忠と賜ひ、宣武軍の節度使と爲す。克用を館し甚だ恭し。克用酒に乘じて頗る之を侵す。全忠平かならず。兵を發して驛を圍みて之を攻む。克用醉ふ。左右水を以つて其面に沃いで之を告ぐ。克用乃ち目を張り弓を援いて起ちて走る。大雷雨晦冥なるに會ふ。醉を扶けて雷光に乘じ城に縋して出づ。汴人橋を扼す。從者、力戰して度るを得て免る。克用晉陽に還り、甲兵を治し、表して全忠を討たんと乞ふ。詔して之を和解す。聽かず。〇上、成都を

發して長安に還る。○秦宗權僭號す。

〔通釋〕克用が汴州に來た時、朱全忠が之を襲撃した。(其の次第は次ぎのやうである)。全忠といふのは黃巢の將朱溫の事である。先きに巢に遣はされて、同華の二州を攻め落してゐたが、華州の地を獻上して降伏した。それで帝は喜んで名を全忠と賜つて、宣武軍の節度使とした。この度、李克用が汴州に來たので、(城內の上原驛の)客館に泊めて、懇ろに饗應した。克用は酒の醉に乘じて全忠を侮辱した。全忠は心中頗る不平であつた。そこで兵を發して、克用の屯在してゐる驛(上原驛)を取り圍んで之を攻めた。克用は醉ひ潰れて前後不覺である。左右の侍臣が水を其の面に沃ぎかけて目を覺まさせて、急を告げた。克用は、やつと我にかへると、大いに驚き、目を見張り、弓を執つて力として、起ち上つて逃げ出した。偶ゝ大雷雨があつて眞暗である。從者がぐで〳〵になつて克用を扶け、電光の明りを便りにして繩に縋がつて城壁を下つた。汴の人が橋を外して妨げたが、從者が力戰して漸く渡る事を得て、この難を免がれた。それから克用は晉陽に引き返し、甲冑兵器を用意し、帝に上表して、全忠を討たんと乞うた。帝は詔を下して兩人の仲直りを勸められたが、克用は聽かなかつた。○帝は成都城を出發して長安の都に還幸された。○話變つてさきに黃巢に降伏した秦宗權が僭號

田令孜 王重榮 朱玫

上奔鳳翔

豪傑互相吞噬

して帝と稱した。

【語釋】 同華（二州の名。） ○乘レ酒頗侵レ之（酒の勢に乘じて大そう侮辱した。） ○乘二電光一縋レ城出（電光の明りを利用し、城壁に繩梯子をかけて脱出したのである。縋はスガルと訓じ、繩にすがつて城壁を下りること。） ○甲兵（甲冑と兵器と。）

上之奔レ蜀也、宦者田令孜、實挾レ之。自以爲レ功、權自レ己出。河中王重榮前作レ亂自立。令孜遣二朱玫等一攻レ之。重榮求二救於克用一。克用方怨下朝廷不上レ罪二全忠一。上言、玫等與二全忠一相表裡、欲二共滅一レ臣。引レ兵赴二河中一。京師震恐。令孜刼レ上奔二鳳翔一。朱玫追逼不レ及。立二肅宗玄孫襄王熅一爲レ帝。玫將王行瑜斬レ熅。玫奔二河中一。王重榮斬レ首送二行在一。上還二長安一。上在位十五年。改元者五。曰二乾符・廣明・中和・光啓・文德一。日與二宦官一相處而已。天下大亂、盜賊蠭起。豪傑因起二其間一、互相吞噬。朝廷不レ能レ制。上崩。壽王立。是爲二昭宗皇帝一。

【訓讀】 上の蜀に奔るや、宦者田令孜、實に之を挾む。自ら以て功と爲し、權、己より出づ。河中

の王重榮、前に亂を作して自立す。令孜、朱玫等を遣りて之を攻む。重榮救を克用に求む。克用方に朝廷の全忠を罪せざるを怨む。上言す、「玫等全忠と相表裏して、共に臣を滅せんと欲す」と。兵を引いて河中に赴く。京師震恐す。令孜、上を刼かして鳳翔に奔らしむ。朱玫追ひ逼れども及ばず、肅宗の玄孫襄王熅を立てゝ帝と爲す。玫の將王行瑜、玫を斬る。熅、河中に奔る。王重榮、首を斬りて行在に送る。上、長安に還る。上、在位十五年、改元する者五。乾符・廣明・中和・光啓・文德と曰ふ。日々宦者と相處るのみ。天下大いに亂れ、盜賊蠭起す。豪傑因りて其の間に起り、互に相呑噬す。朝廷制する能はず。上崩ず。壽王立つ。是を昭宗皇帝と爲す。

通解 帝が蜀に出奔された時、宦者の田令孜が帝をおつれ申して（やつと虎口を逃れ出ることが出來た）。それで（帝を助け出したのは）全く己の功だと己惚れて、權勢を振つた。河中の節度使王重榮が前に亂を起して獨立してゐたので、田令孜は（須寧の節度使）朱玫等を遣はして之を攻めさせた。そこで王重榮は救ひを李克用に求めた。克用は其の當時、丁度朱全忠を罪せられるやう朝廷に願つたが、お取り上げがないので朝廷を怨んでゐた矢先である。そこで帝に申し上げて（朱玫等は朱全忠と互に表となり裏となり（聯絡を取つて）私を滅さうとしてゐます」といつて、兵を率ゐて河中に向つた。

長安の都ではそれを聞いて大に恐れた。田令孜は克用等が己を殺さんことを恐れて、先づ帝を嚇して鳳翔に逃げさせた。朱玫等は後を追うたが及ばなかつた。そこで朱玫等は肅宗の玄孫に當る襄王熅を立てゝ帝とした。然るに、玫の將の王行瑜が玫を斬り殺したので、熅は河中へ逃げた。すると河中の節度使王重榮は、熅の首を斬つて、帝の行在所に送つた。そこで帝は始めて長安の都に還ることが出來た。在位十五年。年號を改めること五回。乾符・廣明・中和・光啓・文德といふ。帝は日常宦者と共に遊んでゐるばかりで、何の爲すこともなかつた。かくて政權は宦官に左右せられて天下は大いに亂れ、盜賊が到る處に起つた。天下の豪傑は之を利用して各地に起り、互に攻伐を事とした。而も朝廷は既に之をおさへつける實力がなく、(放任するより外なかつた)。帝が崩ぜられて、壽王が立つた。是を昭宗皇帝といふ。

【語釋】挾(擁きかゝへて行く。こゝでは連れ出してゆくことをさす。)○權自レ已出(全權力を掌中に握つてゐたといふ意。)○河中(府名。今山西永濟縣。その地、汾河と黃河の中に當るので河中といふ。)○呑噬(呑はノム、噬はカム。武力を以て人の領地を奪ひ取ること。)○蠭起(蠭は蜂に同じ。蜂の群り起るやうに諸處に兵亂の起ること。)

昭宗皇帝、名傑、僖宗之弟也。僖宗大漸。宦者立レ之、爲ニ太弟一。遂卽レ位。後更ニ名

昭宗有恢復之志

三鎭殺宰相謀廢立

董昌伏誅

曄。帝明粹有英氣。喜文學。以僖宗威令不振、朝廷日卑、有恢復前烈之志。踐祚之始、中外忻忻焉。然而內制於宦寺、外有强鎭、初志竟不遂。○越州董昌僭號。昌先據杭州。錢鏐爲兵馬使。朝廷命昌帥浙東。鏐領杭州。至是昌稱帝於越。詔鏐討之。○鳳翔李茂貞・華州韓建・邠州王行瑜、三鎭擧兵犯闕、殺宰相、謀廢立。聞李克用來討、乃去。克用攻邠州、斬行瑜、將移兵岐華。貴近恐沙陀太盛、止之。克用自隴西郡王、進爵晉王、引兵還晉陽。○錢鏐克越州。董昌伏誅。

【通解】昭宗皇帝、名は傑、僖宗の弟なり。僖宗大漸なり。宦者之を立てて大弟と爲す。遂に位に即く。後名を曄と更む。帝、明粹にして英氣有り。文學を好む。僖宗の威令振はず、朝廷日に卑きを以て、前烈を恢復するの志有り。踐祚の初、中外忻々焉たり。然り而して內は宦寺に制せられ、外は强鎭有り、初志竟に遂げず。○越州の董昌、僭號す。昌、先に杭州に據る。錢鏐、兵馬使と爲る。

朝廷、昌に命じて浙東に帥たらしむ。鏐、杭州を領す。是に至つて昌、帝を越に稱す。鏐に詔して之を討たしむ。(鳳翔の李茂貞・華州の韓建・邠州の王行瑜、三鎭兵を擧げて闕を犯し、宰相を殺し、廢立を謀る。李克用來り討つと聞きて、乃ち去る。克用、邠州を攻めて行瑜を斬り、將に兵を岐華に移さんとす。貴近、沙陀の太だ盛なるを恐れて之を止む。克用、隴西郡王より、爵を晉王に進め、兵を引いて晉陽に還る。(錢鏐、越州に克つ。董昌、誅に伏す。

通釋 昭宗皇帝は名は傑といつた。僖宗帝の弟である。僖宗帝が病氣危篤となられた時、宦官(楊複恭といふ者)が立てて皇太弟と爲した。遂に位に卽き、後名を曄と更めた。(時に年二十二)。昭帝は聰明純眞で、而も英邁の氣象があらせられた。そして文學を好まれた。僖宗帝の威令が行はれず、朝廷の威嚴が日に日に低下してゆくのを見て、いかにもして前代帝王の威烈を承けて太平の世に復しようとの志を抱いて居られた。そこで僖宗の後をうけて帝位を踐まれた始めには、朝野を問はず太平を期待して皆希望に溢れてゐた。けれども漸次内は宦官の制裁を受け、外は勢力强大なる藩鎭(節度使)に制せられて、初めの目的は遂に爲し遂げられなかつた。○越州の節度使董昌が勝手に天子と稱した。初め昌が杭州に據つて居た時、錢鏐がその兵馬使となつて居たが、朝廷では董昌に命じて

浙東の節度使たらしめ、錢鏐を（鎭海節度使として）杭州を管領せしめた。ところで今、昌が越州に帝と稱したので、錢鏐に詔を下して昌を討伐させられた。○鳳翔府の李茂貞、華州の韓建、邠州の王行瑜の三節度使が、兵を擧げて長安の皇居へ攻め入り、宰相（韋招度及び李谿）を殺し、天子を廢して皇兄を立てようと謀つたが、偶〻李克用が攻めて來ると聞いて逃げ去つた。克用は邠州を攻めて節度使行瑜を斬り、將に兵を岐山の南（即ち鳳翔府）及び華州に移し、（一氣に李茂貞と韓建を討伐しようとした。すると朝廷の貴戚や近臣が（李茂貞、韓建を伐つはよいが、さうすると自然）李克用の勢力ばかりが强大になり、（却つて、朝廷が危くなるであらうと）恐れて之を討伐することを止めた。克用は（今度の功により）隴西郡王から爵位を進めて晉王にされたから、兵を率ゐて晉陽に還つた。○杭州の刺史錢鏐が越州を攻めて之に克ち、董昌を誅した。

【語釋】大漸（漸はス、ムと訓す、病の大いにすゝむこと、危篤、特に天子にいふ。）○明粹（聰明にして純粹なること。）○英氣（氣象のすぐれたこと。）○恢ニ復前烈ニ（前代の天子の功烈を取りかへす。烈は功業の盛大なるをいふ。功烈、威烈。）○忻々焉（ニコ〳〵と喜ばしさう。忻々は喜ぶさま。）○强鎭（强大なる藩鎭。即ち節度使の强い勢力。）○越州（今の浙江會稽縣。古の越の國である。）○杭州（今、浙江省に屬す。）○帥ニ浙東ニ（帥は總帥の意で總大將、こゝでは董昌を威勝節度使としたこと。威勝は即ち浙東六州を管する藩鎭である。）○鳳翔（今陝西鳳翔縣。漢の右扶風。唐代には之を西京鳳翔府と云つた。）○華州（今陝西關中道華縣。）○邠州（今陝西關中道邠縣。）○犯レ闕（闕は天子の宮門。天子の皇居へ攻め入ること。）○廢立（天子をやめたり立てたりする。天子を立てかへること。）○岐華

（岐と岐陽で岐山の南、即ち鳳翔府を指す。華は華縣。）　○貴近（貴は貴戚、皇后の里方（サトカタ）をいふ。近は近習、天子側近の侍臣。）　○沙陀（こゝでは沙陀の人。即ち李克用を指す。）

○初李克用屯渭北。李茂貞・韓建憚之、事朝廷甚恭。克用去、二鎭復驕慢。茂貞擧兵犯闕。上出奔華州。克用遣援。又聞朱全忠營洛陽迎駕、茂貞與建皆懼、奉上還長安。先是嘗令諸王將兵巡警、又欲使出四方撫慰藩鎭。南北司用事者、恐其不利於己、交諫以爲不可。上不得已罷之。上在華時、宦官劉季述圍殺諸王十一人。至是季述幽上於少陽院、而立太子裕。

【通釈】初め李克用、渭北に屯す。李茂貞・韓建、之を憚り、朝廷に事ふること甚だ恭し。克用去るや、二鎭復た驕慢なり。茂貞、兵を擧げて闕を犯す。上、華州に出奔す。克用、援を遣はす。又朱全忠が洛陽に營し駕を迎ふと聞いて、茂貞と建と皆懼れ、上を奉じて長安に還る。是より先き、嘗て諸王をして兵に將として巡警せしめ、又四方に出だし藩鎭を撫慰せしめんと欲す。南北司、事を用ふる者、其の己に利あらざらんことを恐れ、交々諫めて以て不可と爲す。上、已むを得ずして之を罷む。

上、華に在りし時、宦官劉季述、諸王十一人を圍殺す。是に至つて季述、上を少陽院に幽し、而して太子裕を立つ。

【通釋】初め李克用は渭水の北岸に兵を屯めてゐた。そこで李茂貞や韓建等は之を懼れて、朝廷に對していかにも恭順らしく裝うてゐたが、克用が兵を引揚げて（河東に還ると）、この二人の節度使は復た朝廷に對して傲慢の態度を取つた。遂に茂貞が兵を擧げて宮城に攻め入つて來たので、帝は華州に逃げ出された。が、間もなく李克用が援兵を出し、又朱全忠が洛陽に皇居を營み作つて天子をそちらへ奉迎すると聞いて、茂貞と建とは大いに懼れて、帝を奉じて長安に還つた。是より前、（盜賊が畿內に横行するので）、帝は諸王に命じて兵を率ゐて畿內を巡邏警衞させてゐたが、今度諸王を四方に遣はして各節度使を愛撫慰勞させようとせられた。すると南司卽ち宰相と、北司卽ち宦官との有力者が、（そんな事をして兵權を帝の手に握られては）、己れ等に不利になることを恐れたので、交る〲、それは可けないから（お止めになるやう）にと諫めた。そこで帝も已むを得ず、その事を止められた。帝がまだ華州（の行在所）に居られた時、（韓建は諸王が勢力を得ることを惡み）、宦官の劉季述と（共謀して、天子の命と矯り、兵を發して）、諸王十一人を圍んで、これを殺したが、この度、（帝が長安

上如鳳翔
朱全忠盡誅宦官
定策國老門生天子

に還つて、宰相崔胤と謀つて、悉く宦官を誅してしまはうとすると)、宦官劉季述は帝を少陽院といふ御殿に押しこめ、太子の裕を立てゝ帝位に卽けた。

〔語釋〕巡警(巡邏警衛、見まはつて用心させること。) ○諸王十一人(通王以下、沂・睦・濟・韶・彭・韓・陳・覃・延・丹の十一王。)

同平章事崔胤、說神策將、討誅季述。上復位。宦官謀去胤。時朱全忠有挾天子令諸侯之意。胤以書召之。全忠擧兵來。宦者韓全誨等、刧上如鳳翔。全忠圍之。李茂貞遂殺全誨等、奉上還長安。全忠以兵驅宦官、盡殺之。其出使外方者、詔所在誅之。存黃衣幼弱三十人、備洒掃。宦官自文宗已後、廢置在其掌握。至有定策國老・門生天子之號。及是大被誅殺。

〔通釋〕同平章事崔胤、神策の將に說いて季述を討誅す。上、位に復す。宦官、胤を去らんと謀る。時に朱全忠、天子を挾んで諸侯に令するの意有り。胤、書を以つて之を召く。全忠、兵を擧げて來る。宦者韓全誨等、上を刧して鳳翔に如かしむ。全忠之を圍む。李茂貞遂に全誨等を殺し、上を奉じ

て長安に還る。全忠、兵を以て宦官を驅り、盡く之を殺す。其の出でゝ外方に使する者は、所在に詔して之を誅す。黄衣の幼弱なるもの三十人を存して洒掃に備ふ。宦官、文宗より已後、廢置其の掌握に在り。定策國老・門生天子の號有るに至る。是に及びて大いに誅殺せらる。

【通釋】其の後、同平章事の崔胤が、神策の將（神策の指揮使たる孫徳昭を指す）に說いて劉季述を討ち殺したので、帝は再び位に復した。宦官等は崔胤を怨んで、之を除き去らうと謀つた。その當時、朱全忠は天子を奉じて、諸侯に號令し（政權を掌握しよう）との志を有つてゐたので、崔胤はそれを利用して全忠に書を遣つて之を召し寄せた。全忠は兵を率ゐてやつて來た。宦者の韓全誨等は、（鳳翔の節度使李茂貞と通謀し、朱全忠の來ないうちにと、急に）帝を刼して鳳翔府に如かしめた。（天子は已むを得ずして、皇后妃嬪、諸王と共に鳳翔に行つた）。然し全忠が鳳翔を圍んだので、李茂貞は遂に全誨等を殺し、帝を奉じて長安に還らせた。全忠は兵を率ゐて宦官を驅り出して、盡く之を殺した。又使者を遣はし、地方に出てゐる宦官をも詔を下して其の地で誅した。たゞ黄色の服を着てゐる幼少な宦官のみ三十人を殘して置いて、宮中のふき掃除に當らせた。そも〳〵文宗帝から後、天子の廢立は一に宦官の掌中に在つた。それで世間では宦官を定策國老、門生天子と稱するに至つ

た。（定策國老とは、天子を策立するの功勞ある國家の元老といふ意で、宦官をえらいものとして褒め上げ、門生天子とは、宦官の弟子のやうな天子といふ意で、天子を視ること試驗官が受驗生を視る樣に、宦官が天子を輕視するといふのである）。此のやうに宦官が跋扈してゐたが、上述の如くこの度は、大いに誅殺されてしまつたのである。

【語釋】神策將（唐代宮庭を警衛するに十六衛、六軍があつた。その六軍中、左右羽林軍といふのがあつた。この羽林軍を德宗帝時代から神策兵と名づけた。）○挾ニ天子一號ニ令諸侯一（上に天子を奉じ、下に諸侯を統御する、即ち覇者の地位に立つこと。挾とは俗にいふ抱き込む意である。）○黃衣幼弱（宦官は總て黃色の服を着る制であつたが、後には地位の高いものは着なくなり、地位の低い者のみが黃衣を着た。從つて年少の宦官は皆黃衣であつた。）○備ニ洒掃一（洒は灑の俗字でソ、グと訓じ、水をまいて拭くこと。掃はハクと訓す。宮殿のふきはきの掃除の役をさせること。）○廢置（廢は天子を廢すること、置はそのまゝにして置くこと、即ち天子を廢立存置する意。）○定策國老（策は竹の簡（フダ）天子を立てることを簡に書いて宗廟に告げる。故に天子を立てることを定策といふ。國老とは國家の元老のこと。定策の功ある國家の元老といふ意で、宦官の威權のすごさを褒め上げた語である。）○門生天子（官吏登用試驗に及第した者は、その試驗官が先生といひ、自ら門生と稱した。宦官が天子を視ることは、恰も試驗官が受驗生を視るが如くであるから、宦官から見れば門生のやうな天子といふ意である。さて「定策國老、門生弟子」の語は、宦官楊復恭が、その黨類の守亮に送つた手紙の中に書いた文句である。）

【評釋】宦官が勢力を得たのは一日の故ではない。初め太宗は、宦官專權の弊を防ぐ爲めに內侍省に三品の官を置かず、たゞ黃衣を着、門を守り令を傳へることを司らしむるに過ぎなかつたが、中宗の世には寵愛の臣が多く、七品以上の者千餘人と稱せられた。而も緋衣を着るものはまだ少なかつた。玄宗に至ると、宦官を重用し、その數は增して四千人に及び、緋衣紫衣を着るもの千餘人も

あり、京畿の田の半分は宦官の手に歸した。肅宗以後、その勢力は益々加はり、或は國子監を管して教宗の權を握り、或は中使として地方に出で、稅務監督の任にも當り、朝廷の禁軍さへもその手に歸し、德宗の世には政務にも關與するやうになり、宦官は文武の二權を掌握して、勢威は君主の上に出た。はては憲宗・敬宗は宦官の毒手に斃れ、その他の君主は總て宦官の廢立する所となつた。

文宗は宦官の專橫を憤り、李訓・鄭注等と謀つて、之を除かうとしたが、却つて彼等の爲めに訓・注二人及び王涯は殺され、いよ〳〵宦官の暴威を增長せしむるに至つた。その如何に無道橫暴を極めたかは、仇士良が「天子不レ可レ令レ閑、常宜下以二奢靡一娯レ之、使上レ無三暇及二他事一云々」と言つたことや、又「定策國老、門生天子」の語に徵しても、明かなるところで、宰相はたゞ文書を行ふに止まり、國事の實權は、一にその魔手の裡に握られたのである。

かくて宦官は玄宗以來二百餘年の久しきに亙つて權を專らにしたが、昭宗の時、朱全忠起るや、兵を以て悉く宦官を殺戮してしまつた。併し宦官の亡んだ時は、同時に唐の滅亡の時であつた。司馬光が「唐有二宦官一、猶二木有一レ蠹、灼レ木攻レ蠹、蠹盡木焚。」と云つたのは、蓋し鐵案である。

全忠有二篡奪志一

紇干山頭凍二殺雀一

全忠弑レ上

全忠由二東平王一進二爵梁王一還二汴一。○全忠威震二天下一。有二篡奪之志一。胤懼爲レ之備。全忠表、請レ除レ胤、密使二其黨殺一レ之。遂請二上遷一レ都東京、促二百官一東行。驅二徙士民一。上謂二侍臣一曰、鄙語云、紇干山頭凍二殺雀一。何不二飛去生處樂一。朕今漂泊不レ知三竟落二何所一。泣下沾レ巾。上至二洛陽一。李茂貞等移レ檄、以二興復一爲レ辭。全忠將二西討一。以三上有二英氣一、恐レ生レ變、遣レ人入レ洛弑レ之。

〔直譯〕 全忠、東平王より、爵を梁王に進めて汴に還る。○全忠、威天下に震ふ。簒奪の志有り。胤懼れて之が爲めに備ふ。全忠、表して胤を除かんと請ひ、密かに其の黨をして之を殺さしめ、遂に上に請うて都を東京に遷し、百官を促して東行せしむ。士民を驅徙す。上侍臣に謂つて曰く、「鄙語に云ふ、『紇干山頭、雀を凍殺す。何ぞ飛び去つて生處に樂まざる』と。朕、今、漂泊して竟に何の所に落つるを知らず」と。泣下りて巾を沾す。上、洛陽に至る。李茂貞等檄を移し興復を以て辭と爲す。全忠將に西討せんとす。上の英氣有るを以て、變を生ぜんを恐れ、人を遣はして洛に入つて弑せしむ。

〔通釋〕朱全忠はこの度の功によりて東平王から、爵を梁王に進められて汴に還つた。○朱全忠は己が威力が天下に震ふと共に、天下を奪つて帝位に卽かうとの野心を持ちだした。これを知つた宰相の崔胤は懼れて、之に備へようと準備に着手した。そこで朱全忠は上表して、胤を除き去らうと請ひ、內々一味の者（朱友諒）をして胤を殺させ、そのまゝ天子に請うて都を東都洛陽に遷し、百官を無理に勸めて洛陽に往かした。そして又士民をも驅り立てゝ東都に徙らした。此の時帝が侍臣に曰はるゝやう、「俚言に『紇干山の上は寒くて雀が凍え死ぬ。雀よ、なぜ早く飛び去つて暖い住みよい場處を求めないのか』と言つて、雀を笑つてゐるが、（朕は、朱全忠に逼られて、みすみす苦しい所へ往かねばならぬ）。さりとて今、彼の雀のやうに飛び去らうにも去られず、方々にさまよひあるいた揚句、終に何處で凍え死ぬ事やら」と。淚を流して手巾を沾された。かくて天子は東都洛陽に着かれた。李茂貞等は檄文を飛ばして、全忠を伐つて唐室を取り返すといふことを口實として、（實は自分が天下を取る爲に）兵を擧げた。で全忠は西に向つて（李茂貞等を）討たうとしたが、帝には、すぐれた氣象があるので、（西討の留守中に）事を起されようかと心配して、遂に人（李振といふ者）を遣はして、洛陽に往つて天子を弑させた。

鄭綮歇後詩

時事可知

【語釋】○篡奪（篡も奪ふ意。帝位をうばひ取ること。）○東京（唐は長安に都した。これを西京といひ、洛は其の東方にあるから東京または東都といつたことは前に屢〻見えた。）○驅徙（無理に逐ひやり徙すこと。）○鄙諺（聖賢の格言などゝは違ひ、世間で誰れいふとなく行はるゝ教訓的な言葉。ことわざ。）○紇干山頭云々（紇干山は隋書及び水經注に、紇真に作る。紇真山は大同府城の東北五十里に在る。紇真は胡語で漢の三十里といふが如し。その上は常に積雪が絶えない。故にこの諺を生じたといふ。生處とは凍殺に對していひ、生きて居られる暖い處の意。）○漂泊（舵なき舟のたゞよふ如く、各處に流浪すること。さすらふ。さまよふ。）○以興復爲辭（興復は國家を元の通りに取り返し盛にすること。爲辭とは口實にする。いひぐさにする。その實は自らが天下を取らうとするのである。）○檄（戰時に於て軍兵を募り同志を糾合する時に發する「ふれぶみ」。故に木扁を書く。前にも見えた。）

○上自即位、非不夢想賢豪。卒不用之。嘗有朝士鄭綮。好詼諧。多爲歇後詩、嘲時事。上意其有所蘊。手注班簿、以爲相。堂吏走告不信。已而賀客至。綮搔首曰、歇後鄭五作宰相。時事可知矣。○上在位十七年。改元者七。曰龍紀・大順・景福・乾寧・光化・天復・天祐。子立。是爲哀皇帝。

【通釋】上、位に即きしより、賢豪を夢想せざるに非ず。卒に之を用ひず。嘗て朝士鄭綮といふ者有り。詼諧を好む。多く歇後の詩を爲りて時事を嘲る。上其の所蘊有るを意ふ。手から班簿を注して以て相と爲す。堂吏走りて告ぐれども信ぜず。已にして賀客至る。綮、首を搔いて曰く、「歇後の鄭五、

宰相と作る。時事知るべし」と。○上在位十七年。改元する者七。龍紀・大順・景福・乾寧・光化・天復・天祐と曰ふ。子立つ。是を哀皇帝と爲す。

【通釋】昭帝は即位以來、賢明豪傑の士を用ひて（綱紀肅正を圖らうと）夢にまでも思はれたが、結局これを實行されなかつた。嘗て朝臣の中に鄭綮といふものがあつて、滑稽な質で、好んで冗談口をきいたが、よく歇後の詩（餘意を言外に含め、人をして考へさせる風な詩）を作つて、當時の事柄を嘲笑したものだ。その詩を讀まれた帝は、腹に考へのある人物だと見こんだので、官吏名簿に手づから彼れの名を記して、宰相に任ぜよと命ぜられた。そこで內閣の役人が、綮のところへ馳けつけて、その旨を傳へたが、彼はそれを信じない。とかくする中に祝賀の客が來つて、（お喜びを述べる）。鄭綮は、あたまを掻いて、「（いやア、こりや大變ぢや）、歇後の詩なんかを作つてる鄭五風情が、一國の宰相となるやうでは、唐の天下ももはや推して知るべしぢや」と云つた。（誠にその通り、天子として餘りに輕々しい仕打であると同時に、當時いかに人物が拂底してゐたかゞ知られる）。○帝は位にあること十七年で、その間年號を改めること七たび。龍紀外六つがそれである。次は皇子が立つた。これが哀帝である。

哀皇帝

語釋 夢想（夢寐に想望すること。夢にさへも思ふことで、之を想ふことの切なるをいふ。ねてもさめても思ふといふに同じ。又、實現しない取りとめもない考、夢のやうな事を思ふのを夢想ともいふが、こゝは其意味ではない。） ○恢諧（おどけ。滑稽。恢は詼と同じ。） ○歇後詩（歇はヤメルと訓ず、前半を言ひ、後半は止めて言はぬこと。例へば「友二于兄弟一」といふ語の兄弟を止めて友于（イウウ）と言つて、兄弟の仲よきことを表はし、「霜葉紅二於二月花一」といふ杜牧の詩に本づき、二月花を略して、紅於（コウヲ）と言つて紅葉を意味する如き皆それである。皆まで言はず、半分言つて餘情を持たし、人に推量させるといふ筆法である。） ○時事（當時の出來事。） ○所蘊（蘊はツヽムと訓じ、奥底につゝみ蓄へてゐること。蘊蓄。） ○班簿（班は序列。官吏の位次階級を記した名簿。その宰相の部へ、天子自ら鄭綮の名を記入して、之を宰相に任じたのである。） ○堂吏（政事堂の役人。中書省の役人。） ○鄭五（五は兄弟の順序で五人目に當るからいふ、鄭綮は五男であつたのだ。因みに鄭綮は單なる滑稽家といふのではなく、淮南地方の刺史をしてゐた際にも、巧みに黄巣の侵掠を免れて一州の難を救ひ、朝廷に入つてからも、いろ〳〵意見を上奏して政治を裨補する所があつた。）

哀皇帝、初名祚。昭宗有二廢太子裕一、已壯。全忠惡レ之。祚以レ幼得レ立。更二名柷一。全忠殺二裕等九人一。皆昭宗子。全忠爲二相國一、加二九錫一。帝在位仍稱二天祐一。不二四年一禪二于梁一。尋被レ弒。唐自二高祖一至レ是二十世、凡二百九十年。

通釋 哀皇帝、初の名は祚。昭宗、廢太子裕有り、已に壯なり。全忠之を惡む。祚、幼を以て立つを得たり。名を柷と更む。全忠・裕等九人を殺す。皆昭宗の子なり。全忠、相國と爲り、九錫を加ふ。帝在位仍ほ天祐と稱す。四年ならずして梁に禪る。尋いで弑せらる。唐は高祖より是に至るまで二十世、凡て二百九十年なり。

〔通釋〕哀皇帝は初の名は祚といつた。昭宗の子には（以前、宦官の劉季述によつて帝と立てられ）、後に廢せられた太子裕といふのがあるが、已に壯年になつてゐる。朱全忠は之を惡んで、殊更に幼少の祚を立てたのである。そして名を柷と更めた。全忠は昭宗の子太子裕を始めとして九人を殺してしまつた。全忠は宰相となり、九錫を加へられた。哀帝は卽位しても猶ほ先帝の年號天祐を稱してゐた。卽位後四年にもならぬ中に位を梁（朱全忠）に禪り、引續いて弑せられた。唐は高祖から哀帝まで二十世、凡て二百九十年續いて亡びた。

〔語釋〕相國（天子を補佐し萬機を掌る官。宰相。我國では太政大臣の唐名として用ひた。平相國など。）　○九錫（錫は賜の意。勳功ある者に對して天子より賜はる九種の品。詳しくは中卷一九六頁に出づ。）

〔餘說〕唐は斯くして興り、斯くして亡んだ。その亡んだのは我が紀元一五六七年、醍醐天皇の頃に當り、西暦では紀元九〇七年に當る。

いづれの時代でも、國の亡びんとする時は、必ず忠臣義士が現はれて、國事に殉ずるものであるが、唐の滅亡に限つて、さうした者が殆ど出てゐないのは、むしろ不思議な位である――勿論、それには種々の理由が存在する。併し、私は其の一つとして、唐代は學問が盛であり、藝術が興り、宗教も亦なか／＼行はれて、謂はゆる文化の盛な世であつたに拘らず、その學風は、徒らに訓詁注釋に墮する

か、然らずんば詩文などの純文藝のみを重んじて、道義を講明し、志操を磨厲することを爲さなかつた爲めに、世道人心を浮薄に流れしめたことが、その原因の大なるものであることを見のがし難たいと思ふ。

十八史略新釋 卷五 終

十八史略新釋　巻六

五代

梁

梁太祖皇帝、初名溫、姓朱氏、碭山人、朱五經之子也。少無頼。從黃巢爲盜。降唐賜名全忠。初鎭汴、攻倂徐州・兗州・鄆州、攻河北・河東諸郡、屢與李克用交兵。尋取河中・晉・絳、用兵華・岐。東降靑州、南取荊・襄。橫行諸鎭間、劫遷唐都於洛、遂簒唐、更名晃。

【通釋】梁の太祖皇帝、初の名は溫、姓は朱氏、碭山の人、朱五經の子也。少きとき無頼なり。黃巢に從うて盜を爲す。唐に降つて名を全忠と賜ふ。初め汴に鎭して、徐州・兗州・鄆州を攻倂し、河北・

河東の諸鎭を攻めて、屢〻李克用と兵を交ふ。尋いで河中の晉・絳を取り、兵を華・岐に用ふ。東のかた靑州を降し、南のかた荊・襄を取り、諸鎭の間を横行し、唐の都を洛に劫し遷し、遂に唐を簒ひて、名を晃と更む。

〔通釋〕この段は文意明かであるから通釋を省略する。尚ほ語釋を見られたい。

〔語釋〕梁（朱温、宣武節度使となつて汴に治す。汴は古の梁の地である。温、後に梁王に封ぜられ、ついで唐を簒ひ、遂に國號を梁と稱し、汴に都したのである。）　○汴（古の梁の地。温、宣武節度使となり、汴に居て之を治めた。後、梁王に封ぜられ、尋いで唐を簒ひ、遂に國を梁と號し、因つて汴に都した。地は河南省河南府。）　○碭山（地名、今江蘇省徐海道。）　○朱五經（姓は朱、名は誠といつて五經を教授したので朱五經と呼ばれてゐた。）　○無賴（一定の職業なくぶら〳〵と遊びあるき亂暴すること。ごろつき。）　○横ニ行諸鎭間一（思ふまゝに縱横にのさばりあるいて、諸鎭を攻め侵すこと。）　○劫ニ遷唐都一（唐を强迫して都を洛陽に移させた。事は唐の昭宗皇帝の條に詳しく出てゐた。）

封ニ其兄全昱一爲レ王。嘗罵レ之曰、朱三汝作ニ天子一邪。汝從ニ黄巢一作レ賊。天子用レ汝爲ニ四鎭節度使一。何負ニ於汝一。奈何滅ニ唐家三百年社稷一、自爲ニ帝王一。行當ニ族滅一矣。是時李克用王レ晉。李茂貞王レ岐。楊行密爲ニ吳王一、王ニ淮南一。行密已卒。子渥代レ之。王建王レ蜀。錢鏐王ニ兩浙一。王潮據レ閩。已卒。弟審知代レ之。馬殷據ニ湖南一。劉

隱據廣。皆自唐末以來、割據諸州。○梁主以馬殷爲楚王。○蜀主王建稱帝。

【[illegible]】其の兄全昱を封じて王と爲す。嘗て之を罵りて曰く、「朱三汝天子となるか。汝、黃巢に從うて、賊を作す。天子汝を用ひて四鎭節度使となす。何ぞ汝に負かん。奈何ぞ唐家三百年の社稷を滅して、自ら帝王となるや、行く當に族滅せらるべし」と。是の時李克用、晉に王たり。李茂貞、岐に王たり。楊行密、吳王となりて、淮南に王たり。行密已に卒す。子渥、之に代る。王建、蜀に王たり。錢鏐、兩浙に王たり。王潮、閩に據る。已に卒す。弟審知之に代る。馬殷、湖南に據り、劉隱、廣に據る。皆唐末より以來、諸州に割據す。○梁主、馬殷を以て楚王と爲す。○蜀主王建、帝と稱す。

【[illegible]】晃卽ち全忠は、其の兄の全昱を封じて王爵を贈つたが、昱は或時に全忠を罵つて曰ふには、「朱三よ、貴樣は(誰に許されて)天子になつたのか。(考へて見よ)、貴樣はもと黃巢に從つて盜賊をしてゐたではないか。(それを天子が御寛大の御取り計らひで、却て御用ひ下されて)、四鎭の節度使にまで御昇せ下さつたのだ。(貴樣に多少の戰功はあるとしても、貴樣のてがらに比して)、どうして

足らぬことがあらうか。(然るにその御恩をも思はず)、どうして唐家の有した三百年の天下を滅して自ら天位についたのか。今に見よ、行く末、我が一族は一人殘らず滅されてしまはうぞ」といつて慨き怒つた。(以下、文意明かであるから通釋を略する。尚ほ語釋を參照されたい)。

【語釋】朱三(朱全忠は兄弟の順が第三番目であるから朱三といつた。) ○四鎭(唐は全忠を以て宣武・宣義・太平・護國の四鎭の節度使とした。) ○何負ニ於汝一(どうしてお前の功にそむかうか、そむきはしない。即ち、お前のてがらに對して恩賞の少いことはないとの意。) ○社稷(社は土地の神、稷は穀物の神。國には必ず社と稷とを祀るので、朝廷又は國家の義に用ふ。) ○李茂貞(本姓は宋、名は文通、博野軍の戍卒であつたが、黃巣が京西を犯した際功があつて、累進して昭宗の時岐王となつた。詳しくは卷五に出てゐた。) ○楊行密(唐の僖宗の景福元年、淮南の節度使と爲り、流亡者を招撫し、課稅を輕くし、遂に淮南の地を據有した。) ○王建(許州舞陽の人、唐の僖宗の初西川節度使となり、遂に其の地を據有した。) ○割據(土地を切り取つて、そこに立てこもること。) ○馬殷(許州鄢陵の人、唐の乾寧中、武安軍節度使を拜し、潭州を鎭し、湖南の地を有した。)

李克用卒　存孝存信　薛阿檀

○晉王李克用卒。初克用有ニ養子一。曰ニ存孝一。最驍勇有レ功。養子存信疾而譖レ之。存孝懼レ禍而叛。克用討獲囚歸。惜ニ其才一。意臨レ刑必有レ爲レ之請者。諸將疾ニ其能一。竟無ニ一人言一。遂死。又有ニ薛阿檀一。亦勇。密與ニ存孝一通。恐ニ事泄一自殺。自レ是克用兵勢寖弱。唐末數爲ニ汴人所一レ攻。失ニ數州一。汴兵直抵ニ晉陽城下一。克用登

城備禦、不遑寢食。後汴兵再圍晉陽、以疫還。克用幾欲走。會汴兵去而止。

【訓讀】晉王李克用卒す。はじめ克用養子あり。存孝といふ。最も驍勇にして功あり。養子存信疾みて之を譖す。存孝禍を懼れて叛す。克用討じ獲て囚して歸る。其の才を惜み、意へらく刑に臨まば必ず之が爲に請ふ者有らんと。諸將其の能を疾み、竟に一人の言ふもの無し。遂に死す。又薛阿檀といふもの有り。亦勇なり。密に存孝と通ず。事の泄れんことを恐れて自殺す。是より克用の兵勢寖く弱し。唐の末數〻汴人の攻むる所と爲りて、數州を失ふ。汴の兵直に晉陽の城下に抵る。克用城に登りて備禦し、寢食に遑あらず。後、汴の兵再び晉陽を圍み、疫を以て還る。克用幾んど走らんと欲す。汴の兵の去るに會ひて止む。

【通解】開平二年に晉王の李克用が死んだ。これよりさき、克用に存孝といふ養子があつて、武勇人に勝れ、戰場を往來して屢〻手柄をたてた。今一人養子に存信といふ者があつたが、之が存孝をそねんで讒言したので、存孝は誅殺されることを懼れ、先手をうつて先づ謀反した。克用は之を討伐し、生捕にして歸つたが、役に立つ人間なので、殺したくはなかつた。心に思ふやう、いよ〳〵死刑の場

梁兵侵晉

に臨んだならば、必ず誰か存孝の爲に命乞するものがあるであらう。（その時赦してやつたら、法も立つし存孝も助るし、一擧兩得だと考へて、斬罪を宣告した）。ところが諸將は存孝の才能あるをねたみ、（死刑になれば幸だ位に考へて）、一人も命乞ひする者がなく、とう〳〵斬られて了つた。こゝに又薛阿檀といふ者があつたが、之も亦勇敢な武將であつた。內々存孝と謀を通じてゐたので、事の發覺を恐れて自殺した。（この二人の勇將を失つてから）克用の兵はだん〳〵弱くなつた。唐の末に朱全忠の率ゐる汴軍の爲に攻められて數州をとられた。汴の兵は直に晉陽の城下に攻めて來たが、（既に良將を失つた）克用は自ら城に登つて防戰し、寢る間も食ふ暇もなく働かねばならなかつた。後汴の兵が再び晉陽を圍んだが流行病の爲やむを得ず引き歸つた。この時克用は最早や逃げようと支度をしてゐたが、折よく汴の兵が引き上げてくれたので、一先づ逃げるのを中止した。

語釋　驍勇（驍は良馬。因つて強く猛きこと。勇敢。武勇の譽れを驍名といふも此の故である。）　○汴人（朱全忠は汴に居つたから、全忠を指す。）　○以ㇾ疫還（疫は流行病のこと。軍中に流行病が發生したので引きかへした。）

克用不ㇾ能ㇸ與ニ汴人一爭フコト者累年、悒悒トシテ以テ至ニ于卒一。子存勗立ツ。時ニ梁兵侵シテㇾ晉ヲ圍ム潞

李存勗立

所憚先王耳

州。晉李嗣昭閉城固守、踰年。梁築夾寨守之。存勗與諸將謀曰、朱溫所憚者、先王耳。聞吾新立、以爲童子、必有驕怠之心。若簡精兵、倍道趨之、出其不意、取威定霸、在此一擧。不可失也。帥兵發晉陽、伏三垂岡下、旦乘大霧、直抵夾寨、塡塹鼓譟而入。梁兵大潰、遂解潞圍。

【訓讀】克用、汴人と爭ふこと能はざる者累年、悒悒として以て卒するに至る。子存勗立つ。時に梁兵晉を侵して潞州を圍む。晉の李嗣昭、城を閉ぢて固く守り、年を踰ゆ。梁、夾寨を築きて之を守る。存勗諸將と謀りて曰く、「朱溫の憚る所の者は先王のみ。吾が新に立てるを聞かば、以て童子と爲して必ず驕怠の心有らん。若し精兵を簡び、道を倍して之に趨き、其の不意に出でば、威を取り霸を定めんこと此の一擧に在らん。失ふ可からざるなり」と。兵を帥ゐて晉陽を發し、三垂岡の下に伏し、旦に大霧に乘じて、直に夾寨に抵り、塹を塡め鼓譟して入る。梁兵大いに潰え、遂に潞の圍を解く。

【通釋】克用は數年の間梁軍と戰ひ乍ら、いつも敗戰ばかりで悶々と心結ばれて樂しまずして死去

するに至つた。さて子の存勗が立つたが、この時梁兵はまた晉に攻め入つて、潞州を圍んだが、晉の守將李嗣昭が城門を閉ぢ、固く守つて翌年まで持ちこたへたので、梁は夾寨といふ壘を築いて之を守り、愈〻持久戰にはいつた。そこで存勗は諸將と相談していふやう、「朱溫の恐れたのはお父上一人であつた。今父上が亡くなつて、わしが新に位に卽いたと聞いたならば、わしを子供と侮つて、屹度高ぶり怠る心が出てゐるであらう。若し精銳な兵を選び、急行軍で進出し、敵の不意を襲うたならば、必ず擊ち破ることが出來て、天下に勇名を轟かし、霸業をなしとげることが出來るであらう。天下を取るも取らぬも此の一戰ぢや。此の機を失つてはならぬ」と決心し、軍を率ゐて晉陽を出發し、三垂岡の下に兵を伏し、朝早く大霧にまぎれて直に夾寨に接近し、先づ塹を塡め、大鼓をうち鳴らし、鬨の聲をあげて攻め入つたので、梁兵はさん〴〵に打ちくだかれて、遂に路の包圍を解いて退却した。

〔語釋〕 累年（年をかさねること。多くの年月をふること。積年。） ○悒々（憂へ悶へる貌。） ○夾寨（敵の城下に長城を築き、一には敵の城兵の突出して來るを防ぎ、一には援兵の來るを拒ぐのである。） ○倍レ道趨レ之（普通の二倍の速力で潞州に驅せつける。） ○取レ威定レ霸（天下に威名を轟かし、霸業を成就して天下に號令する。） ○三垂岡（地名。潞州襄垣縣。） ○鼓譟（大鼓をうち鳴らし鬨の聲をあげて亂れ呼ぶ。）

楊隆演　劉守光　李仁福　推晉王爲盟主

○淮南將張顥・徐溫、弑楊渥。溫復殺顥、將吏推立楊隆演。徐溫自領昇州、而以養子徐知誥往治之。○梁以王審知爲閩王。○梁以劉守光爲燕王。守光者、盧龍節度使仁恭之子也。先是囚其父、而自領軍府。○梁夏州亂。殺節度李彝昌、以其族父仁福代之。夏州李氏、本姓拓跋。上世自唐賜姓、領鎭久矣。○廣州劉隱卒。弟巖代之。○劉守光稱燕帝。○鎭州王鎔・定州王處直、推晉王爲盟主。梁攻鎭州、襲取諸郡。晉王伐其兵於柏鄉、大破之。

【訓讀】淮南の將張顥・徐溫、楊渥を弑す。溫、復た顥を殺す。將吏推して楊隆演を立つ。徐溫自ら昇州を領し、養子徐知誥を以て、往きて之を治めしむ。○梁、王審知を以て閩王と爲す。○梁、劉守光を以て燕王と爲す。守光は、盧龍の節度使仁恭の子也。是より先其の父を囚へて自ら軍府を領す。○梁の夏州亂る。節度李彝昌を殺し、其の族父仁福を以て、之に代らしむ。夏州の李氏、本姓は拓跋、上世、唐より姓を賜ひ、鎭を領すること久し。○廣州の劉隱卒す。弟巖之に代る。○劉守光、燕帝

と稱す。○鎭州の王鎔・定州の王處直、晉王を推して盟主と爲す。梁、鎭州を攻め、諸郡を襲ひ取る。晉王、其の兵を柏鄕に伐ちて大いに之を破る。

【通釋】淮南の將、張顥と徐溫とが相謀つて（其の主呉王の）楊渥を殺したが、顥はまた溫に殺された。因つて文武の官吏が（渥の弟）の楊隆演を盛り立てゝ呉王と仰いだが、徐溫は自ら勝手に昇州を領し、代理に養子の徐知誥を遣はして治めさせた。○梁は王審知を以て閩王とした。○又梁は劉守光を以て燕王に封じた。守光は盧龍の節度使仁恭の子である。之より以前に其の父を（恨むことがあり）、押し込めて自ら父の軍府を領したのである。○梁の夏州に騷動が起り、節度使の李彝昌を殺し、父のまたいとこの仁福を以て之に代らした。夏州の李氏は本姓は拓跋で、さきに唐より姓を賜ひ、久しい間節度使をしてゐたのである。○廣州の劉隱は死亡し、弟の巖が之に代つた。○劉守光は燕帝と稱した。○鎭州の王鎔と定州の王處直とは（梁に叛き）晉王を推し立てゝ同盟の主長とした。梁は鎭州を攻めて諸郡を不意討ちして取つたが、晉王は却て梁の兵を柏鄕に伐つて大いに之を破つた。

【語釋】族父（父の再從兄弟（マタイトコ）をいふ。）○徐知誥（本姓は李、徐州の人。楊行密が之を得て養子としたが、楊渥が憎んで容れることが出來ず、徐溫に與へた。溫は之を養子として知誥と名づけたのである。）○因二其父一（守光は父仁恭の愛妾と密通した爲に父に追ひ出された。然るに其後に父は梁の朱全忠に攻められて困つてゐた時に、守光は全忠を攻めて父を救つたが、そのまゝ父を一室を押しこめて、自ら盧陵の節度使となつた。然るに此度また梁に媚び從つて來たので梁は之を燕王に封じた

のであろし）　○上世（單にさきの世の意、前代。太古にあらず。こゝは唐の世を指す。）　○夏州（地名。陝西省横山縣の西。）　○鎭州（地名。河北省正定縣。）　○柏鄕（地名。河北省大明道。）

晉帥二鎭、伐燕。梁主救之、大敗走歸。先是梁主已有疾。至是慙憤曰、我經營天下三十年。不意大原遺孽更昌熾如此。吾觀其志不小。我死、諸兒非彼敵也。吾無葬地矣。疾愈劇、且加躁怒。愛假子友文之妻、將立友文爲嗣。遂爲其子友珪所弑。在位六年、改元者二、曰開平・乾化。初以汴州爲東都開封府、洛陽爲西都。遷都洛陽者凡四年。友珪自立、尋伏誅。均王立。

〔口譯〕　晉、二鎭を帥ゐて燕を伐つ。梁主之を救ひ、大敗して走り歸る。是より先、梁主已に疾有り。是に至りて慙憤して曰く、「我天下を經營すること三十年。意はざりき、大原の遺孽、更に昌熾なること此の如くならんとは。吾其の志を觀るに小ならず。我死せば、諸兒は彼の敵に非ざるなり。吾葬地無からん」と。疾愈〻劇しく、且躁怒を加ふ。假子友文の妻を愛し、將に友文を立てゝ嗣と爲さんとす。遂に其の子友珪の弑する所と爲る。在位六年、改元する者二、開平・乾化と曰ふ。初め汴州を

晉無葬地

友珪弑梁主

都汴

以て東都開封府と爲し、洛陽を西都と爲す。遷りて洛陽に都する者凡そ四年。友珪自立し、尋いで誅に伏す。均王立つ。

【通釋】又晉は鎭州定州の二鎭の兵を併せ率ゐて燕を伐つた。梁主は之を救ひに出たが却て大敗して逃げ歸つた。梁主は以前から已に病氣であつたが、今晉に敗られ、且は恥ぢ且は憤つていふやう、「我は天下を取つてから已に三十年の間、世を治めて來たが、克用の子供の小わつぱ共が、これほど盛にならうとは夢にも思はなかつた。彼奴の腹の中をすかして見るに、其の志は中々小さなものではない。わしが死んだら、わしの子供等は到底彼奴に刄向ふことは出來ぬ。今にすつかり彼奴等にぶん取られて、わしの眠る場所さへなくなるだらう」と言つて慨いた。それから病は愈〻重くなり、其の上氣短かで怒りつぽくなつた。さて梁主は養子の友文の妻を愛して之を近づけてゐたので、その關係から友文を立てゝ、後目を相續させようとしたが、實子の友珪がそれを怒つて、遂に父たる梁主を弑してしまつた。在位は六年で、改元は二度、開平・乾化といつた。初め汴州を以て東都開封府とし、洛陽を西都としたが、都を洛陽に遷してから四年であつた。友珪は父を弑して一度は自立したが、直きに誅殺せられ、後はその弟の均王(友貞)が立つて位に卽いた。

均王
燕亡
契丹阿保機稱帝
天皇王

語釋 遺孽（孽、音ゲツ、ひこばえ、草木の切株から出た芽。そこで遺子、子孫のこと。こゝに大原遺孽とは、大原は李克用の封ぜられた處で、その遺孽とは克用の子の存勗を指す。）○昌熾（熾は音シ、火の燃えさかる意、二字ともに盛なこと。全盛。）○諸兒非彼敵（我が子供達は到底彼れ存勗の相手にはなれぬ。）○吾無葬地（自分の墓場さへなくなる。即ち領地悉くが晉の有となるをいふ。）○躁忿（短氣でおこりっぽいこと。カンシャク持ち。）○假子（養子といふに同じ）○友文（本は康、名は勤といふ。梁王朱全忠の養子である。全忠には長男友裕があつたが早く死に、次の實子友珪（郢王）は氣に入らず、その次が實子友貞（均王）であつた。）○以汴州爲東都（唐の世には長安を西都としたから、洛陽を東都と云つたのが、梁にあつては、汴を東都としたから、洛陽を西都としたので、それぞれ事情が違ふのである。）

均王名友貞、初爲東都指揮使。友珪簒弑、起兵誅之、而即位於汴、更名瑱。○晉王入幽州、執燕劉仁恭及守光、歸斬之。○梁賜荊南節度使高季昌爵、爲王。○契丹阿保機稱帝。古東胡種也。其國先在横山南、本鮮卑舊地。元魏時自號契丹。初太賀氏有八子、號八部太人。推一人爲主、三歲一代。唐開元中、有邵固者、統衆。詔許襲王。至是諸部以耶律幹里少子阿保機爲王、并奚・渤海諸國、始建元、不復受代。國人謂之天皇王。

通釋 均王、名は友貞、初め東都指揮使たり。友珪の簒弑するや、兵を起して之を誅し、汴に即位

し、名を瑱と更む。○晉王、幽州に入り、燕の劉仁恭及び守光を執へ、歸りて之を斬る。○梁、荊南の節度使高季昌に爵を賜ひて王とたす。○契丹の阿保機帝と稱す。古の東胡の種なり。其の國、先に横山の南に在りて、本鮮卑の舊地なり。元魏の時自ら契丹と號す。初め太賀氏八子有り。八部太人と號す。一人を推して主と爲し、三歲に一たび代る。唐の開元中、邵固といふ者有り。衆を統ぶ。詔して襲ぎて王たることを許す。是に至りて諸部耶律斡里が少子阿保機を以て主と爲し、奚・渤海の諸國を幷せ、始めて元を建て、復代を受けず。國人之を天皇王と謂ふ。

〔通釋〕均王は名を友貞といひ、初め東都汴州の指揮使となつたが、友珪が父を弑して位を簒つた時、兵を起して之を誅殺し、汴に於いて位に卽き、名を瑱と更めた。○晉王は幽州に入り、燕の劉仁恭及び守光を捕へて歸り、之を斬り殺した。（梁の太祖の乾化元年に僭號してから三年で亡んだ）。○梁は荊南の節度使の高季昌に王爵を賜うた。○契丹の阿保機が帝と稱した。之は古の東胡の一種で、其の國は先に横山の南にあつて、鮮卑族の舊地である。南北朝の魏の時自ら契丹と號した。初め契丹の君の大賀氏に八人の子があつて、これを八部大人と號し、その中一人を推し立てゝ主とし、三年で交代した。然るに唐の開元中に邵固といふ者が出て、部衆を統べ治めてゐたが、唐は之に詔して、今後

は交代することなく、子孫が承けついで王たることを許したことがあつた。（しかしその後は又舊制にかへつて交代することにしてゐた）。そこで今諸部落は耶律幹里の末子の阿保機を主と仰ぎ、奚や渤海などの諸國を併合し、初めて年號を定め、邵固の例にならつて、最早や交代することなく、代々位を受けついでゆくことにした。國人は主を天皇王と呼んだ。

語釋 均王（太祖の第三子、均王に封ぜられ、大梁を鎮してゐた。蓋し通鑑には均王とあり、新五代史には末帝とある。）○横山（地名、同じ地名は諸處にあるが、これは陝西省の山脈の名である。）○元魏（魏に元姓と曹姓とある。曹魏は三國の曹操・曹丕の魏で元魏は南北朝の魏である。もと拓跋氏であるが、孝文帝の時、姓を元と改めたから、之を元魏といふ。）○太賀氏（契丹の君主の名。）○八部太人（各部の長を大人といふ。太賀・太人の太は大が正しいといふことである。）○許襲王（交代に及ばず、子孫相續ぐを許すこと。）○建元（年號を定める。）

○廣州劉巖稱越王。已而稱帝、改國號曰漢。后又更名龔。○吳徐溫徙治昇州。以徐知誥入輔吳政。○蜀主王建殂。子宗衍立。○吳主楊隆演卒。弟溥普立。○梁以錢鏐爲吳越國王。○晉與梁連歲交兵。梁魏州降于晉。晉王入魏、拔德州・澶州。梁劉鄩襲晉陽、不克而還。攻鎭・定、營晉師敗之。鄩攻

魏州皆王又敗之。梁又遣兵襲晉陽。晉人擊却之。晉、克衛・磁・洺・相・刑・滄・貝州、掠濮鄆。梁人決河以限晉。

【訓讀】廣州の劉巖、越王と稱す。已にして帝と稱し、國號を改めて漢と曰ふ。后又更めて龔と名づく。○吳の徐溫、徙りて昇州を治す。徐知誥を以て入りて吳の政を輔けしむ。○蜀主王建、殂す。子宗衍立つ。○吳主楊隆演、卒す。弟溥普、立つ。梁、錢鏐を以て吳越國王となす。○晉、梁と連歳兵を交ふ。梁の魏州、晉に降る。晉王、魏に入りて、德州・澶州を拔く。梁の劉鄩、晉陽を襲ひ、克たずして還る。鎭・定の營を攻むるや、晉の師之を敗る。鄩、魏州を攻む。晉王、又之を敗る。梁、又兵を遣はして晉陽を襲ふ。晉人擊ちて之を卻く。晉、衛・磁・洺・相・刑・滄・貝の州に克ち、濮・鄆を掠む。梁人、河を決して以て晉を限る。

【通釋】この章は文意明瞭であるから、通釋を省略する。なほ語釋を參照されたい。

【語釋】徙治昇州（治は治所。節度使の居る所。鎭察の所在地。蓋し是より先は潤に在つた。）○宗衍（初め宗衍と云つたが、立つに及び宗を去つて、たゞ衍と云つた。）○溥普（揚溥のこと。普の字は溥の音を註記したのが誤つて本文に入つたものであらうと云ふ。）○魏州・澶州（並に今河北省大名道に屬す。）○德州（今山東省濟南道に屬す。）○鎭定營（鎭州は王鎔の軍營、定州は王處直の軍營である、）○

晉大擧伐レ梁

晉王即二帝位一

衛磁洺相邢滄貝州（衞、相の二州は今の河南省に屬し、その他は河北省に屬する。）○濮鄆（二州の名。何れも今の山東省。）○決レ河以限レ晉（黄河の堤防を切つて水を落し、晉軍の侵入できぬやうに仕切ること、通鑑には「限二晉兵一」に作る。）

晉王攻二拔其四寨一。已而大擧伐レ梁、戰二于胡柳一。晉周德威敗死。晉王收レ兵復戰、大破二梁軍一。晉築二德勝南北兩城一。梁攻レ之、不レ克。梁招討王瓚爲二晉所一レ敗。梁河中降レ晉。鎭州將弑二趙王王鎔一。晉王討二平之一。先レ是吳蜀屢書勸二晉王稱一レ帝。晉王自謂、先王有二遺言一。當下務復二唐社稷一。既而得二傳國寶於魏州一。將佐皆賀勸進不レ已。遂即二帝位於魏一。國號レ唐。

【通釋】 晉王攻めて其の四寨を拔く。已にして大擧して梁を伐ち、胡柳に戰ふ。晉の周德威、敗死す。晉王、兵を收めて、復た戰ひ、大いに梁軍を敗る。晉、德勝南北の兩城を築く。梁之を攻めて克たず。梁の招討王瓚、晉の敗る所と爲る。梁の河中、晉に降る。鎭州の將、趙王王鎔を弑す。晉王、討ちて之を平らぐ。是より先、吳・蜀屢ゝ書もて晉王に勸めて帝と稱せしむ。晉王自ら謂へらく、先王

遺言有り。當に務めて唐の社稷を復すべしと。既にして傳國の寶を魏州に得たり。將佐皆賀し、勸進して已まず。遂に帝位に魏に即き、國を唐と號す。

〔通釋〕しかも晉王は攻擊の手をゆるめず、水を渉つて梁軍を破り、梁の四域を攻め落した。其の後又大軍を起して梁を伐ち、胡柳に戰つたが、その時晉の將軍周德威が敗れて討死したので、晉王は一先づ兵を引上げ、更に復た戰つて大いに梁軍を破つた。さて晉は德勝に南北の兩城を築いた。梁は之を攻めたが勝たず、招討使の王瓚は晉の爲に破られ、梁の河中は晉に降つた。この時、鎭州の大將が、（梁王の立てた）趙王の王鎔を殺したので、晉王は機に乘じて之を伐ち平定した。是より以前に吳蜀は度々書面を以て晉王に皇帝と稱されたいと勸めたが、晉王は自ら思ふやう、父上の遺言だから異心なく力をつくして唐の朝廷を再興すべきだと言つて、（之を聞き入れなかつた）。ところがその後唐の傳國の寶器を魏州で手に入れたところ、諸大將は皆之を祝賀し、是非ともと勸めて已まなかつたので、遂に魏に於て帝位に即き、國を唐と號した。

〔語釋〕胡柳（地名、山東省濮縣の西南。）○德勝南北兩城（德勝は河北省濮陽縣にある嶺の名。或はいふ渡の名と。黃河に瀕んでゐる。晉は德勝の南北に城塞を築き、之を夾寨と云つた。）○招討（戰時に設ける官の名、招討使のこと。地方の民を招撫し、叛者を征討する義に取る。）○傳國寶（一國の天子が代々傳へる所の寶のことで、唐の玉璽である。初め僧傳眞といふ者が、黃巢の長安に亂入した時に、之を得、四十年間、寺に藏してゐたが、普通の玉と思つて賣却しようとしたと

ころ、或人が之は本國の寶であるといつたので、大いに重いて之を晉王に獻じたのである。）

遣李嗣源襲取梁鄆州。梁以王彥章爲招討。唐主戒德勝守者曰、王鐵槍勇決。謹之。彥章果拔南城。進拔諸寨。至楊劉力攻。不克而退。梁遣彥章攻鄆。唐主救之。梁敗。彥章死。唐以嗣源爲前鋒、五日入大梁。梁主猶慮諸兄弟乘危謀亂、盡殺之、尋命其下殺己。在位十一年、改元者二。曰貞明・龍德。

梁自太祖稱帝、至是二世、一十七年而亡。

〔訓讀〕李嗣源を遣はして梁の鄆州を襲ひ取らしむ。梁、王彥章を以て招討と爲す。唐主、德勝の守者を戒めて曰く、「王鐵槍勇決なり。之を謹めよ」と。彥章果して南城を拔き、進みて諸寨を拔き、楊劉に至りて力攻す。克たずして退く。梁、彥章を遣はして鄆を攻めしむ。唐主之を救ふ。梁敗れ彥章死す。唐、嗣源を以て前鋒と爲し、五日にして大梁に入る。梁主、猶ほ諸兄弟の危きに乘じて亂を謀らんことを慮り、盡く之を殺し、尋ぎて其の下に命じて己を殺さしむ。在位十一年、改元する者二。

貞明・龍德と曰ふ。梁は太祖の帝と稱せしより、是に至りて二世、一十七年にして亡ぶ。

【通釋】唐主は李嗣源を遣はして、梁の鄆州の不意を襲つて之を取つた。すると、梁は王彥章を招討にして復讎して來た。そこで唐主は德勝城の守將を戒めて、「王彥章は勇敢で決斷力に富んだ猛將であるから、十分注意せよ」と注意してやつた。（それで益々守備を嚴重にしてゐたが）、彥章は果して先づ德勝の南城を落し、進んで諸々の寨を攻め取り、鄆州の楊劉城を圍み、全力をあげて攻擊したが、落すことが出來なくて退いた。梁は更に彥章に命じて鄆州を攻めさせたが、唐主自ら鄆を救ひに來たので、梁は敗れて彥章は討死した。そこで唐は嗣源を先手の大將として進軍し、五日目に都の大梁に攻め入つた。梁主は（この場合にも）猶兄弟達が國家の危急に乘じて亂を起し、己の國を奪ひはしないかと心配して、殘らず之を殺し、次いで家臣に命じて自分を殺させた。在位十年、年號を改めること二度、貞明、龍德といつた。かくの如くにして、梁は太祖が帝と稱してから是に至るまで、二代十七年で亡んだのである。

【語釋】王鐵槍（名は彥章、字は子明、鄆州の人、梁に仕へて宣義軍節度使となつた。驍勇絕倫、その鎗法は神出鬼沒を極めた。戰ふ毎に二鐵槍を用ひた。何れも重さ百斤あつて、一は鞍におき、一は手に提げたが、向ふ所敵なく、時人これを王鐵槍と呼んだ。）○楊劉（鎭の名、今の山東省阿縣の北。）○諸兄弟（友諒・友能・友徽等。）○命二其下一（家來の皇甫麟に命じて己を殺さしめた。）

【餘論】王鐵槍は五代爭亂の世、反服常なき時代にあつて、よく武勇を以てその節義を全うした人である。唐の張巡や顏眞卿等は、學問修養あつて死節を守つたのであるが、王鐵槍は一个の武弁、無學にして而もその忠節、當時無比と稱せられたのである。歐陽修の「王彥章畫像記」（唐宋八家文所載）は、よくこの間の消息を傳へた名文であるが、その中にいふ、

五代終始、纔五十年。而更二十有三君、五易國而八姓。士之不幸而出乎其時、能不汙其身、得全其節者鮮矣。公本武人、不知書。其語質。平生嘗謂人曰、豹死留皮、人死留名。蓋其義勇忠信、出於天性而然。

と、以て其人を想見すべきである。

唐

唐莊宗皇帝、名存勗、沙陀人也。本姓朱邪、先世立功、賜姓李。父克用有勇略。一目微眇、號獨眼龍。爲唐平黃巢立大功、王于晉。與朱氏爲仇。暮年頗

爲所蹙、憂形於色。存勗幼進言曰、朱氏窮凶極暴、人怨神怒。極將斃矣。吾家世襲忠貞。大人當遵養時晦、以待其衰。奈何輕爲沮喪、使羣下失望乎。克用說。

【訓讀】唐の莊宗皇帝、名は存勗、沙陀の人なり。本姓は朱邪、先世、功を立てゝ姓を李と賜ふ。父克用、勇略有り、一目微眇なり。獨眼龍と號す。唐の爲に黄巢を平らげて大功を立て、晉に王たり。朱氏と仇を爲す。暮年頗る爲に蹙められ、憂、色に形はる。存勗、幼にして進言して曰く、「朱氏、凶を窮め、暴を極め、人怨み、神怒る。極めて將に斃れんとす。吾が家世〻忠貞を襲ぬ。大人當に遵養時晦して、以て其の衰を待つべし。奈何ぞ輕〻しく沮喪を爲し、羣下をして望を失はしめんや」と。克用說ぶ。

【通釋】唐の莊宗皇帝は名を存勗といひ、沙陀の人である。本姓は部族の名其のまゝに朱邪といひ、祖父の朱邪赤心が懿宗の代に徐州の賊龐勛を討つて手柄を立てたので、始めて朝廷から姓を李と賜うた。父の克用は武勇智略にすぐれ、片眼が少しすがめであつたので獨眼龍と綽名されてゐた。僖宗の

時黄巣を平定した大功によつて、王爵を賜はつて晉王と稱した。梁王の朱全忠とは仇同士となり、晩年には大いに朱氏に攻め立てられて常に其の心配で顔が曇つて見えるやうにまでなつた。存勗はまだ幼少であつたが、これを見るに忍びず、父に建言して曰ふには、「朱氏の極悪非道には神人共に憤つて居ります。今に悪虐が極つて滅びる時が參りませう。（之と反對に）私の家は代々操を守つて忠節を勵んで來て居りますから、（必ず盛になる時が參ります）。お父上は只管時世に順ひ、徳を養ひ、才をかくして朱氏の衰へるのをお待ち下さいませ。どうしてお父上自身から輕々しく力を落されて折角の臣下達の望を失はしてなりませうや」といつて慰めたので、克用は健氣な我が子の意氣に氣を強くして喜んだ。

語釋 朱邪（元來夷狄には姓がない。朱邪は彡族の名であつたのを後に姓としたのである。）○先世（克用の父朱邪赤心を指す。赤心は、唐の懿宗から姓名を李國昌と賜つたことは、前に見えた。）○微眇（稍すがめであること。めつかち。）○爲ㇾ仇（朱全忠が嘗て李克用を殺さうとしたことがある。而して全忠は常に李氏は吾が世讎であると云つてゐた。詳しくは僖宗昭宗の條に見えた。）○暮年（晩年に同じ。）○遵養時晦（道に従ひて徳を養ひ、時世につれて己の才能を隱して外に顯はさぬこと。詩經周頌篇の語。遵はシタガフと訓じ、道にしたがふこと。晦はクラマスと訓ず、才能を隱しおほふこと。）○沮喪（力を落す。落膽して元氣がなくなる。）

臨ㇾ終、立爲ㇾ嗣。謂二其下一曰、此子志氣遠大。必能成二吾事一。年十七嗣二晉王位一。即

生子當如李亞子

張承業

王自取之

擧兵破梁、解潞圍。自是連勝。梁祖歎曰、生子當如李亞子。吾兒豚犬耳。存勗東併幽州、北卻契丹、南與梁夾河百戰。先是晉陽監軍故唐宦者張承業、爲晉王捃拾財賦、召補兵馬。攻戰連年、接應不乏、皆承業力。承業意在復唐宗社。聞王將稱帝力諫、知不可止、慟哭曰、諸侯血戰、本爲唐家。今王自取之誤老奴矣。悒悒成疾而卒。

【譯】終に臨み、立てゝ嗣と爲す。其の下に謂ひて曰く、「此の子志氣遠大なり。必ず能く吾が事を爲さん」と。年十七にして晉王の位を嗣ぐ。卽ち兵を擧げて梁を破り、潞の圍を解く。是より連に勝つ。梁祖歎じて曰く、「子を生まば當に李亞子の如くなるべし。吾が兒は豚犬のみ」と。存勗東のかた幽州を併せ、北のかた契丹を卻け、南のかた梁と河を夾みて百戰す。是より先晉陽の監軍故の唐の宦者張承業、晉王の爲に財賦を捃拾し、兵馬を召補す。攻戰連年、接應して乏しからざりしは、皆承業の力なり。承業の意は、唐の宗社を復するに在り。王の將に帝と稱せんとするを聞きて力諫し、

止む可からざるを知るや、慟哭して曰く、「諸侯の血戰は本唐家の爲なり。今王自ら之を取り、老奴を誤る」と。悒悒として疾を成して卒す。

〔通釋〕克用は臨終に際して存勗を立てゝ後嗣ぎとし、家來に向つて「この子は氣象が大きいから屹度わが事業を成就することが出來るであらう」と言つた。存勗は年十七で晉王の位を嗣ぎ、すぐ兵を起して梁を破り、潞州の包圍を解いた。(それを手始めに)是から續け樣に梁の軍を破つた。(事は既に梁の太祖の條に詳しく出てゐた)。梁の太祖は歎息して、「嗚呼子を生むなら李亞子(存勗の幼名)のやうなのを生まねばならぬ。わが子なんぞは(之に比べると)犬か豚位の者だ」といつた。存勗は東は幽州を合せ、北は契丹を退け、南は梁と黃河の兩岸でしきりに戰を交へた。(事は梁の均王の條に詳し)。是より前に晉陽の軍目付で、もと唐の宦官であつた張承業といふ者が晉王の爲に稅金を取り集め、兵馬を召集補充して、戰爭が何年も續いても、兵糧の仕送りに兵員の補充に少しも不足を感ぜさせなかつたのは皆承業の力であつた。かうした承業の心の中は李氏を助けて唐の朝廷を復活しようとするのであつた。それで晉王が將に帝位に卽かうとしてゐることを聞き、力を盡して諫めたが到底止めることの出來ないのを知り、聲をあげて泣きじやくり、「諸侯が血を流して戰つてゐるのはもと

〱唐の朝廷の爲である。しかるに今晉王は自分で帝位を取らうとして居られる。よもやからとは思はなかつた。この爺もひどい見込み違ひをしたものぢや」といつて、それより憂に沈んで悶々としてゐたが、間もなく病氣にかかつて死去した。

語釋　唐（李存勗、父克用の後をついで晉王となり、帝位に卽くに及んで、自ら唐に繼ぎて天下を有つといふので、唐と號し、洛陽に都したのである。）　○生レ子當レ如ニ李亞子一云々（亞子は存勗の幼名である。三國の時、魏の曹操が「生レ子當レ如ニ孫仲謀一、向者劉景升兒子豚犬耳」と云つたのに倣つたのである。中卷四二〇頁參照。）　○監軍（軍目付。朝廷から節度使の軍の目付に來てゐる者。）　○掊拾（共にとらふと訓ず。收めとり立てること。）　○財賦（とり立てるもの。租稅。）　○召ニ補兵馬一（兵士や軍馬の不足した時、それを召集補充すること。）　○接應（輜重を甲地より乙地へ、乙地より甲地へ接續して送り、又兵員を補充して戰線へ送ること。）　○宗社（宗廟社稷の略。國家又は朝廷のこと。）　○悒々（憂に沈んで悶々と樂しまぬこと。）

郭崇韜　高季興　蜀亡

王卽レ位。改レ晉爲レ唐。奉ニ唐祀一。入レ汴滅レ梁。都ニ大梁一。已而遷ニ雒陽一。侍中郭崇韜有ニ謀略一。佐ニ唐主一成レ業。至レ是權兼ニ內外一。謀猷規益、竭レ忠無レ隱。薦ニ引人物一。他相受レ成而已。○荊南高季興入朝。季興者季昌之改名也。唐以爲ニ南平王一。○蜀主王衍、盤遊淫湎。國亂盜起。唐遣ニ皇子繼岌、與ニ郭崇韜一伐レ之。遂滅レ蜀。衍降。

唐赤其族。繼岌信讒、殺崇韜而還。○唐以孟知祥爲西川節度使。

【訓解】王、位に卽く。晉を改めて唐と爲し、唐の祀を奉ず。汴に入りて梁を滅し、大梁に都す。已にして雒陽に遷る。侍中郭崇韜、謀略有り。唐主を佐けて業を成す。是に至りて、權、內外を兼ね、謀猷規畫、忠を竭して隱す無く、人物を薦引す。他の相は成を受くるのみ。○荊南の高季興、入朝す。季興は季昌の改名なり。唐、以て南平王と爲す。○蜀主王衍、盤遊淫湎なり。國亂れ盜起る。唐、皇子繼岌と郭崇韜とを遣はして之を伐たしめ、遂に蜀を滅す。衍降る。唐、其の族を赤す。繼岌、讒を信じ、崇韜を殺して還る。○唐孟知祥を以て西川の節度使と爲す。

【通解】王は帝位に卽き、國號の晉を改めて唐となし、唐の先祖の祭を承け繼いだ。それより汴に入つて梁を滅し、大梁に都を定め、後又雒陽に遷つた。侍中の郭崇韜は謀略にすぐれてゐたが、之が唐主を佐けて帝業を成就せしめたのである。是に至つて其の權勢の強きこと、內は朝廷を切りまはし、外は藩鎭をなびき從へ、事あれば智謀をめぐらし、過ちあれば君を諫め、忠義をつくして隱すことなく、有爲の人物があれば之を薦擧するなど（何もかも一人で切つて廻したので）他の宰相達は崇韜の

唐主驕恣　李天下　伶人侮弄

計畫を鵜呑みに仰ぐばかりであつた。荊南の高季興が入朝した。季興は季昌が改名したのである。唐は之を南平王に封じた。○蜀主の王衍がだらしなく遊び廻り、酒色に溺れて、政治を顧みなかつたので、國は亂れて盜賊が起つた。唐はそこで皇子の繼岌と郭崇韜とを遣はして之を伐たしめ、遂に蜀を滅した。衍は降參したが唐は其の一族を皆殺して了つた。その時繼岌は讒言を信じて賢相の崇韜を殺して歸つた。○唐は孟知祥を以て西川の節度使とした。

【語釋】謀猷規弼（謀猷は「はかりごと」。規は君の過をたゞすこと。弼は君の行を弼すること。即ち平素は、はかりごとを献じ、君にあやまちあれば諫めて正すこと。）○受レ成（出來上つた事を其のまゝ貰つて行ふばかりだといふ意。自分の意見が少しも加はつてゐないことを意味する。）○盤遊（盤はメグルと訓じ、遊び廻ること。）○淫湎（酒色に耽ること。湎は沈湎と熟して、しづむ意、溺れる意で、酒にすさむこと。又は物事に心を奪はれることをいふ。）○赤二其族一（其の族を盡く殺すこと。赤は空の義、空手を赤手といふの類である。）

○唐帝自克梁後寖驕。首以伶人爲刺史。帝幼習音律、或時自傅粉墨、與優人共戲。優名謂之李天下。嘗自呼曰李天下李天下。優人敬新磨遽前批其頰。帝失色。新磨徐曰、理天下只一人。尚誰呼邪。帝悅。諸伶出入宮掖、侮弄搢紳。羣臣憤疾、莫敢出氣。亦有反相附託、納貨展轉、以干恩澤蠹政、

害人、恣爲讒慝。帝疎忌宿將、不恤軍士。數出遊獵、蹂踐民田、上下咨怨。

【訓讀】唐帝、梁に克ちてより後寖驕る。首として伶人を以て刺史と爲す。帝、幼より音律に習ひ、或は時に自ら粉墨を傅けて、優人と共に戯る。優名に之を李天下と謂ふ。嘗て自ら呼びて、李天下、李天下と曰ふ。優人敬新磨、遽に前みて其の頰を批つ。帝色を失ふ。新磨徐に曰く、「理天下は只一人のみ。尚誰を呼ぶか」と。帝悦ぶ。諸伶、宮掖に出入して、搢紳を侮弄す。羣臣憤り疾めども、敢て氣を出すもの無し。亦反つて相附託して、貨を納れ展轉して、以て恩澤を干むるもの有り。政を蠹し人を害し、恣に讒慝を爲す。帝、宿將を疎忌し、軍士を恤まず。數〻出でゝ遊獵して、民の田を蹂踐す。上下咨怨す。

【通釋】唐帝は梁に勝つてからだん／＼高振り出した。帝位に卽くと先づ第一に樂人を以て刺史に任じた。帝はまた幼時より音樂を習つたが、時には自分で化粧して俳優と共に演戲し、藝名を李天下といつた。ある時自ら李天下／＼と呼んだところが、役者の敬新磨が俄に進み出て帝の頰を打つたので帝は顏色を變へてびつくりした。すると新磨が徐に「天下を理める天子は只一人でございますのに、

奉ニ遣在
遣ニ據レ鄴

陛下は「天下理天下と二つお呼びになりましたが、一體誰をおよびになるのですか」といつて臆面もなくお上手を言つたので、帝はたたかれたのを却ていゝ氣になつて悦んだ。（かういふ風で諸伶人は宮中に出入して公卿を侮つてなぶりものにしたので、群臣は之を憤り疾んだ。しかし押し切つて氣力を出して（之を排斥する）ものもなく、反つて伶人にへつらひ、賄賂を贈り、手蔓をつたつて君の恩澤を求めるものがあつたので、政事は亂され、人民は苦しめられ、讒言惡事は堂々と行はれた。又帝は老練の將軍を忌み遠ざけ、兵士を恤まず、度々遊獵に出かけては人民の田を蹈み荒したので上下共に嘆き怨んだ。

【語釋】伶人（樂人のこと。音樂によつて朝廷に抱へられてゐるもの。）○優人（俳優、役者。）○傅ニ粉墨一（化粧する。傅は附に同じくツケルと訓ず。粉は白粉、墨は眉墨。）○理天下（李と理と音が同じいので毆れて罵らつたのである。）○宮掖（宮廷のこと。宮中の奥向。掖は宮門の左右の小門。）○搢紳（搢は縉とも書く、サシハサムと訓ず。紳はオホオビ。笏を大帶に挿むもの、意で、朝廷の大官のこと。公卿其の他高位高官の人をいふ。）○莫ニ敢出一レ氣（息をころしてかさくなつてゐるといふ意。）○附託（たのみ込むこと。）○納レ貨展轉（展轉は寝ころがること。賄賂を使つて、手蔓をつたひ、廻り廻つてたのみまはる意。）○干ニ恩澤一（干はモトムと訓じ、官位爵祿などに求める意。こゝは天子の惠みを受け、出世をしようと願ひ求めること。）○蠧（そこなふこと。蠧は木の心（シン）に生ずる蟲。木食ひ虫。又ムシバムとも讀む。木に生じて木を枯らし、國に生じて國を亡ぼす者は皆蠧といふ。）○讒慝（讒は讒言。慝は隱れた惡事。）○疎ニ忌宿將一（父亂以來仕へて戰功のある老將達をしりぞけきらふ。）○蹂踐（ふみにじる。）○咨怨（なげきうらむ。）

魏博將戍ニ瓦橋一。代歸、復遣留ニ屯貝州一。遂作亂、奉ニ趙在禮一、入據ニ鄴都一。唐遣ニ將

擁二嗣源一入レ城

李嗣源討レ之。至二城下一、軍士大譟曰、將士從二主上一十年、百戰以得二天下一。今貝州戍卒思レ歸。主上不レ赦。從馬直數卒喧競、遽欲三盡誅二其族一。我輩初無二叛心一。但畏レ死。今欲下與二城中一合上レ勢。拔レ白及擁二嗣源一入レ城。城中不レ受二外兵一、逆擊レ之。皆潰。嗣源詭辭得レ出。

訓訳 魏博の將、瓦橋を戍る。代りて歸るや、復た留りて貝州に屯せしむ。遂に亂を作し、趙在禮を奉じて、入りて鄴都に據る。唐、將李嗣源をして之を討せしむ。城下に至れば、軍士大いに譟いで曰く、「將士、主上に從ふこと十年、百戰して以て天下を得たり。今貝州の戍卒歸らんことを思ふ。主上赦さず。從馬直の數卒喧競すれば、遽に盡く其の族を誅せんと欲す。我が輩初より叛心無し。但だ死を畏るゝのみ。今城中と勢を合せんと欲す」と。白刃を拔き、嗣源を擁して城に入る。城中、外兵を受けずして、之を逆へ擊つ。皆潰ゆ。嗣源詭辯して出づるを得たり。

通釋 魏博の（指揮使、楊仁晸といふ）大將が瓦橋關の守備を終へて、交代して歸つて來ると、又すぐ貝州に駐屯させられ、（魏州に還ることを許されなかつたので、部下の皇甫暉が主となつて）亂を

起し、趙在禮といふ者を總帥とし、鄴都を（襲ひ取つて）之にたてこもつた。唐は大將の李嗣源をやつて之を征伐させた。嗣源の軍が鄴の城下まで行き、（愈々明朝は城攻めと定めたところ）、部下の兵士等（從馬直の軍士の張破敗といふ者が主になり、衆を率ゐて）大いに騷ぎ出し、「吾々將卒は共に天子に從ふこと十年、數知れぬ幾度の戰を經て天下を取つたのであるのに、今貝州の守備兵が歸國したいと少し騷げば、主上には之をお赦しなされず、（此のやうに我々を討手にお遣はしになる。）又さきに從馬直の軍士（王溫等五人が軍使を殺して）騷いだといふので、俄に（何も知らぬ）我々までも悉く殺さうとせられた。吾々とても最初から謀叛心があつたわけではない。唯罪も無いのに殺されるのを恐れるばかりである。だから今吾々（從馬直の軍士）は城中の（魏博の）軍勢と一緒になつて自ら救ふ路を求めようと思ふ」といつて、刀を拔いて嗣源を取り籠めて城に入つたが、城中の兵は嗣源ばかりを入れて、外の兵は（敵と思つて）受け入れず、却て之を迎へ討つたので外の兵は逃げ散つて了つた。此時嗣源は（まだ謀叛する氣がなかつたので）、在禮に向ひ「軍を起すには兵力が要る。自分は君の爲に城を出て散亂した兵を集めて來よう」とだまして、城を出ることが出來た。

語釋　瓦橋（瓦橋關のこと。今の河北省雄縣の地。）　○貝州（河北省清河縣。前に出づ。）　○奉二趙在禮一（魏博軍の指揮使楊仁晸の部將皇甫暉が、部下の兵と亂を作さんと欲し、仁晸を劫して誘つたが、從は

なかつたので、之を殺した。又小校を劫したが、之も從はなかつたので、同じく殺した。すると效節指揮使の趙在禮は亂を聞き、垣を越えて逃げようとしたが、皇甫暉が追及して、仁陽及び小校の首を示したので、懼れて之に從つた。亂兵は在禮を奉じて總大將とした。）〔鄴都（河南臨漳縣の西南。）〕○至城下軍士大譟（嗣源の率ゐる從馬直の軍士の張破敗といふ者が主になり、兵士を煽動して騷ぎ立てたことをいふ。下文「從馬直數卒喧競」は、是より先、從馬直の軍士の王溫等五人が軍使を殺して亂をなしたことを云ふのであつて、自ら別事である。）○從馬直（近衞兵の名。莊宗諸軍の驍勇なる者を選んで新軍となし、分つて四指揮をおき、從馬直と號した。）○喧競（さわぎきそふ。前項言ふが如く、以前に從馬直の王溫等五人が軍使を殺して騷いだことを指す。）〔遂欲盡誅其族（族は血族の意でなく、部屬の意で、從馬直の軍をいふ。事は、從馬直の指揮使郭從謙といふ者、莊宗に寵せられたが、王溫等が亂を作した時、帝が從謙に戯れて、「お前は王溫等に謀反を敎へて、一體どうしようと云ふのだ」と言つた。從謙之を信じて恐れ、陰かに從馬直の將校連に向つて、「王溫が反を謀つた爲に、主上は從馬直全體を怨んで、やがて君達を生埋にしてやると言つて居られるぞ」と言つたことを指す。張破敗等が今その事を茲に引いて怨訴するのである。）〕○城中不受外兵（外兵とは嗣源の兵をいふ。城中の趙在禮等は、たゞ嗣源だけを入れて、その部下は一切入れなかつたといふ意。）〔詭辭（いつはりの口上、ごまかしの口實。）〕

將召兵攻亂者。安重誨曰、公爲元帥、不幸爲凶人所劫。不若、星行詣闕、見天子。庶可自明。嗣源乃南趨相州。諸者奏、嗣源已叛。嗣源上章自理。遏不得通。始疑懼。石敬瑭曰、安有上將與叛卒入城、而他日得保無恙者乎。大梁天下都會。願先往取之。始可自全。康義誠曰、主上無道。軍民怨望。公從衆則生。守節必死。嗣源乃以敬瑭爲前鋒、李從珂爲殿、引兵入大梁。

【訓讀】將に兵を召して亂者を攻めんとす。安重誨曰く、「公、元帥と爲りて、不幸にして凶人の劫かす所となる。若かず、星行して闕に詣り、天子に見えんには。庶はくは自ら明かにすべし」と。嗣源、乃ち南のかた相州に趨る。譖者奏す、「嗣源、已に叛す」と。嗣源、章を上りて自ら理す。遏められて通ずることを得ず。始めて疑懼す。石敬瑭曰く、「安んぞ上將、叛卒とともに城に入りて、佗日恙なきを保するを得るもの有らむや。大梁は天下の都會なり。願はくは先づ往きて之を取れ。始めて自ら全うすべし」と。康義誠曰く、「主上無道なり、軍民怨望す。公、衆に從はば則ち生きん、節を守らば必ず死せん」と。嗣源、乃ち敬瑭を以て前鋒と爲し、李從珂を殿と爲し、兵を引きて大梁に入る。

【通釋】嗣源はすぐ兵を召集して叛亂者を攻めようとした。すると部下の安重誨がいふやう、「君は大將となりたが不幸にして惡人の爲に强迫せられて（かういふことになりました）。此の上は速に宮中に參內し、天子に拜謁して（其の由を奏上されたならば）多分は罪なきことを明にすること出來ませう」と。そこで嗣源は都をさして南行し、相州まで馳せつけた所が、（李紹榮といふ）者が讒言して、「嗣源は已に謀叛しました」と上奏した。嗣源は（之を聞き）幾度か上書して自ら辯明したが、紹榮が其の書を握りつぶして了つたので、帝の手許にまで進達することが出來なかつた。そこで嗣源は始め

て罪せられようかと疑ひ懼れた。すると又部將の石敬瑭がいふやう、「大將が謀叛人と共に賊の城に入りながら、どうして後日禍なきことを受合へませうか。(之はいつそこちらから兵を起されるが上策でございます)。大梁は天下の大都會でありますから、何とぞ先に往つてお取り下さい。さうすれば始めてご自分の身を安全にすることが出來ませう」と。唐義誠といふ大將も亦いふやう、「主上は君たるの道なく、兵士も百姓も、怨んで居ります。それで君は衆望に從はれたならば生きることが出來、臣たるの操を守つて(飽くまで主上を君と仰がれたならば、屹度殺されませう)」と(交々自立を勸めた)。そこで嗣源は(いよいよ決心して)敬瑭を先鋒とし、李從珂を殿軍として、兵を率ゐて大梁に入つた。

語釋 凶人(悪者、謀叛人。) ○星行(速に行く。星を戴いて朝早く行く義。) ○自理(共に罪なきことを自ら辯明すること。) ○譖者(讒者。人をいつはり告げるもの。こゝは李紹榮を指す。) ○過不レ得レ通(過は邪魔立てすること。李紹榮に據りつぶされて、莊宗に通ずることが出來ぬ。) ○恙(蟲の名。穴居時代土中に生じ人を害すること甚しかつた。其の時代は人が道に逢へば互に君の方には恙はなきかと挨拶したものだと云ふ。) ○自全(我が身を全うする。こゝは禍の意。無事なること。) ○殿(しんがりとよむ。軍隊の後備。)

唐主如二關東一、聞下嗣源已據二大梁一、諸軍離叛上。神色沮喪、歎曰、吾不レ濟矣。卽命

斂二樂器一覆二帝屍一　百官勸進

旋レ師。從馬直郭從謙帥レ兵攻二帝於氾水一。唐主中二流矢一而殂。稱レ帝僅三歲而遇レ弑。改元者一。曰二同光一。伶人斂二樂器一、覆レ屍而焚レ之。嗣源聞レ之、痛哭。乃入二洛陽一。百官上レ牋勸進。不レ許。又三請二嗣源監一レ國。乃許レ之。繼岌自レ蜀歸、途聞二內難一、至二長安一自殺。監國立。是爲二明宗皇帝一。

【自讀】唐主、關東に如き、嗣源、已に大梁に據りて諸軍離叛すと聞き、神色沮喪し、歎じて曰く、「吾、濟らじ」と。卽ち命じて師を旋す。從馬直郭從謙、兵を帥ゐて帝を氾水に攻む。唐主、流矢に中りて殂す。帝と稱する、わづかに三歲にして弑に遇ふ。改元するもの一、同光と曰ふ。伶人、樂器を斂め、屍を覆うて之を焚く。嗣源、之を聞きて痛哭す。乃ち、洛陽に入る。百官、牋を上りて勸進すれども許さず。又三たび嗣源に請ひて國を監せしむ。乃ち之を許す。繼岌、蜀より歸り、途に內難を聞き、長安に至りて自殺す。監國立つ。是を明宗皇帝と爲す。

【通釋】この時唐主は（鄴都の叛軍を征伐に）關東に往つてゐたが、嗣源が已に大梁に楯籠り、官軍は離れ叛いたと聞き、心もくぢけ、顏色も失ひ、歎息して「最早や駄目だ。これでわしの仕事も失敗だ」

明宗皇帝

閩王稱帝

といひ、すぐ命じて軍を引き還した。所が從馬直の郭從謙が兵を率ゐて帝を氾水のほとりに攻めたので、唐王は流矢に中つて死去した。帝と稱してから僅に三年で弑され、改元すること一度、同光といつた。伶人は帝が生前大事にしてゐた樂器を帝の死骸の上にのせて燒いた。嗣源は之を聞いて流石に聲を限りに泣いた。それから洛陽に入ると百官が上書して帝位に上ることを勸めたが聞き入れなかつた。すると今度は監國とならんことを乞うて止まぬので遂に之を許した。皇子繼岌は蜀より歸る途中、都の騷動を聞き、長安に至つて自殺した。そこで監國の嗣源が立つた。之を明宗皇帝といふ。

【語釋】神色沮喪（神色は精神と顔色、沮喪はくぢけはゞんで元氣がなくなる。）○不レ濟（「成らじ」に同じく、成功するまいの意。）○斂二樂器一（樂器をとり集める。）○氾水（川の名。河南成皋縣にある。）○上牋（牋は札、書面のこと。上書に同じ。今我國では聖上に奉る書は表といひ、皇后・皇太子には牋といふ。）○監國（國政を監督するもの。元來は皇太子の職責であるが、こゝでは單に國政を取締る元老の意。）○內難（うちわの騷動。莊宗が流矢に中つて洛陽城中で死したことをいふ。）

明宗皇帝、本胡人邈佶烈也。爲二晉王克用ノ養子一、名二嗣源一。莊宗滅レ梁、嗣源功最高。爲二中書令蕃漢馬歩總管一、受レ命討レ鄴、爲二叛卒ノ所一レ推、自レ鄴趨レ汴入レ洛、遂卽レ位、更二名亶一。○契丹阿保機卒。子德光立。○閩王王審知卒、子延翰立。驕

吳王稱レ帝

孟知祥爲ニ蜀王一

淫殘暴。其ノ下弑レ之、而立ニ其ノ弟延鈞一。後稱レ帝。更ニ名ヲ璘一。○吳王楊溥稱レ帝。○南平王高季興卒。子從誨立。○楚王馬殷卒。子希聲立。後希聲卒。希範立。○吳越王錢鏐卒。子元瓘立。○夏州ノ李仁福卒。子彝超嗣。○西川ノ孟知祥併ニ東川一。以ニ知祥一爲ニ蜀王一。

【訓讀】明宗皇帝は、もと胡人遂佶烈なり。晉王克用の養子となり、嗣源と名づく。莊宗、梁を滅すや、嗣源、功、最も高し。中書令蕃漢馬步總管と爲り、命を受けて鄴を討ち、叛卒の推す所となり、鄴より汴に趨き、洛に入り、遂に位に卽き、名を亶と改む。○契丹の阿保機卒す。子德光立つ。○閩王王審知卒し、子延翰立つ。驕淫殘暴なり。其の下之を弑して、其の弟延鈞を立つ。後帝と稱し、名を璘と更む。○吳王楊溥、帝と稱す。○南平王高季興卒し、子從誨立つ。楚王馬殷卒し、子希聲立つ。後希聲卒し、希範立つ。○吳越王錢鏐卒し、子元瓘立つ。○夏州の李仁福卒し、子彝超嗣ぐ。○西川の孟知祥、東川を併す。知祥を以て蜀王と爲す。

【通釋】明宗皇帝はもと胡人で名は遂佶烈といつた。晉王克用の養子となつて嗣源と改名した。莊宗

が梁を滅したとき嗣源の功は第一であつた。それで中書令兼蕃漢馬歩總管となり、又命を受けて鄴の叛軍を討ちに行つたが、叛卒の爲に推し立てられ、鄴より汴に赴き、洛陽に入り、遂に位に卽いて、名を亶と改めた。（以下文意明瞭であるから、通釋を省略する）。

語釋 蕃漢馬歩總管（蕃人漢人の騎兵歩兵の總司令官の義。） ○驕淫殘暴（おごりみだらで下下にむごたらしくすること。）

○唐秦王從榮驕狠。自知時論不與、常懼不得爲嗣。唐主寢疾。遽率牙兵千人、至端門下、將入禁衞討之。從榮兵潰。走歸府。皇城使斬之。唐主悲駭疾劇。遂殂。唐主性不猜忌。與物無競。登極之年、已踰六十。每夕於宮中、焚香祝天曰、某胡人。因亂爲衆所推。願天早生聖人、爲生民主。在位八年。改元者二。曰天成・長興。內無聲色、外無遊畋。不任宦官、廢內藏庫、賞廉吏、治贓蠹。雖不知書、所行暗合於道。年穀屢豐、兵革罕用。校於五代、粗爲小康。子宋王立。是爲閔帝。

【白文】○唐の秦王從榮、驕狠なり。自ら時論の與せざることを知り、常に嗣と爲るを得ざらんことを懼る。唐主疾に寢ぬ。遽に牙兵千人を率ゐて、端門の下に至り、將に入らんとす。禁衞之を討す。從榮の兵潰ゆ。走りて府に歸る。皇城使之を斬る。唐主悲み駭きて疾劇し。遂に殂す。唐主、性、猜忌せず、物と競ふこと無し。登極の年、已に六十を踰ゆ。毎夕宮中に於て、香を焚き、天に祝して曰く、「某は胡人なり。亂に因りて衆の推す所と爲る。願はくは天早く聖人を生じて生民の主と爲せ」と。在位八年。改元する者二。天成・長興と曰ふ。內に聲色無く、外に遊畋無し。宦官に任ぜず。內藏庫を廢し、廉吏を賞し、贓蠹を治す。書を知らずと雖も、行ふ所暗に道に合ふ。年穀屢〻豐にして、兵革用ふること罕なり。五代に校ぶるに、粗ぼ小康と爲す。子宋王立つ。是を閔帝と爲す。

【通釋】(明宗の長男である)唐の秦王從榮は、心おごり道にはづれて惡行が多かつた。自分でも輿論が許さぬことを知り、常に後嗣となることの出來ないのを懼れてゐた。(それで謀叛心を起し)唐主が病氣にかゝると、俄に麾下の兵千人を率ゐて王城の正門に馳せつけ、將に攻め入らうとした。しかし宮城の守兵がよく防いで之を擊退したので、從榮の兵は崩れ、逃げて河南府に歸つたが、皇城使の安從益が之を斬り殺して了つた。唐主は之を聞き、悲しみと駭きとにそれからは病が急に重くなり、遂に

死去した。唐主の性質は人をそねみ忌むことなく、又人と爭ふこともなく、位に登つた時は年は已に六十を踰えてゐた。毎夕、宮中で香を焚き天に祈つていふやう、「私は（身分の賤しい）胡人でありますが中國の亂れの爲に大勢の人々に推し立てられて皇帝となりました。どうか早く聖人を生み出し、中國人の主として下さいませ」と。位に在ること八年。改元したことは二度で、天成・長興といつた。帝は内には女色の樂みなく、外には遊獵の慰めなく、宦官に事を任さず、私有の庫を廢し、廉直なる役人を賞して、賄賂をとる惡人を罪した。書物は讀まなかつたが、行ふ所は暗に仁義の道に合ひ、米作は度々豐年で、軍を用ふることは少く、兵亂絶え間ない五代の中でも此の時だけは先づ暫し平和であつた。次は子の宋王が立つた。之を閔帝といふ。

【語釋】驕狠（狠は犬のかみあふ聲、おごつて道にもとる。）○牙兵（牙は牙旗、大將の旗、旗下の兵のこと。）○端門（正門で南門のこと。）○猜忌（疑ひ深くて人をそねむこと。）○與レ物無レ競（物事に對して競ひ爭ふことが無い。）○祝レ天（天に祈る。）○登極（極は北極、衆星の向ふ所、天子の位に譬ふ。即ち即位。）○聲色（女色。）○遊畋（狩獵。）○内藏庫（天子私有の倉庫で、金銀寶物を蓄ふる所。）○贓蠹（贓は賄賂を取る、蠹は害をなす。即ち賄賂を貪る姦吏。）○兵革（兵は刀劍類、革は鎧、即ち武器。）○校（くらぶと訓む。）○小康（稍く平和。）

閔帝、名從厚、明宗次子也。即レ位有レ志爲レ治。然不レ知其要。寬柔少レ斷。○蜀孟

知祥稱帝。○唐潞王反於鳳翔、擧兵長驅至洛陽。閔帝出奔。在位、改元應順、數月而已。潞王立。

訓讀 閔帝、名は從厚。明宗の次子なり。位に卽き治を爲すに志有り。然れども其の要を知らず。寛柔にして斷少し。○蜀の孟知祥、帝と稱す。○唐の潞王鳳翔に反し、兵を擧げ、長驅して洛陽に至る。閔帝出奔す。位に在り、應順と改元して數月のみ。潞王立つ。

通釋 閔帝の名は從厚といひ、明宗の次男である。位に卽いて天下を平和にしたい志はあつたがどうしたらよいか要點を知らず、たゞ寛大柔和で決斷力に乏しかつた。○蜀の孟知祥が帝と稱した。○唐の潞王が鳳翔に於いて謀叛し、兵を率ゐて長途を進軍し、洛陽にはいつた。そこで閔帝は出奔した。位について應順と改元してから、僅か數ケ月たつたばかりである。そこで潞王が立つた。

潞王名從珂、本姓王氏、明宗之養子也。少從明宗征伐有功名。得衆心。用事者忌之。從珂鎭鳳翔。閔帝命移鎭河東。將佐以爲、離鎭必無全理。乃移

檄鄰道、起兵入淸帝側。從珂至陝。諸軍皆迎降。至洛。宰相馮道等、百官班迎。遂卽位、遣人鴆殺閔帝於衞州。○蜀主孟知祥殂。子昶立。○夏州李彝超卒。兄彝殷代之。

【語譯】潞王、名は從珂、本姓は王氏、明宗の養子なり。少にして明宗に從ひ、征伐して功名あり、衆心を得たり。事を用ゆる者、之を忌む。從珂、鳳翔に鎭す。閔帝命じて鎭を河東に移さしむ。將佐、以爲へらく、鎭を離るれば必ず全き理なしと。乃ち檄を鄰道に移し、兵を起して入りて帝側を淸めんとす。從珂、陝に至る。諸軍、皆迎へ降る。洛に至る。宰相馮道等、百官班迎す。遂に位に卽き、人を遣はして、閔帝を衞州に鴆殺す。○蜀主孟知祥殂す。子昶立つ。○夏州の李彝超卒す。兄彝殷之に代る。

【通釋】潞王は名を從珂といひ、本姓は王氏で明宗の養子である。幼時より明宗に從つて各地に轉戰し、功名を立てゝ人望を荷つてゐた。それで政界の巨頭（朱弘明）などは之を忌みきらつた。その後從珂は鳳翔の節度使をしてゐたが閔帝はこれを河東に轉任させようとした。すると從珂の部將達がこの鳳翔の鎭を離れては安全なる道理がないと主張するので、遂に檄文を近鄰の諸道に廻し、兵を起し

唐主自焚

て帝側の小人を除いて淸めようとした。さて從珂が陝州まで行くと官軍は皆降參して出迎へ、洛陽に至れば宰相の馮道以下の百官が行列を立てゝ出迎へた。そこで遂に位に卽き、人（衛州刺史の王弘贄の子巒）を遣はし、閔帝を衛州で毒殺させた。○蜀主の孟知祥は死去し、子の昶が立つた。○夏州の李彝超も死んで、兄の彝殷が之に代つた。

【語釋】用レ事者（朱弘昭、馮贇等政權を執つてゐる者を指す。）○無二全理一（身を全くする道理がない。安全な道理がない。）○淸二帝側一（帝の側に居る小人を殺し淸めること。軍を起す名目である。）○班迎（行列を正して出迎へる。）

○閩人殺二其王璘一、而立二其子繼鵬一。更二名昶一。○唐主初與二河東節度使石敬瑭一素不二相悅一。唐主立。敬瑭不レ得レ已入朝。尋歸レ鎭、陰爲二自全之計一。唐主移レ之。遂反、求二援於契丹一。契丹敗二唐兵一、立二敬瑭一爲二晉帝一、引レ兵向二洛陽一。唐主自焚死。在位不二二年一。改元者一、曰二清泰一。唐自二莊宗一至レ是四主、凡一十四年。

【通釋】閩人其の王璘を殺して、其の子繼鵬を立つ。名を昶と改む。○唐主初め河東の節度使石敬瑭

と素より相悅ばず。唐主立つ。敬唐已むことを得ずして入朝す。尋ぎて鎭に歸り、陰に自全の計を爲す。唐主之を移す。遂に反し、援を契丹に求む。契丹唐の兵を敗り、敬瑭を立てゝ晉帝と爲し、兵を引きて洛陽に向ふ。唐主自ら焚死す。在位三年ならず。改元する者一、淸泰と曰ふ。唐は、莊宗より是に至るまで四主、凡そ一十四年なり。

通解 閩人は其の王の璘を殺して、子の繼鵬をたてた。鵬は名を昶と改めた。〇唐主は初め河東の節度使石敬瑭と素から不仲であつた。それで瑭主が立つと敬瑭は已むを得ず入朝したが、何程もなく鎭に歸り、內々自分の身を安全にする計をめぐらしてゐた。そこへ唐主は彼を天平節度使に移したので、遂に謀叛し、援を契丹に求めた。契丹は唐兵を破り、敬瑭を立てゝ晉帝とし、兵を率ゐて洛陽に向つた。因つて唐主は(防ぐことの出來ぬのをさとり)自ら燒死した。在位はまだ三年にも足らぬ。改元は一度で、淸泰といつた。唐は莊宗より是に至るまで四主、合せて十四年で亡んだ。

語釋 自全之計(自分の身を全うするはかりごと。)

高祖皇帝

敬瑭骨立

晉

晉高祖皇帝、姓石氏、名敬瑭、沙陀人、唐明宗之壻也。初與從珂皆勇力善鬭。事明宗皆有功。內相忌。從珂稱帝。敬瑭自河東來朝。將佐皆勸留之。時久病骨立。唐主不以爲虞。遂得歸鎭。公主在洛陽。辭歸。唐主醉曰、何不且留、遽歸。欲與石郎反邪。敬瑭聞之益懼。尋命移鎭鄆州。敬瑭拒命。唐主發兵討之。

【通釋】晉の高祖皇帝、姓は石氏、名は敬瑭、沙陀の人、唐の明宗の壻なり。初め從珂と皆勇力ありて善く鬭ふ。明宗に事へて皆功有り。內に相忌む。從珂、帝と稱す。敬瑭河東より來朝す。將佐皆勸めて之を留めしむ。時に久しく病みて骨立す。唐主以て虞と爲さず。遂に鎭に歸ることを得たり。公主、洛陽に在り。辭して歸らんとす。唐主醉ひて曰く「何ぞ且く留らずして遽に歸るや。石郎と反せんと

欲するか」と。敬瑭之を聞きて益々懼る。尋いで命じて鄆州に移り鎮せしむ。敬瑭、命を拒む。唐主、兵を發して之を討つ。

[通譯] 晉の高祖皇帝は、姓は石氏、名は敬瑭と言ひ、元來沙陀の生れ、即ちトルコ人種で、後唐の明宗の女魏國公主の壻である。初め從珂（即ち後の唐主）と共に武勇に秀いで、戰爭の巧者で、共に明宗に仕へて功あり、（表面は何喰はぬ顏してゐるもの〻）、實は內々快からず思つてゐた。後從珂が（謀叛して閔帝を逐ひ）、帝號を稱した際、敬瑭は已むなく河東から洛陽に上つてお目見えをした。其の、時唐の將校（即ち從珂の部將達）は皆（敬瑭は謀叛を企てるにきまつてゐるから、之は還してはいけない）、都に留めて監視して置かねばならぬと勸めたが、當時敬瑭は長らく病氣をして、瘦せて可哀さうな程骨が立つてゐたので、唐主は（こんな奴に何が出來るか位の考へで）、一向氣にも止めなかつた。敬瑭は遂に鎮所に歸ることが出來た。妻の魏國公主も洛陽に來て居り、これも共に歸らうと思つて、暇乞ひに參內した。唐主は酒に醉つぱらつて、「なぜ暫くも逗留せずに、あはて〻歸るのか、夫の敬瑭と謀叛でもしようといふのか」と嫌味を言つた。敬瑭はこのことを聞いて（さては感づかれたかと）益々懼れを抱いた。間もなく唐主は敬瑭に命じて鎮所を渾州に變へさせようとしたが、敬瑭は命

を奉じなかつた。そこで唐主は兵を繰り出して敬瑭を討伐させた。

【語釋】沙陀(地名、前にも屢々見えた。西突厥の別部、今新疆省塔爾巴哈台西南の普克得里克の地。)　○骨立(骨が痩せてゴツゴツとホネだつてゐること、病後衰弱の甚しい様子。)　○虞(おそれ。うれへ。)　○石郎(石敬瑭を指す。郎とは年若い人を親み狎れていふ詞。)

桑維翰

契丹敗唐兵

割十六州

桑維翰爲敬瑭草表、稱臣於契丹、事以父禮。約、事捷割地。劉知遠以爲太過。厚賂金帛、足致其兵。不必許以土田。恐異日大爲中國之患。敬瑭不聽。表至。契丹主大喜、將騎五萬而來、與唐兵戰於晉陽、大敗之。契丹主立敬瑭爲帝、國號晉。割幽・薊・瀛・莫・涿・檀・順・新・嬀・儒・武・雲・應・寰・朔・蔚、十六州與之。契丹以晉主南下、又破唐兵至潞州。契丹北還。晉主引而南。唐將校皆飛狀以迎。唐主死。晉主入都洛。已而還汴。

【通釋】桑維翰、敬瑭の爲に表を草して、臣を契丹に稱し、事ふるに父の禮を以てす。約すらく「事捷たば地を割かん」と。劉知遠以爲らく「太だ過ぎたり。厚く金帛を賂はゞ、其の兵を致すに足らん。必ず

しも許すに土田を以てせざれ。恐らくは異日大いに中國の患を爲さんことを」と。敬瑭聽かず。表至る。契丹の主大いに喜び、騎五萬を將ゐて來り、唐の兵と晉陽に戰ひて大いに之を敗る。契丹の主敬瑭を立てゝ帝と爲し國を晉と號せしむ。幽・薊・瀛・莫・涿・檀・順・新・嬀・儒・武・雲・應・寰・朔・蔚の十六州を割いて之に與ふ。契丹晉主を以て南に下り、又唐の兵を破つて潞州に至る。契丹此に還る。晉主引いて南す。唐の將校皆狀を飛ばして以て迎ふ。唐主殂す。晉主入つて洛に都す。已にして汴に還る。

〔通釋〕こゝに敬瑭の臣に桑維翰といふ者があり、(雙方の兵力を考へて見るに、このまゝではとても勝味がないので)、(契丹に事へて其の兵を借りる)上表文を起草して敬瑭に示した。その條件としては、契丹を主と仰ぎ、父に事ふる禮を以て事へ、若し戰に勝つて唐主を亡ぼすことが出來た曉には、土地を割いて契丹に獻じようといふのであつた。この文案を見た劉知遠は、これは餘りに卑屈過ぎる。金銀綾羅の寶物を澤山贈りさへすれば、契丹の兵は借りることが出來る。土地をやらねばならぬと限つたことではない。(今一時は其の場凌ぎが出來ても)、將來中國の禍をなすのがこはいと建言したが、敬瑭は(目前の苦しみを救ふに急で)、これを取り上げなかつた。(さて桑維翰の草した)上表文は契丹に屆けられた。契丹の主は大喜びで、自ら五萬の兵を率ゐて來援し、唐の兵と晉陽で戰ひ、

大勝利を得た。そこで契丹の主は、敬瑭を位に卽けて皇帝と稱し、國を晉と號せしめた。晉は（約束通り）其の御禮として幽州・薊州等の十六州、卽ち盧龍一道及び雁門關以北契丹に近い土地を割いて獻上した。契丹の主は尙も晉主をひきつれて南に下り、唐の兵を潞州で破り、そこで別れて北に還つた。その後晉主が兵を率ゐて南に進むと、唐の將校は我れ遲れじと降伏狀を差し出して晉主を迎へた。唐主は（事の非なるを見て玄武樓に登つて）自ら焚死した。そこで晉主は洛陽に入つて暫く此處を都と定めたが、間もなく汴に移つた。

語釋 金帛（金と絹。） ○飛レ狀（狀は二ゝは降伏狀である。急いで降伏狀を送つて歸服の意を通ずること。） ○還レ汴（還は移の誤であらう。）

徐知誥

吳之終南唐之始

○吳徐知誥稱レ帝、奉ニ吳主溥一爲ニ讓皇一。初徐溫命ニ知誥一治ニ昇州一。致ニ繁富一、城市府舍甚盛。溫自徙居レ之。知誥入ニ廣陵一輔ニ吳政一。溫卒。知誥以ニ中書令一鎭レ昇。而留ニ其子一輔ニ吳政一。廣ニ金陵城一。吳加ニ知誥大元帥一、封ニ齊王一、備ニ殊禮一。至レ是遂受ニ吳禪一。知誥本徐州李氏子也。自謂ニ唐後一、國號レ唐。尋復ニ姓李一、更ニ名昪一。是爲ニ南唐一。

○契丹改國號大遼。○閩王曦弑其主昶而自立。○吳越王錢元瓘卒。子弘佐嗣。○南漢主劉龑又更名龔。尋殂。子玢立。○晉主在位不七歲殂。改元者一。曰天福。齊王立。是爲出帝。

【語釋】吳の徐知誥、帝と稱し、吳主溥を奉じて讓皇と爲す。初め徐溫、知誥に命じて昇州を治めしむ。繁富を致し、城市府舍甚だ盛なり。溫自ら徙つて之に居る。知誥、廣陵に入つて吳の政を輔く。溫、卒す。知誥、中書令を以て昇を鎭す。而して其の子を留めて吳の政を輔けしむ。金陵城を廣む。吳、知誥に大元帥を加へ、齊王に封じ、殊禮を備ふ。是に至つて遂に吳の禪を受く。知誥は本と徐州の李氏の子なり。自ら唐の後と謂ひて、國を唐と號す。尋いで姓を李に復し、名を昇と更む。之を南唐と爲す。○契丹、國を改めて大遼と號す。○閩の王曦、其の主の昶を弑して自立す。○吳越王の錢元瓘卒す。子の弘佐嗣ぐ。○南漢主劉龑、又名を龔と更む。尋いで殂す。子の玢立つ。○晉主位に在ること七歲ならずして殂す。元を改むる者一。天福と曰ふ。齊王立つ。是を出帝と爲す。

【通釋】吳の徐知誥が、皇帝と稱し、尙吳王の溥を崇めて讓皇の尊號を奉つた。（話は前に戻つ

て)、知誥の養父徐溫が知誥に命じて昇州を治めさせた。暫くすると昇州は次第に繁華になり、人民も富み、市街・官廳共に面目を改めて堂々たるものになつた。そこで父の溫は自ら昇州に移つて其處に住み、知誥は吳都の廣陵に入れて吳王の政治を輔けさせた。間もなく溫が死ぬと、知誥は中書令の在官のまゝ、昇州を治め、自分の子を都に留めて吳王の政事を輔佐させた。そして昇州の首都金陵城の大增築を行つた。吳王は知誥に大元帥の榮號を與へ、齊王に封じ、破格の禮遇をした。(こんな風に徐知誥の勢力がだん〳〵盛んになつて來たが)、遂に吳王から位を禪り受けたのである。さて此の知誥は、徐州の李氏の子であるが、自らは唐の憲宗の子孫であると言つて、國も唐と改め、つゞいて姓を李に復し、名も昇と改めた。是を南唐といふ。(以下文意明かであるから通釋を略する)。

語釋　昇州(地名、江蘇省江寧縣。金陵は其の都、今の南京。)　○城市府舍(市街と官廳。)　○殊禮(殊は他より目立つてちがふこと。特別の意。特別の待遇といふこと。劍をつけ履をはいたまゝ上殿し、朝廷に入つても小走りするに及ばないといふ類である。)　○[illegible](史書には[illegible]があつたが、北夷の僧が「それは名前のよくないからだ」と言つて、この字を造つて名とした。その義は[illegible]天といふので、天子の[illegible]を表はし、[illegible]に通じてゲンと讀ませたといふ。)

○出帝、名重貴、高祖兄子也。高祖臨レ終、命二幼子重睿一、拜二宰相馮道一、欲三其輔二立之一。景延廣、議以二國家多一レ難、宜レ立二長君一。遂立二重貴一。延廣用レ事。○南唐主李昇

殂。子璟立。○閩王之弟王延政據建州、稱殷帝。○南漢主劉玢之弟弘熙、弑玢而自立、更名晟。○閩朱文進弑其主王曦而自立。殷主延政遣兵討之。閩人殺文進、傳首於殷。殷改國號曰閩。唐人攻拔建州。延政出降。閩亡。唐攻福州、不克。後呉越遣兵取之。

【通釋】出帝、名は重貴、高祖の兄の子なり。高祖終に臨みて、幼子重睿に命じて宰相の馮道を拜せしめて、其の輔立せんことを欲す。景延廣、議するに國家難多し。宜しく長君を立つべきを以てす。遂に重貴を立つ。延廣、事を用ふ。○南唐主李昪殂す。子の璟立つ。○閩王の弟王延政、建州に據りて殷帝と稱す。○南漢主劉玢の弟弘熙、玢を弑して自立し、名を晟と更む。○閩の朱文進、其の主王曦を弑して自立す。殷主延政、兵を遣はして之を討たしむ。閩人、文進を殺して、首を殷に傳ふ。殷國號を改めて閩と曰ふ。唐人攻めて建州を拔く。延政出でゝ降る。閩亡ぶ。唐、福州を攻めて克たず。後、呉越、兵を遣はして之を取る。

景延廣大言

〔通釋〕出帝は名を重貴と言ひ、高祖の兄の子である。高祖は崩御に際して、幼子の重睿に宰相の馮道を拜させ、馮道が重睿を盛り立てんことを願つた。所がかくて（高祖が崩ずると）、景延廣といふ者が、國家多難の際であるから、年長の君を立てなければならぬと建議して、遂に貴重を位に即けた。延廣は出帝擁立の功を鼻にかけて專横を極めた。○南唐では國主李昪が死んで子の璟が位に即いた。○閩王の弟の王延政が建州にたてこもつて殷帝と稱した。○南漢主劉玢の弟の弘熙が玢を殺して獨立し、名を晟と改めた。○閩では朱文進といふ者が國主王曦を弑して自立した。（そこで王曦の弟の）殷主延政は兵を出して朱文進を討伐させたが、（まだその軍の到着しない前に）閩の者共が文進を殺して其の首を殷に送つた。殷は國號を改めて閩と稱した。所が唐の軍が建州に攻めに來て遂に之を陥れたので、閩王延政は城を出て降伏した。かくて閩は亡んだ。唐はまた閩の都の福州を攻めたが勝つことが出來なかつた。後に吳越が兵を出して福州を取つた。

〔字解〕幼子重睿（睿は一本に叡に作る。高祖には六人の子があつたが、上五人は死んで重睿一人殘つて居たのである。）　○建州（地名、今の福建省建甌縣。）　○福州（地名、閩の本據、今の福建省閩侯縣。）

○初晉高祖事契丹甚謹。至少主即位、景延廣主議、告哀不復稱臣。契丹

大怒。延廣又囚其回圖使。已而遣歸、大言曰、歸語而主。先帝爲北朝所立。故稱臣奉表。今上乃中國所立、爲鄰稱孫足矣。翁怒則來戰。孫有十萬橫磨劍相待。桑維翰屢請遜辭以謝契丹、每爲延廣所沮。

【口譯】初め晉の高祖、契丹に事へて甚だ謹めり。少主の位に即くに至つて、景延廣、議に主として、表を奉ぐるに復た臣と稱せず。契丹大いに怒る。延廣、又其の回圖使を囚ふ。已にして歸らしめ、大言して曰く「歸つて而が主に語げよ。先帝は北朝の立つる所たり。故に臣と稱し、表を上れり。今上は乃ち中國の立つる所なれば、鄰と爲し孫と稱すれば足らん。翁怒らば則ち來り戰へ。孫には十萬の磨劍を橫へて相待つもの有り」と。桑維翰、屢遜辭して以て契丹に謝せんと請へども、每に延廣の沮む所と爲る。

【[illegible]】初め晉の高祖は契丹に事へ甚だ謹愼してゐた。ところが今度出帝が位に即くと、(朝臣の會議の席上)景延廣が議長となつて、先帝の崩御を契丹に報ずる文に、最早自ら臣と稱せず、對等の禮を用ひることにした。契丹では其の文書を見て大いに怒つた。景延廣は又契丹から來てゐた貿易官を

捕へて禁錮したが、間もなく之を釋放して國に歸へし、其の際大言して曰ふには、「速に歸つて汝の主人に語れ、我が先帝は汝の國の助けを得て位に卽かれたのであるから、自ら臣と稱して上表文を奉られたであらうが、今上陛下は我國自身の力で御位に卽けたのであるから、汝の國に對しては、對等の交際で隣國と稱し、（唯先帝が子の禮をとられた名殘りで）自ら孫と言へば十分であらう。汝の國主が承知が出來なければ、來て軍をしろ、我國には磨ぎすました利劍を横へて待ち受けてゐる壯丁が十萬程ある。何時でもやつて來い」。から言つて追ひ返した。桑維翰は（これは大變なことになつたと心配して）、屢 謙遜の語を使つて契丹に詫びようと請うたが、いつも延廣に妨げられて果し得なかつた。

【語釋】少主（若い天子、卽ち出帝を指す。）　○主議（會議を主る。）　○哀レ告（先帝の崩御を知らせること。）　○回圖使（貿易使といふ意。契丹の役人が晉に來て貿易上のことを司つてゐた者をいふ。）　○而（汝に同じ。前にも屢く見えた。）　○北朝（契丹をさす。）　○奉レ表（表は上表。普通の手紙でなく臣下として君に捧げる上表文をいふ。）　○孫翁（先帝が契丹に對して父の禮を取つて子と稱したから、その後を承けて孫と稱し、契丹を翁と崇めたのである。）　○磨劍（とぎすました劍。）

於是契丹入寇、渡レ河。晉主自將、及遣李守貞等、分レ道撃レ之。契丹敗走。契丹

再至相州引還。晉主又自將追之。契丹旋兵南下。晉人擊之。契丹又敗走。晉主既再勝、意契丹不足畏。契丹主大擧入寇。晉將杜威降。契丹遣兵入汴執晉主以歸其國。在位五年、改元者一、曰開運。晉自高祖至是再世、一十二年而亡。

【口譯】是に於て契丹入寇して河を渡る。晉主自ら將とし、及び李守貞等を遣はして、道を分ちて之を撃たしむ。契丹、敗走す。契丹再び相州に至り、引きて還る。晉主又自ら將として之を追ふ。契丹兵を旋して南に下る。晉人之を撃つ。契丹又敗走す。晉主既に再び勝つて、意へらく、契丹畏るゝに足らずと。契丹の主大擧して入寇す。晉の將杜威降る。契丹、兵を遣はして汴に入り、晉主を執へて其の國に歸る。位に在ること五年、元を改むる者一、開運と曰ふ。晉は高祖より是に至るまで再世、一十二年にして亡ぶ。

【通譯】そこで契丹は中國に攻め入り、黄河を渡つて南下して來た。出帝は自ら兵を統率し、又李守貞といふ大將を遣はし、道を分けて南方から契丹を撃たしたので、契丹は敗れて引き還へした。其の後

契丹は又侵入し來り、相州まで來たが、今度も戰利あらずして引き還へした。出帝は又自ら出馬して還り行く敵軍を追擊した。契丹は旗を返へして逆襲したが、晉軍が之を擊破したので、又逃げ歸つた。出帝は既に再び戰ひに勝つて、契丹の軍とて大したこともないとたかをくゝつてゐた。すると契丹の主は晉の不意に大擧して侵入して來たので、晉の將杜威は狼狽して爲す所を知らず、忽ち降伏してしまつた。契丹は兵を遣はして汴に入り、晉主出帝を捕へて、國へつれ歸つた。出帝は在位五年、改元一度、開運といふ。晉は高祖から出帝まで僅かに二世、十二年で亡んだ。

打草穀

契丹主入大梁。胡騎四出剽掠。謂之打草穀。丁壯斃鋒刃、老弱委溝壑。自東西兩畿、及鄭・滑・曹・濮、數百里間、財帛殆盡。契丹主謂判三司劉昫曰、契丹兵應有優賜。遂括都城士民錢帛、遣使者數千人、括於諸州。皆迫以嚴誅。人不聊生。括至初無頒給。皆欲輦歸。

中外怨憤

中外怨憤、皆思逐之。所在盜起。契丹主曰、我不知中國難治如此。居汴三月而還。晉劉知遠、先一月、卽位於

晉陽

【本文】契丹の主、大梁に入る。胡騎四出して剽掠す。之を打草穀と謂ふ。丁壯は鋒刃に斃れ、老弱は溝壑に委す。東西兩畿より、鄭・滑・曹・濮に及ぶまで、數百里の間、財帛殆んど盡く。契丹の主、判三司の劉昫に謂ひて曰く、「契丹の兵、應に優賜有るべし」と。遂に都城の士民の錢帛を括し、使者數千人を遣はして、諸州に括す。皆迫るに嚴誅を以てす。人、生を聊んぜず。括し至る。初より頒給すること無し。皆聚斂して歸らんと欲す。中外怨憤し、皆之を逐はんことを思ふ。所在盜起る。契丹の主曰く「我、中國の治め難きこと此の如きを知らざりき」と。汴に居ること三月にして還る。晉の劉知遠、[illegible]だつこと一月、位に晉陽に即く。

【通釋】後契丹の主は晉の都大梁に入城した。すると契丹の兵士は四方に驅けめぐつて掠奪を開始した。これを(契丹の語では)打草穀といふ。(打は取る意。馬を養ふ爲に牧草や穀物を取ることにかこつけて掠奪分捕することをいふ)。此の無法の兵士等の爲め、晉の若者は斬り殺され、老人や子供は溝や谷に突き落されて顧みられず、大梁・洛陽の兩都の近傍は勿論、鄭・滑・曹・濮の諸州に至るまで、數

百里の地域は殆んど無一物に近いまで掠奪せられた。ところが契丹の主は晉の判三司の官の劉昫を呼んで謂ふには「これから我が兵士達にドツサリ慰勞の賜物を與へるであらう、早速用意に及べ」と嚴命した。（當時晉の宮中には何一つ殘つてゐなかつたので）、遂に大梁の城下の民家から金銀絹布を搜し求め、尚ほ使者數千人（數十人の誤であらう）を諸州に派遣して徴發し、（拒む者には）嚴重なる誅罰を加へるといつて脅迫した。人民達は生きた心地もせずたゞ戰き怖れた。此のやうにして金錢物貨を搜し取つて來たが、實は初めから兵士共に分配してやる氣持なく、皆車に積んで國へ持ち歸らうとした。これを見た晉の民は都人となく鄙人となく、皆怨み憤つて契丹を逐ひ拂はうと思ひ、遂に盜賊が蜂起した。（これに驚いて）契丹の主が曰ふには「わしは中國の民がこんなに治めにくい者だとは思はなかつた。厄介な奴等だ」とつぶやいて、汴に三月ほど居て北に還つた。これより一ケ月前に晉の劉知遠が獨立して晉陽で位に即いた。（即ち漢である）。

【語釋】四出（四方に出かけること。）○剽掠（剽は人の物をハギトルこと。掠はカスメル。掠奪といふに同じ。）○打草穀（草を取る意。牧草や穀物を取ること。契丹人は先づ園林を伐り取り然る後に掠劫を縦掠する。即ち馬の糧秣の徴發にかこつけて掠奪するのである。）○委ニ溝壑一（溝や谷に突き落し、蹴落されて顧みられぬ。委にステルと訓じ、放任する意。）○東西兩畿（東西の兩畿、即ち大梁と洛陽の附近をいふ。畿は畿内で王城より五百里の地帶である。）○判三司（晉の役人。鹽鐵・度支・戸部三司の政務を監督判決する官。）○優賜（優渥なる賞賜。手厚い下されもの。）○括（搜求の意。人の持つてゐるものをさがし取ること。檢括。）○使者數千

人（通鑑に「數十人」とある。之に從ふべきである。）　○不レ聊レ生（聊はヤスンズと訓む。やすんじたのむこと。）　○輦（車に積むこと。輦載。）　○所在（あちこちら。方々に。到るところ。）

漢

漢高祖皇帝、姓劉氏、初名知遠、沙陀人也。事晉祖敬瑭於兵閒、功最多。晉祖在河東。唐潞王移之鎭鄆。知遠曰、明公久將兵、得士卒心。今據形勝之地、士馬精强。若稱兵傳檄、帝業可成。奈何以一紙制書、自投虎口。遂拒命。唐遣將攻之。不克。晉祖擧兵、滅唐入洛陽。知遠時爲侍衛馬軍都指揮使。分漢兵入營、館契丹兵於寺。城中肅然。

通釋　漢の高祖皇帝、姓は劉氏、初めの名は知遠、沙陀の人なり。晉祖敬瑭に兵閒に事へて、功最も多し。晉祖、河東に在り。唐の潞王、之を移して鄆を鎭せしむ。知遠曰く、「明公久しく兵に將として、士卒の心を得たり。今、形勝の地に據り、士馬精强なり。若し兵を稱げて檄を傳へば、帝業成る

べし。奈何ぞ一紙の檄書を以て、自ら虎口に投ぜん」と。遂に命を拒む。唐、將を遣はして之を攻む。克たず。晉王兵を擧げて、唐を滅して洛陽に入る。知遠、時に侍衞馬軍都指揮使と爲り、漢の兵を分ちて營に入れ、契丹の兵を寺に館せしむ。城中肅然たり。

通釋　漢の高祖皇帝は、姓は劉氏で、名は初め知遠と言ひ、沙陀の人である。晉の高祖敬瑭の部將として、戰功第一の勇將であつた。敬瑭が（まだ唐に事へて）河東の節度使をしてゐる頃、唐の潞王は敬瑭の勢力を恐れて鄆州の節度使に轉任を命じた。此の時知遠が敬瑭に勸めて言ふには、「殿樣は久しく將軍として勤められ、將校兵卒等の人望を得て居られます。今此の要害の良い地に居を占め、しかも兵も馬も至つて强うございます。若し此處で兵を擧げて諸州に同志を求められましたならば、必ず天下は殿樣のお手にはいります。それにどうしてこんな一枚の書付けによつて御身自ら虎の口にとび込むやうな鄆州入りをなさつてよろしうございませう。（今が御決心のしどきでございます）」と勸めた。敬瑭もそれではといふので、遂に意を決して唐の命をしりぞけ（鄆州に轉任を肯じなかつた）唐からは大將を遣はして敬瑭を擊たせたが克たず、敬瑭は兵を率ゐて南下し、唐を滅して洛陽にはいつた。（此の時桑維翰の意見に從つて契丹に臣事して其の兵を借りたことは前述の通りである）。知遠は

此の時、侍衛馬軍都指揮使といふ役につき、漢の兵は皆本營に入れ、契丹の兵は天宮寺に入れ、(各々宿所を定めて混雜させなかつたので)、城中は極めて靜肅で何ら騷動がましいことはなかつた。

【語釋】明公(聰明なる閣下の意。) ○稱レ兵(兵を擧げる。) ○一枚制書(唐王からの鄆州への轉任の辭令。) ○投二虎口一(虎の口のやうに危險な地に行く。即ち鄆州に赴任すること。) ○寺(洛陽の天宮寺。)

後晉祖以二知遠一鎭二河東一。晉祖殂。遺命以二知遠一入輔レ政。晉人匿レ之。知遠由レ是怨二朝廷一。契丹連入寇。晉雖下以二知遠一爲中行營都統上、知遠不レ行。契丹滅レ晉入二大梁一。知遠稱二帝於晉陽一。契丹去。乃發二太原一入レ洛、遂入レ汴。國號レ漢。後更二名暠一。○契丹主耶律德光歸、至二殺胡林一而死。剖レ腹實レ鹽載去。人謂二之帝羓一。子兀欲立。○楚王馬希範卒。子希廣立。○吳越王錢弘佐卒。弘倧立。其下廢レ之、而立二弘俶一。○漢主殂。在位一年。改二元乾祐一。子周王立。是爲二隱帝一。

【訓讀】後、晉祖、知遠を以て河東を鎭せしむ。晉祖、殂す。遺命して知遠を以て入つて政を輔け

しむ。晉人之を匿す。知遠、是に由りて朝廷を怨む。契丹連りに入寇す。晉、知遠を以て行營都統と爲すと雖も、知遠行かず。契丹、晉を滅して大梁に入る。知遠、帝を晉陽に稱す。契丹去る。乃ち太原を發して洛に入り、遂に汴に入り、國を漢と號す。後、名を暠と更む。○契丹の主耶律德光歸り、殺胡林に至つて死す。腹を剖き鹽を實てゝ載せ去る。人之を帝羓と謂ふ。子の兀欲立つ。○楚王馬希範、卒す。子の希廣立つ。○吳越王錢弘佐、卒す。弘倧立つ。其の下之を廢して、弘俶を立つ。○漢主、殂す。在位一年。元を乾祐と改む。子の周王立つ。是を隱帝と爲す。

【通釋】後に晉祖敬瑭は知遠を河東の節度使に任じた。晉祖は崩御に際して、知遠に都に歸つて新帝の政治を輔くるやう遺言したが、側近の者共がこれを秘密にして知遠に知らせなかつた。知遠は此の事から朝廷を怨むやうになり、契丹が屢々侵入して來たとき、行營都統即ち總司令長官に任ぜられたけれども出陣しなかつた。遂に契丹は晉を滅して大梁に入城した。知遠は知らぬ顏して晉陽で皇帝と稱してゐたが契丹の軍が引き上げると太原を發して洛陽に入り、遂に汴に入城して國を漢と號し、自らの名も暠とあらためた。契丹の主耶律德光は汴から歸る途中病に罹つて殺胡林といふ所で死去した。そこで從者達は、其の腹を剖いて中に鹽を一杯つめ、車に載せて國に歸つた。中國ではこれを帝王の

乾物と言つて笑つた。次は子の兀欲、位に卽いた。（以下文意明かであるから略する。なほ語釋を見られたい）。

【語釋】帝耙（[illegible]のひものといふ意。天子）○弘倧・弘俶（ともに弘佐の弟である。）○其下廢レ之（其下は其臣。名は胡進思と云つた。）

隱帝、名承祐、年十八卽ㇾ位。○先ㇾ是漢祖以弟崇尹太原、爲留守河東節度使。崇與郭威有ㇾ隙。至ㇾ是威爲樞密使侍中執ㇾ政。崇爲自全之計、選募勇士、招納亡命、繕甲兵、實府庫、罷上供財賦。朝廷詔令多不稟承。○荊南高從誨卒。子寶融知軍府。○河中李守貞反。郭威督諸軍討克之。守貞自殺。○漢以郭威爲鄴都留守。○楚王馬希廣之兄希萼殺希廣而自立。

【通釋】隱帝、名は承祐、年十八にして位に卽く。○是より先き、漢祖、弟の崇を以て太原に尹とし、留守河東節度使と爲す。崇、郭威と隙あり。是に至つて、威、樞密使侍中と爲りて政を執る。崇、自全の計を爲し、勇士を選び募り、亡命を招き納れ、甲兵を繕め、府庫を實て、財賦を上供すること

を罷め、朝廷の詔令、多くは稟承せず。○荊南の高從誨、卒す。子の寶融、軍府に知たり。○河中の李守貞、反す。郭威、諸軍を督して、討ちて之に克つ。守貞、自殺す。○漢、郭威を以て鄴都の留守と爲す。○楚王馬希廣の兄希蕚、希廣を殺して自立す。

【通解】隱帝は名は承祐と言ひ、十八歳で位に卽いた。○(話は前に戻つて)先帝知遠が、(晉の命によつて河東の節度使をしてゐた頃)、弟の崇を太原の長官に任じ、(後兵を擧げて晉を撃つ時)、河東の節度使の留守を命じた。崇は此の頃から郭威といふ者と仲が惡かつたが、隱帝の卽位に及んで、威は樞密使兼侍中と爲り、政治の實權を握ることになつたので、崇は(已が身の危險を感じ、愈々身の防禦をはかり、勇士を募集し、浪人者を招き、甲冑刀劍を修繕し、兵糧を蓄へ、遂に朝廷への貢物を中止し、天子の命令をも多くは從はぬやうになつた。○荊南の節度使高從誨が死に、其の子の寶融が又節度使となつた。○河中の節度使の李守貞が謀叛したので、郭威が諸軍を監督して之を討ち、守貞は自殺した。○漢主は郭威を以て鄴都の留守に任じて(契丹の南下を防いだ)。○楚王馬希廣の兄の希蕚が希廣を殺して自立した。

【語釋】尹(都市の長官。) ○自全之計(自力で自分の身の安全をはかること。) ○亡命(亡はニゲル。命は命籍で戶籍のこと。本國の命籍をにげて他國へ出發すること。前に屢々見えた。)

○財賦（朝廷への貢物。）　○稟承（謹んで承はること。承知すること。）

○漢主自レ即レ位以來、同平章事楊邠總ニ機政ヲ、樞密使郭威主ニ征伐ヲ、侍衛指揮使史弘肇典ニ宿衛ヲ、三司使王章掌ニ財賦ヲ。邠ハ頗ル公忠ナリ。弘肇察ニ京師ヲ。道不レ拾ハレ遺ヲ。章捃ニ拾シ遺利ヲ、供饋不レ乏シカラ。國家相安ンズ。弘肇嘗テ謂ク、天下ハ須ク用フ長槍大劍ヲ。安ゾ用ヒント毛錐子ヲ。章曰ク、若シ無クバ毛錐、財賦何ニ由ッテカ取辦セント。章輕ンズ文人ヲ。嘗テ曰ク、此ノ輩握ッテ算ヲ不レ知ラ縱横ヲ。何ゾ益アラント於用ニ。漢主ノ左右ノ嬖倖、浸ク用ヒ事ヲ、親戚干ス政ヲ。邠等毎ニ裁抑ス之ヲ。漢主益壯ニシテ厭フ爲ニ大臣ノ所ト制スル。

【通釋】漢主、位に即きてより以來、同平章事楊邠、機政を總べ、樞密使郭威、征伐を主り、侍衛指揮使史弘肇、宿衛を典り、三司使王章、財賦を掌る。邠は頗る公忠なり。弘肇は京師を察す。道遺ちたるを拾はず。章は遺利を捃拾し、供饋乏しからず。國家相安んず。弘肇嘗て謂く、「天下は須

く長槍大劍を用ふべし。安んぞ毛錐子を用ひん」と。章曰く、「若し毛錐無くんば、財賦何に出つてか取辨せん」と。章、文人を輕んず。嘗て曰く、「此の輩、算を握つて縦横を知らず。何ぞ用に益あらん」と。漢主左右の嬖倖、寖く事を用ひ、親戚政を干す。邠等毎に之を裁抑す。漢主益々壯にして、大臣の制する所と爲るを厭ふ。

【通釋】漢主が位に卽いてよりこのかた、同平章事の楊邠が萬機の政を總裁し、樞密使の郭威が征伐を主り、侍衞指揮使の史弘肇が宮城の守護に任じ、三司使（鹽鐵・度支・戸部の三司を總理する役）の王章が財政を掌つた。楊邠は頗る公平實忠に政治をした。史弘肇は京師を取り締り、（監察が行き届いた爲に）道に物が落ちてゐても拾ふ者さへないやうになつた、王章は國家の爲に、棄てられてゐる利益を搜し拾ひ、財政不如意を來すやうなことはなかつた。（此のやうに四人の者が各々長ずる所に力を盡したので）、漢の天下は一時小康を得てゐた。或時弘肇が「今の天下は長槍大劍を振はなければ治まらぬ。ちび／＼と筆の先をなめて居たつて何になるか」と曰つて文官達を罵ると、章が駁撃して「筆を執る者が無ければ、財政のきりもりは誰がやるのだ」と曰つた。章は一體に文學者を輕蔑して、或時、「こやつ等には算木を持たしたつて、勘定一つ出來ぬ。そんなことで何のお役に立つか」と罵倒し

たことがあつた。(さて此の四人によつて一時太平であつたが)、漢主の左右に侍つてゐる寵臣達が追ひ〱に幅を利かし、親戚の者共も政治に嘴を入れて來た。初めは邠等が之を抑へつけてゐたが、漢主がだん〱成長して來ると、大臣等の爲に制限を受けるのを嫌ひ出した。

【語釋】 機政(國家の政治の樞。よろづの大きな政治をいふ。) ○宿衛(宮殿の宿直、即ち宮殿の警衛に當る役。) ○捃拾(クンシウ。二字共にヒロフと訓ず。ひろひあつめること。) ○供饋(供は供給、天子への衣食、饋は百官軍吏へのまかなひ。) ○毛錐子(筆のこと、さきが尖つて錐の形をしてゐるから斯く言ふ。子は添へていふ字。帽子・扇子などいふ類である。) ○取辨(區分し處置する。あれはいくら、これはいくらと仕分けすること。) ○握算不知縱橫(算は算木、數を敎へる道具。それを縱橫にならべて計算するのである。こゝは算木を手に持つてもそのタテヨコも知らぬといふので、全く勘定の出來ないこと。數理のアタマがない。) ○嬖倖(ヘイカウ。氣に入りの家臣。) ○干政(政治に干渉する。)

楊邠嘗議事於前曰、陛下但禁聲。有臣等在。漢主積不能平。左右因譖之。乾祐三年、殺邠・弘肇・章、遣密詔、欲殺郭威於鄴。將佐勸威入朝自訴。威引大軍至。漢主遣兵拒之。或降、或不戰而還。漢主爲亂兵所弑。威白太后、迎武寧節度贇。未至、聞契丹入寇、遣威將兵擊之。威至澶州。將士大譟、裂黃

旗以被威體、共扶抱之、呼萬歲震地。擁威南行。遂代漢。漢二世、四年而亡。

【訓讀】楊・邠嘗て事を前に議して曰く、「陛下但だ聲を禁ぜよ。臣等の在る有り」と。漢主積りて平なる能はず。左右因りて之を譖す。乾祐三年、邠・弘肇・章を殺し、密詔を遣はして、郭威を鄴に殺さんと欲す。將佐、威に勸めて入朝して自ら訴へしむ。威、大軍を引きて至る。漢主、兵を遣はして之を拒がしむ。或は降り、或は戰はずして還る。漢主、亂兵の弑する所と爲る。威、太后に白して、武寧の節度贇を迎ふ。未だ至らず。契丹入寇すと聞き、威を遣はし兵に將として之を撃たしむ。威、澶州に至る。將士大いに譟き、黄旗を裂きて以て威の體に被らしめ、共に之を扶け抱きて萬歲と呼び、地に震ふ。威を擁して南行す。遂に漢に代る。漢は二世、四年にして亡ぶ。

【通釋】楊邠が或時漢主の前で他の大臣達と事を相談した後、「陛下は唯だ默つて私達の言ふことを聞いてゐて下さい。私達の居る以上、決して御心配はありません」と申上げた。漢主は此のやうなことが積り積つて、心中不平滿々であつた。左右の寵臣共はこれにつけ込んで、あることないこと大臣の悪口を御耳に入れた。漢主は遂に乾祐三年に、邠・弘肇・章の三人を殺し、又秘密に詔書を下して、

鄴都留守の郭威を殺さうとし、（先づ都に殘つてゐた威の家族を殺戮した）。威の部下の將校達は、威に、都に上つて參內し、罪のないことを申開いたがよいと勸めた。そこで威は大軍を率ゐて都に上つて來た。漢主は兵を繰り出して途に之を拒がしたが、戰はぬうちに或は降參し、或は逃げ歸るなど、漢主の軍は散り〳〵ばら〳〵になつて了つた。漢主は此の騷動の最中に亂兵の爲に弑せられた。郭威は太后に申し上げて「武寧の節度使贇（高祖の弟崇の子）を迎へて後を嗣がさうとしたが、贇がまだ都に着かない前に、契丹が侵入して來たとの報に接し、漢は威を遣はし兵を率ゐて之を擊たしめた。威が澶州まで進軍すると、將士は大いに譟ぎ、黃色の旗を引き裂いて威の體にかぶせて（天子の服裝に仕立て）、之にとりすがつて萬歲と呼び、其の聲は天地をふるはすばかりであつた。兵士等は威を取り圍んで南に引き返した。かくて郭威は漢に代つて天下を取つた。漢は二代、僅かに四年で亡んだ。

【語釋】 禁聲（禁は噤に同じく、口をつぐむこと。默つて聞いてだけ居ればよいとの意。） ○節度贇（節度使の劉贇。崇の子である。高祖は之を愛して養うて我子のやうにしてゐた。） ○黃旗（天子の袍は黃色であるによつて黃旗を被らせたのである。） ○萬歲（天子卽位の際には之を祝して萬歲を呼ぶ。）

周

太祖皇帝、姓郭氏、名威、太原人也。唐莊宗有宮人柴氏。歸其家擇姻。一日窺于門。見有疾走而過者。柴氏大驚、問何人。告者曰、從馬軍使郭雀兒也。柴氏欲嫁之。父母不肯曰、汝帝左右人。當嫁節度使。奈何嫁此人。柴氏堅不嫁他人。竟歸威。漢祖鎭河東。威爲孔目官。契丹在汴。威勸漢祖擧兵、遂成帝業。漢隱帝時、威專主征伐。隱帝欲殺之、不克。威擁兵入汴。已而出禦契丹。軍士擁還汴。

太祖皇帝

柴氏擇姻

【訓】周の太祖皇帝、姓は郭氏、名は威、太原の人なり。唐の莊宗、宮人柴氏有り。其の家に歸りて姻を擇ぶ。一日門に窺ふ。疾走して過ぐる者有るを見る。柴氏大いに驚いて、何人ぞと問ふ。告ぐる者曰く、「從馬軍使郭雀兒なり」と。柴氏之に嫁せんと欲す。父母肯ぜずして曰く、「汝は帝の左右の

人なり。當に節度使に嫁すべし。奈何ぞ此の人に嫁せん」と。柴氏堅く他人に嫁せず。竟に威に歸ぐ。漢祖、河東を鎭す。威、孔目官と爲る。契丹、汴に在り。威、漢祖に勸めて兵を擧げ、遂に帝業を成さしむ。漢の隱帝の時、威專ら征伐を主る。隱帝之を殺さんと欲して、克はず。威、兵を擁して汴に入る。已にして出でて契丹を禦ぐ。軍士、擁して汴に還る。

通解 周の太祖皇帝は姓は郭氏、名は威と言ひ、太原生れの人である。後唐(五代の唐)の莊宗の宮女に柴氏といふ女があつたが、御殿を下つて家に歸り、適當な夫を見つけて結婚しようとしてゐた。或る日門の中から往來をのぞいてゐると、一人の男がその前を一散に駈け過ぎて行つた。(その容貌奇偉にして凡人ならぬ樣子であるので)、柴氏はびつくりして、側に居た者に「あれは誰か」と尋ねると、「從馬軍使の郭雀兒です」と答へた。(雀兒とは威の俗稱である)。柴氏は此の男のもとに嫁がうと望んだが、兩親は首を横に振つて、「お前は天子樣のお側に侍つた身分ある者であるから、お前の婿は節度使でなければならぬ。あんな男にどうしてやれるか」と言つて承知しない。しかし柴氏は心に堅く覺悟する所があつて、どうしても外の男の所へ行かうとは言はない。竟に(兩親も其の決心に冑を拔いだか)、柴氏は郭威に嫁入つた。さて漢の高祖劉知遠が(まだ晉の高祖に事へて)河東の節度使をして

ゐる頃、郭威は知遠に仕へて孔目官といふ役についた。契丹が中國に侵入して汴に來てゐるとき、郭威は知遠に勸めて晉陽で兵を擧げしめ、遂に晉に代つて天下をとらせた。(やがて高祖知遠が崩じ)、隱帝の代になり、威は專ら征伐を事の司つて、(他の三人の大臣と共に漢の代を太平たらしめたが、後に隱帝に憎まれて)、危く殺される所であつたが、(逸早く知らせてくれる者があつて助かり)、大兵を率ゐて汴に上つて來た。すると契丹入寇の報に接し、命を受けたので防禦に赴いたが、途中、兵士達が無理やりに威を取り圍んで(黄旗をかぶせ萬歲を叫んで)汴に引き返した。

〔語釋〕宮人(宮中に仕へる女官。)○擇婣(配遇者をえらぶ、嫁えらびをする。)○郭雀兒(郭威がまだ身分卑しい時分、頸(えりくび)に雀の形を入れ墨したので、人がアダナして郭雀兒と云つた)○歸レ威(歸はトツグと讀む、女が嫁入ること。)○孔目官(兩支府の草案及び書類を掌る官。一孔一目の細事と雖も其手を經由しなければならぬといふ意で、孔目官と稱したといふことである。)

時已迎贇於徐州。乃以漢太后令、廢贇爲湘陰公、威爲監國。尋卽位、自謂周虢叔之後、國號周。贇崇子也。崇初聞隱帝遇害、欲起兵南向。及聞迎立贇、則曰、吾兒爲帝、吾復何求。贇廢死。崇乃稱帝於晉陽。所有幷・汾・忻・代・嵐・

憲・隆・蔚・沁・遼・麟・石十二州之地。謂其臣曰、顧我是何天子、汝等是何節度使邪。是爲北漢。遣子承鈞伐周。不克。遣使乞師於契丹。契丹策命北漢主。更名旻。

【訓讀】時に已に贇を徐州に迎ふ。乃ち漢の太后の令を以て、贇を廢して湘陰公と爲し、威を監國と爲す。尋いで位に卽き、自ら周の虢叔の後なりと謂ひて、國を周と號す。贇は崇の子なり。崇初め隱帝害に遇ふと聞き、兵を起して南に向はんと欲せしが、贇を迎へ立つと聞くに及んで、則ち曰く、「我が兒帝と爲らば、吾復何をか求めん」と。贇廢せられて死す。崇乃ち帝を晉陽に稱す。有つ所は幷・汾・忻・代・嵐・憲・隆・蔚・沁・遼・麟・石の十二州の地なり。其の臣に謂ひて曰く、「顧ふに我は是れ何の天子にして、汝等は是れ何の節度使ぞや」と。是を北漢と爲す。子承鈞を遣はして周を伐たしむ。克たず。使を遣して師を契丹に乞ふ。契丹、北漢の主に策命す。名を旻と更む。

【通釋】此の時には早(次の天子)にと徐州に劉贇を迎へにやつたが、漢の皇太后の命によつて、贇を廢して湘陰公と爲し、郭威を監國に任じたが、威は尋で、位に卽いた。威は自ら周の虢叔の子孫であると

言つて國を周と號した。廢せられた贇は漢の高祖の弟劉崇の子である。崇は初め隱帝が弑せられたと聞いて、兵を起して南に進軍し、賊を掃討しようと思つたが、贇が迎へられて天子になるといふ知らせを聞いて、大いに喜び、「わしの子が天子になるのなら、何も文句はない」と言つて引き籠つてゐた。すると今贇が退けられて死んだので、そこで崇は晉陽で自立して皇帝と稱した。其の領地とする所は僅かに并・汾・忻・代・嵐・憲・沁・遼・石(以上山西)・蔚(河北)・麟(陝西)の十二州であつた。で、其の臣に向つて「(かうして帝號は稱して見たものゝ、考へて見れば領地は狹く、人は少く)、一體わしは何の天子で、お前達はまた何の節度使だらう。(漢の運命も衰へたものだ)」と言つて嘆いた。史家は之を北漢と言つて南漢と區別する。さて王業を廣めようといふので、子の承を遣はして周を伐たしめたが克てず、(遂に晉の故智にならつて)援軍を契丹に乞うた。契丹はこれを嘉納し、「汝を北漢主に命ず」といふ辭令を下して來た。崇は名を改めて旻とつけた。

語釋　周虢叔之後(周季(季歴即ち文王の父)の子孫に虢仲虢叔といふ兄弟があり、その子孫を虢公といひ、虢と郭と音が近い所から、後には郭公と云つた。故に郭の姓は周に本づくのである。今、郭威は自ら周の虢叔の子孫であるからと云つて、國號を周と稱した。)　○我是何天子云々(有名無實の微弱さを慨歎した言葉である。通鑑に「朕以高祖之業、一朝墜地、今日位號、不得已而稱之」とあるのを補うて見ると、意味一層分明である。)　○策命(策は制策・策書の意で、天子の御命令。御沙汰書。策命は天子から臣下に命令を下して官に任ずること。こゝは契丹が北漢を臣として扱ひ、之に策書を與へて、北漢の主に任じたのである。)　○是爲北漢(劉崇は單に漢と稱したのであるが、嶺南の劉氏も亦帝と稱したから、史家は分つて嶺南の漢を南漢とい

楚無寧歲

楚亡

楚將相代

ひ、河東の漢を北漢といふ。）

○契丹述軋、弑兀欲而自立。述律討殺述軋而代之。○楚自希廣・希蕚以來、相攻奪無寧歳。其下又廢希蕚、而立希崇。南唐遣邊鎬擊楚。希崇降。南唐遷馬氏之族于金陵。楚亡。○故楚將劉言自朗州攻潭。邊鎬走。言取湖南、請命于周。周以言鎭朗、王逵鎭潭。逵襲殺言於朗、以周行逢守朗、逵還潭。後又以行逢鎭潭、逵自居朗。○周主在位三年殂。改元者一、曰廣順。晉王立。是爲世宗皇帝。

【訓讀】契丹の述軋、兀欲を弑して自立す。述律討ちて述軋を殺して之に代る。○楚は希廣・希蕚より以來、相攻奪して寧歳無し。其の下又希蕚を廢して、希崇を立つ。南唐、邊鎬を遣はして楚を擊たしむ。希崇降る。南唐、馬氏の族を金陵に遷す。楚亡ぶ。○故の楚の將劉言、朗州より潭を攻む。邊鎬走る。言、湖南を取り、命を周に請ふ。周、言を以て朗を鎭せしめ、王逵に潭を鎭せしむ。逵襲ひて言を朗

に殺し、周行逢を以て朗を守らしめ、逵、潭に還る。後又行逢を以て潭を鎮せしめ、逵自ら朗に居る。(周主在位三年にして殂す。改元する者一、廣順と曰ふ。晉王立つ。是を世宗皇帝と爲す。

通釋　契丹の述軋が、其の父王兀欲を弑して自立したが、述軋の弟述律が(諸將に助けられて)述軋を殺し、之に代つて天子となつた。○楚は希萼が希廣を殺して自立して以來、内輪喧嘩が絶えず、たゞの一年も平和な年はなかつた。希萼の臣(徐威といふ者)が、希萼を押込めて、希萼の弟希崇を立てゝ君とした。此の騷動に乘じて、南唐は大將邊鎬を遣はして楚を撃たせた。希崇は降參したが、南唐は希崇以下馬氏の一族を金陵に呼び寄せ、楚を亡して了つた。○もとの楚の將劉言が朗州から兵を率ゐて潭州に攻め入ると、南唐から來てゐた邊鎬は恐れて逃げ歸つた。そこで言は洞庭湖南のもとの楚の領地を回復して、何分の指揮を周に乞うた。周は言に命じて朗州の節度使となし、言の部將王逵を潭州の節度使に任じた。すると王逵は朗州を襲撃して言を殺し、周行逢といふ友を朗州の節度使にして自分は潭に還つた。其の後王逵は又行逢を呼んで潭州を守らせ、自身朗州に移つて其處に住んだ。(つまり王逵と交代したのである。)○周の太祖は在位三年で崩じた、改元は一度、廣順といふ。次は晉王榮が位についた。之を世宗皇帝と稱する。

世宗皇帝、名榮、本姓柴氏、周祖妻兄柴守禮之子也。周祖無子。故養之。周初領節鎭、已而尹開封、封晉王。周主臨終、命晉王聽政、尋卽位。北漢主聞周主殂大喜、請兵於契丹。契丹遣將楊袞將萬騎、北漢主自將三萬人來。周主欲自將禦之。群臣皆諫。主曰、崇幸大喪、輕朕年少新立、此必自來。朕不可不往。以吾兵力之强、破崇、如山壓卵耳。馮道力爭。惟王溥勸行。

【語釋】 述軋(兀欲の子。) ○述律(述軋の弟。) ○共下(徐威といふ者。)

【通釋】 世宗皇帝、名は榮、本姓は柴氏、周祖の妻の兄柴守禮の子なり。周祖子無し。故に之を養ふ。周の初に節鎭を領す。已にして開封に尹たり。晉王に封ぜらる。周主終に臨みて、晉王に命じて政を聽かしむ。尋いで位に卽く。北漢主、周主の殂せしを聞きて、大いに喜び、兵を契丹に請ふ。契丹、將楊袞を遣はして萬騎に將たらしむ。北漢主、自ら三萬人に將として來る。周主自ら將として之を禦がんと欲す。群臣皆諫む。主曰く、「崇、大喪を幸とし、朕が年少くして新に立ちたるを輕んず。此れ必

ず自ら來らん。朕往かざるべからず。吾が兵力の强きを以て崇を破らんこと、山の卵を壓するが如き耳」と。馮道力め爭ふ。惟王溥のみ勸めて行かしむ。

【通釋】世宗皇帝は、名は榮といひ、もとの姓は柴氏で、世祖皇帝の妻の兄柴守禮の子である。世祖には子が無かつたので、榮を引き取つて養子としてゐた。榮は周の初めに鎭寧の節度使や澶州の刺史をつとめた事があつたが、間もなく開封府の長官となり、晉王の爵を賜られた。世祖は崩御に際し晉王に命じて萬機の政治を執らしめ、晉王はついで位に卽いた。北漢の主劉崇は、周主の死を聞いて大いに喜び、援兵を契丹に乞うて（漢室興復の壯擧をはからうとした）。契丹は大將楊袞に兵萬騎を率ゐて之を援けさせた。劉崇は自ら三萬の軍を統率し、（漢契丹二國の大軍が南下して來た）。周の世宗は（時に年三十四、血氣盛りのことゝて）、自身出陣して之を禦がうと思つた。群臣は皆危險を慮つて引き止たが、世宗が「劉崇は先帝の崩御をこれ幸と喜び、朕が若くして新に位に卽いたのを侮つてゐる。だからきつと自ら出馬してゐるであらう。（旣に敵の元首が采配を振つて來てゐる以上）朕一人どうして安閑として居れるか。（お前等心配するな）。朕が勇敢なる軍隊を以て劉崇の軍を打ち破るは、山の卵を押しつぶすやうなものだ。」と言つてきかない。（累朝の元老）馮道は言葉を盡して親征の不可を

高平之戰

趙匡胤

國家安危在此一舉

主張したが、たゞ王溥一人が帝に勸めて出陣させた。

語釋 領ニ節鎮一（節度使の支配を管領すること。節度使の職にあること。）○開封（地名、今河南省開封縣。）○尹（長官、奉行のやうな職。）○如ニ山壓一レ卵（山が卵を押しつぶすやうなものだといふのこと、その容易なることの喩。）○馮道（人名、晋以下晋漢周の四姓並びに契丹に事へ五代に通じ宰相として爵貴を極め、世宗の時年七十三で歿した。）

北漢主軍ニ于高平一。周前鋒擊レ之。北漢兵卻。主慮ニ其遁去一、趣ニ諸軍ヲ亟進一。後軍未レ至。衆心危懼。而主志氣益銳。合戰未レ幾、周右軍將樊愛能・何徽先遁。右軍潰。步軍千餘解レ甲降。主見ニ軍勢危一、自引ニ親兵一、犯ニ矢石一督レ戰。宿衛將趙匡胤曰、主危如レ此。吾屬何得レ不レ致レ死。又謂ニ禁兵將張永德一曰、賊氣驕。可レ破也。公引レ兵乘レ高、西出爲ニ左翼一。我爲ニ右翼一以擊レ之。國家安危、在ニ此一舉一。永德從レ之。

通釋 北漢主、高平に軍す。周の前鋒之を擊つ。北漢の兵卻く。主其の遁れ去らんことを慮り、諸軍を趣して亟に進ましむ。後軍未だ至らず。衆心危懼す。而るに主は志氣益〻銳し。合戰未だ幾

ならざるに、周の右軍の將樊愛能・何徽先づ遁る。右軍潰ゆ。歩軍千餘、甲を解きて降る。主、軍勢の危きを見て、自ら親兵を引きて、矢石を犯して督戰す。宿衞の將 趙匡胤曰く「主の危きこと此の如し、吾が屬何ぞ死を致さゞるを得ん」と。又禁兵の將 張永德に謂ひて曰く「賊、氣驕れり。破るべきなり。公は兵を引きて高きに乘じ、西に出でゝ左翼と爲れ。我は右翼と爲りて以て之を撃たん。國家の安危は、此の一擧に在り」と。永德之に從ふ。

通釋 北漢の主劉崇は高平に陣を張つた。周の先頭部隊が先づ之を攻撃すると、北漢の兵は少しく後退した。周の世宗は、今之を遁がしては切角此處まで出陣した甲斐がないと、全軍をせき立てゝ遮二無二進軍させた。餘りの急行軍で、後陣は遙に遲れて連絡を失ひ、兵士達は不安に襲はれて來た。しかし世宗は志少しも撓まず、益々勇氣凛々たるものがあつた。さて兩軍鋒を交へて戰ひ、未だ如何程の時もたゝないのに、周の右翼の大將樊愛能・何徽の二將が先づ退却した。(大將遁れて士卒の全き筈はなく)右翼軍は總崩れとなつて、歩兵一千餘人は武裝を解除して北漢に降伏した。世宗は周軍が危機に直面してゐるのを見、自ら護衞兵を率ゐ、飛び來る矢石を物ともせず第一線に立つて全軍を叱咤した。此の光景を見た宮城守護の大將 趙匡胤は「陛下は御自ら此のやうな危險な地に奮戰して

一當レ百

周主斬ニ敗將一

居られる。我等今日こそ戰死せずばなるまい」と曰ひ、又帝都警備將軍の張永德を顧みていふ、「敵は今少しく勝つて增長してゐる。今こそやつゝける時だ。君は兵を率ゐて地勢の高いのを利用して西にまはつて左翼となつてくれ、余は右翼となつて戰はう。國家の安危は此の一戰にあるぞ」と永德も之に贊成した。

語釋 高平（地名、今山西省高平縣。）○趣（ウナガスと訓む。催促すること。）○亟（スミヤカと訓む。速に同じ。）○犯ニ矢石一（とび來る矢丸をも物とも思はず。）○吾屬（吾がともがら。我等の意。）○一擧（一戰に同じ。）

各將二千人進戰。匡胤身先士卒、馳犯其鋒。士卒死戰。無不一當百。北漢兵大敗。楊袞不敢救。北漢主晝夜北走、僅得入晉陽。周主收樊愛能・何徽、及所部軍使以上七十餘人、責之曰、汝輩非不能戰。正欲以朕爲奇貨、賣與劉崇耳。悉斬之。自是驕將惰卒、始知所懼、不行姑息之政矣。張永德盛稱趙匡胤智勇。權殿前都虞候。

〔原文〕各〻二千人に將として進み戰ふ。匡胤身士卒に先だち、馳せて其の鋒を犯す。士卒死戰す。一百に當らざるは無し。北漢の兵大いに敗る。楊袞敢て救はず。北漢主、晝夜北に走り、僅に晉陽に入るを得たり。周主、樊愛能・何徽及び所部の軍使以上七十餘人を收へて、之を責めて曰く、「汝が輩戰ふこと能はざるに非ず。正に朕を以て奇貨と爲して、劉崇に賣與せんと欲せしのみ」と。悉く之を斬る。是より驕將惰卒、始めて懼るゝ所を知り、姑息の政を行はず。張永德盛に趙匡胤の智勇を稱す。權に殿前都虞候たり。

〔通釋〕（そこで趙匡胤・張永德の二人は）各〻二千人づゝを率ゐて猛烈に進み戰つた。趙匡胤が眞先に進んで、群がる北漢軍の中に飛び込むと、士卒もこれに勵まされて死にもの狂ひになつて奮鬪し、其の勢は一人が敵の百人に當らぬ者はない位であつた。北漢の兵は大いに敗れたが、契丹からの援軍楊袞はこれを救はうともせず忽ち逃げ歸つた。北漢主劉崇は晝となく夜となく、ひた走りに北に逃げ、やつと都の晉陽城に辿りつくことが出來た。周主世宗は（逸早く退却したところの）樊愛能・何徽の兩將及び軍使以上の將校七十餘人を目の前に引き出し、之を責めて曰ふには、「貴樣等は決して軍の出來ぬわけはなかつたのであるが、うまく朕をおびき出して劉崇に賣りつけ、一儲けしようと企

兵務レ精不レ務レ多

士卒精强

らんだに違ひない。（かやうの奴等は生かしては置けぬ）」と、皆斬罪に處した。これからは、しぶとい傲慢な將軍も、すきを見てはずるいことばかり考へる兵卒達も、皆恐れを抱いて（眞劍に働くやうになり、人事行政も其の場凌ぎのとりつくろひをせず、（老朽者はどしどし馘首して空氣を一新した。）張永德は口を極めて趙匡胤の智謀武勇の功をほめたゝへたので、世宗は匡胤を拔擢して權に殿前都虞候に任命した。

【語釋】 爲二奇貨一（めづらしいタカラとなす。責れば大いに儲かる得難い商品と見ること。史記の呂不韋傳に「奇貨居くべし」とある。後世は轉じて「好機逸すべからず」「機乘ずべし」などいふ意味に用ふるやうになつた。） ○姑息（姑はシバラク。息はイコフ。卽ち其の場凌ぎ、一時のがれの間に合はせといふこと。） ○權殿前都虞（權はおそらく擢の誤であらう。諸書、「擢爲二殿前都虞一」に作る。擢はヌキンデテと訓む。殿前都虞は、此の時に初めて出來た官で、先づ近衞將校に侍從武官を兼ねたやうな役。）

周主謂二侍臣一曰、兵務レ精不レ務レ多。農夫百、未レ能レ養二戰士一。奈何浚二民之膏血一、養二此無用之物一乎。乃命大簡二諸軍一。又詔二諸道一、募二天下壯士一、咸遣レ詣レ闕。命二匡胤一選二其尤者一、爲二殿前諸班一。其騎步諸軍、各命二將帥一選レ之。由レ是士卒精强、所レ向克捷。○周攻二北漢一、汾・遼・憲・嵐・石・沁・忻州、皆入二于周一。周主攻二晉陽一不レ克。引

軍還。○北漢主劉旻殂。子鈞立。○周伐蜀、取秦・階・成・鳳州。

【訓讀】周主侍臣に謂ひて曰く、「兵は精を務めて多を務めず。農夫百も、未だ戰士一を養ふこと能はず。奈何ぞ民の膏血を浚へて、此の無用の物を養はんや」と。乃ち命じて大いに諸軍を簡ばしむ。又諸道に詔して、天下の壯士を募り、咸く闕に詣らしむ。匡胤に命じて其の尤なる者を選ばしめて、殿前の諸班と爲す。其の騎歩諸軍は、各〻將帥に命じて之を選ばしむ。是より士卒精强にして、向ふ所克捷す。○周、北漢を攻む。汾・遼・憲・嵐・石・沁・忻州、皆周に入る。周主晉陽を攻む。克たず。軍を引きて還る。○北漢主劉旻殂す。子鈞立つ。○周、蜀を伐ちて、秦・階・成・鳳州を取る。

【通釋】世宗は或時侍從に語つて、「軍隊は精兵主義でゆかねばならぬ。いかに大軍でも質が惡かつたら何にもならぬ。大體軍隊といふものは金のかゝるもので、百姓百人の稅金でも一人の兵士を養ふ事が出來ぬ。どうして民の血と汗の結晶をしぼり取つて、此の役にも立たぬ大軍を飼つて置かうぞ」と言はれ、命を下して、諸軍の兵士を吟味して弱兵を除いて勇猛な兵士だけを留めさせられた。又諸國に詔を下して、天下の壯士を募集して皆宮城に召集し、趙匡胤に命じて其の中の最もすぐれた者だ

けをえり抜いて、宮城守護の諸隊を編成させた。其の他の歩兵や騎兵は各々歩兵隊長、騎兵隊長に一任して選抜させた。これから周の兵士は皆精鋭で、其の鋒先の向ふ所、捷たぬといふことはなかつた。○世宗は又北漢を攻めて汾・遼・憲・嵐・石・沁・忻の七州を取り、勝に乘じて一擧に晋陽を落して北漢を亡して了はうとしたが、今度は意の如く捗らず、遂に敗れて軍をかへした。○北漢主劉旻（崇の改名）は間も無く死んで、子の鈞があとをついだ。（鈞は前の承鈞で、契丹の命を受けて位に即き名を改めたのである）。○世宗は北漢で失敗すると、今度は鋒を轉じて西に向ひ、蜀を撃つて、秦・階・成・鳳の四州を取つた。

語釋 兵務レ精不レ務レ多（軍隊は數よりも質である。精兵主義でゆかねばならぬとの意。）○浚二民之膏血一（浚はサラフ。膏はアブラ。民があぶら汗を流し血を吐く思ひで作つた收穫物をしぼり取るといふこと。）○簡二諸軍一（簡は簡閲の意、えらびしらべること。諸軍の兵士を檢査し、弱兵を除いて强兵だけにすること。）○尤者（すぐれた者、尤物ともいふ。）○殿前諸班（近衛の諸隊。）○克捷（克は、かち難きに勝つ意。捷は戰に勝つ意。二字で戰爭に勝つこと。）

○周伐二南唐一。唐遣レ兵拒二於壽州一。而敗。周主自將、大敗二唐兵於正陽一。唐將皇甫暉・姚鳳保二淸流關一。主命二趙匡胤一、倍レ道襲レ之。擒二暉・鳳一、克二滁州一。周師取二揚・泰

光・舒・蘄州。唐兵拒周師、復取秦州、攻揚州。周主命匡胤屯六合。唐兵來攻。匡胤擊大破之。將士有不致力者、匡胤陽爲督戰、以劍斫其皮笠。明日遍閱其笠、有劍跡者數十人。皆斬之。由是部兵莫敢不盡死。

【[illegible]】周、南唐を伐つ。唐、兵を遣はして壽州に拒ぎて敗る。周主自ら將として、大いに唐の兵を正陽に敗る。唐の將皇甫暉・姚鳳、淸流關を保つ。主、趙匡胤に命じ、道を倍して之を襲はしむ。暉・鳳を擒にして、滁州に克つ。周の師、揚・泰・光・舒・蘄州を取る。唐の兵、周の師を拒ぎて、復た秦州を取り、揚州を攻む。周主、匡胤に命じて六合に屯せしむ。唐の兵來り攻む。奮ひ擊つて大に之を破る。將士力を致さざる者有れば、匡胤陽つて督戰を爲し、劍を以て其の皮笠を斫る。明日遍く其の笠を閱するに、劍跡有る者數十人あり。皆之を斬る。是に由りて部兵敢て死を盡さざるもの莫し。

【通釋】世宗は又南唐を攻略した。唐主は(大將劉彥貞を)遣して壽州で防戰したが及ばず、周の軍は之を擊ち破つて續々侵入して來た。世宗は遂に出陣して唐の兵と正陽で戰ひ、大勝利を得た。唐の將

軍たる皇甫暉・姚鳳の別軍は滁州の清流關を守つて周の軍に對抗したので、世宗は趙匡胤に命じ急行軍で清流關に赴いて皇甫暉の不意を襲撃させた。此の戰で唐軍は大敗し、暉・鳳の二將は捕虜になり、滁州は周の手にはいつた。つゞいて周の軍は、揚・泰・光・舒・蘄の五州を占領した。其の後唐の兵も少し勢を得て周の軍を禦ぎ、秦州を奪還し、進んで揚州に攻めて來た。これよりさき世宗は趙匡胤に命じて六合縣に兵を止めさして置いたが、勝に乘じた唐兵が大擧して押し寄せて來たので、趙匡胤は寡兵を率ゐて奮戰し却て之を擊破した。此の最中に、臆病風にさそはれてゐる兵士があると、趙匡胤はいかにも激勵するやうに見せかけて、劍で以て士卒の冠つてゐる皮の笠に傷をつけて置いた。さて戰が終つて其の翌日、全軍を進めて笠を檢査し、傷のついてゐる者數十人を選び出して死刑に處した。これからは趙匡胤の部下は皆戰爭の度に死力を盡して戰ふやうになつた。

語釋 壽州（地名、安徽省壽縣） ○正陽（地名、壽縣の西六十里にあり） ○清流關（關の名、滁州の西南にあり） ○滁州（地名、今安徽省滁縣） ○倍レ道（一日に二日分の道を行軍すること、「倍日幷行」といふに同じい。上卷二〇七頁參照） ○六合（地名、江蘇省六合縣） ○陽爲ニ督戰一以レ劍斫ニ其皮笠一（表面、劍を以て指揮し士卒を激勵するやうに見せかけて、卑怯な兵士の冠つてゐる皮の笠に傷をつけて置くこと、陽は佯に同じく、イツハルと訓ずるが表面に見せかけること。上卷六三頁參照。皮笠は獸皮で笠を作り兜の代りに冠つたのである） ○盡レ死（死力を盡す、決死の奮戰をする）

周連戰連捷

唐奉周正朔

周主還大梁、留兵圍壽州。唐兵復江北諸州。周守將皆棄去、幷兵攻壽州。周主復自將如壽。唐人以城降。周主還大梁。已而復自將攻濠・泗。皆降。進攻楚州、遣兵取揚泰。周主克楚州、還至揚州。唐主遣使、盡獻江北地。周主乃還。唐主更名景、去帝號、奉周正朔。

【通解】周主、大梁に還り、兵を留めて壽州を圍ましむ。唐の兵、江北の諸州を復す。周の守將皆棄て去り、兵を幷せて壽州を攻む。周主復た自ら將として壽に如く。唐人、城を以て降る。周主、大梁に還る。已にして復た自ら將として濠・泗を攻む。皆降る。進みて楚州を攻め、兵を遣して揚・泰を取らしむ。周主、楚州に克ち、還つて揚州に至る。唐主使を遣はして、盡く江北の地を獻ず。周主乃ち還る。唐主、名を景と更め、帝號を去り、周の正朔を奉ず。

【餘說】世宗は兵を留めて壽州を圍ませ、自らは大梁に還つた。すると唐の兵は又勢力を盛りかへして、揚子江以北の各州を回復し、其の勢中々侮り難いものがあつたので、各地を守つてゐた周の諸將

は、皆守城を棄てて、合併し、全軍一致して壽州を攻め落さうとした。しかし壽州は頑強に抵抗して容易に陥落しない。其の報知を得た世宗は、又自ら出馬して、遠征軍を指揮し、壽州攻撃に向つた。唐軍は遂に力盡きて降伏した。そこで世宗は一時大梁に還つたが、間も無くまた兵を率ゐて濠州・泗州に討つて出で、瞬く間に之を落して、進んで楚州を攻め、別に大將を遣して揚州泰州を取らせた。楚州が陥つたので、世宗は揚州にはいつた。南唐の主璟は、今はこれまでと、軍使を遣して和を請ひ、盡く揚子江以北の地を献上したので、世宗もこれを嘉納して大梁に凱旋した。其の後南唐主は名を景と改め、皇帝の稱號をやめて、周の暦を戴いて全く服從した。

語釋 濠・泗（地名。濠は安徽省鳳陽縣、泗は安徽省泗縣）○楚州（地名。江蘇省淮安府。）○更ニ名景ー（唐主の名の璟（エイ）が周の世宗の名の榮と音が通ずるので、それを遠慮して景（ケイ）と改めたのである。）○奉ニ正朔ー（正は正月即ち歳の首、朔は朔日即ち月の始、轉じて正朔は暦をいふ。帝王、國を建て、暦を天下に發布し、國民は之れを奉ずるより、奉正朔とは、臣從するをいふ。）

○朗州、王逵、爲ニ潘叔嗣ー所レ殺。將吏迎ニ潭州、周行逢ー入レ朗。行逢併ニ潭・朗ー有レ之。○南漢主劉晟殂。子鋹立。○周主自將伐ニ契丹ー、取ニ瀛・莫・易州ー。離レ京四十二日、而關南悉平。議レ趨ニ幽州ー。會ニ不豫ー而止。以ニ瓦橋關ー爲ニ雄州ー、益津關爲ニ霸州ー、

置戍而還。往還六十日。○趙匡胤、先是爲殿前都指揮使、從攻淮南、又從征契丹。至是爲殿前都點檢。

【訓讀】朗州の王逵、潘叔嗣の殺す所と爲る。將吏潭州の周行逢を迎へて朗に入らしむ。行逢、潭・朗を併せて之を有つ。○南漢主劉晟、殂す。子の鋹立つ。○周主自ら將として契丹を伐ち、瀛・莫・易州を取る。京を離るること四十二日にして、關南悉く平ぐ。幽州に趨かんと議す。不豫に會ひて止む。瓦橋關を以て雄州と爲し、益津關を霸州と爲し、戍を置きて還る。往還六十日なり。○趙匡胤、是より先き殿前都指揮使と爲り、從ひて淮南を攻め、又從ひて契丹を征す。是に至りて殿前都點檢と爲る。

【通釋】朗州の節度使王逵は、其の臣潘叔嗣に殺されたので、將校吏相謀つて潭州の周行逢を迎へて朗州の節度使としたが、行逢は（先づ潘叔嗣を斬つて王逵の讎を復し、）潭・朗二州を併せて所有した。○南漢の主劉晟が死んで、其の子鋹が後をついだ。○周の世宗は（南唐を征服すると、今度は北方攻略を思ひ立ち、）自ら軍を指揮して契丹を伐ち、瀛・莫・易の三州を攻め落した。都の大梁を出

發してから僅かに四十二日で瓦橋關以南の地は悉く周の命を奉ずるやうになつた。そこで進んで幽州を取る計畫を立てたが、不幸にして病んで果さず、瓦橋關を雄州、益津關を霸州と名を改め、守備兵を置いて凱旋した。(都を出てから)往復丁度六十日目である。○趙匡胤はこれよりさき、殿前都指揮使に昇進してゐたが、世宗の南征に從つて功を立て、又北征に從つて契丹を撃ち、常に華々しい功をあらはしたので、遂に殿前都點檢の官に昇つた。

語釋 滄・莫(地名、共に今河北省河間縣) ○易(地名、今河北省易縣。) ○關南(瓦橋關の南。) ○瓦橋關(關の名。三關の一。後唐初めて置く。今河北省雄縣の南。後周) ○幽州(地名、今河北省大興縣。) ○不豫(豫はよろこぶ、不豫は喜ばずで、天子の病をいふ。) ○益津關(關の名、後周三關の一、今京北霸縣の地。) ○殿前都指揮使、殿前都點檢(前の殿前都虞候と共に此の時初めて出來た官で、いづれも近衞武官侍從武官である。都點檢は最上で指揮使、都虞候之につぐ。)

○周主在位六年殂。改元者一、曰顯德。周主在藩韜晦。及即位、首破高平之寇。人始服其英武。號令嚴明。人莫敢犯。攻城對敵、矢石落左右、略不動容。應機決策、出人意表。又勤於政事、發姦摘伏、聽察如神。閒暇則召儒者

畏レ明　懷レ惠

讀レ史、商ニ榷大義一。性不レ好ニ絲竹珍玩之物一。常言、朕必不下因レ喜賞レ人、因レ怒刑上レ人。文武參用、各盡ニ其能一。人畏ニ其明一而懷ニ其惠一。故能破レ敵廣レ地、所レ向無レ前。登遐之日、遠近哀慕。子梁王立。是爲ニ恭帝一。

【訓讀】周主、在位六年にして殂す。改元する者一、顯德と曰ふ。周主、藩に在りて韜晦す。位に卽くに及びて、首として高平の寇を破る。人始めて其の英武に服す。號令嚴明なり。人敢て犯すこと莫し。城を攻め敵に對し、矢石左右に落つれども、略ぼ容を動かさず。機に應じ策を決して、人の意表に出づ。又政治に勤め、姦を發き伏を摘み、聰察、神の如し。閒暇あれば則ち儒者を召して史を讀ましめ、大義を商榷す。性、絲竹珍玩の物を好まず。常に言く、「朕は必ず喜びに因りて人を賞し、怒りに因りて人を刑せず」と。文武參へ用ひて、各〻其の能を盡さしむ。人其の明に畏れて、其の惠に懷く。故に能く敵を破り地を廣め、向ふ所前無し。登遐の日、遠近哀慕す。子の梁王立つ。是を恭帝と爲す。

【通釋】世宗は在位六年の後崩御した。其の間年號を改めること一度、顯德といふ。世宗はまだ節度

使として鎭所に居る頃は、ことさら才能をかくして凡人を裝つてゐたが、位に卽くと、先づ北漢・契丹の侵入軍を高平で撃破して、非凡な所をあらはしたので、人々は始めて世宗の英明勇武なのに敬服した。一度命令を出せば必ず實行を迫り、微塵も容赦しなかつたので、誰一人軍規を亂す者はなかつた。攻城野戰共に陣頭に立ち、矢や石が左右に降りそゝいでも自若として顏色一つ變へなかつた。臨機應變の才にすぐれ、往々人の想像もつかぬ奇計を出して部下を驚かした。部下の惡は如何に秘密にしても必ずあばき出して之を罪し、其の聰明にして觀察の鋭いことは神のやうであつた。暇な時には學者を呼んで史書を讀ませ、(各朝治亂興亡の)根本的原因を比較研究した。生れつき音樂や珍奇のなぐさみ物が嫌ひで生涯近づけなかつた。そして口癖のやうに、「朕は喜怒哀樂の私情にとらはれて功も無い者を賞したり、罪の無い者を罰したりはしない」と言つてゐた。文官武官共にかたよることなく公平に任用し、各〻能力のあるだけを發揮させた。大臣大將以下百官士卒悉く、帝の英明に畏服し、又其の仁德になついてゐた。故に敵を破り地を廣め、向ふ所敵なき大勝利を得ることが出來たのである。崩御の日には、都の者は勿論遠い田舍の百姓まで悲み慕つた。次の子の梁王が位に卽いた。是を恭帝といふ。

恭帝　竟ニ立　遣匡胤一　周亡

〔語釋〕藩（藩鎭、節度使の役目。節鎭。）　○韜晦（音タウクワイ。つつみくらます。才能をかくして愚な風をしてゐること。）　○首（ハジメニと訓むもよい。先づ第一に。）　○號令嚴明（號令したことは必ず實行を要求し、行はないものは容赦なく處分すること。）　○發レ姦摘レ伏（姦惡の行ひをあばき出す。）　○略（殆どといふに同じい。おほかた。一說に嘗（カツテ）に同じ意といふ。亦通ず。）　○出ニ意表ニ（人の思ひよらぬ事をする。意表は意外に同じ。）　○商ニ確大義一（商はハカルと訓じ、確は音カクで、クラブと訓ず。はかりくらべること。大義は根本の重大な道理。即ち治亂興亡の根本的原因を比較研究すること。）　○絲竹（絲はツルのある樂器、竹は竹の笛で、即ち琴や笛。音樂のこと。）　○珍玩（得難い珍しいなぐさみもの。）　○參用（參はマジフと訓む、兩方共に用ひて一方にかたよらぬこと。）　○登遐（遐はハルカと訓ず。はるかなる天にのぼること。天子の崩御をいふ。）

恭帝名宗訓、七歲卽位。○以趙匡胤爲歸德節度使。明年春、鎭・定言契丹入寇。遣匡胤將兵禦之。至陳橋驛。軍士擁還策立。周主在位半年、遂禪于宋。周自太祖至是三世、實二姓、十年而亡。

〔訓讀〕恭帝、名は宗訓、七歲にして位に卽く。○趙匡胤を以て歸德の節度使と爲す。明年の春、鎭・定、契丹入寇すと言ふ。匡胤を遣して兵に將として之を禦がしむ。陳橋驛に至る。軍士、擁し還りて策立す。周主在位半年にして、遂に宋に禪る。周は太祖より是に至るまで三世、實は二姓、十年にして亡ぶ。

〔通釋〕恭帝は名は宗訓と言ひ、（世宗の第四子で）年僅か七歲で位に卽いた。○其の年趙匡胤を歸德

の節度使に任じた。翌年の春、鎭・定二州の節度使から、契丹が攻めて來たとの急報があつたので、匡胤に命じて之を禦ぎにやつた。大軍既に出發し、夕方陳橋驛まで來ると、兵士等は俄に匡胤を推戴して無理やりにつれ戻り、其のまゝ天子に祭り上げて了つた。周主恭帝は在位僅かに半年で位を趙匡胤に讓つた。(匡胤は國を宋と號した)。周は太祖から恭帝の讓位まで代を傳ふること三代、しかも實は郭氏(太祖)・柴氏(世宗・恭帝)の二姓、十年にして亡んだのである。

語釋 歸德(地名。今河南省商邱縣。) ○陳橋驛(地名。汴の城外、今河南省開封縣の東北。) ○策立(冊立に同じ。もと勅命を以て皇后皇太子を定め立てることをいふのであるが、こゝは轉じて臣下が天子を擁立することを云ふ。卽ち天子の位に卽けること。)

十八史略新釋　卷六(上)終

黒海
東羅馬帝國
地中海
カスピ海（裏海）
ウラル河
ヴォルガ河
コーカサス山脈
チグリス河
ユウフラテス河
バグダード
ダマスクス
サラセン王國（大食國）
波斯灣
紅海
メヂナ
メッカ
亞剌比亞
教主國
波斯
アラビヤ海
日本
東晉時代法顯の行路
玄奘の行路
義淨の行路
唐の最大版圖
回紇の最大版圖
六都護府所在地
當時の運河

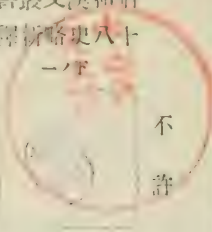
唐代亞細亞圖
1:40,000,000
0 100 200 里
唐の最大版圖
吐蕃(西藏)の最大版圖
回紇の最大版圖
サラセン國の最大版圖
六都護府所在地
東晉時代の法顯行路
玄奘の行路
義淨の行路
日本渡唐者の行路
玄宗の十節度使所在地
當時の運河
唐
吐蕃
(西藏)
天竺
印度
アラビヤ海
ベンガル灣
南支那海
東支那海
黄海
日本海
日本
新羅
渤海
契丹
回紇
突厥
外蒙古
內蒙古
新疆
吐谷渾
青海
南詔
扶南
真臘
林邑
驃
波斯
大食
サラセン王國
回教主國
亞剌比亞
東羅馬帝國
地中海
黑海
カスピ海
アラル海
獅子國
(セイロン島)

昭和五年十二月十四日印刷
昭和五年十二月十六日發行

第十六回配本

昭和漢文叢書
十八史略新釋
（下）一

不許複製

著作者　中山久四郎
著作者　鹽野新次郎
東京市神田區北神保町十一番地
發行者　辻本卯藏
東京市神田區今川小路二丁目一番地
印刷者　山縣精一

東京市神田區北神保町十一番地
發行所　弘道館
電話九段一三六八・一三六九番
振替口座東京八一一五番

印刷所　山縣製本印刷株式會社

◇次回配本◇

第十七回配本

日本外史新釋 利

◎韓非子上下。莊子下卷は目下組版中